

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—18—

福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査 2

2015

九州歴史資料館

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—18—

福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査 2

2015

九州歴史資料館



井戸3種
上 405号土坑
中 312号土坑
下 310号土坑



溝3種
上 312号溝
中 402号溝
下 505N号溝



地下式土坑 3 種
上 209号土坑
中 409号土坑
下 606号土坑

序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成19年度から25年度まで東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施してきました。

本書で報告する延永ヤヨミ園遺跡は県東部、行橋市街地にほど近い低丘陵及びその裾に展開する遺跡で、その存在は早くから知られていましたが、東九州自動車道建設に伴って初めて本格的な発掘調査が実施されました。併せて、一般国道201号線バイパスや県道直方行橋線バイパスの建設に伴う発掘調査も実施され、予想を遙かに超える多種多様な遺構・遺物が出土しました。東九州自動車道建設に伴う本遺跡の報告は、4冊目の本書をもって終了いたします。

本遺跡がもたらした知見は、この地域のみならず広く全国的な視点から検討・評価すべきものだと考えています。そのために、本書が活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関、行橋市・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成27年3月31日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市大字延永・吉国に所在する遺跡群の発掘調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第18集にあたる。
- 2 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室、行橋市・同教育委員会の多大な御協力を得た。
- 3 延永ヤヨミ園遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第15地点にあたる。
- 4 本書に掲載した写真は、遺構を飛野が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものをを使用した。

なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。
- 5 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、飛野・城門が作成した。
- 6 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小川・城門の指導の下で実施した。
- 7 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 8 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・田川」を改変したものである。

また、使用する座標は世界測地系による。
- 9 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は、九州歴史資料館へ移管された。
- 10 本書の執筆・編集は飛野が行った。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

	頁
I はじめに	1
1 発掘調査に至る経緯	1
2 調査の組織と関係者	4
II 位置と環境	7
III 調査の内容	13
1 掘立柱建物跡	13
2 土壙墓・木棺墓	19
3 土 坑	29
4 溝状遺構	103
5 埋甕	150
6 包含層・柱穴等出土の遺物	153
IV おわりに	202
V 補遺－竪穴住居跡出土遺物の追加報告	211

図版目次

巻頭図版1 井戸3種 (405号土坑・312号土坑・310号土坑)

巻頭図版2 溝3種 (312号溝・402号溝・505N号溝)

巻頭図版3 地下式土坑3種 (209号土坑・409号土坑・606号土坑)

図版1	上 遺跡全景 (南上空から)	下 I-1・4・5区 (上空から)
図版2	上 I-2区全景 (上空から)	下 I-3区全景 (上空から)
図版3	上 I-5区全景 (上空から)	下 I-6区全景 (上空から)
図版4	上 1号掘立柱建物跡検出状況 (北から)	中 1号掘立柱建物跡発掘後 (北から)
	下 1号掘立柱建物跡P629断割り状況 (南東から)	
図版5	上 I-2区表土掘削後 (北西から)	中 I-2区全景 (北西から)
	下 I-2区全景 (南東から)	
図版6	上 201号掘立柱建物跡 (北西から)	中 202号掘立柱建物跡 (南東から)
	下 203号掘立柱建物跡 (北から)	
図版7	上 I-4区掘立柱建物跡 (上空から)	中左 3号土坑 (北から)
	中右 4号土坑 (北西から)	下左 5号土坑 (北から)
	下右 6号土坑 (南から)	
図版8	上左 7号土坑 (東から)	上右 10号土坑 (北西から)
	中 8 (左)・9号土坑 (北から)	下 15・11・10号土坑 (北西から)
図版9	上左 11号土坑 (北西から)	上右 12号土坑 (北西から)
	中左 12号土坑 (北西から)	中右 14号土坑 (南から)
	下左 18号土坑 (西から)	下右 19号土坑 (北西から)
図版10	上 13号土坑 (南西から)	中左 22号土坑 (南から)
	中右 505号土坑 (南東から)	下 23号土坑 (西から)
図版11	上 I-1区溝群 (上空から)	中 1号土坑 (北西から)
	下 2号土坑 (北西から)	
図版12	上 16号土坑と3号竪穴住居跡 (西から)	中 21号土坑 (東から)
	下 24号土坑 (北から)	
図版13	上 25号土坑と14号竪穴住居跡 (西から)	中 203号土坑 (北西から)
	下 205 (左)・206号土坑 (北東から)	
図版14	上 205号土坑 (北西から)	中 209号土坑 (北西から)
	下 210号土坑 (北東から)	
図版15	上 208 (手前)・211号土坑 (南東から)	中 211号土坑床面 (西から)
	下 211号土坑断割り状況 (東から)	
図版16	上 301~303号土坑 (北西から)	中 301号土坑土層 (南東から)
	下 302号土坑 (南から)	
図版17	上 303号土坑 (南東から)	中 304号土坑 (南西から)
	下 306号土坑 (北西から)	
図版18	上 306号土坑床面1 (北西から)	中 306号土坑床面2 (北西から)
	下 307号土坑 (北西から)	

図版19	上 308号土坑（北西から）	中 309号土坑（北西から）
	下 310号土坑上面1（北西から）	
図版20	上 310号土坑上面2（北西から）	中 310号土坑下層1（北西から）
	下 310号土坑下層2（北西から）	
図版21	上 310号土坑井戸枠1（北西から）	中 310号土坑井戸枠2（北西から）
	下 312号土坑土層（北西から）	
図版22	上 312号土坑井戸枠（北西から）	中 312号土坑完掘後（北西から）
	下 330号土坑（北東から）	
図版23	上 332号土坑（南東から）	中 334号土坑（南東から）
	下 335号土坑（東から）	
図版24	上 401号土坑（北東から）	中 401号土坑（南西から）
	下 404号土坑土層（北西から）	
図版25	上 404号土坑（北東から）	中 405号土坑（北から）
	下 406号土坑（北西から）	
図版26	上 406号土坑（北西から）	中 409号土坑（南東から）
	下 410号土坑土層（南東から）	
図版27	上 409（左）・410号土坑（東から）	中 411号土坑（西から）
	下 412号土坑（東から）	
図版28	上 502・503（手前）号土坑（北から）	中 502（手前）・503号土坑（南から）
	下 506号土坑（南西から）	
図版29	上 508号土坑（東から）	中 509号土坑（北から）
	下 512号土坑（西から）	
図版30	上 601号土坑（北東から）	中 605号土坑検出時（北東から）
	下 605号土坑縦断土層（北東から）	
図版31	上 605号土坑完掘後（南東から）	中 606号土坑竪坑土層（南西から）
	下 606号土坑竪坑（南西から）	
図版32	上 606号土坑竪坑（北東から）	中 606号土坑完掘後（北東から）
	下 608（右）・609号土坑（北西から）	
図版33	上 2・3号溝（北東から）	中 3号溝礫検出状況（西から）
	下 4号溝土器出土状態1（北西から）	
図版34	上 4号溝土器出土状態2（南西から）	中 501号溝土器出土状態（東から）
	下 17号溝土層（北西から）	
図版35	上左 17号溝土器出土状態（北から）	上右 17号溝西端南土器出土状態（北東から）
	中 301号溝（北東から）	下 301号溝土層（西から）
図版36	上 306号溝南東辺土層（北西から）	中 306号溝南西隅土器出土状態（東から）
	下 306号溝南西辺土器出土状態（南東から）	
図版37	上 306号溝北東辺土器出土状態（北西から）	中 306号溝北東辺土器出土状態（東から）
	下 306号溝北西辺土器出土状態（北から）	
図版38	上 402号土坑以北の401号溝（南東から）	中 402号溝検出状況（北西から）
	下 402号溝全景（北西から）	

- 図版39 上 402号溝土層（南西から） 中 505N号溝（北東から）
下 505N号溝堰状遺構検出状態（北西から）
- 図版40 上 505N号溝土層（北東から） 中 505号溝北西肩土器出土状態（西から）
下 403号溝土器出土状態（南西から）
- 図版41 上 511号溝土器出土状態（南西から） 中 603号溝土層（南西から）
下 701号溝土層（北から）
- 図版42 上 埋甕検出状態（北から） 中 埋甕内部（北から）
下 埋甕掘形中の土師器1（北から）
- 図版43 上 埋甕掘形中の土師器2（西から） 中 土器溜の位置（北から）
下 土器溜（南東から）
- 図版44 上 I-1区包含層土器出土状態1(南から) 中 I-1区包含層土器出土状態2（東から）
下 I-1区包含層土器出土状態3(東から)
- 図版45 上 I-1区包含層土器出土状態4(北東から) 中 I-4区401号土坑西包含層（北から）
下 I-4区南東端東Tr.（北西から）
- 図版46 上 I-4区南東端西Tr.（北東から） 中 I-4区南東端土器出土状態（北東から）
下 I-4区南東端完掘後（南西から）
- 図版47 上 I-4区南西端全景（北西から） 中 I-4区南西端P1（南西から）
下 I-4区南西端2Tr.（北から）
- 図版48 上 粘土土坑 中 P1、P6 下 P824・P825、P863
- 図版49 出土遺物1（土壙墓、2・21・23号土坑）
- 図版50 出土遺物2（24・25・205・210・211号土坑）
- 図版51 出土遺物3（211号土坑）
- 図版52 出土遺物4（211・306・307・310号土坑）
- 図版53 出土遺物5（312・330・335・401号土坑、銅銭）
- 図版54 出土遺物6（402・404・405・406号土坑）
- 図版55 出土遺物7（406・409・410・506・601・606・608号土坑）
- 図版56 出土遺物8（608号土坑、土坑出土石製品、2・3号溝）
- 図版57 出土遺物9（3・4・10・17号溝）
- 図版58 出土遺物10（18号溝、溝出土石製品、301・302・304・305・306号溝）
- 図版59 出土遺物11（306号溝）
- 図版60 出土遺物12（401・402号溝、溝出土石製品2）
- 図版61 出土遺物13（溝出土石製品3、埋甕、1区包含層出土遺物）
- 図版62 出土遺物14（1区包含層出土遺物）
- 図版63 出土遺物15（1区包含層出土石製品）
- 図版64 出土遺物16（1区包含層出土石製品）
- 図版65 出土遺物17（4区包含層出土遺物）
- 図版66 出土遺物18（4区包含層出土遺物）
- 図版67 出土遺物19（4区包含層出土遺物）
- 図版68 出土遺物20（4区包含層出土遺物、柱穴出土遺物）
- 図版69 出土遺物21（柱穴出土遺物）
- 図版70 出土遺物22（柱穴出土遺物、溝・柱穴等出土金属製品、住居跡出土遺物）

挿図目次

	頁
第1図	延永ヤヨミ園遺跡周辺地形と調査区割図 (1/6,000) x
第2図	延永ヤヨミ園遺跡の位置 1
第3図	東九州自動車道福岡工事事務所管内路線図及び調査地点位置図 (1/100,000) 2
第4図	周辺遺跡分布地図 (1/50,000) 6
第5図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 13
第6図	1号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3) 14
第7図	201号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 14
第8図	201号掘立柱建物跡 (P2033) 出土遺物実測図 (1/2) 15
第9図	202号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 16
第10図	203号掘立柱建物跡・201号柵列実測図 (1/80) 17
第11図	401~403号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 18
第12図	弥生時代土壙墓配置図 (1/200) 19
第13図	土壙墓実測図1：3~7号土坑 (1/30) 20
第14図	土壙墓実測図2：8~12・14・15号土坑 (1/30) 22
第15図	土壙墓実測図3：13・18・19・30・22・23・505号土坑 (1/30) 24
第16図	土壙墓出土金属製品実測図 (1/2) 25
第17図	土壙墓出土土器実測図 (1/3) 27
第18図	土坑実測図1：1号土坑 (1/40) 28
第19図	土坑出土土器等実測図1：1・2号土坑 (1/3) 29
第20図	土坑実測図2：2・21号土坑 (1/30) 30
第21図	土坑実測図3：16・20・24・25号土坑 (1/30) 31
第22図	土坑出土土器等実測図2：16・17・20・21号土坑 (1/3) 32
第23図	土坑出土土器等実測図3：24・25・27号土坑 (1/3) 34
第24図	土坑実測図4：201・202・205・206号土坑 (1/30) 35
第25図	土坑実測図5：203号土坑 (1/30) 折込
第26図	土坑実測図6：204・207・209・210号土坑 (1/30) 39
第27図	204号土坑出土鉄滓実測図 (1/2) 40
第28図	土坑出土金属製品等実測図 (1/4、1/2) 42
第29図	土坑実測図7：208・211号土坑 (1/30) 43
第30図	土坑出土土器等実測図4：210・211号土坑 (1/3) 44
第31図	211号土坑出土金属製品実測図1：鉄製茶釜 (1/3) 46
第32図	211号土坑出土金属製品実測図2：双盤他 (1/3、1/2) 47
第33図	211号土坑出土木製品等実測図 (1/8) 48
第34図	土坑実測図8：301号土坑 (1/30) 50
第35図	土坑実測図9：302・303号土坑 (1/30) 51
第36図	土坑実測図10：304・306号土坑 (1/30) 52
第37図	土坑出土土器等実測図5：301・303・304・306~308号土坑 (1/3) 54

第38図	土坑出土石製品等実測図1 (1/3)	55
第39図	土坑出土石製品等実測図2 (1/1、1/3)	56
第40図	土坑実測図11：307・308号土坑 (1/30)	58
第41図	土坑出土鉄滓実測図2：308・310・332・509号土坑 (1/2)	59
第42図	土坑実測図12：309・311・313・314号土坑 (1/30)	60
第43図	土坑実測図13：310号土坑 (1/30)	61
第44図	310号土坑出土井戸杵実測図 (1/8)	62
第45図	310号土坑出土木製品実測図 (1/2)	63
第46図	土坑出土土器等実測図6：310号土坑 (1/3)	63
第47図	土坑出土石製品等実測図3 (1/1、1/2)	64
第48図	土坑実測図14：312号土坑 (1/30)	66
第49図	土坑出土土器等実測図7：312・313・315号土坑 (1/3)	67
第50図	土坑実測図15：315～318号土坑 (1/30)	68
第51図	土坑出土土器等実測図8：317・319・320号土坑 (1/3)	69
第52図	土坑実測図16：319～321号土坑 (1/30)	70
第53図	土坑実測図17：330号土坑 (1/30)	72
第54図	土坑出土土器等実測図9：330・332号土坑 (1/3)	73
第55図	土坑実測図18：332号土坑 (1/30)	74
第56図	出土銅銭拓影：334・335号土坑・P504 (1/1)	75
第57図	土坑出土土器等実測図10：334・335号土坑 (1/8)	75
第58図	土坑実測図19：333～337号土坑 (1/30)	76
第59図	土坑実測図20：401～403号土坑 (1/30)	77
第60図	土坑出土土器等実測図11：401号土坑1 (1/3)	78
第61図	土坑出土土器等実測図12：401号土坑2 (1/3)	79
第62図	土坑出土土器等実測図13：401号土坑3 (1/3)	80
第63図	土坑出土土器等実測図14：402～404号土坑 (1/3)	81
第64図	土坑実測図21：404号土坑 (1/60)	82
第65図	土坑実測図22：405・406・409・410号土坑 (1/30)	84
第66図	土坑出土土器等実測図15：405号土坑 (1/3)	85
第67図	土坑出土土器等実測図16：406号土坑 (1/3)	86
第68図	土坑出土土器等実測図17：409～411号土坑 (1/3)	88
第69図	土坑実測図23：411～413号土坑 (1/30)	89
第70図	411号土坑出土木製品等実測図 (1/3)	90
第71図	土坑実測図24：501・504・506・508号土坑 (1/30)	91
第72図	土坑実測図25：502・503号土坑 (1/40)	92
第73図	土坑出土土器等実測図18：504・506・508・509・511号土坑 (1/3)	93
第74図	509号土坑出土木製品実測図 (1/2)	94
第75図	土坑実測図26：509・512号土坑 (1/30)	95
第76図	土坑実測図27：601・608～610号土坑 (1/30)	96
第77図	土坑出土土器等実測図19：601・605・606・608・609号土坑 (1/3)	97

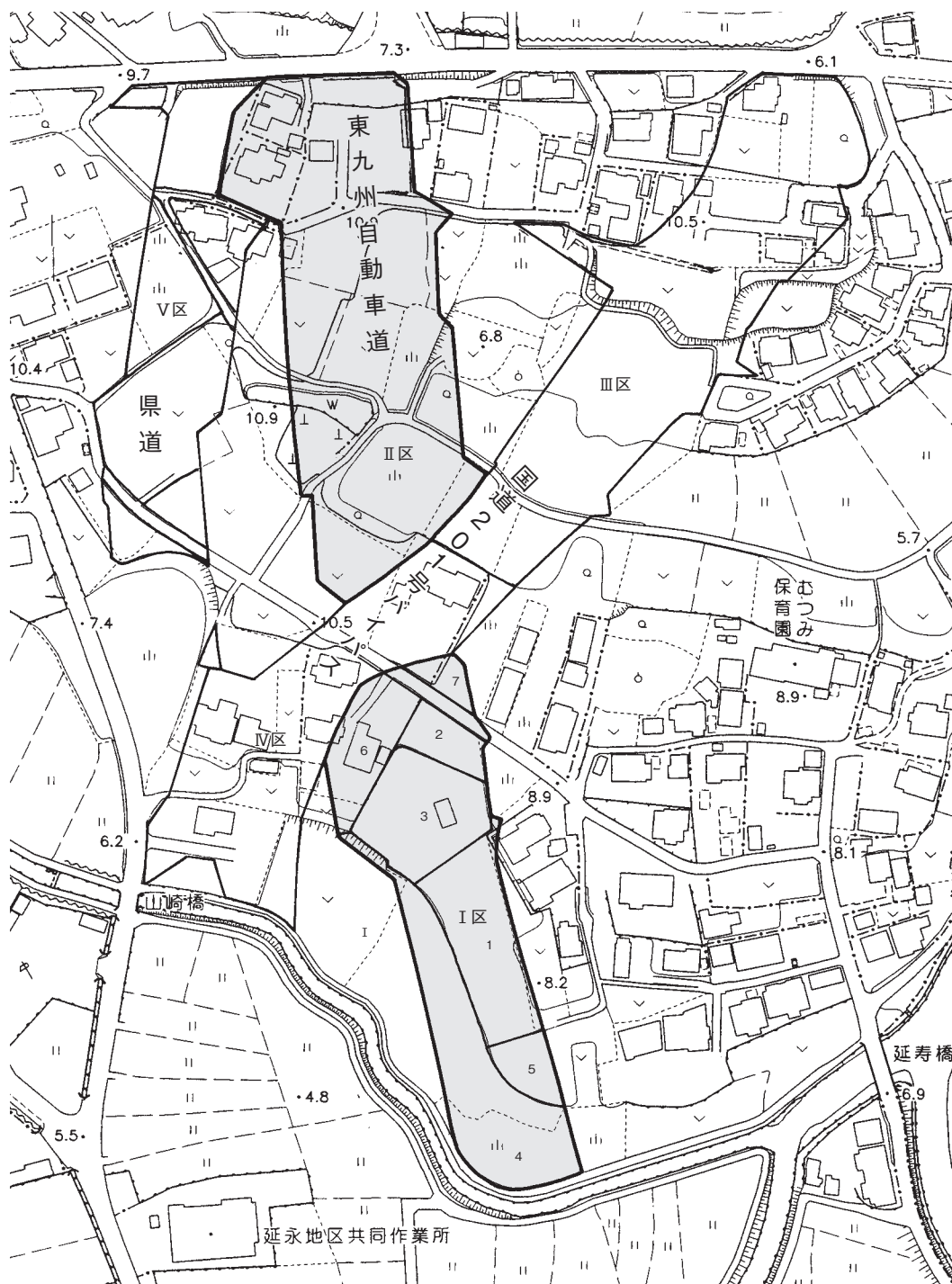
第78図	土坑実測図28：605号土坑（1/40）	98
第79図	土坑実測図29：606号土坑（1/30）	折込
第80図	土坑出土土器等実測図20：610号土坑（1/3）	102
第81図	溝・柱穴等出土金属製品等実測図（1/2）	103
第82図	1号溝実測図（1/400、1/100）	104
第83図	2～4・501～503号溝土層実測図（1/40）	105
第84図	溝出土鉄滓実測図1：2・3号溝（1/2）	106
第85図	溝出土土器等実測図1：1・2（502）501号溝（1/3）	107
第86図	501～503号溝南西隅付近実測図（1/100、1/30）	107
第87図	溝出土鉄滓実測図2：3・4・10・15号溝（1/2）	108
第88図	溝出土土器等実測図2：3号溝1（1/3）	109
第89図	溝出土石製品等実測図1：3号溝（1/2）	110
第90図	溝出土土器等実測図3：3号溝2（1/3）	111
第91図	溝出土石製品等実測図2：3・4・10・15・17・18号溝（1/3）	111
第92図	4号溝土器出土状態実測図（1/30）	112
第93図	溝出土土器等実測図4：4号溝（1/3）	113
第94図	溝出土土器等実測図5：10～12・15号溝（1/3）	114
第95図	15・301号溝実測図（1/100、1/30）	116
第96図	17号溝実測図（1/100、1/40、1/30）	117
第97図	溝出土土器等実測図6：17号溝及びその周辺・18号溝（1/3）	118
第98図	201・202号溝実測図（1/150、1/30）	119
第99図	18号溝実測図（1/100）	121
第100図	溝出土土器等実測図7：201号溝（1/3）	121
第101図	溝出土鉄滓実測図3：301・401号溝（1/2）	122
第102図	溝出土土器等実測図8：301号溝（1/3）	123
第103図	溝出土土器等実測図9：302～305号溝（1/3）	124
第104図	溝出土石製品等実測図3：I-2～4区（1/3）	125
第105図	306号溝実測図（1/100、1/40）	127
第106図	306号溝土器出土状態実測図1（1/30）	128
第107図	306号溝土器出土状態実測図2（1/30）	129
第108図	溝出土土器等実測図10：306号溝南西辺1（1/3）	130
第109図	溝出土土器等実測図11：306号溝南西辺2（1/3）	131
第110図	溝出土土器等実測図12：306号溝南西辺3（1/3）	132
第111図	溝出土土器等実測図13：306号溝北東辺・北西辺1（1/3）	133
第112図	溝出土土器等実測図14：306号溝北西辺2（1/3）	134
第113図	溝出土土器等実測図15：306号溝南東辺（1/3）	135
第114図	溝出土土器等実測図16：312・313号溝（1/3）	136
第115図	溝出土土器等実測図17：401号溝（1/3）	137
第116図	402・405・505号溝周辺遺構配置図（1/200）	138
第117図	401・402・505号溝土層実測図（1/40）	139

第118図	402号溝堰状遺構部分図 (1/40)	140
第119図	溝出土鉄滓実測図4：505・603号溝 (1/2)	141
第120図	溝出土土器等実測図18：402号溝 (1/3)	142
第121図	403号溝実測図 (1/100)	143
第122図	溝出土土器等実測図19：403号溝 (1/3)	144
第123図	402号溝周辺土器出土状態実測図 (1/30)	145
第124図	溝出土土器等実測図20：505S号溝 (1/4、1/3)	145
第125図	溝出土石製品等実測図4：I-4~6区 (1/3)	146
第126図	溝出土土器等実測図21：506~508・510号溝 (1/3)	147
第127図	溝出土土器等実測図22：603号溝 (1/3)	148
第128図	603・701号溝土層実測図 (1/40)	148
第129図	溝出土土器等実測図23：701号溝 (1/3)	149
第130図	溝出土石製品等実測図5：I-3・6・7区 (1/2)	150
第131図	埋甕実測図 (1/20)	150
第132図	埋甕及び供伴土器実測図 (1/4、1/3)	151
第133図	土器溜出土土器等実測図1 (1/3)	152
第134図	土器溜出土土器等実測図2 (1/3)	153
第135図	I-1区包含層の位置 (1/200)	155
第136図	I-1区包含層出土土器等実測図1：番号付1 (1/3)	156
第137図	I-1区包含層出土土器等実測図2：番号付2 (1/3)	157
第138図	I-1区包含層出土土器等実測図3：番号付3 (1/3)	158
第139図	I-1区包含層出土土器等実測図4：番号付4 (1/3)	159
第140図	I-1区包含層出土土器等実測図5：B3-e5区1 (1/3)	162
第141図	I-1区包含層出土土器等実測図6：B3-e5区2 (1/3、1/2)	163
第142図	I-1区包含層出土土器等実測図7：B4-e1区 (1/3、1/2)	164
第143図	I-1区包含層出土土器等実測図8：C3-a4区 (1/3)	165
第144図	I-1区包含層出土土器等実測図9：C3-a5区 (1/3)	166
第145図	I-1区包含層出土土器等実測図10：C4-a1区 (1/3)	167
第146図	I-1区包含層出土土器等実測図11：C4-b1区 (1/3)	168
第147図	I-1区包含層出土土器等実測図12：3号溝北側東西Tr・東西2Tr. (1/3)	170
第148図	I-1区包含層出土石製品等実測図1 (1/1、1/2)	171
第149図	I-1区包含層出土石製品等実測図2 (1/2、2/3)	172
第150図	I-1区包含層出土石製品等実測図3 (1/1、1/2、2/3)	173
第151図	I-2区包含層出土土器等実測図 (1/3)	174
第152図	I-3区包含層出土土器等実測図 (1/3)	175
第153図	I-4区410号土坑西包含層出土土器等実測図 (1/3)	176
第154図	I-4区北端出土土器等実測図 (1/3)	177
第155図	I-3・4区包含層出土石製品等実測図1 (1/1、2/3、1/2)	178
第156図	I-4・6区包含層出土石製品等実測図1 (1/2、2/3)	179
第157図	I-4区南東端付近遺物出土状態・土層実測図 (1/100、1/60、1/30)	180

第158図	I-4区南東端出土土器等実測図1：東Tr.1（上層番号付）（1/3）	181
第159図	I-4区南東端出土土器等実測図2：東Tr.2（下層番号付）（1/3）	182
第160図	I-4区南東端出土土器等実測図3：東Tr.3（下層番号付2）（1/3）	184
第161図	I-4区南東端出土土器等実測図4：東Tr.4（下層番号付3・土層注記なし）（1/3）	185
第162図	I-4区南東端出土土器等実測図5：東Tr.-西Tr.間包含層（1/3、1/2）	186
第163図	I-4区南東端出土土器等実測図6：中央Tr.・西Tr.（1/3）	188
第164図	I-4区南東端出土土器等実測図7：西Tr.2・西2Tr.（1/3）	189
第165図	I-4区南東端出土土器等実測図8：西Tr.-西2Tr.間包含層・南西Tr.（1/3）	190
第166図	I-4区南西端出土土器等実測図1：2Tr.・3Tr.・5Tr.（1/3）	191
第167図	I-4区南西端出土土器等実測図2：包含層（1/3、1/2）	192
第168図	I-6区南西包含層出土土器等実測図（1/3）	194
第169図	柱穴出土土器実測図1（1/3）	196
第170図	柱穴出土土器実測図2（1/3）	197
第171図	柱穴出土土器実測図3（1/3）	198
第172図	柱穴出土土器実測図4（1/3）	200
第173図	柱穴出土石製品等実測図（1/1、2/3、1/2）	201
第174図	延永ヤヨミ園遺跡I区遺構配置図（1/400）	折込
第175図	I・II・V区遺構変遷図（1/2,000）	202
第176図	竪穴住居跡出土土器等実測図（1/3）	212
第177図	竪穴住居跡出土石製品等実測図（1/1、1/2）	214

表目次

表1	延永ヤヨミ園遺跡の調査区及び調査年度	1
表2	東九州自動車道福岡工事事務所関係調査地点一覧	3

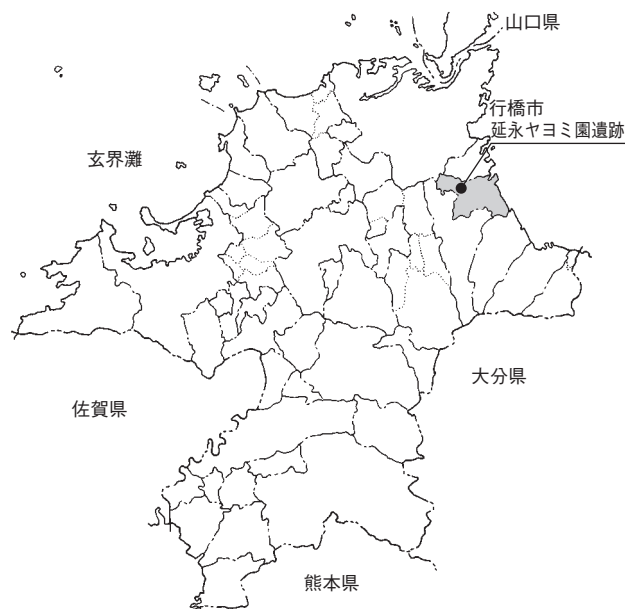


第1図 延永ヤヨミ園遺跡周辺地形と調査区割図 (1/6,000)

I はじめに

1 発掘調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市小倉JCTで九州縦貫自動車道から分岐し、九州東部の主要都市を貫いて鹿児島市に至る全長436kmの高速道路である。福岡県内では、日本道路公団（当時）によって建設され、平成4（1992）年に供用が開始された椎田道路（京都郡みやこ町徳永－築上郡築上町上ノ川内間10.3km）を取り込んで計画されている。平成18（2006）年年に供用された苅田北九州空港I.C.からみやこ町徳永の椎田道路に接続するまでの区間及び既存の築城・椎田両I.C.の改築工事については西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所が所管し、椎田道路から分岐する椎田南I.C.（築上郡築上町上ノ川内）から大分県宇佐市までの新設区間は同中津工事事務所が所管している。



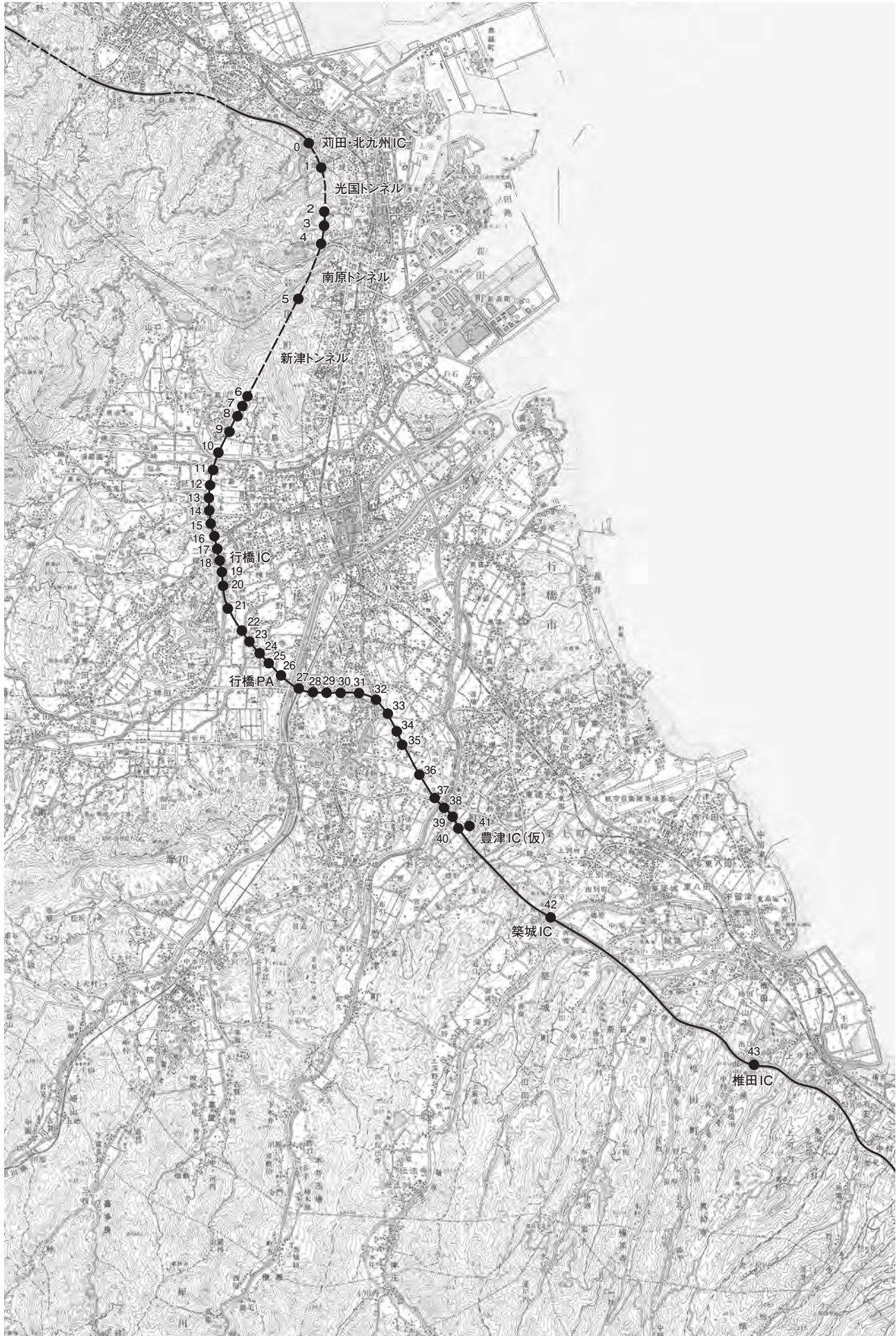
第2図 延永ヤヨミ園遺跡の位置

道路公団民営化後の平成19（2007）年から開始された東九州自動車道の本格的な発掘調査を経て、平成26（2014）年3月23日に苅田北九州空港I.C.～行橋I.C.間が、同年12月13日には行橋I.C.～みやこ豊津I.C.が供用開始となった。

既刊の報告書で記したように、この延永ヤヨミ園遺跡が位置する低丘陵では東九州自動車道建設工事のほかに、関連して国道201号行橋インター関連建設工事及び県道直方行橋線の道路改良工事がほぼ同時に施工された。発掘調査の主体はすべて福岡県教育委員会であり、表1に示したように多くの担当者が分担した。結果的には近接する5万㎡近い面積の発掘調査を行うこととなったが、その中で最初に着手した地区はI-1区で、平成19（2007）年12月のことであった。翌20年度以降は用地取得に合わせて順次調査を行い、最終的にI区の調査が終了したのは平成23年3月末で、足かけ5年に及ぶ長期の調査となった。なお、東九州自動車道建設に関わる延永ヤヨミ園遺跡のすべての発掘調査の終了は同23年8月のことであった。

事業名	調査担当者	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
東九州道	飛野	I-1区	I-1～5区	I-1・3・4区	I-3・6・7区			
	城門		II-1区	II-2区	I-4区 II-1～3区	II-4区		
国道	進村		III-C区	III-C区 IV-C区				
	下原			IV-A区	IV-A・B区			
	城門				III-C区		III-B区	
	大庭					IV-B区 III-A区	III-A・B区	
県道	吉村							III-B区
	小澤・岡田			V-1区				
	宮地				V-2～4区			
	飛野					V-5～7区	V-5～7区	

表1 延永ヤヨミ園遺跡の調査区及び調査年度



第3図 東九州自動車道福岡工事事務所管内路線図及び調査地点位置図 (1/100,000)

地点	工事 件名	遺跡名	所在地	対象面 積(m ²)	試掘 年度	調査面 積(m ²)	調査 年度	報告 年度	既刊報告 書番号	備考
0	荊田IC	雨窪遺跡群	京都郡荊田町大字雨窪		H12・13	4,000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡荊田町大字雨窪	1,700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡荊田町大字提	4,500	H21					遺跡なし
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡荊田町大字提・馬場	13,100	H16・20・21	1,200	H20	H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡荊田町大字馬場・南原	35,300	H18・19	3,900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都郡荊田町大字集	32,100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡荊田町大字下片島	30,600	H18・20・21					遺跡なし
7	福岡		京都郡荊田町大字下片島	10,700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡荊田町大字上片島	24,200	H20～22	5,000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡荊田町大字上片島	29,600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡荊田町大字上片島	21,500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡荊田町大字岡崎・上片島	18,200	H20	8,440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡荊田町大字上片島	7,500	H20	6,180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12,200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17,500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24,810	H22	24,810	H19～23	H23～26	2・9・11・ 18集(本冊)	
16	福岡		行橋市吉国	4,400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5,100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82,500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12,710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20,650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19,190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4,820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10,050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16,100	H20	6,360	H21・22	H25	12集	
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46,620	H20・21	31,550	H22～24	H25	12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14,710	H20・21	2,900	H22	H25	12集	
27	福岡		行橋市流末	840						遺跡なし
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18,590	H20	12,750	H21～23	H26	19集	
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7,000	H20・22					遺跡なし
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18,774	H19・22	16,574	H22～24	H25	13集	
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10,950	H21	3,300	H21	H25	13集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13,888	H21・22	13,888				H22 行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17,636	H20・21	4,560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15,013	H20	15,013	H21			H21 行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡 みやこ町国作	42,940	H20～22	3,420	H22・23	H24・25	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作 ・田中・有久	29,491	H20～22	29,491	H21～23	H25～26	14・20集	H21 八反田遺跡は みやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1,110	H21					遺跡なし
38	福岡	皆見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町皆見	1,132	H21	1,132	H22	H25	10集	
39	福岡	皆見中園遺跡 皆見大塚古墳	京都郡みやこ町皆見	8,218	H21・22	5,918	H21～23	H26	17集	H22 皆見中園遺跡は みやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町皆見・下原	45,510	H19～21	22,763	H20～22	H23・25	3・10集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町皆見	5,080	H21	3,580	H21・22	H25	10集	
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26,000	H21・22	26,000	H22・23	H26	20集	一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24,359	H21					遺跡なし

表2 東九州自動車道福岡工事事務所関係調査地点一覧

2 調査の組織と関係者

発掘調査に着手して以降、本報告書作成に至る間の西日本高速道路株式会社関係者は以下の通り。

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
西日本高速道路株式会社九州支社								
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀(～9.30)	本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔
同福岡工事事務所								
所長	竹國一也	竹國一也	福田美文	福田美文	中藺明広	源谷秋義	源谷秋義	源谷秋義
副所長(技術担当)	高尾英治	高尾英治	高尾英治(～9.30)	岩尾 泉(～9.30)	入江壮太	松繁浩二	松繁浩二	松繁浩二
			岩尾 泉	入江壮太	今井栄蔵(～9.30)	井 秀和	井 秀和	井 秀和
					井 秀和(10.1～)			
副所長(事務担当)	大内智博(～11.30)	塚本國弘(～9.30)	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博 (用地課長兼務)	甲斐島武司 (同)	甲斐島武司
	塚本國弘(12.1～)	原野安博(10.1～)						
総務係長	白川雄二	白川雄二	白川雄二(～9.30)	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	馬場孝人	桑原和之
			江口政秋(10.1～)					
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之(～5.10)	甲斐島武司	大野嘉彦
						原野安博		
工務課長	上川裕之(～6.30)	大久保良和	大久保良和(～9.30)	石塚 純	石塚 純(～9.30)	豎山哲二	田中康一郎	田中康一郎
	大久保良和(7.1～)		石塚 純(10.1～)		豎山哲二(10.1～)			
行橋北工事長	福島 剛	福島 剛(～1.31)	羽山広幸	羽山広幸(～9.30)	税田賢二	税田賢二(～9.30)	福島博文	福島博文
		羽山広幸(2.1～)		税田賢二(10.1～)		福島博文(10.1～)		

また、発掘調査にかかる福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。なお、平成23年度に福岡県教育委員会は組織を改編して、文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査部門を九州歴史資料館文化財調査室へ移管した。

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
福岡県教育委員会							
総 括							
教 育 長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	檜崎洋二郎	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋			
参 事	新原正典	新原正典	小池史哲	小池史哲			
	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋				
課長補佐	中藺 宏	前原俊史	前原俊史	日高公德			
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳			
庶 務							
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫			

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
庶務担当	瀨上大輔	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔				
調査・整理								
調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文				
参事補佐			新原正典	新原正典				
技 師	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣				

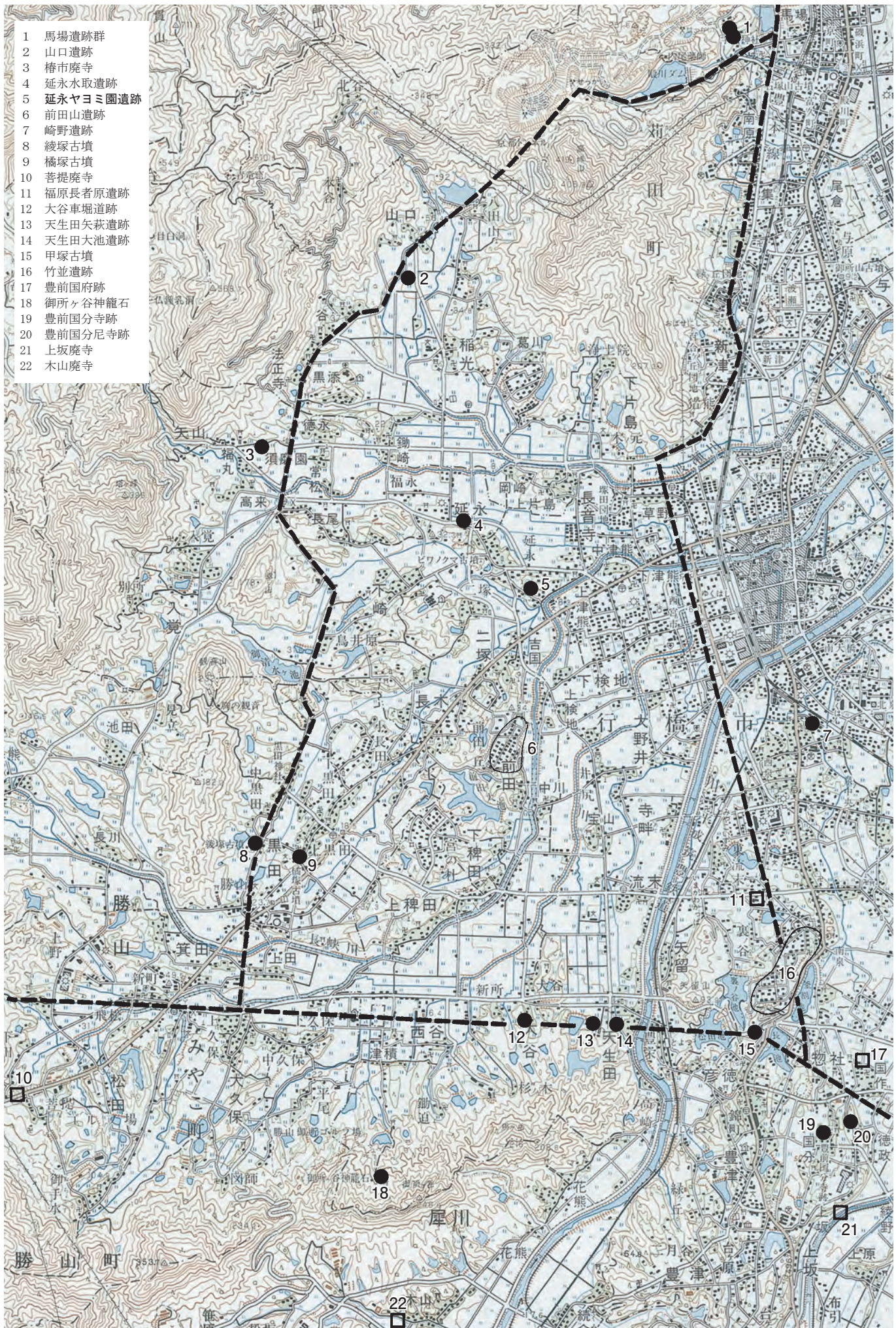
九州歴史資料館

総 括

館 長				西谷 正	西谷 正	荒巻俊彦	杉光 誠
副館長				南里正美	篠田隆行	篠田隆行	伊崎俊秋
参事 <small>(文化財調査室長)</small>						飛野博文	飛野博文
企画主幹 <small>(総務室長)</small>				圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
企画主幹 <small>(文化財調査室長)</small>				飛野博文 <small>(調査担当)</small>	飛野博文 <small>(調査担当)</small>		
企画主幹 <small>(文化財調査室長補佐)</small>				吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査 <small>(文化財調査班長)</small>				小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦 憲二
庶 務							
企画主査				塩塚孝憲	長野良博	長野良博	山崎 彰
事務主査					青木三保	青木三保	南里成子
事務主査						南里成子	宮崎奈巳
主任主事				熊谷泰容	近藤一崇	三好洸一	秦 健太
				近藤一崇			
主 事				谷川賢治	谷川賢治		
調査・整理報告							
技術主査 <small>(保存管理班長)</small>				加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
同参事補佐				小池史哲	小池史哲	池邊元明	池邊元明
技術主査							小川泰樹
主任技師						城門義廣	小林 啓
技 師				小林 啓	小林 啓	小林 啓	

なお、発掘調査に当たっては、地元行橋市をはじめとする多くの方々の参加を得て、酷暑の夏、厳寒の冬を幾度も乗り越え、大過なく終了できたことについて心より感謝申し上げます。また、福岡県、行橋市・同教育委員会、工事関係者や地元住民の方々のご理解、ご協力を戴いたことにつきましても、あらためて謝意を表します。

また、発掘調査はもとより、報告書作成に至るまで、臨時調査員・調査指導員はじめ多くの同僚諸氏の協力を得てようやく本書が刊行できたことを記しておきたい。



第4図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

Ⅱ 位置と環境

既刊の報告書の中で地理的・歴史的環境について記述しているが、ここでは周辺の歴史時代、特に行橋市域及び周辺の古代に焦点を当てて紹介したい。

この延永ヤヨミ園遺跡は古代律令制下では「西海道豊前国京都郡」に属する。「豊前国」には「田河・企救・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐」の八郡があり、明治9年（1876）年に山国川以北の六郡が福岡県へ、山国上流域及び下流域東側の「下毛・宇佐」両郡が大分県へ編入された。これは江戸時代の小倉小笠原藩、中津奥平藩の境界を踏襲した形といえる。その後、明治29年に「京都・仲津」が「京都郡」、「築城・上毛」が「築上郡」に再編されて現在に至る。企救郡（現北九州市東部）と京都郡の間はカルスト地形として有名な平尾台が広がり、両郡間の主要な交通路は京都郡荻田町の沿海部にほぼ限られるとあってよい。企救－田河及び京都・仲津－田河の各郡境は山塊で画されていて、現在ではトンネルあるいは山間部を縫う道路が新設されているが、それ以前の相互の交流はやはり困難であったと思われる。京都・仲津・築城・上毛の各郡境は低丘陵もしくは現在でいう二級以下の河川で、比較的相互の交流は容易であっただろう。上毛・下毛両郡境はかつて「御木川」と呼ばれたという一級河川山国川と犬ヶ岳山系の山稜である。

『和名抄』では「京都郡」に「諫山・本山・刈田・高来」の四郷が、「仲津郡」には「皆見・薨野・城井・狭度・高屋・中臣・仲津・高家」の八郷が記載されている。諫山・刈（荻）田・高来、皆見・城井・高家（屋）などのように現在に遺称を留める地名も存するが、その範囲を含めた厳密な比定は難しい。

行橋・京都郡では、御所ヶ谷神籠石（行橋市・みやこ町）、椿市廃寺（行橋市）、木山廃寺・上坂廃寺・豊前国分寺・菩提廃寺（みやこ町）などが大規模な古代遺跡として早くから知られていたが、昭和60年代からの国道10号線バイパス建設、そして平成19年からの東九州自動車道建設に伴う本格的な発掘調査がなされて重要な知見を加えることができた。この二つの大規模事業に併行して当地域でも圃場整備事業が盛期を迎え、工業団地造成やその他事業も加わって各市町村に専門職員が配置されるとともに膨大な新しい資料が蓄積されている。すべての成果が公表されているわけではないが、関係自治体の努力で徐々に公開されつつある。以下では、官衙・古代山城・寺院・集落・道路等の交通・輸送関連の遺跡について垣間見ることとする。

官衙 豊前国府については、『和名抄』をはじめとする古い文献ではいずれも「京都郡」に所在すると記されている。一方、豊前国分寺や「惣（総）社八幡宮」が「仲津郡」に所在することもあって、京都・仲津両郡の間を国府が移転したとする説が出され、比定地もいくつか挙げられた。

昭和60年代の圃場整備事業を契機として京都郡みやこ町（旧豊津町）惣社八幡宮周辺の発掘調査が行われ、3×14間、2×10～11間の長大な掘立柱建物跡やそれらを囲む溝などが検出されて9世紀後半以降の国府政庁と判断された^{註1}。その後、調査地は豊前国府跡公園として保存整備され、平成17年には県史跡となった。しかし、遺構の残存状態が非常に悪く、一部に否定的な意見も存する。そうした中で、平成22年度に開始された東九州自動車道建設に伴う行橋市福原長者原遺跡で、77.5mの距離を置いて東西に並ぶ2×6間の側柱建物跡やそれらを圍繞する溝、2列の柱穴からなる回廊状遺構、八脚門などが発見された。この発掘調査では2×6間の脇殿+幅3m、深さ1mほ

どの断面逆台形となる溝で構成される段階（溝芯々で東西長129m）、2×6（？）間の脇殿+幅5m、深さ1mの溝+2列の柱穴列からなる回廊状遺構+八脚門などで構成される段階（同151m）などの変遷が明らかとなり、出土遺物はほぼ8世紀代に収まると判断された。年代もみやこ町の県史跡豊前国府跡と重複せず、遺跡の規模から見てこれが初期の豊前国府政庁であった可能性は高い。古代の郡界は二級河川今川の旧河道であったと思われ、その場合はこの福原長者原遺跡も仲津郡に属している。県史跡豊前国府跡までは直線距離で2kmほどを隔てる。

郡衙としては築上郡上毛町大ノ瀬遺跡^{註3}（国史跡）で上毛郡衙政庁が、大分県中津市長者屋敷遺跡（国史跡）で下毛郡衙正倉が相次いで発見・保存されたが、それ以外の「豊前国」内ではまだ判明していない。大ノ瀬遺跡の発見も圃場整備事業が契機であった。平成7年5月1日に発掘調査に着手し、同年6月末までに2×5間四面庇の正殿（建替あり）、正殿とL字形に配置された2×12間の脇殿、四脚門や柵列を検出したことから、保存の気運が高まった。8年度には周辺を含めた約200m四方をほぼ全面発掘し、方位を大きく異にする遺構も含めて60数棟の掘立柱建物跡群を検出、郡衙政庁を全面発掘した希有な例となった。その結果、ここでは内郭・外郭が区別されていて、内郭には53.4×58.5mの規模で柵列を巡らせて、内部に正殿とその左右に接続する様な建物跡2棟、1棟の脇殿が配されていた。辺長150mの方形と想定される外郭は古代官道に面した側及び正殿正面・背面を柵列や溝で画しているが、官道と反対側となる部分では明確な区画施設は見られなかった。小規模な谷が入り込むことも略した理由の一つであろう。また、官道から四脚門に導く道路痕跡も見つかっている。その後、この遺跡の北東部、官道を挟んだ位置で堂ノ前遺跡の発掘調査がなされた。ここでも35×50mほどの規模の柵列で囲まれた区画があって、内外で複数の掘立柱建物跡を検出しているが、柵列と同時期の建物跡は中央に置かれた2×5間側柱建物と、南西隅付近に置かれた柵列と一辺を共有する建物跡の2棟が想定されている。なお、この上毛郡衙政庁が完備する形となる8世紀中葉以降の建物群は正方位をとらず、官道の方位に添って造営されている。

ここで報告する調査区の北150mの地点、同一丘陵上の延永ヤヨミ園遺跡V-1区^{註4}で2×3間の身舎に三面庇を付す建物跡と2×5・2×6間の側柱建物跡が調査された。後2棟は正確に直角に配置されるようで同時存在が考えられるが、庇付建物跡は側柱建物跡に近すぎて同時存在とは見なしがたい。しかし、いずれも7世紀後半に位置付けられる。時代が降るが『類聚三代格』に天平18年（746）の記録として「豊前国草野津」が見え、それに関連する遺構であろうと思われる。この豊前国は畿内を海路で発した場合には九州で最初の上陸地点となりうる地であり、中央政府も重要視していたと推測される。7世紀後半に津が整備されたと考える場合、海路とともに陸路—いわゆる古代官道の整備とも関連する可能性があり、興味深い遺構である。

古代山城 御所ヶ谷神籠石^{註5}（国史跡）は旧京都・仲津両郡を隔てる標高200～250mほどの山塊の中、北側で緩傾斜面や谷を広く取り、南側は稜線をわずかに取り込んで展開する大規模な山城で、その規模は概略南北600m、東西1,000mほどである。北麓のほど近い位置に古代官道が東西方向に推定され、一部が発掘調査で確認されている。主要な構造物の一つは土塁とその外側基底部に並べられた方形に切り出された加工痕のある列石で、良好に残存しているといつてよい。列石前面には勾配をもって立てられた柱痕が随所で検出されている。また、吐水口を組み込んだ大規模な石造物である中門は幅約30mにわたって谷を堰き止め、現状で厚さは最大12m、高さも12mを測るが、沢によって一部が破壊されている。中央部付近が崩れ落ちた西門も幅30m前後、高さ10m前後の大規模な構造物である。これら以外にも小規模な門5箇所が知られている。ただ、いわゆる朝鮮式山城のような建物跡は未確認である。

平成になって確認された山城に上毛町（旧大平村）唐原古代山城^{註6}がある。一級河川山国川水系の友枝川右岸に接し、英彦山を主峰とする福岡県・大分県境の山塊から北へ派生する丘陵の東北端に位置する。遺跡の範囲は南北750m、東西600mほどの規模で3つの谷を抱え込み、その2ヶ所で石組の水門が確認された。神籠石で通常見られる加工された花崗岩製の列石はほとんどが抜き取られ、20個ほどを確認したのみである。一部で確認された土塁は通常の版築工法でなく、1棟の礎石建物跡（2×5間）も帰属時期の確定は困難である。ちなみに、豊臣秀吉の九州仕置で豊前六郡を与えられた黒田官兵衛孝高（如水）が築城した中津城の石垣に神籠石特有の加工された石材が多数使用されていて、ここから持ち出されたものとしてよからう。

寺院 椿市廃寺（市史跡）・木山廃寺・上坂廃寺（塔心礎が県史跡）が7世紀末～8世紀初め頃、豊前国分寺跡（国史跡）が8世紀中頃、菩提廃寺（塔跡が県史跡）が8世紀後葉に創建されたと考えられている。この地域では百済系・高句麗系・新羅系そして大宰府系といった多様な瓦当が出土する点で興味深い。

椿市廃寺^{註7}は動かされた塔心礎、自然石積みの講堂基壇が残る。他の堂宇ははっきりしないが、四天王寺式伽藍と推測されている。講堂基壇上に建物があるが、周辺は水田化していて圃場整備事業に伴って発掘調査が行われ、回廊状の掘立柱列が確認された。木山廃寺^{註8}も二度にわたる圃場整備事業によって失われたといわれている。一度目は明治9（1876）年頃で、この時に塔心礎が掘り出されて分割され、一部は道祖神に利用されている。二度目は昭和49（1975）年で、この時は確認調査が実施されたものの遺構を確認できずに工事が施工され、当時多くの土器・瓦が採集されている。上坂廃寺^{註9}も塔心礎が古く昭和30（1955）年に県史跡に指定された遺跡である。昭和58（1983）年、これも圃場整備事業に先立ってトレンチ調査が実施された。概要報告では数点の礎石や基壇状の遺構、瓦溜などが記載されているが、詳細は不明である。豊前国分寺跡は現在も真言宗豊前国分寺が法灯を継いでいて、その周辺部で発掘調査を実施、埴積の講堂基壇が復元されたものの、その他の古代の伽藍配置はやはり不明である。明治28（1895年）に建立された木造三重塔（県文化財）は一部に古い礎石を利用しているといわれるが、塔の本来の位置も未確認である。

菩提廃寺^{註11}は京都・田川郡を隔てる山塊の東麓に位置し、塔の礎石が完存するほか、周辺にも礎石群が残存し、遺存状態は最も良好であると思われるが詳細な調査は行われていない。南側での国道トンネル開削に伴う調査で関連する遺構・遺物の出土を見ているが、主要堂塔に関しては塔周辺で小規模な調査がなされたのみである。

寺院に関連して、築上郡築上町船迫窯跡群^{註12}（国史跡）に触れておこう。豊前国分寺の東3kmに位置し、6世紀後半から須恵器製作が開始され、7世紀中頃には平瓦の焼造を始めたようだが、供給先は不明である。そして7世紀後半から9世紀にかけて本格的に瓦生産がなされ、特に豊前国分寺への供給瓦窯として評価がなされた。

古代寺院の中で、みやこ町木山廃寺は御所ヶ谷神籠石が築かれた山塊の南麓に位置する。字名の木山は「城山」に通じる。官道は北麓を東西方向に推定されているが、南麓でも豊前国府から田河郡へ通じる伝路が復元されている。また、上毛町垂水廃寺^{註13}は唐原古代山城の北方1.5kmに位置し、やはり山城との関連性が想定される。

集落 行橋市崎野遺跡^{註14}は掘立柱建物跡群からなる比較的純粋な古代遺跡である。遺跡は現市街地の南、標高7m余の位置にあるが、水路を隔てて北及び東側は標高5～5.5mとなっているので、低丘陵の先端部に立地しているといえよう。12棟の建物跡の中、2×2間の総柱建物跡3棟は古墳時代に比定されていて、側柱建物跡の9棟について1～2棟の組み合わせからなる7～9世紀におよぶ

変遷が示されている。邢窯産とされる白磁碗や見込に花卉を刻む緑釉片などの優品が出土しているが、整然とした方形の掘形をもつ建物跡はなく、いわゆる官衙遺跡とは一線を画している。

京都郡苅田町谷遺跡^{註15}は椿市廃寺の北東1.5kmに位置し、「京都峠」を利用する古代官道を想定する場合は官道に近接することとなる。遺跡は掘立柱建物跡や井戸からなるが、建物跡の柱穴は直径0.3～0.4mの円形であって、この種の建物跡として最小の部類である。しかし、建物跡を構成しない柱穴から緑釉碗や唐三彩陶枕片などが出土して注目された。

集落本体でなく、その周辺地域を調査して成果が得られた例がいくつかある。苅田町雨窪遺跡群^{註16}は北九州市（企救郡）との境界、苅田町市街地の西側を南北に連なる山塊の麓に位置する。幅15mほどの自然流路から土器類を中心として多様な出土遺物を見た。流路から桃の種が多く出土し、そのほかに万年通宝・銅碗・緑釉小瓶・土馬（須恵器）などがある。また、雨窪遺跡の南東2kmほど、同じように山麓に位置する馬場長町遺跡・馬場仁王免遺跡^{註17}では建物跡・住居跡といった主要な遺構は削平されたようだが、越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器・塩壺・飯蛸壺などが多く出土している。近くで活発な交流、生産活動が行われていたようである。

古代官道等 大宰府から豊前国府を經由して宇佐宮、豊後国府へと続く官道は、みやこ町勝山松田地区から御所ヶ谷神籠石の北麓を通ってみやこ町甲塚まで一直線で続き、甲塚方墳の脇で屈曲して丘陵が周防灘に達する豊前市松江まで再び直線道路が推測されている。松江付近で再び方向を変えた後は山国川、そして宇佐宮まで多くの部分が直線的に続くと考えられている。さて、これらの直線的な道路が何時造られたものか、発掘調査ではなかなか明らかにしえない。行橋市やみやこ町、築上町（旧椎田町）、上毛町（旧新吉富村）などで古代官道そのものは確認されているが、管理を放棄したおおよその年代を知りうるのみで、その敷設された時期は不明のままである。そこで参考としたいのが先述した延永ヤヨミ園遺跡で発見された「津」と考えられる官衙的建物跡である。この場合の「津」は都と豊前（もしくは北部九州）との間のヒト・モノの輸送の拠点として造営されたものであり、港から目的地（大宰府や豊前国府、あるいは京都郡衙等）へ至る道路も「津」が機能する時期に相前後して使用された考えられる。敷衍すれば、豊前国あるいは西海道で官道が整備された時期もその頃と考えることができよう。

上記の大宰府－豊前国府－豊後国府へというルートと別に苅田町の海岸線を南北に走る官道も推定されていて、先述した雨窪遺跡群や馬場地区の出土品は官道の存在を窺わせる材料とよいが、これは未確認である。

延永水取遺跡^{註19}は、延永ヤヨミ園遺跡の位置する低丘陵の北麓に位置する。小規模な調査であったが、アシ原の広がる湿地帯の一段上、安定した地山をもち、畑地として使用されていた場所に幅4.2m、深さ0.7mの断面U形の溝を掘削していた。調査面積に比して多くの土器（轆羽口・製塩土器や蛸壺などを含む）・瓦が出土し、運河のような性格を想定した。丘陵北麓を西に向かえば椿市廃寺付近に通じ、周辺に京都郡衙を想定する説もある。ただ、今回の各種道路工事に先立つ試掘調査ではその延長を確認できなかった。

註

- 1 福岡県史跡豊前国府跡では昭和59年度から平成6年度にかけて計画的に発掘調査が実施され、それぞれ概報が刊行されているが、「平成6年度発掘調査概報」で成果が簡単にまとめられている。豊津町教育委員会「豊前国府 平成6年度発掘調査概報」（『豊津町文化財調査報告書』第15集、1995）
- 2 九州歴史資料館「福原長者原遺跡 福原寄原遺跡」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13、2014）
- 3 新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」（『新吉富村文化財調査報告書』第10集、1997）
同「大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ」（『新吉富村文化財調査報告書』第11集、1998）
同「遺跡大ノ瀬官衙遺跡保存整備基本計画」、2000）
- 4 九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡－Ⅴ－1・2・3区－」（『福岡県文化財調査報告書』第238集、2013）
- 5 行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ」（『行橋市文化財調査報告書』第24集、1996）
行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石Ⅱ」（『行橋市文化財調査報告書』第53集、2014）
- 6 大平村教育委員会「唐原神籠石Ⅰ」（『大平村文化財調査報告書』第13集、2003）
同「唐原神籠石Ⅱ」（『大平村文化財調査報告書』第16集、2005）
- 7 行橋市教育委員会「椿市廃寺Ⅱ」（『行橋市文化財調査報告書』第33集、2006）
- 8 犀川町教育委員会『木山廃寺跡』1975
- 9 酒井仁夫・高橋章「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」（『九州考古学』第59号、1984）
- 10 豊津町教育委員会「史跡 豊前国分寺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第16集、1995）
- 11 勝山町教育委員会「菩提廃寺」（『勝山町文化財調査報告書』第2集、1987）
福岡県教育委員会「菩提遺跡Ⅰ」（『一般国道201号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告』1、2003）
福岡県教育委員会「菩提遺跡Ⅱ」（『一般国道201号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告』2、2007）
- 12 築城町教育委員会「船迫窯跡群」（『築城町文化財調査報告書』第6集、1998）
- 13 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」（『新吉富村文化財報告書』第2集、1976）
- 14 行橋市教育委員会「崎野遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第28集、2001）
- 15 苅田町教育委員会「谷遺跡調査報告書」（『苅田町文化財調査報告書』第11集、1990）
- 16 福岡県教育委員会「雨窪遺跡群」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』1、2004）
- 17 九州歴史資料館「馬場長町遺跡 馬場仁王免遺跡」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』4、2013）
- 18 行橋市史編纂委員会『行橋市史 資料編 原始・古代』2006
- 19 福岡県教育委員会「農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告」（『福岡県文化財調査報告書』第159集、2001）



スナップ1 作業風景－調査着手の頃



スナップ1 延永小学校3年生の体験発掘

Ⅲ 調査の内容

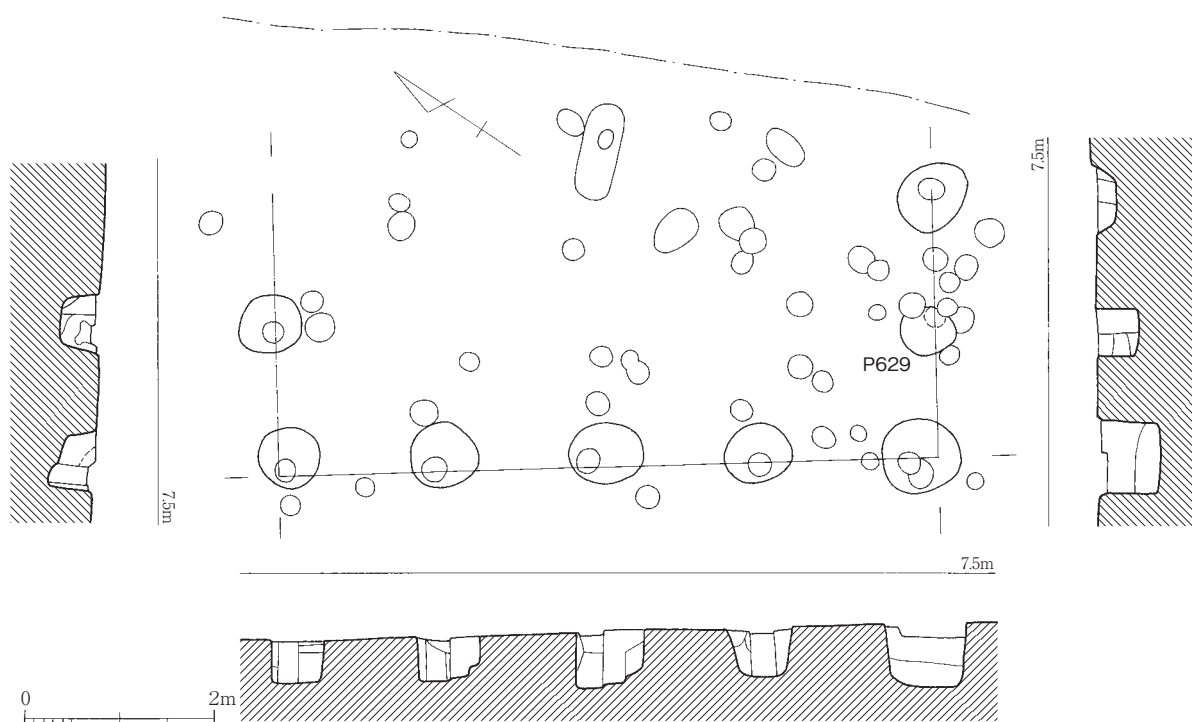
調査の経過・調査区の概要等については「延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査1」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-9-、2013）に記したので参照されたい。また、前回報告を行った竪穴住居跡は遺構番号を通し番号に変更したが、今回は一部を除いて調査時のままで報告する。国道201号行橋インター線と立体交差する部分を境に、その南側となるⅠ区を便宜上1～7区に分けて調査を行ったが、2区の遺構を「201号土坑、203号溝」、5区の遺構を「505号土坑、511号溝」などと3桁目に小地区名を付している。柱穴は数が多いため、4桁目に小地区名を付した。ただし、1区のみはそのままである。

1 掘立柱建物跡

遺跡全体では無数の柱穴を検出したが、建物跡を想定できたものは少ない。1区南半、1号溝の西側にある大小の溝の内部にも建物跡があるはずなのであるが、それと確信を持てる遺構を認定できていない。掘立柱建物跡としては、表土掘削時に明らかに大型の柱穴を認めてすぐに断定できた1号建物跡のほか、古い時期に削平されて弥生～古墳時代の遺構がほとんど失われていた2区、そしてやはり削平のために遺構が疎となっていた4区北端近くでいくつかの建物跡を想定した。

1号掘立柱建物跡（図版4、第5図）

1区北東隅で検出した。灰白色の阿蘇4火山灰が露出する地山で、かつ比較的遺構が少ない部分であることも幸いして表土掘削時にすぐ建物跡であろうと判断したものであるが、北東辺を構成する柱列を認めることができなかった。また、北西辺では当初3基の柱穴を検出したと判断したが、

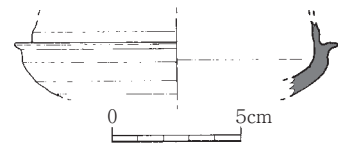


第5図 1号掘立柱建物跡実測図（1/80）

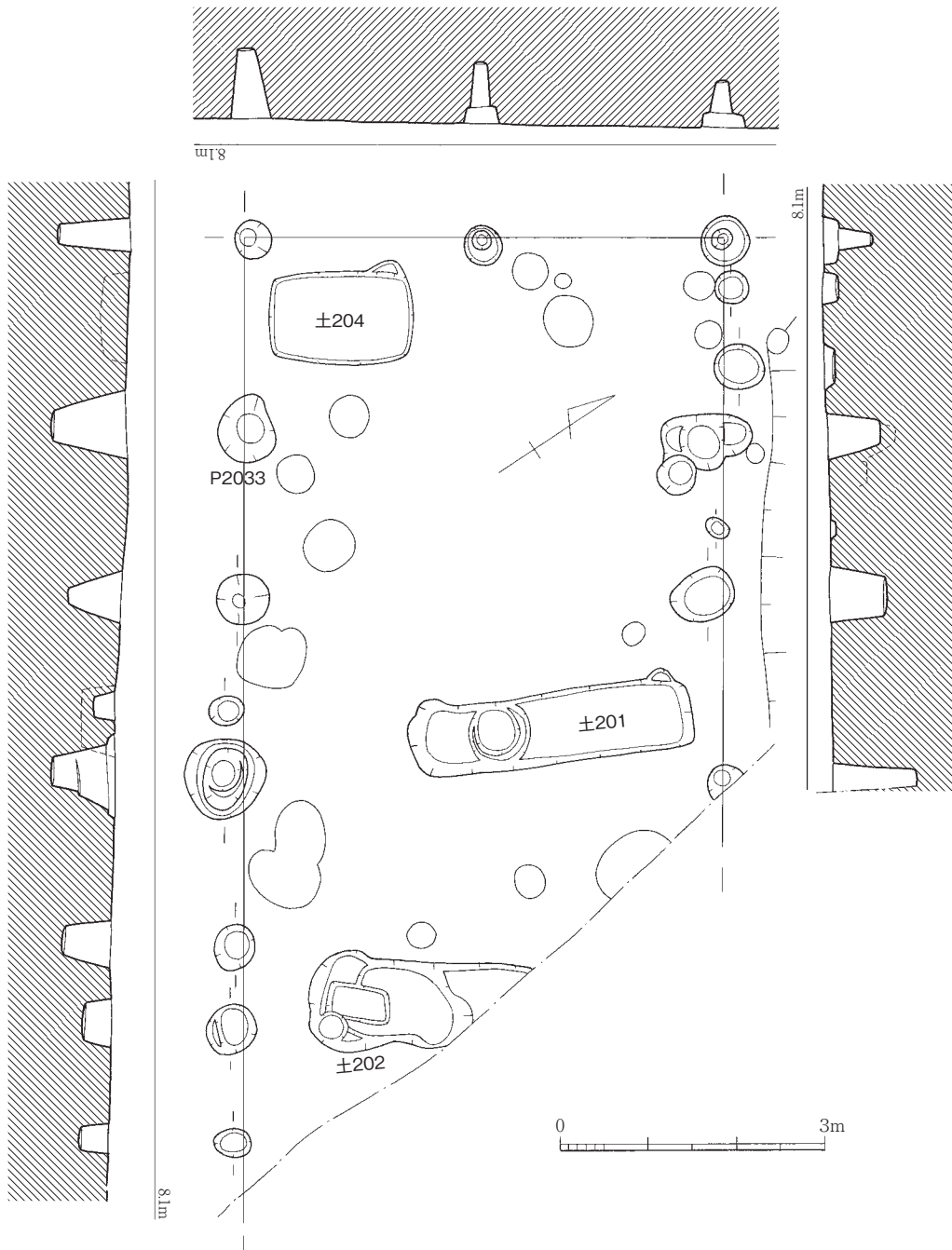
その東端の柱穴様の落ち込みはシミ状のもので遺構ではなかった。図示したように発掘した柱穴は直径0.6~0.9mの大型の掘形を有し、同0.2mほどの柱痕も確認できたのでいわゆる柱穴としてよいと考えているが、1間・4間・2間の3辺で構成される建物跡がどのような構造となるか、にわかには想像しがたい。

桁行長は6.6mで、柱間は1.6~1.7m、梁行長は2.8mで同1.3~1.5mを測り、真北に対して長軸が西に大きく振れる。

かなりの量の土師器小片や須恵器小片、龍泉窯系青磁蓮弁文椀小片1点などが出土しているが、時期決定に至る好資料はない。小片とはいえ青磁椀を重視すれば13世紀頃の遺構となるが、この遺跡では中世の大型柱穴は他に例を見ない。大型柱穴は古代の「津」関連遺構と思われる掘立柱建物跡（V-1区、II-2区など）、古墳時代後期の土器を出土したV-6区2号建物跡などであるが、



第6図 1号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)



第7図 201号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

本遺構はそれらとも形状や大きさが異なっていて比較しがたい。その性格付けは将来、周辺での発掘調査に委ねたい。

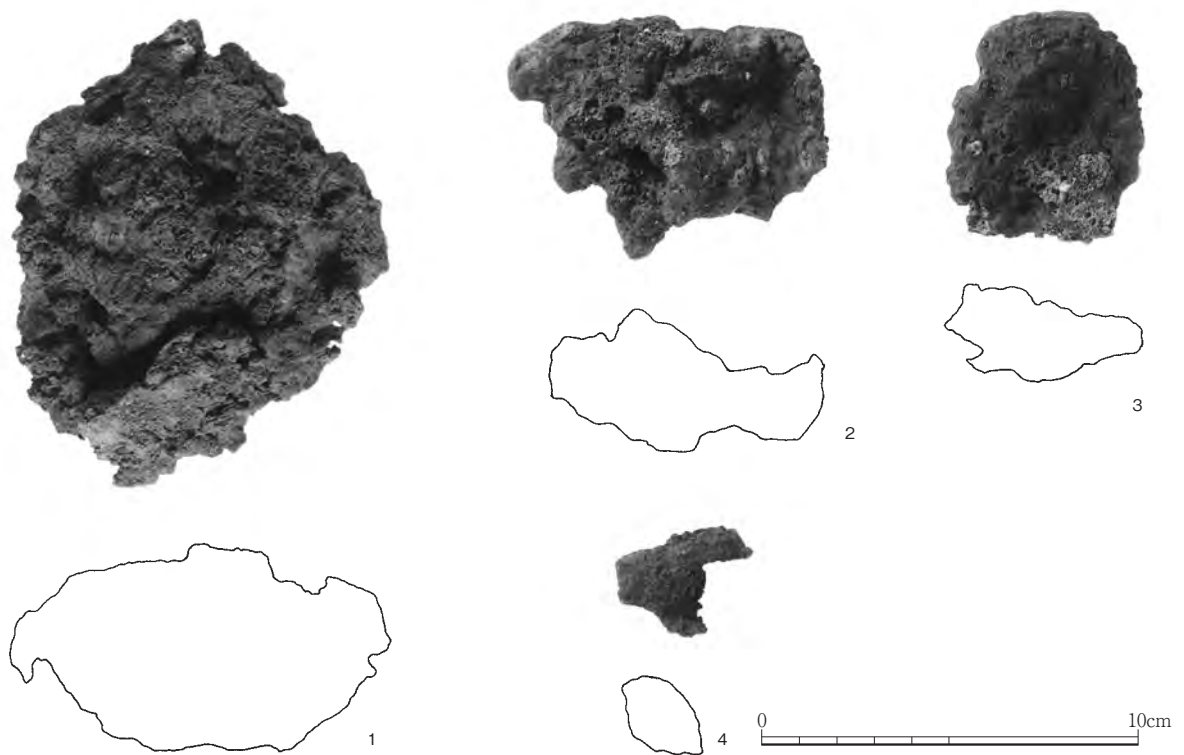
第6図にP629掘形から出土した須恵器杯身小片を図示した。胎土精良といってよく、非常にシャープな作りで陶邑I期に比定できるものであるが、建物跡の時期とは思えない。

201号掘立柱建物跡（図版5・6、第7図）

2区南東端で検出した建物跡で、長軸はさらに延びるかも知れない。内部に3基の土坑が位置し、201号土坑は北東辺に近く、204号土坑は北西隅に位置している。また、建物跡の北東に203号土坑とした大型土坑が近接していて、この配置に意味があるのかも知れない。

梁行は2間5.4m、桁行は5間10.3mを確認し、柱間は2.0～2.1mを測る。

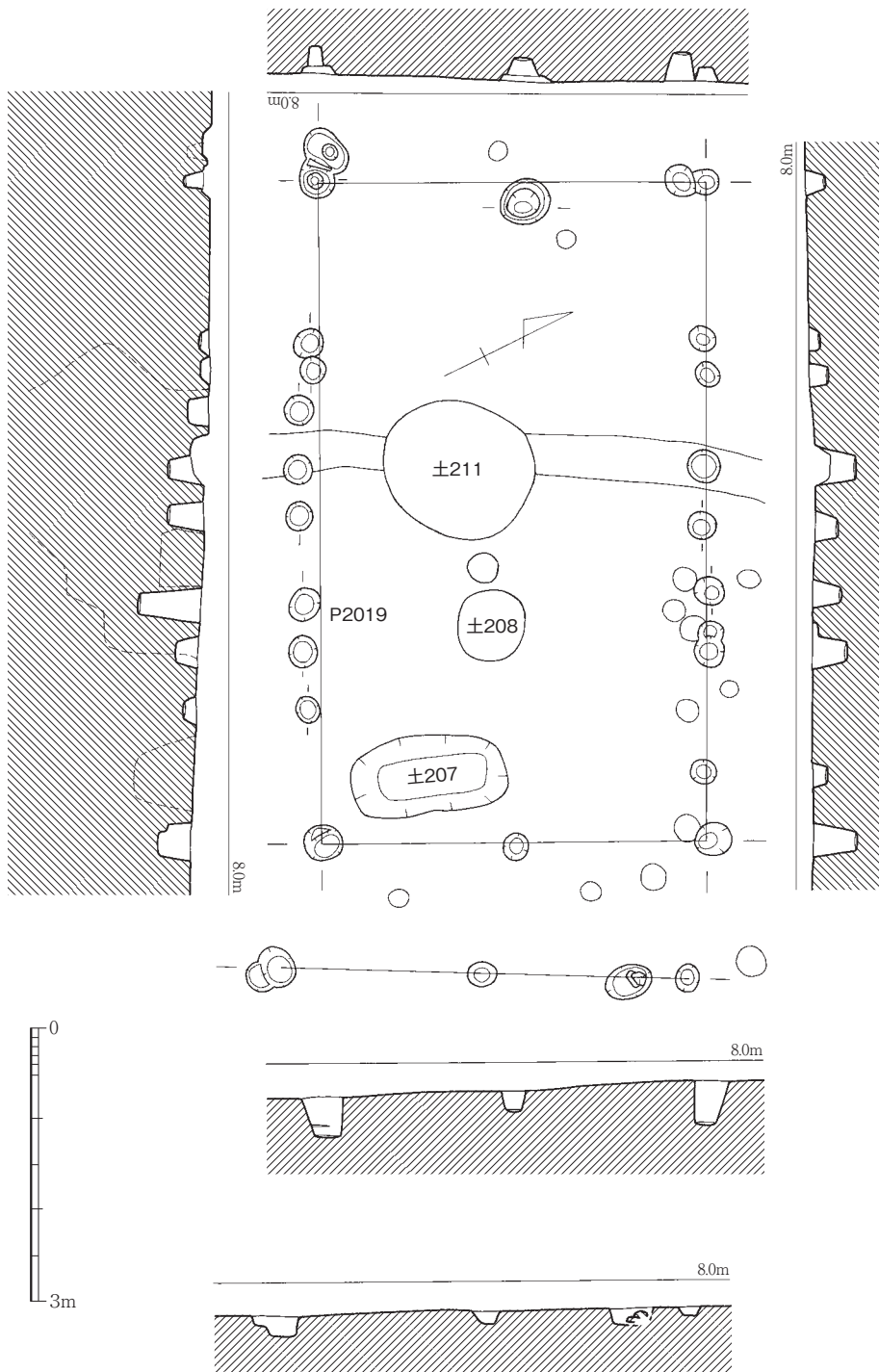
良好な土器の出土はないが、P2033とした204号土坑に近接する柱穴から鉄滓がまとまって出土している（第8図）。これらは鍛冶滓で、重量はそれぞれ663.5・144.9・110.5・14.2gである。出土状態の記録を怠っているが、一つの柱穴からこれだけの鉄滓が出土した例はこの調査区ではなく、特異な在り方であり、建物跡と204号土坑の関連性を示すものといえよう。



第8図 201号掘立柱建物跡（P2033）出土遺物実測図（1/2）

202号掘立柱建物跡（図版6、第9図）

201号建物跡の北西17mほどを隔てて位置し、主軸方位も若干異にするが、大きく見れば両者とも201号溝に沿って並んで位置するといえる。その間には両建物跡の南西辺に揃うような位置に柵列を想定できることから、やはり関連する建物跡であったと思われる。



第9図 202号掘立柱建物跡実測図（1/80）

建物跡は7.2×4.2mの規模をもち、梁行は2間である。桁行は南東辺から2.1・2.0mで2本の柱穴が対応して配置される。そこから3m余を隔てる北西辺までは深さ0.1m前後の浅い柱穴が2基、両長側辺でやはり対応するような位置に置かれていて、やや特殊な建物であったようである。この内部には南西隅に207土坑が、中央付近に211号土坑とした地下式土坑が位置する。211号土坑は空洞を伴っていたために完掘しておらず、床面プランが建物跡とどういう位置関係になっていたか確認できていないが、208号土坑とした入口（竪坑）は両長側辺の中央付近に位置していてこの建物跡が地下式土坑の覆い屋であった可能性を思わせる。

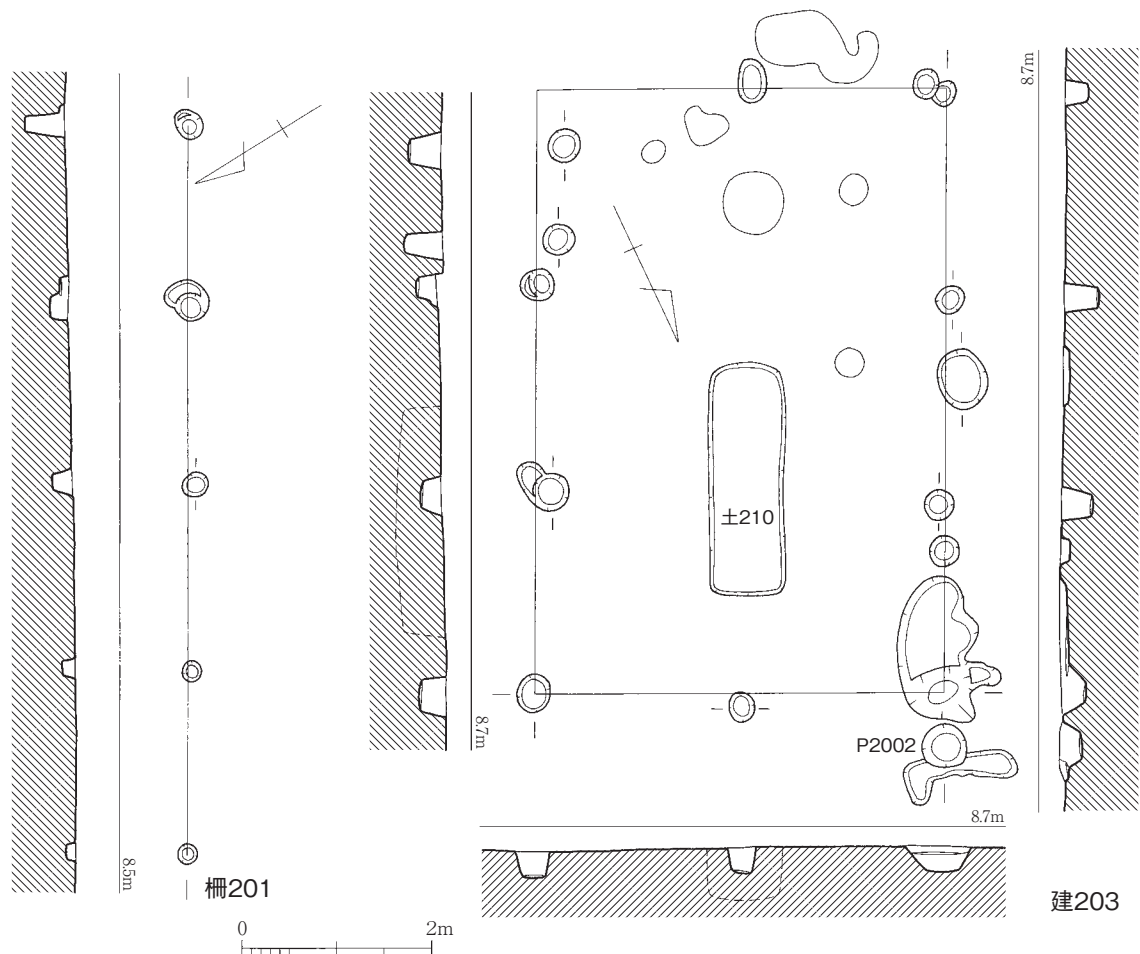
また、南西辺から1.4mを隔てて3基の柱穴からなる目隠し塀のような柵列を想定できる。

柱穴から土師器の他、須恵器壺・甕の体部小片などが出土しているがこれらは年代を推定する材料としては不足である。ただ、P2019とした柱穴から小片ながら瓦質鍋体部片や摺鉢体部片があるが、この柱穴が建物跡を構成するとの確信はない。

203号掘立柱建物跡（図版6、第10図）

202号建物跡の北西、3mほどを隔てて配置される。南西辺の柱穴がはっきりしないが、他の三辺の柱穴がしっかりしているので建物跡としてよいものと考えている。梁行長4.3m、桁行長6.4mほどの規模で、柱間は2.0~2.2mとなる。やや北に偏するが、両長側辺中央付近に長方形の210号土坑が置かれている。この土坑の内部には小片化した焼土塊や小炭が多く入っていて、鍛冶関係の遺構であると考えられ、この建物跡はその覆い屋であったと思われる。

これも良好な出土遺物はない。

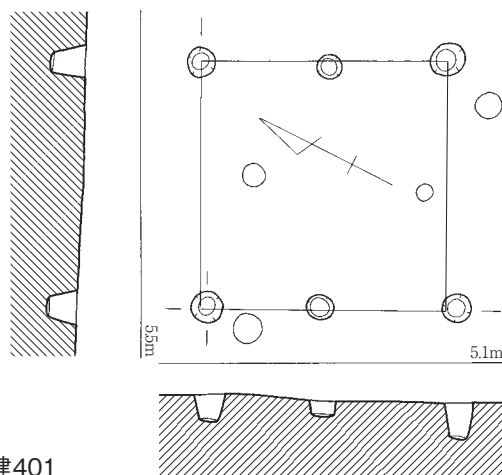


第10図 203号掘立柱建物跡・201号柵列実測図（1/80）

401号掘立柱建物跡 (図版7、第11図)

4区北端付近、遺構の希薄な部分で3棟の建物跡を想定したが、その中で最も南に位置する1×2間の建物跡である。ただ、各辺の規模はいずれも2.6mと柱の配置は正方形をなす。断面に示した柱穴は建物跡を構成するものとしてよいであろうが、断面を図示していない南東隅の柱穴は深さが0.1mであり、ほかのものに比して0.2m以上浅いことから、建物跡とすることに若干の不安がある。

これも良好な出土遺物はない。

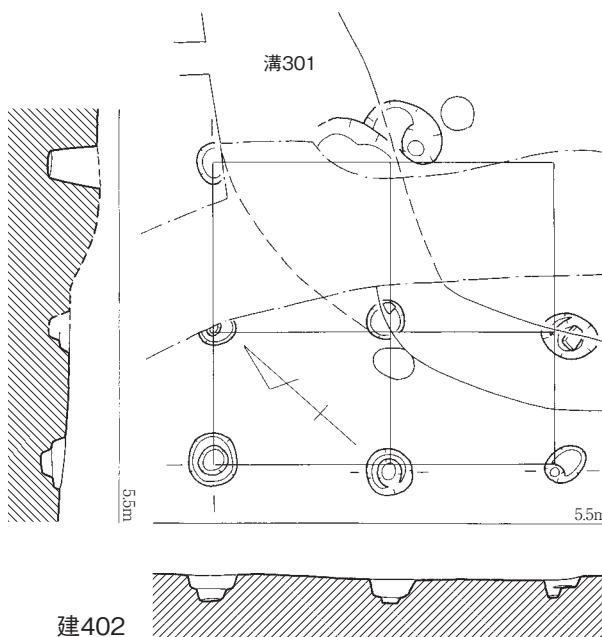


建401

402号掘立柱建物跡 (図版7、第11図)

401号建物跡の北、1・3区にまたがって位置し、未掘部分があって全体を把握できていない。2×2間の総柱建物跡を想定したが、略南北方向の柱列が随分と西へ偏している点でやはり若干の疑問がある。建物跡の規模は略南北方向で3.6m、略東西方向で3.2mを測る。

これも良好な出土遺物はない。

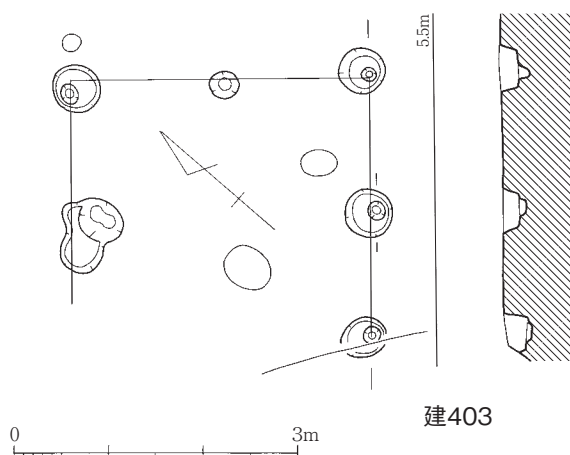


建402

403号掘立柱建物跡 (図版7、第11図)

402号建物跡の西に近接して位置し、一部が調査区外となるが、やはり2×2間の建物跡を想定している。3.2×2.8mほどを測る小規模なものである。

これも良好な出土遺物はない。



建403

第11図 401~403号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

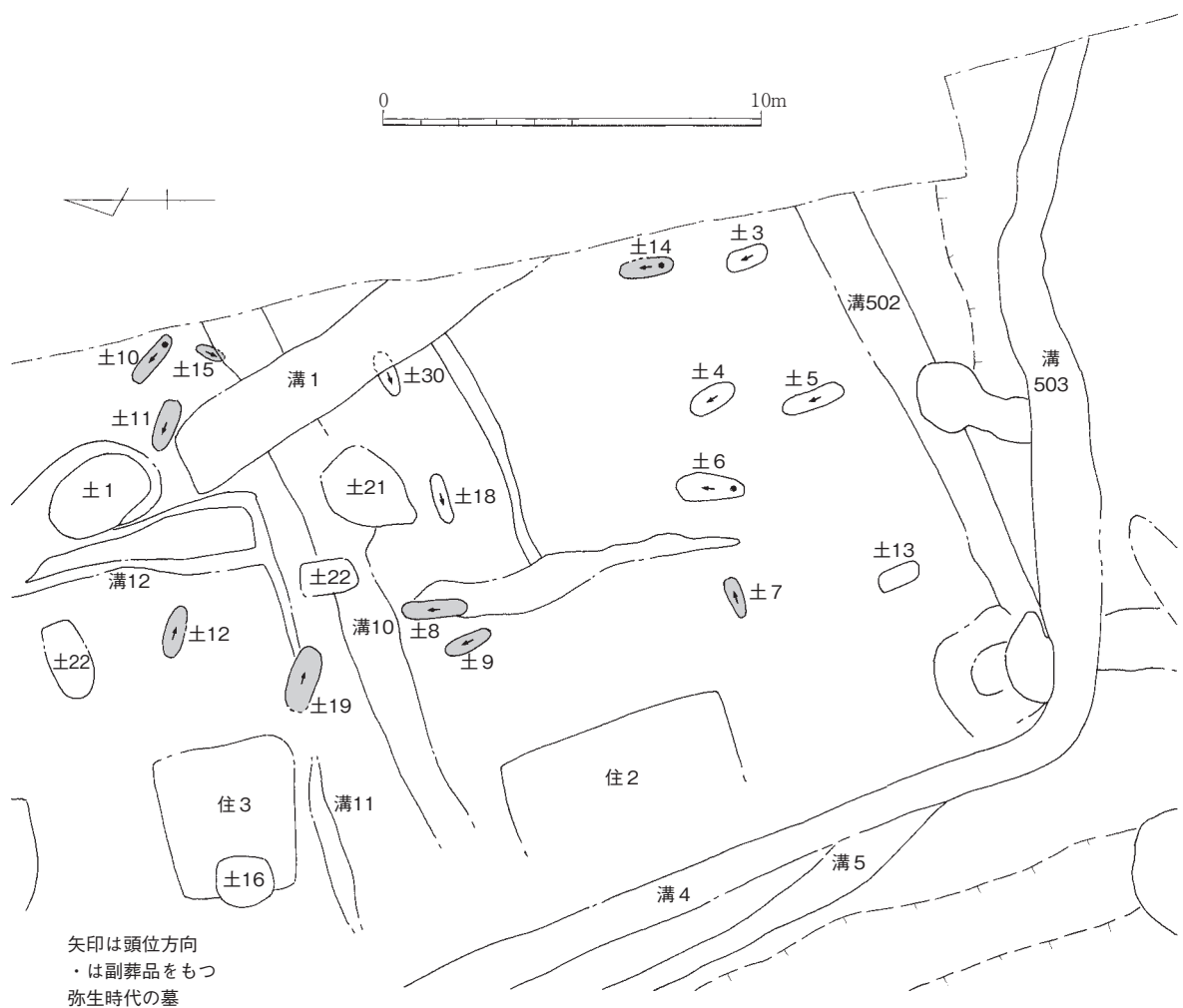
2 土壙墓・木棺墓

弥生時代後期に属すると思われる土壙墓は1区南端に集中し、中世の土壙墓もほぼ重複するような位置にある。ここで土壙墓としたものの中、弥生時代後期に属すると思われる遺構についてはそれと気付いたのが遅く、当初は柱穴・小土坑として発掘していた。年度があけて既掘の遺構を清掃する過程で赤色顔料に気付き、あらためて精査して墓壙を確認した。なお、表土掘削に際して蓋石として使ったような石材は全く見受けられなかった。中世の土壙墓も、発掘後に出土遺物からそれと判明したもので、これらの遺構番号はいずれも「土坑」で通した。本報告においても、遺構名は調査時のものを使用し、弥生時代・中世の順に報告する。

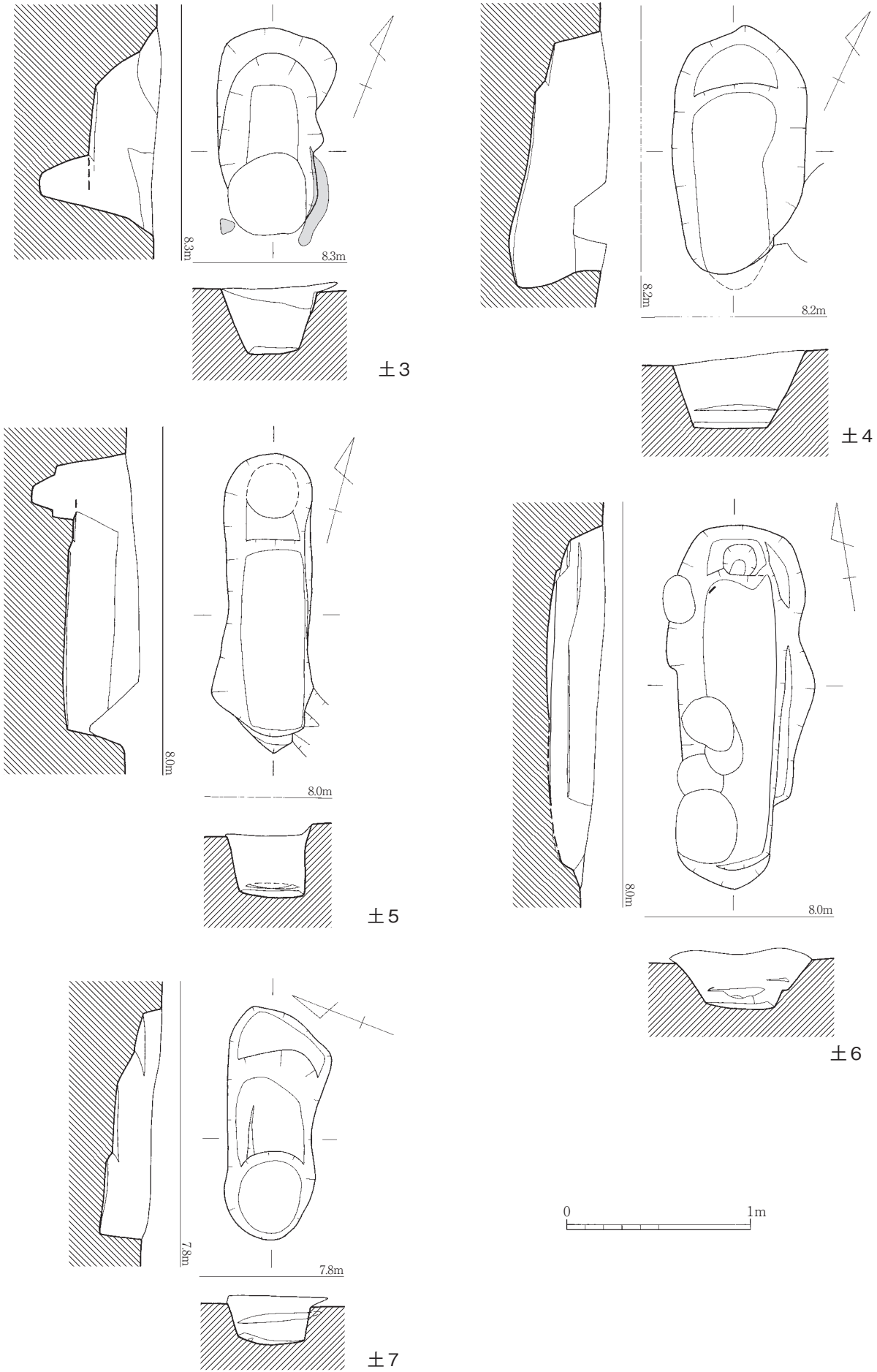
1) 弥生時代の土壙墓

3号土坑（図版7、第13図）

1区の南東隅に位置する。南側小口を後世の柱穴によって破壊されるが、床面規模で長さ0.6mほどに復元できる。同幅は0.25mほどで、小児用としてよからう。床に赤色顔料は見られないが、南辺小口に蓋の目張りに使用されたとと思われる白色粘土が残存していた。なお、北側の床面がやや高くなっていて、頭位を示すものであろう。



第12図 弥生時代土壙墓配置図 (1/200)



第13図 土墳墓実測図1：3～7号土坑 (1/30)

4号土坑（図版7、第13図）

3号土坑の北西に近接する。床面長は1.3mを測り、頭位を一段高く掘り残して枕としたようである。これも小児用としてよいかも知れないが、また、足位はオーバーハングしてさらに掘り下げられていたことから、下肢を屈曲して葬れば成人でもよいのかも知れない。

5号土坑（図版7、第13図）

4号土坑の南に近接する。北小口、頭位に後世の柱穴が掘り込まれていたが、全体は窺える。床面で長さ1.3mほど、幅0.35mほどの規模で、頭位に枕が設置されている。

6号土坑（図版7、第13図）

4号土坑の西に近接し、複数の柱穴が掘り込まれていた。これも枕が削り出されていたが、中央部が低く縦断面は匙面状となっていた。床面の規模で長さ1.8m、幅0.4mを測り、これは成人用としてよいのであろう。

出土遺物

金属製品（図版49、第16図4） 被葬者の右肩辺り、削り出し枕の西端下段に置かれてあった鉄製鉞である。基部の断面は丸く、刃部では鑄を作り出して断面が山形となり、先端が上方へ反っている。図下端の破面は古い。

7号土坑（図版8、第13図）

6号土坑の西に近接し、足位に柱穴が重複する。床面を上手に掘れなかったが、削り出し枕をもって、床面の所々で赤色顔料が見られた、本来は全面に使用していたものであろう。床面で長さ1m前後、幅0.35mほどの規模である。

8号土坑（図版8、第14図）

2号堅穴住居跡北辺の東側に近接して位置し、9号土坑と隣接するが両者の主軸方位はやや異なる。図は床面の赤色顔料を除去した後に図化したものであるが、壁が直になっていて若干掘り過ぎたようである。床面で長さ1.7m余、幅0.4m弱で、枕を削り残している。

9号土坑（図版8、第14図）

8号土坑の西に隣接する土壙墓であるが、壁の立ち上がりは残っていない。他の土壙墓と同様の形状で長さ1.2mほど、幅0.3m余の範囲で赤色顔料が現れ、その厚さは1cmほどであった。北端付近では枕状に色が薄くなっていた。

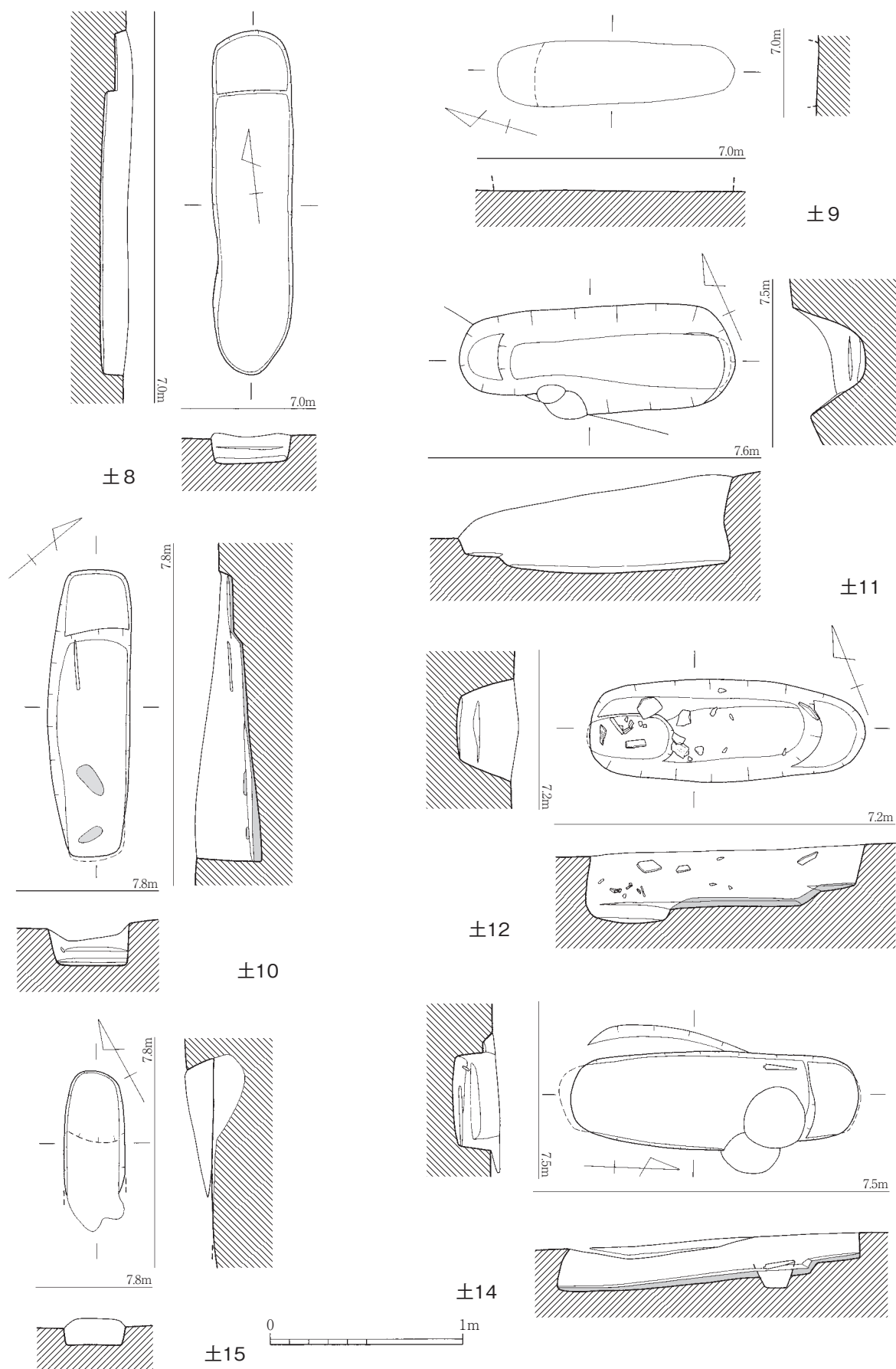
10号土坑（図版8、第14図）

1号溝と重複する位置に大型の1号土坑が掘削されているが、その南東部、調査区境で検出した土壙墓である。平面形を見ると、他の土壙墓に比して矩形を意識しているように見える。

床面の規模は長さ1.5m、幅0.35mで、枕を設けている。床面には全面に赤色顔料が敷かれていて、足位付近には黄味帯びる粘土塊が散乱していた。

出土遺物

金属製品（図版49、第16図5） 6号土坑と同様、被葬者の右肩付近の枕下から出土した鉄製鉞



第14図 土壙墓実測図2：8～12・14・15号土坑（1/30）

で、刃部を枕の方向へ向けて出土した。先端をわずかに欠くほかは完存していて、全長26.3cm、柄幅0.8～1.0cm、同厚さ0.3cmを測る。刃部は3cm前後の長さとなるようである。形状は6号土坑出土例と同様であるが、これは反っておらず、6号土坑の鉤が変形したものと思われる。図示した布目痕は、柄下面も含めて約5cmの幅で視認できる。

11号土坑（図版8・9、第14図）

10号土坑の西に隣接し、西小口が一部1号溝によって削られている。西小口に削り出しの枕を置き、床面プランは他と異なって頭部に近い部分で幅狭く、足位が広がっている。床面長1.4m、同幅0.3m弱である。床は全面に赤色顔料が敷かれていたが、発掘時に一部除去してしまったために断面図には示していない。

12号土坑（図版9、第14図）

先の1号土坑の西側に近接して位置する。これは他の土壙墓と異なって、内部にかなりの数の小礫が落ち込んでいたが、本来の配置を窺わせるような規則性はなく、礫の大きさも不揃いであった。ただ、比較的埋土の上層に多いことから棺蓋の上に置かれていたようである。

これも削り出しの枕をもち、肩部・足位の幅がほぼ同じ幅で掘削されているように発掘したが、足位の掘り込み付近では赤色顔料に染まった部分とそうでない部分のラインがはっきりしていたので、あるいは掘り過ぎているかも知れない。足位の掘り込みの埋土の詳細を記録していないが、写真では掘り込み検出面にも赤色顔料が見えるようである。床面長1.4m、同幅3mほどである。

14号土坑（図版9、第14図）

3号土坑の北に隣接する。これも頭位・足位ともに幅が余り変わらず、床面長1.55m、幅0.5m近い規模をもつ。頭位は枕が削り出され、床には全面に赤色顔料が敷かれていた。

出土遺物

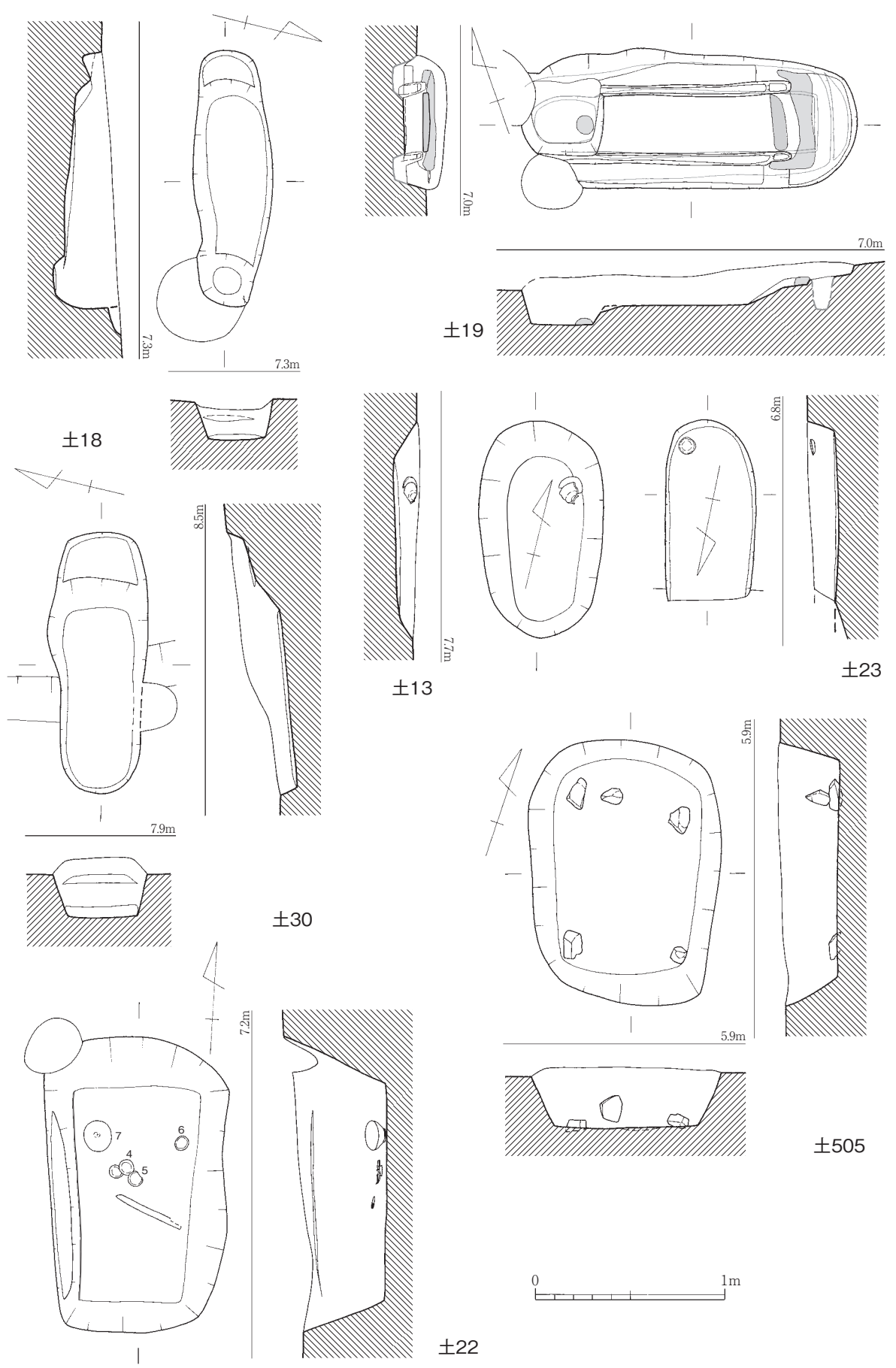
金属製品（図版49、第16図2・3） 2は右肩付近から出土した鉄剣で、全長15.9cm、身幅2.0cm、同厚さ0.3cmを測る。柄を除いてほぼ完存するとはいえ、刃部の欠損がいくつか見られる。明瞭な鑄は見えない。茎は1cmほどの長さで推測される短いもので、剣身と平行する方向に木質が残存し、柄縁にはさらに横方向に樹皮（？）を巻く。剣身の基部に直径2mmほどの目釘が2点、明瞭に見える。これを顕微鏡で観察すると、竹の断面のような無数の小さな繊維束（？）がランダムにあり、さらに平行に走る微細な筋も見える。植物質の目釘のようである。

3は残存長9.9cm、幅0.5～0.7cm、厚さ0.2～0.3cmの断面長方形となる鉄製品で、図上端は古くに欠損、下端は本来の形状を留めている。該期の鉤は他例のように断面が弧を描くものが普通であり、鉤にしては薄い感がある。この鉄製品は出土時に気付いていなかったことから、鉄剣の下に密着していたものと思われる。

15号土坑（図版8、第14図）

3号土坑の北に隣接する。おそらく頭位であったと思われる西側小口が1号溝によってすべて掘削されていて、残存する墓壙及び赤色顔料の分布から0.8m以上の長さをもっていたようである。幅は0.3m弱と小型である。

断面図に見るように足位に掘り込みがあり、その赤色顔料は濁っていた。



第15図 土壙墓実測図3：13・18・19・30・22・23・505号土坑（1/30）

18号土坑 (図版9、第15図)

8号土坑の東に近接する。これも東端部に柱穴が掘り込まれていて、足位の掘り込みが土壙墓に伴うものか若干の不安があるが、配置や形状から見て本来的な在り方としてよいのであろう。

西小口部に削り出しの枕があったが発掘を失敗している。また、床面に赤色顔料は敷かれていなかった。床面長1.25m、幅0.3mを測る。

19号土坑

(図版9、第15図)

8・9号土坑と12号土坑の間に位置する。検出時から東小口に青白色の混ざりの無い粘土が露出していて、特殊な遺構を思わせた。

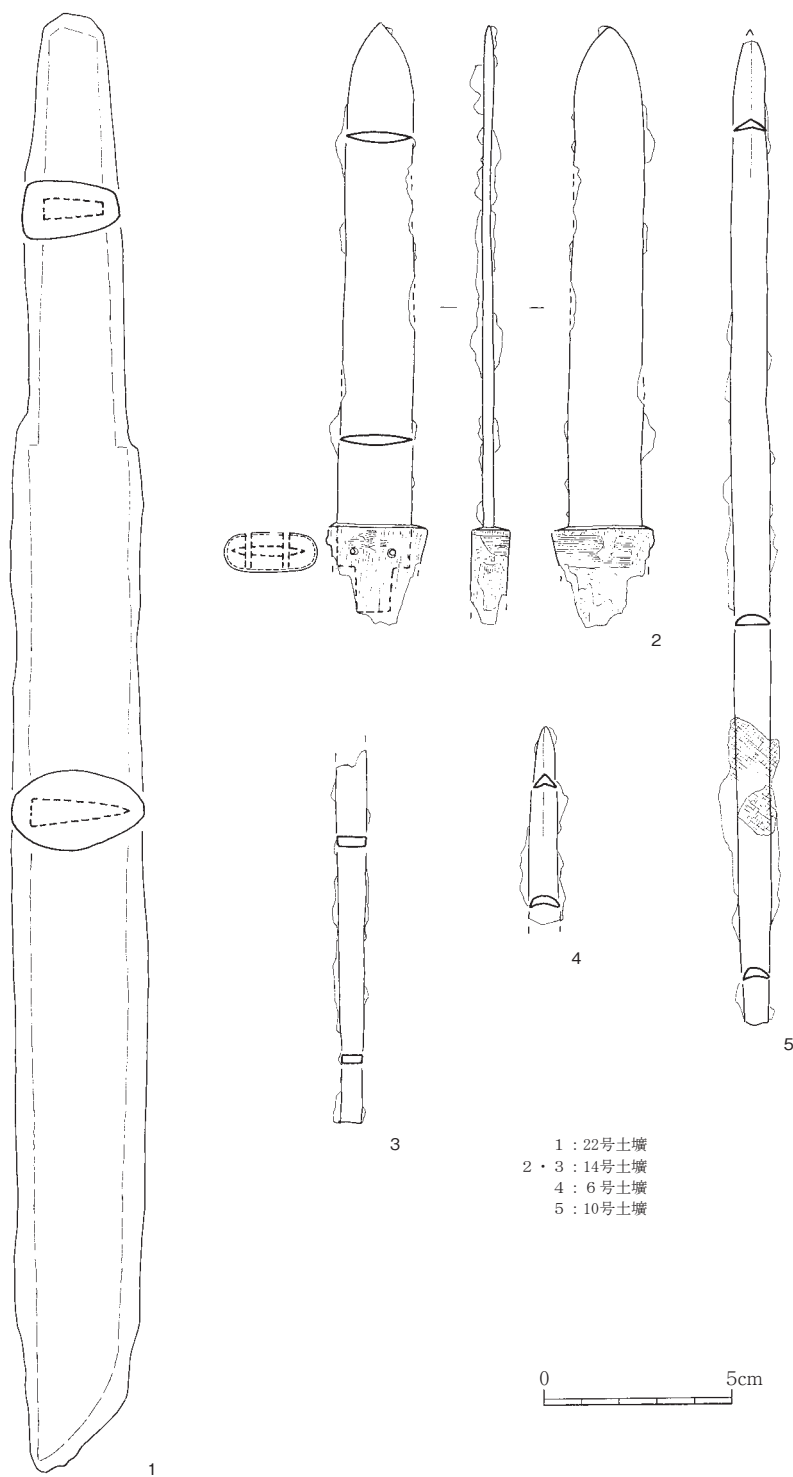
内部を床面まで掘り下げたところ、両長側辺で幅0.1～0.15mの直線的な落ち込みを検出したことから木棺墓であると判明したが、小口板の厚さは確認できなかった。

頭部付近では粘土の内側に10数cmの幅で赤色顔料が敷かれ、部分的に朱のような鮮やかなものもあった。また、足位の掘り込み埋土中にもわずかに赤色顔料が混ざっていた。

東西の小口間の長さは1.1mほど、両側板の間は0.3mを測る。これも成人を埋葬するには小規模である。

30号土坑 (第15図)

調査区東南隅、1号溝に一部を切られていた。西小口に削り出しの枕を付し、床面長1.7m、同幅0.35mほどの規模である。これは赤色顔料を使用していない。



第16図 土壙墓出土金属製品実測図 (1/2)

2) 中世の土壙墓

13号土坑 (図版10、第15図)

I区南西隅で2条の溝が屈曲し、さらにもう1条の溝が交錯しているが、その付近の北東部に位置する。壁の立ち上がりが浅く、土壙墓とするにはいささか不安がある。

長軸1.15m、短軸0.65mの長円形の平面をなし、床面は同0.9m弱、0.4mほどである。北東部の床面近くで土器が割って重ねられたような状態で出土した。遺構図に示した土器は高台をもち、写真では黒色土器のようであるが、実測図を示した土器はいずれも土師器で、かつ高台を失っていて遺構図に示した土器とは別であるかも知れない。

出土遺物

土器等 (第17図1~3) 1・2は体部が内彎する1/3ほどの残片。1は身が深くなって、椀となるかも知れない。胎土は精良といってよく、外面下半に指頭痕が残るが、内面にはごく丁寧な横撫でを施す。2は皿としてよからう。これは1に比して胎土・作りともやや雑な感がある。この2点は意図して赤味をもって焼き上げられているが、2は部分的に灰黄色となる。3は体部から口縁部にかけてわずかに内彎しつつも直線的に延びる椀で、高台を有するものと思われる。口縁部の1/4が残存、1ほどではないが、これも胎土良好で器表が荒れている。

22号土坑 (図版10、第15図)

8号土坑の北東に位置する。幅1m前後の10号溝と重複してそれを切るように図示しているが、この溝は深さが0.1mほどの浅い遺構で、所見では溝が新しい。方位はほぼ座標北に揃う。

床面の形状は四隅がしっかりと屈曲し、長さ1.1m、幅0.55~0.7mで北がわずかに広がっている。現状での深さは0.5m余である。木棺墓であるかも知れないが、土層観察を行っておらず、釘の出土もないことから断定はできない。

床面中央付近に小刀が、その北側から正置された瓦器椀、正置あるいは伏せられた土師器皿が4点出土した。

出土遺物

金属製品 (図版49、第16図1) 全長38.5cmの鉄刀である。肉眼では全体が一様に木質に覆われたようになっていて、折損した部分を見ると鞘が錆着しているようにも見える。X線CT画像では、背は関が明瞭に現れて鞘が残存するように見えるが、刃部では背で見られた鞘を思わせる薄い部分が関から鋒まで連続して刀身と鞘の判別ができない。鞘が残存しているものか、現段階では判断困難な状況である。両関となり、柄に目釘穴が見える。

土器等 (図版49、第17図4~7) 土師器小皿と瓦器椀である。土師器小皿は復元口径7.8~8.0cm、器高0.9~1.1cmの法量となり、外底面には回転糸切り痕を残す。7は高台付瓦器椀で完存する。器表を黒く処理しようとしたものか、部分的に体部が黒色化している。外面は横撫での後に粗い篋磨きを施し、内面では篋磨きを主体とするのだが見込付近は撫でて仕上げる。なお、体部内面中位に粘土紐の積み上げ痕と思われる痕跡が残る。

23号土坑 (図版10、第15図)

東西方向に掘削された2号溝の中程南側に位置し、この溝に切られている。1mほど南には瓦質

の甕を用いた埋甕が位置する。図示したように完形の土師器皿1点が正置して出土したが、北枕の頭位付近に置くのが通有の在り方であるが、ここでは出土位置が南端で、かつ床から0.1mほど浮いていることもあって、墓であるとの確信はない。

出土遺物

土器等（図版49、第17図8） 底部から体部にかけて丸く移行する土師器小皿で、口径9.2cm、器高1.6cmを測る。外面は全体に黒色化し、内面は暗灰色となる。器表が荒れているが、外底面には回転糸切り痕の痕跡が見える。

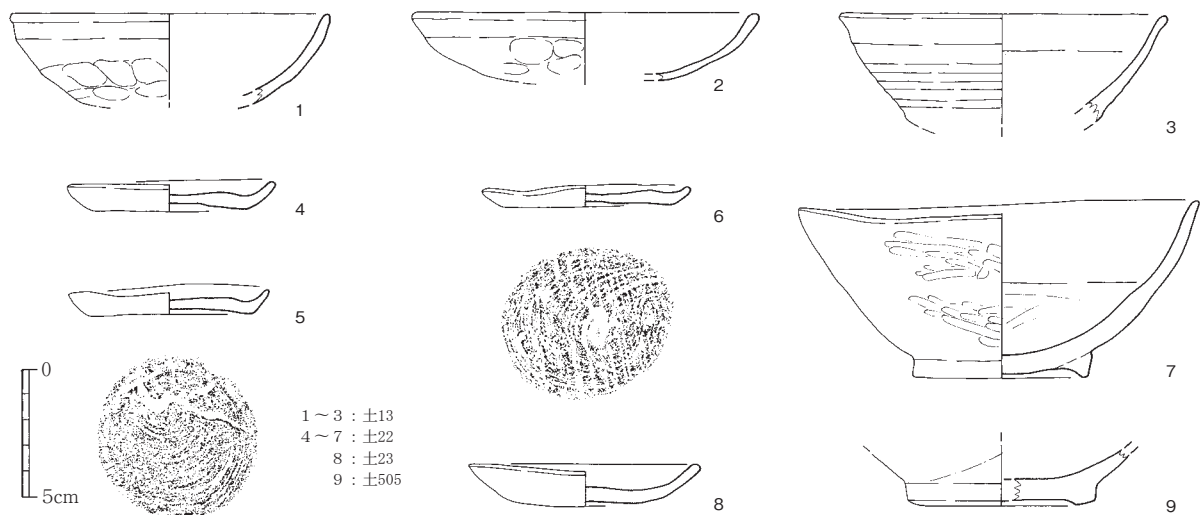
505号土坑（図版10、第15図）

後述する運河状の大型溝505号溝の埋土上に位置する。土坑の四隅に棺台状の石材が配置され、別に一つの石材が転落したような状態で出土したことから墓であろうと考えている。床面の規模は長さ1.1m余り、幅は0.65～0.8mで北が若干広くなる。奇しくも、22号土坑とほぼ同じサイズであるが、この土坑は隅丸となっている。

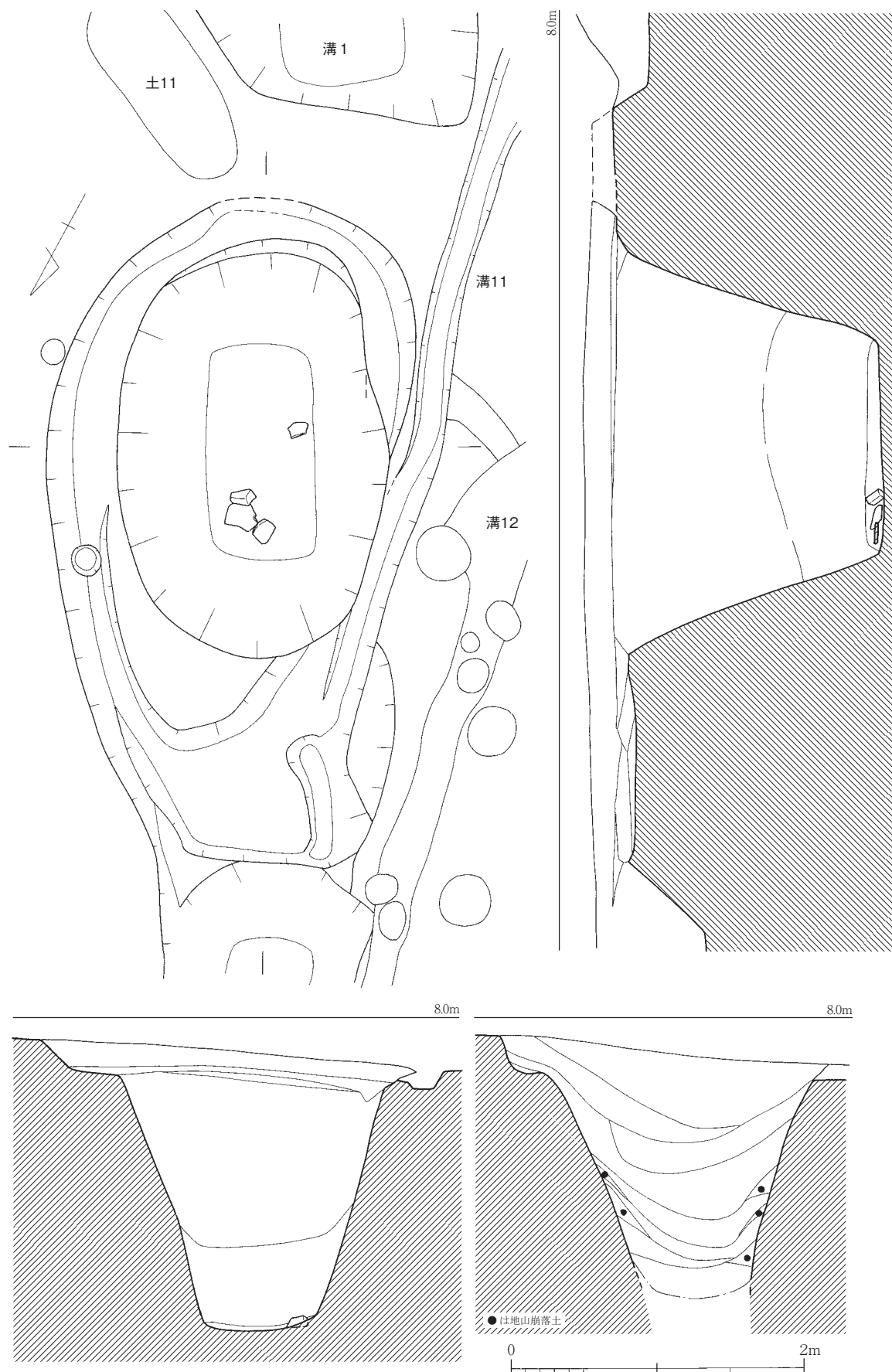
床面四隅に置かれた石材は正確に矩形の配置となっているわけではなく、平坦面を上面に据えているわけでもないようであるが、埋没の過程を考慮すれば拘泥することもないであろう。5点目の棺上に置かれた可能性がある石材は標石のようなものであったものと思われる。

出土遺物

土器等（第17図9） 低い高台、肉厚の底部をもつ白磁碗底部の1/2の残片である。見込外周に圈線を刻み、体部外面下端付近は露胎となる。玉縁口縁をもつのであろう。遺構は505号溝に後出することから、これも混入したものといえる。



第17図 土坑墓出土土器実測図（1/3）



第18図 土坑実測図1：1号土坑（1/40）

3 土 坑

土坑の中には明らかに井戸としてよいものもあり、数点の玉類を出土してあるいは土壙墓である可能性のものもお含まれている。不整形土坑で番号を付したものもあるが、出土遺物が乏しく、しっかりとした遺構でないものは説明を略する。

1号土坑 (図版11、第18図)

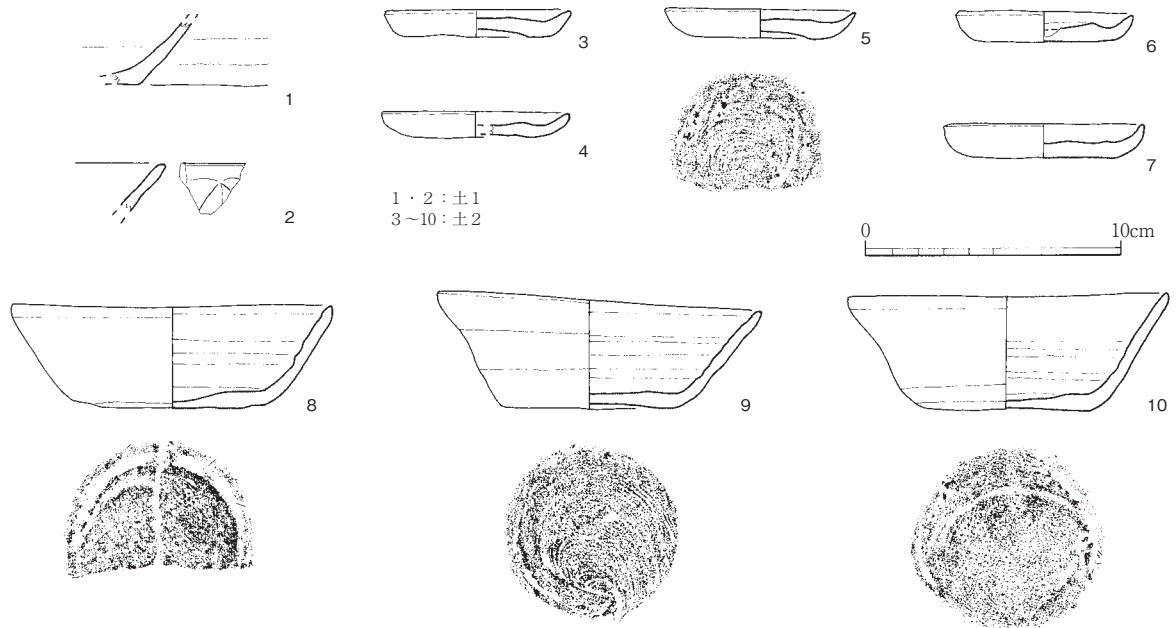
1区南東隅、1号溝中に位置する。より正確には、1号土坑の両小口部で1号溝が一旦途切れている。西側で12号溝とした小溝と重複するが、先後関係を確認できていない。土坑は上端で長軸2.8m、短軸1.9mの隅丸長方形に近い形状となり、床面ではそれぞれ1.5m、0.75mのかなり整った長方形となっている。

遺構の肩付近の形状が乱れているが、東長側辺南半では蓋受けのような深さ0.2m、幅0.3mの段がついている。この段は南小口から西長側辺へ続き、上端が西へ膨らむ付近でなくなっているが、この膨らみは崩落によるものであろう。北小口西側まで本来は続いていたものと思われる。それでも、北小口東半から東長側辺北半にかけては段がないことから、蓋受け以外の機能を考える必要がある。床面付近で数点の礫が出土したが、意図的なものを思わせるものではなかった。

壁際に地山の灰白色土が数層挟まっているのでそれを手がかりに分層したが、埋土はほぼ茶褐色土からなる。最上層からの3層は締まりがなく、比較的新しく埋没したものであろう。

出土遺物

土器等 (第19図1・2) 遺構の規模に比べて出土遺物は非常に少ない。1は器表が荒れた土師器皿で、1/4ほどの小片である。2は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の小片。釉は灰青色に発色する透明なものである。また、小片でありかつ体部片などのため図示していないが、8世紀の須恵器杯蓋、中世の須恵器甕、白磁小片などもある。



第19図 土坑出土土器等実測図1:1・2号土坑 (1/3)

2号土坑（図版11、第20図）

1区南東端1号溝の西、502号溝の北に近く位置する。直径0.6mほどの不整円形土坑で、深さは0.3mに満たない。

大小の土師器皿が正置あるいは伏せ置かれていて、ヨシ状の炭化物がそれらを覆っていたが、規則的な配列ではなかったので編み物で覆ったというのではないようである。土器は取り上げ時に15点まで数えたが、非常に脆くて細片化、復元不能であったものもある。

遺構の性格として、地鎮のような祭りを想起させるが、その場合には卑近な1号溝あるいは502号溝（=2・5号溝）に伴う可能性が考えられる。

出土遺物

土器等（図版49、第19図3～10） 上記のように細片化したものが多く、図示できたものは一部の大小の土師器皿である。小型のものは復元口径7.3～7.8cmほどで、器高は1.0～1.3cmである。

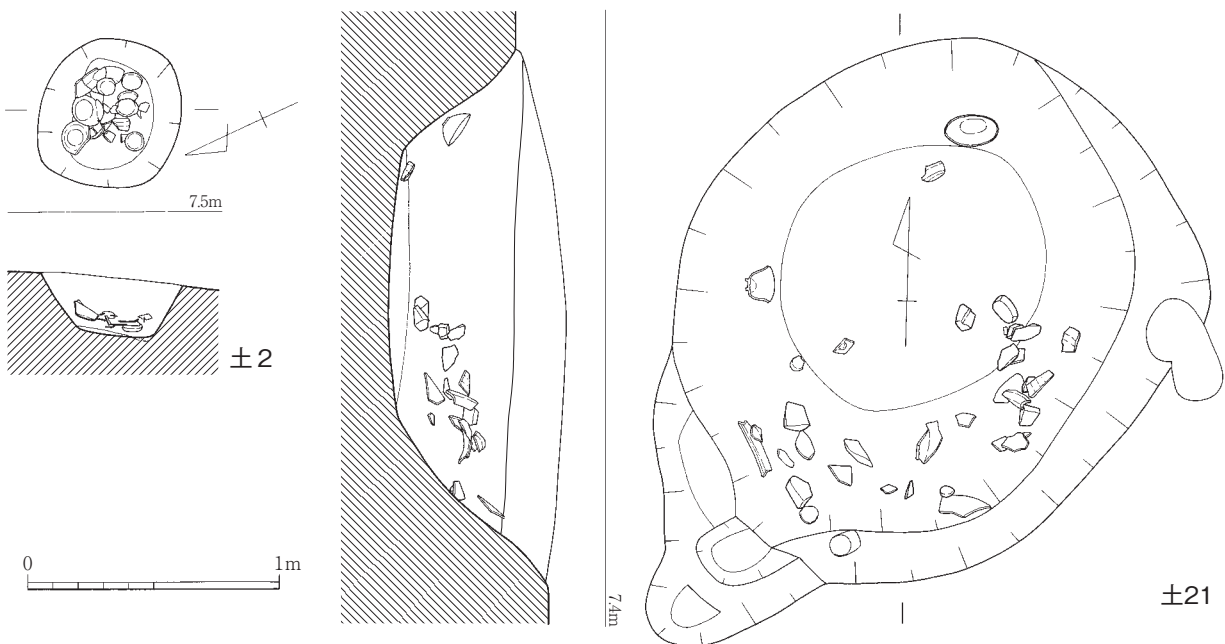
大型の皿は歪んでいるが概ね復元口径12.6～12.7cm、器高4.1～4.8cmを測る。これらはいずれも石英・長石といった通有の砂粒は非常に小さなもので、胎土精良といってよいと思われるが、赤褐色砂粒・金雲母の混入が目立つ。

16号土坑（図版12、第21図）

3号竪穴住居跡と重複する遺構で、平面的には先後関係を把握できていない。長軸1.6m、短軸1.4mほどの隅丸方形に近い平面形を有し、深さは最大で0.5mほどであった。東西方向で土層図を作成したが、全体に茶褐色土が堆積し、特徴的な土層は見えなかった。出土遺物は少ない。

出土遺物

土器等（第22図1・2） 1は東播系須恵器摺鉢小片で、肥厚させた口縁部を内側上方へつまむ。口縁部外面のみ色が濃くなる。2は白磁口禿皿の小片で、白濁した釉が掛かる。他に形骸化した高台がつく瓦器碗片、口縁部がかなり肥厚する東播産須恵器摺鉢片などがある。



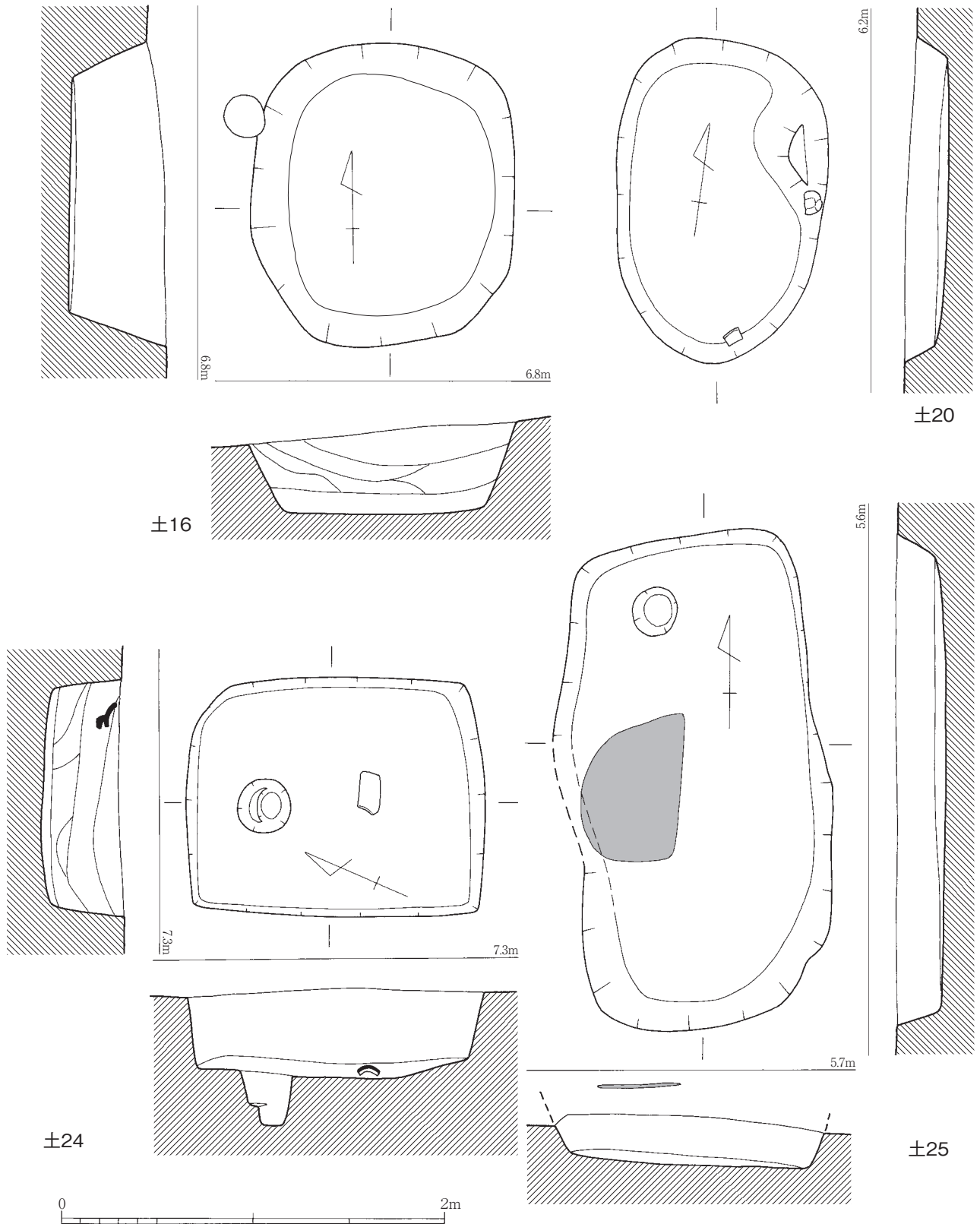
第20図 土坑実測図2：2・21号土坑（1/30）

17号土坑

4号溝南端のコーナー西側、段落ちの縁に位置する遺構で、調査時に土坑としたが包含層とするのが妥当であろう。個別図は掲載していない。

出土遺物

土器等（第22図3） C字形に外反する土師器甕の口頸部片で、約1/4が残存する。器表が荒れていて、調整痕は見えない。



第21図 土坑実測図3：16・20・24・25号土坑（1/30）

20号土坑（第21図）

1区北端、23号住居跡の西辺を切る土坑である、長軸1.7m、短軸1.1mの長円形平面をもち、深さ0.15mほどの浅いものであった。

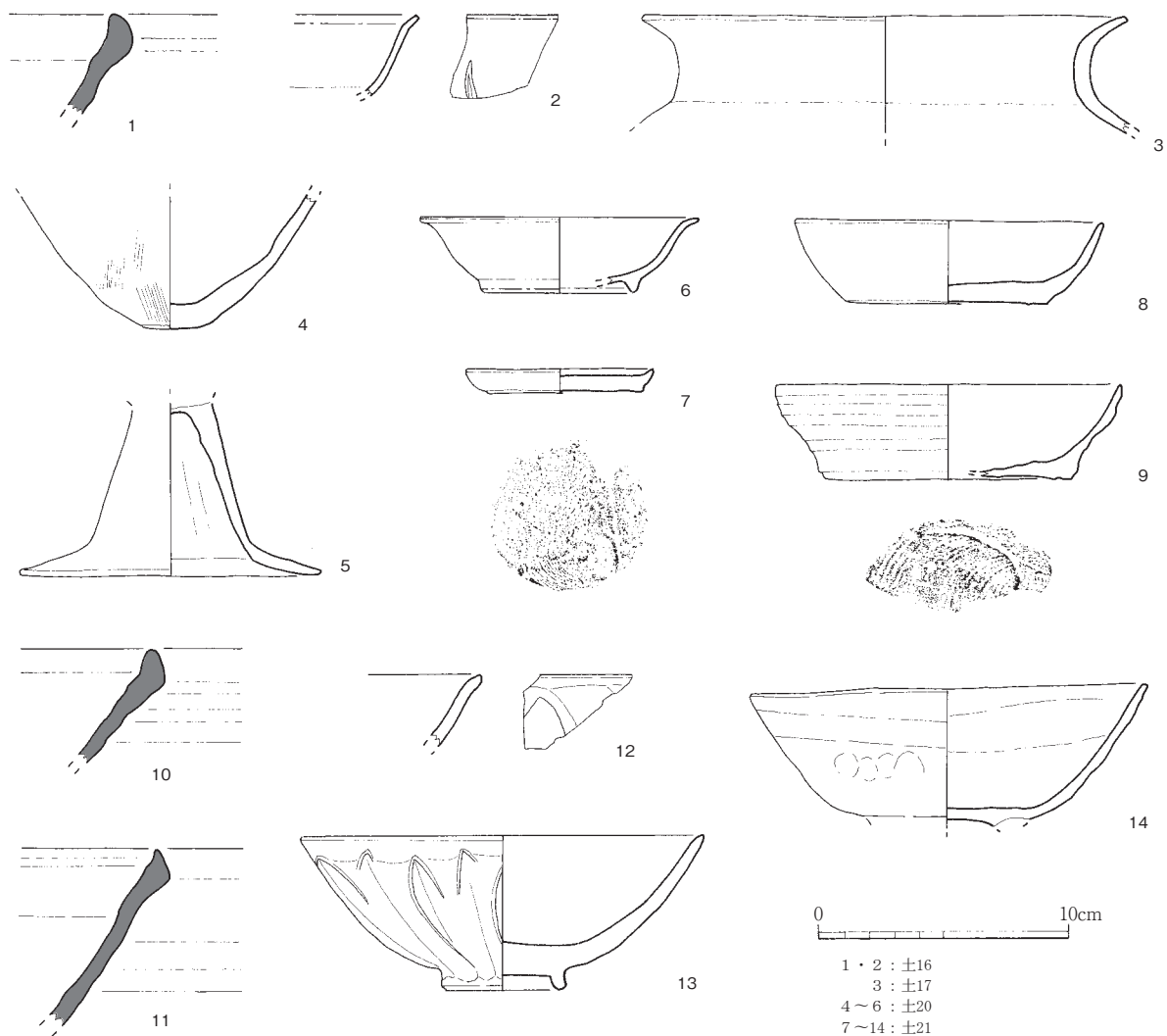
出土遺物

土器等（第22図4～6） 弥生～古墳後期に属すると思われる土器片が大部分であるが、8世紀代の須恵器高台付杯片などもある。4は尖底気味の底部で図示部はほぼ完周する。器表が荒れているが内外面に刷毛目が見える。5は高杯片で、柱状部はほぼ完周する。灰白色に近く、器壁が薄い。6は1/4ほどの白磁皿残片。体部は短く内彎し、口縁部は小さく外反する。壺付付近のみ露胎、他は高台内まで施釉されて白濁、光沢をもつ。貫入はない。

土器の他に直径10cmに満たない焼土塊が若干出土している。胎土は良好で、意図的な混入物は見えず、形状は不整とってよい。

21号土坑（図版12、第20図）

22号土坑（土壙墓）の南東に隣接する。これも浅い10号溝と重複し、図では溝を切るように示しているが、溝が後出する。



第22図 土坑出土土器等実測図2：16・17・20・21号土坑（1/3）

上端で1.9～2.2mほどの不整円形のプランを有し、床面は1mほどの円形に近い形状となる。深さは最大で0.7mほどである。この付近の地形は東から西へ向かってなだらかに降っていくことから、南西部の階段状の張り出しは雨水の流出入などで生じたものではないであろう。図示していないが、半ばほど発掘した後に東西方向で土層図を作成している。それによれば、最下層には10cmほどの厚さで青灰色粘土が溜まり、それ以上は暗茶褐色～茶褐色土が堆積していた。したがって、この土坑は湛水していた可能性があり、そうすれば南西部の階段状の張り出しはまさに階段であった可能性がある。出土遺物も南側から投棄された様を呈していて、この土坑の使用者が南側で生活していたことを示しているであろう。

出土遺物

土器等（図版49、第22図7～14） 7～9は土師器皿。7はやや歪んでいて口縁部のほとんどを欠くが、復元口径7.6cm、器高1.1cmの小皿。胎土に金雲母が目立つ。8は底部が完周し、復元口径12.4cm、器高3.4cmとなる。胎土に赤褐色粒が目立ち、体部は内彎して立ち上がる。9は底部の1/3、口縁部の1/4ほどが残存。復元口径14.0cm、器高3.9cmを測る。体部下端を強く横撫でして凹ませ、上半は内彎する。外面に水挽き痕が目立つ。これら3点はいずれも外底面に回転糸切り痕を残す。

10・11は口縁部を断面三角形に肥厚させ、口縁部外面が黒色となる東播系須恵器摺鉢片。いずれも内面は横撫で痕が良好に残存していて、余り使用されていないようである。

12・13は龍泉窯系蓮弁文椀で、12は濃い灰黄緑色釉が掛かる小片。13は底部の3/4、口縁部付近の1/3ほどが残存。細めの鎬蓮弁を刻み、釉は灰青色に発色する。

14は体部から口縁部にかけて彎曲が乏しい瓦器椀で、高台を除いて完存する。口縁部付近の内外面が黒色系、その下位が灰白色、体部中位以下が暗灰色～灰黒色となる。

石製品（図版56、第39図4・5） 4は石英斑岩を使用する。積極的に使用の痕跡といえるものを認めることはできないが、全周が滑らかとなる。5は不整形な花崗岩で、これも全体が滑らかになる。

24号土坑（図版12、第21図）

1区北東部、17号住居跡の中にあつて、住居跡に後出する土坑である。長軸1.55m、短軸1.2mで隅のしっかりした長方形平面をもつが、北隅のみが丸みをもつ。深さは0.4mほどである。

東西方向で土層を観察したところ、最下層に締まった粘質土が5cmほどの厚さで一様に体積しているが、それ以上は余り締まりのない埋土であった。床面で丸瓦が置かれたような状態で出土。なお、図示した柱穴は17号住居跡の主柱穴の一つである。

出土遺物

土器等（図版50、第23図1～3） 第23図1は胎土良好で、灰赤褐色となる土師質の風炉底部片。外面下端には断面三角突帯を2条巡らせて、その間に縦位の沈線を刻んで装飾する。外面が煤けていて、拓本の右端は孔となっている。

2は胎土が比較的良好で黄褐色となる平瓦片。凸面は斜格子の叩き痕が残り、凹面は撫でるようである。3は床面出土の行基葺瓦片。全体に焼成不良で器表の状態が悪いが、凹面には側縁に直行あるいは斜行する糸切り痕と思われる条痕が無数に残る。伏せ置いた際に両長側縁がすべて接地する。

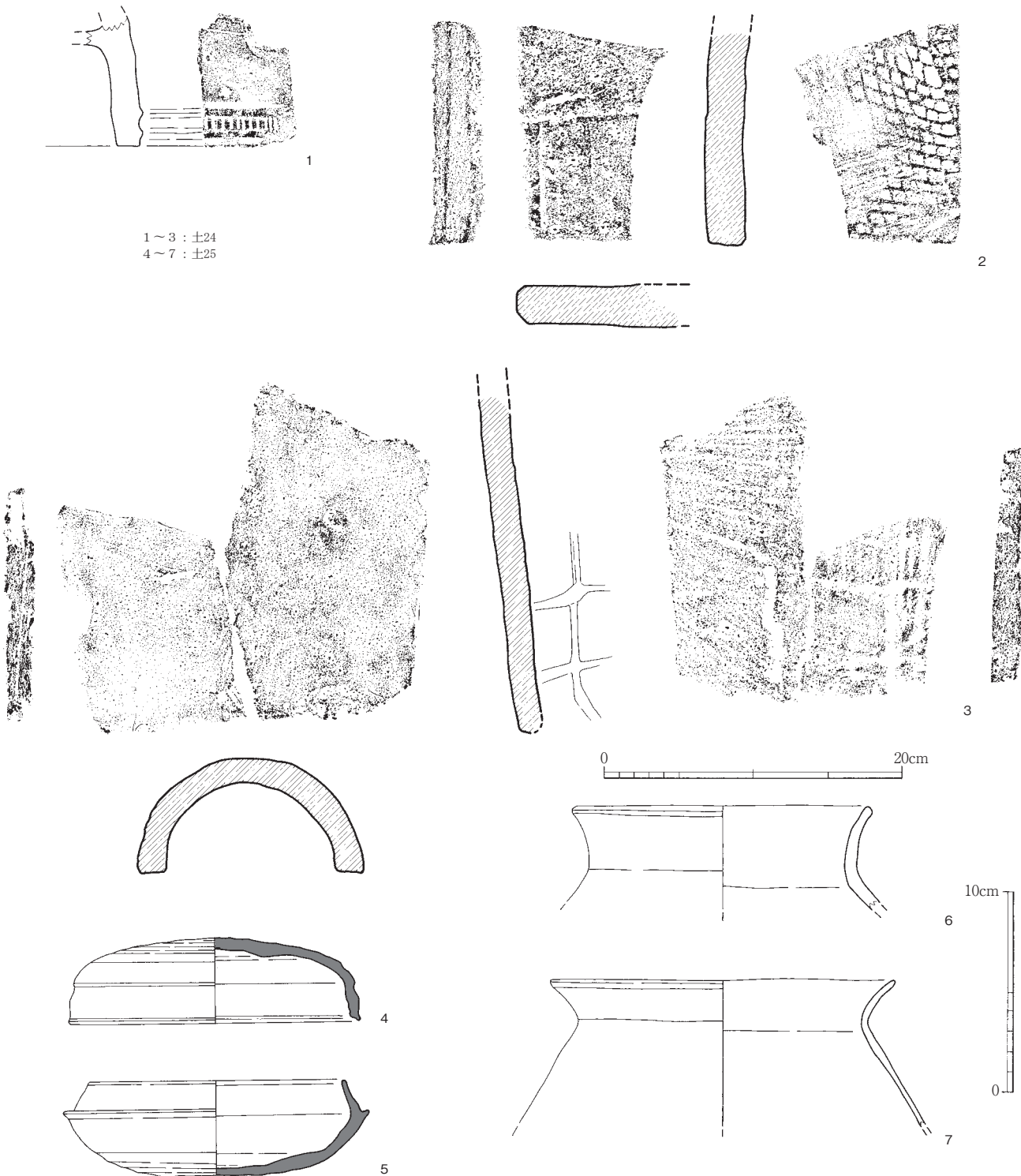
ここでも直径10cmに満たない焼土塊が若干出土している。スサ入りのようで形状は不整。

25号土坑（図版13、第21図）

14号住居跡と重複し、それを切ると判断された大型の土坑で、長軸2.4m、短軸1.4mの長方形平面をもつ。深さは0.2m強である。この辺りは包含層が覆っていて、遺構の検出作業に手間取った部分である。この土坑の検出面上で板状の炭化材の広がりを見たが、この土坑に伴う可能性があるとはいえ、全体の形状を確認できていない。

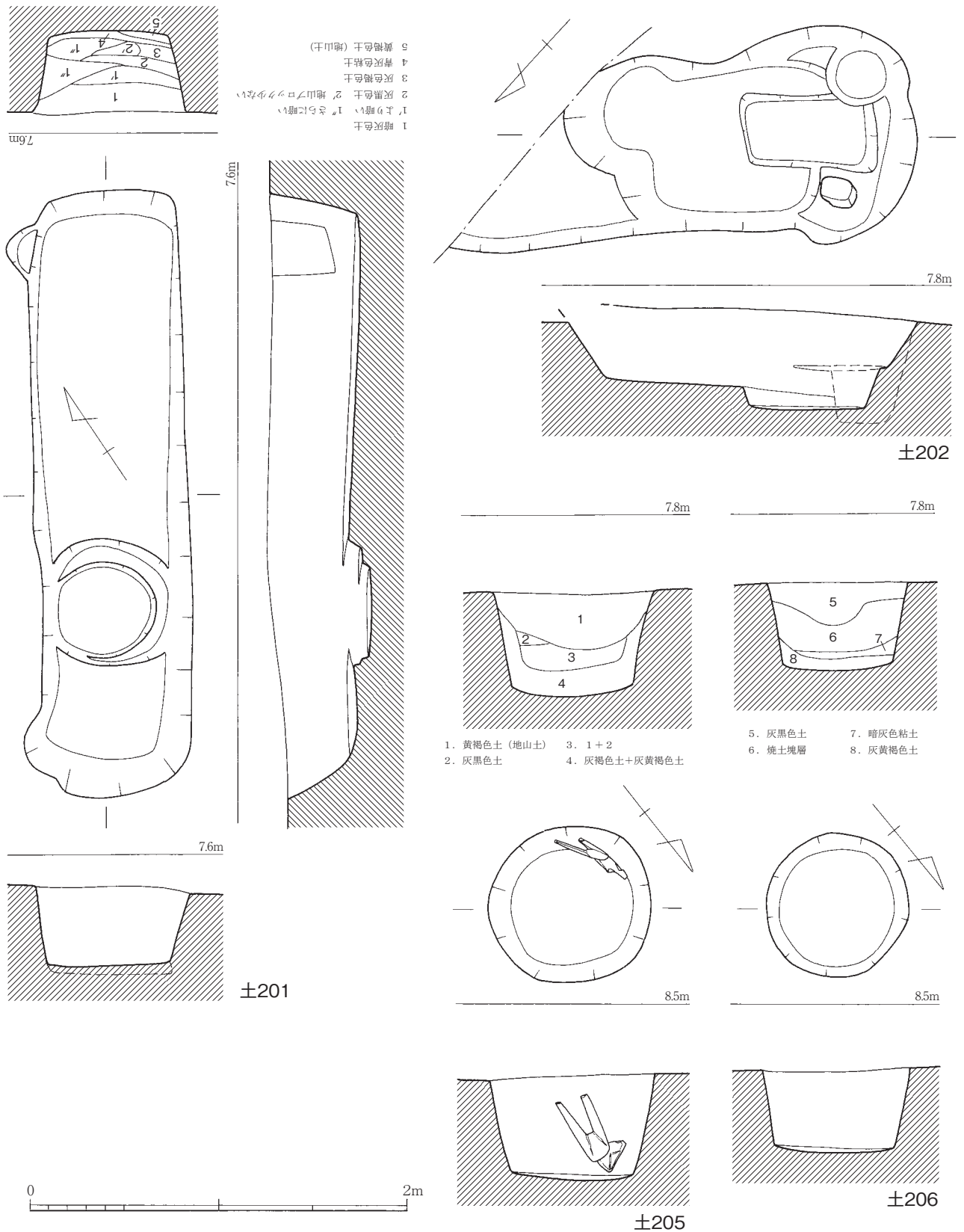
出土遺物

土器等（図版50、第23図4～7） 4・5は須恵器、6・7は土師器である。4は口縁部付近の1/3が残存。胎土は比較的良好で、丁寧に作られている。天井・口縁部界もしっかりしていて、口端部



第23図 土坑出土土器等実測図3：24・25・27号土坑（1/3）

に面をもつ。5はほぼ完存するといえ、意図的なものか確信を持ってないが受け部をほぼすべて欠いている。焼成が甘く、器表が荒れているが、外面の回転篋削りは丁寧に施されるようである。また、蓋に比べて後出する形態である。6は口縁部の1/2が残存するが、器表が荒れている。口縁部の外反が弱く、高く立ち上がる。7は頸部付近の1/4が残存。口端部の大部分を欠失していて、



第24図 土坑実測図4：201・202・205・206号土坑 (1/30)

本来の形状を保っているか確信が持てない。これも器表が荒れている。

201号土坑（図版5・6、第24図）

201号建物跡内にあり、長さ3.2m、幅0.8m、深さ0.4mほどの整った形状の長方形土坑である。建物跡との関係でいえば土坑の長軸は建物跡の各辺と若干のずれがあり、平面的にも北東辺に偏して位置する。南小口に近い位置の床面の落ち込みは、遺構検出時に気付いておらず先後関係にあるものかどうか確認できていない。

土層の観察では上方に暗灰色土、中位に小炭を含む灰黒色土、床面近くに厚さ2cm前後の暗青灰色の混ざりの無い粘土層が堆積していた。

出土遺物はない。

202号土坑（図版5・6、第24図）

やはり201号建物跡内にある土坑で、一部が調査区外へ続くが主要な部分は発掘している。長軸は2.5mまでを検出、幅は1m弱である。複数の遺構が重複するようで内部は3段になっていて、南西端の最深部は0.7×0.4mの整った長方形となり、その部分の深さは0.1～0.2mであった。

焼土塊や土器が少量出土している。図示していないが、1単位9条以上のスリ目をもつ瓦質摺鉢片がある。

203号土坑（図版13、第25図）

2区の南東端、201号溝を発掘する中で判明した遺構で、溝検出時に土坑には全く気付いておらず平面的には先後関係を確認できていない。土層を見ると、202号溝は図左上に明瞭に現れていて、調査時の所見として201号溝の埋土は土坑最上層の3層に対応することから、土坑廃棄後も溝は機能していたようである。ただ、この2区とした調査区自体、建物跡や土坑群を配置するために弥生～古墳時代の遺構を破壊して平坦面を造成したと考えられることから、203号土坑と201号溝はほぼ同時に存在したと見てよいと思われる。土坑埋土に粘土層・砂層といった顕著なものはなく、炭や焼土等もない。

土坑は床面で長さ1.4m以上、幅0.8mの整った隅丸長方形プランとなるが、上端は乱れている。深さは1.5m。西小口の階段状の張り出しはしっかりしていて、意図を持って設置されたものようである。

出土遺物はない。

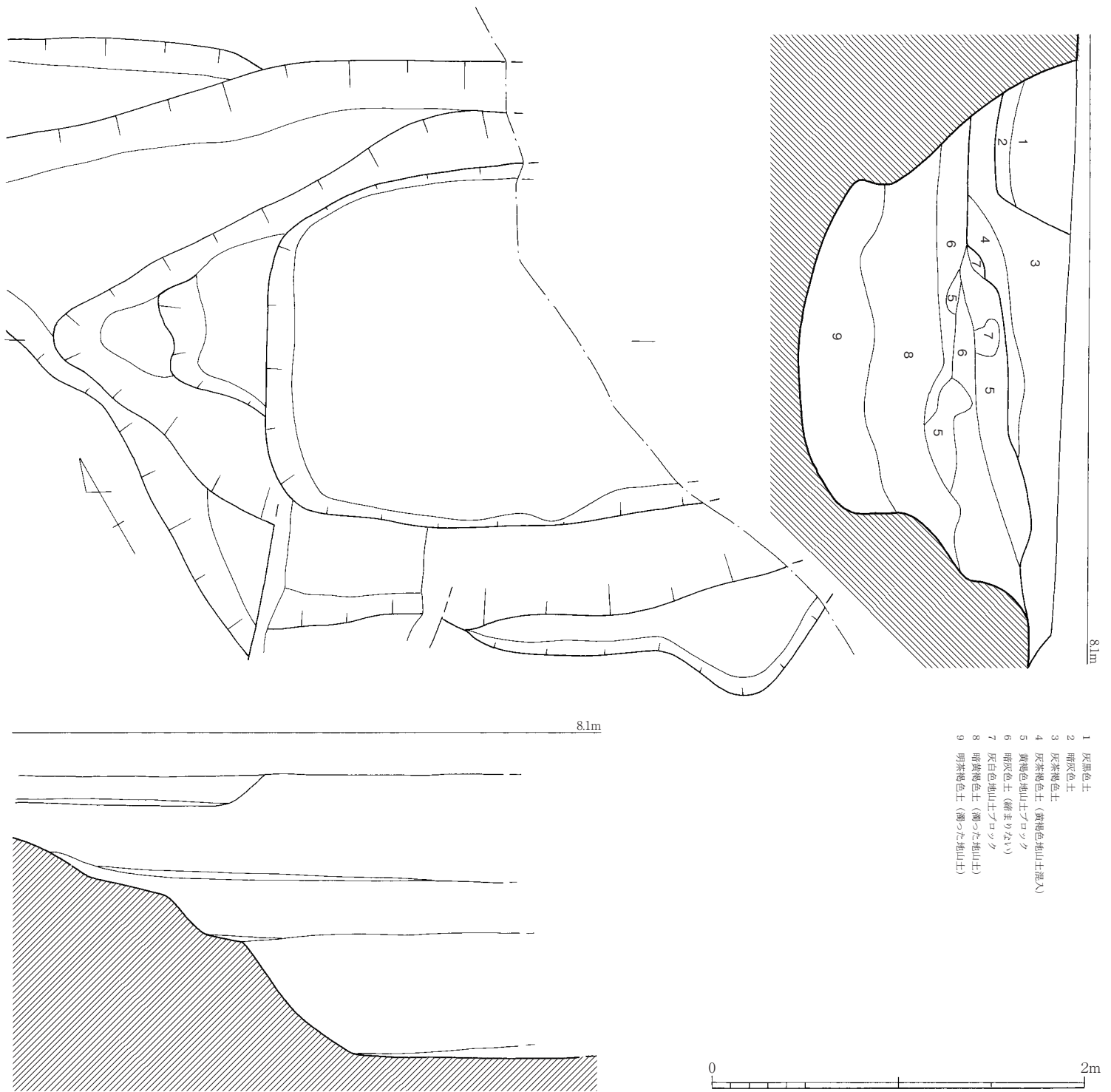
204号土坑（図版6、第26図）

201号建物跡内の北西隅にある。1×1.6mほどの整った長方形プランを有し、深さは最大で0.3mほどである。埋土中に鉄滓の小塊を多く含んでいた。図示に堪える土器の出土はない。

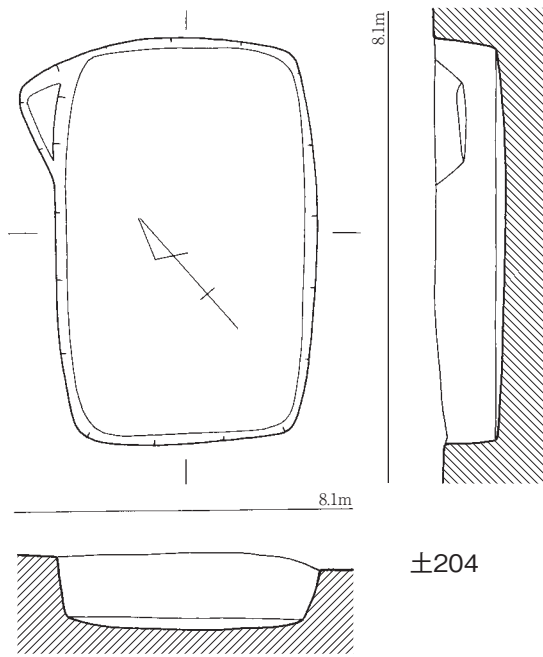
出土遺物

金属製品等（第27図・第28図3） 第28図3は最大幅1.8cmの板状の鉄片で、図上下を欠損。左右側縁は丸みをもっていて、表面は片面がやや膨らみ、他方は平坦な面となる。

第27図には出土した鉄滓を重量の順に示した。図には重量の重いものから順に掲載、ただし右下には軽いものから5箇を選んでいる。この中で、8には炉壁片が付着、31に示した個体は見た目は鉄滓であるが、磁石に反応する。

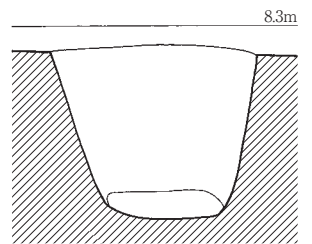
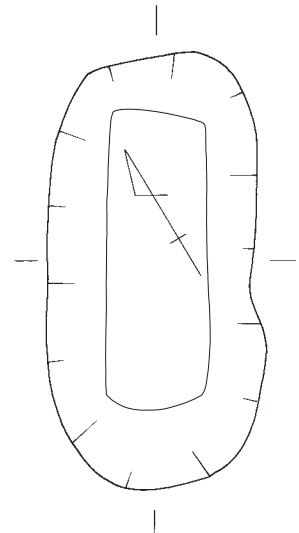
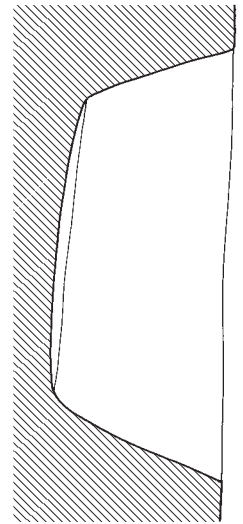
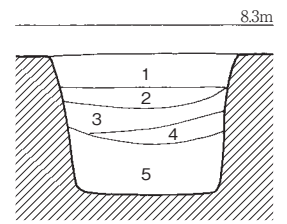


第25図 土坑実測図5：203号土坑 (1/30)

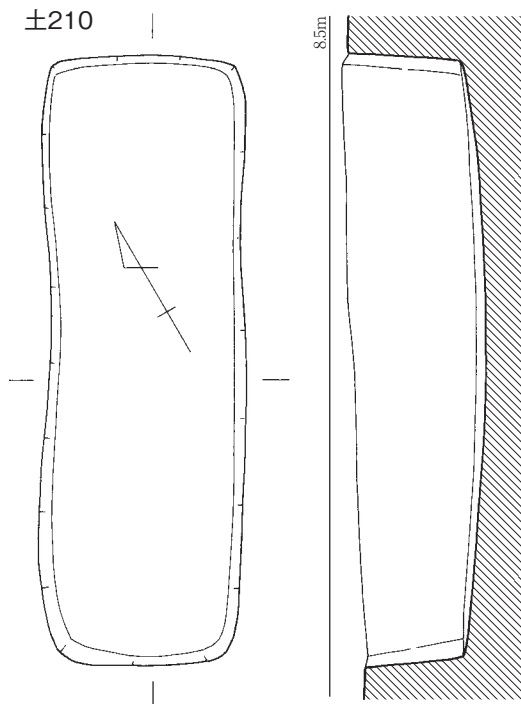


±204

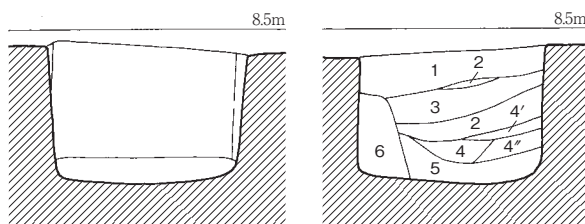
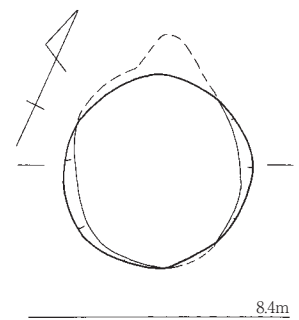
- 1 暗褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 暗灰色土
- 4 1・3 灰黄色土混ざる
- 5 灰黄色土、暗褐色土混ざる



±207



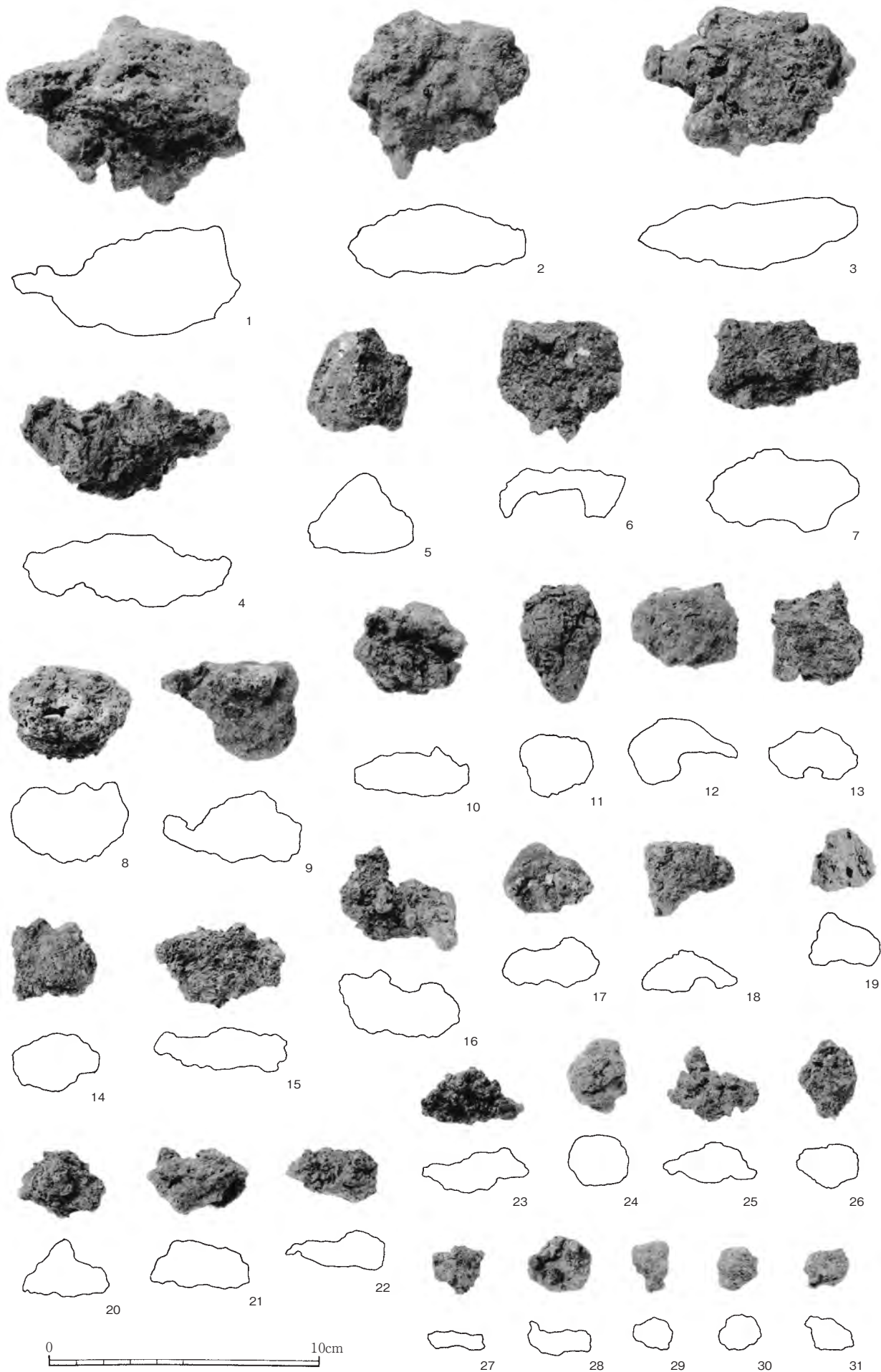
±210



- 1 灰褐色土
- 2 灰黒色土
- 3 茶褐色土
- 4 灰褐色土
- 4' 小炭混入 (多い)
- 4'' 小炭混入 (少ない)
- 5 茶褐色土
- 6 5に似るが
焼土塊・炭少々入る

±209

第26図 土坑実測図6：204・207・209・210号土坑 (1/30)



第27図 204号土坑出土鉄滓実測図 (1/2)

図示した31箇の鉄滓の中、最も重い1は178.2gを測り、計量した中で最も軽い31は2.2gである。この2点を除いた内訳は10g以下が4点、10g台11点、20g台4点、30g台2点、40g台3点、50g台2点、60g台1点、110g台1点、120g台1点となる。

これらは鍛冶滓と思われ、鍛冶炉内で発生するものであろう。V区南端付近（V-4・5区）で直径0.2～0.4mの鍛冶炉3基を検出しているが、今回の調査区では赤変硬化した被熱部が遺構と遊離した状態で処々で検出されているものの、明瞭な炉跡を検出していない。また、I-2区ではその被熱赤変した箇所もなかった。これだけの鉄滓を発生するのにどれほどの作業量が必要なものか当がつかないが、少なくとも卑近な場所にあった炉で発生した残滓をこの土坑に廃棄したということであろう。

205号土坑（図版13、第24図）

202号建物跡の南東近くに位置し、206号土坑と1.1mの距離をもって並ぶように位置する。直径0.9mほどの円形土坑で、深さは0.6mを測る。上層には厚く地山の黄褐色土が堆積し、最下層には中位の層を包み込むように粘質で締まった埋土が観察された。

出土遺物

焼土塊・土器小片が若干出土するが、土器で特徴を窺えるものは8世紀の須恵器杯蓋口縁部の小片だけである。

金属製品（図版50、第28図1・2） 出土状態を図示したように、大型の鉄製品2点が壁に添った位置で重なりかつ立った状態で出土した。土層図に対応させれば外周の粘質土の中にあったと思われるが、調査時にそこまでの確認ができていない。1は両側縁を折り返した鋤先の幅広い部分に、折損したU字形の先端部を差し込んだまま錆着したもの。両者の折損部が一致せず、同一のものかどうかは確認できない。最大幅は24.4cmである。2は刃部が長方形となるもので、鋤先と呼ぶ方が妥当であろうか。図左側はほぼ完存に近く、残存長は50cmほど、刃部の幅は約16cmほどである。現状で袋部はすべて埋もれている。

206号土坑（図版13・14、第24図）

直径0.75m、深さ0.4m余りの円形土坑である。中位に厚く焼土塊が堆積し、その下位に混ざりの無い暗灰色粘土が薄く堆積していた。

出土遺物はない。

207号土坑（図版6、第26図）

202号建物跡内の南西隅に位置する。上端は長さ1.7m、幅0.8mのやや不整な長方形を呈するが、床面は長さ0.6m、幅0.4mの整った隅丸長方形となる。埋土に焼土塊が混入する。

出土遺物

土器で特徴が判るものは古墳時代後期の須恵器杯体部片である。他に数cmの大きさの焼土塊がいくらかある。微砂粒を含むとはいえ、胎土は概ね精良でスサ入りである。

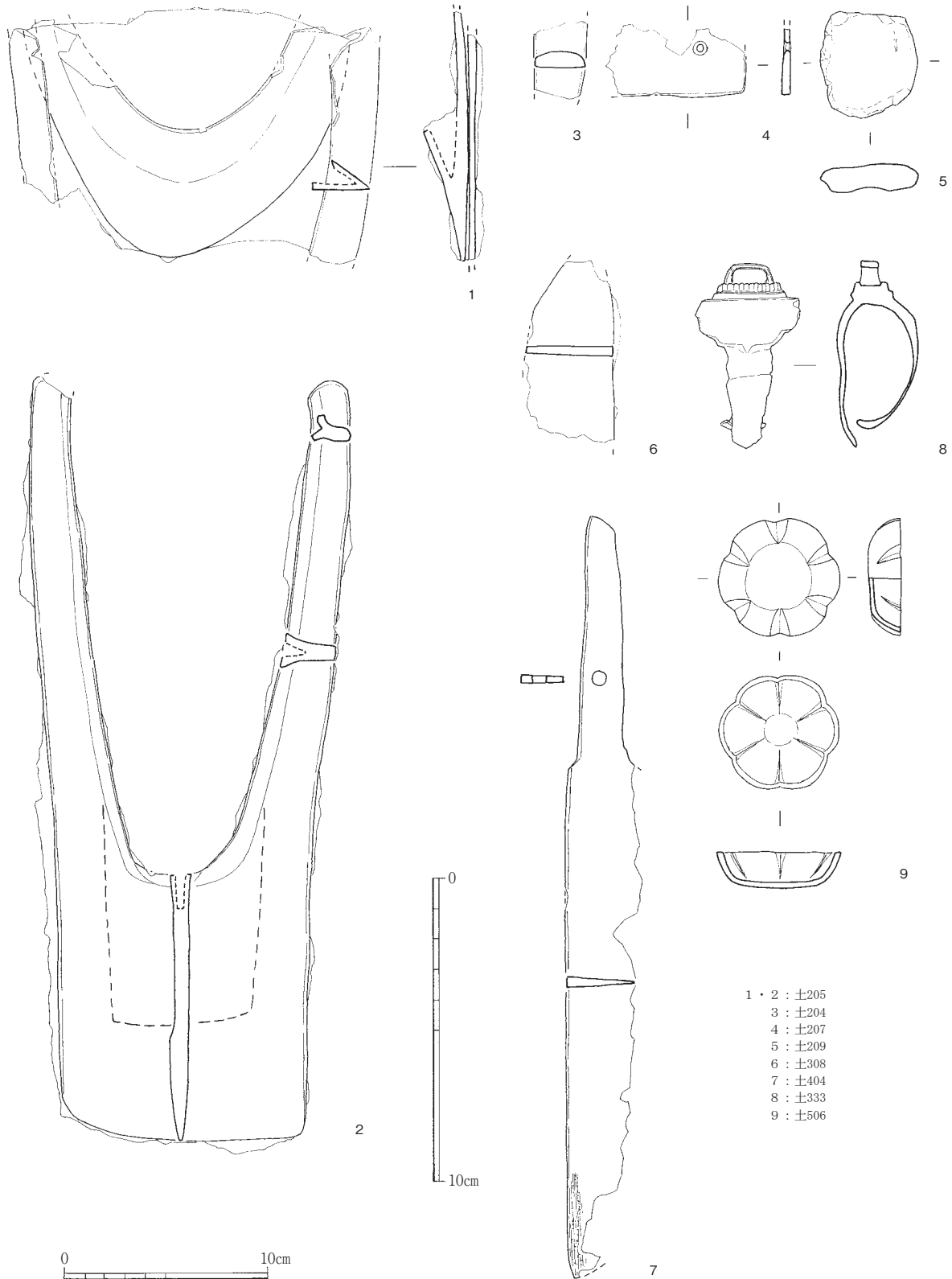
出土遺物

金属製品（第28図4） 最大厚0.3cmの板状鉄製品で、直径1mmの円孔がある。

208号土坑（図版15、第29図）

後述する211号土坑（地下式土坑）の入口、豎坑である。上端は直径0.8mの不整円形を呈し、深さは1.1mを測る。床面北西部に階段状の掘り込みがあって、211号土坑へ通じていた。

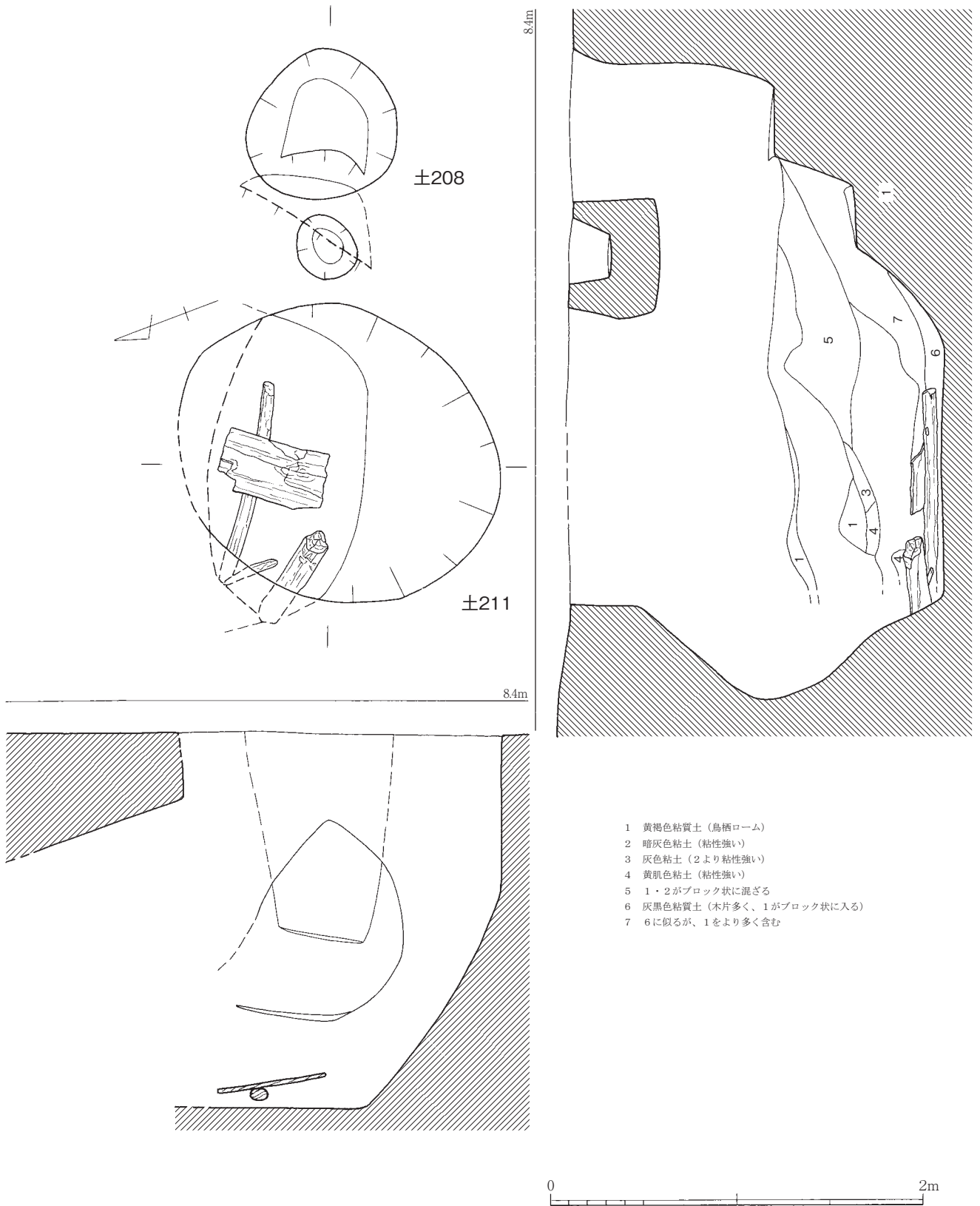
これも焼土塊・土器小片が若干出土。土器で特徴が判るものは古墳時代後期の須恵器杯口縁部片である。



第28図 土坑出土金属製品等実測図（1/4、1/2）

209号土坑（図版14、第26図）

202号建物跡の南西に位置する直径0.75m、深さ0.75mの円形土坑である。土層図を作成していないが、床上10cmの付近で全面に数cmの厚さの白色粘土が敷かれていた。



第29図 土坑実測図7：208・211号土坑（1/30）

出土遺物

金属製品（第81図5） 不整形の鉄片で、幅3.2～3.5cm、厚さは最大で0.8cmほどである。外周は折損したものではないようである。

土器等 図示していないが土器小片が若干出土していて、中に備前焼摺鉢片がある。1単位4条以上の幅広く浅いスリ目が残る。

210号土坑（図版6・14、第26図）

203号建物跡内にある。長さ2.4m、幅0.8mの整った長方形平面となり、深さは中央付近で0.55mほどと最も深くなり、四壁はほぼ直に立ち上がっている。

埋土には焼土塊や炭が多く入っていた。

出土遺物

土器等（図版50、第30図1・2） 焼土塊の中に羽口あるいは木材によると思われる圧痕を残すものがあり、2点を図示した。焼土にはほとんど砂粒を含まず、スサが多く入っている。1は2個の圧痕が1cmほどの間隔で並んでいて、図左側の大きな圧痕は直径4cmほどに復元できる。2では同6cmであった。

焼土塊に溶融したような痕跡はない。

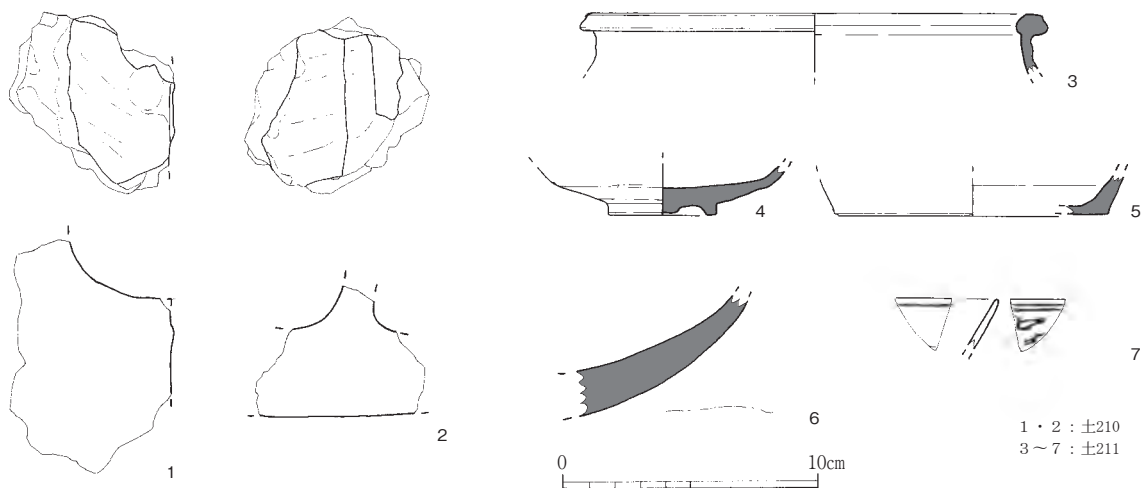
211号土坑（巻頭図版2・図版15、第29図）

208号土坑を入口とする地下式土坑である。掘り下げる過程で北東部が滞水して空洞になっていることが判明したため、崩落を危惧して人力での発掘は一部に留めた。竪坑の208号土坑は直径0.8m、深さ1.1mの円柱状の形態となり、211号土坑に向かって床面との間に1段のステップを削り残す。段差は0.4～0.5mと現在我々の周辺にある各種階段（概ね0.2m前後）に比べるとかなりの比高がある。

床面は一部を確認したのみであるが、図示したように丸太の上に板が置かれた様を確認できた。検出面からの深さは約2mを測る。また、空洞部分の辺りを重機で掘削して遺物回収を試みたところ、以下で報告する双盤・鉄製茶釜などを回収することができた。

出土遺物

金属製品（図版50～52、第31・32図） 第31図はいわゆる^{しんなり}真形釜と呼ばれる形状の鉄製茶



第30図 土坑出土土器等実測図4：210・211号土坑（1/3）

釜・蓋である。発見時は割れていて、すべての破片を回収できていないが全体を窺うことは十分可能である。口頸部は彎曲しつつ立ち上がって直立し、端部は小さく内側へ引き出される。頸部下には突線を1条巡らせ、その下位から鏝にかけて枝に咲く梅花を陽刻で描いている。肩部から鏝にかけてはほぼ寸胴といってよく、鏝から下位は強く内彎して平底の底部へ続く。

底部外周には幅5mm、高さ1mmほどの煙返しと呼ばれる突線を巡らせる。また、同外面中央に直径2.5cmの突線があって、その内側が他の部位に比べて半分ほどの厚みとなるが、ここが鑄造時の湯口となる。

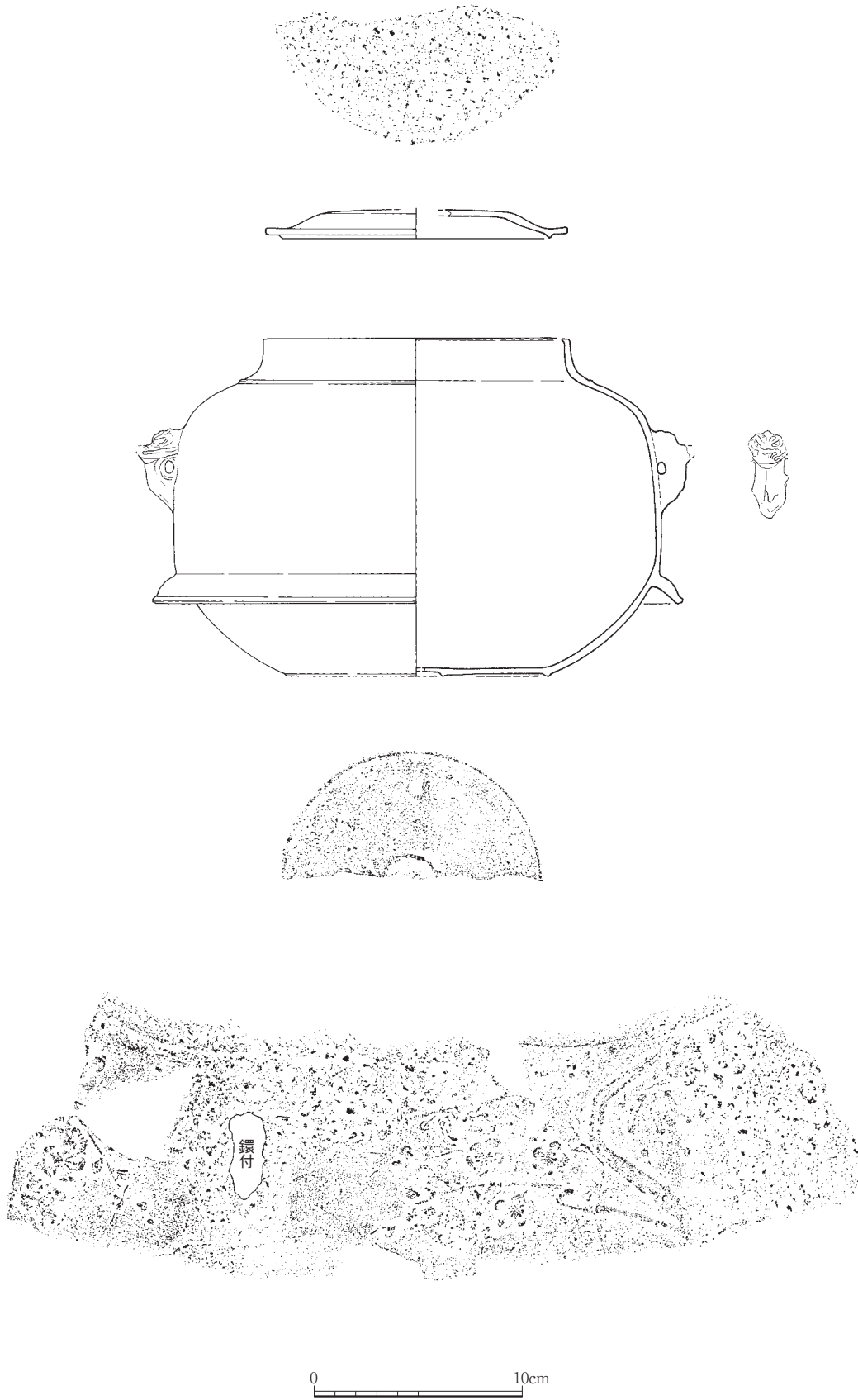
鑲付（耳）は獣頭で、これらの点から見ていわゆる芦屋釜の作品である可能性が考えられる。蓋は古代の須恵器蓋のような形状で、小さな返りがつく。

第32図は双盤である。2点は重なった状態で重機によってすくい上げられ、出土時は金色であったが、その後黒化した。1は上面径19.2cm、底径20.7cm、高さ5.5cmを測る。上面は外縁に幅の異なる突線2条を巡らせ、その0.7cm内側に2条の突線、そしてさらに内側1.1cmのところを一段高くして打面を作る。打面径は13.9cmである。一鑄で造られた耳は底部側へわずかに傾き、孔は正円ではない。また、耳の下端は右側では一定の厚みとなるが、左側のそれは薄くなる。底部は断面三角形に肉厚となるが、外面は曲線を描く。なお、この打面は平らである。円筒形となる体部内面に微細な線が見え、挽き中子という技法で造られたようである。2は上面径19.0cm、底径21.1cm、高さ5.5cmである。上面の構成は1と同様であるが、これの方が突線が太く、二重突線の間隔が広い。そのため、打面径は12.8cmと小さくなっている。両耳の形状は似るが、孔の形が異なる。底部は1と異なって薄い。打面は使用によりほとんど凹んでいて、打面周囲には亀裂が入る。それとともに、体部・打面ともに内面は磨ったような跡が全面に残っていて、内外面が使用されたようである。これに比べれば、1は未使用といってもよいかも知れない。また、2は図下端部付近の形状・厚みが不整となっていて、鑄造時の湯口を容易に想定できる。1の同じ箇所は2ほど破綻しておらず一見してもわからないが、よく見ると長さ6cm、高さ0.2cmほどの範囲で外周の鑄上がり異なっていて、やはり湯口であることがわかる。

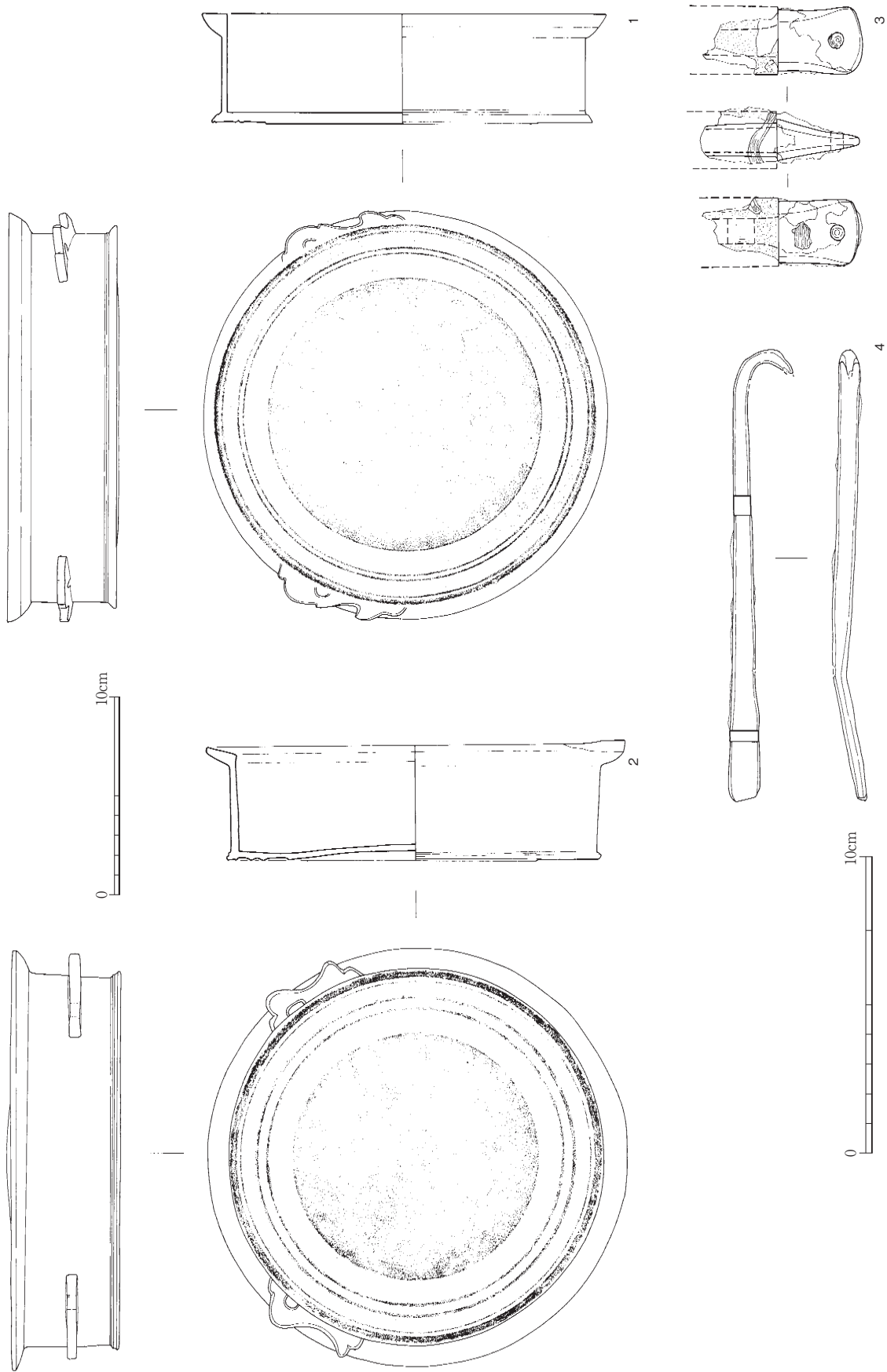
3は双盤2の内面、打面と体部の隅に銹着していた鉄製品で、長さ2.8cm、幅2.3cm、厚さは図上端で1cmほどとなる。図下端は綴じ合わされていて、すぐ上の目釘で中に差し込んでいた木をとめているものであろう。鉄の表面に黒色の付着物があり、木質部にも滑らかとなる茶褐色部があって、被覆されていたようである。

4は出土の経緯がわからない鈎状の鉄製品。全長15.2cmを測る。先端は大きく彎曲し、端部は尖っていたようであるがわずかに欠損するようである。上に示した図では、基部は幅広く薄く、先端近くは幅が薄く厚くなっている。下図で曲がる部分は上面が一部欠損していて、出土時の変形であろう。

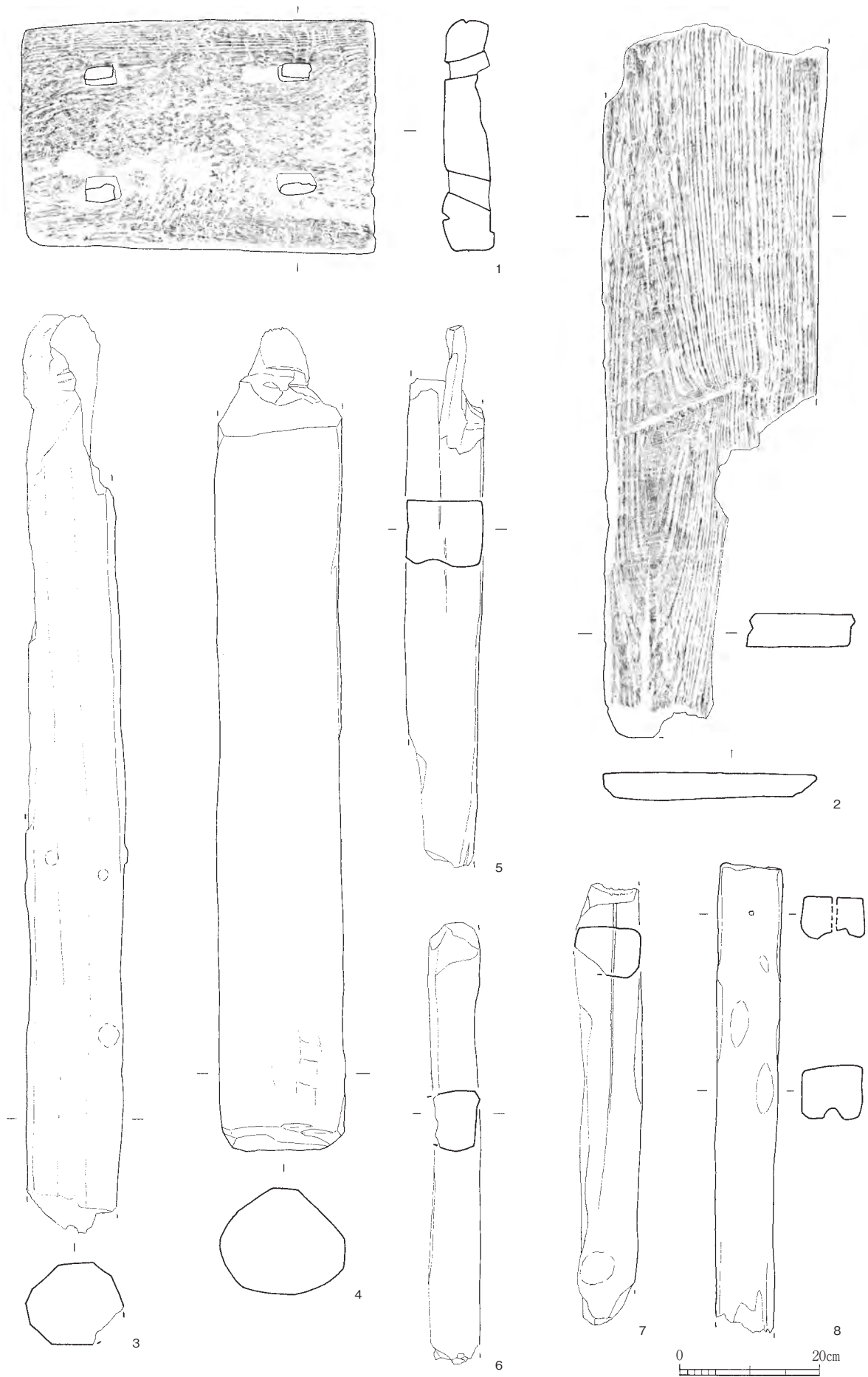
土器等（図版52、第30図3～7） 若干の土器が出土しているが、出土状態は確認できていない。弥生～古墳後期の土器片以外の近世陶磁器と思われるものの一部を図示したがいずれも小片である。3～6は陶器。3は口縁部を折り曲げて内外に肥厚させる壺であろう。暗灰色となる胎土に砂粒の混入はほとんど見えない。釉は掛かっておらず、全体に茶褐色となるが、口縁部上面は重ね焼きのため暗灰色となる。溶けた黒色粒が目立ち、器表は粗い。4は高台の3/4が残存する唐津焼。器肉は淡灰色で非常に緻密。内面に灰色の濁った釉を掛けるが、厚みにムラがある。外面は体部下端近くから高台内にかけて露胎であるが、露胎部も非常に肌が滑らかである。高台は貼り付けのようで、その周辺は篋削りが施される。5は一見須恵器のように見える。器肉は灰味帯びる小豆色で、



第31図 211号土坑出土金属製品実測図1：鉄製茶釜（1/3）



第32图 211号土坑出土金属製品实测图2：双盘他（1/3、1/2）



第33图 211号土坑出土木製品等実測図 (1/8)

器表は全面が青灰色となる。胎土は非常に精良。外底面に切り離しの痕跡などは見えない。6は非常に肉厚大型の陶器片で、内外面に青味帯びる灰黄色の釉が掛けられているが、その表面が飛ぶように光沢を失っている。露胎部は小豆色。器肉は暗灰褐色で、ザラザラしているが1mm大の砂粒といったものはほとんどない。3・5・6は17世紀前半頃の上野・高取系の陶器であろう。

7は染付小片。

木製品 (図版52、第33図) 1は案で、長さ25.4cm、幅16.4cm、厚さは最大で3.7cmを測る。斜めに穿たれた長方形孔が4箇所あって、脚をはめ込むための柄穴であろう。図上方の2孔ではそれぞれ内側へ向かって孔と同じ幅でごく浅い溝が掘り込まれたあるいは圧痕が観察できる。上面は原材の芯付近を使用していて、庖丁傷のような細かな傷が無数に見られる。遺構図に示した板材がこれに似ているが、形状がやや異なることから別物とせざるを得ないが、図示した板材は所在不明となっている。2は長さ51cm余、幅16cm、厚さ2.5cmほどの板材で、これも直線的な細かな条線が無数に入る。3～8は加工痕のある柱状木製品。3は長さ66cm、直径6～7cmの複数面取りされた材で、8面まで数えられる。図上端付近は鋭利な刃物で削り込んでいる。4は長さ59cm、最大直径9cmのやはり面取りされた材であるが、劣化してはっきり見えない。これも上端は刃物で削り込まれる。5は長さ39cm、辺長4.8・5.4cmの角材、6は長さ32cm、一辺が4.2cmとなる角材で、これも劣化が進む。7は長さ32cm、一辺が4.8cmの角材。8は長さ34cm弱、一辺長4.0～4.4cmの角材で、図上端近くに一辺2mm角の方形孔が見えるが、貫通しているかどうかは背面の該当部が荒れていて判然としない。

301号土坑 (図版16、第34図)

2・3区の間は表土掘削後でも1mほどの段差があり、3区の北東半は削平のために遺構がほとんど残っていないのであるが、その最も大きく削平を受けた段落ち部分に位置する土坑である。

長さ2.5m、幅2m弱の長方形に近いプランをもち、床面の規模は1.9×1.2mほどの隅丸長方形となる。深さは最大で0.9mほどである。

出土遺物

土器等 (第37図1) 瓦質に近い鉢形の薄片で、口縁部の変化はほとんどないといってよい。内面は撫で、外面は器表が荒れている。摺鉢であろうか。

302号土坑 (図版16、第35図)

301号土坑の南東に隣接し、並ぶような配置となる。長さ3.4m、幅2.2mほどの長方形プランをもち、深さは最大で0.4m弱である。南東小口付近の床面上に石灰岩製の火輪が正置されていた。

出土遺物

土器等 古墳後期の須恵器杯身片、瓦質土器の板状の断片があるのみである。

石製品 (図版52、第38図1) 石灰岩製の火輪である。屋根の勾配が急で、軒に面を付す。全体によく整形されているが、処々で浅い凹部が見られる。

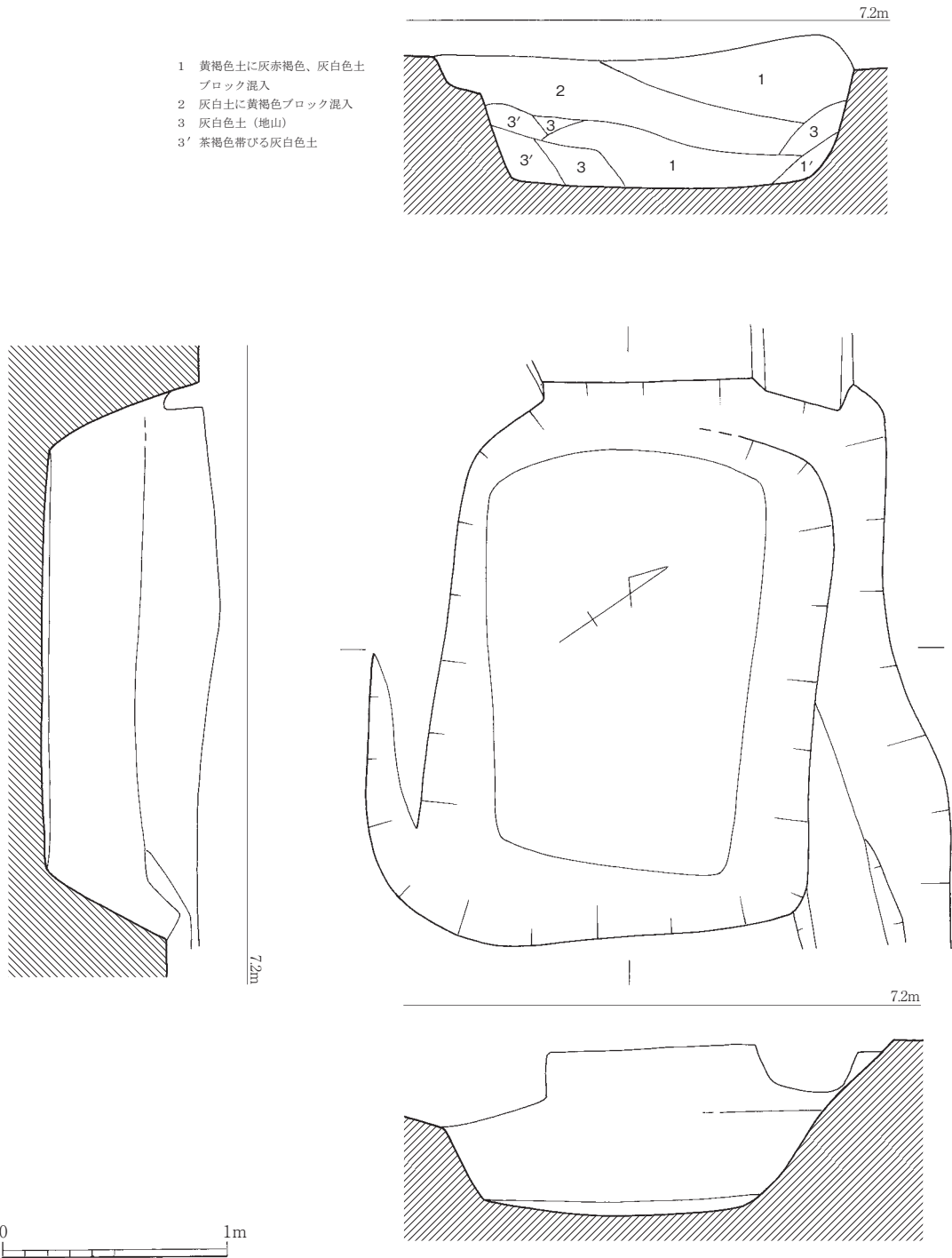
303号土坑 (図版16・17、第35図)

302号土坑の南東に近接して位置する。上端は長さ2m弱、幅1.5mの隅丸長方形で、壁の立ち上がりが弱く、下端では長さ1m、0.7mほどの規模となる。深さは0.6mを測る。

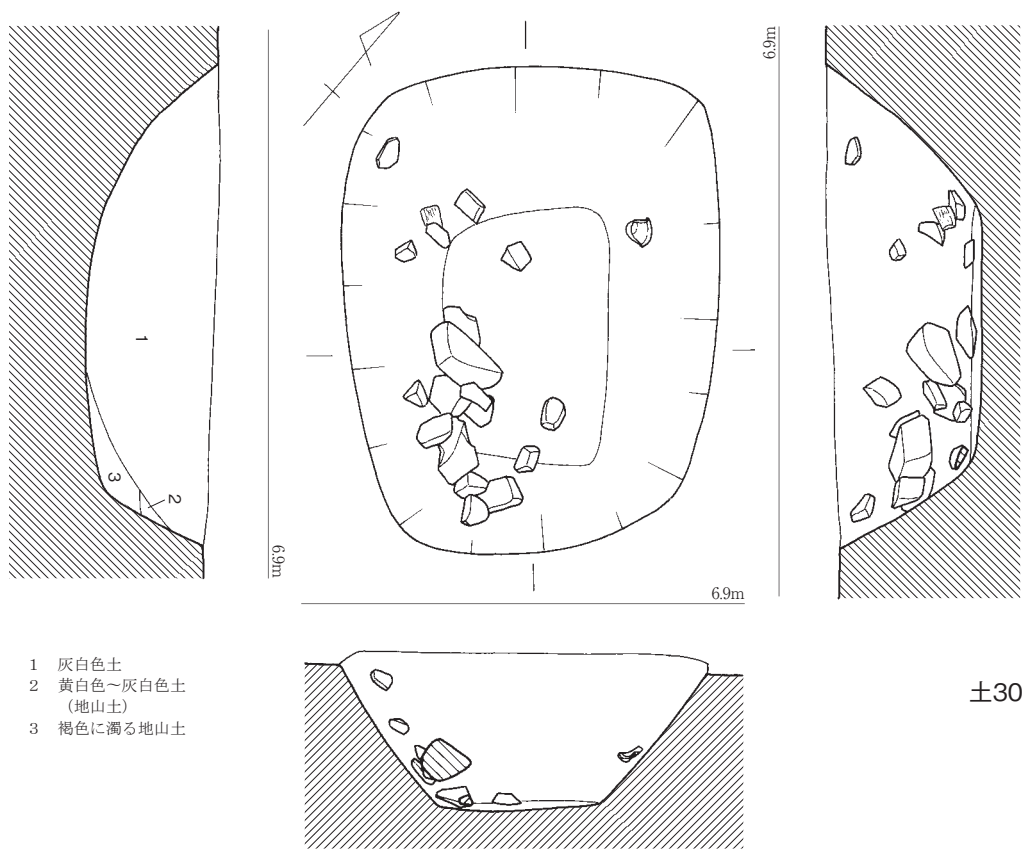
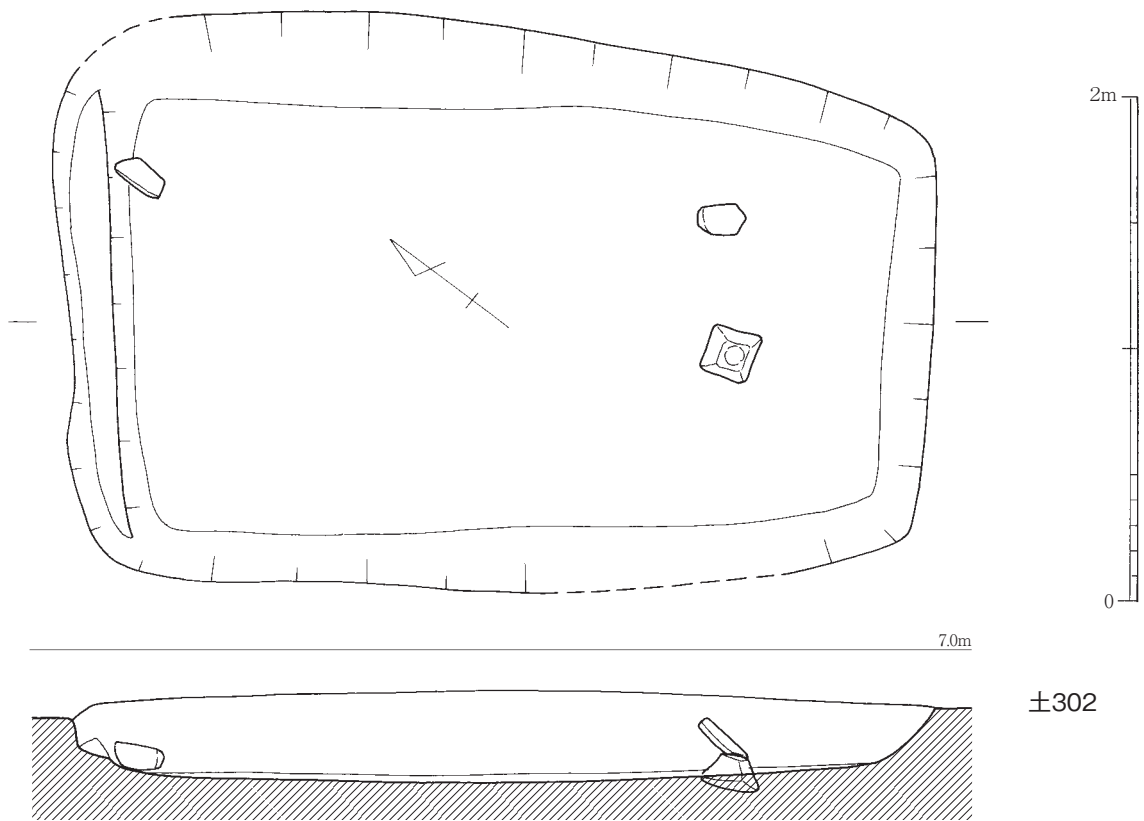
この土坑では大小の礫が、投げ込まれたように乱雑な状態で出土した。長軸で作成した土層図を見るとほぼ全体に一様な埋土となることから、一気に埋められたようである。

出土遺物

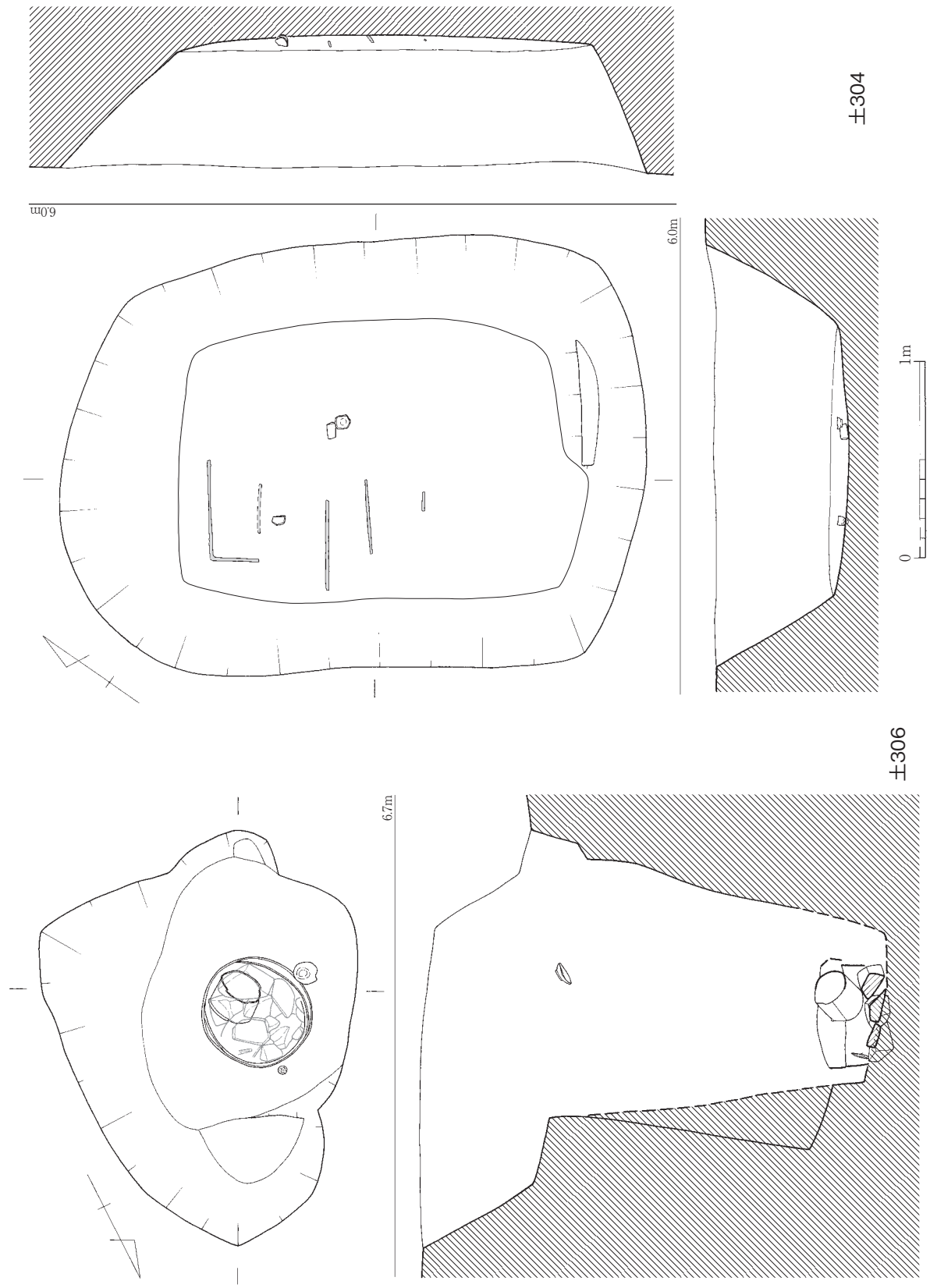
土器等（第37図2～4） 2は口縁部が1/3ほど残り、底部が完存する天目椀で、胎土は黄白色陶器質で良好といってよい。高台は貼り付けのようである。茶褐色・黒色の釉が掛けられるが、体部下位から高台にかけては露胎となる。3は古墳時代後期の甑小片で、器表が荒れている。4は灰白色～灰黄色となる焼成が甘い瓦片で、凹面に布目、凸面は荒れているが縄目の叩きのように見える痕跡がある。



第34図 土坑実測図8：301号土坑（1/30）



第35図 土坑実測図9：302・303号土坑（1/30）



第36图 土坑美测图10：304·306号土坑（1/30）

304号土坑（図版17、第36図）

1・3区の間を走る301号溝に近接する。上面は長さ3m、幅2.4mほどの隅丸長方形に近い平面形であるが、これも壁の勾配が緩く、床面では2×1.4mほどの規模となる。深さは最大で0.7m。

床面には幅1～2cm、深さも1cmほどの規模で暗灰色粘土の直線的な落ち込みが数箇所で見られた。断面系は半円となることから、丸い棒・竹などの痕跡であろう。床面付近で正置した状態で陶器が出土しているが、いずれも破損品であった。

出土遺物

土器等（第37図5～9） 5は陶器の皿で、底部は1/3が残存、口縁部は小片である。暗灰色緻密な胎土をもち、薄い部分が灰緑色、その下位が白濁する釉を施す。外面下半は露胎で、その部分は赤味が強い。体部外面下位は篋削りで調整、高台も削り出して作る。見込に2箇所の目痕があり、高台畳付も黄味帯びる部分と赤味帯びる部分があつて目痕の痕跡であろう。6は陶器皿小片で、これも暗灰褐色の緻密な胎土である。釉は灰緑色に発色、垂れた部分は黄褐色となる。体部外面下端付近は露胎を意識したものであろう。7は黄味帯びる透明釉が掛けられた白磁小片。8は口禿皿の底部。

9は軒丸瓦片である。凹面にコピキBによると思われる細線が見え、凸面は丁寧に撫でられている。

306号土坑（図版17、第36図）

3区南東隅付近、2区との境に位置する井戸である。段落ち部分に位置することもあつて平面形状は整ったものではないが、底径は0.75mほどに還元できそうである。底面では直径50cmほど、2段25cmほどの高さで曲物が残存し、その中には掌大の礫が敷き詰められていた。さらに礫の上には直径20cmほど、高さ10数cmの曲物が傾いて残存していた。なお、曲物は水槽で保管中に開いてしまい、報告時は所在不明であるため図示していない。

床面付近では地山と埋土の判別が困難であつたが、わずかな炭化物の有無で床面を判断している。礫の下位は阿蘇4の灰白色土が還元された青灰色粘質土で、50cm掘り下げても土質に変化はなかった。

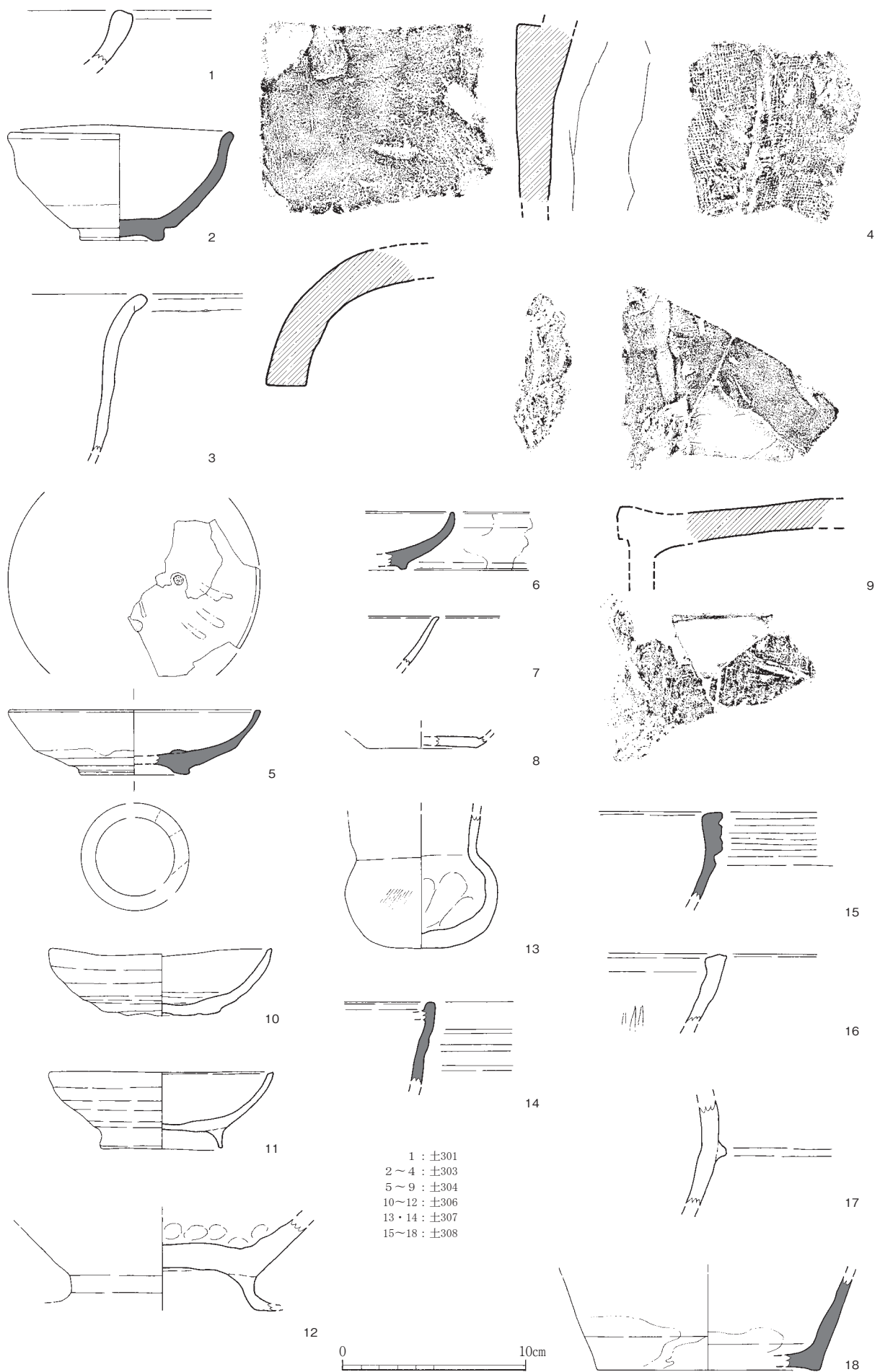
出土遺物

土器等（図版52、第37図10～12） いずれも土師器である。10はほぼ完存する皿で、体部は内彎、底部は高台状に肉厚となっている。体部外面には水挽き痕が目立ち、赤味帯びる肌色に発色する。作りは雑といつてよい。これは最上層付近から出土。11は高台付椀で、底部付近はほぼ完存、口縁部付近は小片である。これも外面に水挽き痕が目立つが、全体に器表が荒れて、部分的に熱を受けたようで赤変する。12は大型品の底部で、図示部はほぼ完周する。大きく開く貼り付け高台を有し、体部が直線的に開く。内底部外周は指頭痕が目立つ。胎土は比較的良好で、明黄褐色～黄白色となる。

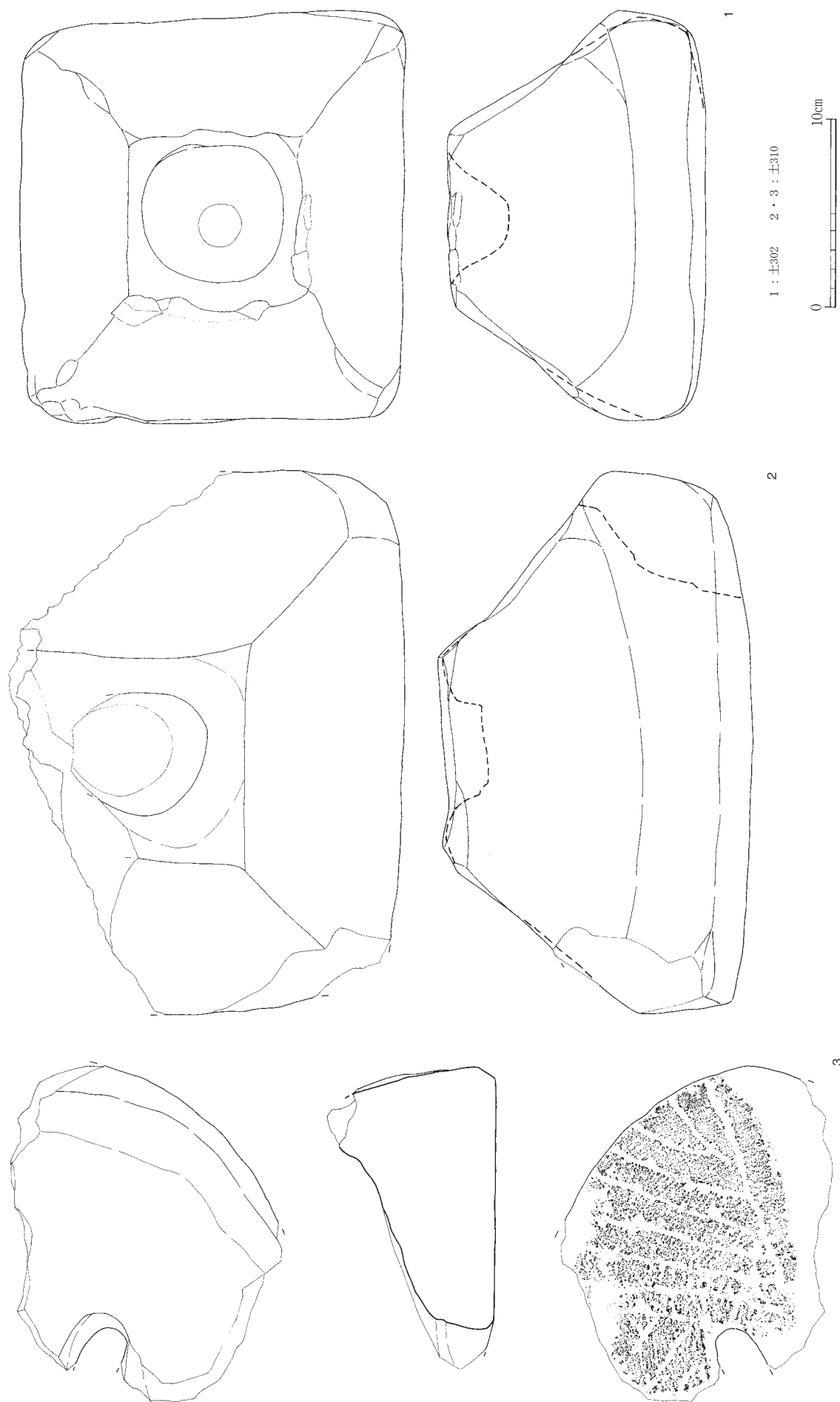
石製品（図版56、第39図6） 形状の整った円形の花崗岩で、表裏両面の中央付近が非常に滑らかとなる。また、片面には煤のようなものが付着して黒色化する。「上層」の注記がある。

307号土坑（図版18、第40図）

306号土坑の南西に位置する。長さ1.3m、幅0.9mほどの楕円形に近い平面形をもち、深さは0.55mであつた。ただ、中位以下では埋土が青灰色粘質で、地山も306号土坑と同様に青灰色軟質な土質となつていて床面とした判断にいささか不安がある。



第37图 土坑出土土器等实测图5：301·303·304·306~308号土坑 (1/3)



第38图 土坑出土石製品等実測図1 (1/3)



第39図 土坑出土石製品等実測図2 (1/1、1/3)

図のように、礫が入っていたが、いずれも高い位置にあって規則性は見られない。

出土遺物

土器等（図版52、第37図13・14） 13は肉厚の土師器小型壺で、図示部はほぼ完周する。底部は平底を意識するようである。体部外面は全体に剥落するが、一部で刷毛目が見える。内面は指撫で痕が目立つ。14は陶器小片で、水指であろうか、口縁部内面の突出部を欠失する。釉は外面で濃い灰緑色に、内面では暗緑色に発色する。外面では横撫での強弱か、浅い凹線を刻んだものか、釉の濃淡がアクセントとなっている。

308号土坑（図版19、第40図）

307号土坑の南西に隣接する。全長は3.5mを測るが、形状が乱れていて、床面の規模は1.2×1mほどの長方形となる。深さは最大で0.9m。北東小口に長さ1m近い巨石があり、反対側の小口には拳大の礫が散乱していた。この遺跡の地山はいわゆる阿蘇4火砕流と呼ばれる厚い火山灰からなっていて、石材はすべて搬入されたものといえる。

出土遺物

金属製品等（第41図32） 重量291.4gの椀形滓。中央部が大きく凹んで文字通り椀形となり、下面に炉壁の一部が銹着するようである。

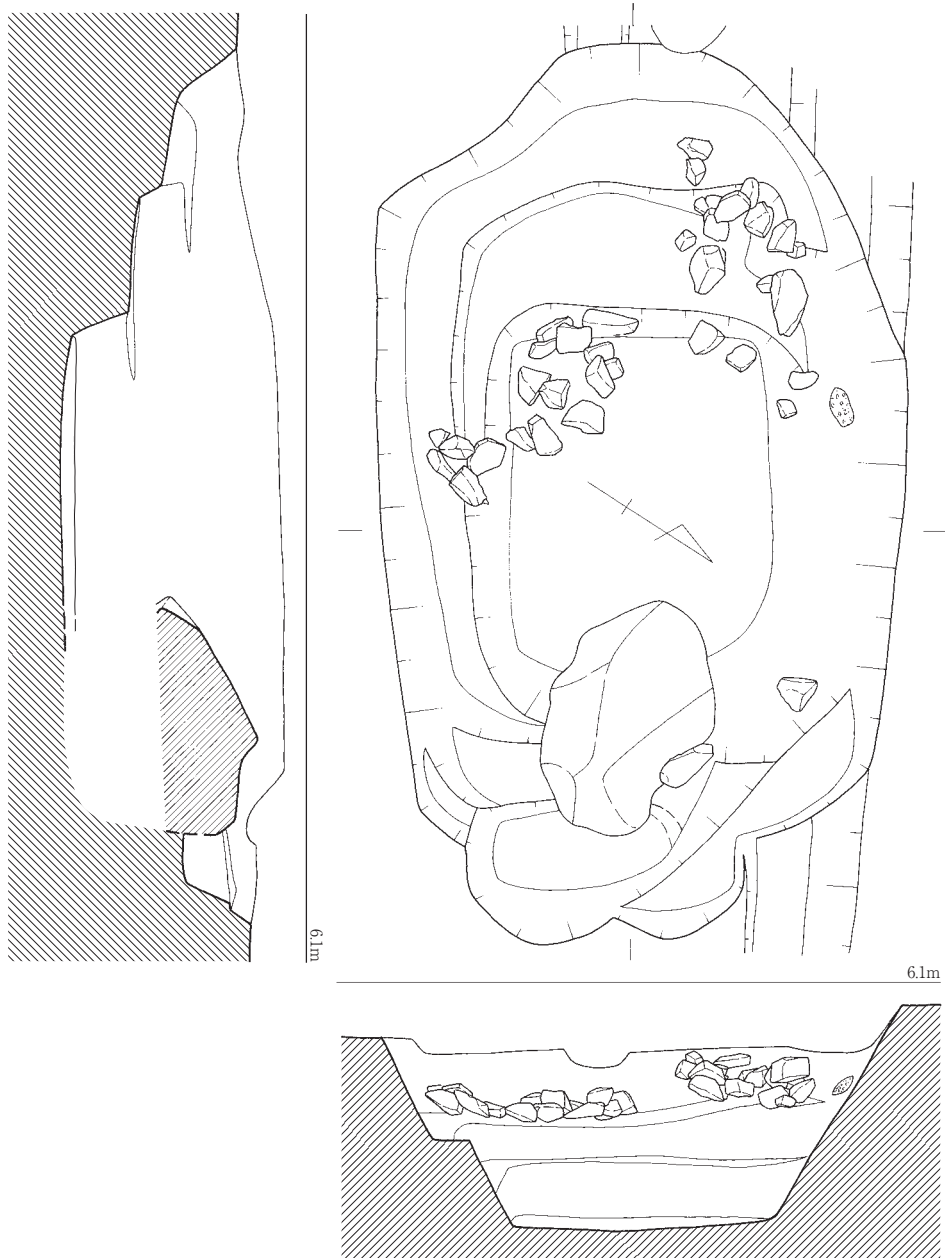
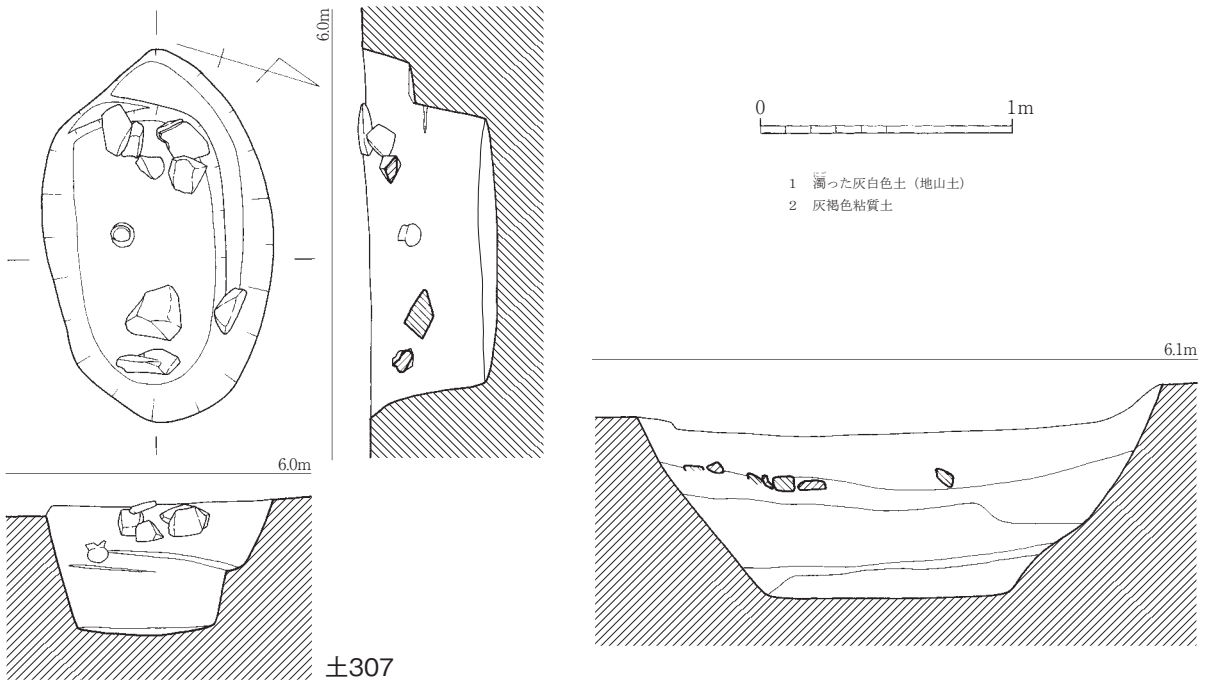
土器等（第37図15～18） 15は陶器摺鉢小片で、口縁部外面を肥厚させて凹凸を刻む。釉は暗茶褐色に発色、口端部上面に帯状に熔着が見られる。16は口縁部を内側へ肥厚させた瓦質摺鉢小片。器表が荒れているが、スリ目の一部が残存する。17は胎土が灰白色、内外の器表が暗灰色～灰黒色となる瓦質土器で、突帯以下に煤が多く付着している。18は陶器の底部片で、1/4が残存。胎土は赤味の強いもので、体部下端付近を除いて暗褐色釉が掛けられる。露胎部は暗赤紫色に発色。外底面に砂目が残る。

石製品（図版56、第39図7～10・第47図24） 7は花崗岩質砂岩で、形状が整う。表裏の広い面は滑らかとなるが、砥石のような滑らかさではない。側縁は敲打に使用したものか、やや粗い感じとなる。8は花崗岩であろう。これも形状が整って、全面が滑らかとなる中で図下端は敲打して荒れる。9は安山岩で、図表裏の広い面がよく使用された砥石。部分的に煤が付着していて、右に図示した面の下半が大きく剥離しているのは火熱のせいであるかも知れない。10は淡灰色の粘板岩を使用した砥石。図示した面の右半が比較的使用されているが、下半は薄く剥離していて、微細な条痕が数条見えるが面的な使用痕は見えない。他の面は未使用である。第47図24は石英斑岩で、図下端を欠損する。図示した右側面下位に未使用の面が残っていて、それに比べれば破面を除く他の面は非常に滑らかとなっていて明らかに異なる。図右上の三角形となる面では洗濯板状の鈍い凹凸が見られる。

309号土坑（図版19、第42図）

井戸306号土坑の北に並ぶように隣接する。これも2・3区の境に位置していて、平面形がやや乱れているが、床面は直径0.8mほどの円形となる。深さは最大で2.1m余であった。

床面付近に幅4cm、長さ60cm強の板状木材が残存していたが、その他特殊な施設は見られない。古墳時代後期の属すると思われる須恵器・土師器小片が若干ある。



第40図 土坑実測図11：307・308号土坑 (1/30)

310号土坑（巻頭図版1・図版19～21、第43図）

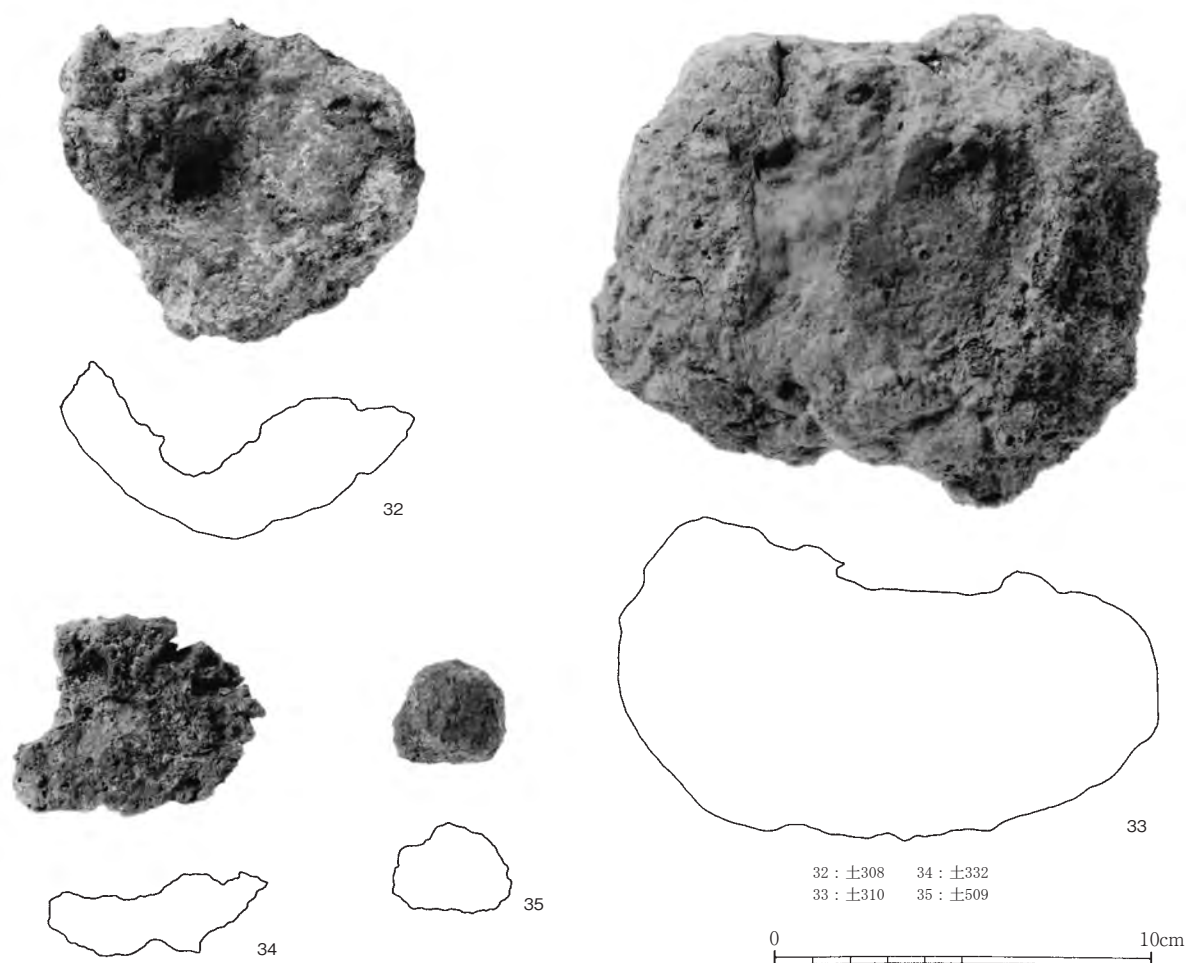
309号土坑の北に近接し、これも2・3区の境に位置する。検出時は大型の石材で塞がれていて、古墳の可能性を考えたほどであった。

掘形は長軸4.6m、短軸3.3mの長円形の巨大なものであった。巨石を除くと小振りな石材を積み上げた円形の石組井戸が現れた。石組は上面で直径1.0m、下端で同0.7mほどの規模で、高さは2.8mが残存していた。その下位に厚い板材を井桁に組み合わせた井戸枠が置かれ、さらに井戸枠の下には直径20cm弱の丸太材3本が敷かれていた。井戸枠下端から掘形最上部までの深さは4.3mに及ぶ。

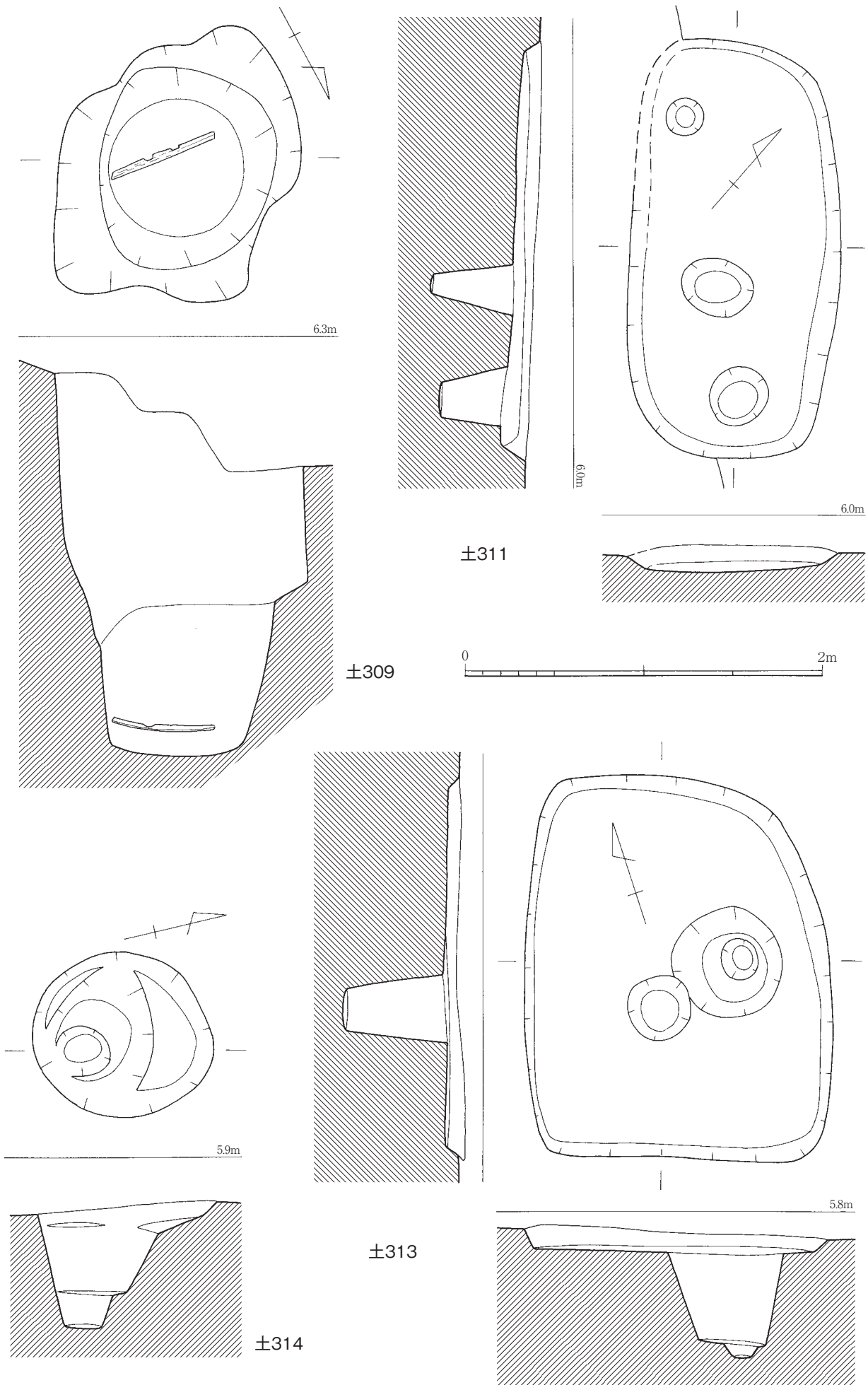
出土遺物

金属製品等（第41図33） 重量1556.6gの大きな椀形滓で、石組みに組み込まれていた。

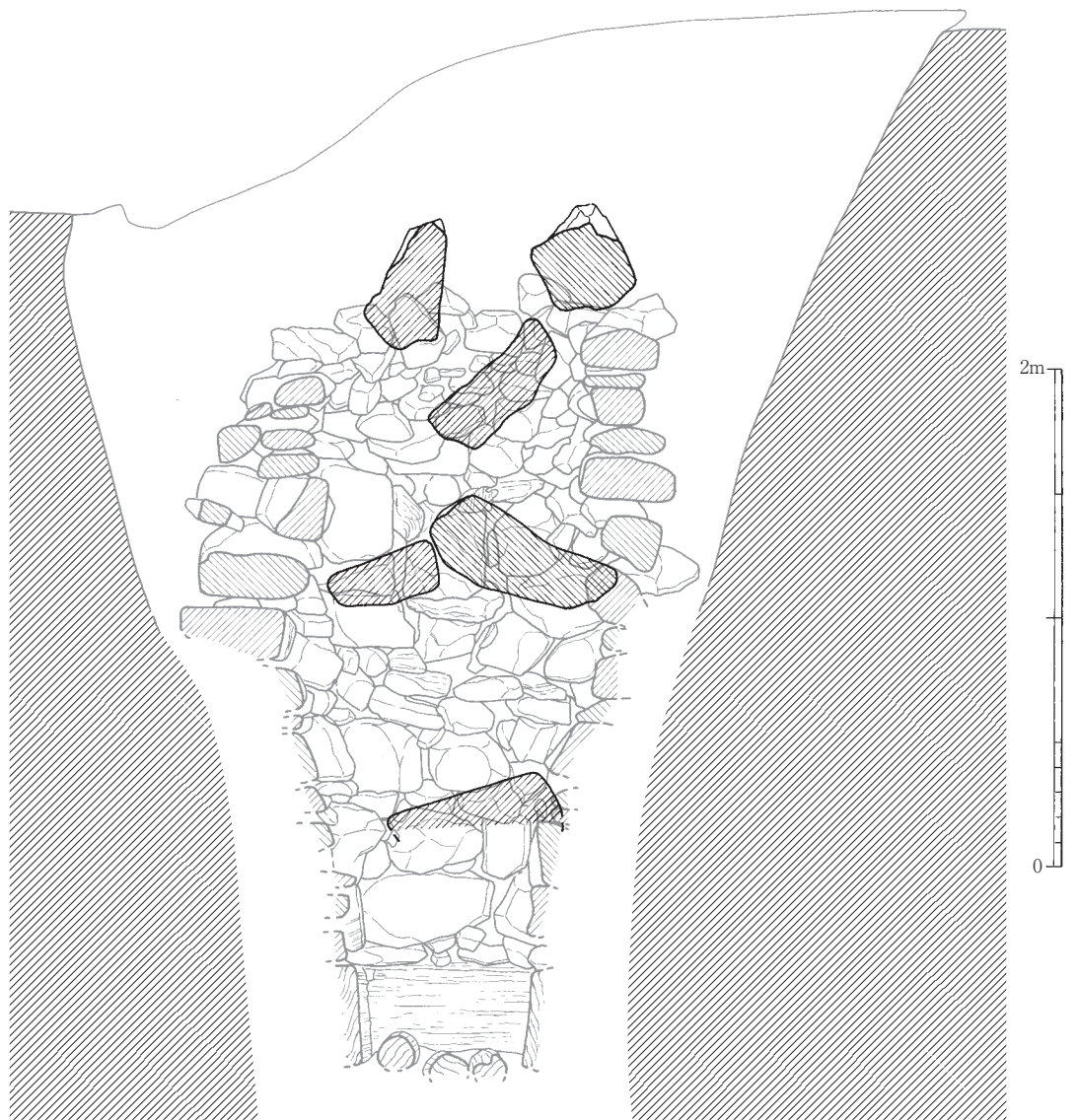
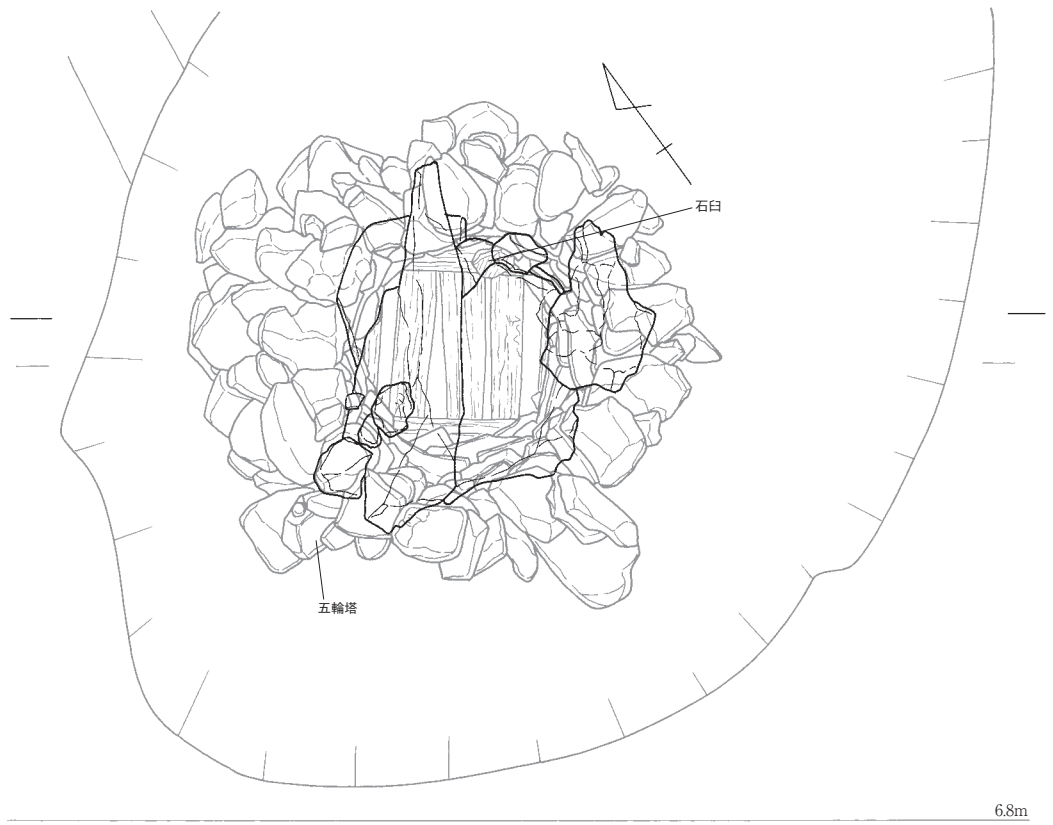
土器等（図版52、第46図） 1～5は陶器、6は瓦質土器、7・8は磁器で、1は床付近から、他は埋土中の出土である。1は体部下半が完存、口縁部は小片となる小型椀で、高台から上に光沢の弱い濃灰緑色の釉が掛かるが、釉の下端付近は白濁する。高台は削り出して作る。本来、高台及び高台内を露胎としていたようだが、畳付から外底面に掛けて部分的に釉が付着する。高台の一部が欠けていて、窯道具に熔着したものと思われるが、内面に目痕は見られない。胎土は灰黒色で精良とってよいようである。2は底部の1/2が残存。釉は灰緑色に発色、畳付から高台内が露胎となる。作りは粗雑な感じである。3は底部付近が完周する。胎土はザラザラとする感じの粗いもので、釉は濃い緑褐色に発色、露胎部は暗赤褐色となる。なお、体部外面下端付近は篋削りを行っている。4は底部の1/3が残存。これは緻密な胎土を有し、釉は緑味帯びる褐色となる。これも体部



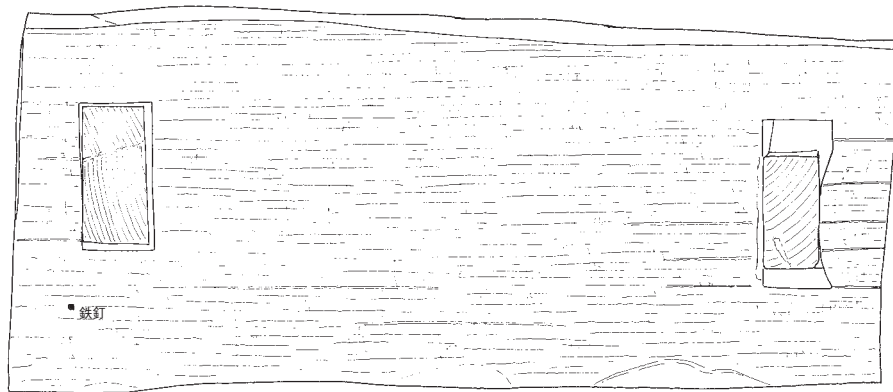
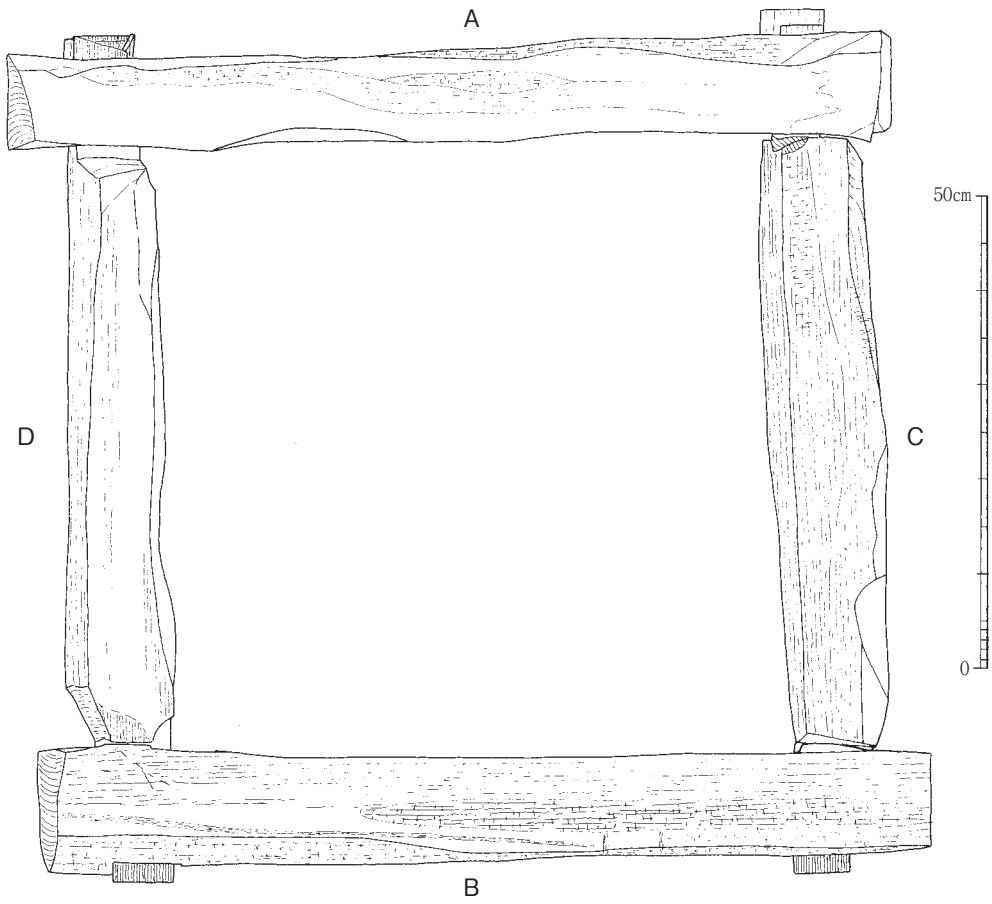
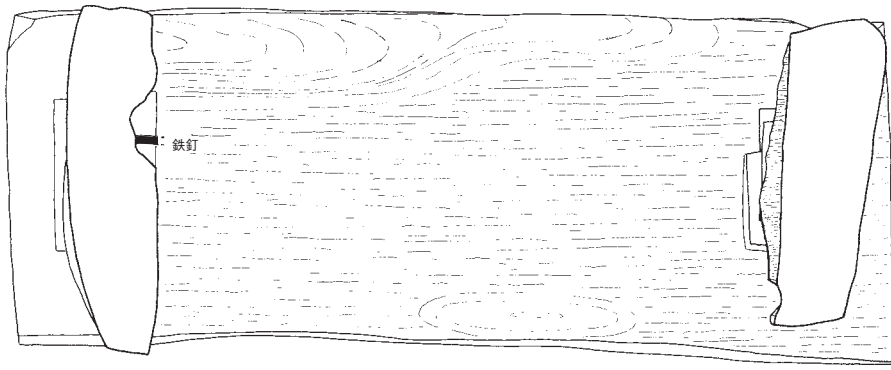
第41図 土坑出土鉄滓実測図2：308・310・332・509号土坑（1/2）



第42图 土坑实测图12：309·311·313·314号土坑（1/30）



第43図 土坑実測図13：310号土坑（1/30）

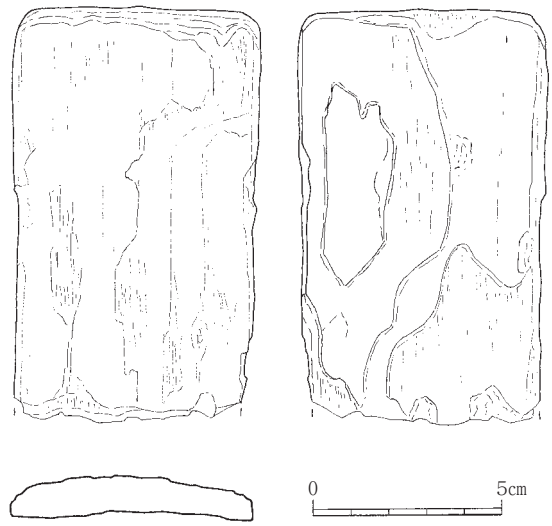


第44図 310号土坑出土井戸枠実測図 (1/8)

外面下端付近は篋削りを行っている。5は壺であろうか、1/4が残存する。口縁部付近にのみ光沢のない暗赤紫色の釉が薄く掛けられていて、露胎部は外面が灰黒色、内面が茶褐色となる。

6は器肉が灰赤褐色、器表が灰褐色となる鉢で、摺鉢か。口縁部の変化が小さい。

7は輪花となる白磁椀小片で、灰白色緻密な胎土となり、黄味帯びる釉が掛けられるが釉垂れが顕著である。また、内面に線刻が残る。8は龍泉窯系青磁椀で、高台の1/2ほどが残存する。高台内を除く全面に青緑色に発色する釉を厚く掛けている。体部外面には釘彫りの蓮弁文がランダムに刻まれ、内面には雲文とともに見込に「福」の異体字がスタンプで陽刻されている。



第45図 310号土坑出土木製品実測図 (1/2)

石製品 (図版52、56、第38図2・3・第47図25) 第38図2は石組の裏込めに使用されていて、3は井戸内に投棄された大型石材の上に乗っていた。2は花崗岩製の火輪で、表面は非常に粗い。また頂部の削り込みが非常に浅くなる。3は凝灰岩製の石臼。

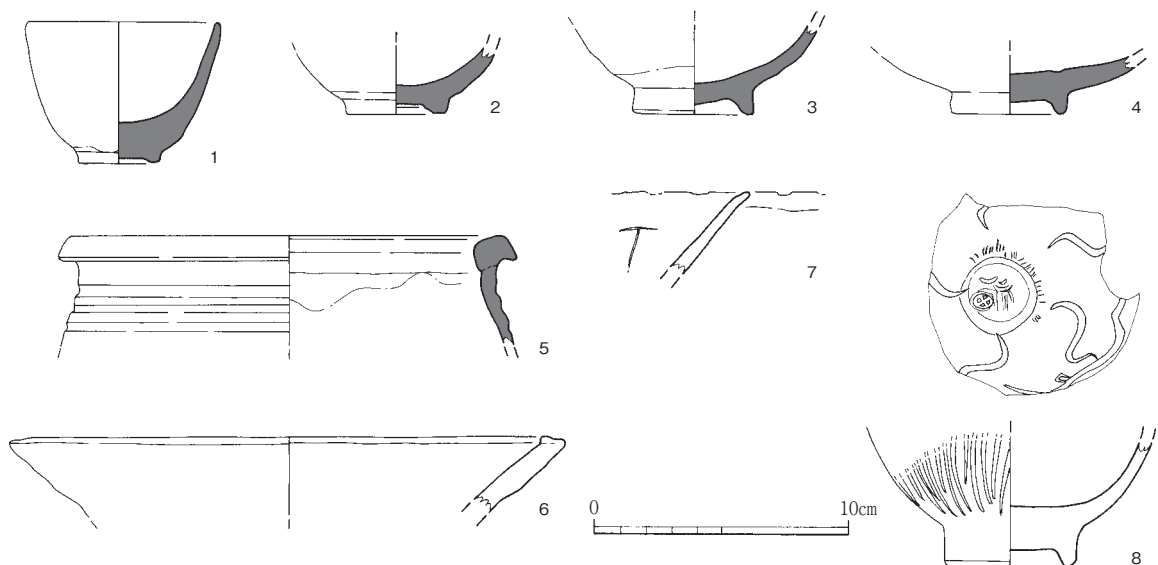
第47図25は頁岩製の砥石で、図表面の一面だけが使用されていて、非常に滑らかとなる。ただ、非常に硬質な感じがする。

木製品 (第44・45図) 第44図は井戸枠である。柄・柄穴はB・D間のみが適合し、他の組合せは柄がいずれも小さく、2箇所では充填材を使用B・C間では隙間が空いたままである。

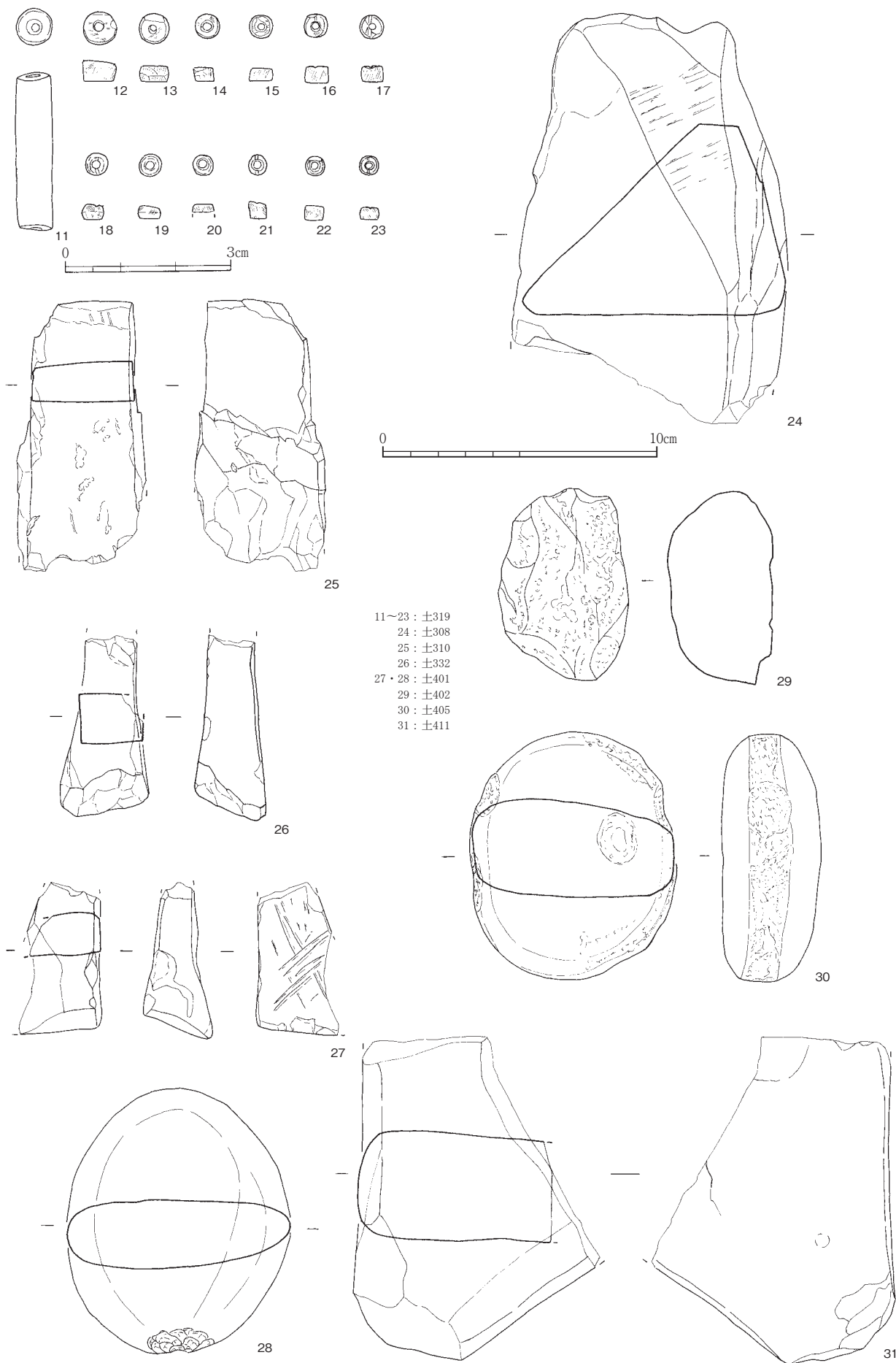
枠板Dの内側に釘が打ち込まれている。場所は正確に材の中央のやや上方に当たり、意図があるのであろう。また、枠板Bでは図左下、柄穴の下位にやはり釘が打ち込まれていてやはり意味があるのであろうが、これは使用時には用をなさない。

各材は長さがほぼ47cmであるが、Cとした材のみ48cmを測る。高さはBが20cm、A・Dが18cmであるが、Cは16cmとなる。厚さは5cmを基準としているようである。なお、この井戸枠は現在自然乾燥の状態にあり、出土時に比べて若干収縮している。

また、「最下層」から幅6.6cm、長さ11cm、厚さ1cmほどの長方形の板材が出土している (第45



第46図 土坑出土土器等実測図6：310号土坑 (1/3)



第47图 土坑出土石製品等実測図3 (1/1、1/2)

図)。長方形という形状の他、加工痕は見えない。

311号土坑（第42図）

28号住居跡とした遺構及び306号溝とした遺構と重複し、溝に後出するが、住居跡との先後関係は把握できていない。長さ2.3m、幅1.2mの隅丸長方形に近い平面形をもち、深さは0.2mに満たない浅い遺構である。

6世紀後半代の須恵器杯小片を含む土器片が若干出土している。新しい時期の土器はないようである。

312号土坑（巻頭図版1・図版21・22、第48図）

311号土坑の南西に隣接する板組の井戸である。掘形は2段となっていて、上段の上端は1.4×1.5mの隅丸方形を呈し、同床面は1.1×1.15mの方形に近い形状であった。深さは1.25mが残存する。下段は井戸枠とほぼ同じ大きさで、上面は0.8mの方形、床面は0.65～0.7mの方形に近い形状で、深さは0.4mである。

土層の観察では残存する井戸枠の上端から検出面の0.15～0.35m下位の部分まで縦方向に土質が分かれていて、本来は検出面付近まで井戸枠が組まれていたようである。

図で断面に示した井戸枠は2段が残存するが、最下段は高さ10cmに満たず、その上の材も高さ10cmほどで、長さは90cmほどである。見透しに示した枠は高さが20cm弱、長さが100cmほどであった。報告に当たって実測しようとしたが、井戸枠は孔や本来の形状がわからないほどに破損していたために図示していない。

なお、各辺は方位に乗っていない。

出土遺物

土器等（図版53、第49図1～20） 1～3・15は須恵器。4は灰褐色に、11は赤く焼成されているが、須恵器の技法で作られた陶器である。そのほかは土師器。

1は復元口径が14.0cmと小型で、天井が低く、口縁部の踏ん張りが弱い杯蓋で、つまみの有無は不明である。天井部外面に籠記号が刻まれる。2は杯蓋の大きなつまみ。3は小片であるが図のように復元できそうである。4は復元口径13cmほどの小型皿である。シャープさを欠き、外底面には回転籠削りが明瞭である。

ここから出土した土師器は全体に赤く焼かれる傾向があり、調整は丁寧、胎土も精選されている。5・6は浅い杯。これらは器表が荒れているが、残りのよい18によく似ている。7は口縁部の2/3が残存する須恵器の器形に似た杯で、これも器表が荒れているが、外底面は籠削りで仕上げるようである。8は底部が完周するが体部を欠く。9は8によく似た高台付杯である。これは底部付近が完周、口縁部の1/3が残存する。体部が直線的に立ち上がり、口縁部もわずかに肥厚するが変化を余り加えない。高台は開きが小さく、高い。体部外面下端付近に粘土紐巻き上げの痕跡と思われる痕があり、高台内には丁寧に施された回転籠削りの痕跡が見える。10は肉厚、作りの雑な甕の小片。

11は胎土精良で灰褐色に焼き上がる陶器（須恵器）で、1/2が残存。口縁部が垂下するように小さく外反する皿に低い高台がつく。全体に丁寧に作られているが、高台の貼り付け痕が明瞭に見える。高台内に墨が付着、外面に垂れた痕跡があり、転用硯であることがわかる。ただし、高台内には研磨の様子が見えず、余り使用されていないようである。12は皿で、内底面の籠磨きは円形に

施され、外底面には指頭痕が残る。13の体部は内彎が強く、椀になろうか。口縁部付近を強く横撫です。14は体部が急に立ち上がり、口縁部を強く横撫でして小さく外反させている。丁寧な篋磨きが全面に施される。

15は胎土精良、焼成の甘い須恵器杯で、体部上半が灰黒色、中程が薄い帯状に灰白色となり、以下は黒色となっていて、中世の瓦器椀のような発色となる。器表が荒れているが、外底面に篋削りの痕が確認できる。16は体部が内彎し、丸底となる椀。器表が荒れている。

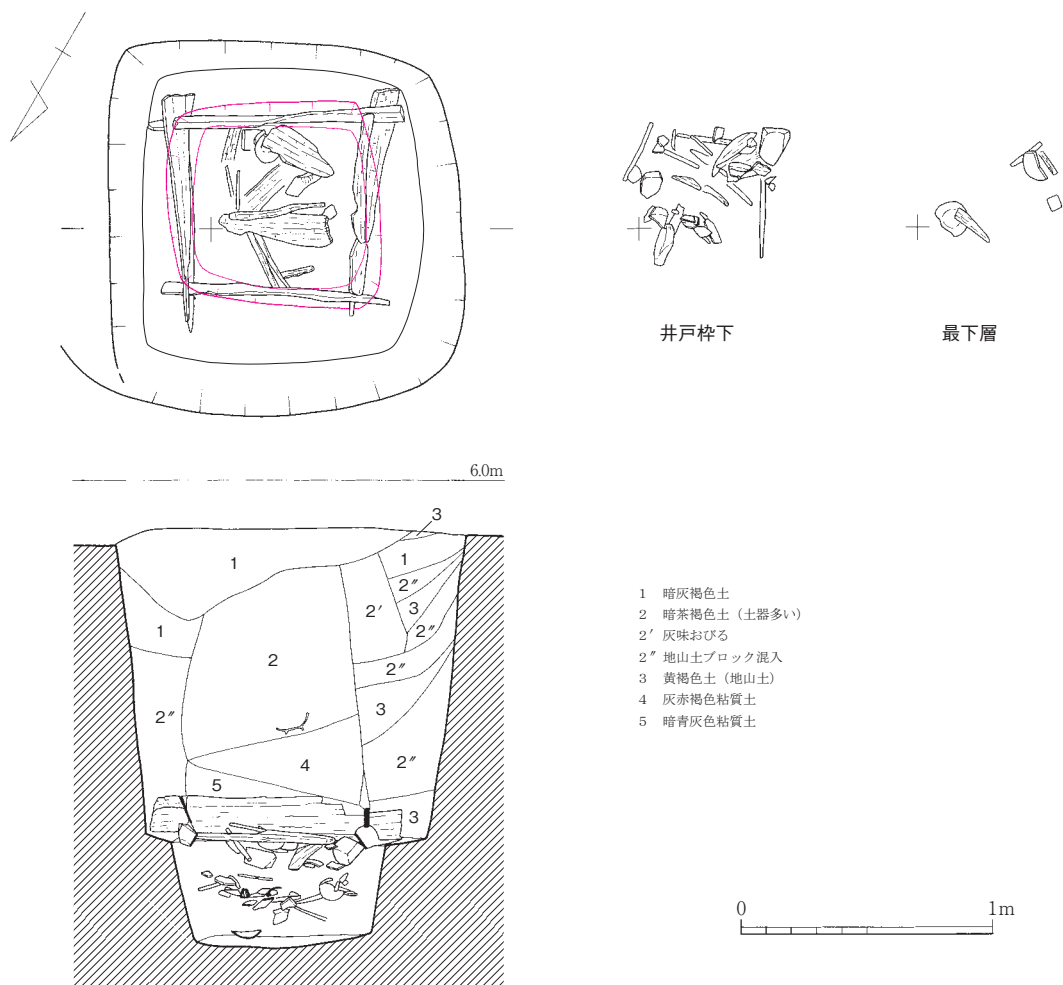
17は体部下半に指頭痕がよく残る皿で、これも丸底傾向である。18は平底の底部から内彎する体部が立ち上がる。篋磨きはどちらかといえば雑で、器表が必ずしも平滑化していない。これは手捏ね成形の後で篋磨きを施しているようである。

19は焼成甘い平瓦の小片で、凸面は縄目叩きとなる。

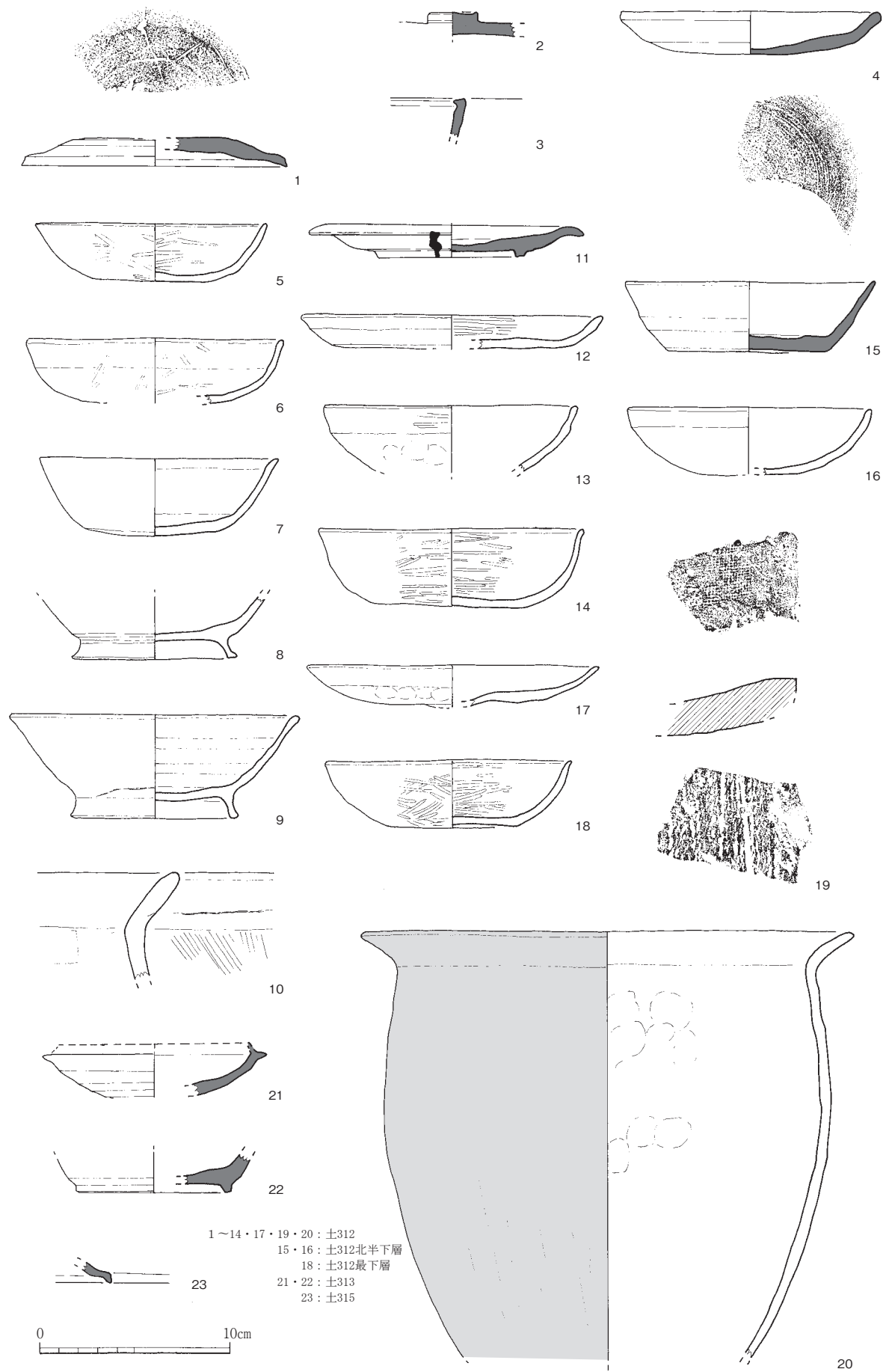
20は1/2ほどが残存する甕。体部内面に指頭痕が目立ち、体部外面下半は砂粒の移動が見られるが、いわゆる通常の篋削りというものではなく、刷毛目との中間的な技法のようである。口端部付近、及び体部下半部にも部分的に赤色顔料が見える。内面に焦げ痕が見られる土器にしては奇異な感がある。胎土は比較的精良といってよい。混入であろう。

313号土坑（第42図）

312号土坑の南西に近接する。306号溝の内部にあって、30号住居跡を切っている。



第48図 土坑実測図14：312号土坑（1/30）



第49图 土坑出土土器等实测图7：312·313·315号土坑（1/3）

平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈し、長さ2.1m、幅1.7m、深さは0.1mほどと浅い遺構である。

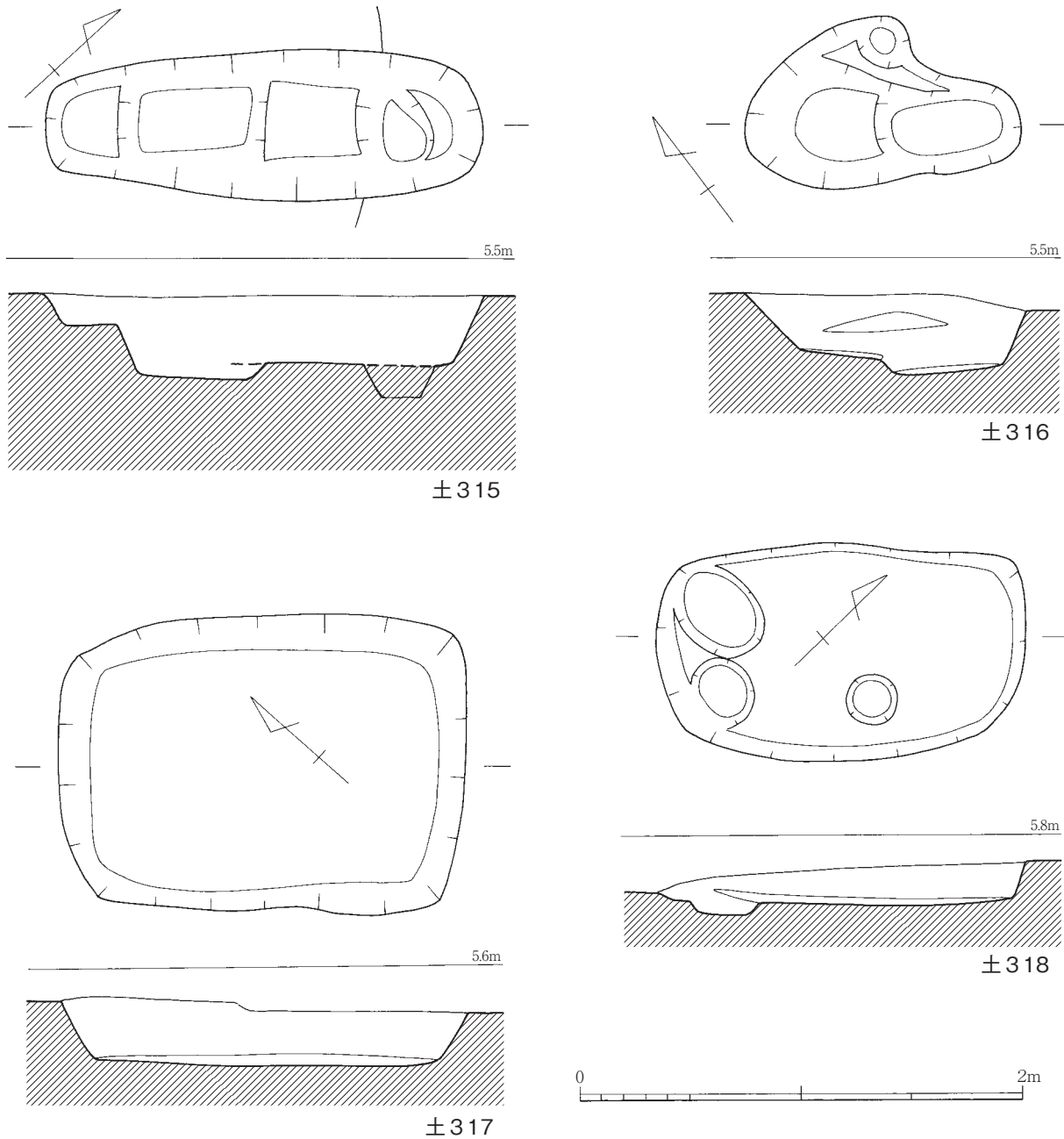
出土遺物

土器等（第49図21・22） いずれも須恵器。21は口径10cmほどに復元できる小型の杯身で、外底面の篋削りは丁寧。22は高台付杯小片で、底部外縁に置かれた高台は小さい。胎土・作りはよい。

314号土坑（第42図）

313号土坑の南に近く位置する。直径1m前後の大きな遺構であることから土坑としたが、柱穴とすべきであるかも知れない。

須恵器や積極的に古代以降に比定できる土器はないようである。



第50図 土坑実測図15：315～318号土坑（1/30）

315号土坑（図版、第50図）

306号溝南隅付近にあって、同溝や31・32号住居跡などを切ると判断された。他の遺構と重複していることもあって床面の検出に失敗している。

土坑は長軸2m、短軸0.7mで土壇墓状の平面形をもち、深さは0.3mほどに復元できる。

出土遺物

土器等（第49図23） 出土土器の多くは306号溝に伴うもののように、数点ある須恵器の一つを図示した。他に7世紀代に遡るとされる高台付杯身小片もある。

316号土坑（第50図）

3区南西隅付近で検出した遺構。長さ1.2mほど、幅0.6mほどの長円形を呈し、南東部が一段低くなっている。

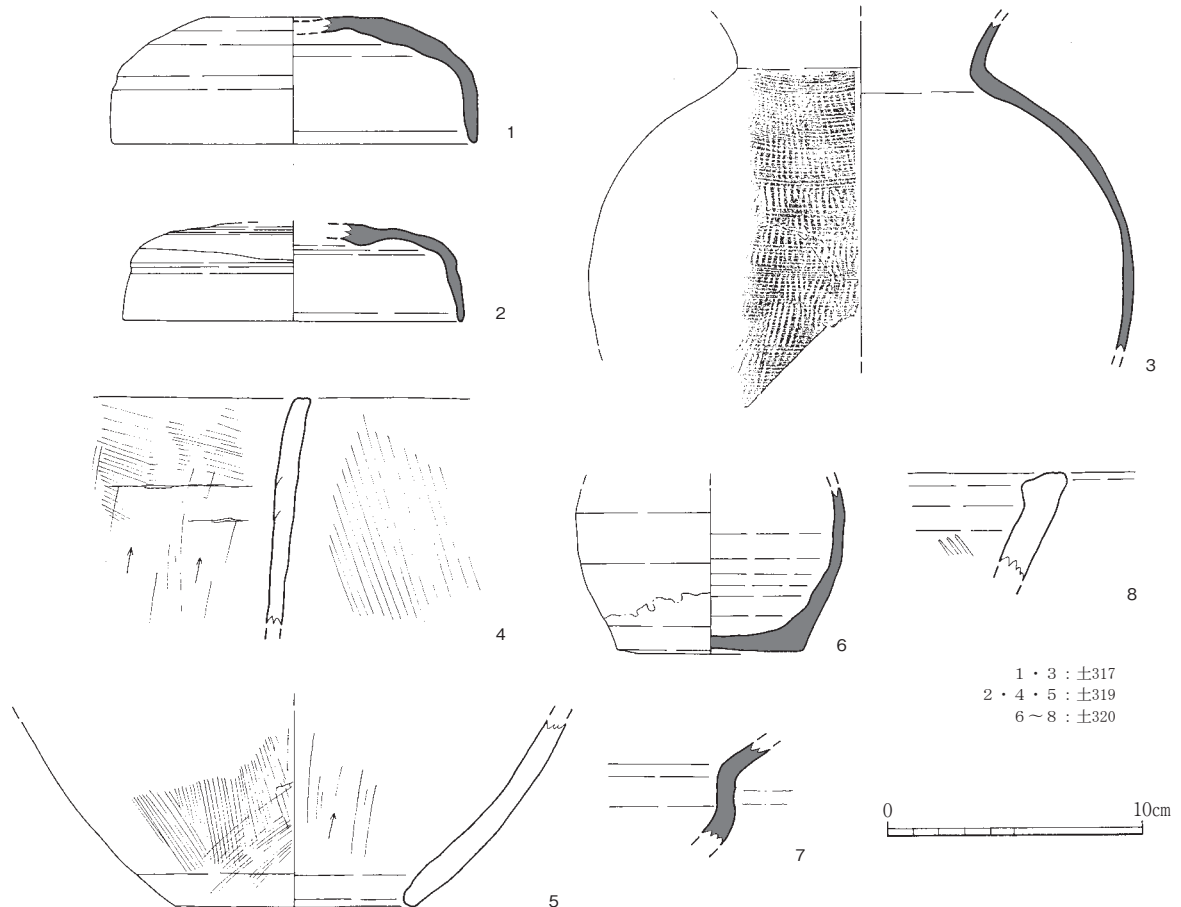
須恵器を含む土器小片が数点ある。

317号土坑（第50図）

3区西端の中程、33号住居跡を切る長方形土坑である。長さ1.8m、幅1.3mの比較的整った平面形を呈し、深さは0.3mほどであった。

出土遺物

土器等（第51図1・3） いずれも須恵器。1は天井部の1/2、口縁部の1/3が残存する杯蓋で、胎土・作りは良好である。焼成は甘く、瓦質に近い。3は内面の同心円文当て具痕を横撫でで消した薄手の壺。ただ、底部に近い部分では薄く同心円文が見える。



第51図 土坑出土土器等実測図8 : 317・319・320号土坑（1/3）

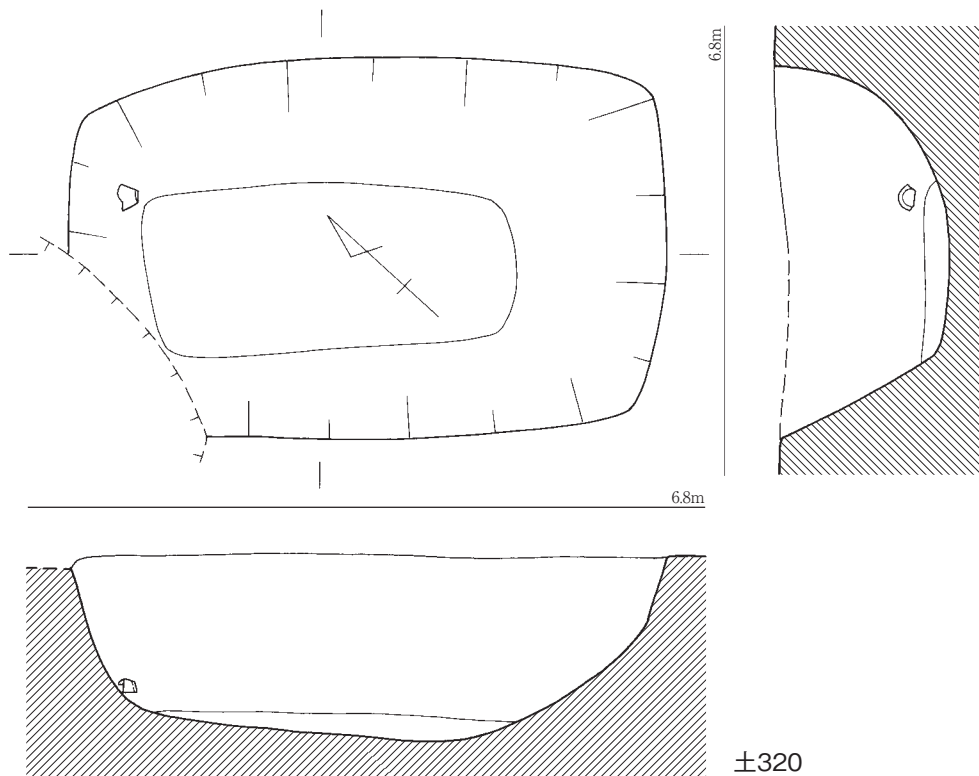
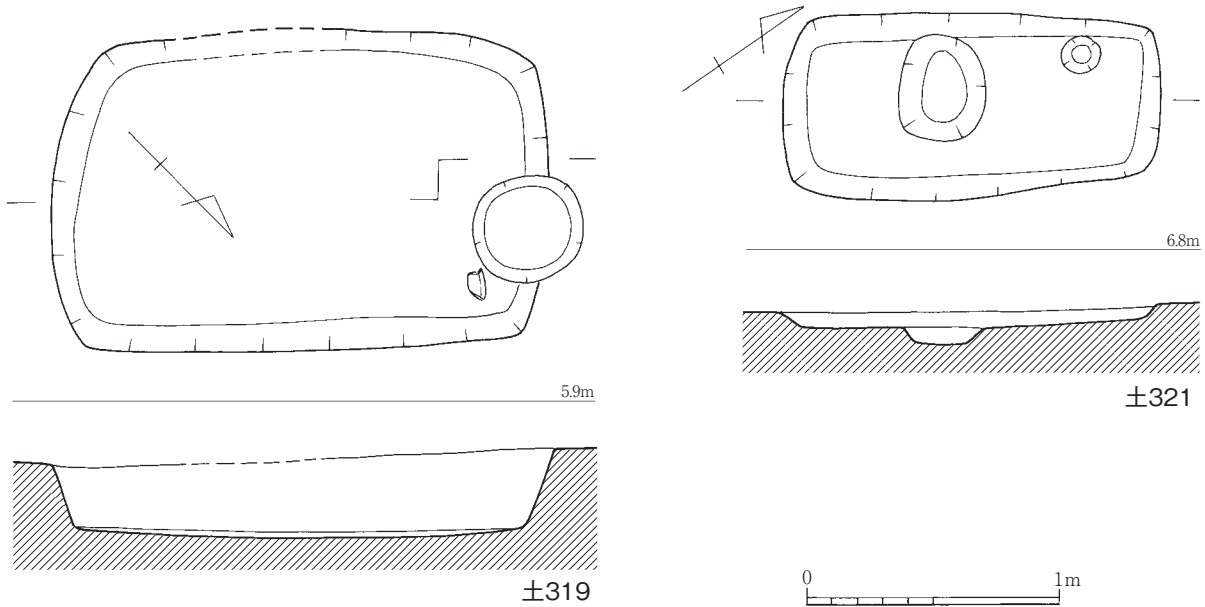
318号土坑（第50図）

317号土坑の北東、306号溝西隅付近に位置する。平面形は1.0×1.7mほどの隅丸長方形となり、深さは0.2m弱と浅い。

須恵器・土師器小片が若干出土している。

319号土坑（第52図）

318号土坑の北西に近接する長方形土坑。長さ2.0m、幅1.3m、深さ0.3mの規模である。土層の確認を怠ったが、土壙墓であった可能性があるものの、かなりの土器小片が出土していて違和感が



第52図 土坑実測図16：319～321号土坑（1/30）

ある。

出土遺物

土器等（第51図2・4・5） 2は焼け歪む須恵器杯蓋で、口縁部の1/4が残存。口端部内面に面を残す。

4・5は土師器甑片である。4は体部から口縁部にかけて直線的に伸びて口端部に面を作る。内面に粘土紐の接合痕が残る小片。5は1/3ほどの残片で、器表の遺存状態がよい。

石製品（図版56、第47図11～23） いずれも灰緑色の滑石製で、出土状態は確認できていない。11は長さ2.9cm、直径0.7cmの管玉で、両面から穿孔する。12～23は直径0.3～0.6cmの白玉で、片面に沈線状の浅い凹みを付すものがある。これらは褐色系となる。

320号土坑（第52図）

3区東端、303号土坑と310号土坑の間に単独で位置する。長さ2.4m、幅1.5mほどの整った長方形平面をもつ。四壁の勾配が緩く、床面の規模は1.5×0.7mほどとなっていた。

出土遺物

土器等（第51図6～8） 6は底部の1/2が残存する瓶子形の陶器。胎土は灰黒色のざらつく感じで、釉は外面では下端付近を除いて掛けられ、濃い灰緑色に発色する。内底面では部分的に掛かるので、これは意図的ではないようである。体部下端、底部外縁は指押さえのような凹凸があって十分に平滑化していない。7は頸部が大きく屈曲する陶器小片で、これも胎土は暗灰色～灰黒色のざらつく感じのもので、内外面に白濁した釉が掛かる。ただ、外面は頸部に残るのみで、その上下では釉が飛んでいる。

8は全体に黄白色となる瓦質の摺鉢。口縁部を内側へ肥厚させて断面三角形とし、わずかにスリ目が残る。

321号土坑（第52図）

3区北西辺の中央付近からやや南東に位置する小型の土坑である。0.7×1.5mの長方形プランをもち、深さは0.1mに満たない浅いものであった。

遺構の大きさに比して比較的土器量は多いが、図示に堪えるものはない。体部に叩き痕をもつ甕などの他に特徴を留める土器が少ないが、ほぼ弥生末～古墳初に属するようである。

330号土坑（図版22、第53図）

321号土坑の南西に位置する。2.8×1.9mの隅丸長方形の土坑に、直径2.9mほどの円形土坑を付設したような形状となる。深さは最大で0.5mほどで、四壁の勾配が緩い。

長軸に沿って土層を観察したところ、黄褐色土・茶褐色土を埋土とし、2度再掘削された様子が看取できた。粘土や焼土・炭といった顕著な埋土は見られない。

出土遺物

土器等（図版53、第54図1） 厚底の陶器の小椀であるが、一見磁器かと思われるほどに灰黄色の緻密な胎土をもち、他の出土陶器のほとんどが器表が粗いのに対して、これは非常に滑らかなものとなっている。内面から口縁部外面に掛けて薄く施釉され、淡黄緑色に発色する。ただし、内面の施釉は不十分で、露胎となる部分がある。唐津焼であろう。

332号土坑（図版23、第55図）

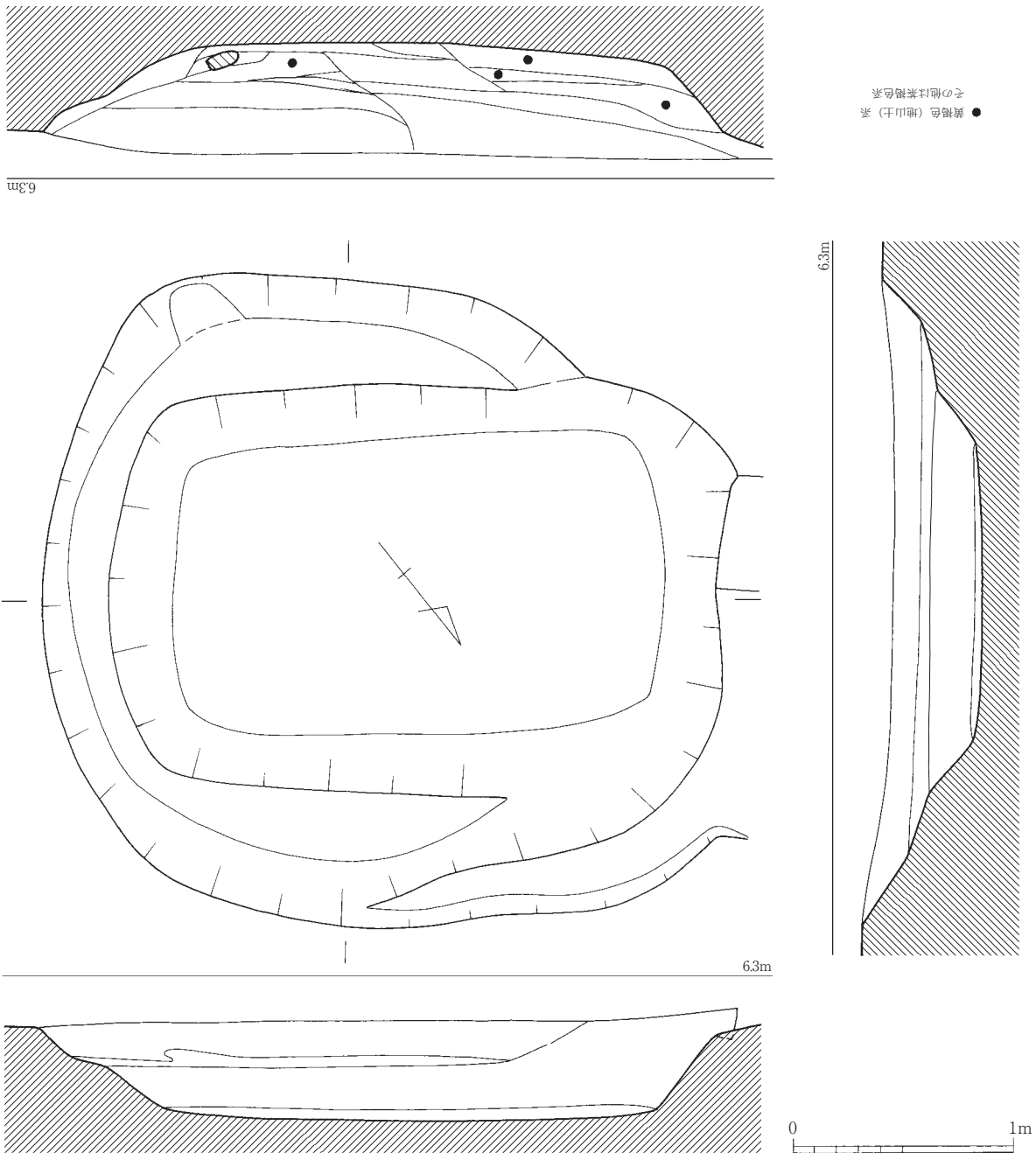
330号土坑の北、3・6区の境に位置する。一見二段墓壇の土壇墓のような平面形で、上段は2.8×1.5mの隅丸長方形を呈し、0.9m近い深さをもつ。下段は1.8×0.6mの長方形に近い掘り込みとなり、深さは0.1mほどであった。

短辺に平行するラインで土層を観察したが、いずれの層ももレンズ状の堆積を見せていて土壇墓ではない。

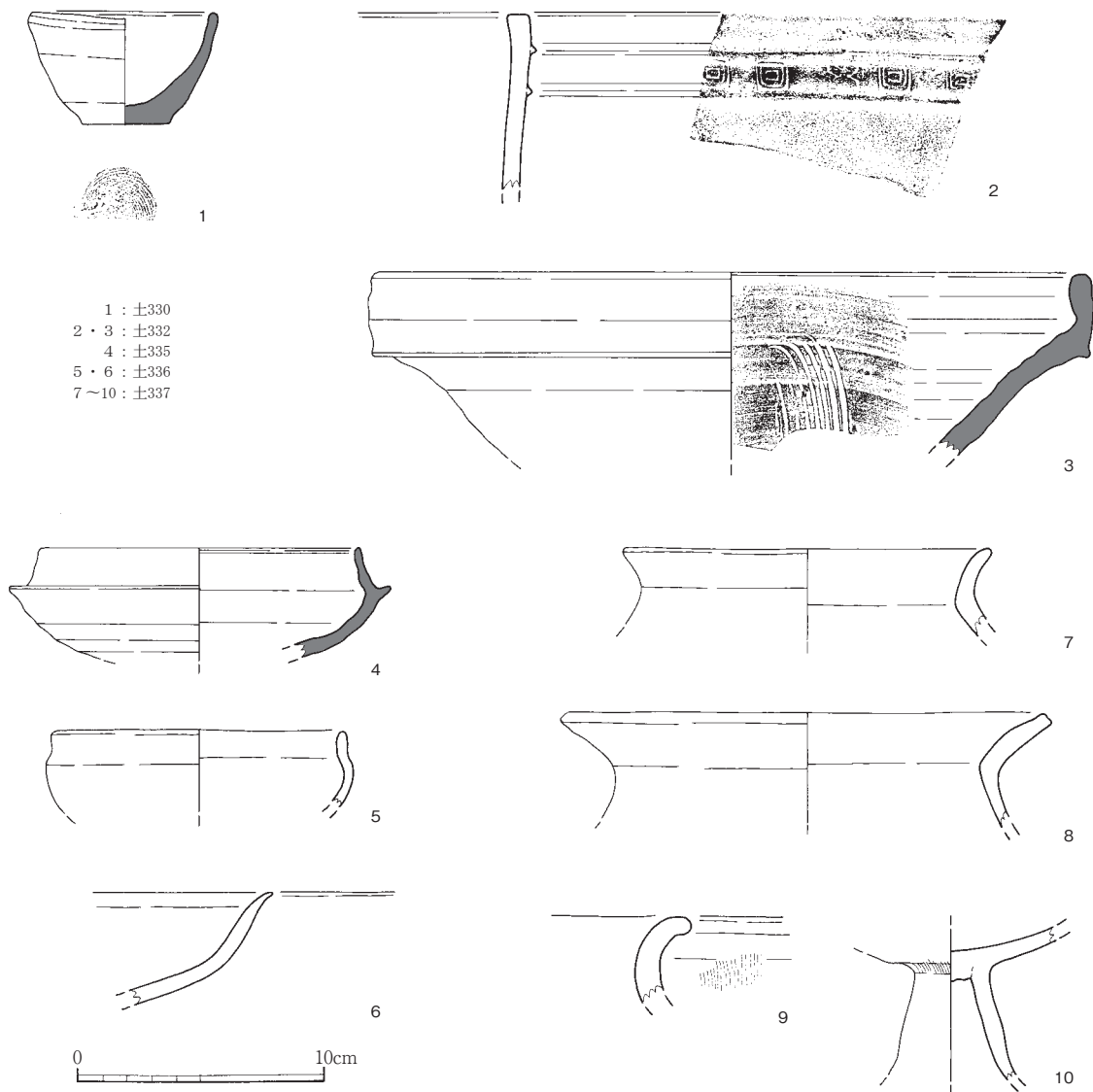
出土遺物

金属製品等（第41図34） 78.5gの鍛冶滓である。

土器等（第54図2・3） 3は口縁部が直立する瓦質の火鉢で、器肉は灰黄褐色、内外面の器表は黒色化する。口縁部外面下に断面三角突帯2条を巡らせて、その間に多重四角文・花文のようなスタンプを刻む。3は備前焼摺鉢片で、口縁部の1/4が残存。胎土には大粒の砂粒が見えるが概ね



第53図 土坑実測図17：330号土坑（1/30）



第54図 土坑出土土器等実測図9：330・332号土坑（1/3）

良好といってよく、器表も非常に丁寧に仕上げられている。

石製品（図版56、第47図26） 石英斑岩を使用した砥石で、長側辺の4面をよく使用している。図上端は折損するが、下端は本来のもののように、小型品。全体に赤味をもっていて、被熱したようである。

333号土坑（第58図）

330号土坑の南、36号住居跡の北西辺を切って位置する。直径0.8m余の円形土坑で、深さも0.8mほどである。後述する334・335号土坑と近接し、形状も共通するところがあり、関連する遺構である可能性がある。

出土遺物

金属製品（第28図8） 青銅製の足金具である。実測図を作成後、所在不明となっている。

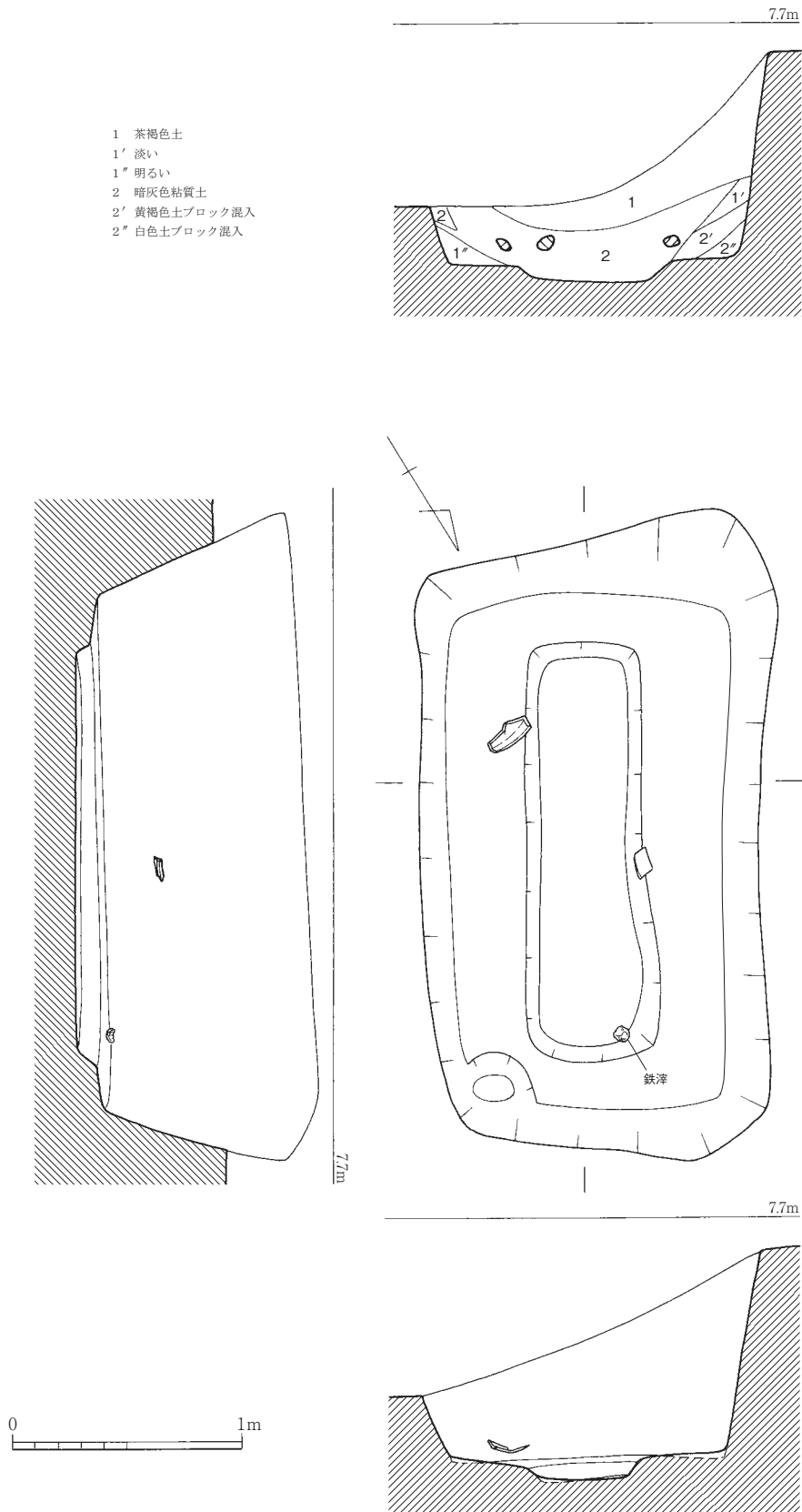
334号土坑（図版23、第58図）

調査時は611号土坑としたものを改める。333号土坑の南西に近接し、37号住居跡の北東辺を切る。直径0.7mほどのやや歪んだ円形平面をもち、深さは図化を失念して不明である。

内部には破碎された備前焼の甕が乱雑に入れられていた。

出土遺物

金属製品（図版53、第56図） 銅銭2枚と残片が出土しているが、出土状態は未確認である。
 開元通宝（初鑄621年）は文字や縁などの突出部は淡い水色、凹部は白色となる。直径23mm。永



第55図 土坑実測図18：332号土坑（1/30）

樂通宝（初鑄1411年）は直径25mm。破片は「元」・「豊」・「通」の草書体が残り元豊通宝（初鑄1078年）であろう。

土器等（第57図1） 備前焼甕の下半部で、欠損が多く底部と体部は接合不可であった。

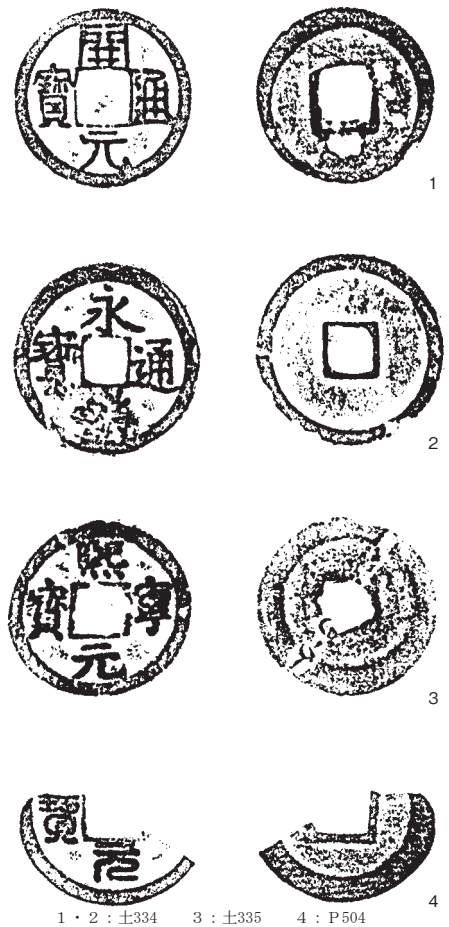
335号土坑（図版23、第58図）

これも調査時は612号土坑としたものであるが改める。334号土坑の南西、37号住居跡の内外に現代の攪乱坑があるがその縁で検出したものである。これも内部に細片化した備前焼甕が詰まっていた。平面形は乱れるが、軸長はやはり0.7mほどである。これも図化を失念し、深さは不明。

出土遺物

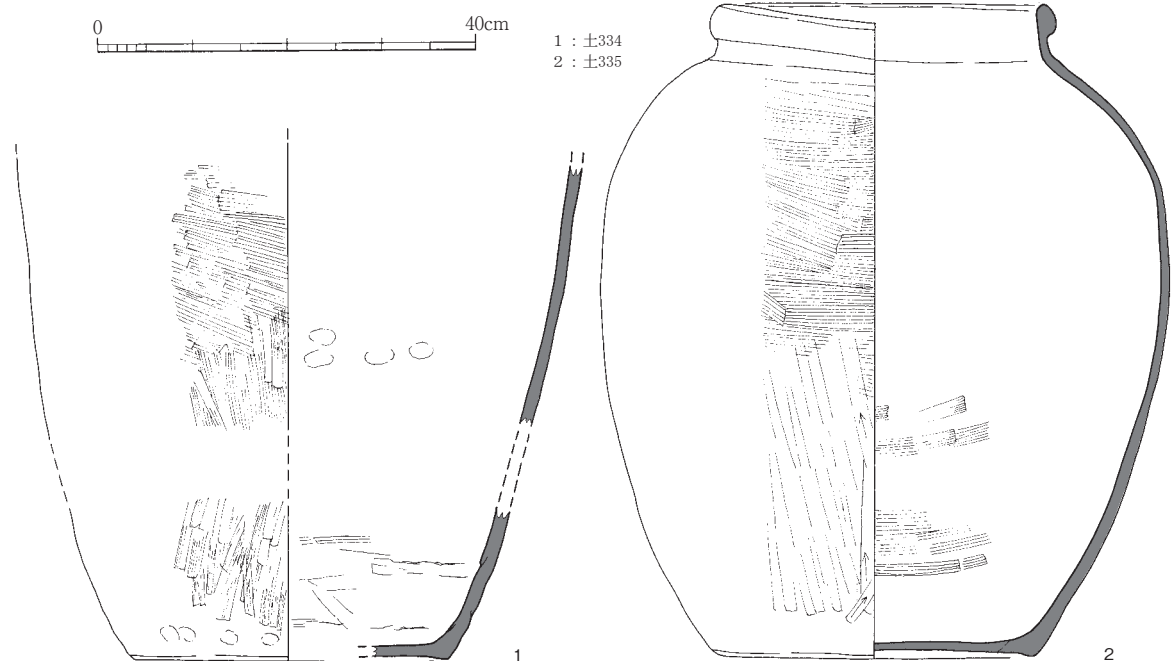
金属製品（図版53、第56図） 熙寧元宝（初鑄1068年）が1枚出土している。銅質が悪く、スが多く入る。いわゆるビタ銭であろうか。

土器等（図版53、第54図4・57図2） 第54図4は古墳時代の須恵器杯で、口縁部付近の1/4が残存する。胎土・作りともに良好である。周辺の竪穴住居からの混入であろう。第57図2はほぼ完全に復元できた備前焼壺である。頸部は短く、ほぼ垂直に立ち上がって玉縁口縁に続く。体部は張りが弱く、底径と口径が35cm弱とほぼ同じ数値となる。器高は68cm前後である。体部外面では中位やや下方で器面調整の原体、調整方向を変えている。基本は刷毛目原体と同じようなものであろうが、下位では縦方向に用いて篋削りの

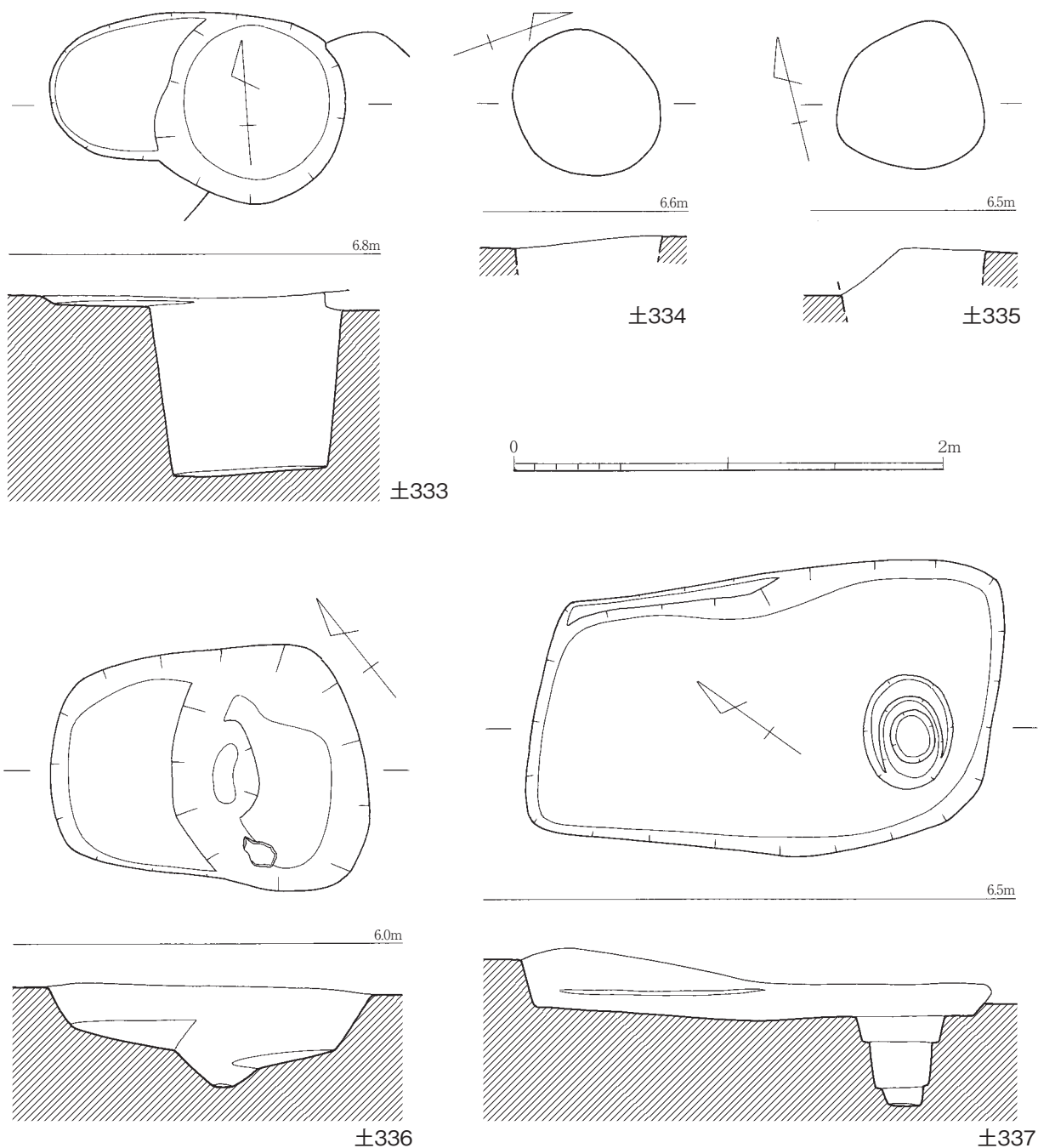


1・2：土334 3：土335 4：P504

第56図 出土銅銭拓影：334・335号土坑・P504 (1/1)



第57図 土坑出土土器等実測図10：334・335号土坑 (1/8)



第58図 土坑実測図19：333～337号土坑（1/30）

ような効果を見せている。

336号土坑（第58図）

3区北西隅付近、38号住居跡の南東に近接する。調査時は613号土坑と呼称していたものをあらためる。長さ1.5m、幅1.1mほどのやや歪んだ隅丸長方形を呈し、深さは0.2～0.4mを測る。中央の深い部分が直接この遺構に伴うものか確認できていない。

出土遺物

土器等（第54図5・6） いずれも土師器。5は体部が弱く内彎し、口縁部をほぼ直立させる椀の小片。6は高杯杯部であろう。これらは器表が荒れている。

337号土坑（第58図）

3区北西隅、38・41号住居跡の間に位置する。調査時は614号土坑としていた。

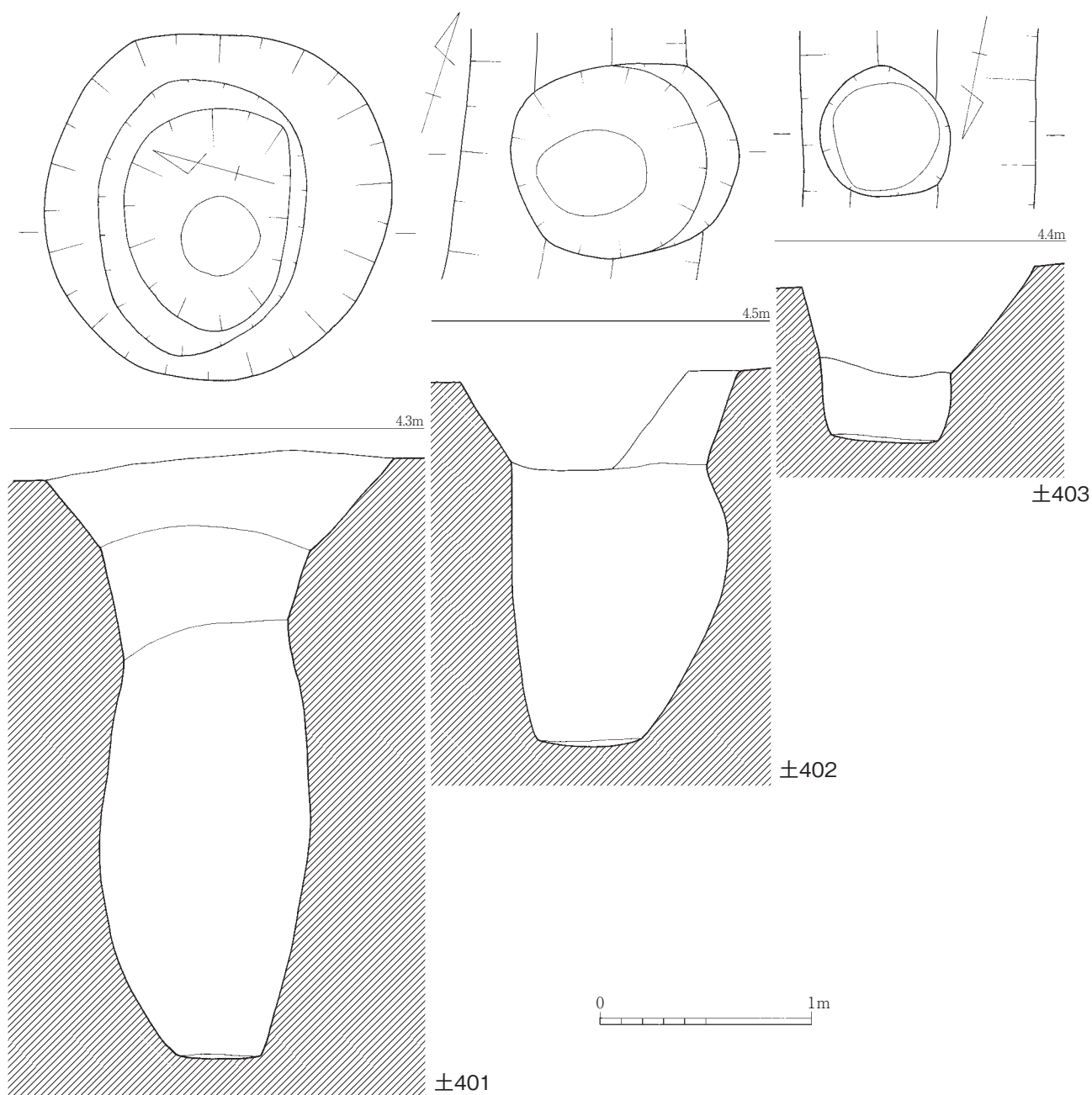
長さ2.2m、幅1.3mのやや歪な長方形プランを有し、深さは最大で0.3mを測る。これも内部の柱穴様の遺構が土坑に伴うものか確認できていない。

出土遺物

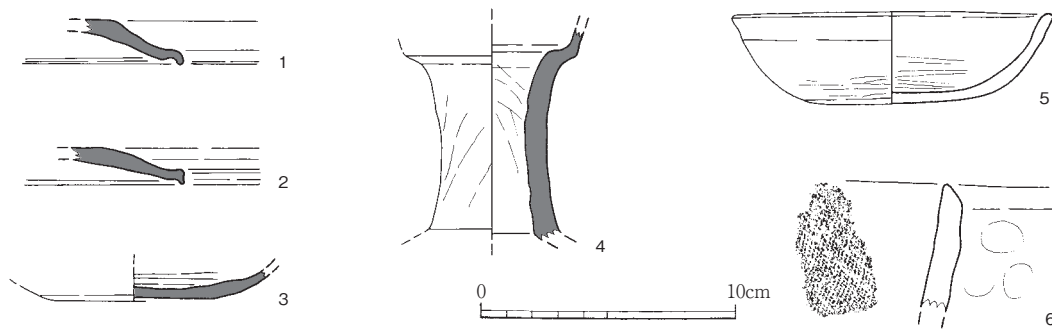
土器等（第54図7～10） いずれも土師器である。7は外面が焼けて赤変、内面に焦げ付きの痕跡がある甕小片。8は口縁部が強く外反し、端部に面をもつ甕小片で器表が荒れている。9も小片。10は図示部がほぼ完周する高杯で、これも焼けて赤変、器表の多くが剥離している。

401号土坑（図版24、第59図）

4区北半、7号住居跡に接するような位置にあるが、この辺りは1・4区の比高差がなお0.7mほどあって、住居跡の西辺が失われるために実際の切り合い関係はない。



第59図 土坑実測図20：401～403号土坑（1/30）



第60図 土坑出土土器等実測図11：401号土坑1（1/3）

土坑の上端は直径1.65mのほぼ円形プランとなり、浅い部分でわずかに屈曲、直径0.35mの底部に至る間はわずかに膨らんでいる。なお、床面は上端の中心からやや南西へ偏し、深さは2.9m弱ほどである。床面付近近くから比較的大型の礫が数点出土したが、これも投げ込まれたものであろう。

遺構検出面は標高4.2m、床面は同1.3mほどであるが、標高2.9m付近を境に以上は阿蘇4由来の灰白色、以下は同じく軽石を含む青灰色砂質で、深くなるにつれて淡褐色となっていた。

出土遺物

土器等（図版53、第60～62図） 第60図1～4は須恵器、5・6は土師器である。1・2はいずれも杯蓋の小片で、1は端部を折り曲げて、2は端部を下方につまみ出して口縁部を作る。3は外底面が丁寧に回転篋削りされた杯。4は須恵器長頸瓶であろう。外面の一部が縦方向に灰を被って黒色化する。

5は丸底の底部から体部が内彎しつつ立ち上がり、口縁部付近を強く横撫でして小さく外反させる椀。器表が荒れているが、外底面は篋削りの後に篋磨きを施し、体部内外面にも篋磨きの痕が見える。口縁部付近の1/4が残存。6は塩壺の小片。

第61図1～4は平瓦片。いずれも凹面に布目痕、凸面には縄目叩きが残る。4では側面の切断面にも一部に布目が見られる。また、1・3は一部が、2は全体に赤変している。第62図5・6は玉縁葺丸瓦片である。両者ともに胎土良好で、凸面の縄目叩きを部分的に丁寧な篋削りあるいは撫でで消す、また凹面の布目痕が非常にシャープである点などで共通する。

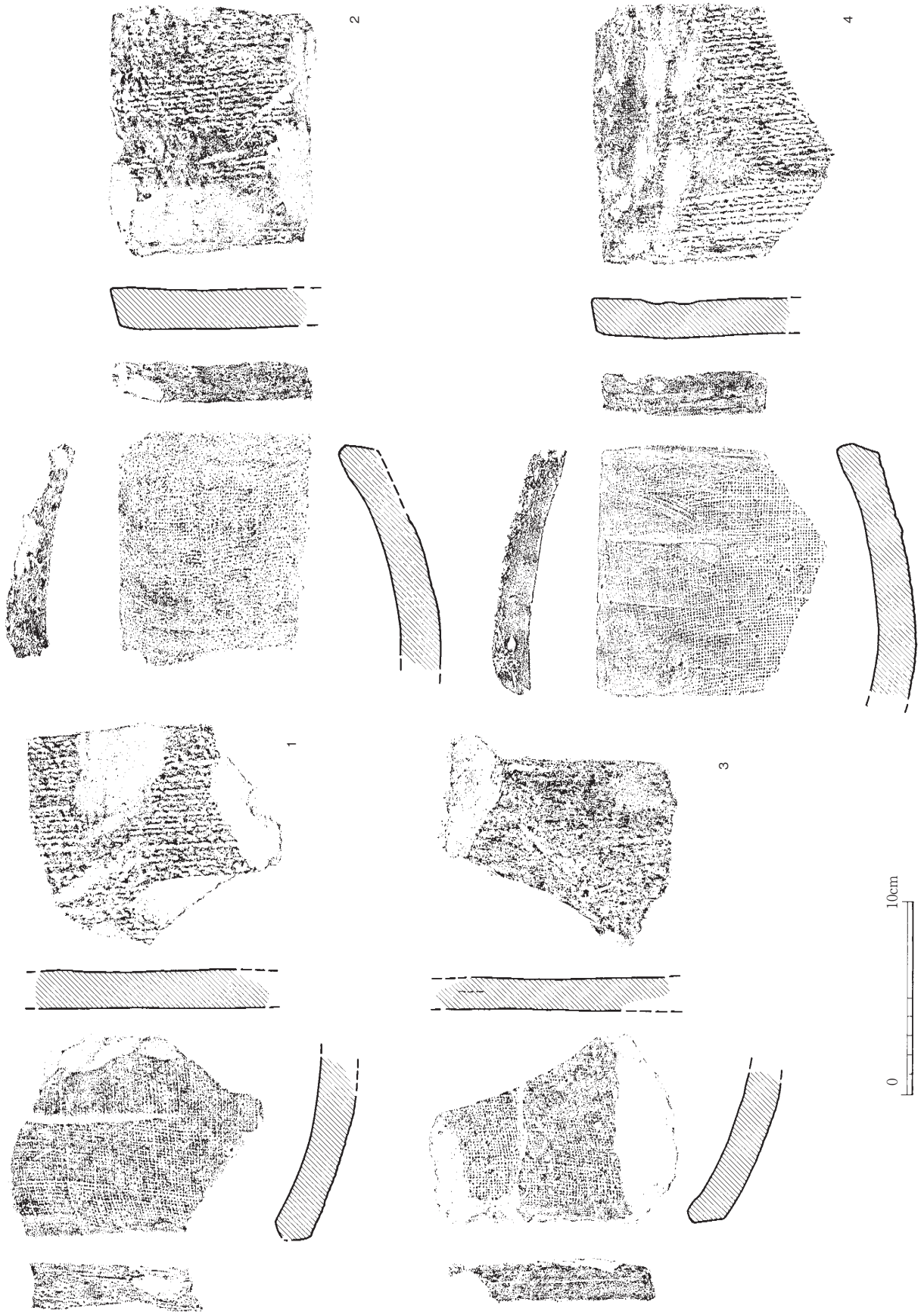
石製品（図版56、第47図27・28） 27は灰白色の石英斑岩を用いた砥石。長側辺の4面を使用するが、1面はX字形に条痕が残る。「南半上層」の注記がある。28は安山岩を用いていて、一端を敲打、剥離する。それ以外に使用の痕跡は見えない。

402号土坑（第59図）

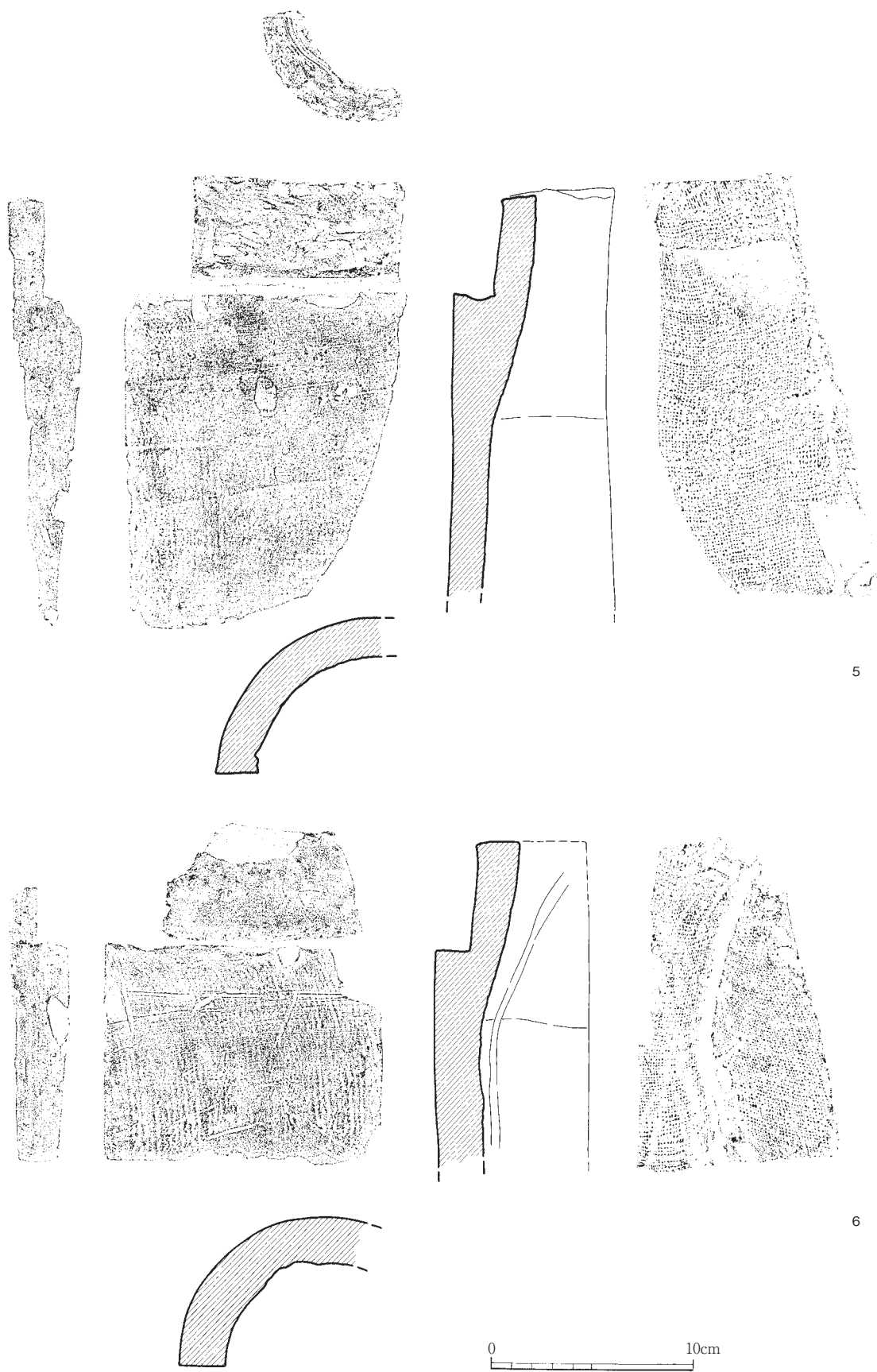
1区南端近くの西側、401号溝とした遺構と重複し、切られる。現状で長軸1.1m、短軸0.9mの長円形プランとなり、401号溝底付近で稜をなして、以下は中膨らみとなる。床面は0.4～0.5mの扁円形で、深さは1.8m弱である。ここでは黄白色層は標高3.6m付近以上で、そこから青白色となり、標高3.2m付近から下位は軽石を含む淡褐色層となる。床面付近では軽石が大きくなるとともに多くなるようである。

出土遺物

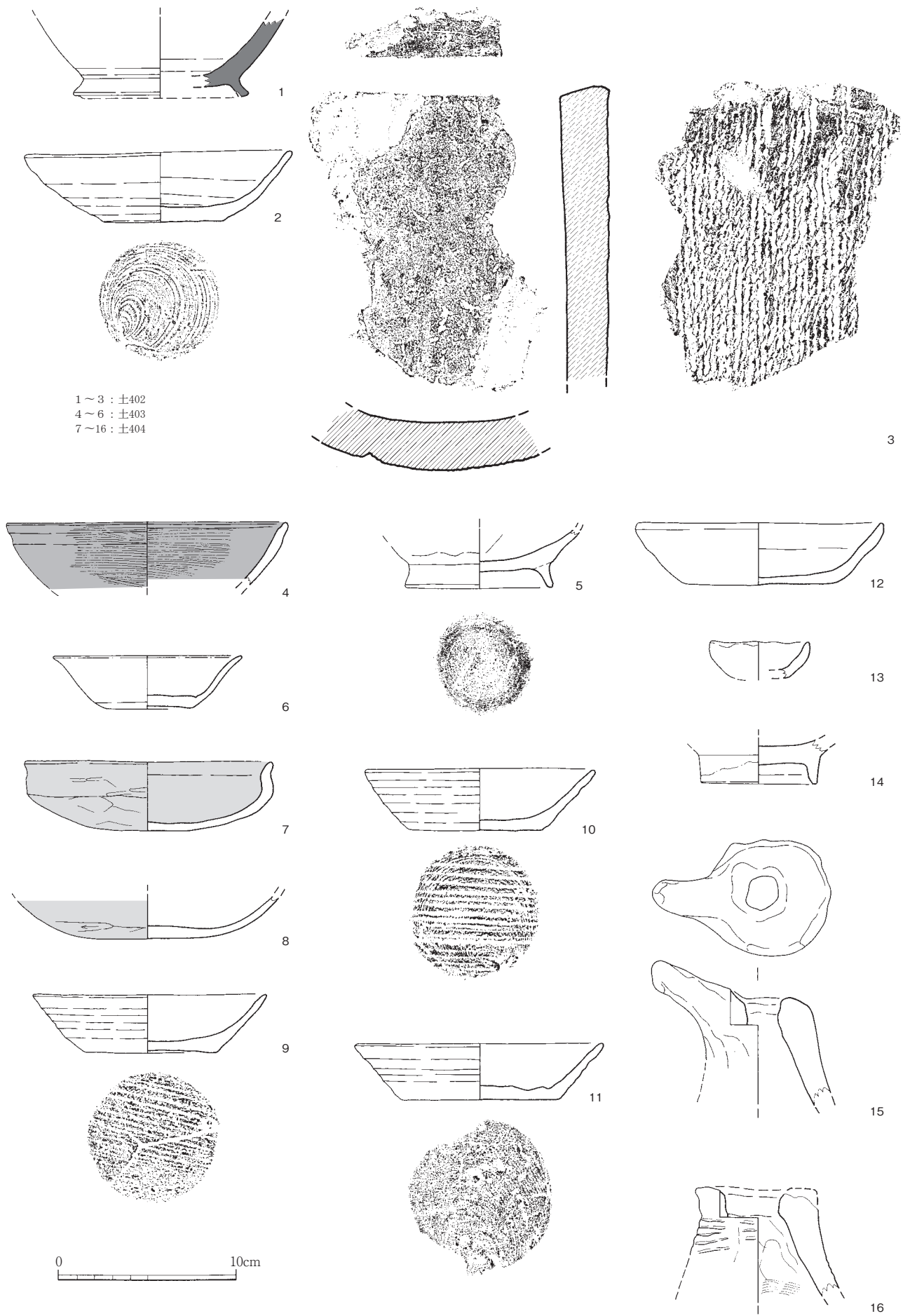
土器等（図版54、第63図1～3） 1は須恵器瓶子の底部片で、1/4が残存する。全体を丁寧に横撫でで仕上げている、胎土も精良である。2は完形の土師器杯。回転糸切り痕を残す平底の底部から、体部は緩やかに内彎しつつ立ち上がる。胎土は粗いが作りは丁寧で、灰黄色～黄白色となる。



第61图 土坑出土土器等实测图12：401号土坑2（1/3）



第62图 土坑出土土器等实测图13：401号土坑3（1/3）



第63图 土坑出土土器等实测图14：402~404号土坑（1/3）

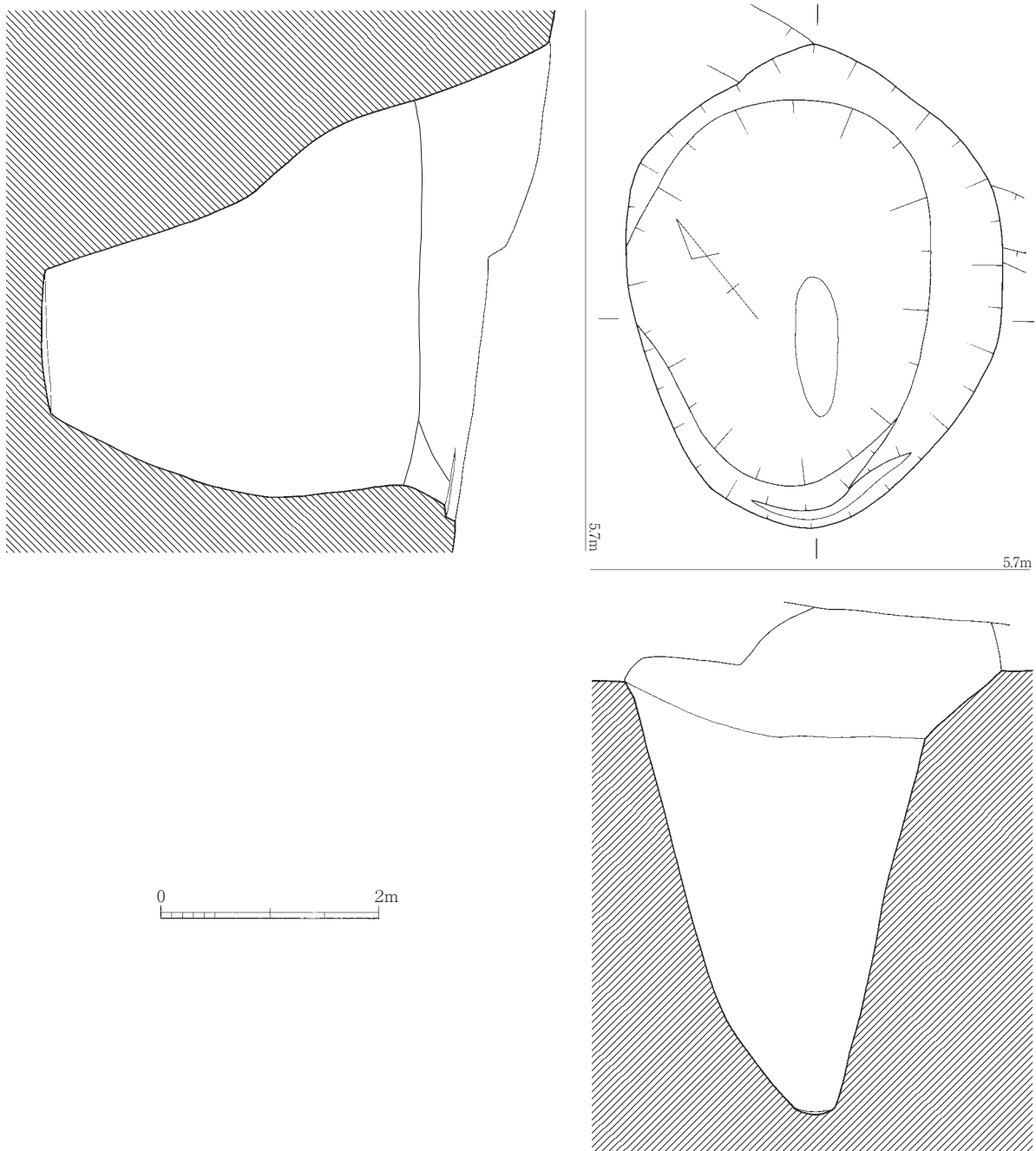
3は平瓦片で、凸面の縄目叩きは通有のものであるが、凹面に布目痕が全く見えない。凹面にはシワが多く、一部に篋削りのような痕跡もあることから、桶を使わずに粘土塊を直接叩いて作ったものであろうか。

403号土坑（第59図）

402号土坑の南にあって、この土坑は401号溝の溝底で初めて確認した。直径0.6m、深さ0.5mの円形土坑である。

出土遺物

土器等（第63図4～6） 4は黑色土器碗の1/4の残片。口縁部外面を強く横撫でして凹ませ、口端部内面も小さく凹ませて、器面全体を細密な篋磨きで埋めている。5は底部が完周する土師器碗で、灰黄色～黄白色を呈する。胎土は良好、作りも丁寧である。なお、外底面は横撫でを施してい



第64図 土坑実測図21：404号土坑（1/60）

て、切り離し痕は見えないようである。6は白磁口禿皿で、1/2ほどが残存する。口端部付近のみ釉を削り取って露胎とし、そのほかは全体に青味帯びる白濁釉が施釉される。

404号土坑（図版24・25、第64図）

5区北端の西側に位置する。長軸4.4m、短軸3.4mの扁円形を呈する大型土坑で、深さは4.8mほどであった。床面は中央から偏っていて、長軸1.3m、幅0.4mほどの長円形となる。他の井戸と思われる土坑とは大いに形状が異なる。

発掘途中の長軸線に添った土層を写真に残しているが、それによれば標高4mほどの稜線から上位はほぼ一様な赤褐色土が、それ以下は青灰色～暗灰色の粘質土が堆積していた。床付近は湧水のために細部を確認できていない。

出土遺物

金属製品（図版54、第28図7） 「下層」の注記がある小刀で、刃部先端が丸みをもつことから鋒に近いようである。刃部のほとんどを欠損し、柄には目釘穴が一つ見える。残存長25.1cm、柄長8.0cm、背厚0.4cmである。

土器等（図版54、第63図7～16） 7～13は土師器、14は白磁、15～16は弥生時代末頃の土器である。また、13は「上層」、それ以外はすべて「下層」の注記がある。

7は浅く丸味をもつ底部に短く外反する口縁部がつく椀で、小片からの復元で口径には不安がある。体部外面下半から底部にかけては不定方向の篋削りの痕が見え、その上をやや雑な篋磨きで覆っていたようであるが器表が荒れている。ただ、内外面の処々に赤色顔料が残存している。8も7と同じような器形の椀であろう。外底面の調整技法は7と同様で、これも外面に赤色顔料が残る。

9～11は平底から斜めに直線的に立ち上がる体部といった器形、体部外面に水挽き痕が顕著なこと、そして暗灰色となる色調などで共通点の多い皿である。特に9・10は口径13cm、器高3.4cmほどで、胎土に金雲母を多く含むこと、外底面のスタレ状圧痕が目立つことなどより共通点をもつ。

11は口径14cm、器高3.2cmと、先の2点に比して大きく低くなっている。また、金雲母もやや少なく、スタレ状圧痕も見えない。12は口径14cm、器高3.5cmで、法量や雲母が少ないことは11に近いが、水挽き痕は見えない。これも外底面には回転糸切り痕・スタレ状圧痕が残る。

13は手握ね土器で、小片のため復元形状に不安がある。

14は白磁で、高高台が1/3ほど残存。

15・16は支脚で、明らかに混入である。

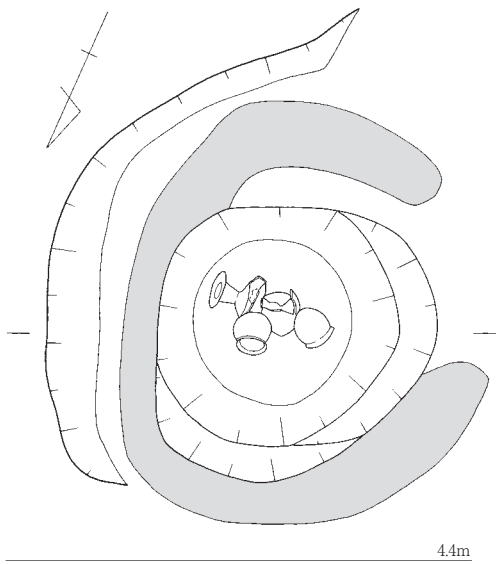
405号土坑（巻頭図版1・図版25、第65図）

404号土坑の南に位置する。上端の形状はやや歪んだ円形を呈し、直径は1.1mを測る。その肩部には10～30cmの幅で白色土が敷かれたようであるが、明瞭な高まりは認められなかった。また、土坑の北東側、本来的に高位となる部分は一段掘り下げて平坦面を造成したようである。

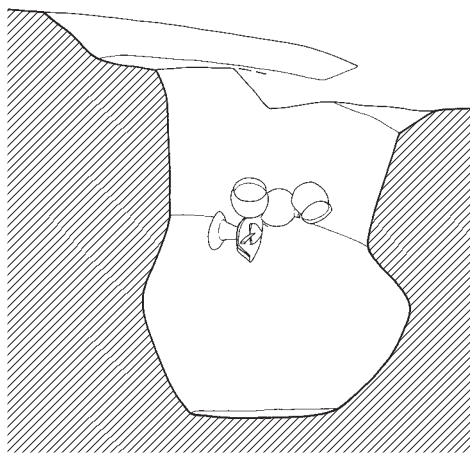
深さは1.4mほどで、床面の標高は2.7m。床は掘形の中央に位置するといつてよい。中位までは直線的な壁が残存するが、それ以下は崩落のため膨らんでいて、その境付近で完形の土器群が出土した。土器群から下位の埋土には樹皮のついた小枝などが多く入っていたが、意図的に入れたという感触は得られていない。

出土遺物

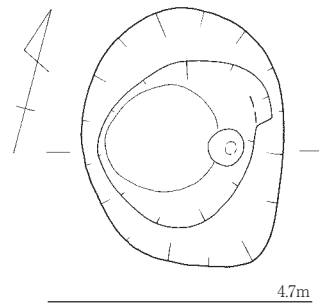
土器等（図版54、第66図） いずれも土師器である。1は球形体部に短く外反する口縁部を付



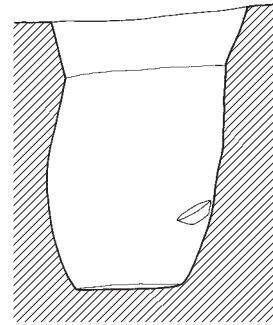
4.4m



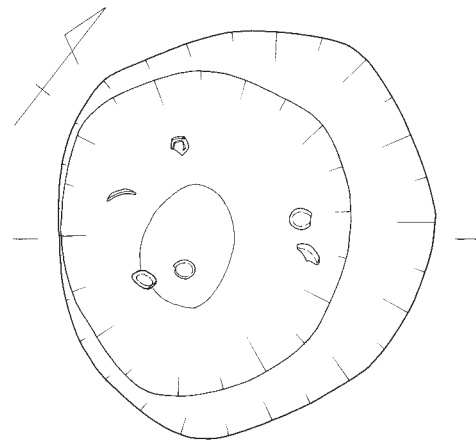
±405



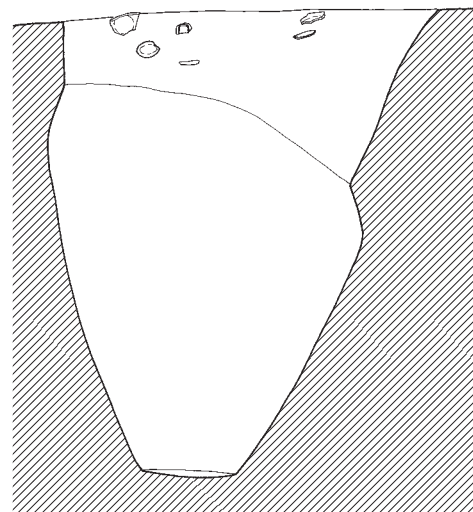
4.7m



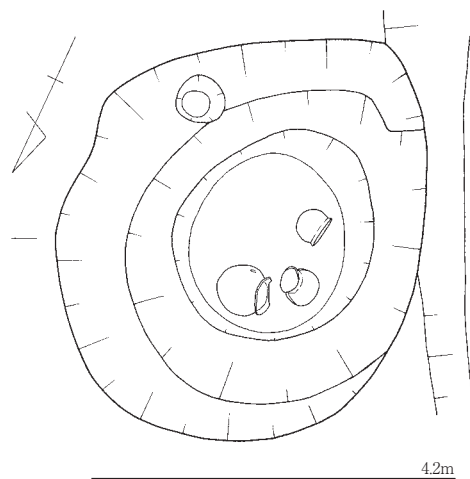
±409



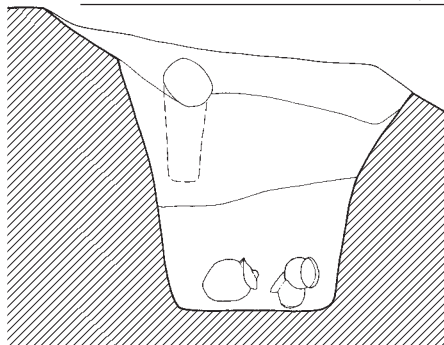
4.7m



±410



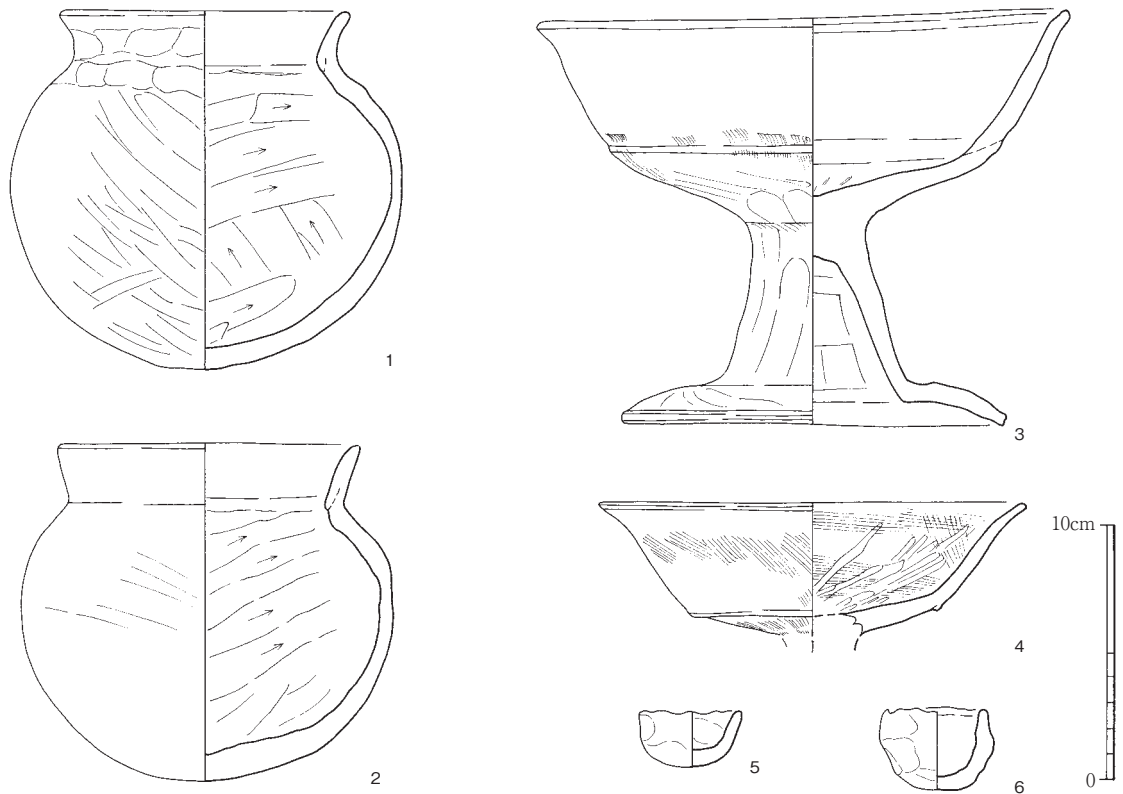
4.2m



±406



第65图 土坑实测图22：405·406·409·410号土坑（1/30）



第66図 土坑出土土器等実測図15：405号土坑（1/3）

す甕で、完存する。底部付近が赤変、そこから肩部付近にかけて煤が付着、それ以上は灰黄色となっていて、使用済みの土器であることが判る。外面の調整は「弱い刷毛目」あるいは「弱い篋削り」とでもいえる痕跡であるが、砂粒の移動がほとんど見えないことから篋削りを意図したものではないようである。2もほぼ完存する甕で、これも球形体部に外傾する口縁部を付す。これも底部付近の外面が赤変し、あちこちで器表が弾けて剥離している。剥離していない部分には煤が付着する。これも体部外面の調整は「弱い刷毛目」といった感じである。

3は杯部上半の1/4ほどを欠くほかは完存する。口縁部は急角度で立ち上がり、端部を小さく外反させて内側へつまみ出す。脚部は裾が急角度で開きかつ内彎している。なお、脚内面の稜はシャープである。これは意図的に赤く焼き上げられたようである。4は杯部上半の1/3が欠失、それ以外はよく残る。内外面で刷毛目を多用していて、内面ではその後に篋磨きも使用してる。内外面に煤が付着するようである。

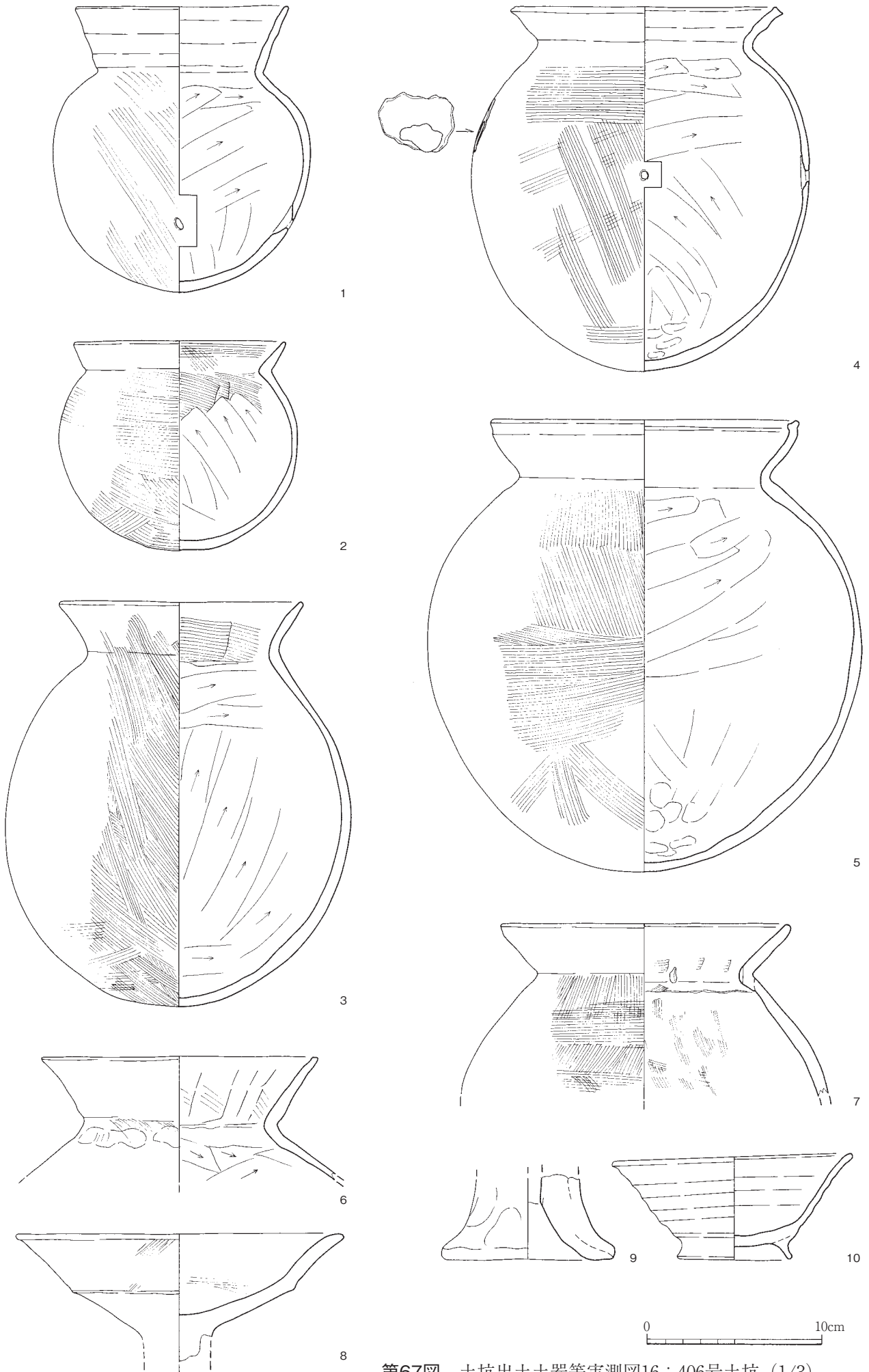
5・6は手捏ね土器で、5は発掘時に一部を欠損しているが本来は2点とも完形品が置かれていたようである。ただ、出土状態の把握ができていない。5は胎土精良といってよい。

石製品（図版56、第47図30） 安山岩を用いていて、表裏が比較的滑らかとなっている。側縁は3箇所が敲打によって平坦化している。

406号土坑（図版25・26、第65図）

405号土坑の南に近接し、西側を401号溝に切られることもあって平面形状が乱れている。上端は直径1.6mほどに復元できそうである。ただ、検出面から0.2~0.4mまでは壁の勾配が緩く、それ以下で急勾配となる。発掘時も湧水がひどく、床面の認定には若干の不安がある。

ここでは標高3.0mほどの床面に接地するような位置で3点の完形に近い土器が出土した。



第67图 土坑出土土器等实测图16：406号土坑（1/3）

出土遺物

土器等（図版54・55、第67図） 1～8がこの遺構に伴う土器で、9・10は混入であろう。1は口縁部が長く伸びるもので壺とするのが妥当であろうか。口縁部の一部を欠くほかは完存する。口縁部は微妙な曲線を描き、体部は球形に近い。体部外面は粗い刷毛目、内面は篋削りで仕上げる。胎土は良好のようで、最大径部より下位に焼成後に外面から敲打した小さな穿孔がある。2は球形に近い体部に短く外折する口縁部を付す甕で、口縁部の一部を欠いているが、意図的になされた可能性もある。体部外面は雑な刷毛目、内面は主として丁寧な篋削りで仕上げる。体部中位のやや下位から上方に煤が付着する。3は最大径部が下位にある体部が特徴的な甕で、最大径部から上には煤が付着する。体部外面は細かい刷毛目で仕上げているが、その遺存状態が非常によいことから、余り使用されていなかったのではないかと思われる。体部内面の篋削りも丁寧になされている。

4は口縁部の1/3を欠くほかは完存する。口縁部に微妙な変化を加えるあるいは肩部に横位の刷毛目を施す点などは古い要素であろう。体部最大径部付近に外側から敲打して開けた直径5mmほどの小孔があり、それと90度離れた肩部付近には内側から敲打して開けた1.5～3cmほどの不整長円形の孔がある。5も口縁部を強く内彎させて内側へ肥厚させる古い特徴をもつ甕で、体部の張りも強い。口縁部の1/4、体部の1/2ほどが残存する。これは器表の荒れが進んでいる。

6は口縁部の3/4が残存。1と同様に微妙な変化を加えた長い口縁部をもつことから、壺としたがよいのであろう。胎土・作りともに良好である。7は肩部に横刷毛を施しているが、体部内面を刷毛目で仕上げるなど全体に器肉が厚い。内面頸部下に粘土紐接合痕が見えるが、ここで剥離して擬口縁となっている部分がある。これは口縁部の2/3が残存。

8は高杯で、口縁部の2/3が残存する。焼けて赤変、全体に器表が荒れている。

9は弥生土器支脚であろう。焼けて器表が荒れている。

10は口縁部の3/4が残存する土師器椀である。高台は高く、体部は直線的に立ち上がって口縁部でわずかに外反する。胎土・作りとも良好で、水挽き痕が目立つ。外面は赤味をもち、内面は大部分が灰黒色で部分的に灰赤褐色となる。なお、高台内は丁寧に撫でられていて、切り離しの痕跡は見えない。この土師器椀は明らかに混入品であるのだが、この土坑出土と注記されていて、本来の帰属を明らかにできないのでここで紹介しておく。

409号土坑（図版26、第65図）

1区北端付近の西側にあつて、401号溝の西側（外側）で検出した主要な遺構は近接する410号土坑とこれだけである。上端は長軸1.0m、短軸0.8mの長円形といった平面形状であるが、床面は0.45m前後のほぼ円形となる。深さはほぼ1.1mを測り、床面の標高は3.5mほどである。

出土遺物

土器等（図版55、第68図1・2） 1は回転糸切り痕を残す平底から体部が内彎しつつ立ち上がり、口縁部が小さく外反する土師器椀で、口縁部内面に面をもつようである。暗灰褐色を呈し、内面は丁寧な撫で、外面はやや粗雑な感のある撫でで仕上げる。これは完存。2は口縁部・底部ともに1/3が残存する土師器椀で、これは低いが形状のしっかりした高台をもつ。体部が深くなるが、大きく見れば1に近い形状である。内外面の大部分を篋磨きで仕上げるが、器表の弾けが多い。なお、体部下端付近には篋削り痕が見え、高台内は回転糸切り痕が残る。全体に明黄褐色を呈する。

410号土坑（図版65・66、第65図）

409号土坑の北に隣接する。上端は直径1.5～1.6mの扁円形で、0.25～0.7m付近までは原形を留めるが、それ以下は崩れて中膨らみとなる。床面は0.35～0.5mほどの楕円形に近く、上端に対して南西方向に偏している。床面の標高は2.75mほどであった。

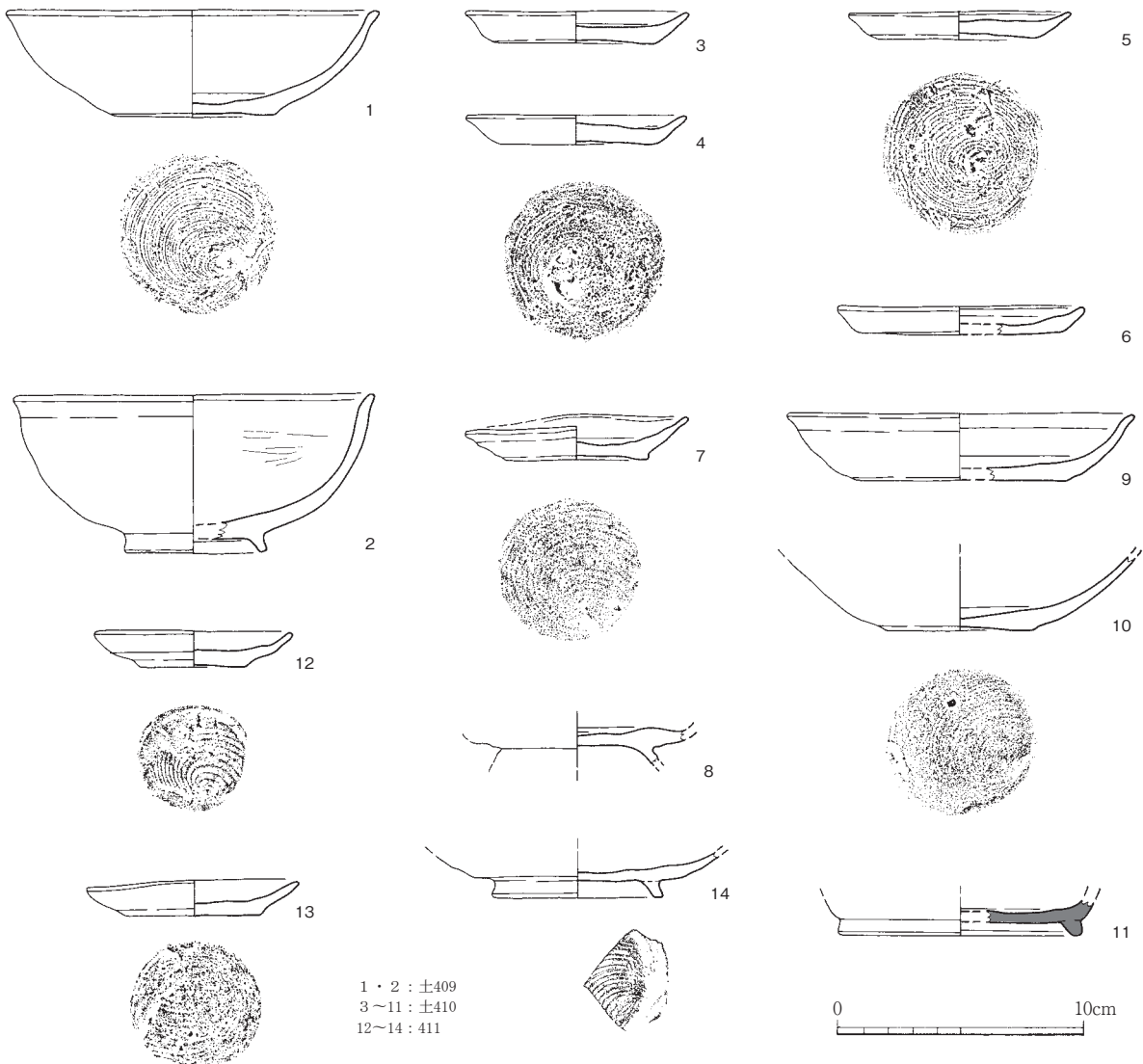
最上層付近で土層観察を行っているが、それによれば最上層では西に偏して灰褐色土とその直下に炭・灰層があり、その下は壁が残存している付近まで赤褐色系の埋土が0.4～0.5mほどの厚さで堆積、さらに下位には暗灰色土が入っていた。浅い部分から出土した土器のすべての層位を確認していないが、炭・灰層以上の層にあったものと思われる。地山は標高3.8mまでは黄白色、3.4mまでの間は暗灰色、それ以下は軽石を含む紫味帯びる暗灰色であった。

出土遺物

土器等（図版55、第68図3～11） いずれも土師器で、11は混入したものであろう。

3～5の小皿は復元口径9cmほど、器高1.1～1.3cmでほぼ同じ法量をもち、底部に回転糸切り痕を留める。6は復元口径10cmとなっているが、これは1/4の残片からの復元であるため、本来は9cmに近かったのかも知れない。7はほぼ完存する小皿であるが、先の3点に比して底径が小さく、体部が深い。

8は高台付の椀であろうか、底部が完周する。胎土・作りは良好で、全体に黄白色となるが、内



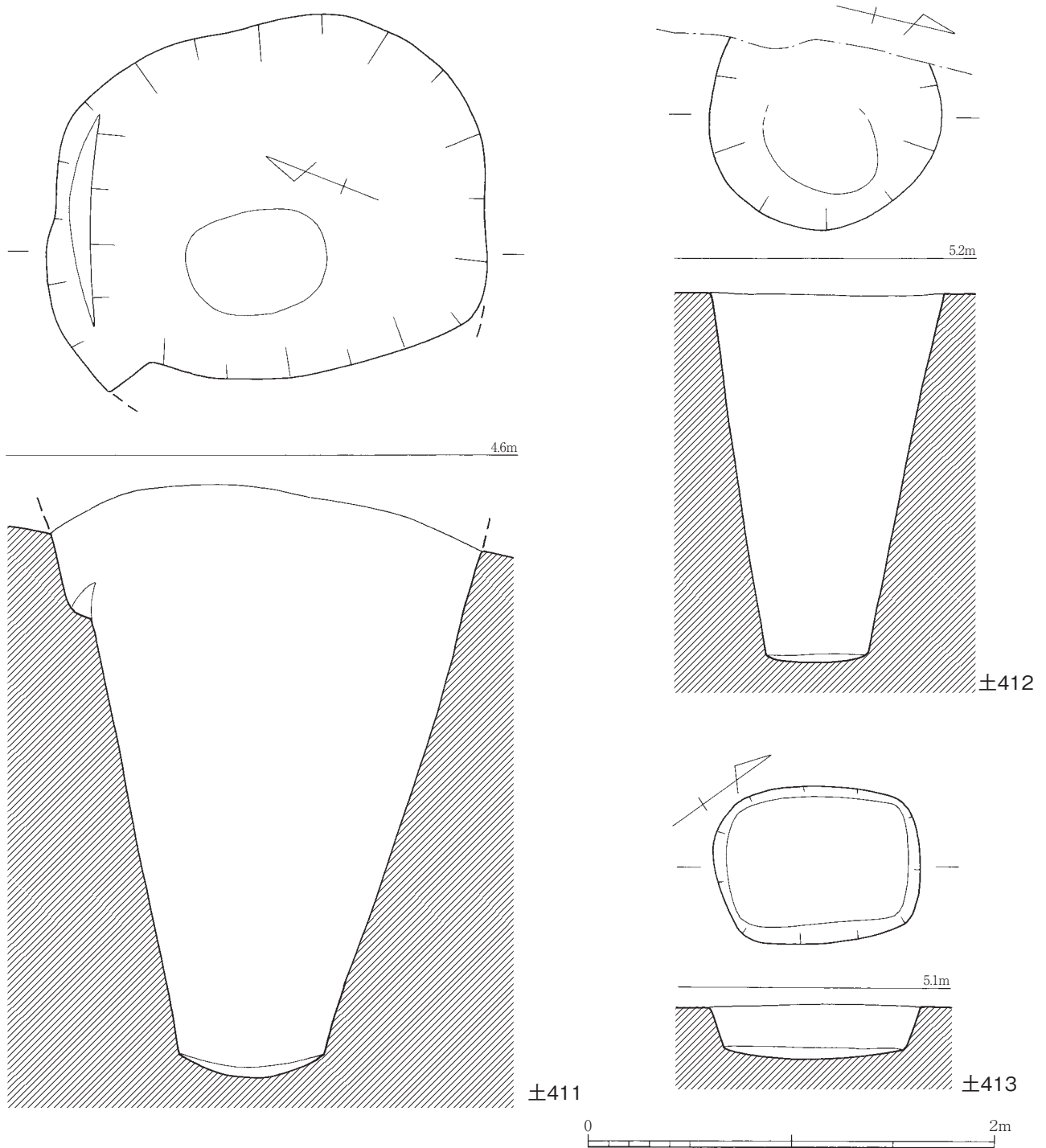
第68図 土坑出土土器等実測図17：409～411号土坑（1/3）

面に黒色系の付着物がある。9は口径14cmに復元できる皿で、器高は2.8cmである。底部は篋切りのようで、体部は内彎して浅く開き、口縁部はさらに弱く外反する。胎土・作りとも良好で、黄褐色系となり、口縁部付近の1/3が残存。10は無高台の椀であろうか、底部が完周する。これも胎土・作りは良好で、黄褐色系に発色する。外底面には回転糸切り痕を残す。

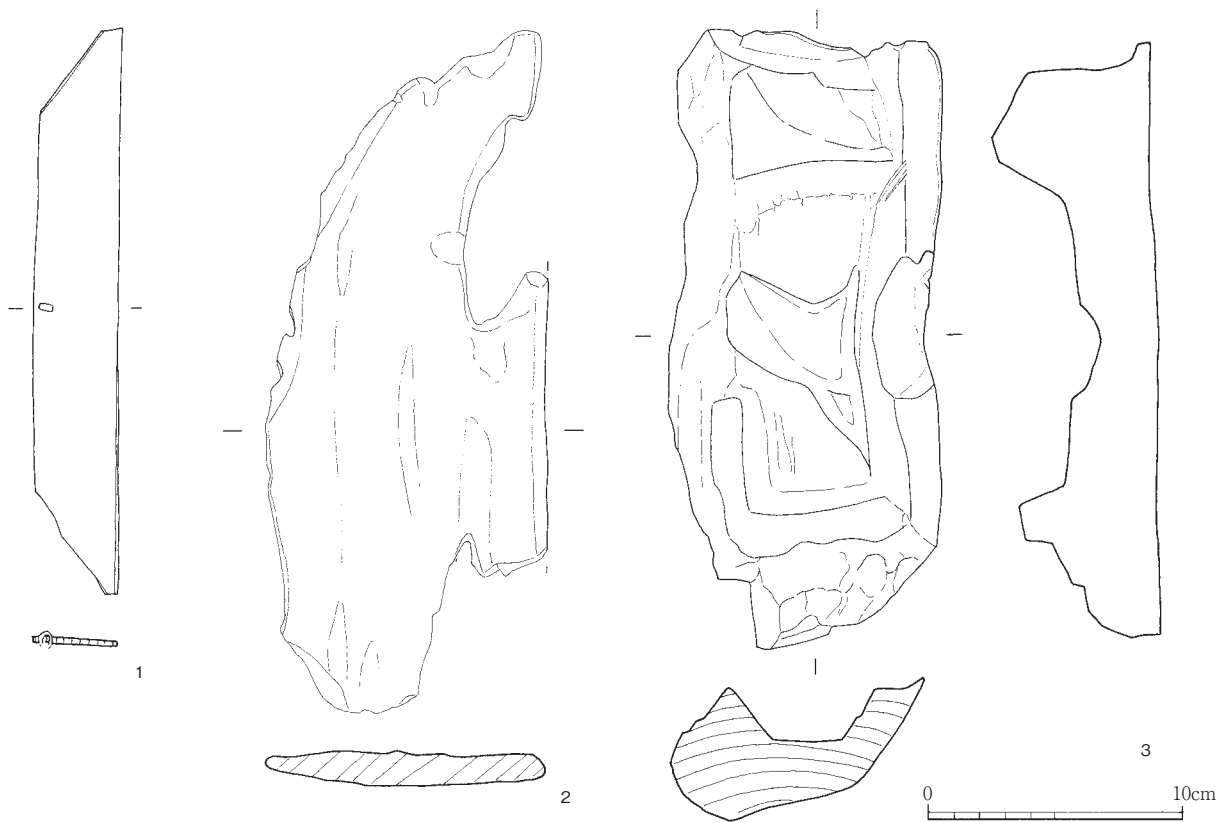
11は8世紀後半頃の須恵器杯身で、1/4が残存。外底面に回転篋切り痕がよく残る。

411号土坑（図版27、第69図）

4区南端付近、U字形に大きく曲線を描く402（505N）号溝の西端付近の東、溝に接するような位置にある。この遺構は4区南東端の調査時に検出、一部発掘を行ったものの完掘し得ず、南西



第69図 土坑実測図23：411～413号土坑（1/30）



第70図 411号土坑出土木製品等実測図 (1/3)

端の調査時に改めて再発掘を行った。そのこともあって、表土掘削時に掘り過ぎた部分があって上端の検出を一部失敗している。上端は直径2.1mほどの円形に近く復元できそうで、床面は0.5～0.7mの楕円形に近い形状となる。この壁体は直線の形状を留めている。

床面の標高は1.6mほどであった。

出土遺物

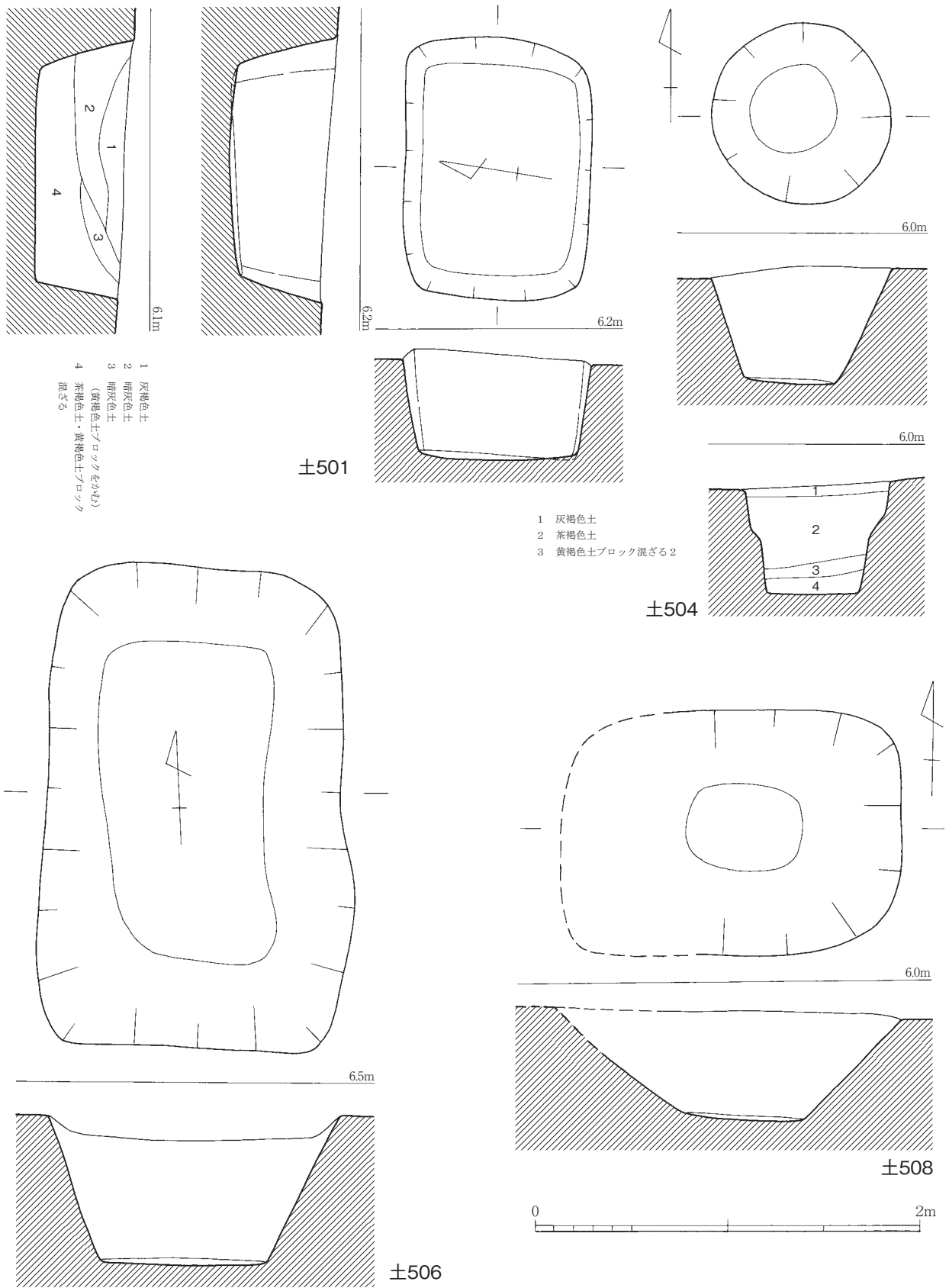
土器等 (第68図12～14) いずれも土師器である。12は底部が完周、復元口径8cm、器高1.5cmを測る。底部が肉厚で、体部は中位で腰折れとなる。半分ほどが赤変している。13も底部が完周。復元口径8.7cm、器高1.5cmで、底部・体部間にはしっかりした稜をもつ。14は低いがしっかりした形状の高台をもつ。胎土は精選され、全体に主として篋磨きを多用して丁寧に作られた土器で、内底面には格子状に篋磨きを施している。ただ、体部外面下端付近には篋削りの跡が見える。

石製品 (図版56、第47図31) 粘板岩製の砥石である。図表裏、右側面、下側面をよく使用している。

木製品 (第70図) 1は底板と思われるが、図示した材は幅3.5cm、長さ22.6cmを測る。図左に緊縛のための樹皮が残るが、右側がないことは折損したものであろうか。2は劣化が進んだ板材。3は横断面図右側面に加工痕が残る未製品と思われるもの。

412号土坑 (図版27、第69図)

4区北端付近で検出した土坑で、1/2を調査した。上端は直径1.1mの円形プランのようで、床面は0.4～0.5mほどの扁円形に復元できようか。壁体の崩落は見られない。深さは1.8mを測り、床面の標高は3.2mほどであった。茶褐色土に地山の黄褐色土ブロックが混入したほぼ一様な埋土で

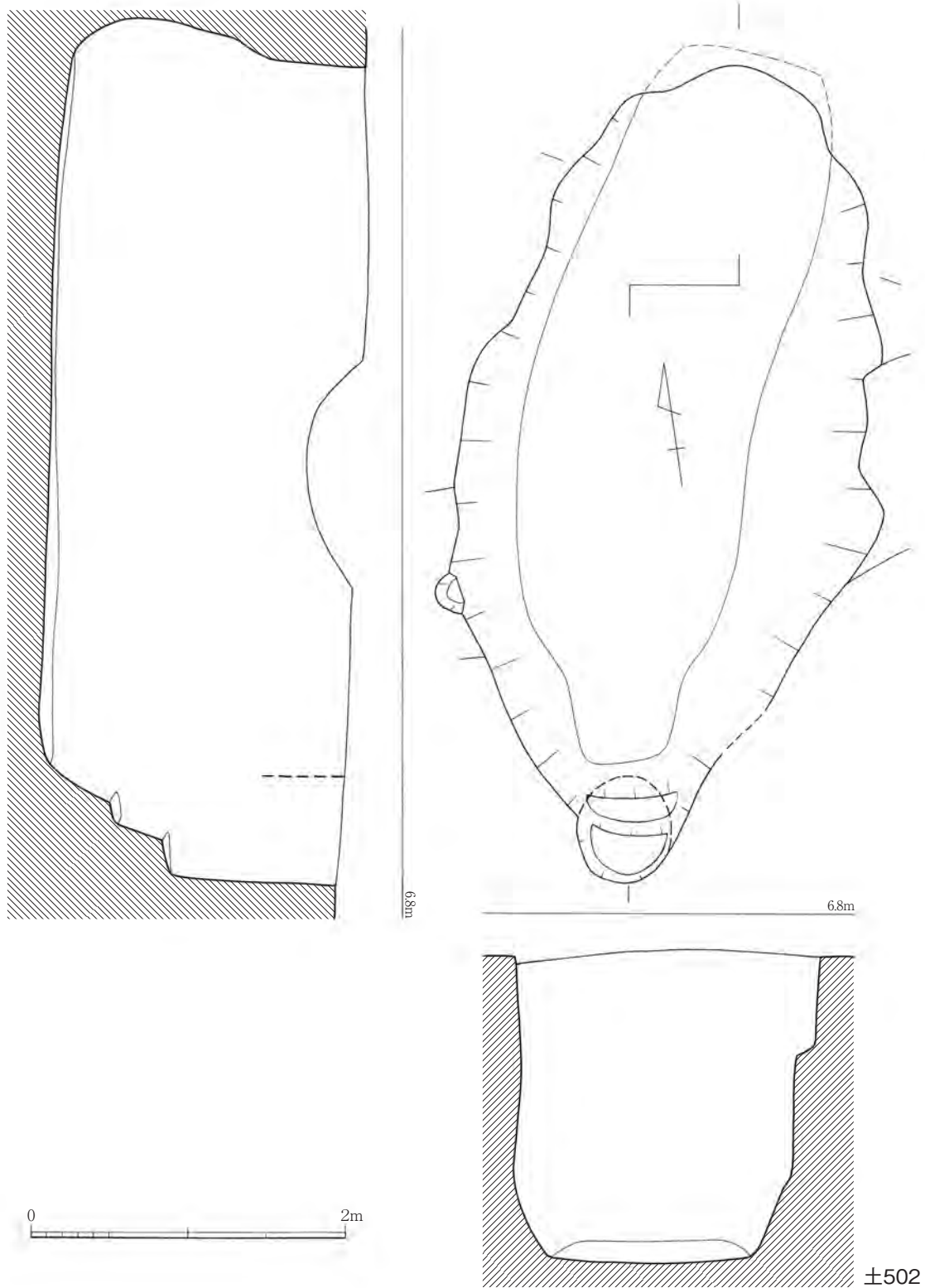


第71図 土坑実測図24：501・504・506・508号土坑（1/30）

あった。出土遺物はないが、形状から中世の井戸であると思われる。

413号土坑（第69図）

412号土坑の南東に近く位置する。平面は1.1×0.8mの隅丸長方形となり、深さは0.2mほどであった。これも出土遺物はない。



第72図 土坑実測図25：502・503号土坑（1/40）

501号土坑（第71図）

1号住居跡の東に位置する。遺構配置図では502号土坑を切るように表現しているが、502号土坑は地下式土坑で、その上端は崩落後の状況を示しているため、本来的に切り合い関係はない。1.35×0.95mの整った長方形プランをもち、深さは最大で0.5mであった。壁体は直に近い。

出土遺物はない。

502・503号土坑（巻頭図版3・図版28、第72図）

本遺跡で最初に発掘した地下式土坑で、当初は予想だにしていなかった種類の遺構であった。502号土坑の検出時は軸長1.6～2.3mほどの楕円形の落ち込みであったが、発掘の過程でオーバーハングし、その後の雨で上部が崩落、結果的に本来出入口の竪坑であった503号土坑と連続してしまった。

503号土坑は直径0.6mほどの円形プランで、検出面から1.1mで床面となるが、北に向かって階段が付されていた。2段あり、段差はそれぞれ0.3m、0.4mであった。

横穴部分の最終的な平面形は長さ4.6m、最大幅1.5mほどの隅丸長方形に近いが、竪坑から降りてすぐの付近は幅0.6m前後と狭い。また、平面形は全体に緩くカーブしている。すなわち、竪坑を降りて2mまではほぼ真北へ、それから先は東へ振れて、奥壁中心は南半中軸線の延長から0.8mほど東へずれている。発掘時のメモによれば横穴部分の埋土の半分近くは天井が崩落した地山土で、その上を茶褐色土～灰褐色土が覆っていた。

出土遺物

小片で図示していないが、白磁口禿皿、底部に格子叩きをもつ瓦質鍋、口端部を内側へ巻き込んで口縁部を断面三角形とする瓦質・土師質摺鉢片などがあるが、埋没状況や遺構の性格からみて、いずれも流入したもので本来的に伴うものはないといえるが、使用時期の下限の一端を示す。

504号土坑（第71図）

503号土坑の西に近接する。同じような円形土坑が2基並ぶように位置していて関連する遺構かと想定したが、上記したように502号土坑は地下式土坑の竪坑であった。

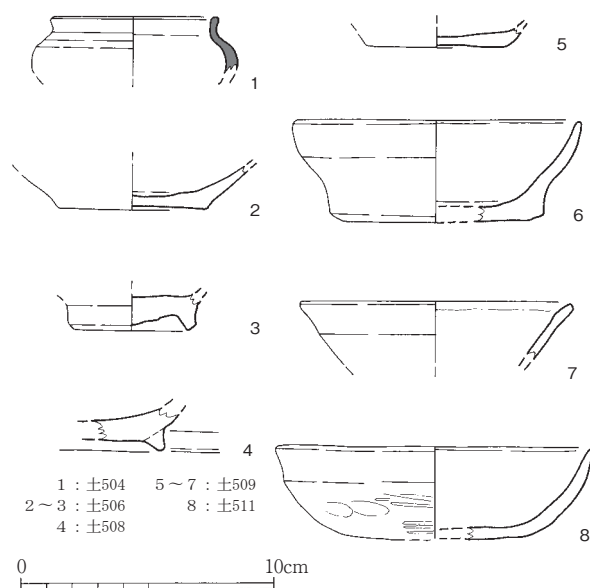
504号土坑は上端径0.95m、底径0.45mほどの、深さ0.6mほどの摺鉢状の土坑であった。埋土に特徴はないが、堆積が水平になっていて、自然堆積ではなく人為的に埋められたことを示すのであろう。

出土遺物

土器等（第73図1） 須恵器小型壺の小片で遺構に伴うものかわからない。

506号土坑（図版28、第71図）

5区南東端近く、505号溝の東側に位置する。ほぼ南北方向に主軸をもち、上端は2.5×1.5mの隅丸長方形プランとなる。壁の勾配が緩いた



第73図 土坑出土土器等実測図18 : 504・506・508・509・511号土坑（1/3）

め床面は1.6×0.9mほどとなり、深さは0.8mであった。

土層図を作成していないが、東西方向の土層メモでは床面付近に薄く地山の灰白色土があり、そのほかはほぼ一様に茶褐色土が入って、一部に灰白色土ブロックを噛むという状況であった。

出土遺物

金属製品（図版55、第28図9） 最上層から出土した銅製小椀である。底部は平底で、口縁部は六花弁とする。

土器等（第73図2・3） 2は器表が荒れた土師器皿の完周する底部片で、底部・体部間は明瞭である。外底面の切り離し痕は見えない。3は「下層」出土の同安窯系青磁椀底部で、これも完周する。胎土緻密で、黄緑色透明釉を掛ける。

508号土坑（図版29、第71図）

5区南西端に位置する。この付近では505号溝を横切る506号溝が北から南へ緩やかにカーブを描いているが、その南半部は他の遺構と重複あるいは包含層を形成していた（507号溝としている）。507号溝を除去後、最南端には東西方向の小溝508号溝が現れ、それと重複する位置にこの508号土坑が位置する。508号溝・506号溝を切ると判断していて、最も新しい遺構の一つと考えられる。

上端は1.6×1.3m、床面は0.6×0.45mの隅丸長方形のプランとなり、これも壁の勾配が緩い。調査時の土層観察メモによれば、最下層に薄く暗灰色土が堆積、その上面は緩くU字状となる。その上には茶褐色・黄褐色・灰褐色などの色調の土が混ざっていた。

出土遺物

土器等（第73図4） 器表が荒れる土師器椀の小片で、断面三角形の小振りの高台がつく。胎土に赤褐色粒が目立つ。

509号土坑（図版29、第75図）

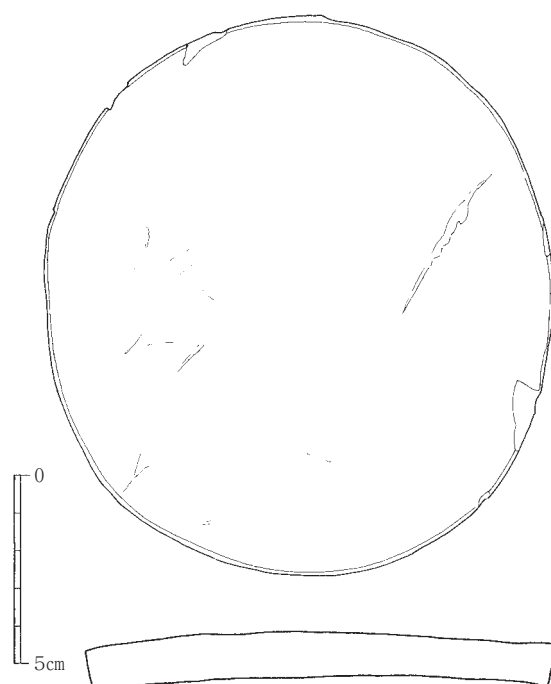
5区南は段落ちとなって4区へ続き、5区と4区402号溝の北辺肩との比高差は1.3mほどとなっている。509号土坑はその肩に位置している。なお、重複して溝状に表現したものはコンクリート基礎の抜き痕である。

平面形は直径1.5～1.6mの円形を呈し、深さは3.2mほどであった。床面の標高は2.3mほどとなる。床面で特殊な施設を確認していないが、井戸であろう。

出土遺物

金属製品等（第41図35） 上層から出土した鉄滓小片で、重量は24.8g。表面は比較的滑らかで、鉄塊状となる。

土器等（第73図5～7） 5・6は土師器、7は白磁口禿皿である。5は完周する土師器皿底部片で、器表が荒れるが外底面にかすかに回転糸切り痕の



第74図 509号土坑出土木製品実測図
(1/2)

痕跡が見える。

6・7は「中層」出土。6は底部の1/3が残存する土師器皿で、体部があまり開かず、立ち上がりが急となる。復元口径11.3cm、器高4cmと深くなる。7は小片で、釉は青味が強く発色。

木製品（第74図） 直径13.5～15.0cm、厚さ1cmほどのやや楕円となる板材で曲げ物の底板であろう。

511号土坑

509号土坑の西側、505号溝の肩に近く位置する。直径0.6m、深さ0.1mほどの円形プランをもち、床面東端に直径・深さともに0.3mの柱穴がある。柱穴とすべきであろうが、このままで報告しておく。

出土遺物

土器等（第73図8） 口縁部付近の1/2が残存する土師器碗で、底部から体部へかけて丸く移行する。外面は口縁部付近を横撫で、その下位に指頭痕と篋磨きの痕跡が見えるが内面は荒れている。土器の他に直径数cmの大きさのものを主体とし、最大で10cmほどの焼土塊が若干出土している。黒色化したものが多く、20・24号土坑出土例に比して高温にさらされたものであろうか。

512号土坑（図版29、第75図）

502号土坑の南西近くに位置する。全体に扁円形を呈するといつてよいが、東端部は意図的に方形としているようである。方形部分のみ上部が赤変硬化し、床面には最大で10cmほどの厚さをもって炭・小焼土塊が堆積していた。

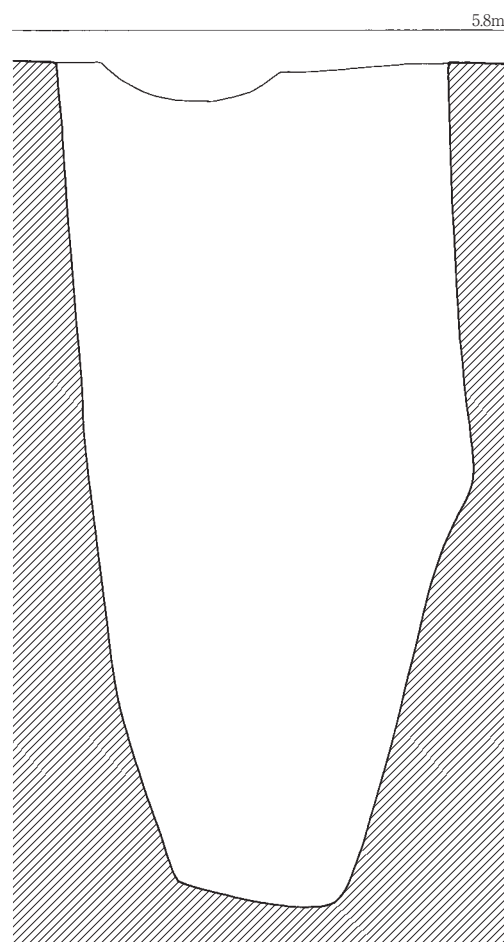
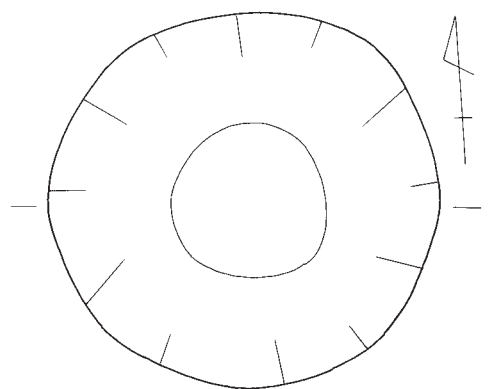
完形の土師器小型壺が出土したが、これは盗難にあって現存しない。

601号土坑（図版30、第76図）

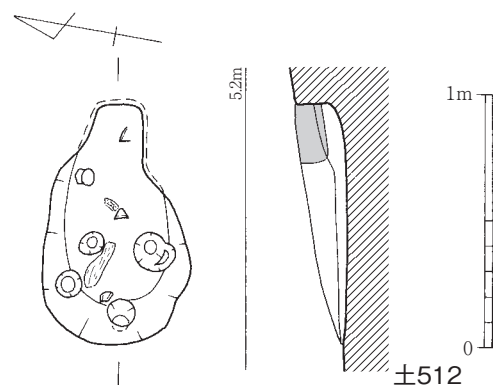
平面方形に近く造成された3区の北隅付近、203号建物跡の南で検出した。調査の便宜上、「601号」と呼称したが、位置的に見てI-2区の各遺構との関連を考えるべきであろう。

南側は法面中となって既に上部が削平されていた。平面形は歪んだ円形に近いもので、長軸0.8m、短軸0.7mほど、深さは0.45mであった。床面は隅丸方形に近い。

床中央付近で摺鉢が正置された状態で出土した。

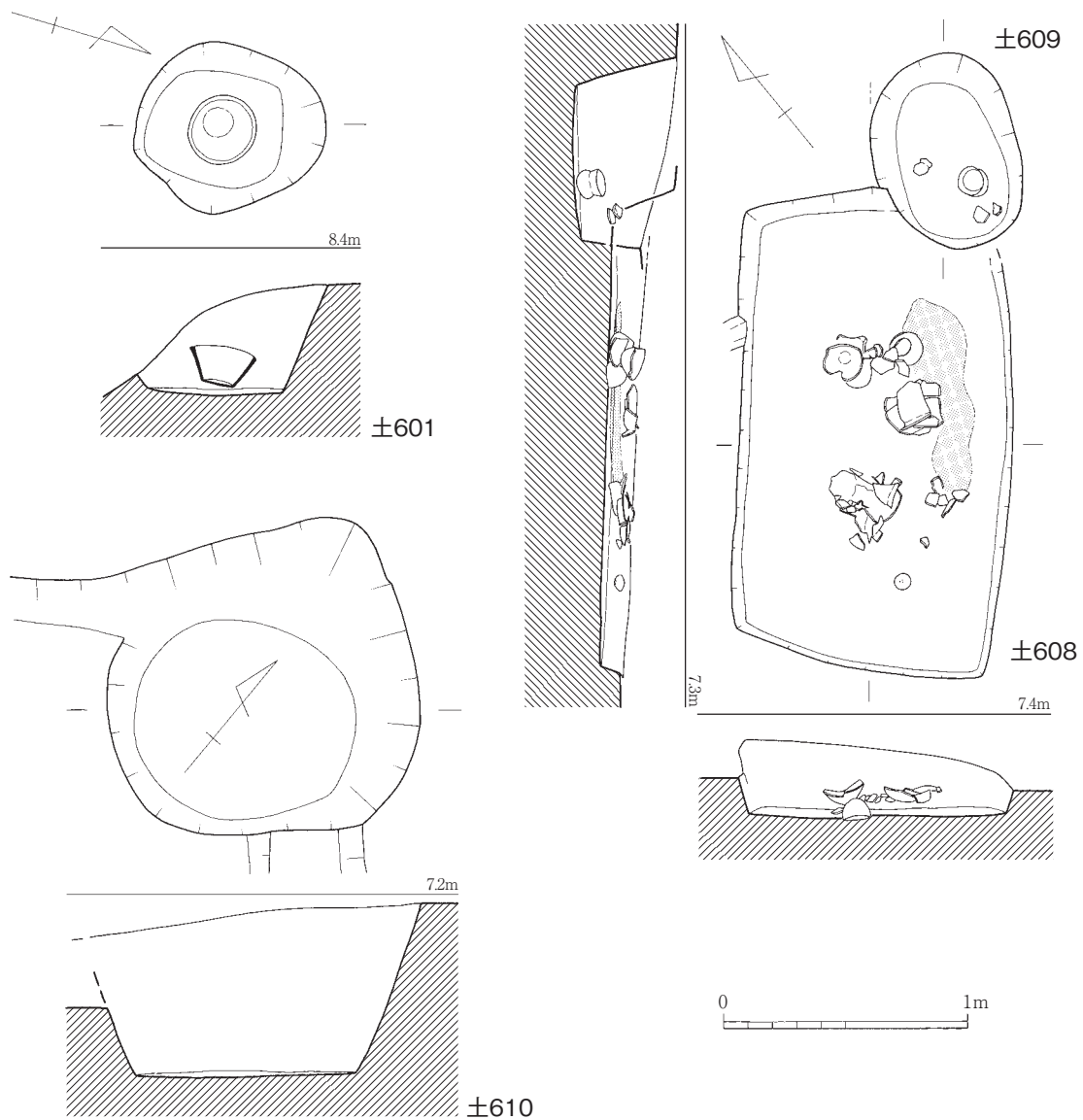


±509



±512

第75図 土坑実測図26：
509・512号土坑（1/30）



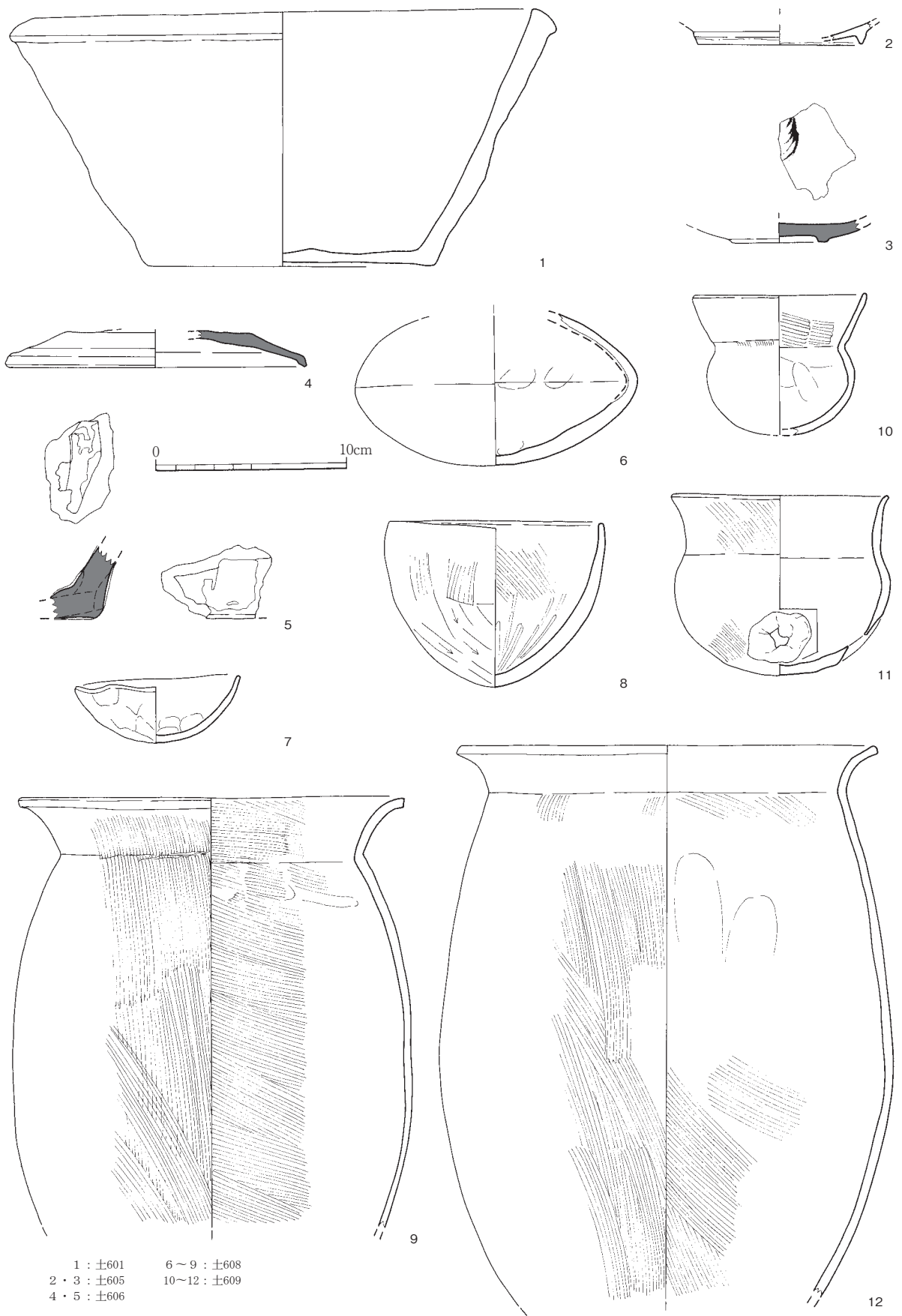
第76図 土坑実測図27：601・608～610号土坑（1/30）

出土遺物

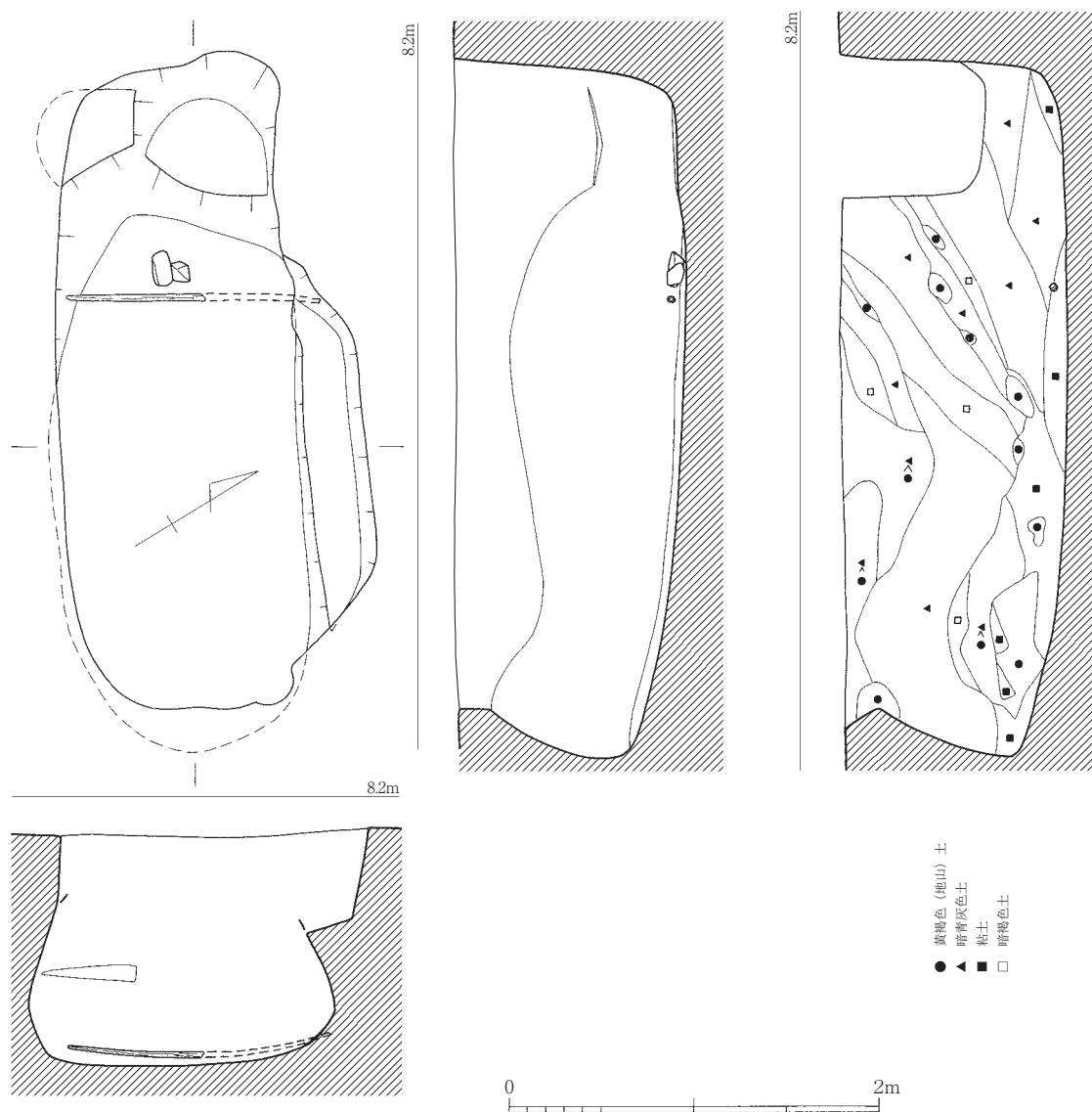
土器等（図版55、第77図1） 口縁部をわずかに肥厚させて外面に小さく突出させる完形の瓦質摺鉢である。口縁部外面から内面にかけては黄白色、外面の大部分は暗灰色となる。外面に指頭痕が目立ち、特に下部は器面が平滑化せず、不整な部分がある。外底面に特別な痕跡は見えない。

605号土坑（図版30・31、第78図）

203号建物跡の南西に近接して位置する。検出時は軸長0.6～1.0mほどの長円形の落ち込みであったが、結果的には豎坑を含めた長さ3.8m、床面幅1.4mほどの地下式土坑となった。現状で深さは1.2mほどに過ぎない。先述したように2区とした調査区は建物跡などを配置するために造成されたものと考えている。2区に近いこの605号土坑周辺も弥生～古墳時代の遺構が希薄であり、同様に造成された範囲であると思われる。約2mの深さを有する211号土坑とこの605号土坑の検出面は前者が0.2m高いだけであり、削平の程度が卑近な位置にある両遺構で極端に異なっていたと考えられないならば、この深さは本来的なものに近いのであろう。その場合には他の地下式土坑とはやや異なった性格を有していたものであるかも知れない。豎坑に明瞭な段が付されていないことも



第77图 土坑出土土器等实测图19: 601·605·606·608·609号土坑 (1/3)



第78図 土坑実測図28：605号土坑（1/40）

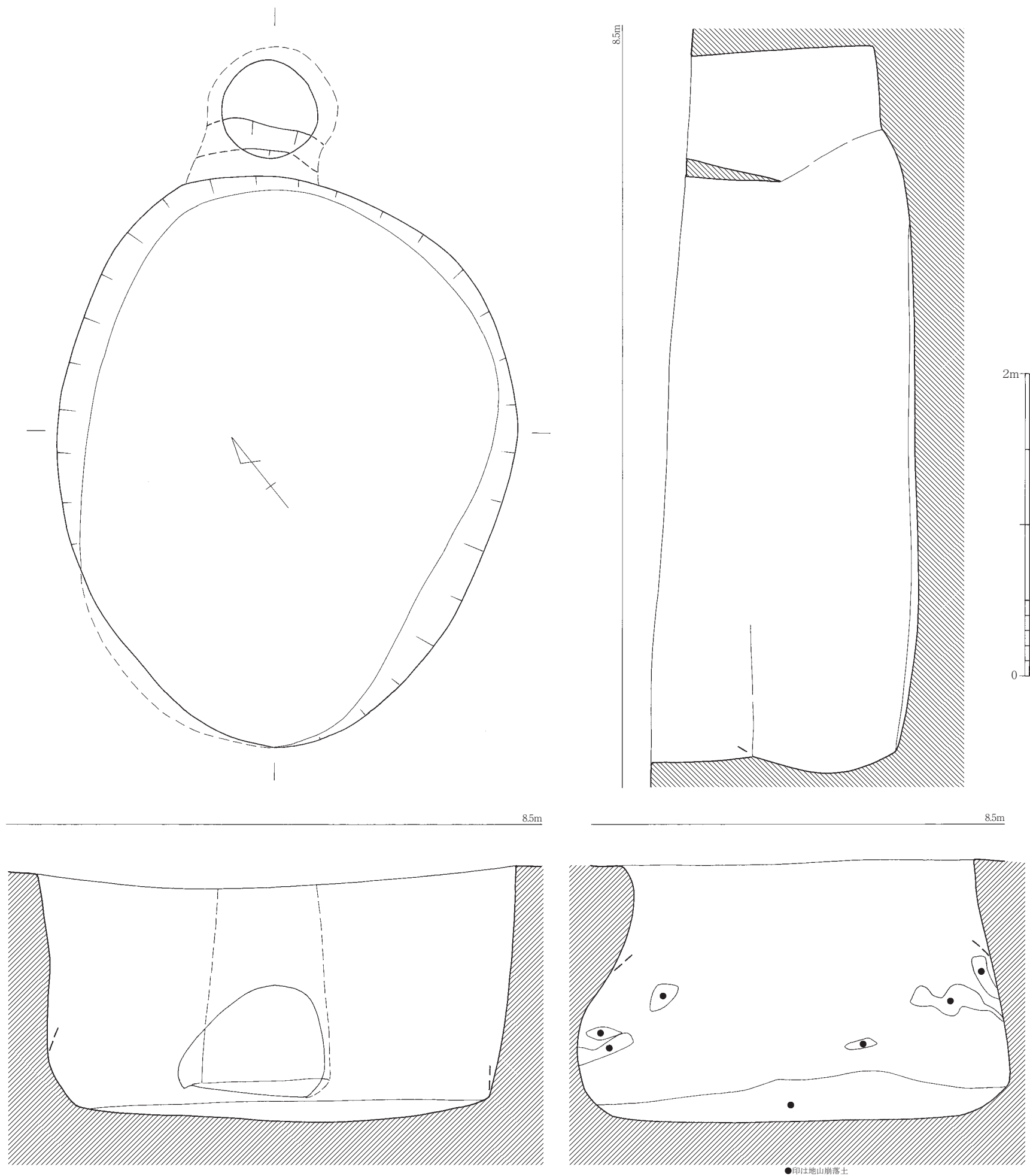
深さの問題を考える際に示唆的である。

縦断土層を観察したが、床面付近に粘土質の埋土が多く、その上方に暗青灰色土、そして上層に地山崩落土が多い傾向が見て取れる。

竪坑を降りてすぐのところでは若干の礫を検出、それに隣接して直径4～5cm、長さ80cmほどの丸い炭化材が置かれたように検出されたが、本来はより長かったものと思われる。

出土遺物

土器等（第77図2・3） 古墳時代土師器甑の把手や備前焼の体部片など少量の土器が出土している。2は白磁皿小片。断面三角形に近い高台の畳付付近のみ釉を掻き取るもので、20号土坑出土の白磁と同様の器形になるものであろう。ただ、これも白色の釉が掛かるが、光沢がほとんどない。3は低い高台をもつ陶器の底部片で1/3が残存。胎土はとても緻密で、焼成は甘いようである。白濁した釉が厚く掛けられていて、畳付のみ釉を掻き取るが、釉の表面が平滑化していない。見込に灰味帯びる青色に発色する呉須が見える。所謂古唐津であろう。



第79図 土坑実測図29：606号土坑（1/30）

606号土坑（巻頭図版3・図版31・32、第79図）

605号土坑の西に近接する。竪坑の検出面での直径は0.65mであるが、1.2m掘り下げた床面の直径はやや広く0.85mほどであった。横穴部に向かって低い段が付されていて、軸長3.0～3.7mの偏円形平面となる横穴部へ続く。床面は検出面から1.6mほど、605号土坑で記したように、これも本来的な深さに近いものと思われる。

横穴部の横断土層を観察したが、床面付近には地山崩落土が全面に堆積、その上位は一気に埋めたようで、地山ブロックを交えるものの分層困難な暗灰褐色土が覆っていた。また、竪坑は最上層の15cmほどに地山の白色土が水平に観察され、塞がれたような状態であった。

出土遺物

土器等（図版55、第77図4・5） 4は須恵器蓋の小片。口縁部付近の外面に煤が付着する。5は緑釉陶器の底部片。胎土は精良であるが、器肉の芯の部分が暗灰色、器表に近い部分は灰白色の土師質となる。釉は灰味帯びる濃緑色で、体部内外面から外底面まで施釉されている。脚付きの盤の類であろうか。混入としてよい。

608号土坑（図版32、第76図）

49号住居跡の南辺に重複するが、平面的に先後関係を確認できなかったが、土器を見るとこの土坑が先行するようである。

平面形は長さ2m、幅1.1mほどの比較的整った長方形となり、深さは最大で0.3mである。東に偏して焼土が散乱、その上で土器が検出された。

出土遺物

土器等（図版55・56、第77図6～9） 6は体部の張りが強い壺片で、図示部が完周することから意図的に口頸部を打ち欠いた可能性もある。7は小型手捏ねの鉢で、これもほぼ完存、器表が荒れている。8は口径11cm、器高9cmほどの尖底となる小型鉢。口縁部の一部を欠くほかは完存する。内面は刷毛目を主体として、下半部は暗文風に篋磨きを行う。外面下半は明らかに篋削りを行っているが、上半は砂粒の動きが見えず、撫でのようである。外面は器表が弾けた部分がある。

9は頸部付近の1/2が残存する長胴の甕で、口縁部は高く外反して端部に面をもつ。内外全面を細かい刷毛目で仕上げる。また、外面には煤が付着する。

609号土坑（図版32、第76図）

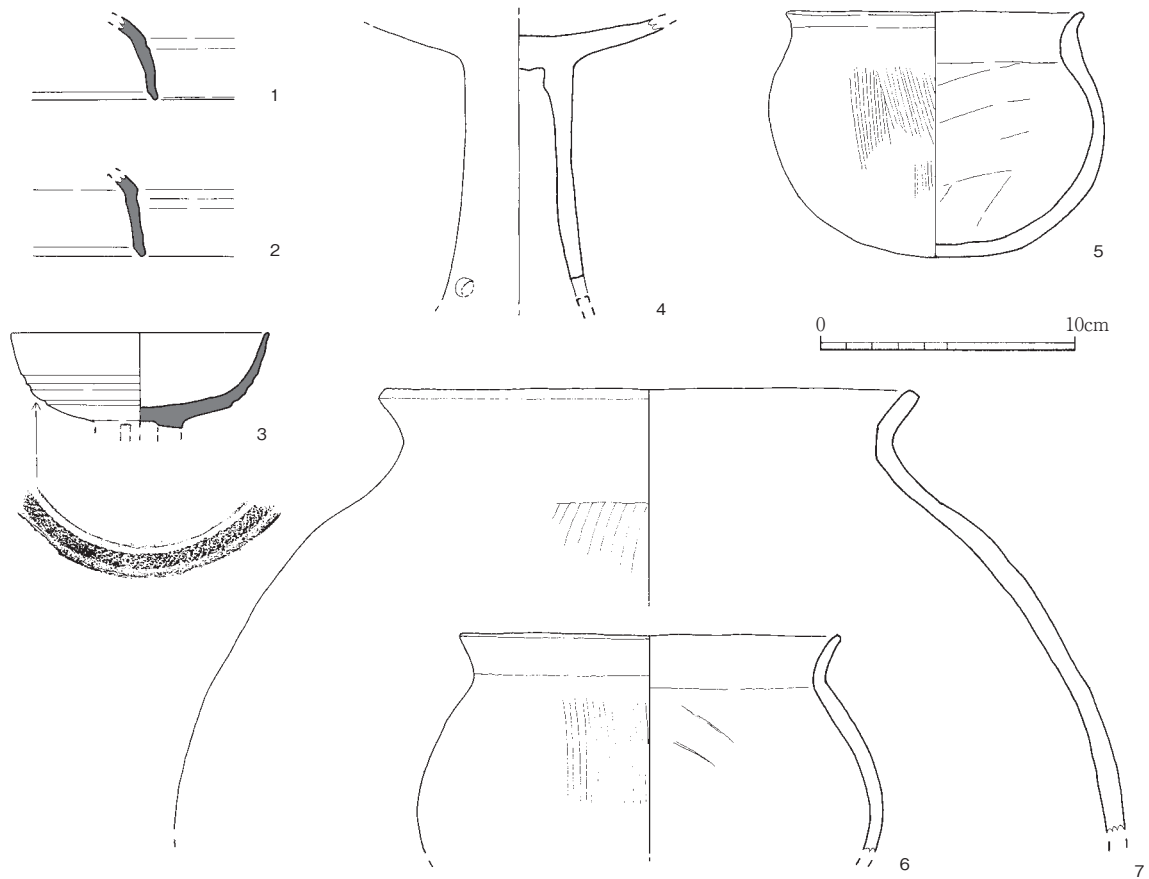
608号土坑と重複、それを切っている。軸長0.6～0.8mの長円形プランをもち、深さは0.4mほどである。

出土遺物

土器等（第77図10～12） 10は小型丸底壺で、口径はなお体部最大径を上回る。器表が荒れて細部は不明。11は頸部の締まりが弱い壺で、口縁部は直立に近い。これも完形であるが、体部下位に内側から敲打した孔がある。12は頸部の1/2ほどが残存する長胴の甕で、口縁部は短い、器形や内外面の全体を刷毛目で調整する点など608号土坑出土の甕に似る。本来は608号土坑に伴うものであったかも知れない。

610号土坑（第76図）

45号住居跡と重複して検出した土坑である。床面の規模は直径0.8～0.9mのほぼ円形となり、深



第80図 土坑出土土器等実測図20：610号土坑（1/3）

さは最大で0.7mほどとなる。

出土遺物

土器等（第80図） 1～3は須恵器、その他は土師器である。

1・2は杯蓋小片。3は口端部のほとんどを欠くが、図示部はほぼ完存する。外面は甘い凹線で画した文様帯に繊細な櫛描波状文を刻む。残存部下端に3孔の痕跡が見える。内面の灰被りが甚だしい。

4は長脚の高杯片で、図示部は完周するが器表の荒れが甚だしい。5は底部付近が完周するが、口縁部付近は小片である。底部付近は焼けて赤変、器表が全体に荒れている。体部内面は篋削りで仕上げる。6は口縁部が短く弱く外反する甕小片で、これも赤変、一部で器表が剥落している。体部内面は篋削りで仕上げるようであるが、とても丁寧に造作されている。7も甕小片で、器表が非常に荒れている。

4 溝状遺構

無数の溝を検出したが、近世以降の耕作に関わる溝は基本的に省略し、遺構番号は調査時のものを使用する。

1号溝（図版1・11、第82図）

1区南東部に位置し、等高線に沿うように北西－南東方向に掘削された遺構である。南は調査区外、北は2号溝に切られて終わるが、2号溝底に1号溝北端から西側へ屈曲すると思われる掘込みが

残っていたことから、1号溝の北辺は2号溝と重複しているものと判断している。1号土坑の説明でも触れたように、溝の線上に1号土坑があり、その性格は判然としないものの両者は密接な関係をもつ一連の遺構であると思われる。

1号土坑の南側は上端幅2m、床幅1m前後であるが、土坑の北側は上端幅1.5m、床幅0.5mほどとやや形状が異なる。上端幅は削平の影響であるかも知れないが、床幅の違いはやはり意味をもつのであろう。床面のレベルは、調査区南端で7.0m、2号溝に切られる部分で6.5m、2号溝底に残る床面で6.2mとなり、北へ向かってかなりの傾斜をもつ。

出土遺物

金属製品（図版70、第81図1） 溝北側の床付近から出土した鉄製品。図上端は丸みをもって終わり、身断面は方形、下端は尖って終わる。釘であろうか。

土器等（第85図1・2） 1は土師器皿の底部片で、図示部は完周する。底部から体部にかけて丸く移行し、外底面には回転糸切り痕を残す。胎土・作りは良好。2は龍泉窯系青磁碗の底部片で、図示部は完周する。灰黄緑色の釉が掛かる。3は鞆羽口片。先端外面はガラス化し、緑青が付く。

2（=5=502）号溝（図版1・33、第83図）

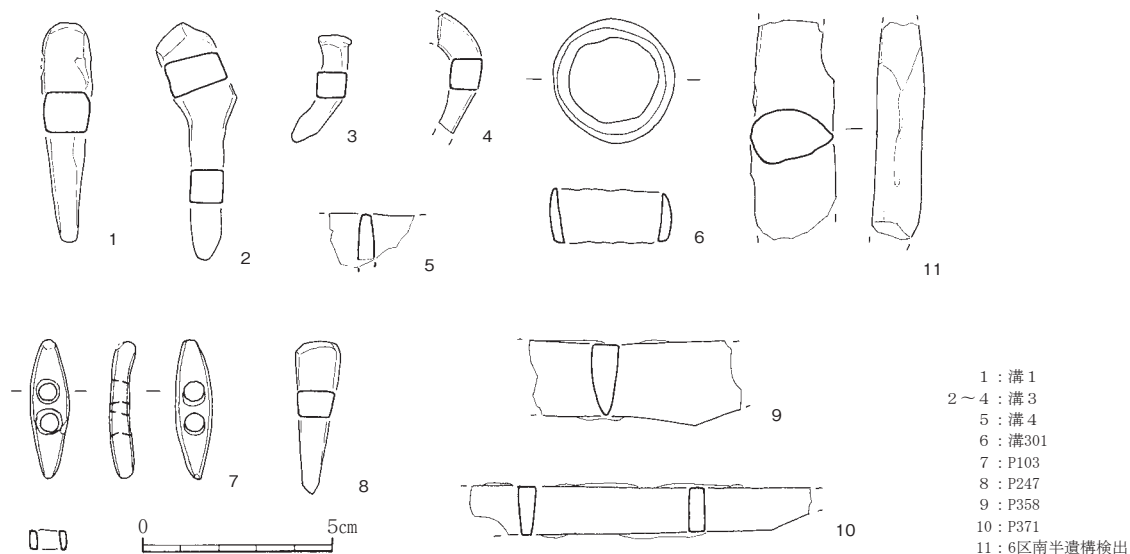
1区中程から南を圍繞する方形区画で、調査時に北辺を2号溝、西辺を5号溝、南辺を502号溝と呼称した。圍繞する範囲は南北長約32m、東西長24m以上の規模となる。

北辺2号溝は幅1.3～1.9mほどの規模で、床面の標高は東端で7.1m、北西隅付近で5.6m。この北辺だけが緩く蛇行している。西辺5号溝は幅0.5～0.9mで7号住居跡付近で途切れている。ただ、検出した部分でも深さは0.1mほどが残存するのみで、ここが本来的に陸橋となっていたという確信は得ていない。西辺床面の標高は南西隅付近で6.0mで、南側が高くなっている。南辺502号溝は幅1.0～1.4mで直線的に延びていて、東端の床面標高は6.6mとなっている。

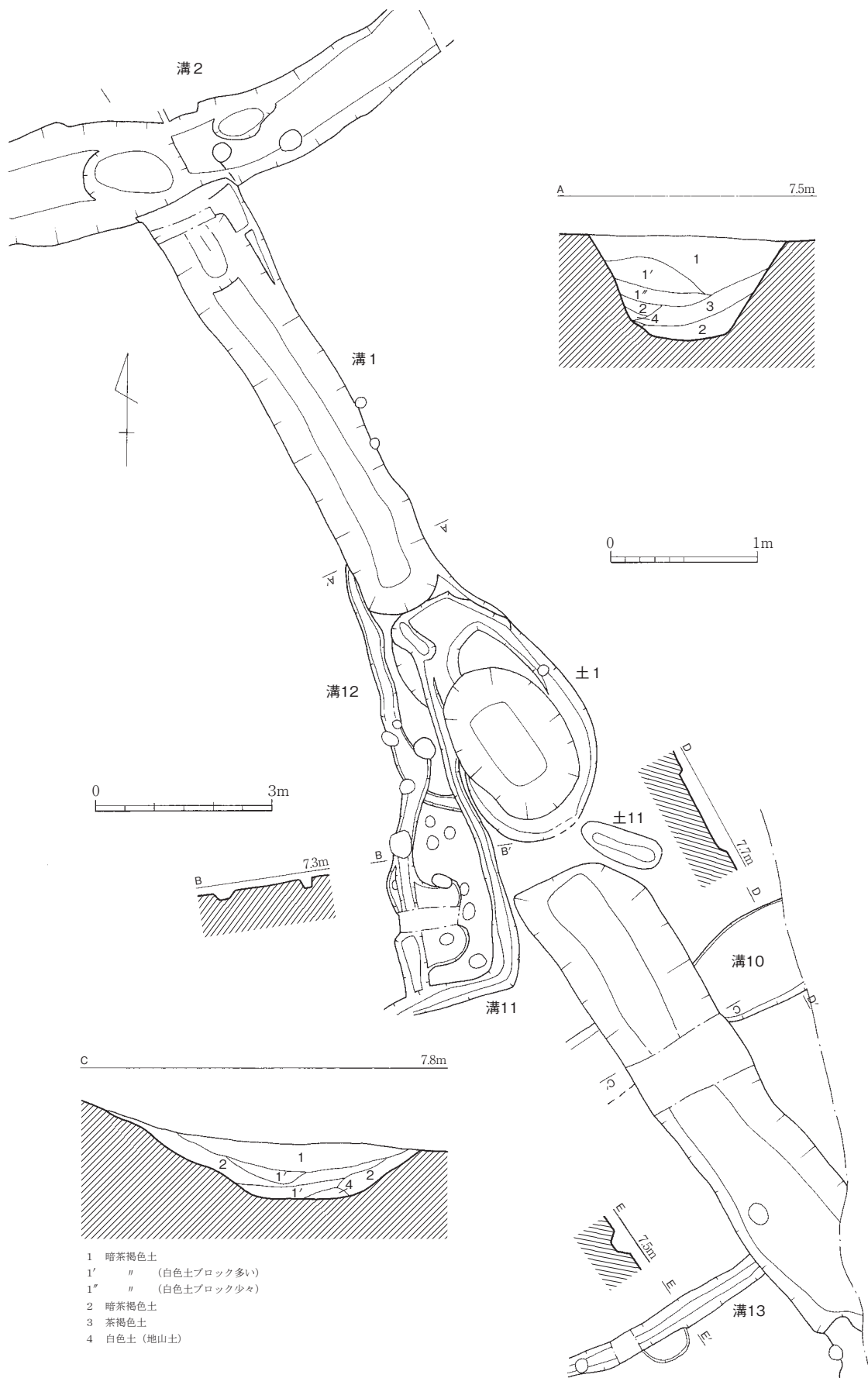
西辺の南北両コーナー付近で4号溝に切られていることを確認している。しかし土層図を作成した南西隅付近では501号溝とした円形の溝及び南から延びる504号溝などが重複していて十分に把握できていないのが実情である。

出土遺物

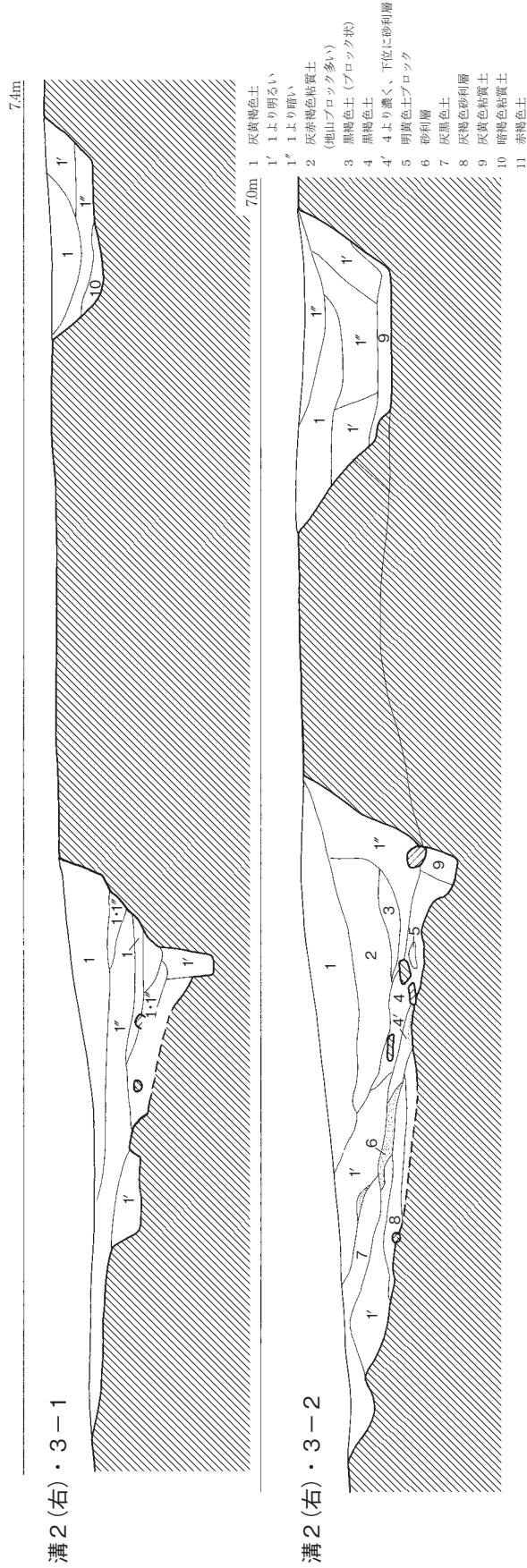
金属製品等（第84図1～5） 鍛冶滓で、重量はそれぞれ 339.9g、179.3g、157.4g、221.1g、133.9gである。



第81図 溝・柱穴等出土金属製品等実測図（1/2）



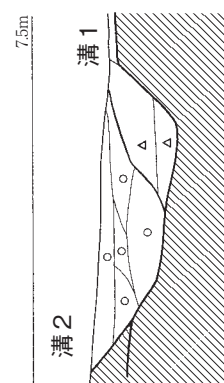
第82図 1号溝実測図 (1/400、1/100)



溝2 (右)・3-1

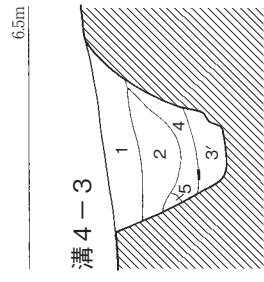
溝2 (右)・3-2

- 1 灰褐色土
- 1' 1より明るい
- 1'' 1より暗い
- 2 灰赤褐色粘質土 (地山ブロック多い)
- 3 黒褐色土 (ブロック状)
- 4 黒褐色土
- 4' 4より濃く、下に砂利層
- 5 明黄色土ブロック
- 6 砂利層
- 7 灰黒色土
- 8 灰褐色砂利層
- 9 灰黄色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 赤褐色土



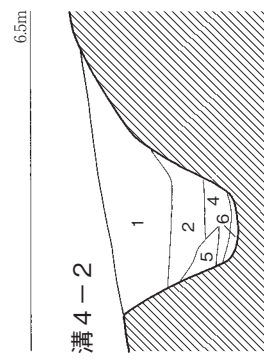
溝1

- 1 黄味おびる灰褐色土 (やや軟) (縮まる)
- 2 "
- 3 灰褐色土
- 4 暗茶褐色土
- 5 灰茶褐色土
- 6 茶褐色土
- 7 暗茶褐色土
- 8 9・10が混ざる
- 9 黄白色土 (地山崩落土)
- 10 暗赤褐色土
- 11 赤褐色土
- 12 暗灰褐色土
- 13 明赤褐色土

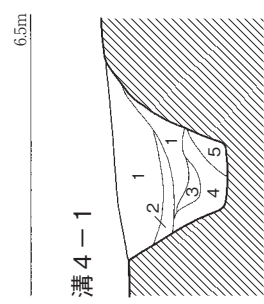


溝4-3

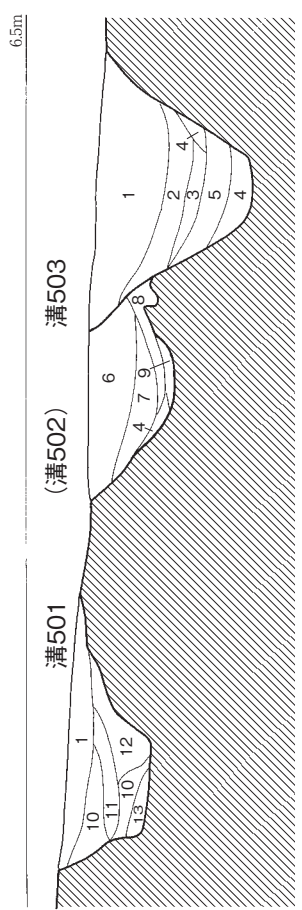
- 1 暗灰褐色土 (赤褐色土ブロック多い)
- 2 " (" 少々)
- 3 茶褐色土 (" なし)
- 3' 茶色薄い
- 4 2に似る (" なし)
- 5 赤褐色土 (暗灰褐色土少々混入)
- 6 4に酸化鉄多く混ざる



溝4-2



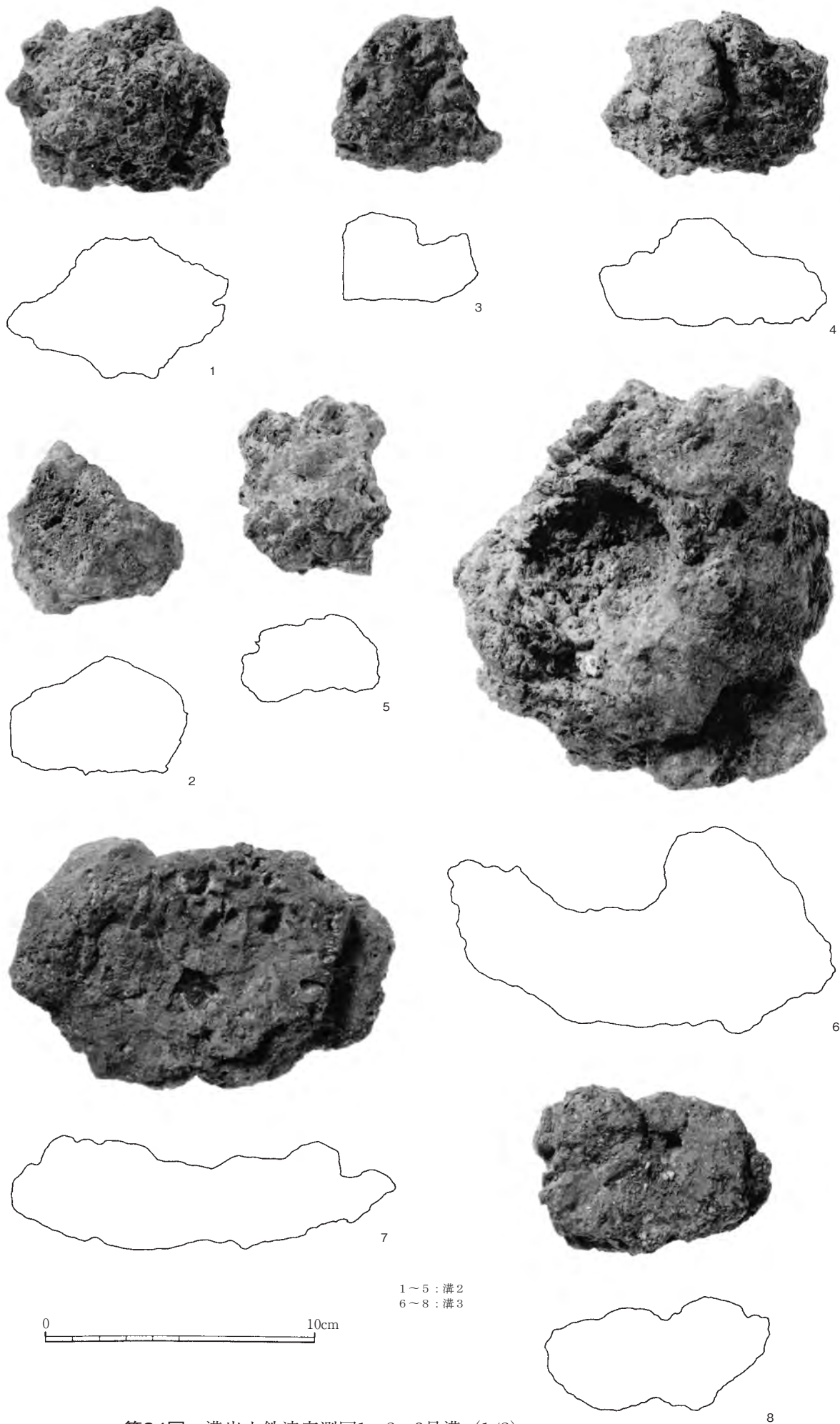
溝4-1



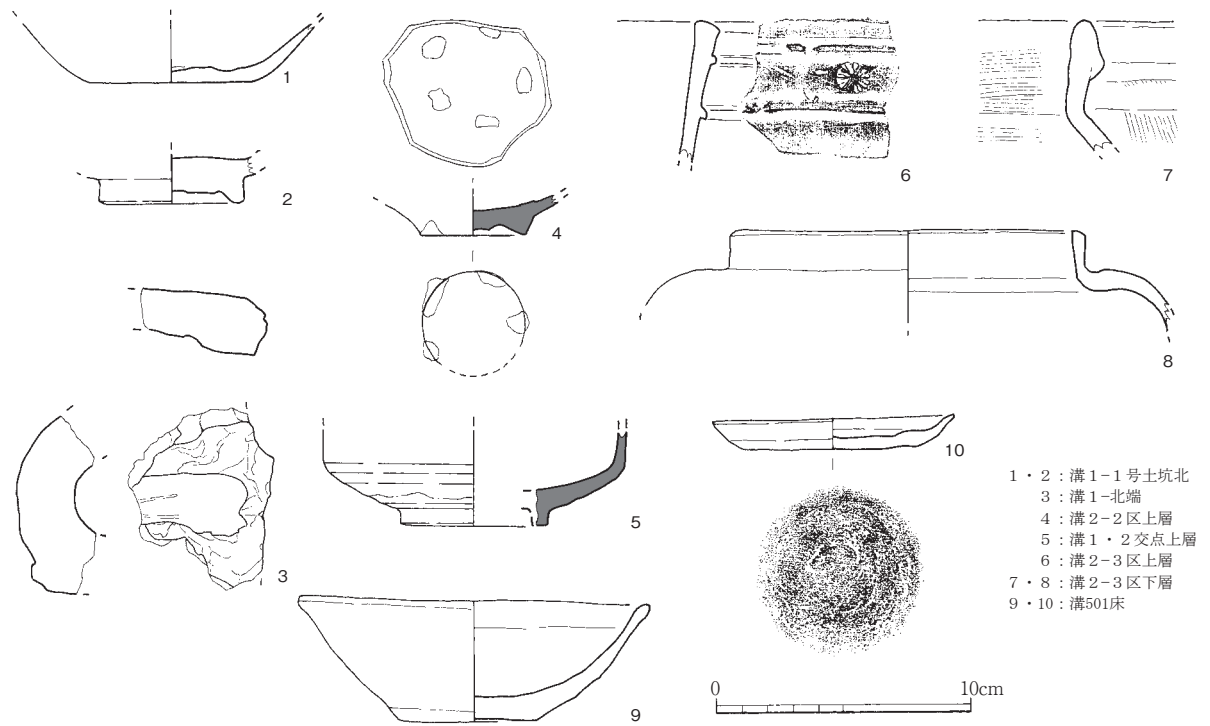
溝501 (溝502) 溝503



第83図 2~4・501~503号溝土層実測図 (1/40)



第84図 溝出土鉄滓実測図1：2・3号溝 (1/2)



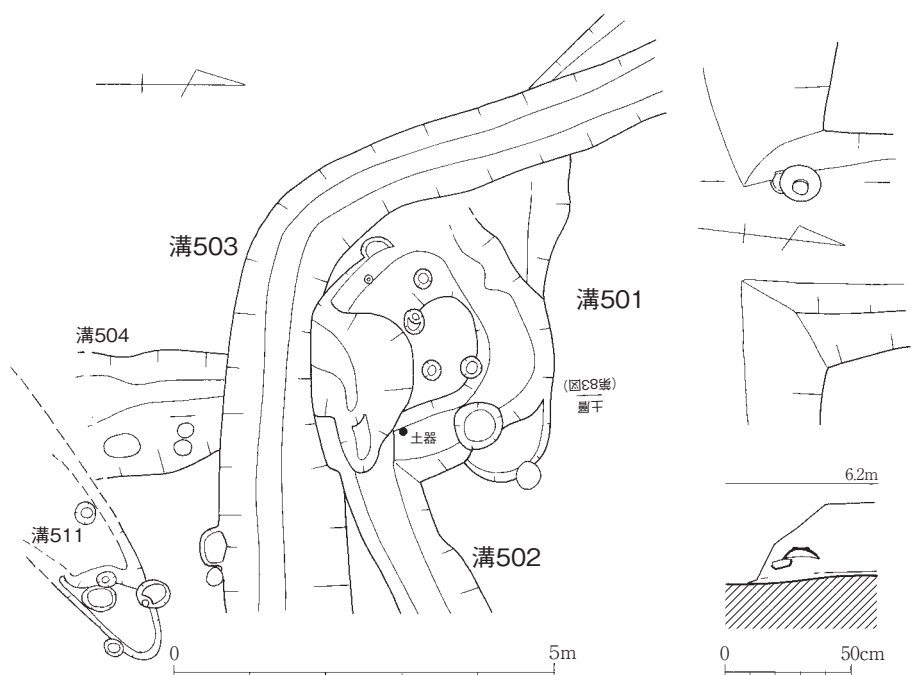
第85図 溝出土土器等実測図1：1・2 (502)・501号溝 (1/3)

土器等 (図版56、第85図3~10) これも遺物は多くない。図示した土器は、4~8が2号溝、9・10は溝南西コーナー付近で重なって出土した土器 (図版34、第86図) で、厳密には周溝状となる501号溝に帰属するが、同溝は今一つ性格が不明であり、ここで紹介する。

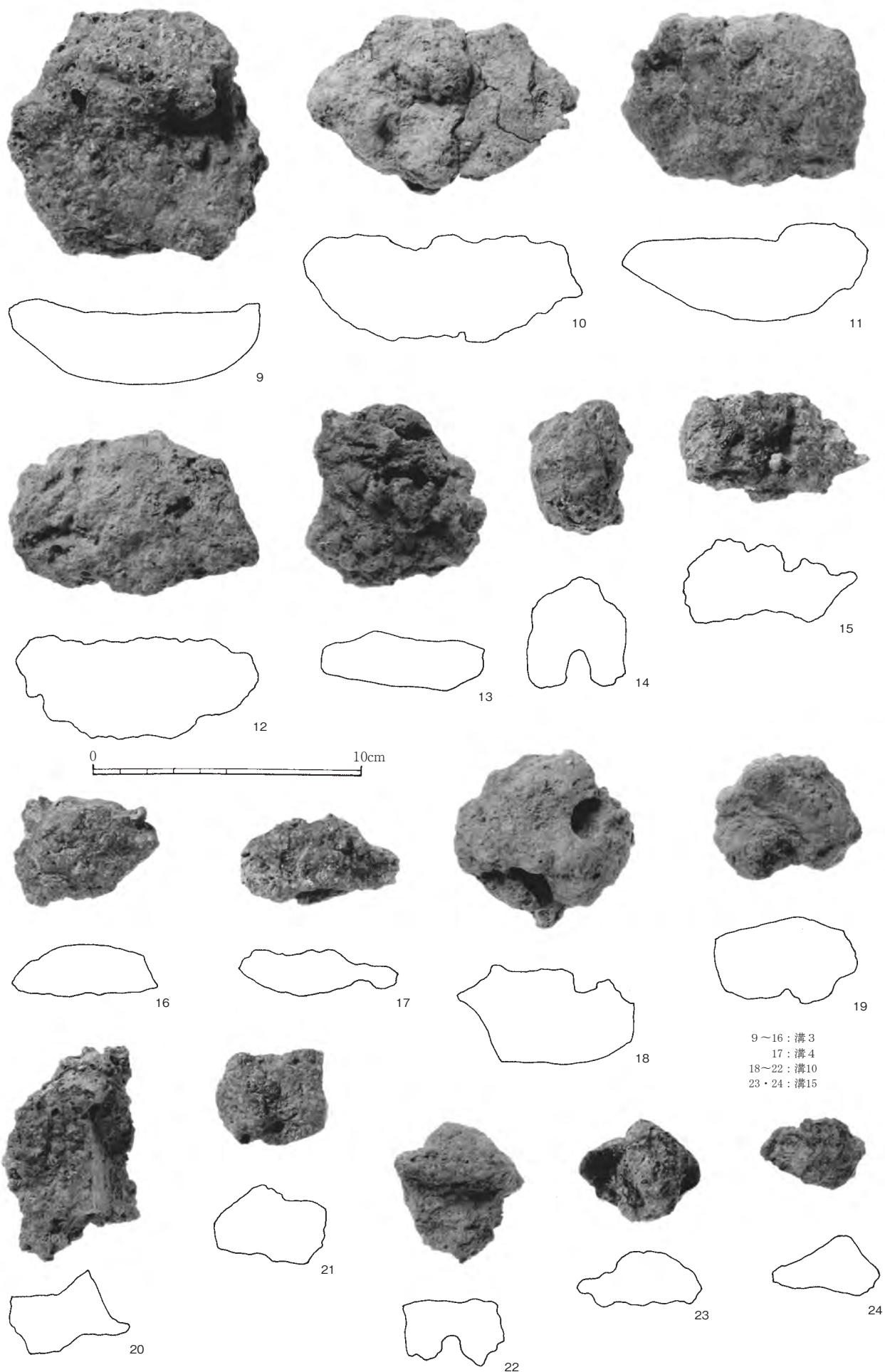
4は底部が小さく、断面三角形となる高台を付す李朝陶器である。胎土は暗灰色、釉は青味の強い灰赤色に発色して内外全面に掛けられている。高台には4箇所が目痕が残存、本来は5箇所であったと思われる。5は明灰色不透明釉を掛けた唐津焼。体部が強く内彎して立ち上がり、体部下端に篋削りが見える。その付近から高台にかけてが露胎となる。胎土は緻密。

6は瓦質の火鉢片で、口縁部下外面に断面方形の突帯を2条巡らせて文様帯とし、菊花文のようなスタンプを押す。灰白色~黄白色を呈し、胎土精良で、作りも丁寧。7も瓦質の甕で、口縁部を外側へ折り返して肥厚させている。胎土精良で、本来は灰黒色であったようだが大部分が落色して灰白色となる。8は肩が張り、口縁部が直立する瓦質の壺片で、口縁部の1/4弱が残存。これも胎土は良好で、灰白色~灰色となる。外面は多く剥落する。

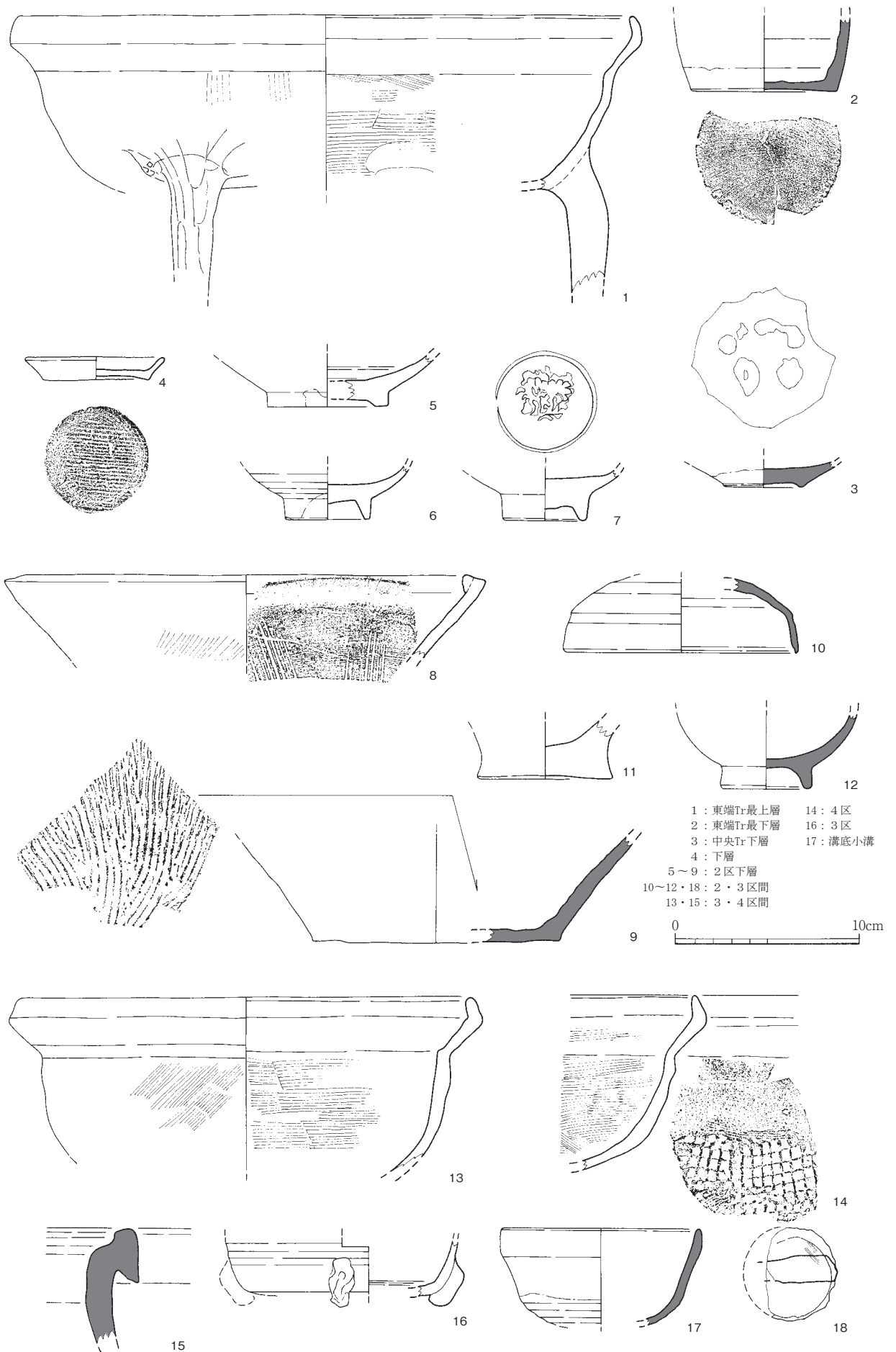
9は底部が完周。口縁部の3/4が残る土師器椀で器表が荒れるが胎土、作りは良好。切り離し痕は見えない。全体に灰黄褐色となる。10は外底面に回転篋削り痕を残す



第86図 501~503号溝南西隅付近実測図 (1/100、1/30)



第87図 溝出土鉄滓実測図2: 3・4・10・15号溝 (1/2)



第88図 溝出土土器等実測図2：3号溝1（1/3）

皿。これらは10世紀代に比定できよう。

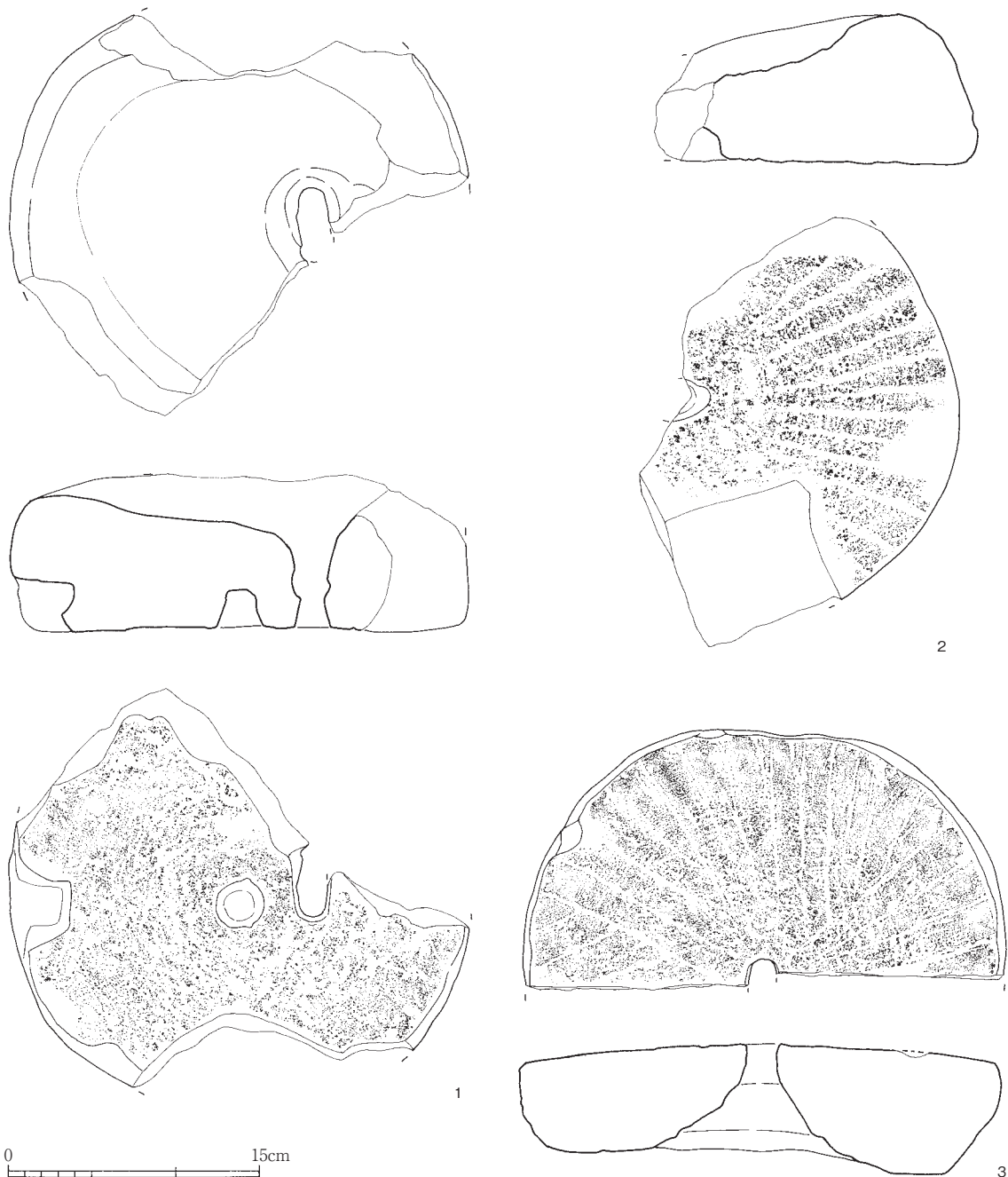
3号溝 (図版1・33、第83図)

2号溝の北にあって並走するように走る溝で、西端は401号土坑付近で削平されていて失われるが、4号溝と交わる部分では4号溝に切られていた。

溝は南側の傾斜が強く、かつ最も深く掘り込まれているが、北側は傾斜が緩くかつ平面的には不整形といってよい状況であった。土層の観察では、砂利層が複数の面で見られ、数度の掘り直しも行われたようである。

出土遺物

金属製品等 (図版70、第81図2~4・第84図6~8・87図9~16) 鉄製品と鉄滓である。2は頭部の形状がはっきりしないが、3とともに身が断面方形となる釘であろう。4は弧状となり、これも身は断面方形となる。図示した鉄滓の中で最も重いものは1788.2g、最も小型のものは68.4gである。200



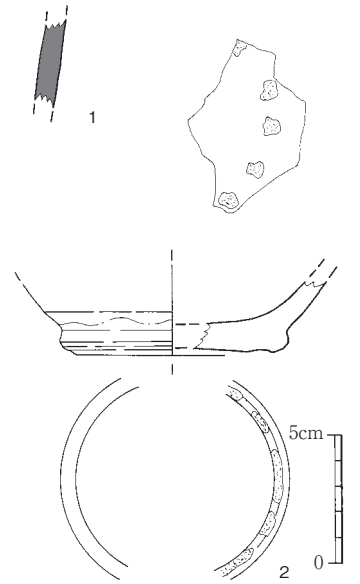
第89図 溝出土石製品等実測図1:3号溝 (1/2)

～300gのものが多く。

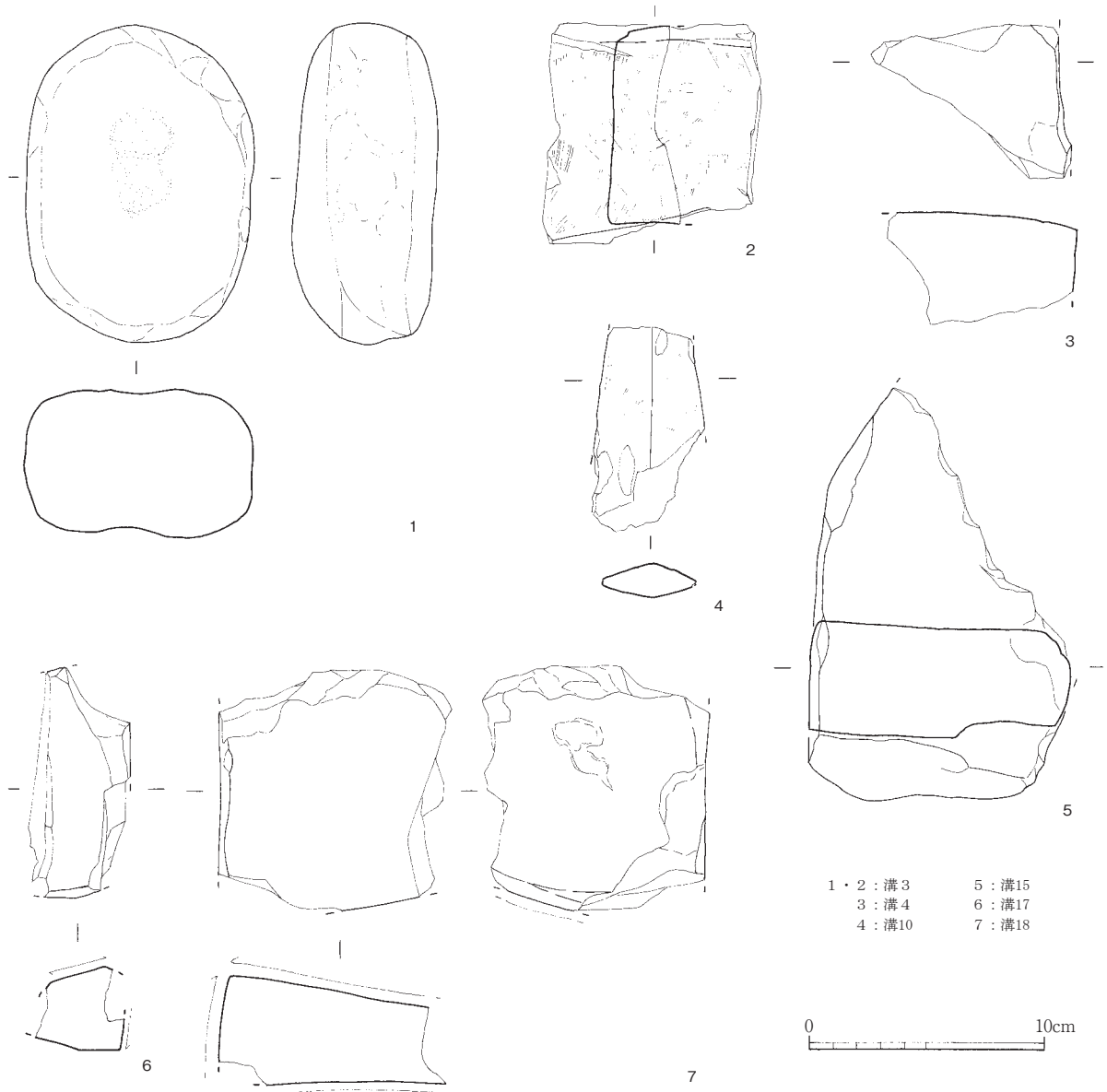
土器等（図版56・57、第88・90図） 土層観察用の畦で区切って、東から1～4区に分けて取り上げたので、それに沿って説明を加える。

1は瓦質の3足鍋で、口縁部付近1/4の残片であるが、焼け歪んでいるために復元口径が大きくなっている。口縁部が長く伸び、端部は内側へ折り曲げたような形となる、器肉は灰白色、内外の器表は黒色化する。外面頸部下には縦刷毛が見える。2は陶器壺。胎土は灰黒色の緻密なもので、釉は茶褐色に発色する、ごく丁寧に作られている。3は底部内外面に目痕を残す李朝陶器で、胎土は灰黒色、釉は灰緑色に発色するが、薄い部分では黄白色となる。丁寧に作られた陶器である。

4は口縁部の一部を欠く土師器小皿で、復元口径7.6cm、器高は1.2cmである。外底面は糸切り痕の上にスタレ状の圧痕が甚だしい。5は高台が低い白磁底部片で、1/3が残存する。見込外周に圏線を刻み、黄味帯びる釉を掛ける。6は底部が完周する磁器であるが、畳付に目痕が残り龍泉窯系・同安窯系といった一般的な青磁ではなく、朝鮮半島産であ



第90図 溝出土土器等実測図3：3号溝2（1/3）



第91図 溝出土石製品等実測図2：3・4・10・15・17・18号溝（1/3）

ろう。見込にも直径4mmほどの暗茶褐色となる斑点があって、目痕とする場合には方形であった場合の3コーナ分はあるが残る1点がない。釉は青白磁といった色調の透明釉となる。7は濃い灰緑色釉を施す龍泉窯系青磁碗で、見込に花文のスタンプを押す。8は灰白色となる瓦質摺鉢で、口縁部を内側へ肥厚させて断面三角形とする。9は陶器摺鉢で、内面全面に荒く深いスリ目を刻む。器表は備前焼に似て暗赤紫色となる。

10は丁寧に作られた古墳時代須恵器杯蓋。11は図示部が完周する弥生前期の甕底部。赤変する。12は唐津焼であろう。胎土は黄白色を呈し、釉は灰黄色に発色する。総釉であるが、豊付の釉は剥がれている。

13は1/3が残存する瓦器の足付鍋である。1に比べて器肉が厚く、口縁部が短くしっかりしている。残存部下端に叩き痕がわずかに見え、内外面が煤ける。14もよく似た瓦器鍋である。15は常滑焼の甕口縁部小片。口縁部付近は暗灰色を呈し、焼成は甘いようである。

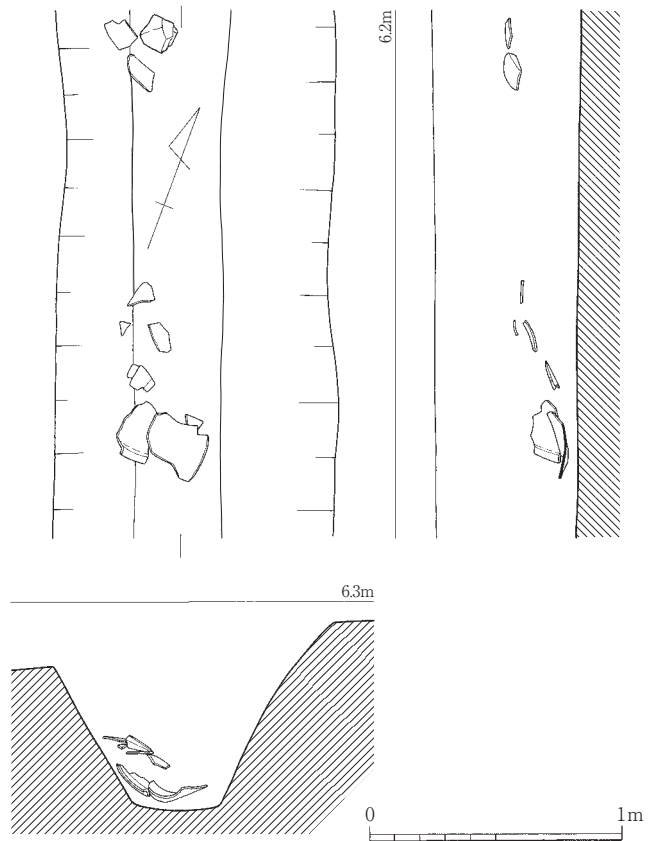
16は青磁香炉で、灰青色の透明釉を掛ける。1/4の残片で、内面は露胎。17は口縁部の1/4が残存する天目碗で、茶褐色～黒褐色に発色する。露胎部は灰黄褐色となる。胎土は精良。18は土製円盤である。

第90図1は緑釉陶器。胎土は概ね灰黄色で、部分的に黒色となり比較的陶器質に焼き上がる。外面は緑の濃い黄緑色に発色する釉が厚く、内面は淡い黄緑色に発色する釉が薄く掛かるが、小片とはいえ残存部全体に掛かっていることから意図的なものと思われる。やや大型品が想定される。同2は越州窯系青磁碗。胎土は緻密で、灰黄色～淡灰色の陶器質といってよい焼成の甘い青磁である。淡い灰緑色あるいは緑褐色といった色に発色する釉は体部下端から高台内にかけて露胎とする他は全体に掛かる。見込外周に直径1cm以下の目痕がやはり1cm間隔で残り、その部分は白色化する。外側角が面取されたような形のなる高台の豊付にも熱が伝わらずに変色する目痕の跡が残る。整形は非常に丁寧で、高台内外周が強く撫でられてわずかに凹む。1/3が残存。

石製品（図版56、58、第89図1・2・第91図）

第89図に石臼3点を示した。いずれも中央付近から出土したものである。1は凝灰岩製の上臼で、「ものいれ」・芯棒受け・挽き手穴が直線状に配され「ものいれ」外側付近で微かに目が見えるが、ほぼ消えてしまっている。2は安山岩製の上臼で、芯棒受けが残存する。目は放射状となる。3も安山岩製の下臼。方形の芯棒穴が貫通し、繊細な目の刻まれた面が凸面となる。目は幾度か追刻されたようで、新しいものは釘彫りのような細いものである。

第91図の2点は溝の中央付近出土で、2の砥石は床面近くから出土した。1は安山岩を使用した叩き石・凹み石で、図表裏に不整形の浅い凹みがある。また、側縁にもほぼ全周にわたって敲打によると思われる痕跡が見られる。2は砂岩を使用した砥石で、図表面及び上面がよく使



第92図 4号溝土器出土状態実測図（1/30）

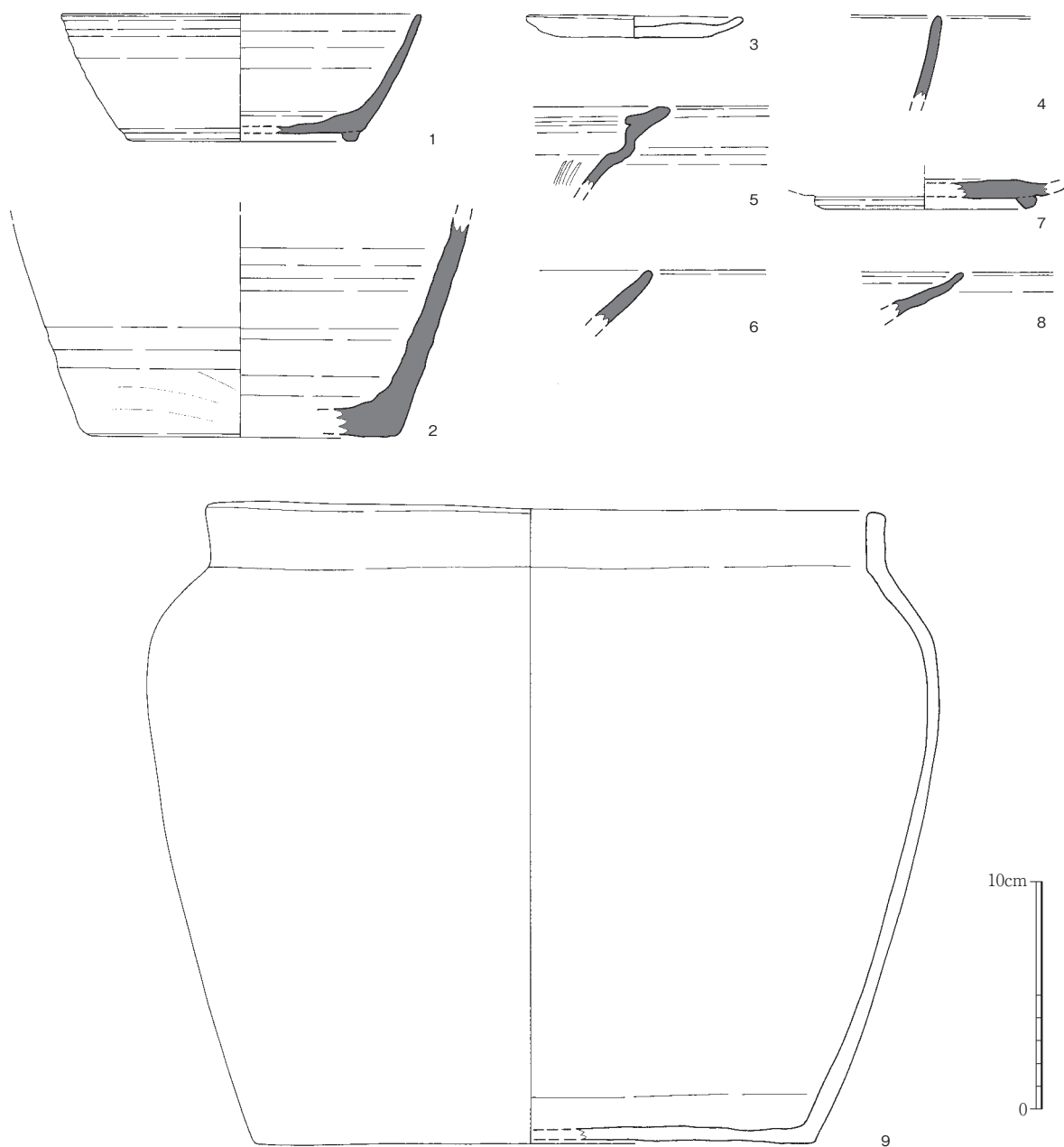
用される。図左右両面及び背面は破面となる。図下面は破面ではないようだが未使用。図の表面は赤味が強いが、背面は暗灰色となっていて、火熱を受けたものであるかも知れない。

4 (=503) 号溝 (図版1・33・34、第83・92図)

1区南半の西端、段落ちの肩を南北方向に直線的に走る溝(4号溝)で、1・5区の境となる段の辺りで東へ屈曲し、また緩やかに南へ曲がって続く(503号溝)。上端の幅1.0~1.5m、深さ0.6~0.8mほどの規模である。床面の標高は北端で5.5m、南西隅で5.3m、南東端で5.46mほどとなる。後述する301号溝の西端が南に屈曲することから4号溝と一連の遺構としてよかろう。その場合、南北長は西辺で約64m、東西長は32m以上の規模となる。

交差する2・3号溝を切る。

出土遺物



第93図 溝出土土器等実測図4：4号溝 (1/3)

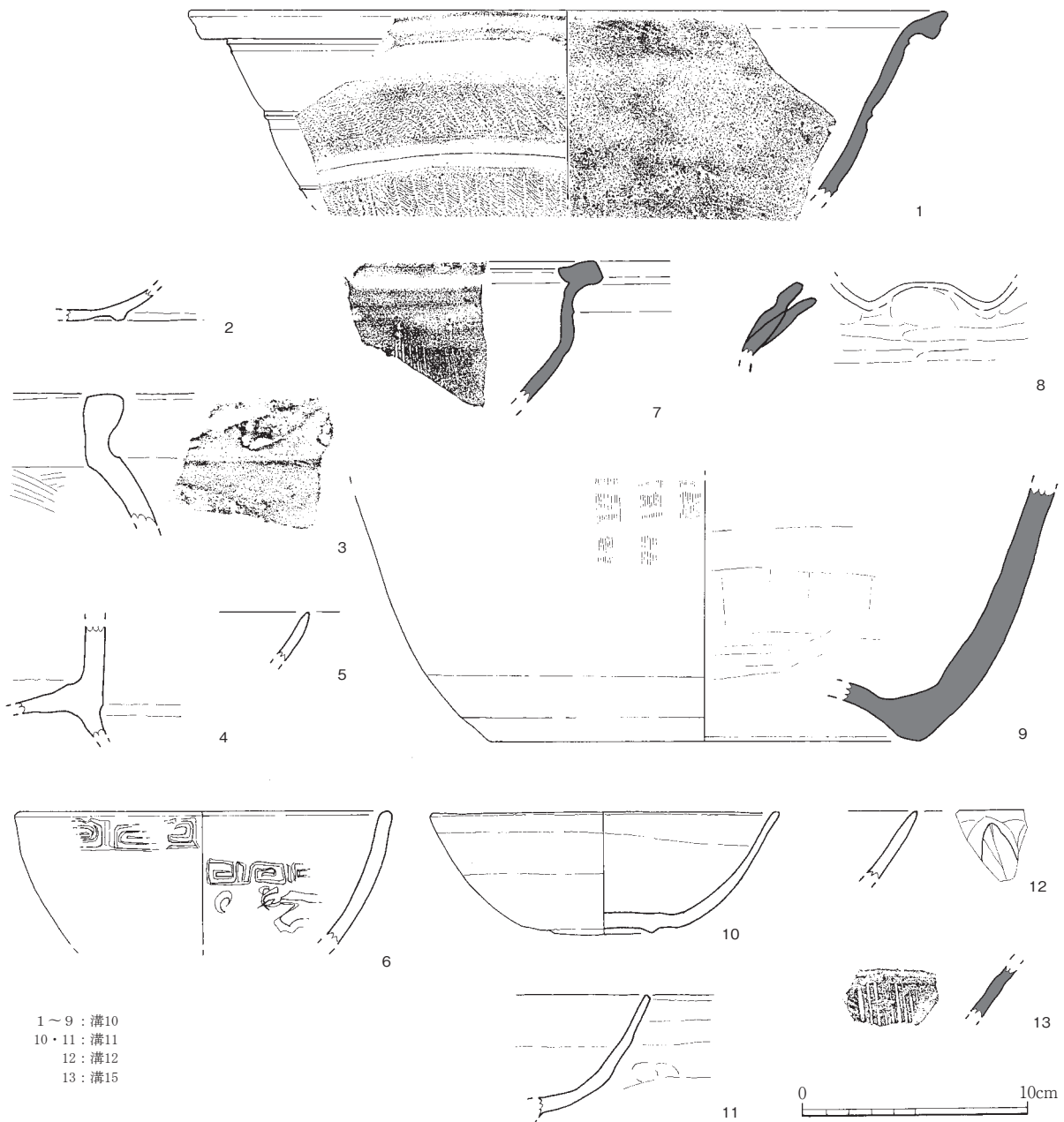
金属製品等（図版70、第81図5・87図17） 鉄製品は上層出土の板状となるもので、刀子であろうか。鉄滓は38.9gを量る鍛冶滓で、表面に砂粒が錆着する。

土器等（図版57、第93図） 1・2は北端で出土した須恵器。1は体部が直線的に伸び、小振りの高台が底部外縁に付けられた杯身で、胎土・作りは良好であるが焼成が甘い。2は大型の土器で瓶子であろう。これも胎土・作りは良好。底部の1/4弱が残存する。

3は1/2ほどが残存する土師器皿で、「南端 上・中層」の中期があり、コーナー北からの出土である。これは器表が荒れている。

4～6は陶器。4は椀か。南端コーナー付近からの出土で黄白色～灰色の釉が掛かる。5は上端を内側へ折り曲げて口縁部を作る摺鉢。溝4中央付近の下層から出土。口縁部上面から口縁部下の屈曲部の外面まで茶褐色となる釉が掛かり、露胎部は暗褐色となる。6は北端付近から出土した浅い器形である。釉は灰黄色に発色する。4・6は唐津焼であろう。

7・8は503号溝からの出土。7は同溝西半出土の須恵器杯身。8は東半から出土した唐津焼と思わ



第94図 溝出土土器等実測図5：10～12・15号溝（1/3）

れる陶器で、灰色の釉が掛かる。

9は南端コーナーの北側から出土した火消し壺形の瓦器で、出土状態を図示している（第92図）。口縁部は直立してほとんど加飾せず、張りの弱い体部から径の大きな底部へ続く。器表が荒れていて調整痕はほとんど見えない。胎土は灰白色、器表は黒色化する。

石製品（図版58、第91図3） 灰白色～灰黄色の石英斑岩を用いた砥石と思われるが、余り使用していないようである。使用した面が煤けている。

10号溝（図版1、第82図）

1区南半、1号土坑の南を東西に走る溝で、西は2・3号住居跡付近で途切れ、東は調査区外へ続く。幅は1～1.5mほどであるが、深さは0.1mほどに過ぎない。

1号溝に切られるようだが、21・22号土坑を切るようである。

出土遺物

金属製品等（第87図18～22） 重量75.1～127.1gを量る鍛冶滓である。

土器等（図版57、第94図1～9） 1は内面に同心円文を微かに残す須恵器器台片で、体部は直線的に開いて口縁部がわずかに外反、口縁部を断面三角形に近く肥厚させる。2段の文様帯の間は低いがシャープな断面三角突帯で画し、趣の異なる整った櫛描波状文を刻む。胎土は非常に緻密なもので、外面は灰を被ってほぼ全面が黒色化する。2は暗灰色を呈する瓦器椀小片で、低い高台をもつ。3は灰白色瓦質の甕口縁部片で、直立する口縁部外面に花卉と思われるスタンプを付す。4は土師質の風炉で、器肉は赤褐色、器表は灰白色となり、外面は赤変している。

5は龍泉窯系青磁椀の小片で、釉は青味の強い青灰色に発色する。6は口縁部外面に雷文をスタンプ、内面は口縁部から下がった位置に雷文を巡らせ、その下位に不明瞭な文様をスタンプしている。同一個体が5点あるが、接合しえない。胎土が灰黄色陶器質となる焼成不良品で、釉は緑褐色～灰褐色といった色に発色する青磁椀。

7は口縁部を内側へ折り曲げて上面及び外面に面をもつ陶器摺鉢で、全体に灰茶褐色となる。胎土は良好。輸入陶器であろう。8は備前焼摺鉢の片口部である。胎土は良好。9は備前焼壺の底部小片で、底部が焼け歪んで大きく曲がる。外面は弱い刷毛目状の調整で、下端付近は篋削りで仕上げる。

石製品（図版58、第91図4） 青灰色粘板岩製の磨製石剣片で、図上下を欠損するが、上の破面は再度磨って平坦化している。下の破面は折れたままの状態である。

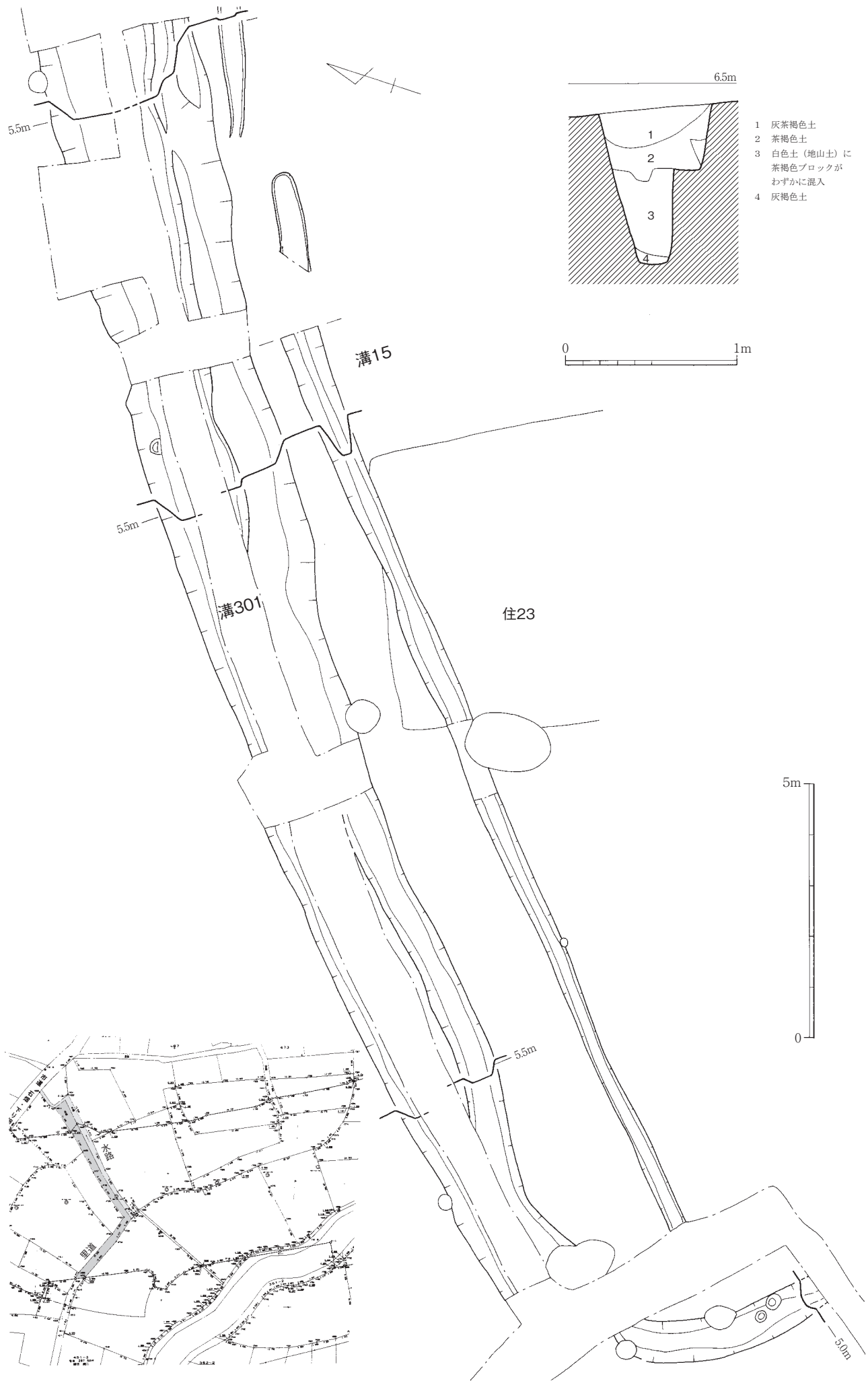
11号溝（図版1、第82図）

10号溝の北側を並走する幅0.2～0.4m、深さは0.1mに満たない小規模な溝である。1号溝の西側で北へ直角に曲がり、1号溝と重複してその先は確認できなかった。

西端は一旦途切れてまた西へ延びるが、この付近も深さ0.1mに満たない浅い状況であり、途切れた部分を積極的に評価することはできない。

出土遺物

土器等（第94図10・11） いずれも瓦器椀である。10は口縁部の1/4が残存。ごく緩く内彎しつつ立ち上がる体部をもち、高台は痕跡に過ぎないといってよい。底部付近の外面にはシワが多い。口縁部付近の内面から体部外面中位に欠けて灰白色、その他の部位が灰色（内面）、灰黒色（外面）となる。11は内彎の度合いが強い小片。内面では中位から上が灰白色、以下が黒色に、外面で

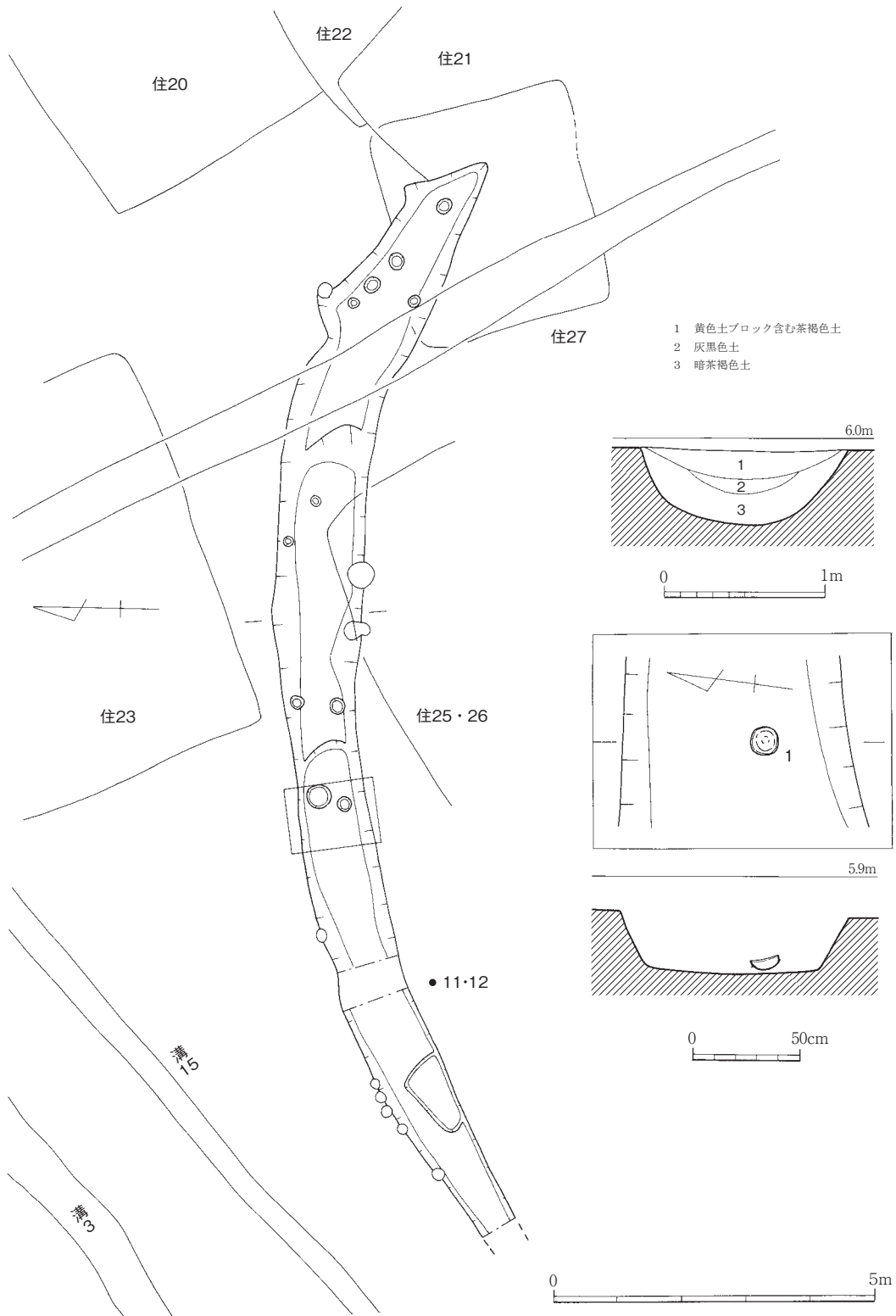


第95図 15・301号溝実測図 (1/100, 1/30)

は口縁部付近が黒色、その下が幅2cmほどの帯状に灰白色となり、以下が灰黒色となっている。灰白色となる部位の下位に指頭痕が目立つ。

12号溝（図版1、第82図）

11号溝東端の屈曲部付近で11号溝から枝分かれするように北へ延びる小溝で、これも1号溝と重複して以北は不明。



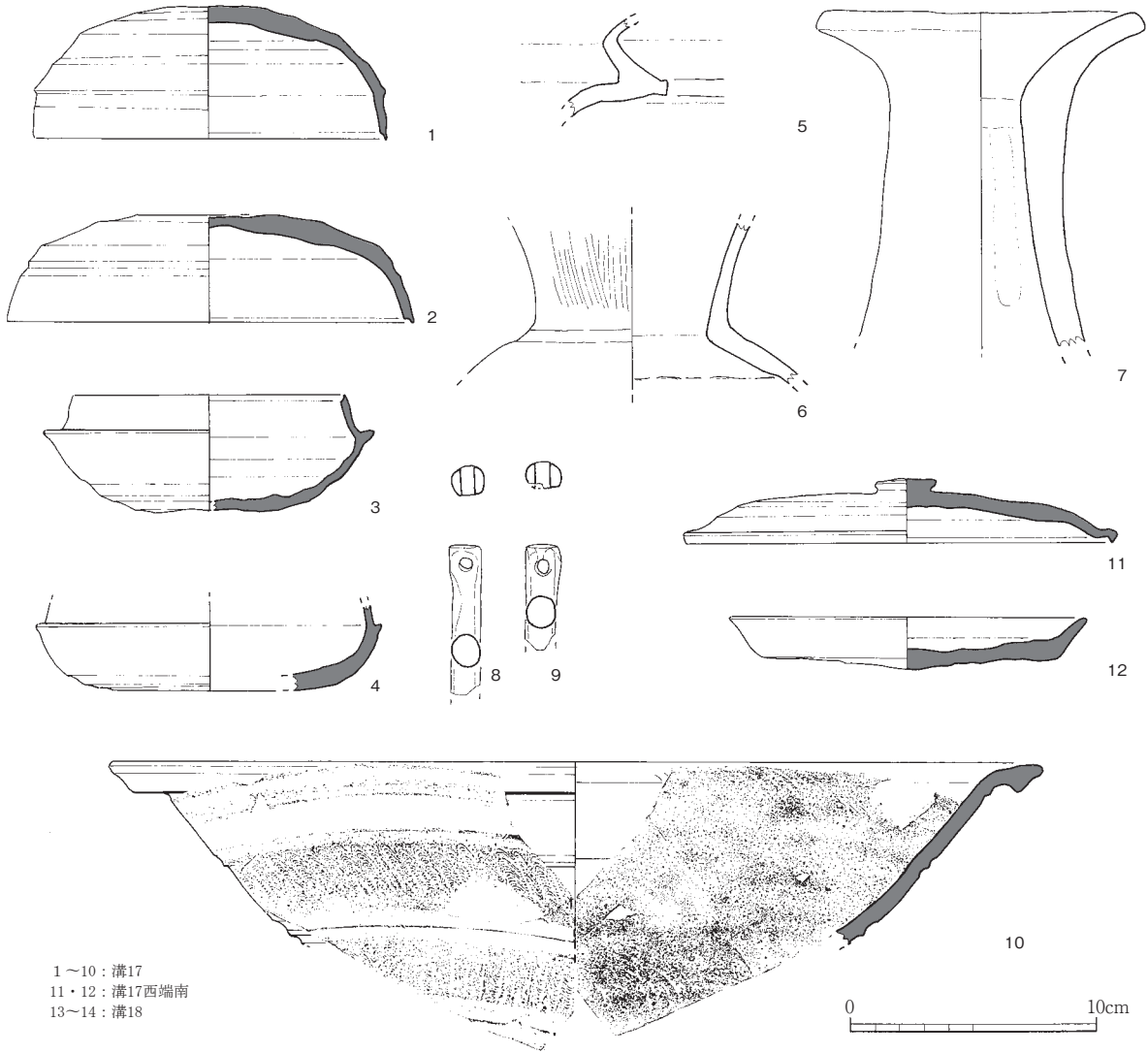
第96図 17号溝実測図（1/100、1/40、1/30）

出土遺物

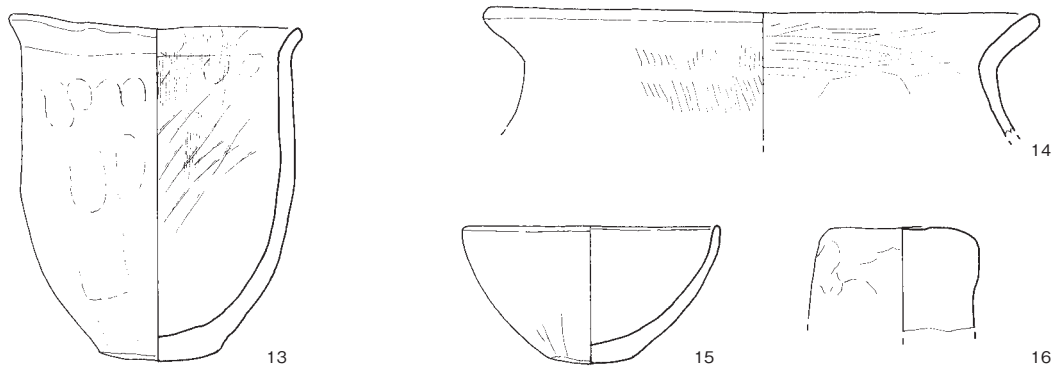
土器等（第94図12） 須恵器・土師器の小片が若干出土していて、龍泉窯系青磁椀小片を図示した。鎬蓮弁で飾り、釉は緑の濃い灰黄緑色となる。

13号溝（図版1、第82図）

10号溝の南にあって東西に走る小溝で、配置や規模から見て10・11号溝と関連するものである



1～10：溝17
11・12：溝17西端南
13～14：溝18



第97図 溝出土土器等実測図6：17号溝及びその周辺・18号溝（1/3）

う。高台が形骸化した瓦器椀などが少量出土している。

15号溝（図版1、第95図）

1区北端、後述する301号溝の南を並走するように掘削された溝で、西端が失われているが44mの長さを検出した。東端は調査区内で終わり、深さは0.9m（標高5.4m）、西端付近では標高5.4mほどで深さはほとんどないに等しい。

埋土に顕著なものはなく、壁は直に近く立ち上がっていた。

出土遺物

金属製品等（第87図23・24） 「東半」出土の鉄滓小片で、29.8・22.1gを量る。

土器等（第94図13） かなりの量が出土するがいずれも細片化している。図示した土器は陶器摺鉢で、胎土は良好だがざらつく感じとなる。外面は暗茶褐色、内面は灰褐色でいずれも露胎。浅いスリ目が刻されている。

石製品（図版58、第91図5） 石英斑岩製砥石である。図表面及び左右側面を使用するが、側面がより使用され、表面は余り磨られていない。

17号溝（図版1・34・35、第96図）

1区北端近くにある弧状溝である。西端は1・4区境の段落ちで失われ、東端は27号住居跡付近で終わる。最大幅1.5m、深さは0.4m強である。

埋土に特別なものはないが、床面の2箇所にも0.1mほどの段が付されている。丘陵西の低地から集落へ至る道路のようなものであろうか。

出土遺物

土器等（図版57、第97図1～10） 1～4・10は須恵器、その他は弥生土器あるいは土師器である。

1は床面から出土した杯蓋で、口縁部の一部を欠くもののほぼ完存する。胎土良好で、調整も丁寧になされている。2は口縁部の1/4が残存。口端部に面をもつが、天井・口縁部界は弱い稜線だけとなる。3は体部の1/3が残存する杯身で、古相を示す。4は1/4が残存する。受け部が小振りで、丁寧に作られた杯身である。10は10号溝出土品と同一個体の器台片だが、この破片でも口端部内面と残存下端部付近に同心円文当て具痕が薄く残る。

5は口縁部がく字状に強く反転する二重口縁壺小片。6は広口壺であろうか。7はくびれが上位にある器台で、図示部は完周するが器表が荒れている。

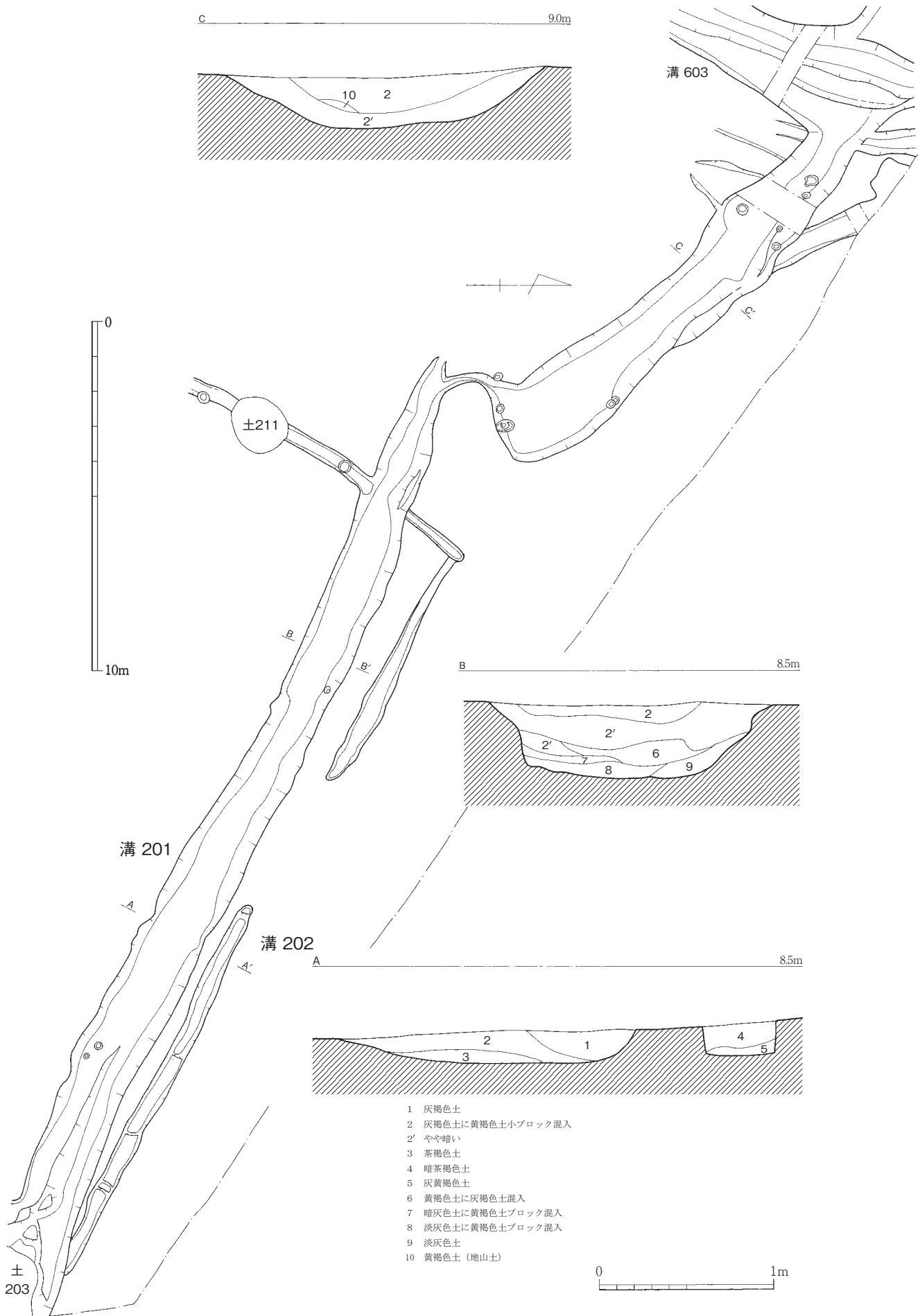
8・9は土師質の有孔棒状土錘。いずれも砂粒を含まない精良な胎土をもち、丁寧に作られる。8は灰黄褐色、9は灰黒色となる。

11・12は溝の西端付近南側、包含層中で検出した須恵器であるがここで紹介しておく。杯蓋・皿が並んで出土した（図版35）。11は1/3が残存、扁平な天井部、踏ん張りの弱い口縁部をもつ。口縁部付近の内面に灰を被る。12は口径14.6cmの皿で、口縁部の一部を欠くがほぼ完存する。外底面は撫でられている。

石製品（図版58、第91図6） 粘板岩製の砥石で、図表面及び側面がよく使用されていて、他は破面となる。

18号溝（図版1、第99図）

1区中程、16号住居跡の東にあって、西端が同住居跡と重複して住居跡に先行する。幅は1～2m



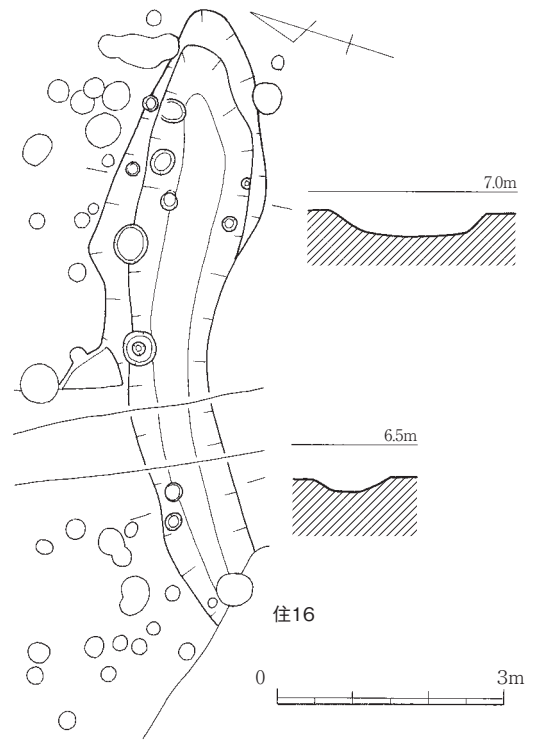
第98図 201・202号溝実測図 (1/150、1/30)

を測るが、深さは0.2mほどの浅い遺構で、壁の傾斜も緩い。

出土遺物

土器等 (図版58、第97図13~16) 13は口縁部の一部を欠くほかは完存する。レンズ状の底部をもち、張りの弱い寸胴型の体部から弱く外反する口縁部へ続く。器表が荒れているが、体部外面下端付近には縦位の篋削り痕が見え、内面には数条のしっかりした条痕があって、刷毛目原体の一部のようなものである。14は甕の口縁部小片であるが、器表の残りがよい。15はほぼ完存する小型鉢。底部はレンズ状となり、体部から口縁部にかけて緩く内彎して立ち上がる。器表が荒れている。16は部分的に黒変あるいは赤変する。中実となる支脚であろう。

石製品 (図版58、第91図7) 淡灰色の粘板岩を使用した砥石で、図表裏及び二つの側面がよく使用されている。



第99図 18号溝実測図 (1/100)

201号溝 (図版2・5、第98図)

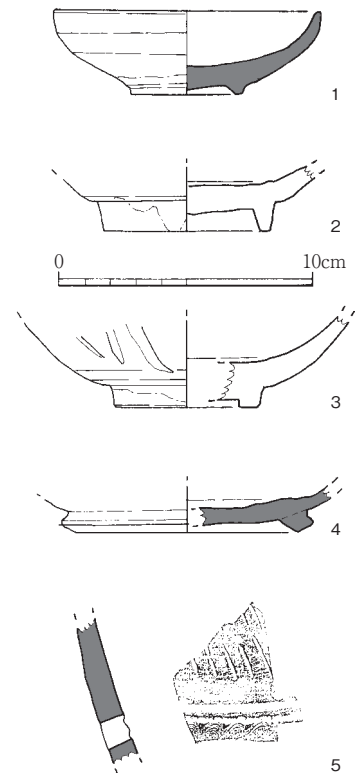
2区とした調査区を東南部から北西部へ縦断する溝である。溝の南端は203号土坑とした大型の土坑と重複するが、ほぼ同時に存在したと考えてよいと思われる。

溝は概ね幅1.5~2.0mほどであるが、202号建物跡の北西辺に揃えるように一旦終わるかのような形となり、幅0.2~0.3m、長さ1.5mほどの「隘路」をもって再び幅2.5~1.5mの幅で方位をやや変えて延びる。床面の標高は203号土坑付近で7.9m (深さ0.3m)、203号建物跡北西辺付近で8.2m (深さ0.1m)、「隘路」のすぐ北側の広がった部分は標高8.2m (深さ0.3m)、その北東11m付近の603号溝と交わる辺りでは標高8.5m (深さ0.3m)で全体として南西、203号土坑へ向かって低くなっている。なお、603号溝との先後関係は把握できていない。

建物跡の説明でも触れたが、この2区は建物跡群と土坑群を設営するために平坦地を造成したものと推測している。203号溝は201・202号建物跡とほぼ軸を揃えていて、202号建物跡北西辺で溝の形状が大きく変化すること等も併せて考えれば関連の深い一連の遺構群であるとしてよからう。

出土遺物

土器等 (第100図) 1は上野・高取系の陶器で、体部が内彎、小振りの高台をもつ。釉は光沢のない灰黄色となり、露胎部器肉は茶褐色となる。



第100図 溝出土土器等実測図7: 201号溝 (1/3)

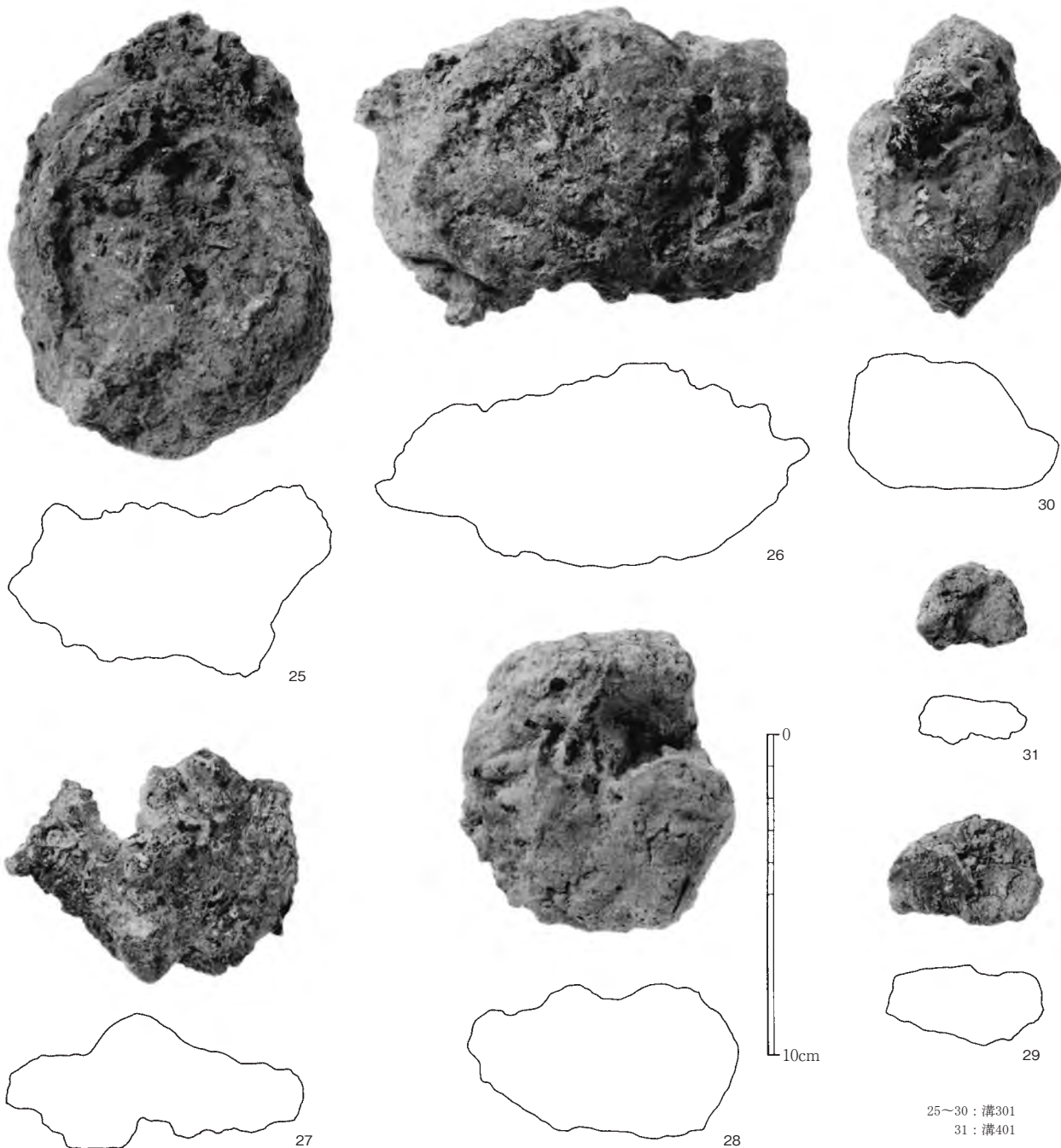
2は見込外周に圈線をもつ白磁で、釉は青白色となる。3は龍泉窯系蓮弁文椀で、灰緑色透明釉が掛かる。4は高台がしっかりした須恵器杯身底部片。5は須恵器器台脚部片である。10・17号溝などから出土した器台片と同一であるかも知れない。

石製品（図版60、第104図1） 花崗岩質砂岩を使用した砥石で、図表裏と側面の一部を使用するが、さほど磨られてはいない。

202号溝（図版2、第99図）

201号溝の北側、最大で1.0mを隔てて一見並走する溝で、幅は最大で0.5mほど、深さは最大で0.2mほどの規模となる。溝は途中1.7mほどの空白があり、北西端は直角方向に交わる溝に繋がるが、この直角方向の溝は埋土を見てごく新しいものであろうと判断している。

土師器・須恵器小片が若干出土している。

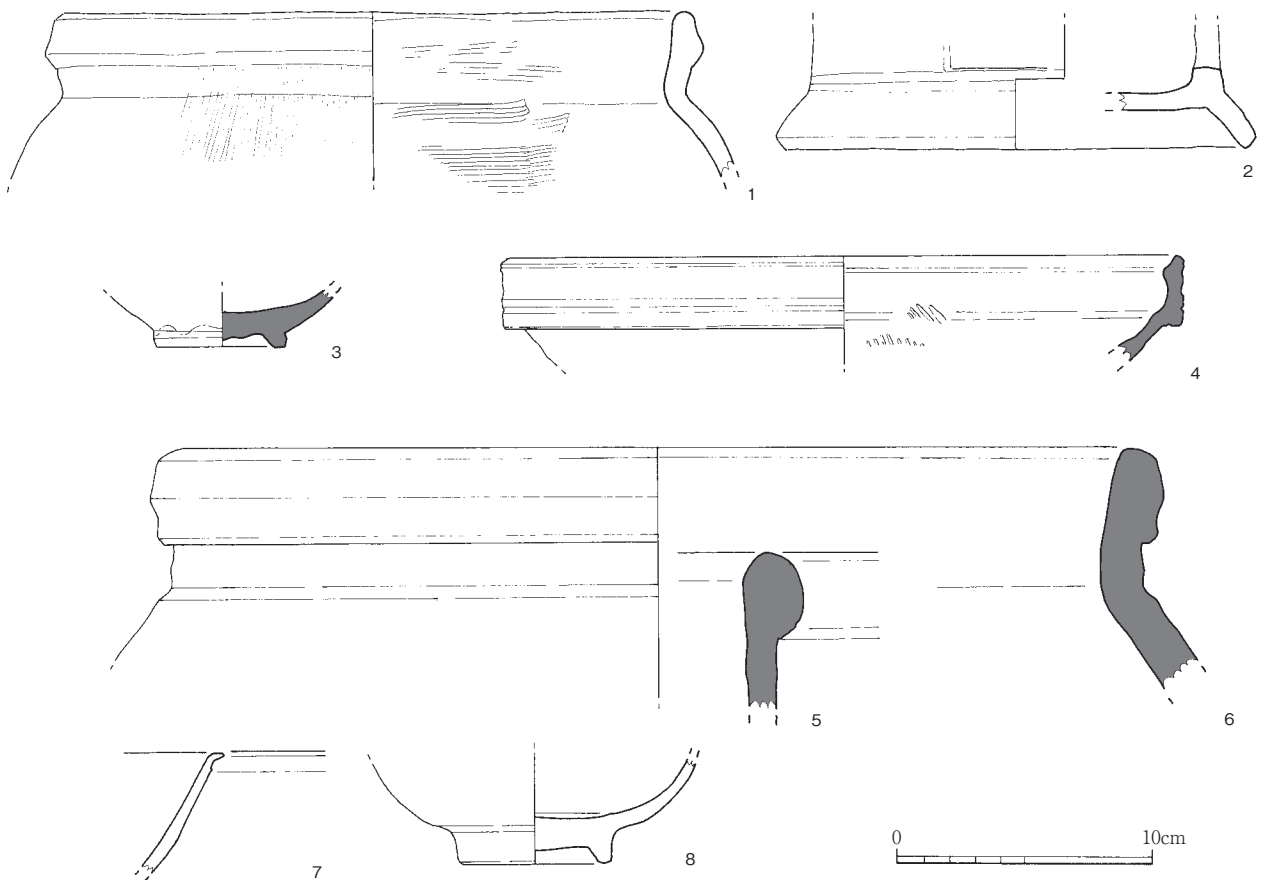


第101図 溝出土鉄滓実測図3：301・401号溝（1/2）

301 (=4=503) 号溝 (図版2・35、第95図)

4 (=503) 号溝と同一の遺構と判断しているが、途中20mほどの空白があることから別個に紹介しておく。1・3区の境は現状では畦畔であるが、地籍図上は1号掘立柱建物跡に近接する東端の住宅の北に北東から南西に向かって走る幅2~3mの里道が記されている (第95図左下の網かけ部分)。この里道はそのまま延長して、ここでいう1・3・4区の交点付近で北西に折れて、3区西端 (段落ちの肩) に添って延びている。このうち、東北-南西方向の里道部分にはその南に接して幅2mほどの水路が記されていて、現在70歳代の方が幼少の頃は「深い溝」があったとの言を得ている。この地籍図上の水路が301号溝の名残であろう。溝の中央付近の浅い部分に家庭排水用の塩ビ管が埋設されていたために完掘できず、要領を得ない部分が残っている。

301号溝は北東端では幅3.0m、南肩の標高は6.7m、北肩は同5.9mである。南側は二段のテラスがあって、テラスの標高は6.4m、5.8mである。塩ビ管の南北の最深部は5.5mで、これは同一遺構の溝底としてよかろう。南側下段のテラスはほぼ連続し、東端から16mほどのところで底幅0.5mの溝が現れて2条が重複していることが判明した。土層図を作成していないが、リバーサル写真ではテラスとなる南側の溝が北側の溝に切られていると判断される。これも図化していないが、南側の溝の西半部の表層近くで多くの礫を出土していることも先後関係を表しているといえる。ただ、溝の中程で作成した断面図では、掘り残した部分を境に0.2m以上の段があってさらに複雑な様相を呈し、さらに1条の溝が重複していた可能性もある。4区東端で検出した幅0.8mほど、深さ0.1mほどの4号溝に連続すると思われる溝は位置から見てこの南側の遺構と一連のものであろう。北側の溝は北東端で床面標高5.4m余り、南西端では同5.1mほどである。



第102図 溝出土土器等実測図8：301号溝 (1/3)

出土遺物

金属製品等（図版70、第81図6・101図25～30） 鉄製品は外径3.2cmの指輪状のものであるが、指輪にしては大きすぎる。鉄滓は礫群に混ざって出土した。重量はそれぞれ984.2・1124.7・254.8・467.7・44.1・271.0gである。

土器等（図版58、第102図） 3・6・8は上層、5は「東端礫群中」、4は「中層」の注記がある。1は全体に黄白色となる瓦質の壺で、口縁部は外側へ折り曲げて玉縁状とする。作りは甘い。2は脚を付す土師質の風炉で、底部の1/4が残存。胎土精良で作りも丁寧である。被熱の痕跡は見えない。

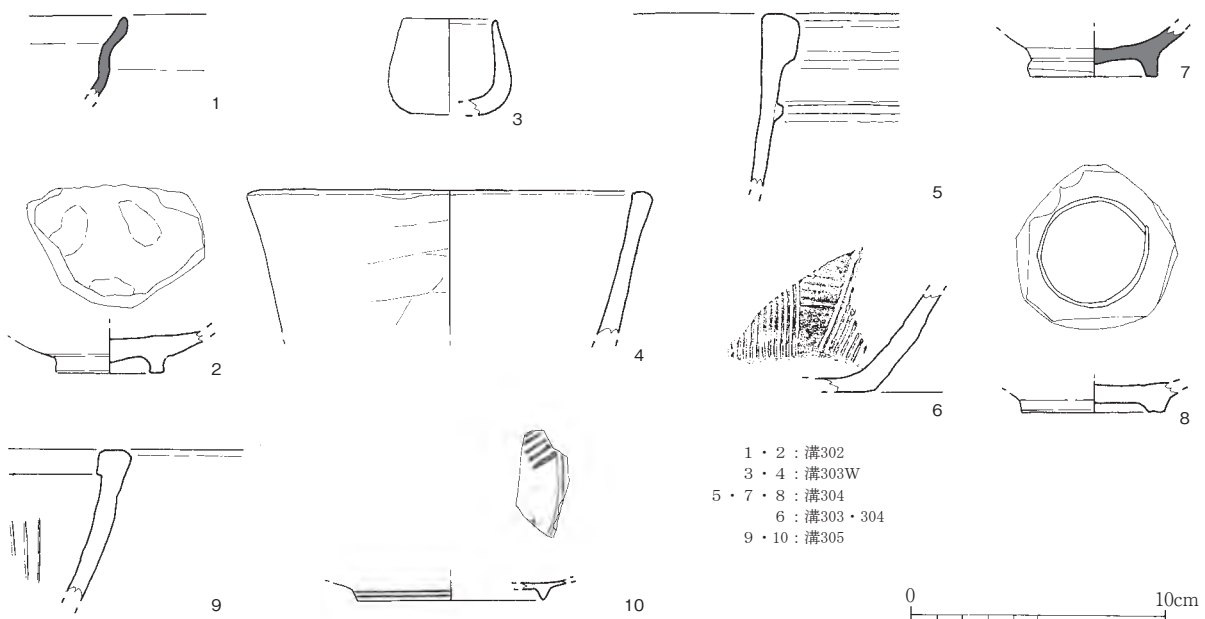
3は図示部が完存する陶器碗で、畳付を含めて総釉となるが、体部下端から高台内にかけては斑がある。青味帯びる淡灰色に発色。4は陶器摺鉢で胎土は非常に精良・緻密なものである。口縁部の形状は備前焼に似るが、全体に薄手で作りが丁寧である。口縁部外面が灰色、同内面と体部外面が黒色、それ以外は茶褐色となる。なお、体部の黒色と茶褐色部の境には熔着痕があり、発色の差は火回りの違いによるようである。5・6は備前焼の壺である。5は口縁部を外面に折り曲げて玉縁状とし、6も同様の形態であるが、玉縁部を強く横撫でして変化を加える。

7は口縁部が水平に小さくつまみ出される通有の白磁片。8は底部の2/3が残存する龍泉窯系青磁で、見込外周に圈線がある。胎土は暗灰色の緻密なもので、釉は灰味帯びる青緑色に発色する。畳付から高台内は露胎で、器表・器内とも灰赤褐色となる。

石製品（図版60、第104図2・5・6） 2は中程上層の礫群中から出土した黄白色石英斑岩を用いた砥石で、2面がよく使用されている。5は安山岩製の茶臼片。受皿部がごくわずかに残ることから図のように想定した。底面は敲打整形したようで、平滑化せず凹凸が多い。側縁には工具痕がよく残る。6は凝灰岩製の上臼で、目が粗い。

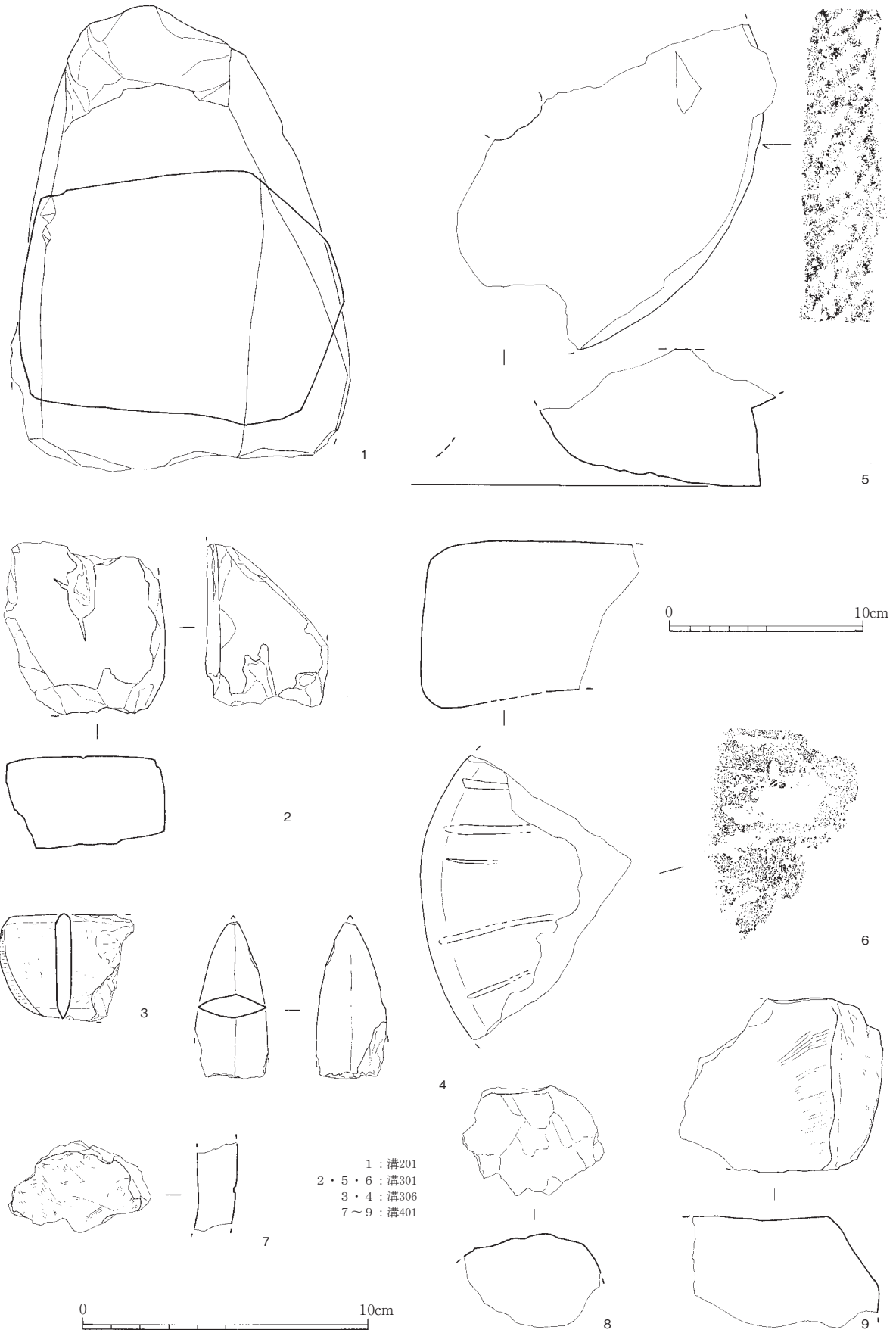
302号溝（図版2、第174図）

306・309・310号土坑とした井戸と思われる3基の土坑が連続する付近の南に位置する。この溝の東側は2区であり、溝の東肩とは0.7m前後の比高がある。その下端、裾に位置する溝は最大で幅1.5m前後、深さ0.1mほどの浅いものである。



第103図 溝出土土器等実測図9：302～305号溝（1/3）

溝の在り方を見ると、301号溝とはほぼ直角方向に北西に延びて、306号土坑付近で曲線を描いて309号土坑に接して終わる。溝は301号溝に切られていたと判断しているが、301号溝の南側では同一溝の延長を検出していない。301号溝に掘り直しが認められたことから、その古い段階の溝と



第104図 溝出土石製品等実測図3：I-2~4区（1/3）

の関連が想定できる。

出土遺物

土器等（図版58、第103図1・2） 1は口縁部が屈曲する陶器の小片で、胎土は灰白色緻密で釉は緑褐色～濃い灰緑色に発色する。2は朝鮮半島製の磁器である。断面方形の低い整った高台を付す底部片で、見込に目痕を残し、熔着した目を外す際に高台が多く欠損している。釉は青味を帯びる暗灰色に発色し、豊付に至るまで総釉となる。

303号溝（図版2、第174図）

302号溝の南西に位置し、同じように301号溝と直交しそれから切られていて、その南側には現れていないことから、302号溝と同じように301号溝の古い段階の溝に関連するものであると思われる。溝は南端付近で幅1.8m、深さ0.2mほどであるが、検出範囲の中程で2条に分かれている。301号溝から8mほど北で途絶えるが、その付近では幅0.4m～0.5m、深さは0.1mに満たない浅いものとなる。床面は北が高く、南が低い。なお、その延長に313号溝とした遺構が位置するが、313号溝の床面レベルが303号溝北端より低くなっていて同一遺構とは見なせない。

出土遺物

土器等（第103図3・4・6） 3は手捏ね土器の残片で、形状・復元口径には不安がある。胎土良好で、この種の土器にしては器面も平滑化する。4は口縁部が直線的に伸びて端部に変化を加えない瓦質土器で鉢であろうか。胎土良好で、内外面が黒色化する。

6は303・304号溝のいずれから出土したものの確認できていない。瓦質摺鉢片で、胎土・作りともに良好。

304号溝（図版2、第174図）

303号溝の西3mほどを隔ててほぼ並走する幅1m、深さ0.2mほどの溝である。これも301号溝の南では確認していないので、301号溝に関連するものであろう。

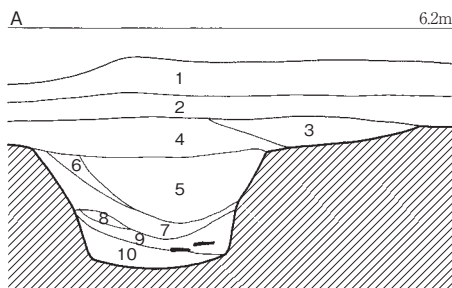
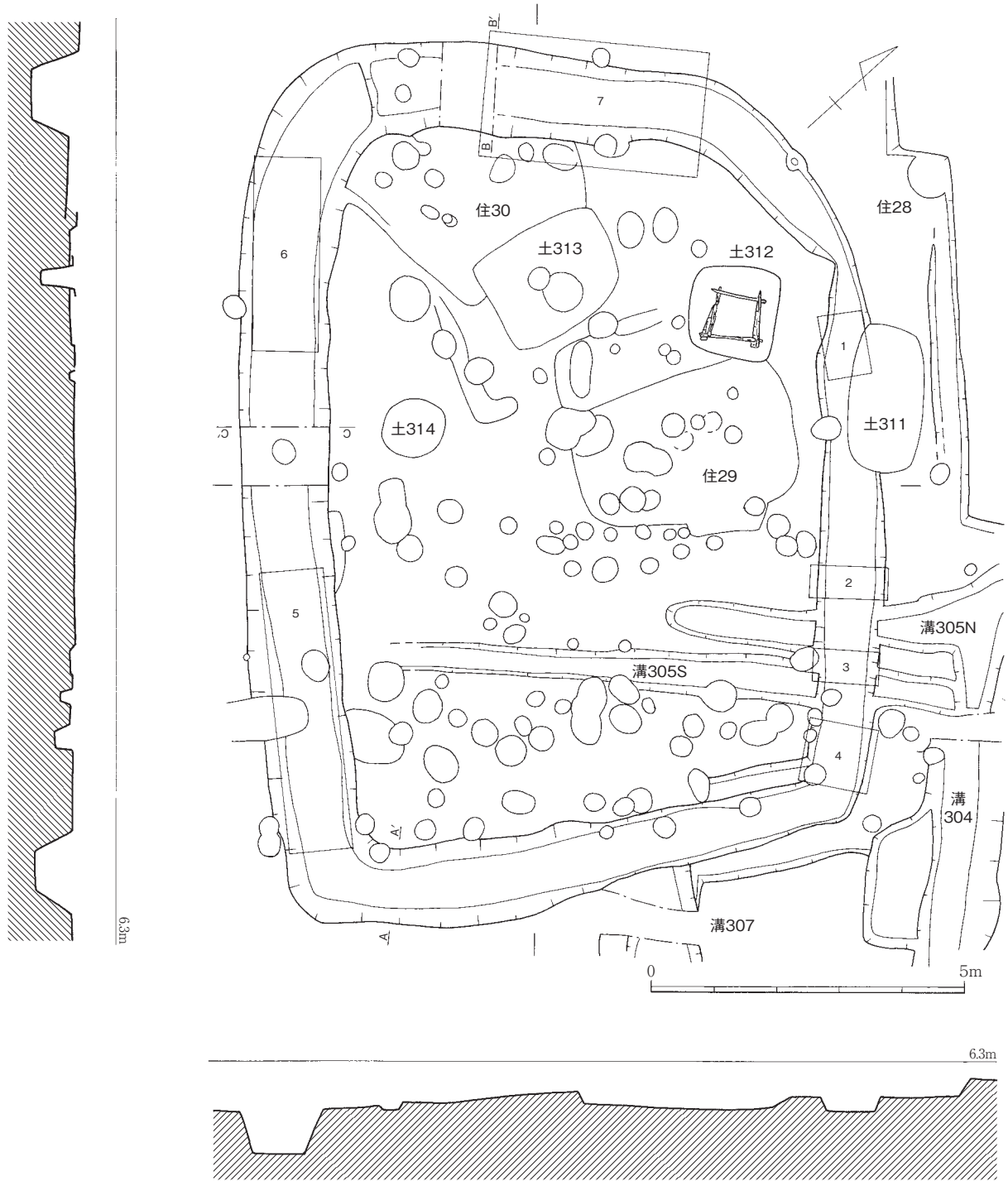
この溝は9m弱の長さを確認したが、北西端で後述する305・313号溝に連続して終わる。先後関係を確認できていないが、不自然な平面形状となることから複数の遺構が切り合っていると考えている。

出土遺物

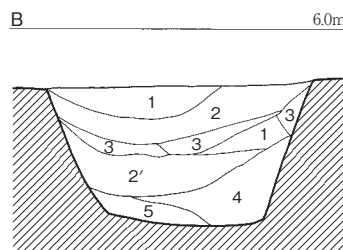
土器等（図版58、第103図5・7・8） 5は瓦質の風炉小片。口縁部を断面長方形に肥厚させて、頸部下外面にやはり断面長方形の突帯を付す。胎土・作りとも良好で、暗灰色となる。7は高い高台をもつ陶器で、残存部の外面は露胎、内面には灰緑色の釉が掛かる。露胎部は暗灰色となる。8は龍泉窯系青磁碗で、高台が薄手で小振りとなる底部。見込に圈線を刻み、釉は灰味帯びる青緑色となる。豊付は半分ほど釉が掛かるが、部分的に釉を掻き取ったような痕跡がある。高台内はほぼ露胎で、中央に直径1.3cmほどの小さな突出があって、最終的にここを切り離したものである。

305号溝（図版2、第174図）

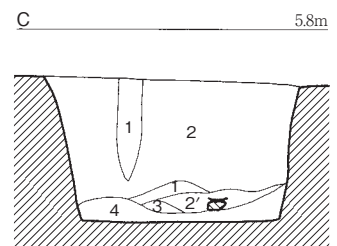
304号溝の北西端付近で、304号溝を起点とするように2条の溝が南西へ向かって直角方向に伸びていて、それぞれ305N・305S号溝とした。幅はいずれも0.6～0.7mほどで、N号溝は深さ0.1m前後、S号溝は0.1mに満たない浅いものであった。



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 6 灰褐色粘質土 |
| 2 灰褐色土 | 7 灰黒色土 |
| 3 砂礫・土器片層 | 8 灰褐色土 (黄褐色土混入) |
| 4 黒褐色土 | 9 灰褐色土 |
| 5 灰褐色土に黄褐色土ブロック混入 | 10 黄褐色土 (濁った地山土) |

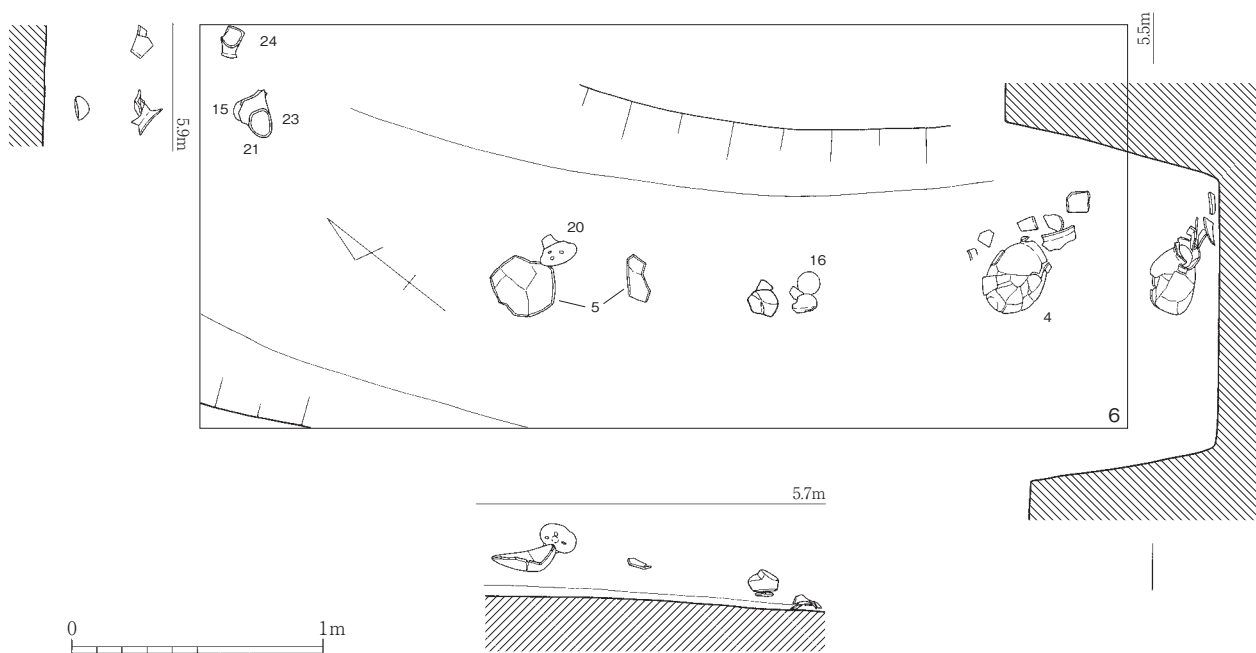
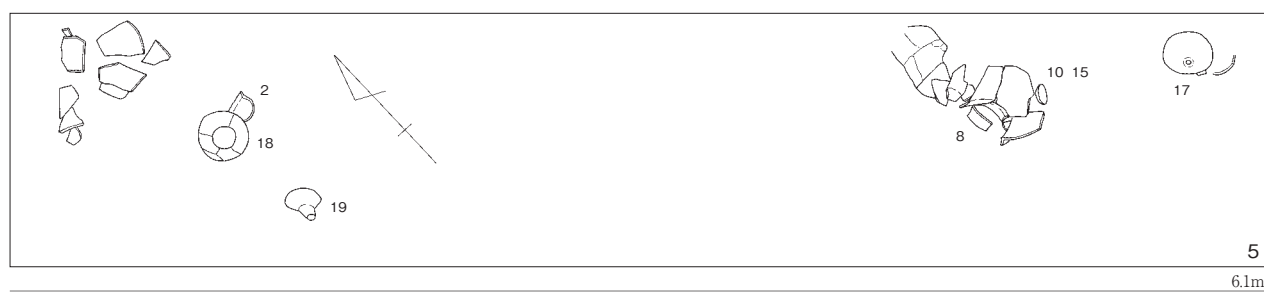
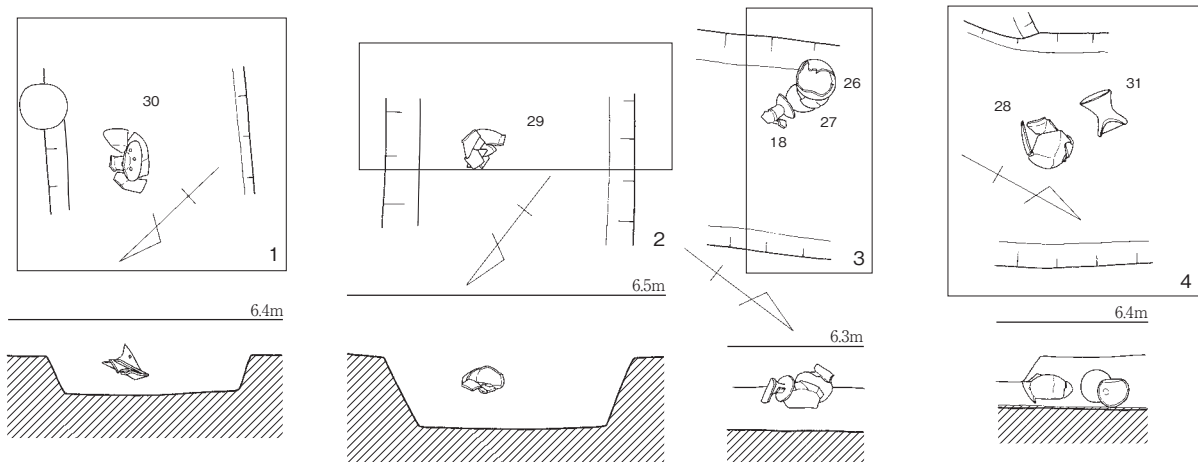


- | | |
|--------------|---------|
| 1 茶褐色土 | 4 灰黄褐色土 |
| 2 暗茶褐色土 | 5 暗黄褐色土 |
| 2' 小炭灰ざりの2 | |
| 3 黄褐色土 (地山土) | |



- | | |
|----------------|-------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 3 黄褐色土 (地山土) ブロック |
| 2 1に黄褐色土ブロック混入 | 4 黄褐色土 (地山土) 再堆積 |
| 2' 黄褐色土が少ない | |

第105図 306号溝実測図 (1/100、1/40)



第106図 306号溝土器出土状態実測図1 (1/30)

出土遺物

土器等（図版58、第103図9・10） 9は土師質の摺鉢小片。口縁部は内側へ肥厚し、断面方形に近くなる。10は華奢な高台をもつ染付の皿である。明るい鮮やかな青色に発色する。

306号溝（図版2・36・37、第105～107図）

3区南西よりで検出したいわゆる方形周溝である。南西辺が北東辺より長く、かつ北隅が丸くなって平面的には歪な形となる。幅は大部分で1.0～1.5mとなるが、北隅の丸くなる付近のみ0.5mほどに狭くなる。各辺中央付近の床面の深さ（標高）は北東辺0.2m（5.5m）、南東辺0.6m（5.1m）、南西辺0.7m（4.8m）、北西辺0.8m（5.0m）ほどとなり、標高で最大0.7mの差があつてまちまちである。

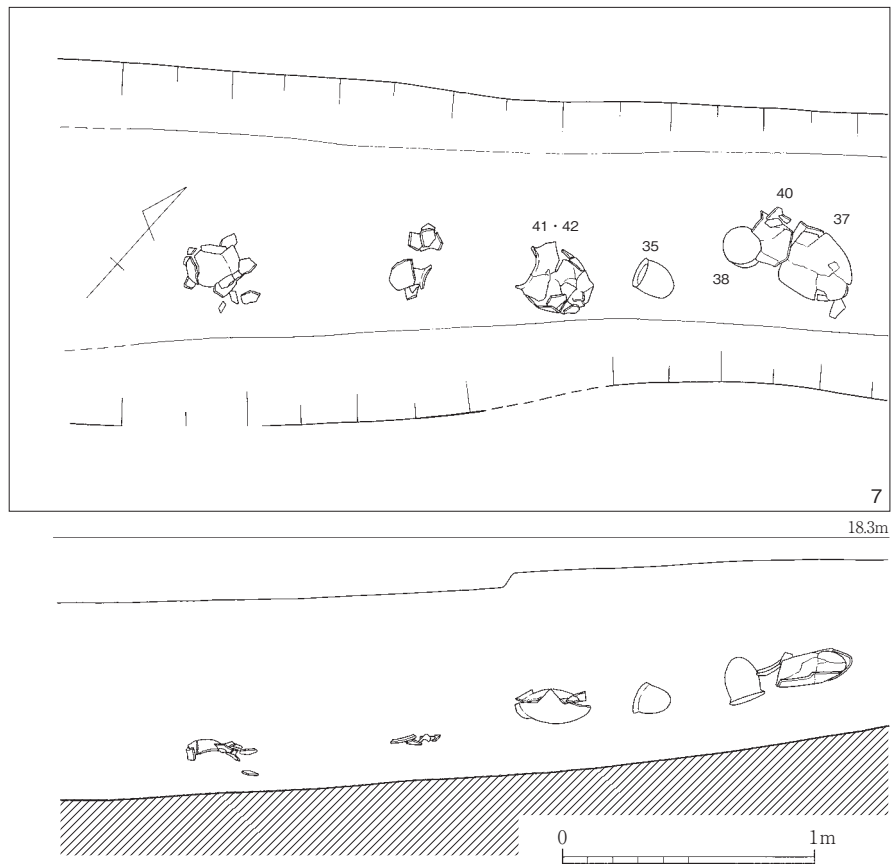
溝の埋土について記せば、自然堆積の場合に往々にしてみられるレンズ状に堆積する黒色系埋土が少なく、特に北西辺の土層ように一気に埋めたような様を呈する部分もあった。

なお、周溝内部で竪穴住居や柱穴・土坑などが検出されたが、周溝との関連性を積極的に認めうるものはない。

出土遺物

土器等（図版58・59、第108～113図） かなりの土器が出土しているため、各辺に分けて図示、説明を加える。

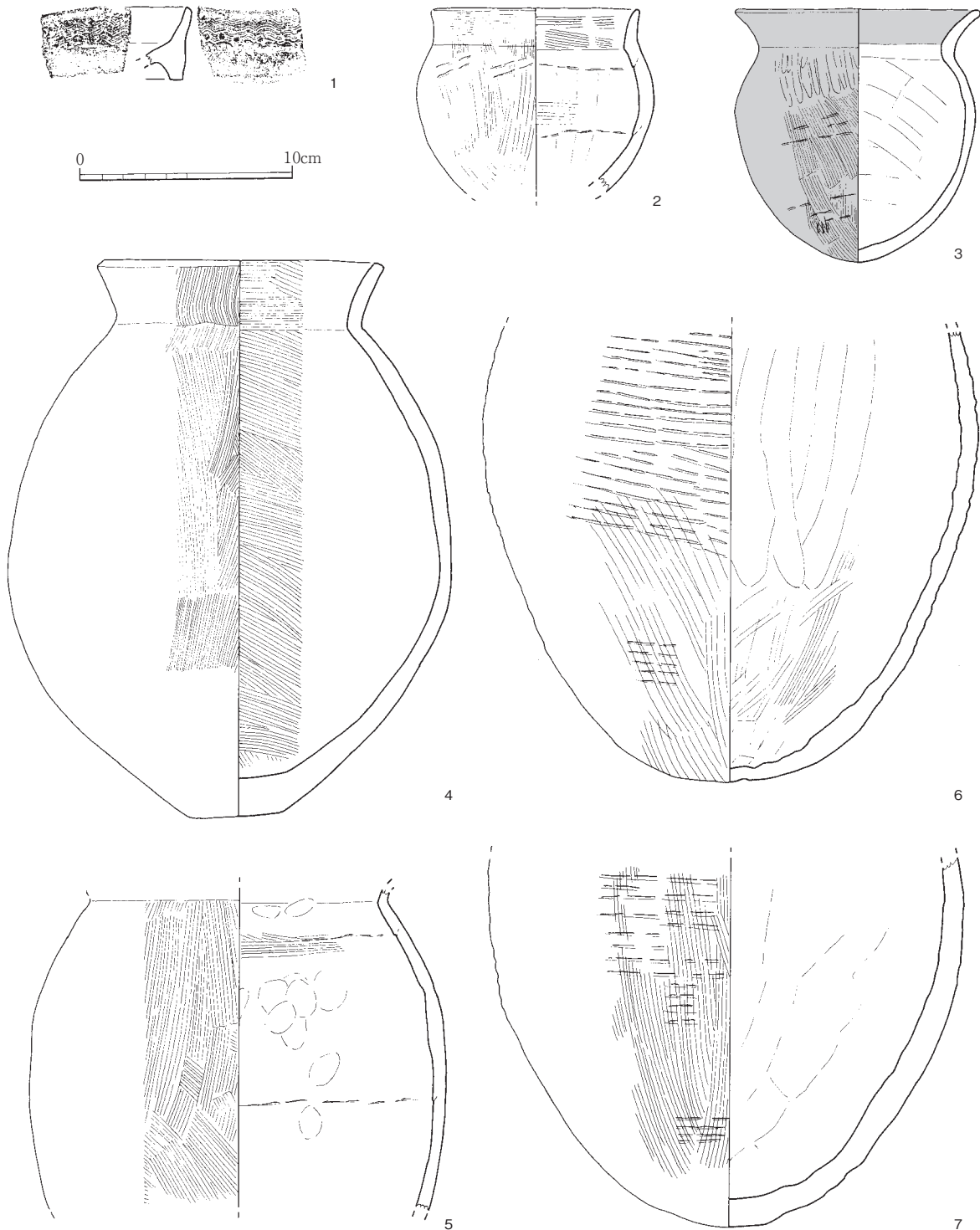
南西辺 1は口縁部を下方に拡張して広い面を作り、外面に繊細な櫛描波状文と小さな連続竹管文、内面に同様の櫛描波状文を刻む外来系の壺。胎土に特別なものはないが、表面が赤味をもって焼かれる小片である。2は頸部の2/3が残存する。口縁部はほぼ直立し、体部の張りが弱い。体部内面上方に粘土紐の接合痕が残るが、内外面ともに丁寧に調整されている。また、外面頸部下に平行叩きの痕跡が見える。3は口縁部が強く外反する小型品で、外面及び口縁部内面に赤色塗彩するようである。体部内面は丁寧に篋削り、同外面は頸部下に縦位の平行叩きが残り、以下は右上がりの平行叩きの後に刷毛目を施す。4は平底、張りの弱い底部をもつ甕で、口縁部は直線的に小さく開く。



第107図 306号溝土器出土状態実測図2（1/30）

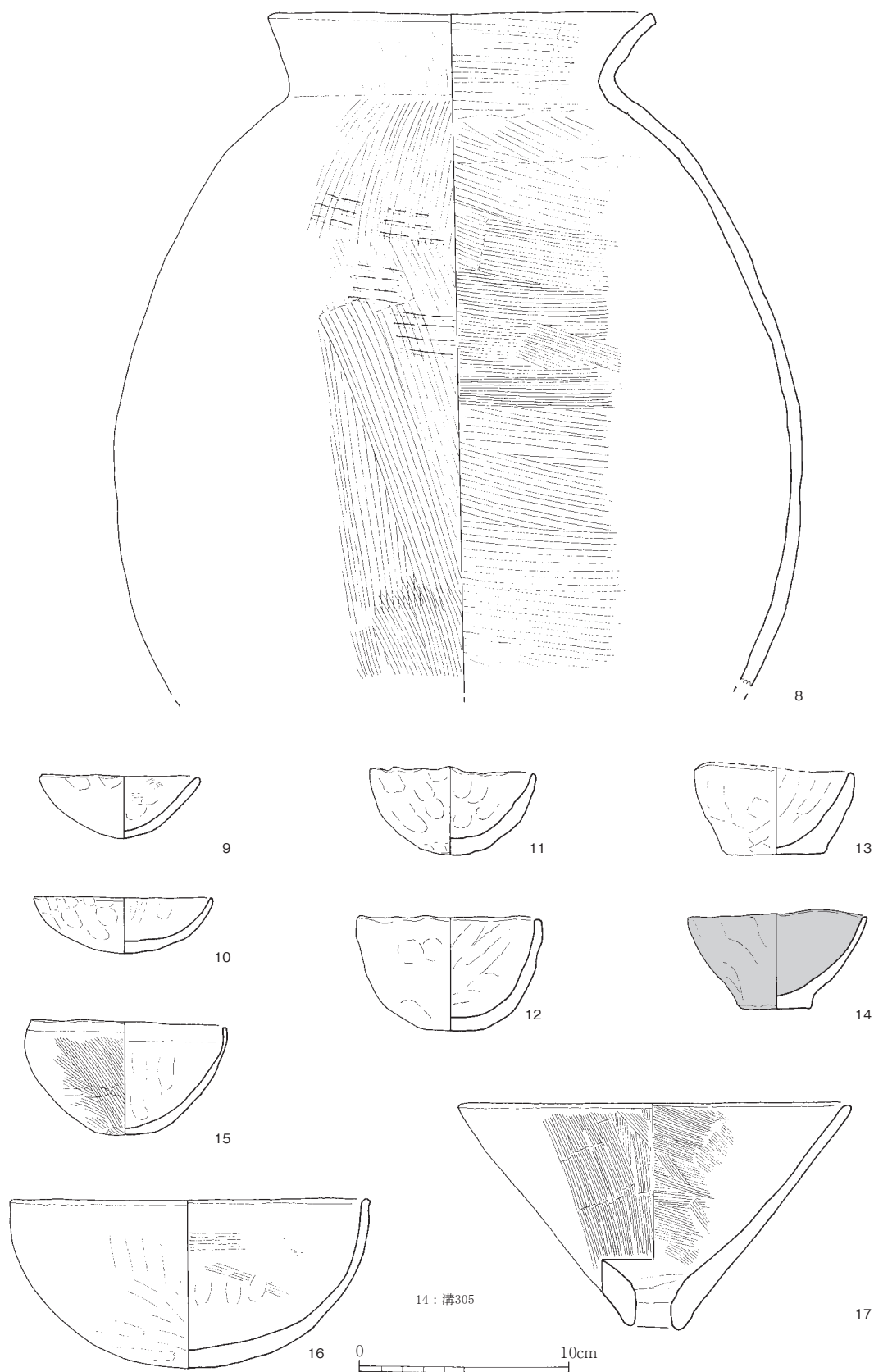
体部外面下半に煤が付着、その上方は赤変して煤が付着する。ほぼ完存。5は体部上半の残片で、残存部下端付近に煤が付着。6は底部が完存。外面は叩きの後に刷毛目を施すが、非常に雑な感がある。これも外面に煤が付着する。7は底部付近が完存。内面は篋削りを行うが肉厚となる甕で、外面は叩きの後に刷毛目を施す。これも焼けて赤変する。8は口縁部付近が完存するが底部を失う甕。全体に刷毛目で調整し、外面では中位以上と下位で原体を変えている。外面に煤が付着する。

9~14は手捏ね土器。9は口縁部の一部を欠くほかは完存に近い。浅いが底部は尖底気味となり、口縁部の歪みが大きく、粘土板を細工したように思える。胎土は良好。10は浅く丸底となるもので、これもほぼ完存する。胎土良好で、口縁部は歪んでいる。11は口縁部付近の1/4を欠くほかは



第108図 溝出土土器等実測図10：306号溝南西辺1 (1/3)

残る。12は底部が完存、口縁部の1/3が残存する。これも胎土良好である。13は底部付近は完存するが、口縁部はほとんどを欠いている。肉厚、平底となる。14も平底で、体部が大きく開く。完存に近く、口縁部下外面及び内面の一部に赤色顔料が残る。胎土良好。なお、これには「305号溝南西隅」の注記があるが、そこは306号溝と重複することからこの溝に属するものとした。



第109図 溝出土土器等実測図11：306号溝南西辺2 (1/3)

15も小型の鉢であるが、これは内外面ともに丁寧に仕上げられている。薄手、平底となる。16は底部が丸底、体部が内彎して口縁部付近で直立する椀で、外底面付近は草類で撫でたように見える。底部は完存。17は1孔の甑で完存する。孔は成形時に棒のようなものに巻き付けて作ったようで、穿孔したものではない。

18は脚部が小片となるが他はほぼ完存する高杯で、脚端の立ち上がりが低い。杯部内面は微細な横刷毛のようである。杯上半部と底部の接合部内面に充填した粘土がすべて剥落している。

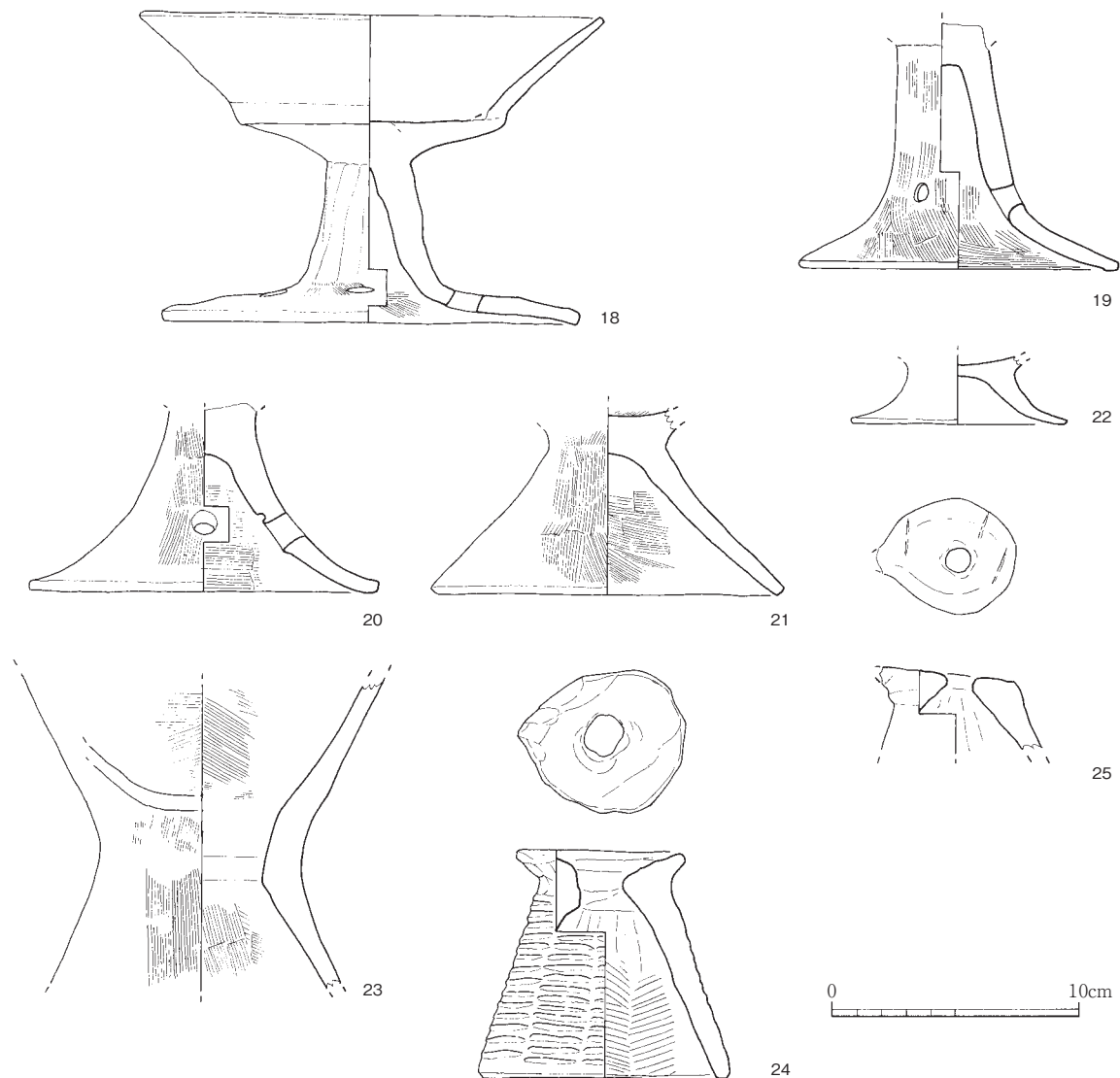
19は脚部の1/2が残存。3方透孔である。20は図示部が完存する4方透孔の脚部で、器表の残りが非常によい。

21は残存部の径が大きく、脚台であろう。全体を細かい刷毛目で調整、脚端部付近が赤変する。

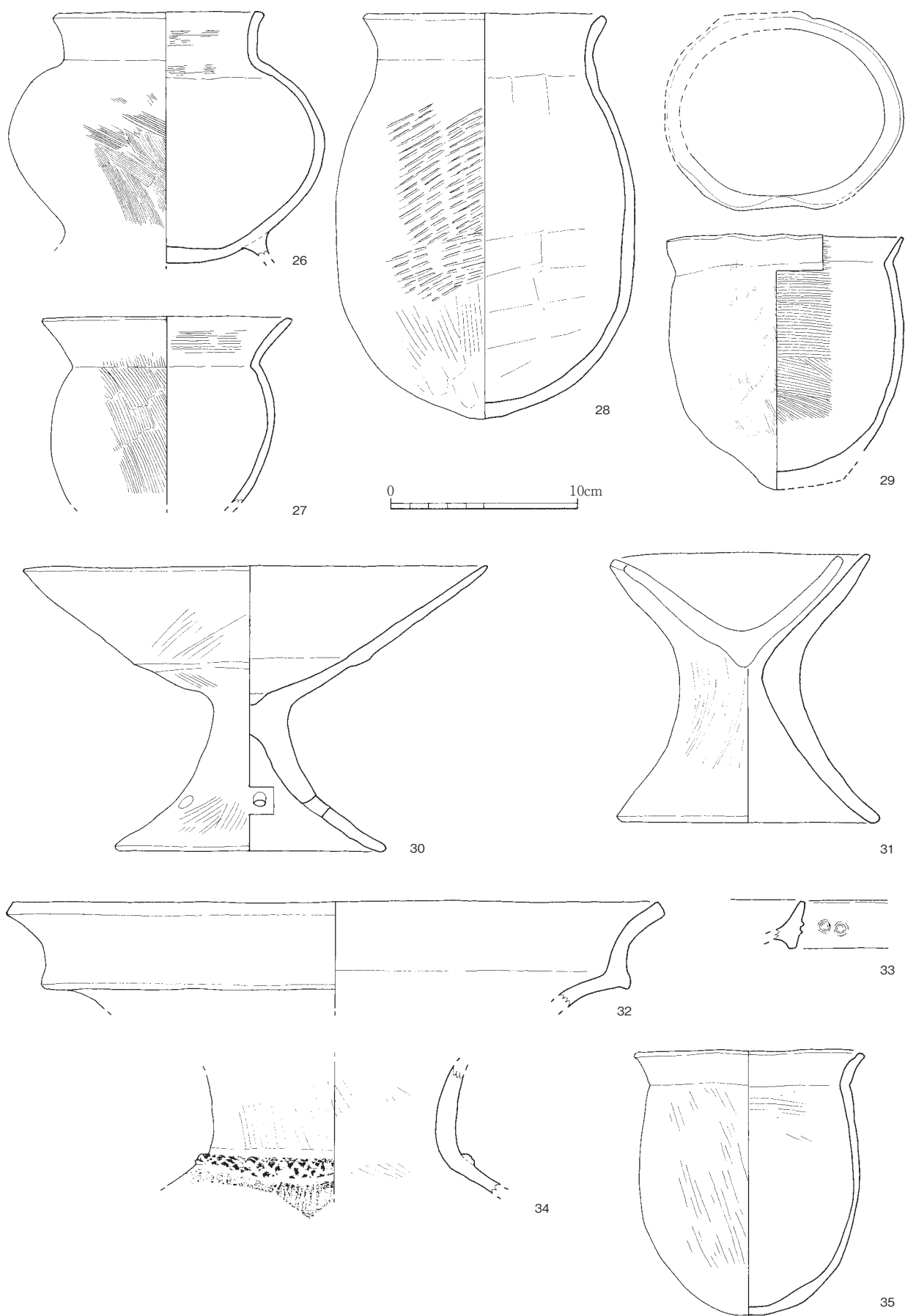
22は小型の脚台で、これも脚内部が赤変する。

23は挟りが入る器台で、外面上下が煤け、内面は器表の残りがよい。24・25は頂部に孔をもち、その一端をつまみ出す支脚。24は頂部を凹めていて、それほど焼けていない。外面は大部分を叩きで、内面は丁寧な刷毛目あるいは撫でて仕上げる。25はとても丁寧に作られていて、これは上端付近が赤変する。

北東辺 26は脚付の壺で、底部付近は完存する。口縁部は外彎しつつ直立し、張りの強い体部をもつ。器表外面は非常に荒れているが、内面は丁寧に撫でて仕上げる。27は口縁部が発達する



第110図 溝出土土器等実測図12：306号溝南西辺3 (1/3)

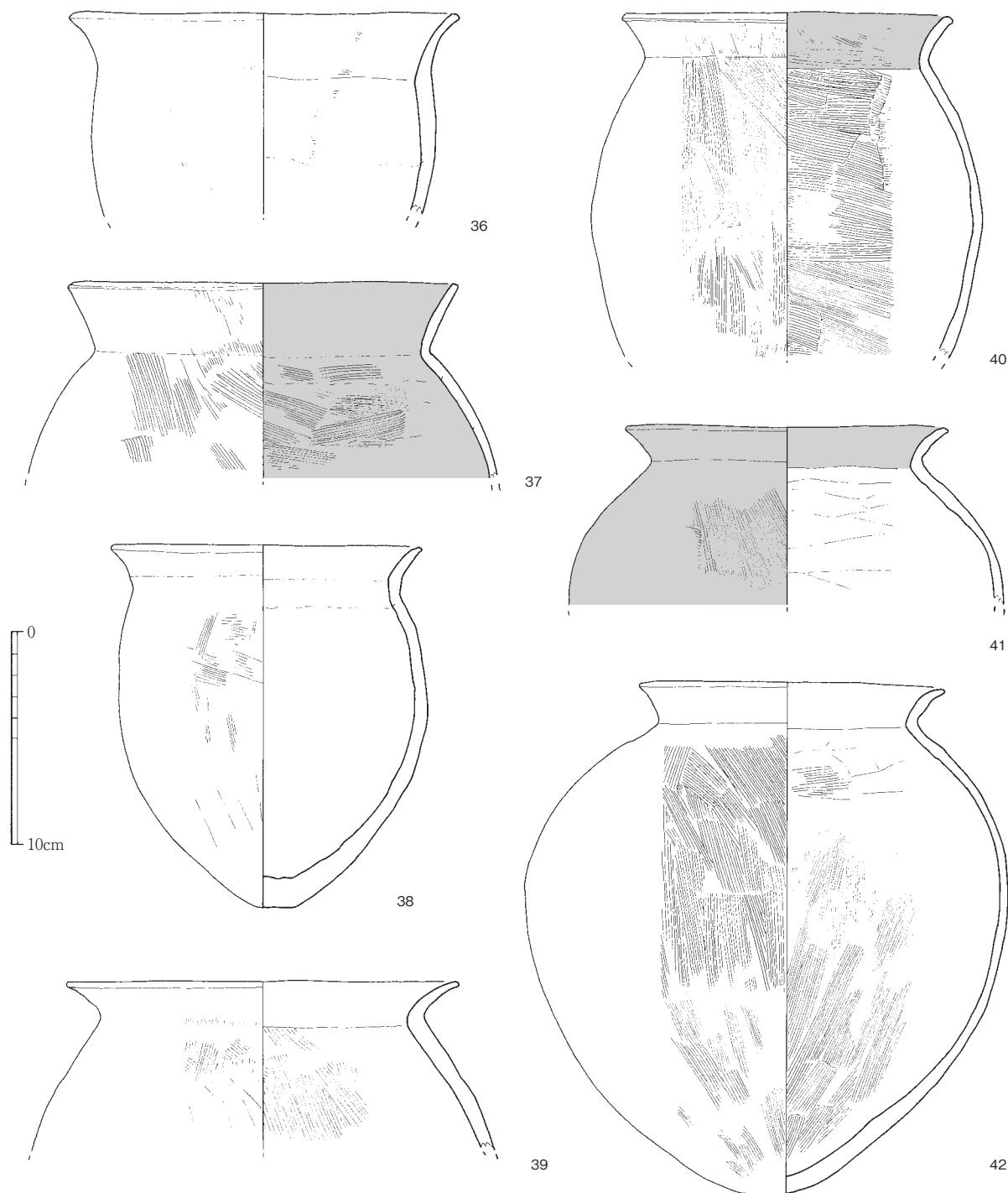


第111图 沟出土土器等实测图13：306号沟北东边·北西边1（1/3）

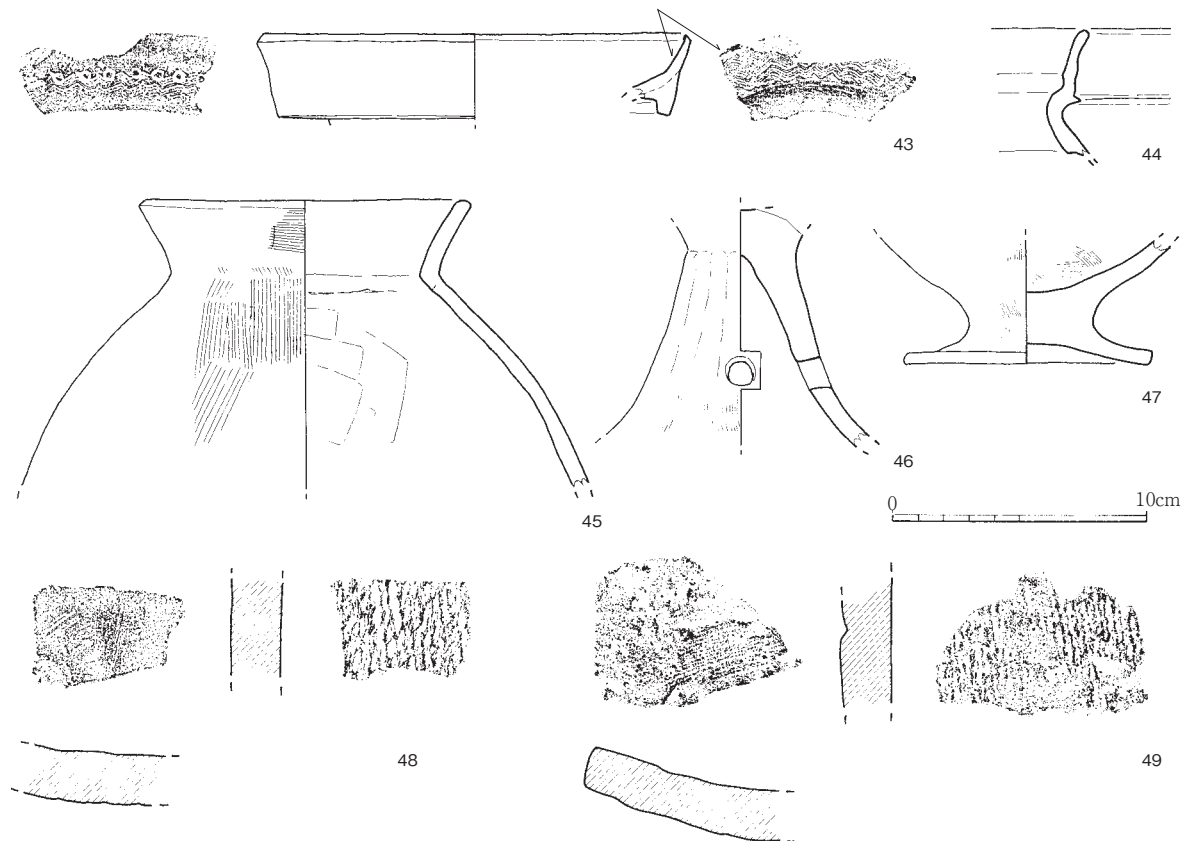
甕で、体部は張りが弱い。体部外面は焼けているが刷毛目が見え、内面ははっきりしないが砂粒が動いていないので撫でて仕上げていると思われる。口縁部が完周する。28は体部下半が完存。口頸部が弱くC字形に外反し、体部の張りが弱い。体部外面には叩きが見えるが、底部付近は縦方向に篋削りを行い、そのすぐ上は刷毛目を施す。これも焼けて赤変。29は口縁部が大きく歪んでいる。頸部以下が完存し、底部は剥落する。これも焼けていて煤ける。

30は杯部上半が非常に発達し、脚部が小さいアンバランスな高杯で、これも全体に赤変し、器表が荒れている。31は挟りの入った器台で、内面は図下半が赤色系、上半が黒色系となっている。外面調整は草類で撫でたようである。

北西辺 32は器表が荒れた二重口縁壺片。復元口径には不安がある。33は口縁部を垂下させて面を広げる二重口縁壺で、円形浮文上に竹管文を押す。内面はすべて剥離するようである。34は



第112図 溝出土土器等実測図14：306号溝北西辺2 (1/3)



第113図 溝出土土器等実測図15：306号溝南東辺（1/3）

頸部突帯に斜格子状に篋描沈線を刻む壺で、器表が荒れる。

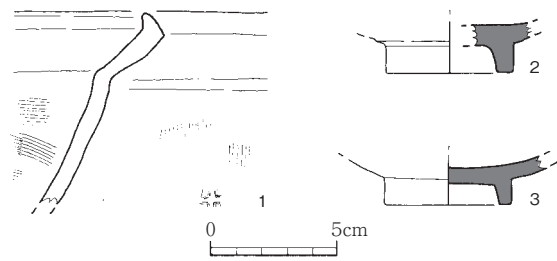
35は縦位に1/2ほどが残存する甕で、赤変して煤ける。36は口縁部の1/4が残存し、器表が荒れる。体部の張りが弱く、口頸部が緩く外彎する。37は頸部が明瞭となる。外面は煤が付着するだけであるが、口縁部内面及び体部内面の継ぎ目痕などの凹部には薄く赤色顔料が見える。38はほぼ完存する甕で、口頸部が外彎、張りの弱い体部から尖底気味の底部へ続く。体部外面下半は篋削り、内面の調整痕ははっきりしないが、一部に篋削りのような痕跡も見える。39は体部が張る1/4の残片で、口縁部は強く外彎する。これも残存部下端外面に篋削りが見える。40は口頸部が弱く外彎、体部の張りは弱い。全体を刷毛目で仕上げるが、体部外面下位では叩き目が覗く。また、口縁部内面に赤色顔料が一部残存、体部内面は全体が黒く焼かれていて顔料は見えない。41は口縁部が強く外反、体部が張る土器で、これも口縁部内面から体部外面にかけて赤色顔料が塗られたようである。2/3が残存。42は体部中位以下が完存、口縁部付近の1/2が残存する。口縁部が短く強く外反、体部の張りが強い甕で、内外面全体を細密な刷毛目で仕上げる。外面は赤変して煤が付着、内面には焦げ付きが見られる。

南東辺 43は口縁部を垂下させる二重口縁壺片で、内外面に鋸歯文状の繊細な櫛描波状文を刻む。外面には小振りな竹管文も飾る。やや大粒の砂粒が浮くが、概ね胎土良好、丁寧に作られた土器である。44は山陰系の二重口縁壺小片で、胎土に特別なものはない。

45は撫で肩となる甕で、頸部の1/3が残存、体部内面は丁寧な篋削りがなされる。46は高杯であろう、4個の円孔がある。47は低い脚台。

48・49は凸面に縄目叩きを残す平瓦小片。48の凹面は撫でであろうか、丁寧に布目痕を消している。49は凹面に布目痕を残し、焼けて赤変する。

石製品（図版60、第104図3・4） 2点ともに北西辺からの出土。3は平面形が台形に近く、刃部は両刃、左側縁は片刃として鋭く研ぎ出した粘板岩製石庖丁片。両面とも刃部付近は横位あるいは斜位の細かな条線が、その上方は図で縦方向のやや粗い条線が無数に見える。4は粘板岩製の磨製石剣で、残存する刃部は非常に鋭く研ぎ出されている。鎬は片面はやや鋭く、他方の面ではやや甘い。



第114図 溝出土土器等実測図16：
312・313号溝（1/3）

313号溝（図版2、第174図）

304号溝に連続し、屈曲して伸びる西北端の直行部分を313号溝とした。最大幅1mほど、南西に屈曲する付近での深さが0.4mほどで最大となり、西北端の深さは0.1mであった。

出土遺物

土器等（第114図） 1は1/4弱が残る瓦質の鍋で、焼け歪む。口縁部が外方へ屈曲、端部を大きくつまみ出している。全体に刷毛目を多用するが、外面下端付近には格子叩きが残る。丁寧に作られていて、遺存状態もよい。2・3は陶器。2は施釉されておらず、器肉・露胎部は灰赤色となる。3は完周する底部で、見込付近は露胎、残存部内面上端に掛かる釉は緑色に発色、外面は露胎で赤褐色～灰茶褐色となる。

330号溝（図版2、第174図）

3区北西端にあり、北東から南西に向かって直線的に延びていた。幅1m弱、深さ0.3mほどの規模で、切合い関係にあるすべての遺構を切っていた。埋土は黄褐色の様なものであった。

出土遺物

図示していないが、出土土器に備前焼摺鉢などの近世陶器が若干ある。

石製品（図版61、第130図2） 玄武岩製の太型蛤刃石斧の刃部片であるが、厚さは2.3cmにすぎず、幅も6.0cmと小型化する。長く使用し、研ぎ直したものであろう。

401号溝（図版1・38、第117・174図）

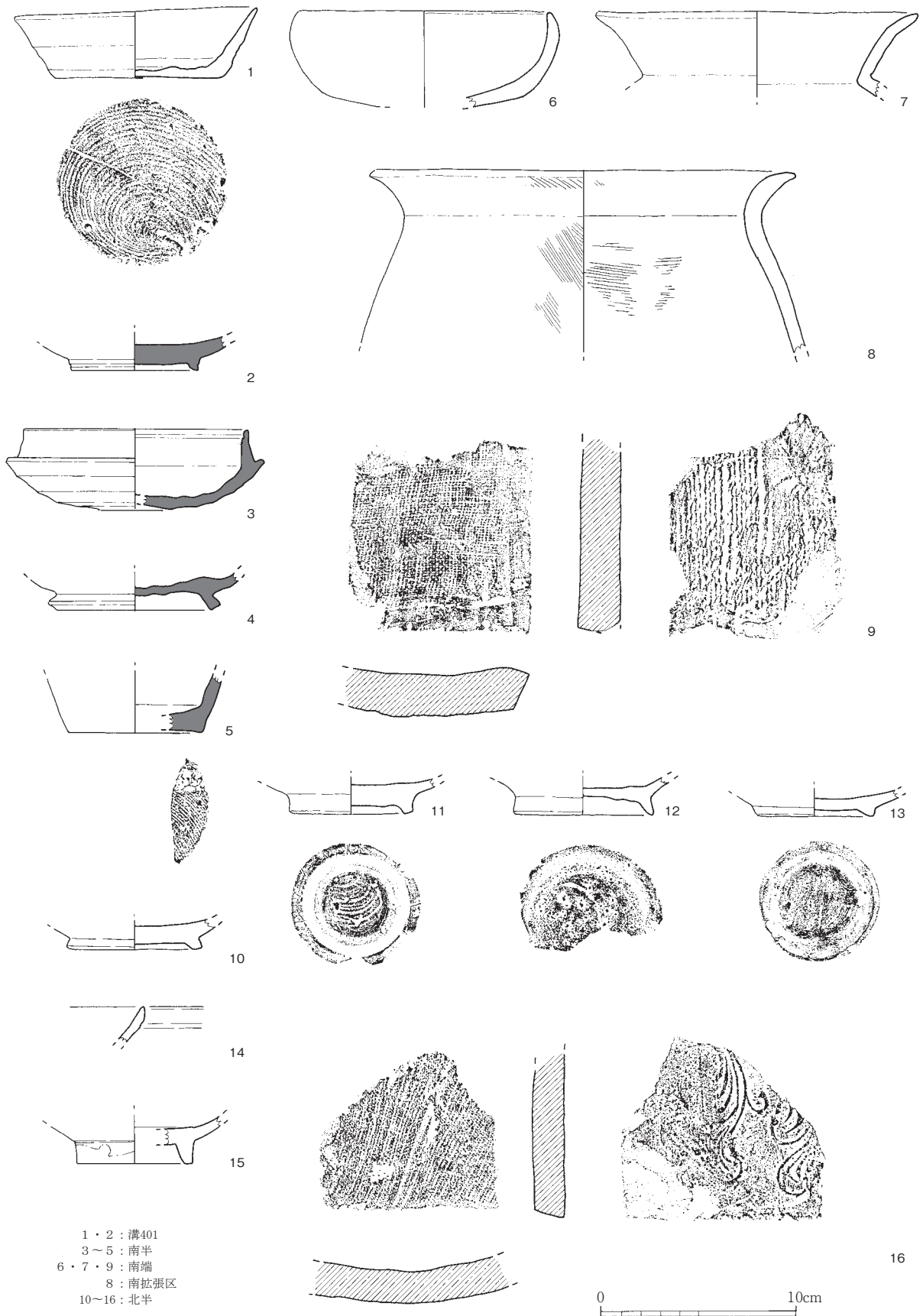
4区を南北に縦断する溝である。この溝を検出した面は、溝の東側では阿蘇4由来の黄褐色系の安定した地山、西側は土器を多く含む暗茶褐色土が堆積して、その違いは明瞭であった。暗茶褐色土の下位は青灰色土、弥生土器を多く含む灰黒色土が堆積していた。これらの堆積層を完全に除去していないが、1・4区の境付近から約30m西側には山崎川が地形に添って南北方向に流れていて、そこまで落ちていくのであろう。

溝は幅1.2mほどの規模で、南端は後述する402（≒505）号溝に切られている。南端付近の底の標高は3.7mほど（深さ0.1m）、土層図を作成した403号土坑のすぐ北付近で標高3.7mほど（深さ0.5m）、7号住居跡の西付近で標高4.0m前後（深さ0.4m前後）であるが、この付近は床面の形状が乱れていた。403号建物跡付近で標高4.2m（深さ0.5m）、検出した北西端で標高4.7m（深さ0.4m）ほどの規模である。土層図は1箇所でしか作成していないが、そこでは床面付近に厚く青灰色粘土が堆積していた。

出土遺物

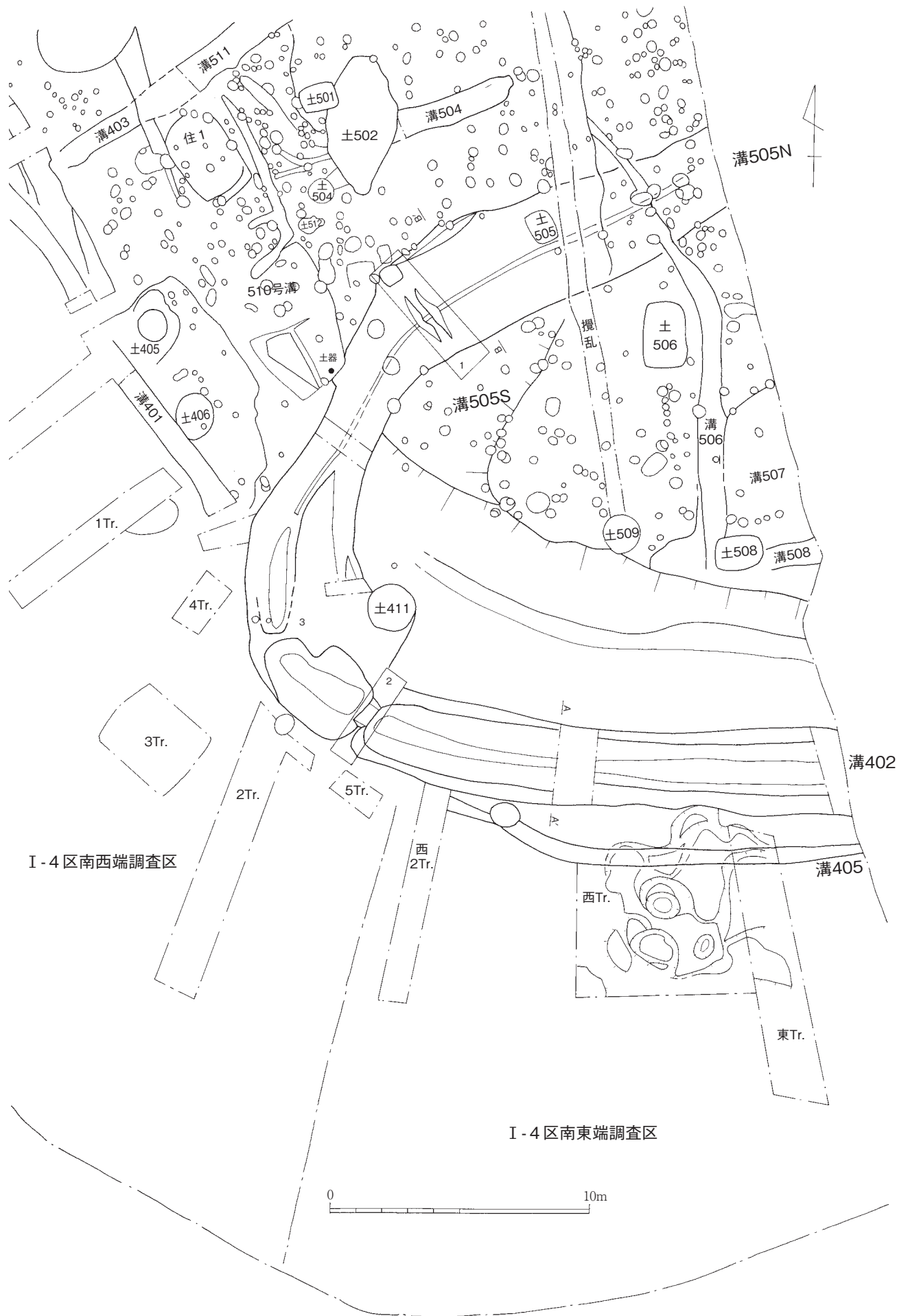
金属製品等 (第101図31) 溝の「南半」から出土した鉄滓小片で、16.7gを量る。

土器等 (図版60、第115図) 出土位置ごとにまとめて図示している。



- 1・2 : 溝401
- 3～5 : 南半
- 6・7・9 : 南端
- 8 : 南拡張区
- 10～16 : 北半

第115図 溝出土土器等実測図17 : 401号溝 (1/3)



第116図 402・405・505号溝周辺遺構配置図 (1/200)

1はほぼ完存する土師器杯で、体部が直線的に高く開く。口径12.4cm、器高3.7cmを測る。2は緑釉陶器椀で1/2が残存、畳付まで施釉して高台内のみが露胎となる。胎土は微砂粒を含むが精良と
 いてよく、灰黄褐色の陶器質に焼き上がる。釉は灰黄褐色～灰緑色に発色する。高台の形状は不
 整で、篋切りの痕跡が見える。見込には細線状となる熔着痕がある。

3は丁寧に作られた須恵器杯身。4は高台がしっかりと踏ん張る杯身で、外底面に篋切りの痕跡
 が残る。5は外面に明緑色の灰釉を掛ける壺で、胎土は暗灰色、精良といてよからう。外底面に
 回転糸切り痕が残り、一部に釉が掛かる。搬入された灰釉陶器であろう。

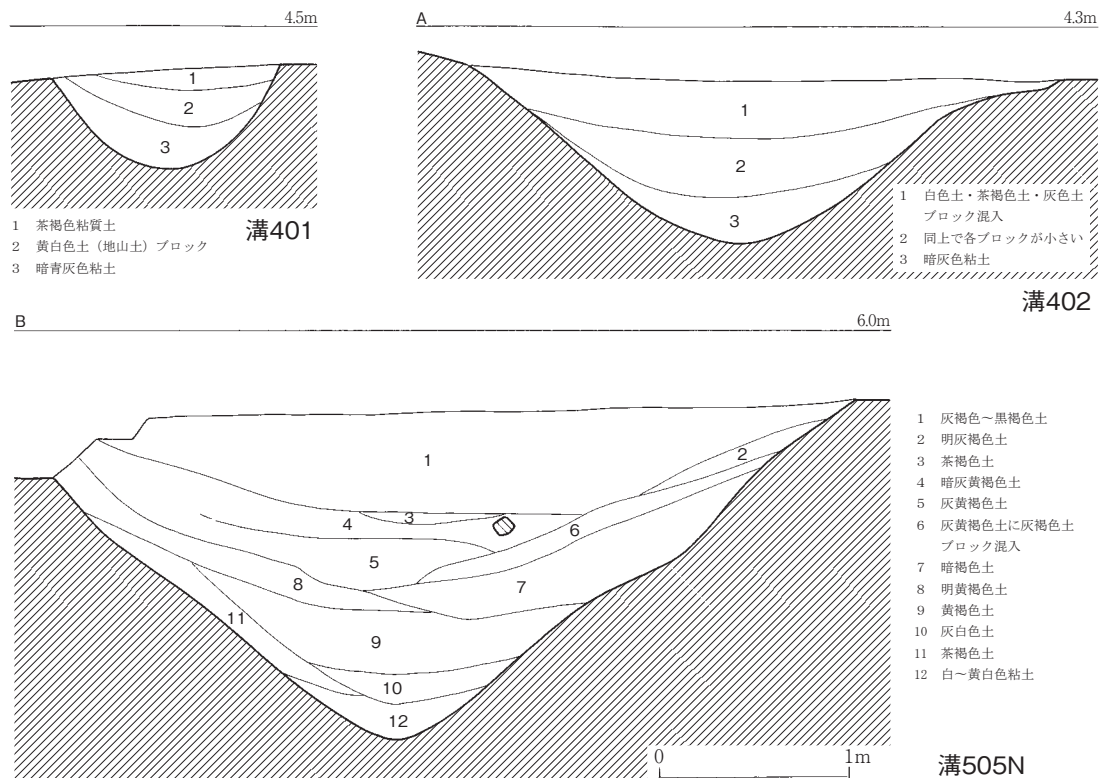
6～8は古墳時代の土師器で、6は体部から口縁部にかけて内彎する器表が荒れた椀。7は口端部
 付近がさらに外反する甕で、これも器表が摩滅する。8も器表が荒れている。9は縄目叩きと布目痕
 を残す焼成の甘い平瓦。

10～13は高台付の土師器椀。高台の形状が10・11では断面方形、12・13は断面三角に近く、前者
 が高く、後者が低くなっている。いずれも胎土・作りともに良好で、黄色系に焼き上がり、10では
 確認できないが他の3点は外底面に回転糸切り痕が残る。14は白磁小片で、口縁部を小さな玉縁と
 する。15も高いしっかりとした高台をもつ白磁片。16は凸面に流麗な唐草文風の叩き痕を残す平瓦
 で右に示した拓影の中、右下の白くなる部分は原体の縁である。芦屋町浜口廃寺に同様な叩き痕の
 平瓦が知られているが、格子の中に組み込まれていて単独ではない。

石製品（図版60、第104図7～9） 7は滑石製石鍋片で、特段の加工痕は見えない。8は灰白色花
 崗岩の石材に明黄緑色～濃緑色のガラス質「緑釉」が掛かる性格不明のもの。9も花崗岩で、図示
 した面がやや滑らかとなっている。

402 (=505N) 号溝（巻頭図版2・図版1・3・38～40、第116～118図）

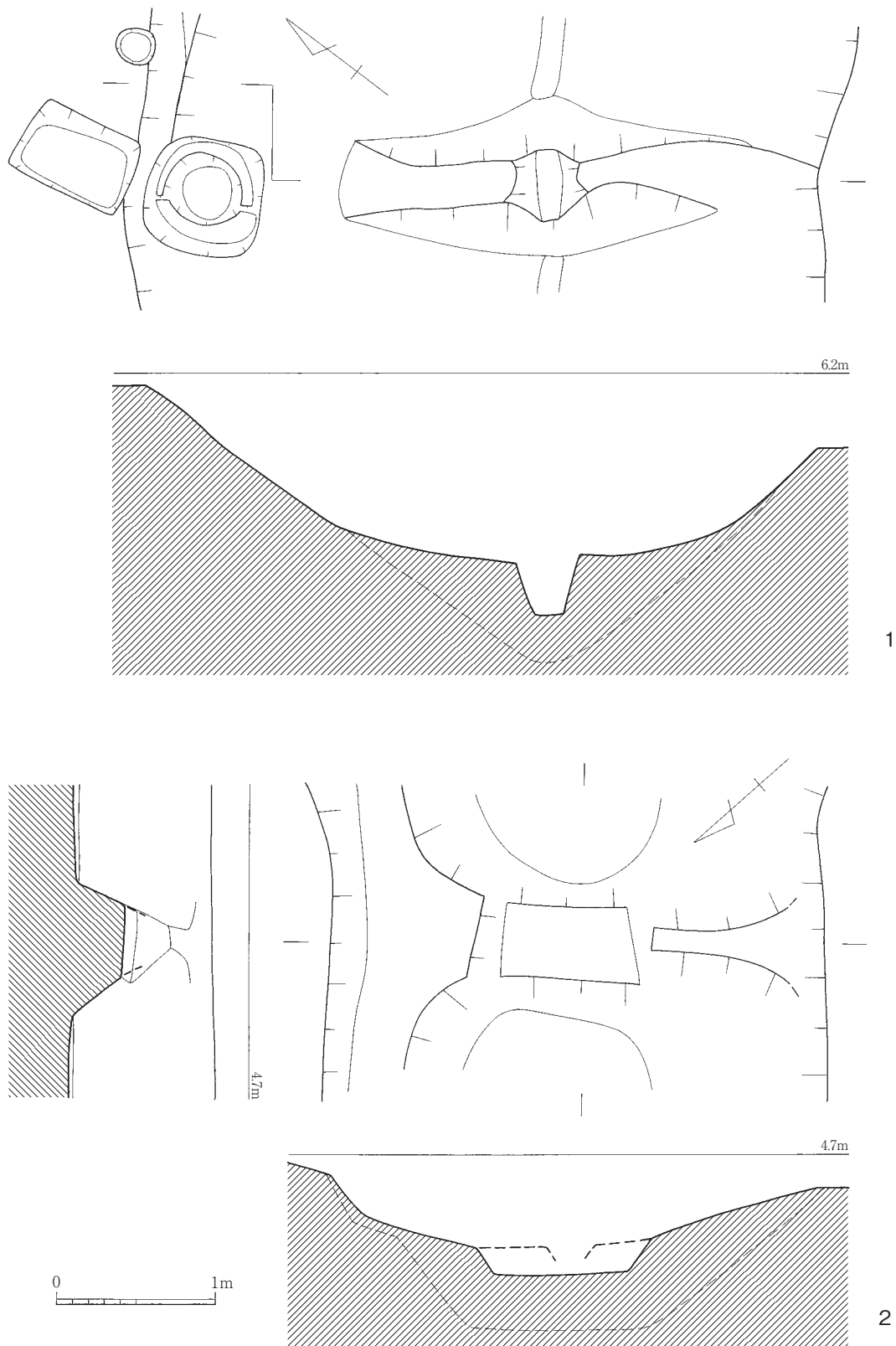
5区505N号溝を先行して調査したものであるが、番号に即してここで説明を加える。402号溝
 とした遺構は、本遺跡のいわゆる地山が山崎川に向かって落ちていくその縁に掘削された大型の溝



第117図 401・402・505号溝土層実測図 (1/40)

である。幅3m前後、深さ1mの規模で最下層に暗灰色粘土が厚く堆積、それ以上は地山白色土・茶褐色土・灰色土などが混在した埋土であった。自然堆積層は粘土層のみで、それ以上は一気に埋められたものと思われる。505N号溝とした部分の土層も特に中位以下では白色地山土の混入が目立つことから、自然堆積ではないようである。

402号溝の西端付近で地山を削り残した「堰」状の施設が検出された(2)。ここは気付くのが遅



第118図 402号溝堰状遺構部分図 (1/40)

れて上手く発掘できなかったが、505N号溝とした部分では検出時の様子を確認して参考にできる(1)。「堰」状の削り出しは溝底から高さ0.6m近い高さがあり、中央部にはAのような幅狭い掘り込みがあったものと思われる。この「堰」状削り出しの西4mの地点(3)でも高さ0.3m前後の削り出しが見られ、これも同様の構造となっていたのかも知れないが、気付いた時点では既に遺構図のような状態になっていた。この3付近で、溝は大きく屈曲して平面はU字形となる。そして3の北4.5mの付近に比高0.1mの段がつき、段の北東9mの付近に再び「堰」状の削り出しがある。ここは溝底からやはり0.6mの高さで地山が削り出されていて、中央に上端幅0.4m、下端幅0.2mの掘り込みが見られた。この付近では溝の規模が上端幅で4.2m、深さ1.7mほどとなっている。

溝底の標高は北東端で4.3m、「堰」1の両側で3.9m、「堰」2の両側で3.1m、南東端で3.1mとなり発掘区内で1.2mの比高がある。

出土遺物

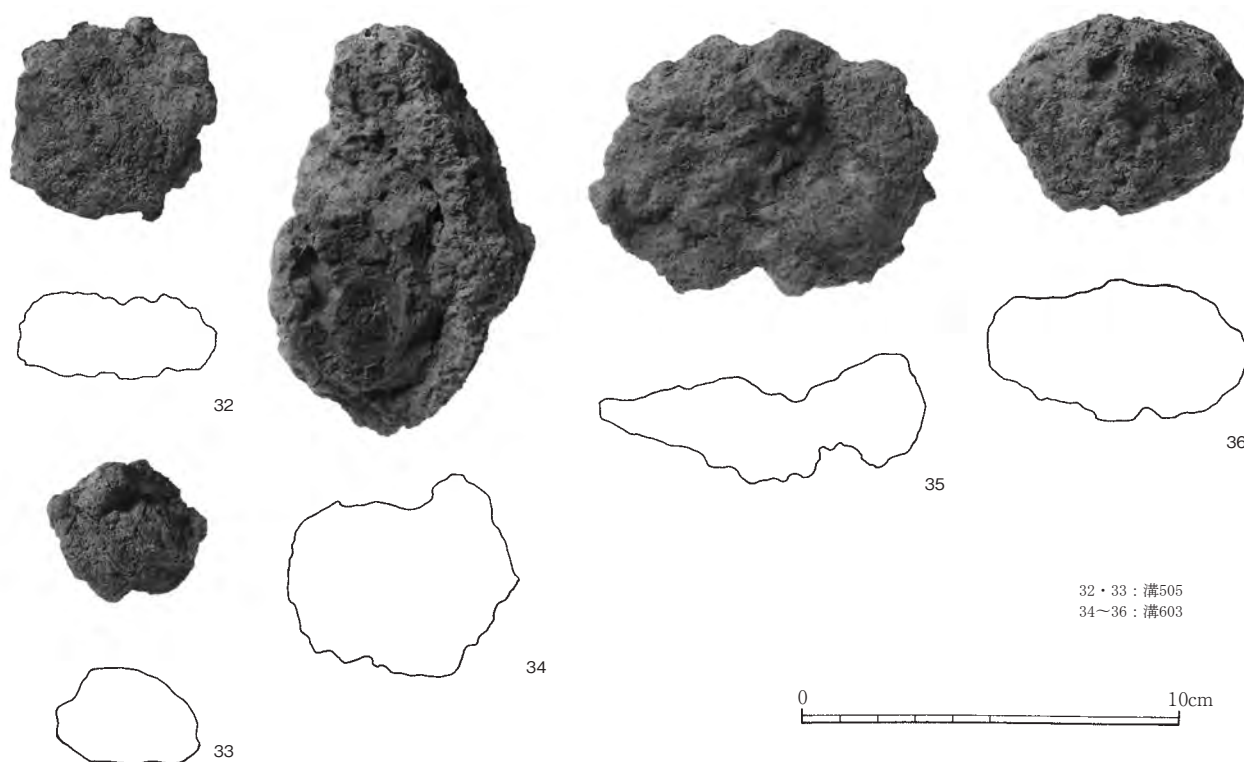
金属製品等(第119図32・33) 32は「溝505西南上・中層」、33は同「西北上・中層」の注記があり、いずれにしても直接に伴うものとはいえない。小型の鍛冶滓で、重量は100.8・29.2gを量る。

土器等(第120図) 出土地点・層位ごとに紹介する。なお、上・中・下層は厳密に土層に対応したものではなく、あくまでも便宜的なものである。

1は口縁部が内傾する二重口縁となる弥生土器壺片で、1/4が残存、器表が荒れているが、体部内面は篋削りで仕上げる。2は外面を丁寧な篋削りで、内面を同様に篋磨きで仕上げる近世の土器。内外面が褐色となる。

3は灰白色を呈する瓦質土器で摺鉢であろう。口端面及びその下方が黒色化する。4は薄手の白磁小片。5・6は龍泉窯系蓮弁文椀小片で、いずれも青味の強い灰赤色に発色する。

7・8は土師器高台付椀。7は断面梯形となる低い高台を付し、黄白色となる。高台内は回転糸切り痕が見えるが、体部は器表が荒れる。8は断面長方形の小振りな高台がつく。これも体部は黄白色～灰白色であるが、外底面付近は黒色化する。これも器表が荒れていて、切り離し痕は見えない。



第119図 溝出土鉄滓実測図4：505・603号溝 (1/2)

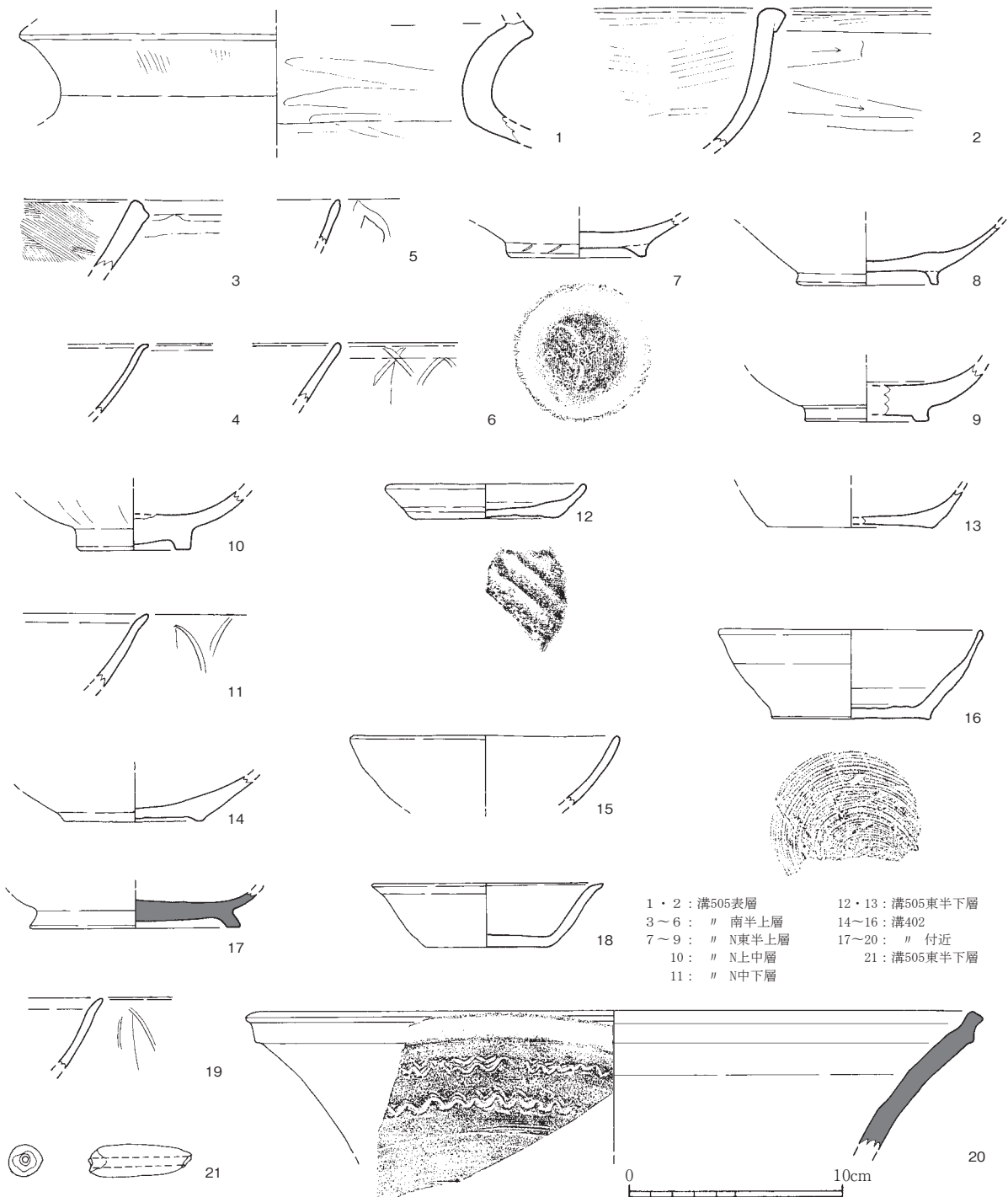
9は龍泉窯系青磁碗の底部で、外面に縦方向の沈線が1条入る。豊付から高台内にかけてが露胎となり、釉は黄緑色に発色する。

10も龍泉窯系青磁碗で、蓮弁文が刻まれるようである。灰綠色透明釉が掛かる。

11も蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗片で、これは口縁部が小さく外彎する。

12・13は土師器皿。12は復元口径9.4cm、器高1.6cmを測り、外底面にはスグレ状の圧痕が残る。胎土は良好。13は底部片で、これは器表が荒れている。

14は土師器高台付碗で、高台は低い断面三角形となる。外底面は摩滅するが、体部には水挽き痕が目立つようである。15は黄色系の土師器碗で、胎土・作りともに良好である。口縁部の1/2が残存。16は胎土・作り、遺存状態も良好な土師器皿。底部との境は明瞭で、中位でわずかに屈曲するが、体部が高く立ち上がる。



第120図 溝出土土器等実測図18：402号溝 (1/3)

17～20は遺構出土ではなく、「周辺」出土の土器で、遺構検出時のものである。17は高台付須恵器杯身。18は白磁口禿皿で、底部の2/3が残存する。19は灰青色に発色する龍泉窯系青磁蓮弁文椀。20は須恵器甕で、胎土・作りは良好。文様は雑である。

21は下層出土の土師質の土錘で、両端を欠き、器表が荒れている。

石製品（図版60、第125図1～4） 1～3は滑石製石鍋片。1は口縁部のすぐ下に断面方形の低い鏝を削り出す。鏝下から体部外面の一部に煤が付着する。2はやはり口縁部に近い位置に鏝を付すが、これは小振りとなる。現状で三角形に近く残存し、左右両辺は鋸のような工具で断ち切れ、図左片の鏝から上は折れている。3は底部片で、内面に煤が付着する。これには再加工の痕跡はない。4は安山岩の残片であるが、一部が磨られて滑らかになっている。図示した以外の面はいずれも破面となっていて、本来はより大きな石材であったようである。

403（＝511）号溝（巻頭図版2・図版40・41、第121図）

4区南端近く、404・405号土坑の間であって、ほぼ東西に直線的に走る溝である。幅1m前後、深さは0.2～0.4mほどで、13mほどの長さを検出した。埋土に特異なものはない。

全掘していないが床に0.1mの段がいくつか見られ、規模・床面の状況など17号溝に共通するといつてよい。17号溝に対応するように丘陵の南端部に位置することから、これも集落へ至る通路として使用された可能性が考えられる。

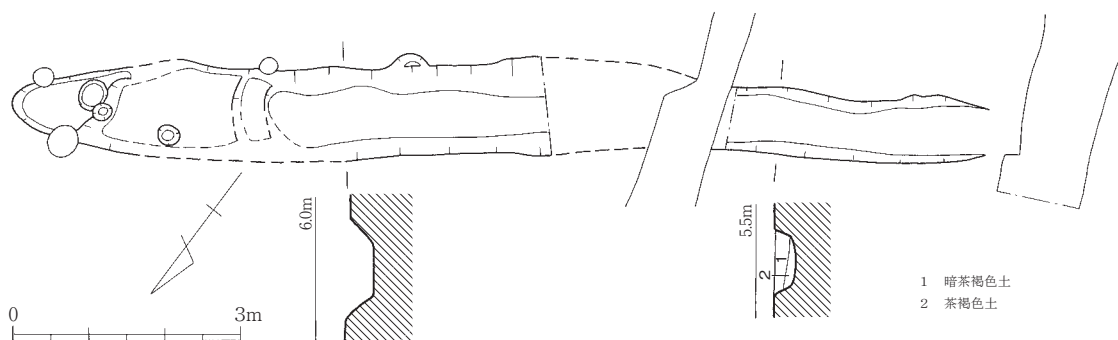
なお、土層図を作成した付近では埋土は茶褐色～暗茶褐色土であったが、層の境付近でミニチュア土師器が出土した。

出土遺物

土器等（図版60、第122図） 1～13が511号溝、14～17は403号溝とした部分からの出土である。

1～5は須恵器。1は口縁部の1/3が残存、口端部に面をもつ丁寧に作られた杯蓋である。2は口縁部の一部を欠くがほぼ完存する杯身で、これも口端部に甘い面をもつ。外面は灰を被る。3は口縁部の2/3ほどが残存、胎土に黒色粒が目立つ。口端部の面はしっかりしていて、内底面に同心円当て具痕が複数見える。4は口縁部付近の2/3が残存、口縁部は内傾が弱く、端部は薄く丸くなって終わる。受け部は小振りで、その下位の体部も内彎が弱く、平底風の底部になりそうである。受け部下位を刷毛目で調整する特異な杯身である。内面は丁寧に横撫でされている。5は1/3が残存。口端部の面が甘い杯身で、胎土・作りともに良好であるが、生焼けで灰白色を呈する。

6は須恵器の器形を模倣した土師器で、赤く焼き上がる。天井部が完存、口縁部付近の1/2が残存するが器表が荒れている。7は丸底の浅い椀で、口縁部の1/3が残存。胎土はとても精良で、本来は黒色化していたようだが、現状では多くの部分が暗褐色となる。8は3/4が残存する甕で、器表が荒れている。



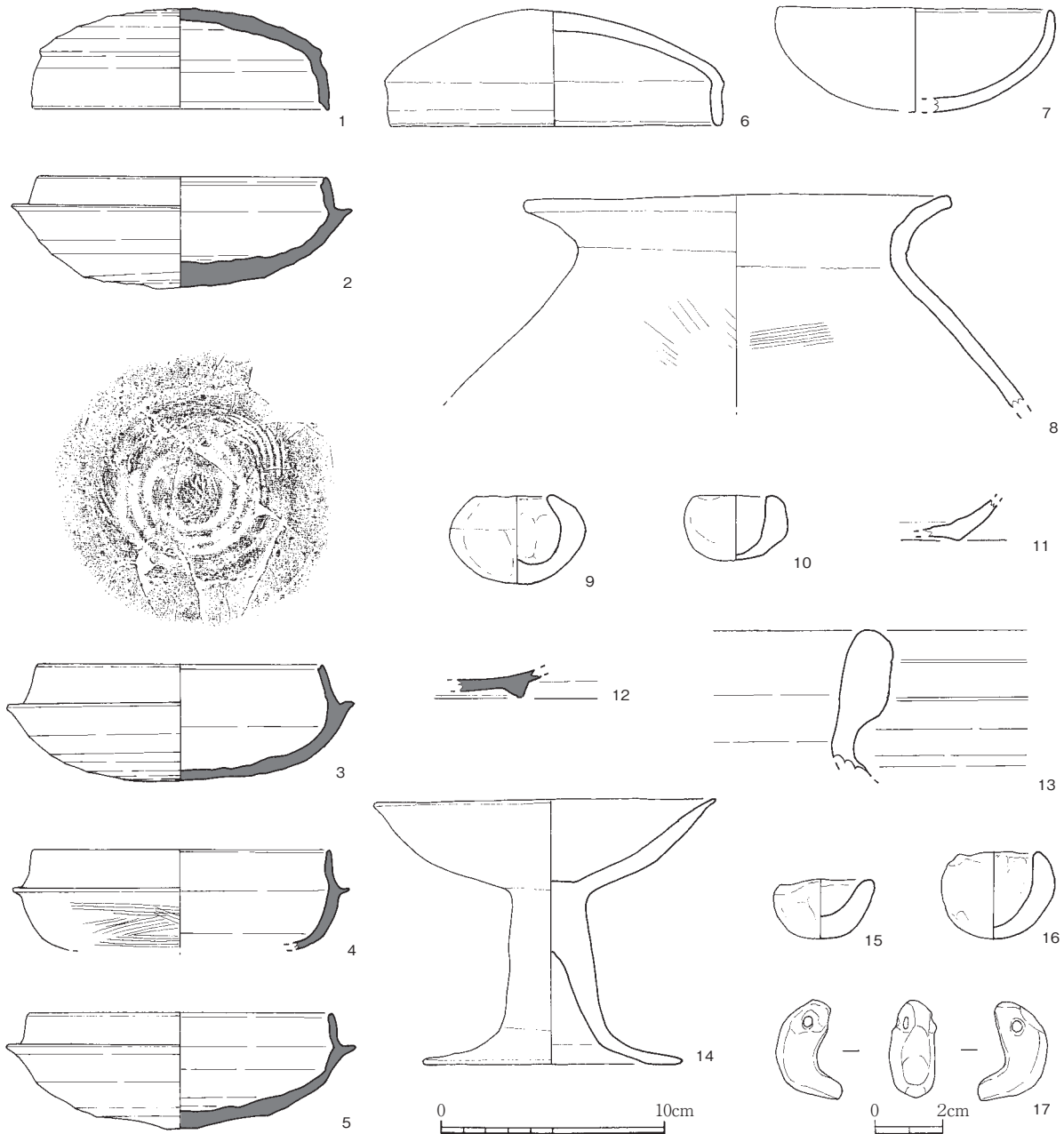
第121図 403号溝実測図（1/100）

9・10は手捏ね土器。9は球形に近い形状となり完存。10も完存するが、これは胎土が荒い。

11は中近世の土師器皿で器表が荒れている。12は緑釉陶器碗の底部小片。丁寧に作られているが、胎土も非常に精良で外底面が灰黄色、内面が暗灰色となる焼成不良の陶器である。明るい黄緑色の釉が高台内を除いて全体に掛かるが、ほとんどが飛んでいる。13は備前焼壺の小片。これら後世に属する遺物は、溝に掘り込まれた柱穴等を見落としたための混入であろう。

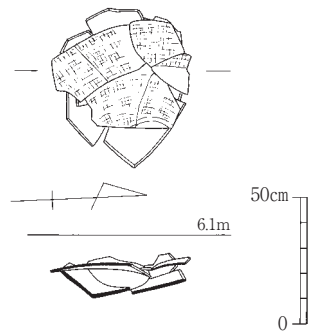
14は完存する土師器高杯で、杯部に屈曲が見られず浅い皿状となる。脚部は上半が中実、脚部が浅く開く。これは器表が荒れて調整痕は見えない。15・16は完存する手捏ね土器で、15は胎土が荒い。17は土製勾玉。胎土は精良といってよいが、形状はやや不整。

石製品（図版60、第125図5～7） 5・7は西端付近からの出土。5は全長11.6cmの滑石製子持勾玉。大きさに比して薄く作られているが、中央部をやや厚くしてそこに格子を線刻、その上下に対応するように内外に4箇の突起を削り出している。内側の突起2箇は一部が剥がれているものの本来の形状を窺わせているが、外側の2箇は折損する。また、外側の突起は内側のものより大きく作られる。6は粘板岩製石庖丁片。背は失われるが、刃部はかろうじて一部が残存する。表面の研磨は



第122図 溝出土土器等実測図19：403号溝（1/3）

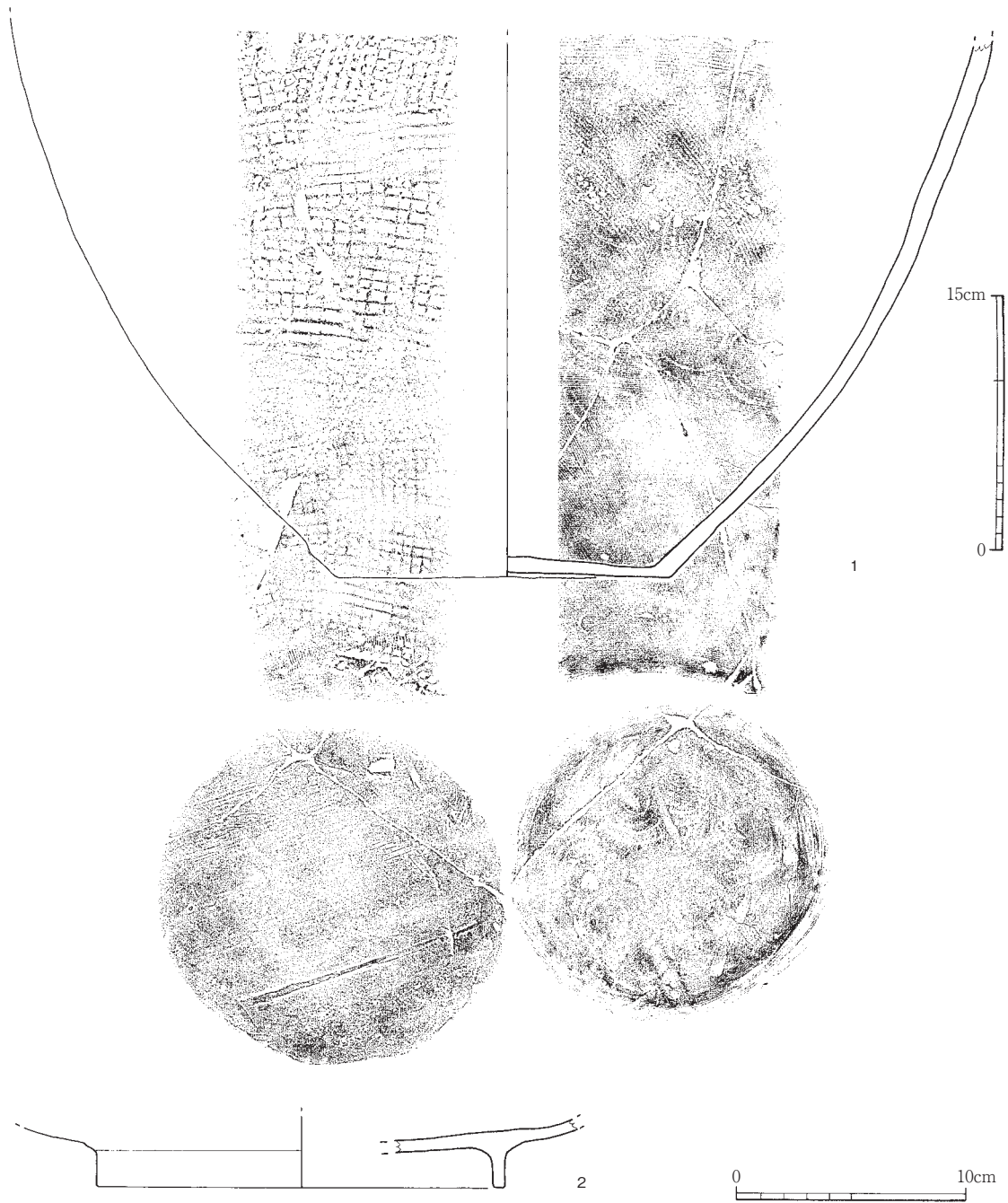
ごく丁寧になされる。7は滑石製紡錘車で、ほぼ完存、32gを測る。石材は灰褐色を呈し、頂部・底部とも外周の稜線は甘い。側縁は上半が直線的ないし内彎気味に、下半が直線的あるいはやや膨らむように成形される。頂部に放射状に細線が刻されるが、規則性はない。底面にもより繊細な条線が刻まれていて、これらは使用に際して生じたものであるかも知れない。



第123図 402号溝周辺土器出土状態実測図 (1/30)

505S号溝 (図版3、第116図)

5区南西部は表土掘削の結果、灰褐色土が広がっていて、それを505号溝として発掘を行った。しかし、505N号溝を検出して後は、その南の最大で深さ1mほどの傾斜面を505S号溝として区別したものである。505N号溝と一連の遺構を形成していた可能性もあるが、この遺構の南側は後

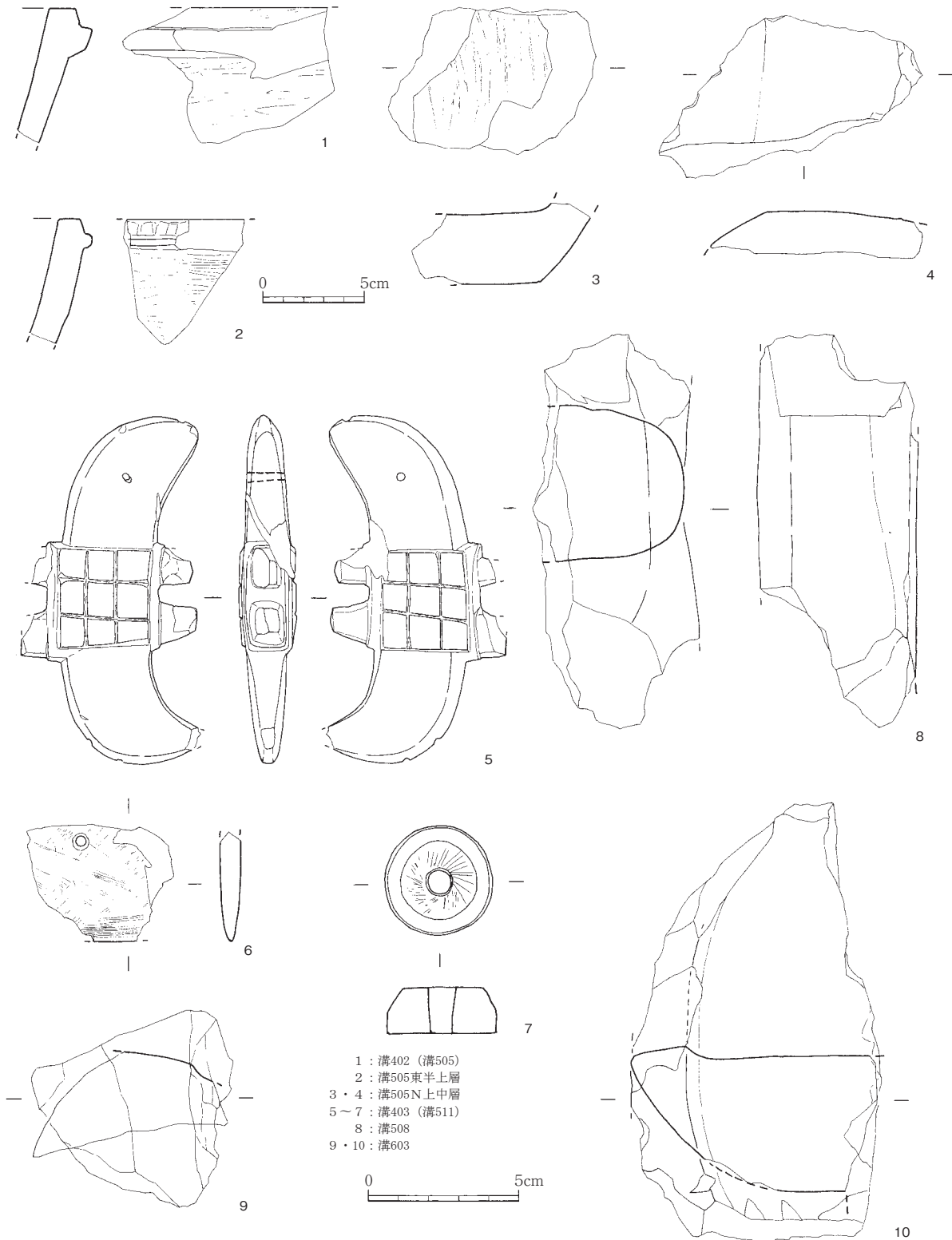


第124図 溝出土土器等実測図20：505S号溝 (1/4、1/3)

世の開墾で失われていて、どのように広がっていたものかわからない。

出土遺物

土器等（第124図） 1は505号溝北西の検出面で出土した瓦質土器底部（第116・123図）。外面は残存部上下で叩きの格子の大きさが異なっていて、それに対応するように内面も刷毛目原体を変えている。体部内面には同心円文当て具痕が薄く残り、内底面も同様である。外底面はスグレ状の圧痕が見えるだけである。2は第120図2に図示した土器の底部であろう。高台外径は18.0cmを測る。



第125図 溝出土石製品等実測図4：I-4~6区（1/3）

506号溝 (図版3、第116図)

5区東端近くを南北方向に緩くカーブして505N号溝の上を走る溝で、最大幅約1m、深さ（床面レベル）は北端で数cm（5.8m）、南端の508号土坑付近で0.2m（5.2m）である。

埋土に顕著な土層はみられなかった。

出土遺物

土器等（第126図1） 口縁部を直立させる備前焼摺鉢である。口縁部外面が暗赤紫色といった濃い色となる。胎土・作りは良好である。

507号溝 (図版3、第116図)

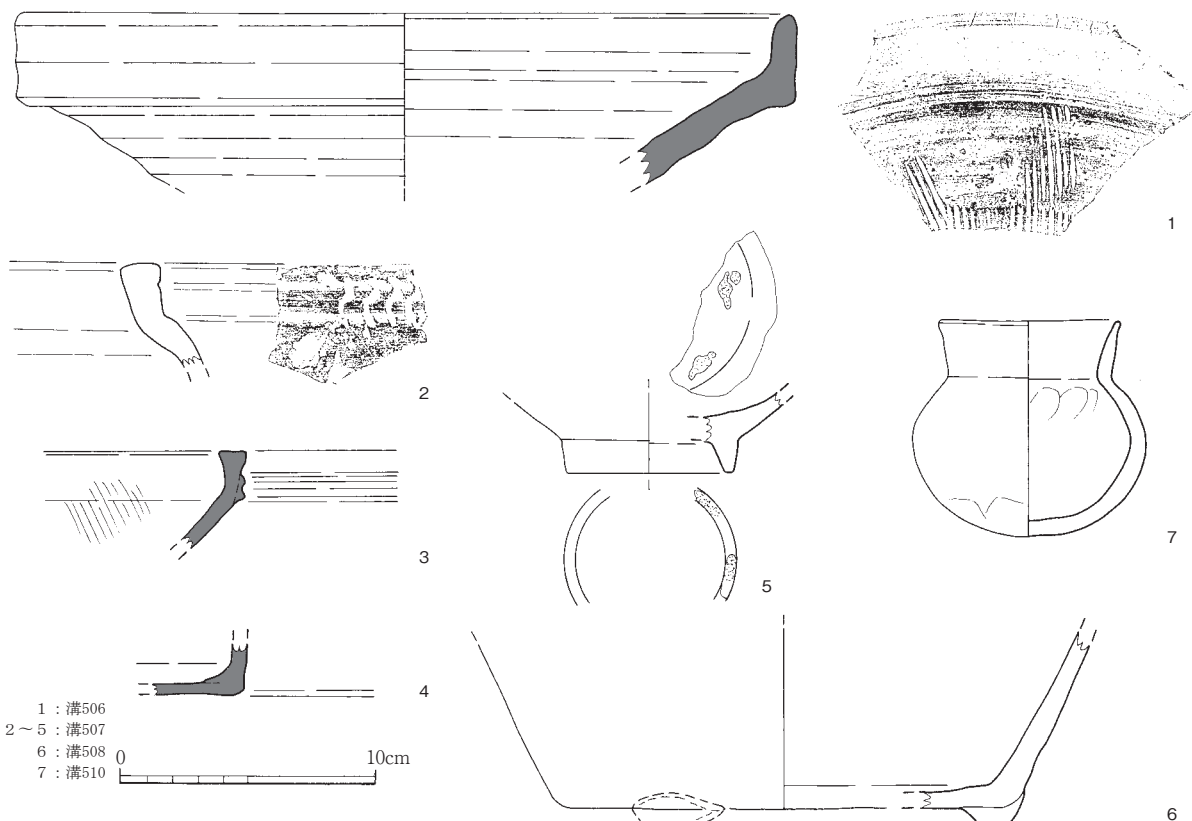
506号溝の南半は東側へ広がる地山混じりの客土で覆われていて、この客土で覆われた部分を507号溝と称した。実際は、506号溝から調査区境までの東西幅が最大で3.4m、南北長が最大で8mほどあって、溝というよりは整地層あるいは包含層としたほうが相応しいようである。

出土遺物

土器等（第126図2～5） 2は瓦質土器の小片である。口縁部は小さく内傾してわずかに肥厚、外面にスタンプを付す。胎土は灰白色良好なもので、作りも丁寧である。外面が黒色、内面は灰色となる。3は陶器摺鉢小片。口縁部を肥厚させて上面に面を作り、外面に断面M字形となる突帯を付す。胎土良好で器表は茶褐色となる。4は陶器の底部。全面に灰黄色の釉が掛かる。外底面に切り離しの痕跡は見えない。

5は白磁であるが、残存部全面に白濁した釉が掛かり、胎土は灰白色緻密なものである。見込・畳付に目痕が残る。朝鮮半島製であろう。

508号溝 (図版3、第116図)



第126図 溝出土土器等実測図21：506～508・510号溝（1/3）

先の507号溝とした整地層を除去して現れたほぼ東西方向の溝であるが、幅約1m、深さ0.2mほどの浅い溝で、検出した長さは2m余りである。508号土坑に切られると判断した。

出土遺物

土器等（第126図6） 灰赤褐色の粗い胎土をもつ土師質の風炉片。内外面は黒色化する。体部下端付近は指撫で仕上げたようで、器面が十分に平滑化していない。

石製品（図版60、第125図8） 砂岩を用いた砥石である。平坦となる両面が非常に滑らかとなり、特に図左に示した面は通有の砥石と同様である。側面は曲面を描くが、ここも比較的滑らかになっていて使用されたようである。

510号溝（図版3、第116図）

1号住居跡の東側に近接して位置するが、0.3～0.6mを隔てていて並走してはいない。しかし、住居跡から見れば、この溝には高位からの雨水を逃がす効果を期待できるであろう。溝は幅0.4m、深さ0.2mほどの規模で、南側は西へ屈曲、北端も短く屈曲する。

出土遺物

土器等（第126図7） 頸部以下が完存する土師器小型壺で、体部は球形となる。口縁部は開きが小さく、直立に近い。器表が非常に荒れている。

603号溝（図版3・41、第128・174図）

203号建物跡の北西から南西にかけてL字形に屈曲する幅2mほどの溝状の落ち込みは住宅の基礎（擁壁）を撤去した痕跡である。そのすぐ北西に位置する、北東－南西方向の直線的な溝が603号溝である。北東端は201号溝の延長と重複するが、先後関係を確認できていない。また、北東端付近では南東側に深さ0.2mほどの浅い段がついているが、そこで作成した土層図では明らかに603号溝が新しく掘り込んでいて、本来は別の遺構であったようである。

603号溝は北東端で幅1.2m、底面の標高は8.1m（深さ0.8m）、南西端で幅1.0m、標高7.3mほどとなっている。長さは約40m。

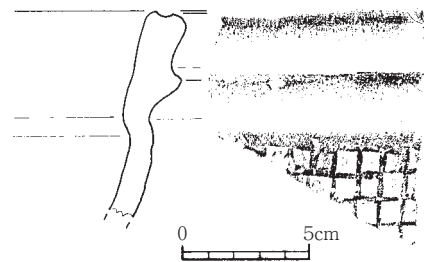
北東部では土層図の2付近で小児頭大の礫が多く見られた。

出土遺物

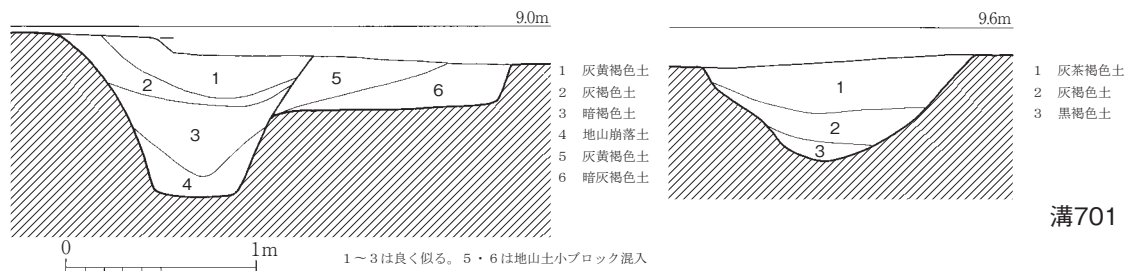
金属製品等（第119図34～36） 溝の北東半から出土した鉄滓で、137.3～542.9gを量る。

土器等（第127図） 胎土良好で灰白色となる瓦質土器片。器表は内外面とも黒色化する。体部内面は粗い刷毛目、外面は格子叩きで仕上げるが、概ね丁寧に作られている。

石製品（図版60・61、第125図9・10・130図3）



第127図 溝出土土器等実測図22：603号溝（1/3）



第128図 603・701号溝土層実測図（1/40）

溝の北寄りに大きな攪乱坑があってここで紹介する2点はその北側から出土した。第125図9は安山岩の残片で、母岩から剥離している。図で表面とした縦長の部位が磨られて比較的滑らかとなるが、砥石といったものではない。同10は茶臼の受皿片。淡灰赤色といったような色相の凝灰岩を使用し、表裏は加工痕が全く見えないほど丁寧に仕上げている。上面の特に外縁近くが部分的に赤色となっていて、簡易検査の結果ベンガラであろうと判断された。

第130図3は緑色片岩製の打製石斧で、刃部を欠損する。残存長10.3cm、最大幅5.1cmと小型品で、側縁の調整剥離は大雑把である。

701号溝（図版41、第174図）

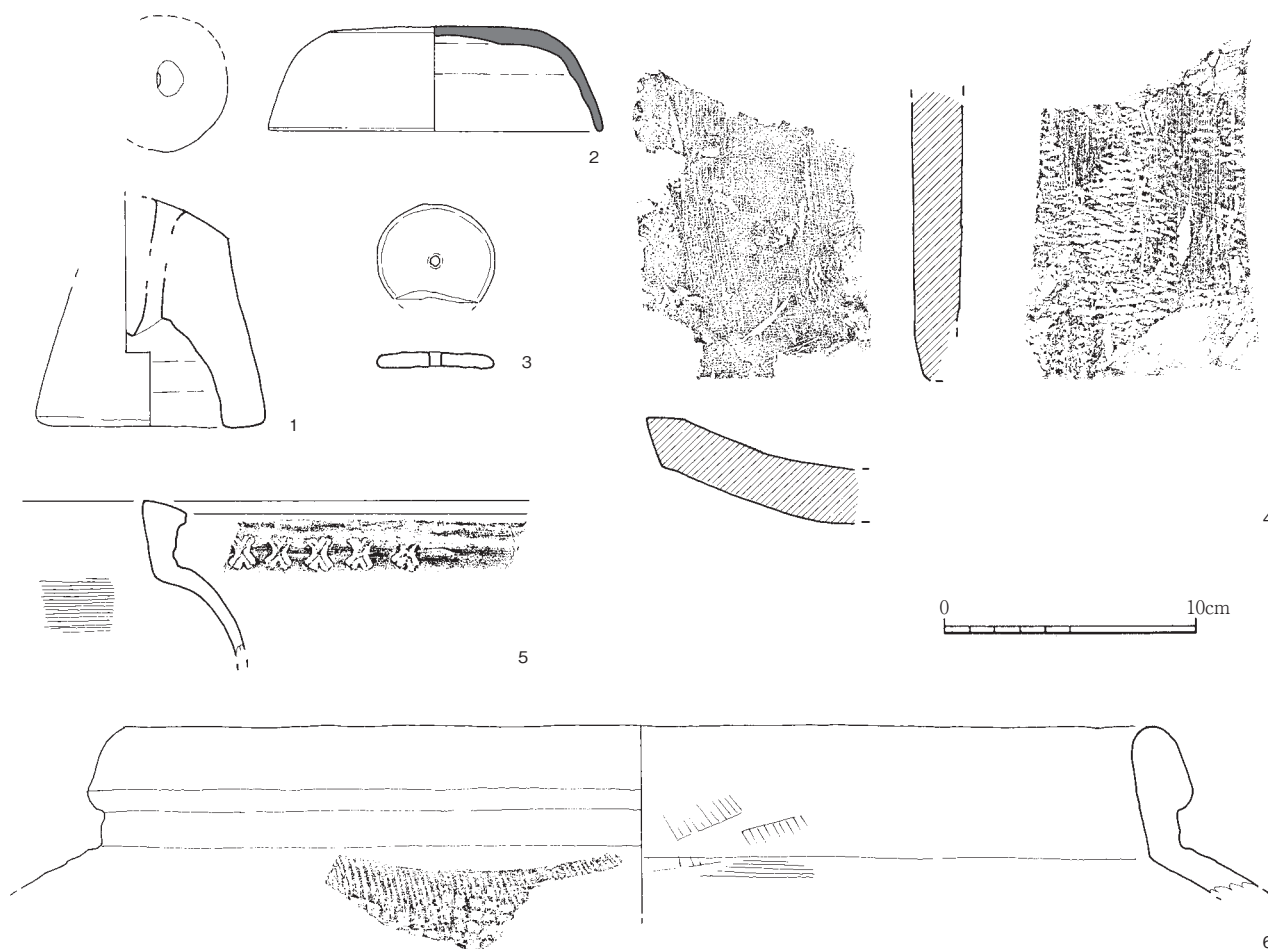
7区の北東隅に位置する。ほぼ東西方向に掘削されていて、幅1.5m前後、深さ0.6mほどの規模で、8m前後の長さを検出した。切り合い関係から竪穴住居跡に後出する。

埋土は大きく3層に分かれ、いずれも粘質土が自然堆積とってよい状況で覆っていた。

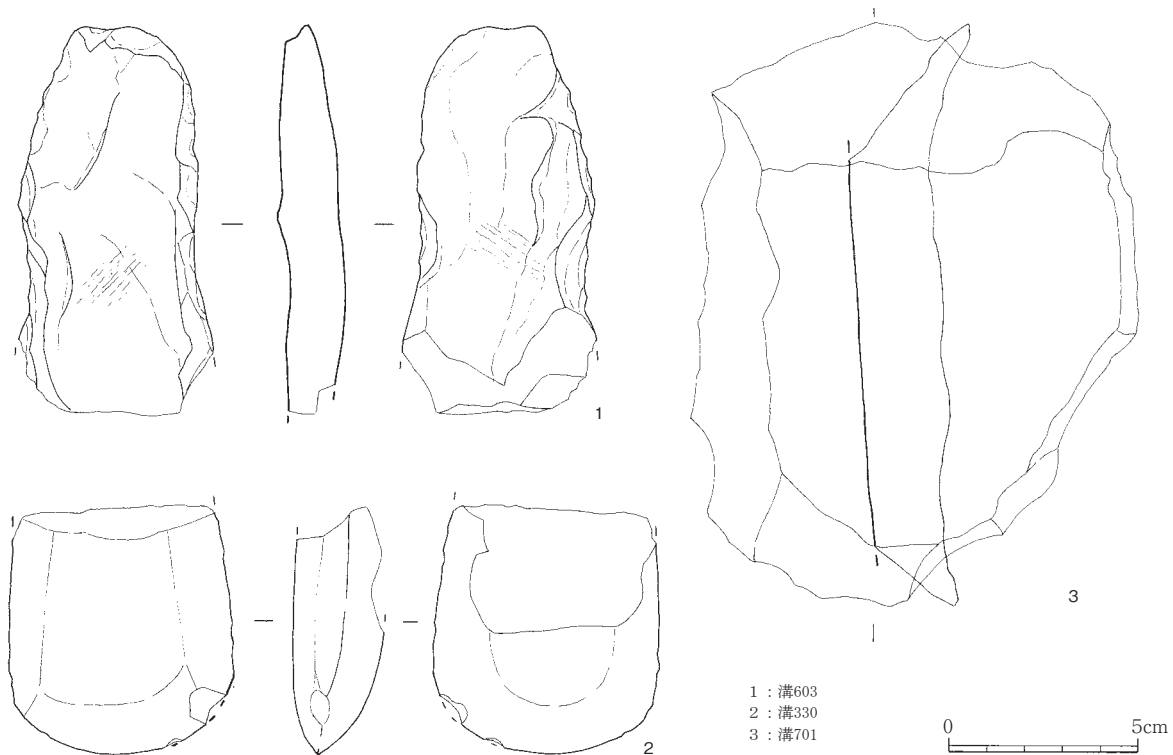
出土遺物

土器等（第129図） 1は上半部に1孔を穿つものの中実となる特異な支脚で、脚端部の2/3ほどが残存するが、器表は荒れている。2は一見杯身のように見えるが蓋と判断した。天井部が扁平となり、口縁部にかけて直線的に開く。3は土師質の紡錘車で、直径4.6cm、厚さ0.6cmの大きさである。

4は平瓦片で、凹面に布目痕、凸面には他の出土例と異なって横方向の縄目叩き痕があり、さらに部分的に篋削りを行っている。胎土良好。



第129図 溝出土土器等実測図23：701号溝（1/3）



第130図 溝出土石製品等実測図5：I-3・6・7区（1/2）

5は口縁部付近が灰黒色、その他の部位は灰白色となる瓦質土器で、口縁部が直立、端部が肥厚する。内面は刷毛目、外面は篋磨きで調整され、口縁部外面にスタンプを押す。6は器肉の芯が暗灰色、内外の表面に近い部分が灰白色～黄白色となる瓦質の壺で、器表は黒色化する。体部外面には格子叩きと刷毛目が見える。

石製品（図版61、第130図3） 花崗岩を用いたもので、図上面以外はすべて破面となる。上面は滑らかとなっていて、よく使用されている。石材が全体に赤味をもっているのは熱を受けたものであるかも知れない。

5 埋甕（図版42・43、第131図）

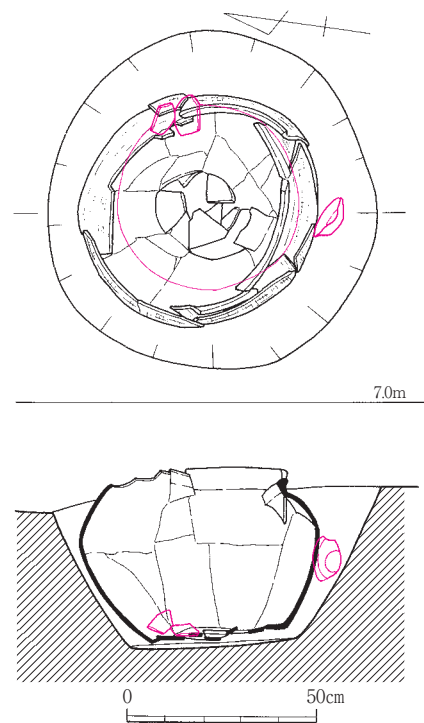
I-1区中程、2号溝の南側、5号住居跡の北に位置する。瓦質の甕を正立して埋納した遺構で、底部・側面の外側に土師器皿が置かれていた。

検出時には口縁部上端が覗いていて、一部が崩落していたとはいえ良好な状態で出土した。掘形埋土は灰黄褐色土で、これは容易に認識できた。土器内の埋土に特別なものは見受けられなかった。

出土遺物

土器等（図版61、第132図） 1は口縁部を玉縁とする瓦質の甕で、口径37cm、器高52cmほどの大きさである。内外面に黒色化する部分があって、本来はそうであったと思われるが、現状では大部分が淡灰色を呈し、外面上半は灰褐色化する。

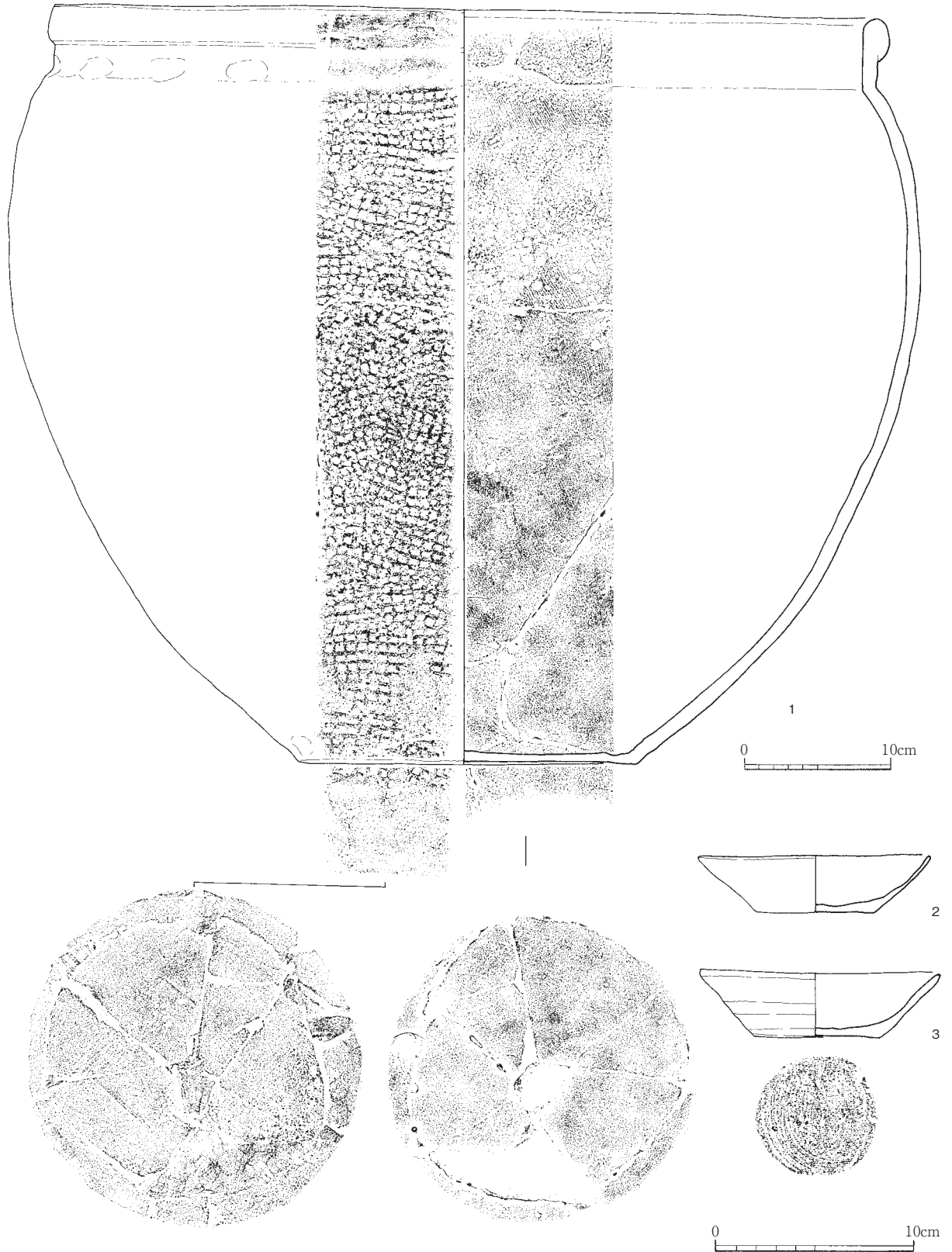
体部外面はほぼ全面が格子叩きで、これは原体を替えないよう



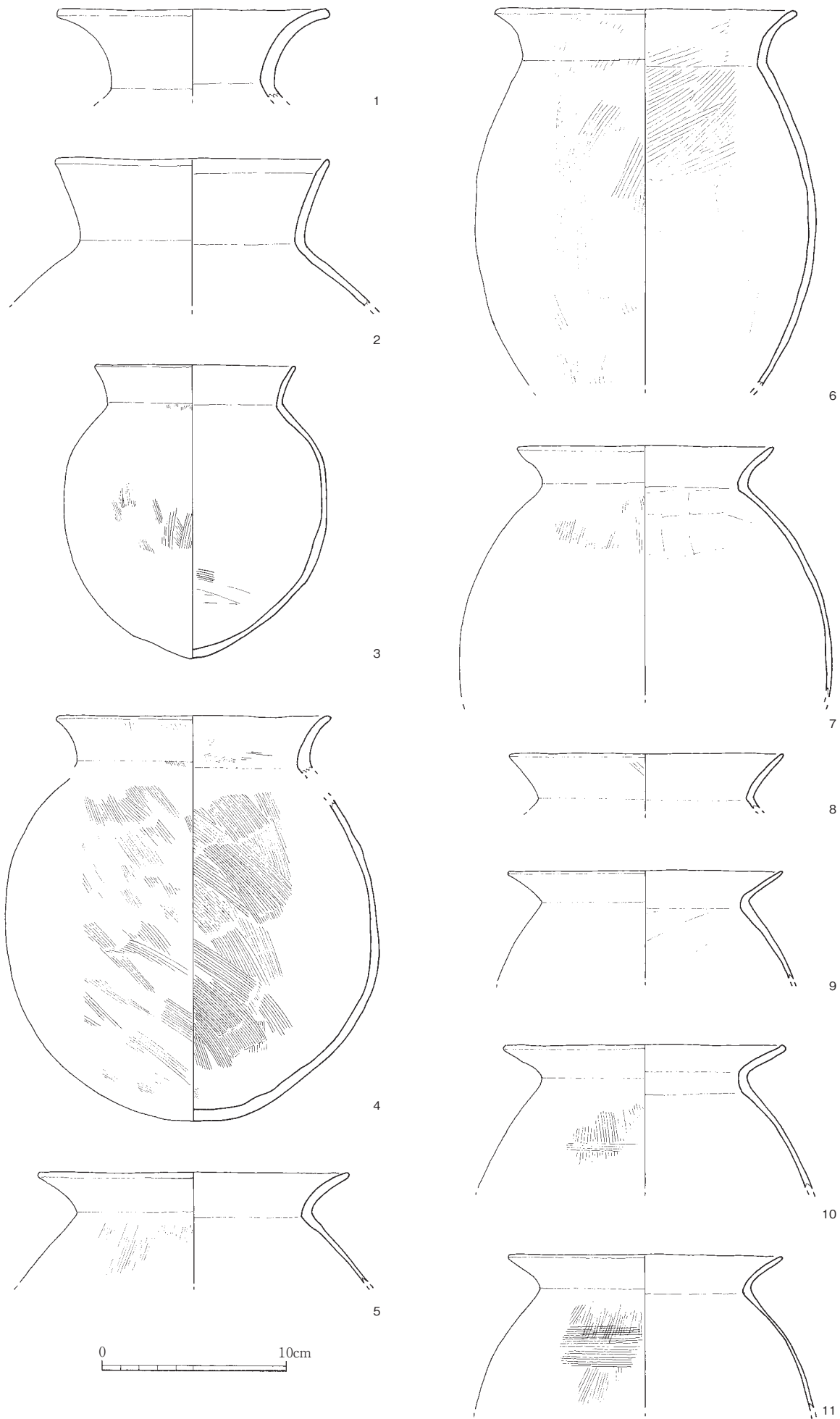
第131図 埋甕実測図（1/20）

である。体部下端のみ刷毛目を施す。内面は体部上半で刷毛目が優勢であるが、それ以下では全面に薄く同心円文当て具痕が残存する。底部外面はスダレ状の圧痕が見えるだけで内面にはやはり同心円文当て具痕が残る。

2は埋甕の下から、3は南側側面から出土した土師器皿である。底部はしっかりした平底で、外周は稜線をもつ。体部は直線的に大きく開き、3では体部に水挽き痕が目立つ。両者とも胎土・作りは良好である。口径11.9・11.7cm、器高3.0・3.4cmを測る。



第132図 埋甕及び供伴土器実測図 (1/4、1/3)



第133図 土器溜出土土器等実測図1 (1/3)

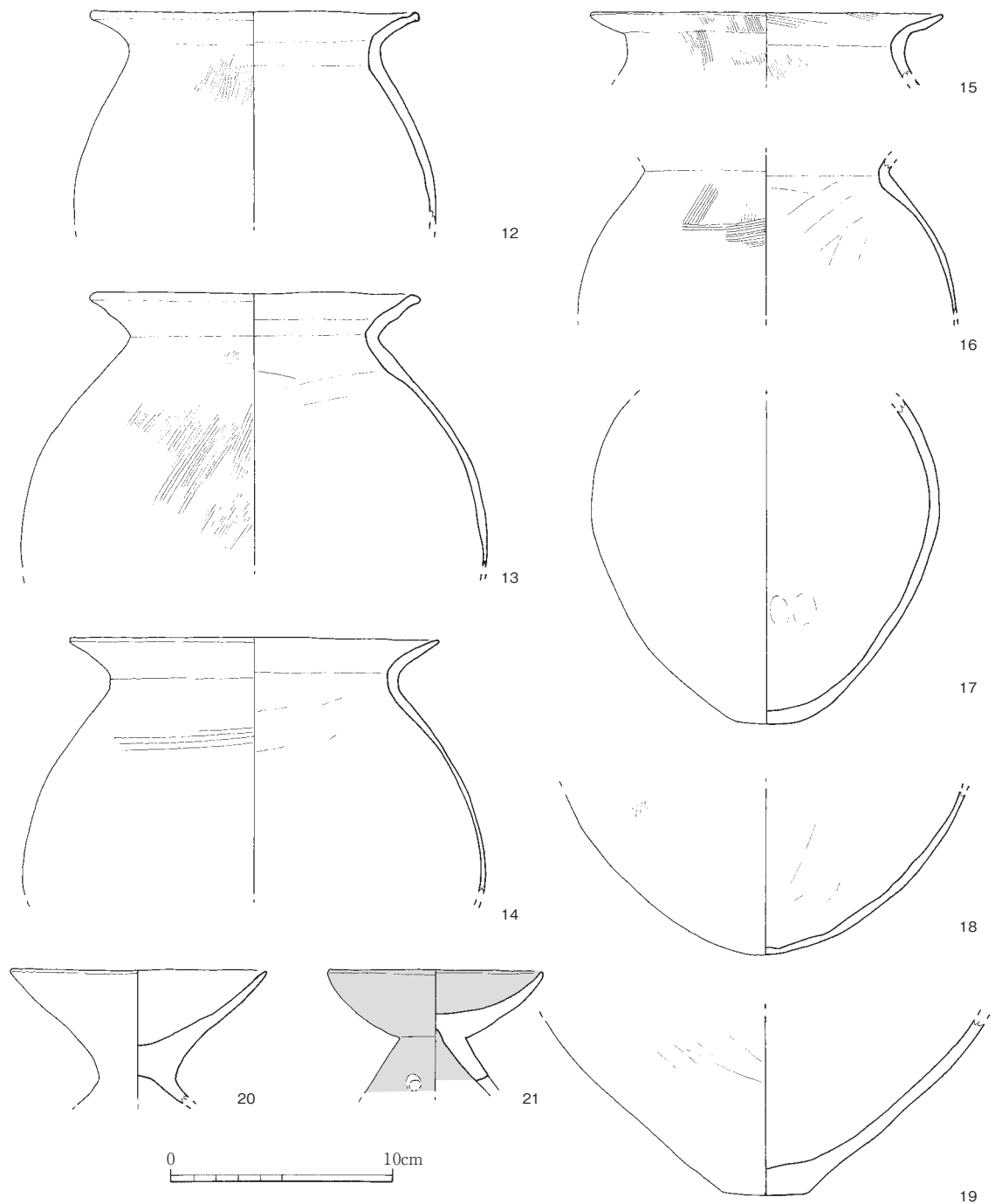
6 包含層・柱穴等出土の遺物

土器溜出土遺物（図版43、第174図）

2号溝西端近くの南、6・8号住居跡の間に位置する。調査当初には土器の集中する状態から住居跡と判断していたが、明確なプランや炉・カマド跡を検出できず、住居跡と確信できなかった土器溜状の遺構から出土した土器群である。ほとんどの土器が器表が荒れあるいは剥落している。

出土遺物

土器等（第133・134図） 1は口縁部が大きく開く壺で、頸部の1/3が残存する。2は口縁部が外傾直行する壺であるが、あまり長く伸びない。口縁部の3/4が残存。



第134図 土器溜出土土器等実測図2（1/3）

3～15は甕。3は口縁部の開きが小さく、完存する底部は尖り気味となる。これには細かい刷毛目が見える。4は口頸部と体部が接合できないが同一個体であろう。口頸部は3に似るが体部はより丸みを帯びる。全体に細かい刷毛目で仕上げ、外底部付近に煤が付着。5は強く外反する口縁部をもつ。6は口縁部が高く、やや長く伸びる。体部の張りが弱く、これはやや粗い刷毛目を施す。

7は口縁部がく字状に外反、体部外面が焼けている。これは口縁部の3/4が残存。8は小片。

9は口縁部が直線的に伸びて、体部内面を篋削りで仕上げるもので、外来の影響を受けた甕である。口縁部の1/3が残存、外面が煤ける。10も似た土器で、これは口端部を上方に小さくつまむ。器表が荒れるが、内面は刷毛目で仕上げ、肩部に横位の刷毛目が1単位施される。11は肩部の横刷毛が巾広となる小片で、これも煤ける。12・13も口縁部に外来の影響が見て取れる甕。いずれも器表が荒れるが、肩部の横刷毛は見えない。14では刷毛目というより櫛描のようなしっかりした横位の平行線が肩部に残る。15は口縁部がより強く外反する小片で、頸部内面に粘土紐の継ぎ目が残る。変わった器形である。

16～18は体部・底部片。16は肩部に横刷毛が見える。17は底部付近が完周、小さな平底となる。体部内面は指頭痕が目立ち、篋削りの痕跡は見えない。外面は細密な刷毛目のようである。焼けて赤片、煤が付着する。18も焼けている。19は肉厚の平底となる底部で、調整痕はよく見えない。これも焼けて煤けている。

20は器台であろうか。受け部は直線的に伸びる。胎土・作りともに雑で、かつ焼けて器表が荒れている。図示部の1/2が残存。21も小型器台で、受け部が完存、孔は3方に復元できる。胎土は精良と言いが、全面に赤色塗彩されたようである。

I - 1区包含層出土遺物（図版、第135図）

I - 1区北半の3・15号溝に挟まれた15・25号住居跡付近は谷状に包含層が堆積していて、上層は赤褐色土、下層は黒色系となる土が南北30m、東西26mほどの範囲で認められた。表土掘削時から多くの遺物が包含されていることが判っていたので、人力で除去した結果、以下に見るように完形の土器を含む多くの遺物が出土した。その中で、残存状況のよいあるいは集中して出土した土器群には番号を付して取り上げた。ここでは番号を付して取り上げた土器に続いて、10mメッシュで取り上げた包含層出土遺物を紹介する。出土土器のうち、古代・中世の土器を見ると赤褐色土にあって黒褐色土には含まれておらず、図示した黒褐色土出土の土器の中で新しいものは6世紀代のものである。大量にある包含層出土土器のすべてを検討したわけではないが、黒褐色土は古代以前に形成されたものといえそうである。

また20・23号住居跡および17号溝に囲まれた部分で粘土が詰まった土坑3基が接続していた（第135図、図版70）。平面形は直径約20cmの円形で、10cmほどの深さでほぼ単純な粘土が詰まっていた。どの遺構に伴うものか、時期等を含めて不明である。

第135図に遺物取り上げ時の小地区割（10m方眼）及び番号を付して取り上げた土器群の位置と周辺の竪穴住居跡の配置を示した。土器群は16号住居跡の北側に分布するが、他の住居跡との重複はないことから、遺構に伴うものではない。また、この周辺は通有の遺跡のように遺構の上部が開墾等で破壊されているといっても、I - 2区や3・6区北東部のように、明らかに造成・削平された状況ではない。これらの土器がどういった経緯で包含層中に残されたのか、思い及ばない。

また、調査着手後間もない時期に、全く遺構が見えない状況に当惑して3号溝の北側に東西方向のトレンチを2本設定した。このうちの南側トレンチ（3号溝北側東西Tr.）は16号住居跡の北側、

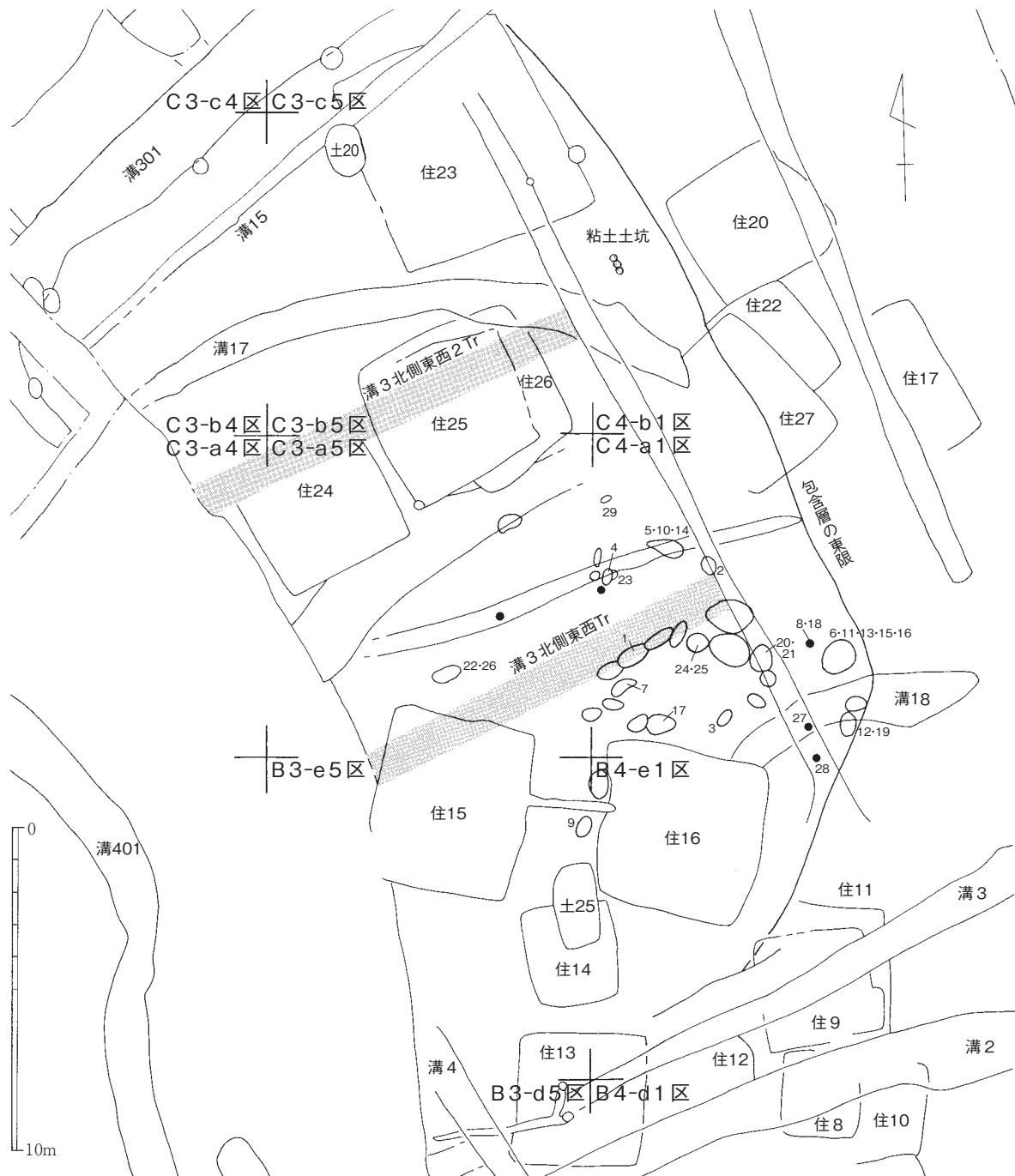
15号住居跡の北隅を横切るように位置する。北側のトレンチ（3号溝北側東西2Tr.）は先のトレンチの北9mの位置に設定、その東端は17号溝に重なり、中央付近は25・26号住居跡、西端付近は24号住居跡と重なっていた。ここから出土した遺物も併せて紹介する。

なお、10mグリッドを使用したのはこの範囲だけであったので、区割りを間違えたままで注記しているが、報告に合わせて訂正しておく。

出土遺物

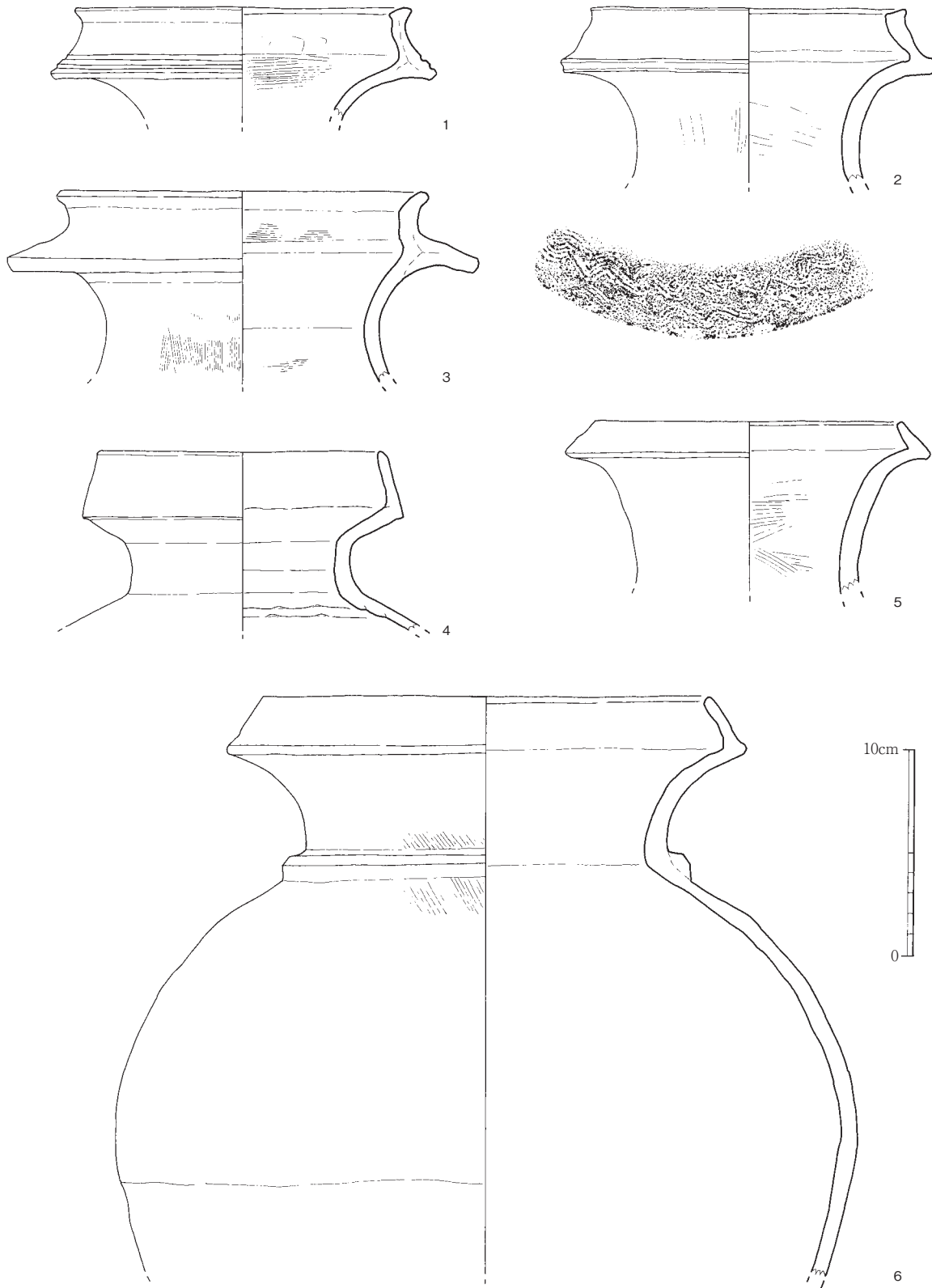
土器等

番号を付して取り上げた土器（図版61、第136～139図） 1～6は口縁部が内傾する二重口縁壺。1・2は口端部をわずかに肥厚させるもので、1は1/4が残存、籬状に突出する頸部の上面に2条の凹線を刻む。2は1/3が残存、器表が荒れるが、体部内外面ともにごく疎となる刷毛目で調整す

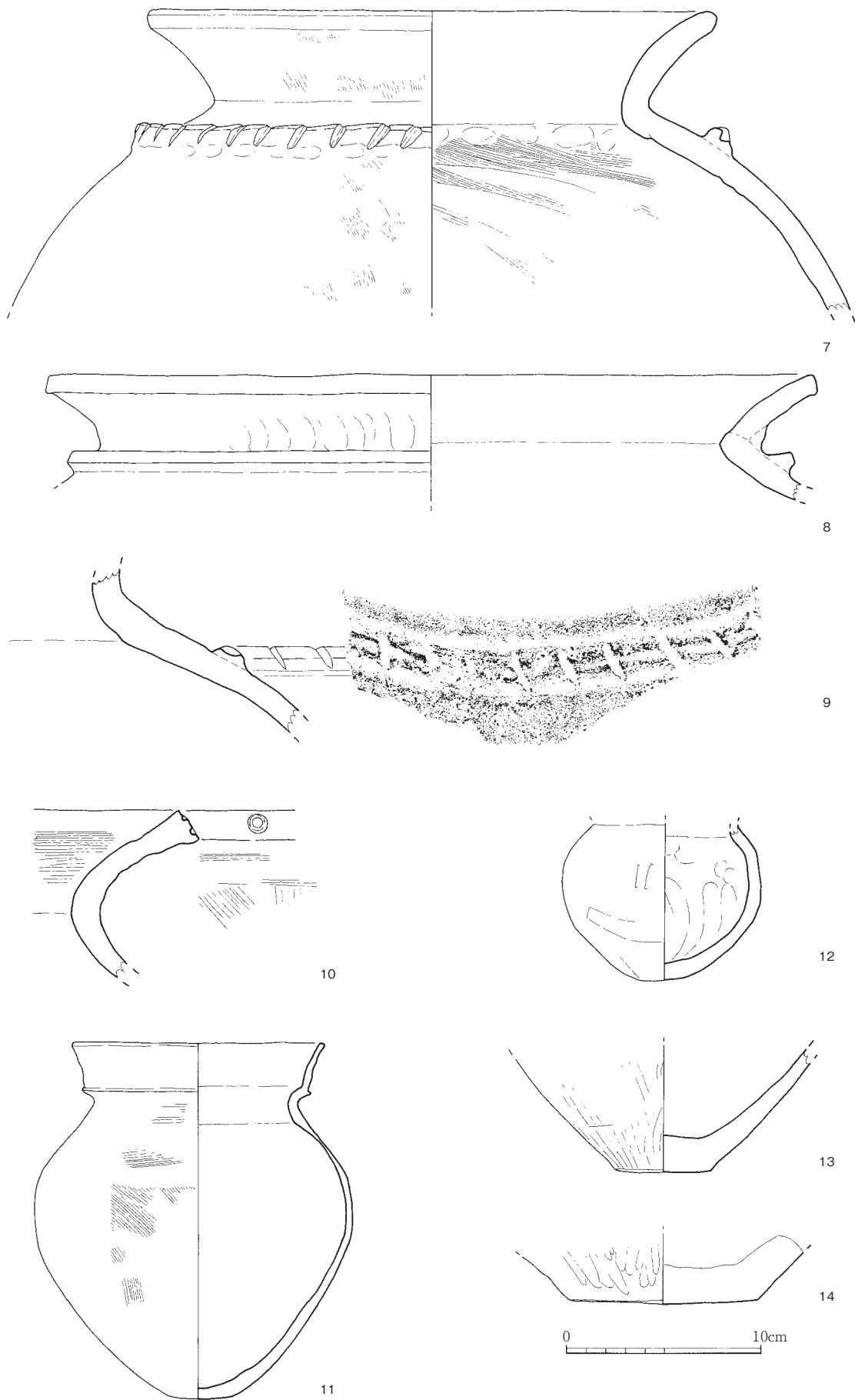


第135図 I-1区包含層の位置 (1/200)

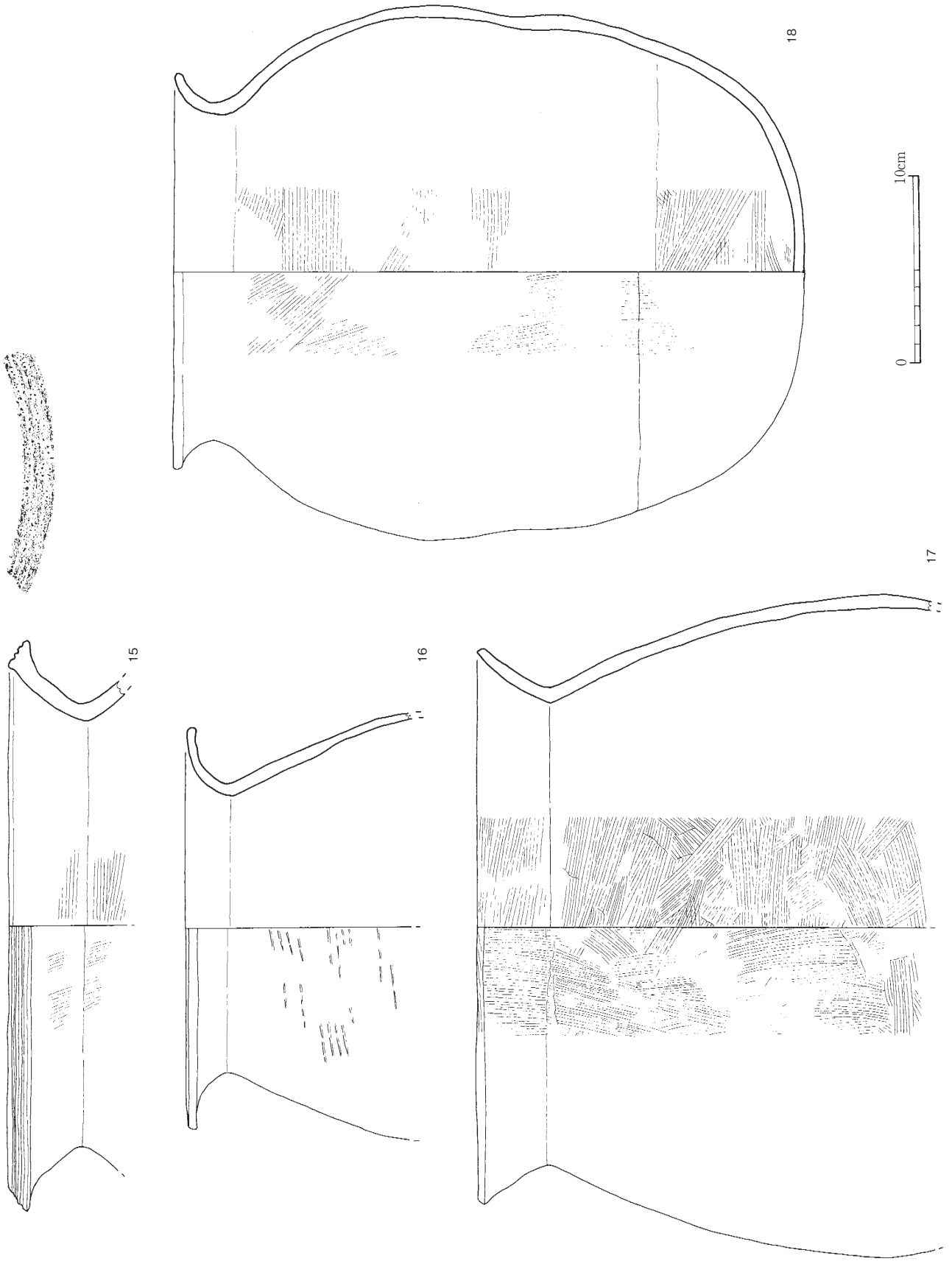
るようである。3は口縁屈曲部が文字通り籠状に突出するもので、図示部はほぼ完周する。口端部は外反して丸く終わる。外面に2段の櫛描波状文が刻まれるが、整美とはとてもいえない。4は上半が直線的に伸びてく字状となる口縁部で、頸部は完周する。これは全体に赤変する。5は口縁部上半がアンバランスほど小さいもので、これは小片のため復元口径や傾きに不安がある。これも焼



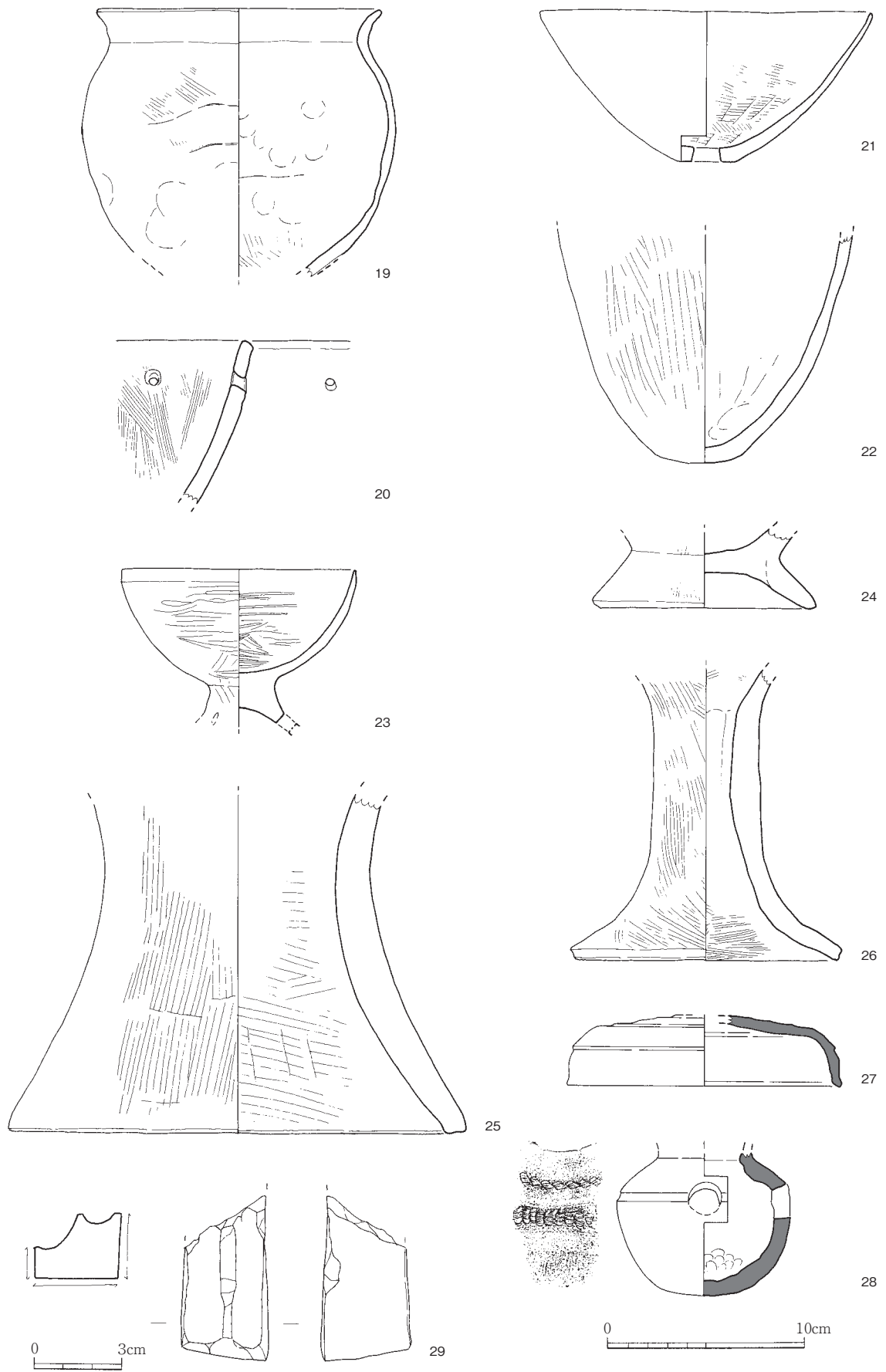
第136図 I-1区包含層出土土器等実測図1：番号付1（1/3）



第137图 I-1区包含層出土土器等実測図2：番号付2（1/3）



第138图 I-1区包含层出土器等实测图3：番号付3（1/3）



第139图 I-1区包含層出土土器等実測図4：番号付4（1/3）

けている。6も口縁部がく字状となる壺で、頸部に突帯を付す。器表が荒れているが、外面に刷毛目が見え、体部最大径のやや下位に成形時の不整合なラインが残る。

7～10は外反する単純口縁の大型壺片でいずれも肉厚となる。7は1/4が残存、肩部に刻みをもつ大振りな突帯を付す。全体に細かい刷毛目で調整、突帯下が大きく弾けている。8は口縁部が短く強く外反し、頸部直下にしっかりした箍状の突帯を付す。頸部外面は指撫で仕上げようである。赤く焼き上がる1/4の残片。9は肩部に刻目突帯を付す残片。10は口端部に面を作り、円形竹管文をスタンプする小片。

11はほぼ完存する山陰系二重口縁甕で、口縁部の一部を欠く。底部外面が赤変、肩部以下に煤が付着して器表が荒れているが、肩部には完周する横刷毛が見える。体部内面は丁寧な篋削りで仕上げるようである。灰黄色に焼き上がるが、胎土に特別な点はない。12は小型壺であろうか。体部の2/3が残存。体部外面は不定方向の篋削りで雑に、内面は丁寧に指撫で仕上げようである。外面肩部付近は撫でるようである。13は平底となる底部で、体部が高く立ち上がる。外面は疎となる刷毛目で仕上げ、2/3が残存。14は2/3が残存する平底の底部で、内面がすべて剥落する。外面は篋磨きのようで胎土は粗い。弥生前期に遡るものであろう。

15～19は甕。15は口縁部がく字状に外反、端部を小さく肥厚させてそこに凹線を2条刻む。体部外面には叩き痕が見え、焼けて赤味を帯びている。胎土に特別なものはない。16は強く外反して伸びる口縁部をもち、体部の張りが弱い。17は1/2弱が残存。口縁部はく字状に外反、端部に面をもつ。全体を細かい刷毛目で調整、体部外面には弾けが多く見える。18も1/2が残存。口縁部が緩くC字形に外彎、底部が浅い丸底となることから寸胴形の器形となる。器表が荒れているが、内外面は刷毛目で調整されるようである。体部内面では器表の弾け・剥落が目立つ。また、体部下位の外面には上下が不整合となる部分が見られる。器形的には新しいように思われる土器であるが、この部位に不整合なラインをもつ土器は弥生時代末～古墳時代初めの土器によく見られる特徴である。19は口縁部がC字形に小さく短く外反する甕で、口縁部の1/4が残存。体部内外面に指頭痕が目立つ。

20は口縁部下に焼成前に円孔を穿つ土器。体部から口縁部にかけて直線的に開いていて、鉢であろうか。これは小片。21は底部にやはり焼成前に穿孔を行う1/2の残片で、器表が荒れている。これは傾き・復元径に不安がある。22は砲弾形となる底部で、図示部がほぼ完周する。外面は疎らな刷毛目、内面は丁寧な篋削りで仕上げる。

23は椀形の高杯で、図示部は1/2以上が残存する。胎土精良、作りもごく丁寧に明るい灰黄褐色に焼き上がる。孔は3方。24は3/4が残存する脚台で、焼けて赤くなる。25は筒型の器台片で、脚部の1/4が残存。内外面を刷毛目で仕上げ、脚部外面はとても赤く焼けている。26は細身の器台で、これも脚部の2/3が残存する。胎土は比較的良好といえる。

27・28は須恵器。27は口縁部の1/3が残存する杯蓋で、胎土・作りともに良好である。口縁部内面に面をもち、天井・口縁部界の突出は大部分が潰れている。28は臙片で、体部下半は完存。体部の張りが弱く、甘い凹線を刻んでその上下に傾きを変えた櫛描の連続押引文を刻む。内面底部には小さな棒を幾度も押しつけた痕跡があり、底部外面では篋削りを意図したものの、上手に削れなかったような痕がある。「草」の類を用いたものであろうか、ただ器面の平滑化には成功している。胎土は良好で小豆色の緻密なものとなる。

土器と一緒に番号を付して取り上げた石製品が1点ある。暗灰色の地に灰白色の斑が入る石英斑岩製で、3面を砥石として使用、残り一面には曲率の違う円弧あるいは楕円弧が並ぶ。両円弧の間も磨られている。断面図左端で円弧が壊されていることから、円弧の利用を終えてから砥石として

再利用されたものであろう。円弧を必要とする作業としては身の断面が弧を描く時期の鉢あるいは玉造用の砥石等が考えられる。その種の鉢を用いた時期の遺物はほとんどなく、本遺跡からは数は多くないが瑪瑙が出土していて、玉作りに使用された可能性が考えられる（図版70、第173図11）。

B3-e5区出土土器（図版61、第140・141図） 1～21は上層赤褐色土出土の土器である。1はく字状に内傾する二重口縁壺片で、頸部上面に凹線を2条刻む。2は丸い体部をもち、口縁部を小さく外折させる椀で、赤く焼き上がる。器表が荒れているが、内面は篋磨きのようである。3は内面に布目をもつ製塩土器小片、4はほぼ完存する手捏ね土器で、胎土は良好、形状は不整である。

5は内面を黒色とする黒色土器で、外面は灰黄褐色となる。胎土は粗い。6は底部がほぼ完存する土師器小皿で、復元口径9.9cm、器高1.6cmを測る。赤変していて器表が荒れる。

7～19は須恵器である。7は口縁部の1/3が残存する杯蓋。天井部外面の篋削りは丁寧になされるが、全体に作りは雑である。8は口縁部の3/4が残存する杯身。内面に篋記号が刻まれ、とても丁寧に作られた土器である。外面は全体に灰を被り、窯土が付着、胎土に黒色粒が目立つ。9は壺小片。胎土は水簸したように精良なもので小豆色となる。口縁部直下及び文様帯間に小振りだがシャープな断面三角突帯を刻み、整美な櫛描波状文で飾る。

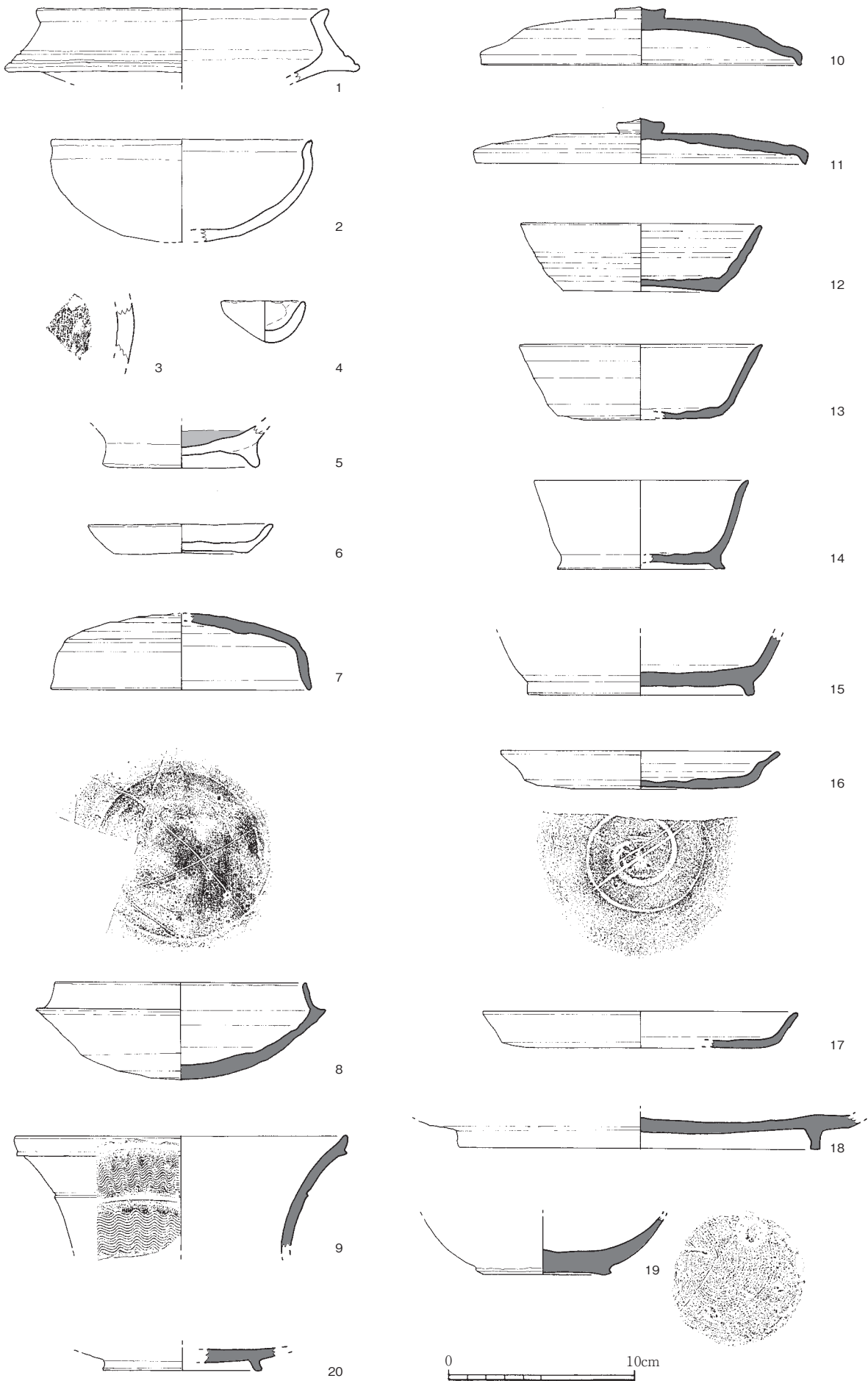
10・11はつまみをもつ扁平な杯蓋で、11は特に天井が低い。いずれも1/4ほどが残存。12は体部が直線的に立ち上がる杯身で、底部の1/2が残存。13は口縁部が小さく外反する杯身。酸化炎焼成により明るい灰黄褐色となり、内面に灰赤色の火襻が残る。これは胎土良好で、口縁部の1/2が残存する。14は体部が急角度で立ち上がり、口縁部はやはり小さく外反する。高台は底部外縁にあるが、まだしっかりとした形状である。底部の1/4が残存。これら3点の杯身は外底面に篋切り痕を残す。15は焼成が甘く、外面は青灰色となるが内面は灰赤色となる。外底面は丁寧に撫でている。底部の1/3が残存する。16・17は皿。16は体部中程で外反し、復元口径15cmとなる。外底面に回転篋切り痕と浅い篋記号が見え、内面は丁寧な横撫でで仕上げられる。口縁部付近の内外面が灰黒色となり、外底面に同色の火襻が残る。底部の2/3が残存。17は口縁部の1/4が残存し、復元口径は17cmを測る。体部から口縁部にかけて小さく外彎する。外底面に篋切り痕を残し、焼成が甘い。18は胎土良好で丁寧に作られた高台付の土器であるが、小片のため復元径には不安がある。

19は回転糸切り痕を残す底部が完周する須恵質の椀である。内外面を撫でで仕上げるが、内面は丁寧、外面はやや雑な感を受ける。見込外周に小さな弧状の熔着痕があり、その外側は部分的に灰を被るようで、2mm以下の黄白色～灰白色斑が付着する。焼成や器表の様子はいわゆる東播産須恵器摺鉢に似ていて、これも東播産であろう。当地でも東播産摺鉢は普遍的な出土遺物といえるが、椀は珍しい。

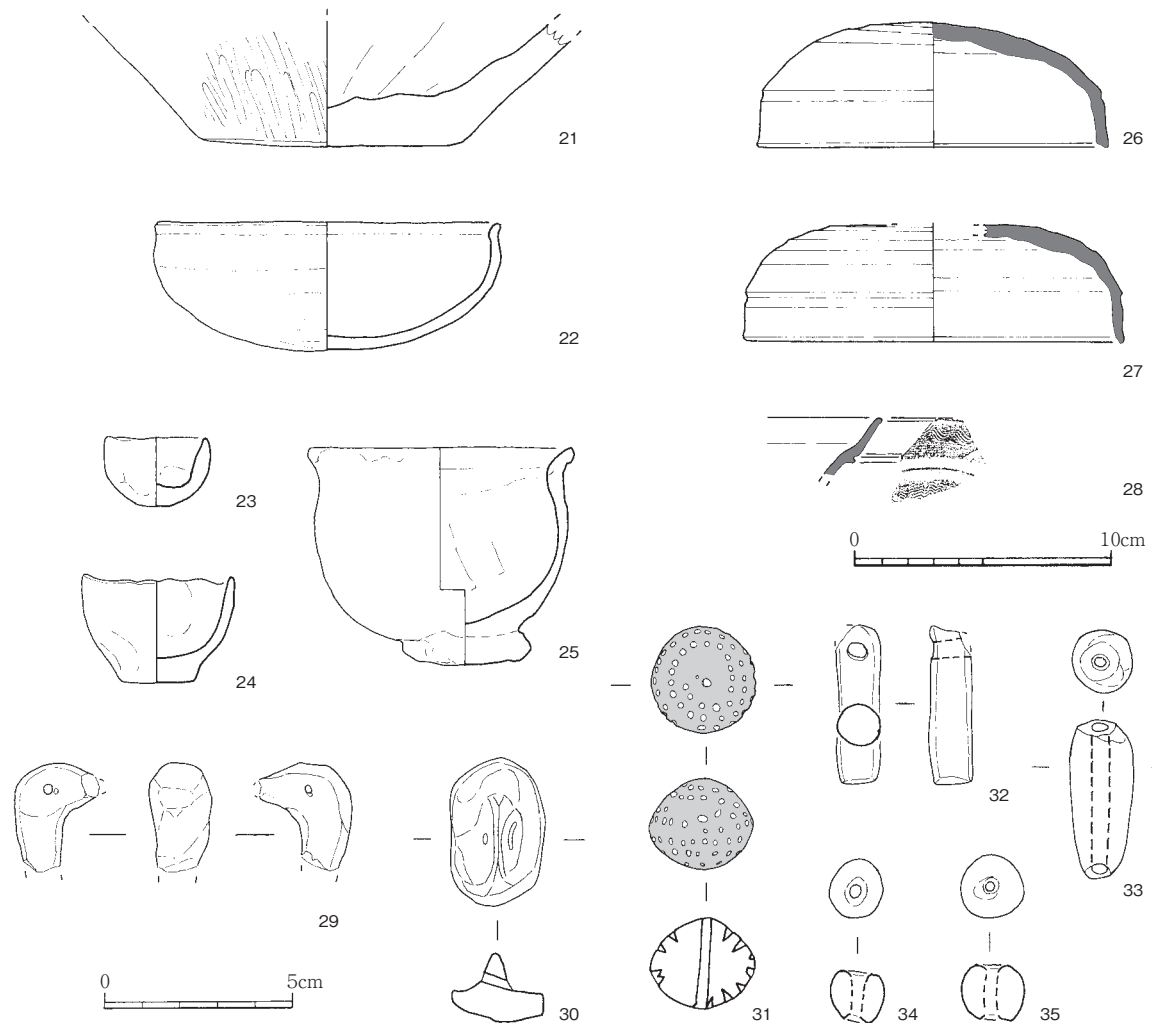
20は緑釉陶器で、灰白色陶器質の素地に明るい灰黄緑色に発色する釉を全面に掛ける。胎土・作りともに非常に良好である。

21～28は下層の黒褐色土からの出土土器。21はほぼ完周する平底の底部で、胎土が粗い。底部外面から体部下端にかけて全体を篋磨きで仕上げる。これは弥生前期に属するものとしてよいであろう。22は底部が完周、口縁部の1/3が残存する土師器椀で、全体に浅い半球形となるが、口縁部を小さく外折させる。器表が荒れていて調整の細部は判らないが、赤く焼き上がる。23は1/2が残存する手捏ね土器で胎土は良好、24はほぼ完存する手捏ね土器で口縁部付近を除いてよく整形されている。胎土は粗い。25は不整となる底部が完存、口縁部付近は小片である。器表が荒れているが、頸部下内面に粘土紐の継ぎ目が残る。

26～28は須恵器。26は口縁部付近の1/3が残存、雑な作りの感のある杯蓋。27は1/4の残片



第140图 I-1区包含層出土土器等実測図5：B3-e5区1（1/3）



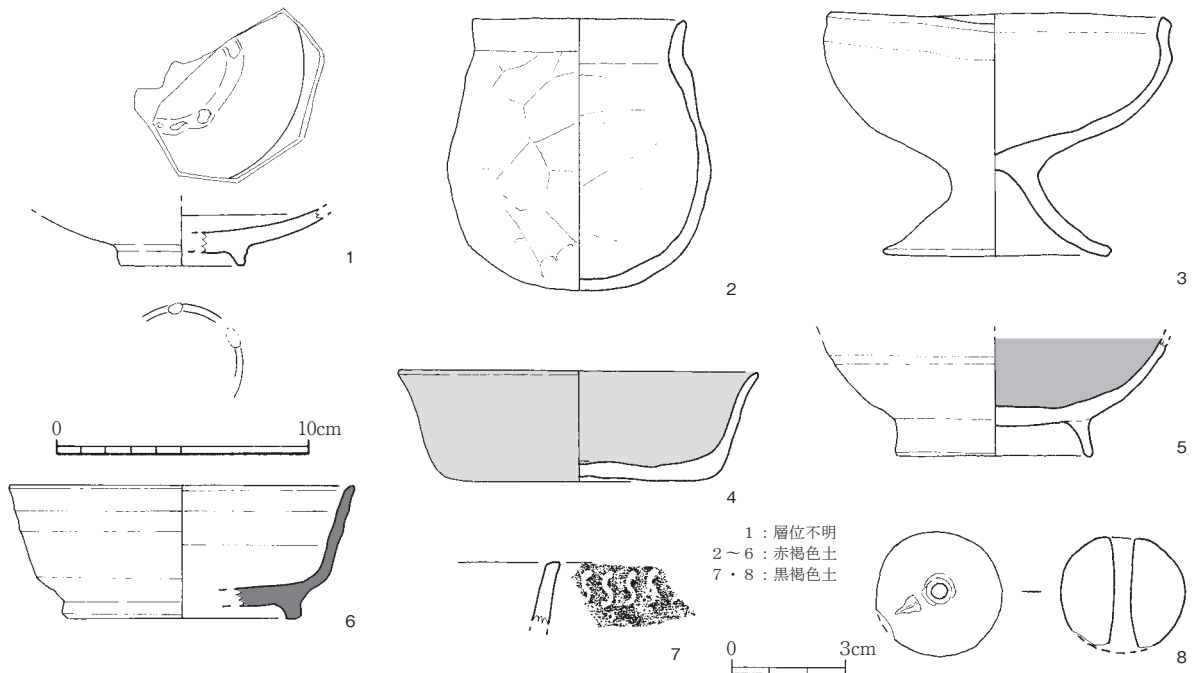
第141図 I-1区包含層出土土器等実測図6：B3-e5区2（1/3、1/2）

で、これは胎土・作りともに良好。28は臍口縁部の小片。胎土良好で、細部がシャープに作られている。口縁部・頸部外面に櫛描波状文を刻む。

土製品の中、31に示した土玉が黒褐色土から、他は赤褐色土から出土したものである。29は鳥形土製品で、先端（嘴）および下部を欠損する。目は刺突で表現され、口と受け取れるような線も見えるが、これは傷であるかも知れない。胎土は決してよくない。残存長3.0cmを測る。30は土製模造鏡。図縦の長さ3.9cm、幅2.4cmの大きさである。31は無数の刺突が施された土師質球形の土製品で、赤色顔料が見える。32は身が断面円形となる有孔土錘で、土師質でこれも胎土精良である。33は一般的な管状土錘で、長さ4.2cm、重さは11.1gである。34・35は球形の土玉で、胎土は良好であるが形状・穿孔ともに不整である。土錘であろう。それぞれ3.0・4.0gを測る。

B4-e1区出土土器（図版62、第142図） 注記はB4-a5区とあるが訂正する。1は層位の注記がない青磁碗。畳付まで含めて総釉となり、釉は灰味帯びる淡青色透明に発色、貫入が著しい。見込外縁に目痕があって、その外側2.5cm辺りに細い沈線が巡っている。内面では目痕・釉の剥離・釉の盛り上がりが環状に連続していて、畳付にも目痕が残る。朝鮮半島製であろう。

2~6は赤褐色土からの出土。2は底部が完周、口縁部付近の1/3が残存する甕で、口縁部はほとんど直立するといつてよい。体部外面は不定方向の篋削りで仕上げるようである。底部付近に煤が付着する。3は完形に近く、高杯としては異形で、碗形となる杯部の口縁部を小さく反転させている。内面は篋磨きのようなものである。外面は焼けて器表が荒れている。4は土師器の杯で、器表が荒れ



第142図 I-1区包含層出土土器等実測図7: B4-e1区 (1/3、1/2)

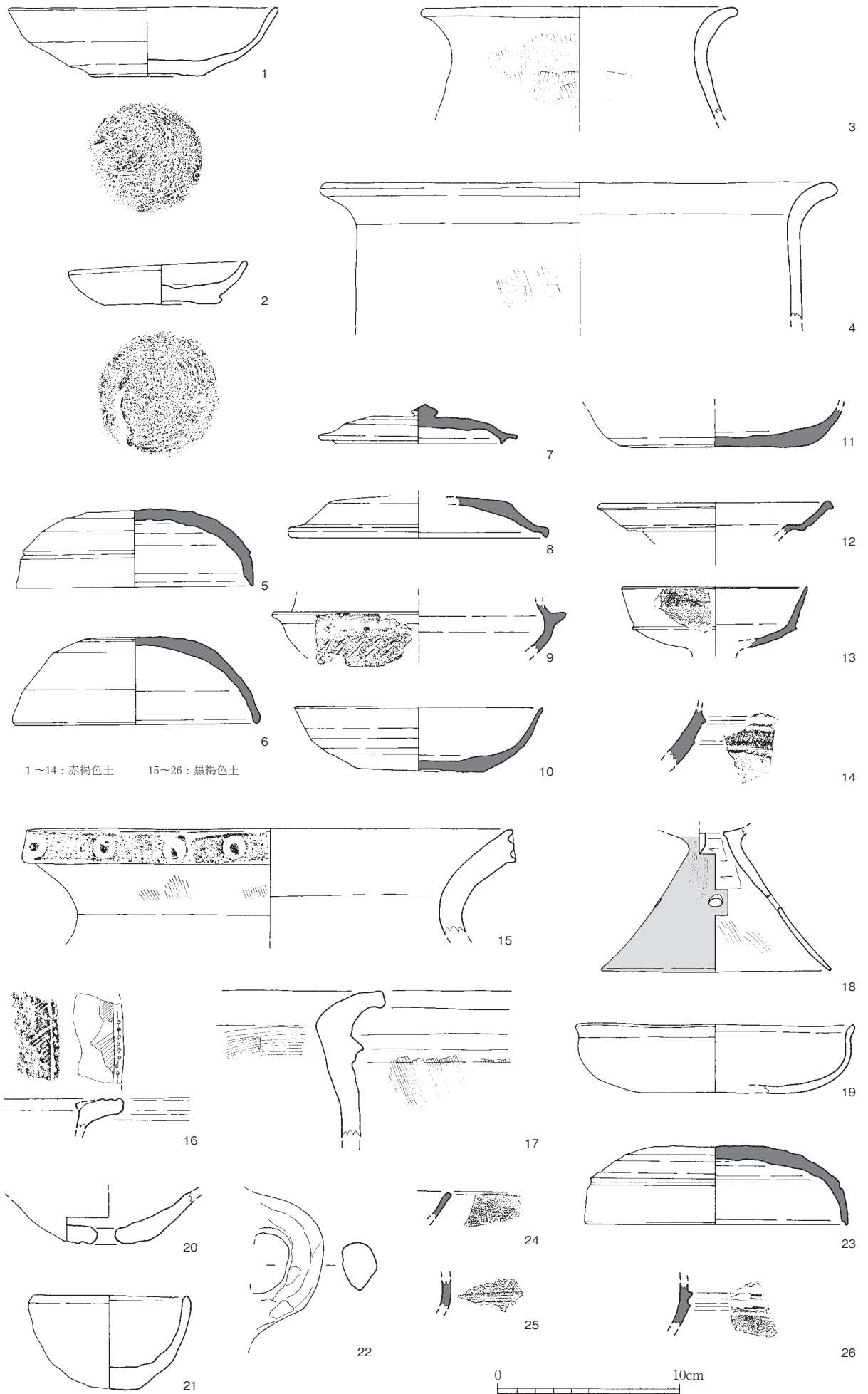
ているが随所に赤色顔料が残存している。胎土は特に精良といったものでなく、作りも同様である。底部の1/3が残存する。5は黒色土器であろう、底部は完存する。器肉及び内面は灰黄色～灰黒色となるが黒色化した部分はほぼ剥落している。外面は灰黄色～灰褐色となる。胎土は非常に精良。6は須恵器杯身で、口縁部の1/4が残存。胎土・作りともに良好といってよい。

7は二重口縁壺片であろう。外面にS字状となるスタンプを連続する。これは黄白色を呈し、胎土に灰赤色砂粒を多く混入していて、外来の土器と思われる。8は直径3.0～3.3cm、重量30.2gを測る球状土製品で、土錘であろう。

C3-a4区出土土器 (図版62、第143図) C3-e1区の注記がある。1～14が赤褐色土、15～26が黒褐色土からの出土。

1は完存に近い腰折れとなる土師器皿、あるいは浅い杯とすべきであろうか。口径14.9cm、器高は4.8cmを測る。灰黄色を呈し、器表が荒れるが回転糸切り痕が見える。2は同小皿で、これもほぼ完存。口径9.9cm、器高1.8～2.4cmとなって口縁部が歪む。3は口縁部が緩く外彎する甕片で、口頸部が厚くなり、器表が荒れている。4も器表が荒れる甕。

5～14は須恵器。5は口縁部の1/4が残存する肉厚の杯蓋で、胎土良好、作りも丁寧である。6も口縁部の1/4が残存、器高が高い。胎土精良で、天井部外面の篋削りを丁寧に撫で消す。7は宝珠つまみと返りをもつ杯蓋。1/2ほどが残存。胎土・作りともに良好。8は1/4が残存する杯蓋で、口縁部は折り曲げたようになる。9は通有の古墳時代杯身と形態は変わらないが、受け部下外面に櫛描波状文を刻み、当地ではとても珍しい。胎土は特にというものではないが精良な部類であろう。調整は丁寧。目視の限りでは施文以外に特段の違和感はない。10は平底に篋切りした後に撫でた土器で、蓋とすべきであるかも知れない。器表は外面のほうがより熱を受けた様子であり、内面を下にして焼かれたと思われる。胎土・作りとも良好で、1/2強が残存する。11は通有の杯身で、丁寧に作られるが焼成不良で瓦質に近い。3/4が残存する。12は罎口縁部の小片。胎土・作りとも良好である。13は一見杯蓋に見えるが、口径が小さく下端にわずかな膨らみがあって高杯と判断した。胎土は小豆色で精緻、細部・施文もシャープで整美な土器である。14はジョッキ形土器であろうか。胎土良好で、内面に灰を被る。



第143図 I-1区包含層出土土器等実測図8: C3-a4区 (1/3)

15は口端部に大振りの円形文をスタンプする壺で、スタンプは5個が残るが間隔は不均等である。胎土等は普通である。16は鋤先状口縁に復元できる口縁部片で、赤く焼き上がる。口縁上面の外縁に直径2mmほどの竹管文を密に配置、その内側に複線鋸歯文を線刻する。17は大型の甕片。18は脚部上端に穿孔された薄手の器台で、脚部の1/3が残存。胎土は精良、受け部内外面及び脚部外面に赤色顔料が残る。19は赤く焼き上げられた椀の小片。本遺跡出土の他例に比して口径が大きくなっていて、不安がある。20は底部に孔をもつ甌で、孔の辺りが焼けている。21は胎土が粗く、底部が完存する手捏ね土器。22は半環状の把手。断面は不整で、胎土は比較的良好である。全体に灰黄色であるが、剥離部分はわずかに赤変する。

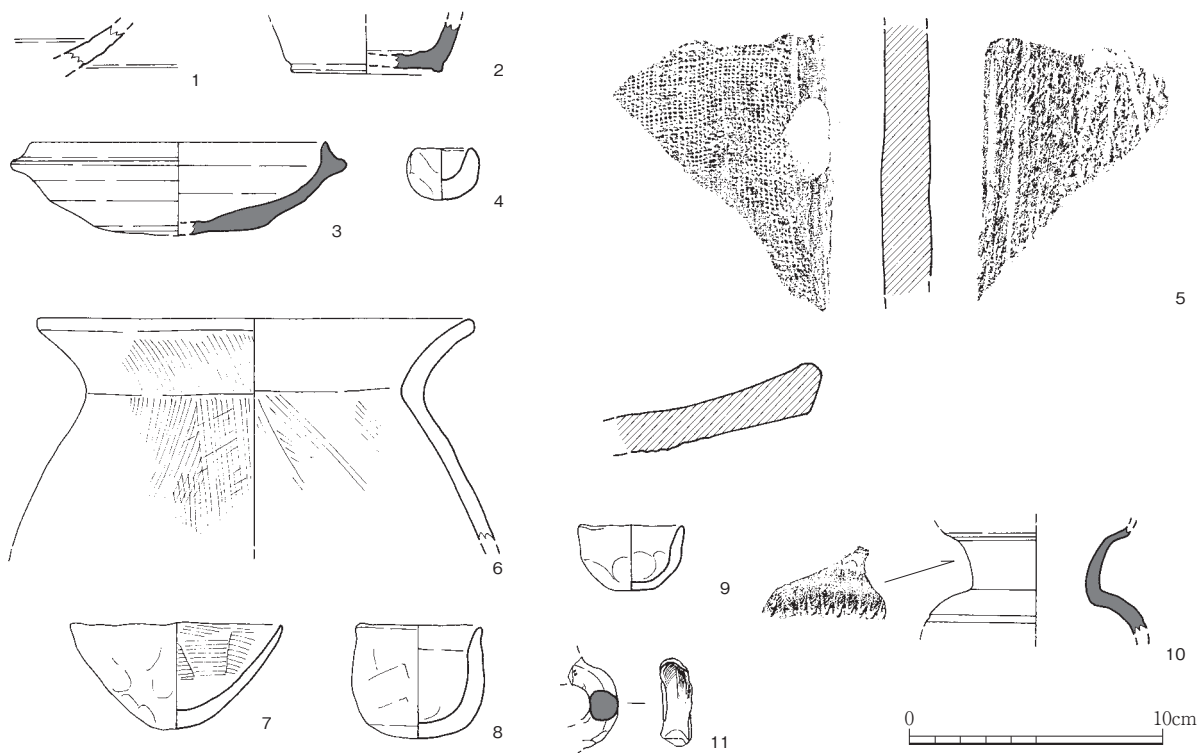
23は丁寧に作られた須恵器杯蓋で、1/2が残存。24は甌の口縁部片であろう。口端部は匙面ではないが断面方形となる面をもち、外面に繊細な櫛描波状文を刻む。胎土・焼成は良好で、内面に自然釉を被る。25も胎土精良な須恵器片で、これも繊細な櫛描波状文で装飾する。拓本で沈線状に見えるものは強い横撫ででわずかに凹んだ痕跡である。26はジョッキ形の薄片か。胎土・作りともに非常に良好で、細部もシャープに作られる。

C3-a5区出土土器（図版62、第144図） C3-e2区の注記がある。1~4・11は土層名の注記がなく、5は赤褐色土、6~10は黒褐色土からの出土である。

1は越州窯系青磁の小片。光沢の弱い緑味帯びる暗灰色釉が掛かり、胎土は暗灰色精緻なものである。2は灰白色で精良な胎土をもつ緑釉陶器で、底部外周に小さな輪台を付す小型の瓶子であろう。釉は総釉で淡い黄緑色に発色する。輪台の一部が剥離して、釜道具が窯着したものである。1/4が残存する。

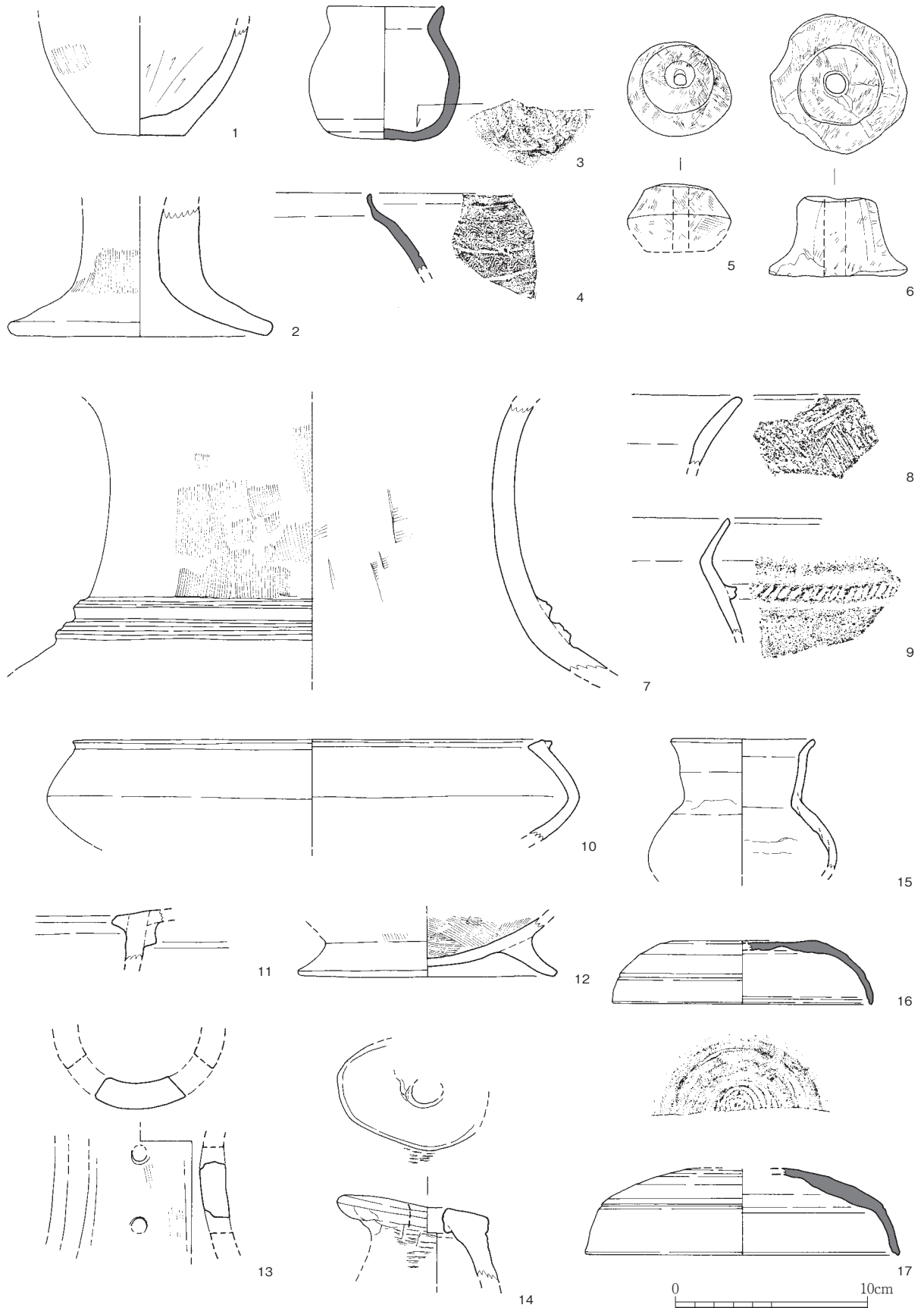
3は須恵器杯身で1/4ほどが残存。胎土は精良といってよく、調整も丁寧になされるが、焼成時の火膨れが顕著となる。4は完存する手捏ね土器で、胎土・作りともに良好である。5は破面に砂粒が見えないほど胎土良好な平瓦片で、縄目叩き・布目痕の組み合わせとなる。

6は土師器甕で口縁部付近の1/3が残存。外面が煤け、内面は丁寧に調整されている。7は小型手捏ねの鉢で底部は完存、口縁部付近の2/3が残る。内面は刷毛目を主体として仕上げる。8は底部の



第144図 I-1区包含層出土土器等実測図9：C3-a5区（1/3）

1/2、9は1/3の残片。小型手捏ね土器のため、復元形状に不安がある。8は内面が灰黒色となり、2点とも胎土・作りは良好。10は胎土・作りともに良好な壺片で、頸部に繊細な櫛描波状文を飾るが、横撫でしたようで中央付近は消えている。11は小型の須恵器の把手で胎土精良である。



第145図 I-1区包含層出土土器等実測図10：C4-a1区（1/3）

C4-a1区出土土器（図版62、第145図） 1～6が赤褐色土から、7～17は黒褐色土からの出土である。

1はしっかりとした平底をもつ土器で図示部はほぼ完周。内面は篋削りで仕上げられている。2は肉厚となる器台片で、1/4が残存。脚部内面が赤変、荒れている。

3・4は須恵器。3は口縁部が短く外反、平底をもつ小型壺で、底部の1/2近く、口縁部は1/4弱の残片。胎土は比較的精良であるが、調整は雑な感がある。外底面は不定方向の篋削りで仕上げ、内底面には同心円文風の当て具痕が残る。4はジョッキ形となろうか、小片のために傾きに不安がある。外面に2条の沈線と3段の櫛描波状文を刻むが、上方の沈線は波状文と重なっていて、施文は雑とってよい。胎土は良好で暗灰色、内面は灰白色となって焼成が甘く見えるが、外面では波状文以下に灰を被る。

5・6は土師質の土製紡錘車。5は図背面のほとんどを欠くが算盤玉形を呈する。6は側面が強く内彎する台形状となる。2点とも胎土に特別なものはない。

7は頸部が長く伸びる大型壺で、その基部に断面M字に近い突帯を2条付す。1/4が残存。8は二重口縁壺であろう。外面に篋描の複線鋸歯文を刻む。胎土良好であるが、特段の違和感はない。9は肩部に刻目突帯を付す甕の小片。10は内彎する高杯口縁部付近で、小片のため復元口径には不安がある。11は鋤先状口縁をもつ弥生土器小片で、口縁部直下に突帯を付す。12は脚付の土師器底部で図示部は完周する。外面は非常に荒れているが、内面は刷毛目がよく残る。13はこの地域では非常に珍しい器台片で、縦方向に円孔を並べ、残存部両端は縦長長方形の透孔となる。内面に斜位の、外面に縦位の刷毛目が見え、胎土は粗い。胎土からは搬入された土器と積極的にいうことはできない。14は頂部の一端がつまみ出される支脚片で、全体に灰赤色となるがつまみ付近の上面は灰黒色となる。15は土師器小型壺片で、1/4が残存。胎土は非常に精良で黒色となり、体部内面も灰黒色、口縁部内面から体部外面にかけてが灰黄褐色となる。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。

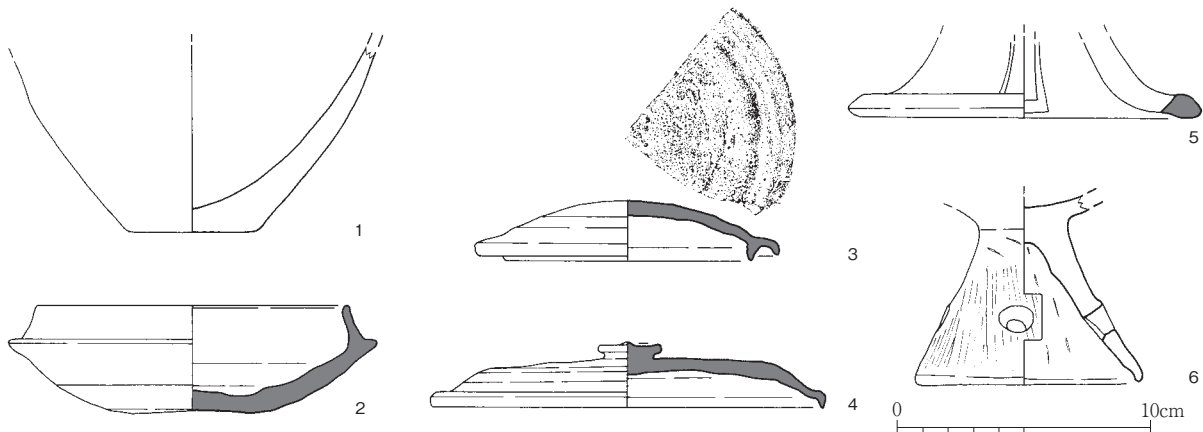
16は天井部が平坦となる器高の低い須恵器杯蓋で、胎土・作りともに非常に良好である。内面に同心円文当て具痕が1単位付される。1/3の残片。17は口縁部の1/4弱が残存する。これは作りが雑である。

C4-b1区出土土器（図版62、第146図） C4-a2区の注記がある。1は層位の注記がない。2～5は赤褐色土から、6は黒褐色土からの出土である。

1は器表が荒れる底部片で、弥生土器であろう。

2は口縁部の1/4が残存する須恵器杯身で、肉厚であるが胎土・作りは良好。3は1/4が残存する杯蓋で、これも胎土・作りともに良好である。外面には回転篋削り痕と浅く細い篋記号が見える。

4は完存に近い杯蓋で、天井部の篋削り痕をほぼ撫で消すなどこれも全体に丁寧に作られている。



第146図 I-1区包含層出土土器等実測図11：C4-b1区（1/3）

口端部から口縁部内面にかけて部分的に黒色化する。5は短脚の高杯であろう。脚端部は稜をもたず全体に丸みを帯び、4方に透孔を置くようである。胎土は精良といってよく丁寧に作られる。外面に厚く灰を被り、偶然のものか透孔下端に並んで長さ1cmほどの小孔が焼成前に穿たれる。

6は図示部が完存に近い器台の脚部。脚端部が小さく踏ん張り、4個の円孔を配する。外面は疎らな浅い刷毛目で仕上げる。

3号溝北側東西Tr・東西2Tr.出土土器（図版62、第147図） 1～3・13が須恵器である。1は1/3が残存。丁寧に作られた蓋で、外面に灰を被る。2は1/2が残存する杯身。外底面の篋削りの痕跡を撫で消すようである。3は焼成甘く、灰白色となる杯身で、これも外底面を撫でている。篋記号のように図示したが、浅くはつきりしない。1/3の残片。

4は一部を欠損する土製模造鏡で、胎土や焼成に特別なものはない。5～9は手捏ねミニチュア土器で、5・8が完存あるいはそれに近く、他は1/2前後の残片である。5は丁寧に作られていて、9は平底となる。

10は筒型の器台片であるが、この種の土器としては胎土が比較的良好で、調整も丁寧になされる。脚端部内側に不規則だがしっかりとした篋状工具による刻みがある。11は中空とし、上面が大きく傾斜する形の器台で、口縁部が不整でかつ一部が欠損してはつきりしないが一端をつまみ出していたかも知れない。12は脚付となる土器で、器表が荒れる。13は高杯小片で、篋描の斜線で装飾する。

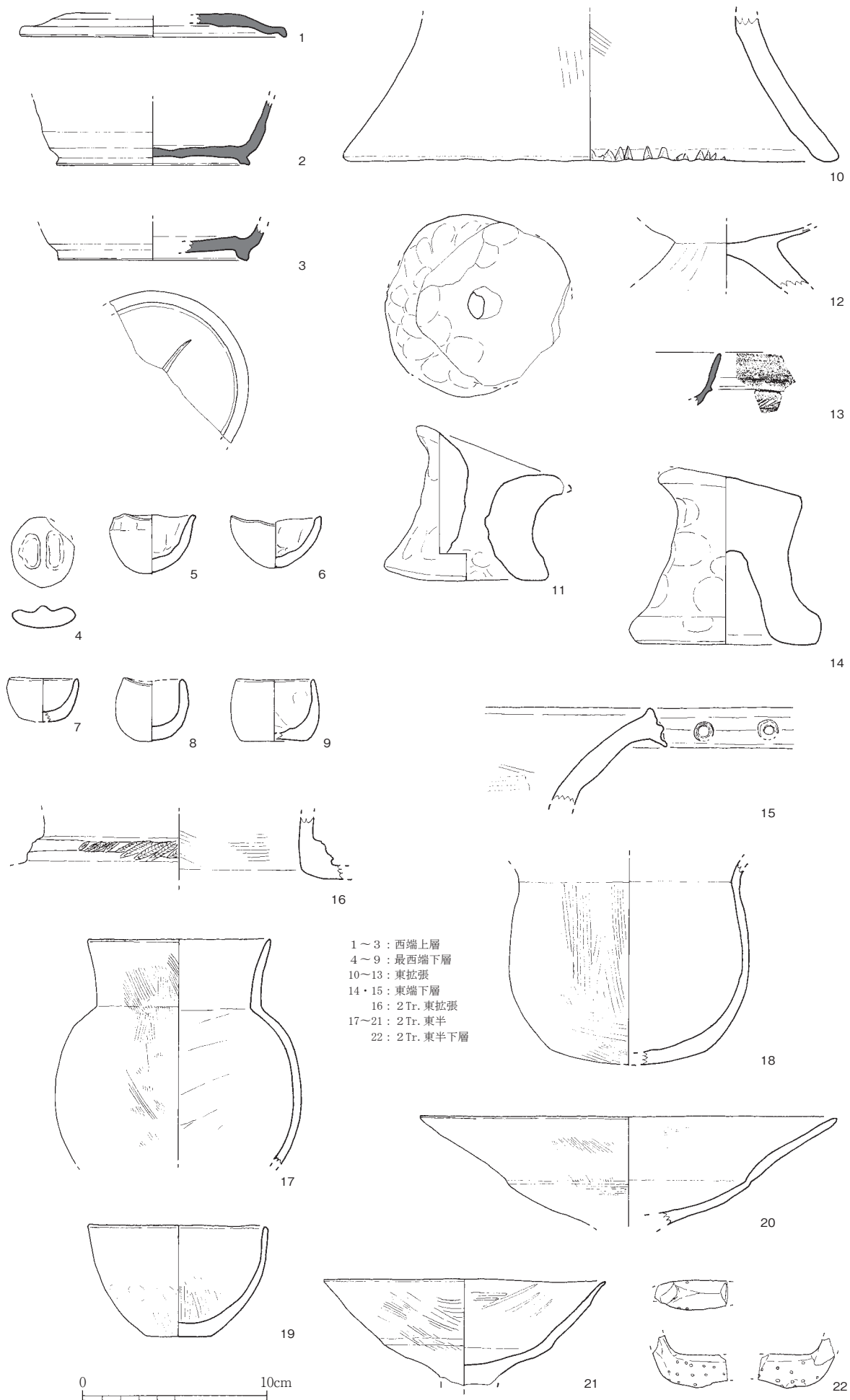
14・15は15号住居跡に伴うとしてもよからう。14はごく肉厚となる支脚で、頂部のつまみ出した部分が欠損する他は完存。全体に赤変する。15は口縁部を下方に拡張し、その外面中央を突帯状に低く浮き出させて、そこに竹管文を刻む。胎土等に特異な点は見られない。

16は頸部に刷毛目原体を使用した刻目突帯を巡らせる壺片。

17は口縁部の3/4が残存する小型壺で、器表の遺存状態が良好である。外面は細かい刷毛目、内面は丁寧に篋削りで仕上げる。18は器表が荒れていて、丸底となる底部付近を中心とする残片のため、復元形状に不安がある。19は平底の鉢で、口縁部の1/2を欠損。胎土粗く、口縁部も不整であるが、調整は丁寧といってよからう。20は1/3の残片で、器表のほとんどが剥落している。暗文は施されていないようである。21は図示部のほとんどが残存するが、これも器表がひどく荒れている。

22は動物と思われる須恵器片。胎土は精良といってよく、背とした部位を中心に灰を被って黒色化する。体部両側面から腹部にかけて直径2mmほどの刺突がランダムに刻されるが、背にはない。右下に示した側面図で、下位に剥離痕のようなものが見え、足が付されていたのかも知れない。

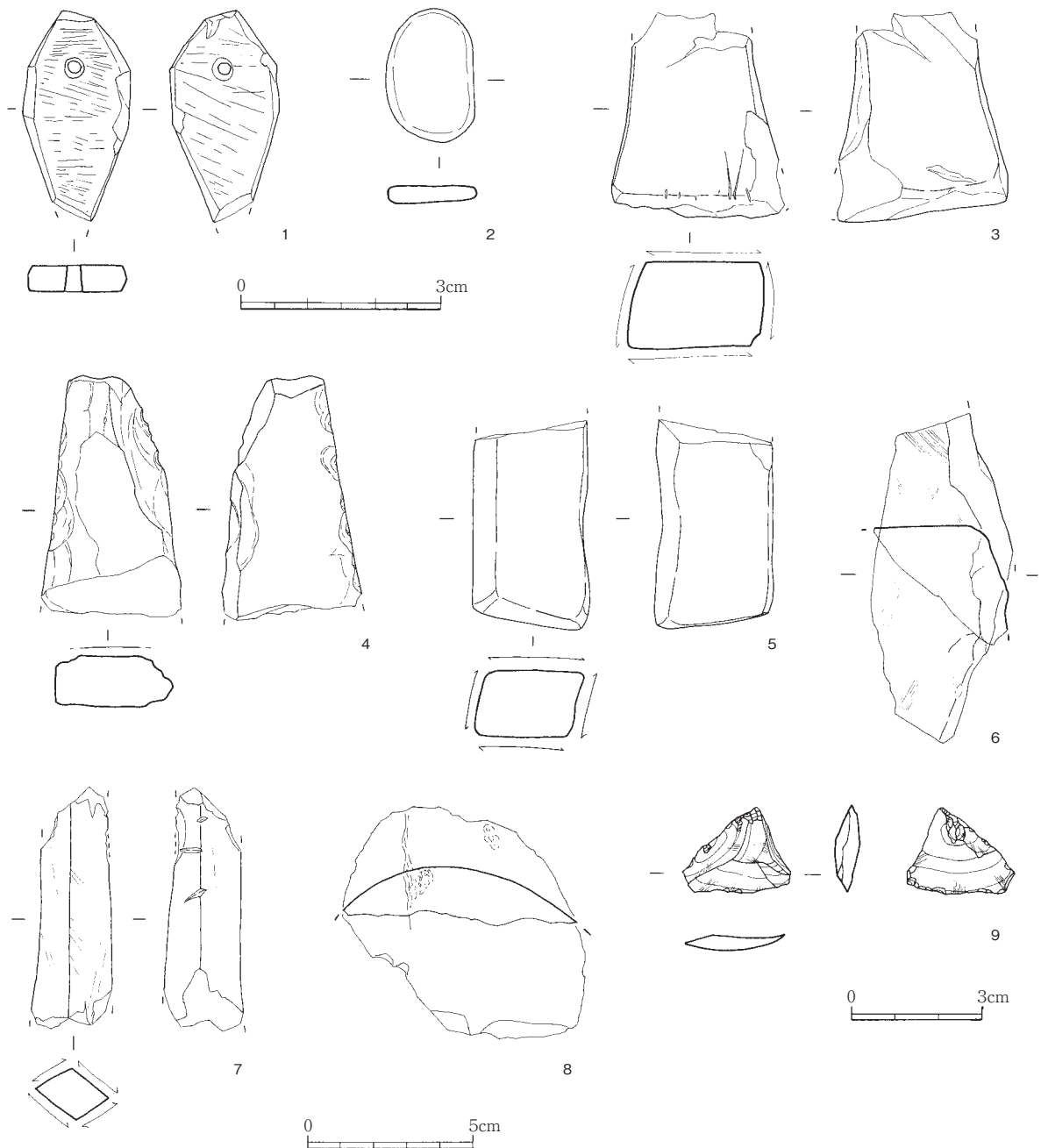
石製品（図版63・64、第148～150図） 1は3号溝北側に開けた東西Tr.出土の垂飾で、出土地の詳細は不明。下端を欠き、頭部も若干欠損するようであるが、残存長3.1cm、幅1.6cm、厚さ4mmの板状の滑石に鋭い穿孔を穿つ。2は4号溝北端の包含層出土の小石で、全体に滑らかな手触りとなる。安山岩であろう。3は2・3号溝間の包含層出土の砥石。出土地は9号住居跡より東側に当たり、柱穴以外の遺構は認められなかった。黄白色～黄褐色となる石英斑岩製で、上部を欠損。4面が使用されている。4は17号溝西端南で出土した8世紀代の須恵器の下位から出土した頁岩製砥石。図左に示した面の中央及び右図の左下付近がよく使用されている。右図の多くの部分や同図右側面も使用に適した形状であるが未使用。5は3号溝北側東西Tr.西端中層出土であり、あるいは15号住居跡に伴うものであるかも知れない。緻密な頁岩製砥石で、3面をよく使用、1面は表面に小さな凹凸が残っていて、あまり使用されていないようである。6は同上Tr.東端出土である。砂岩製砥石の断片で、1面が使用される。7は粘板岩を用いた砥石である。全体に滑らかとなり条痕が観察できるが、研ぎ



第147図 I-1区包含層出土土器等実測図12 : 3号溝北側東西Tr.・東西2Tr. (1/3)

減りといったような凹面はない。これは出土位置がはっきりしない。8は4号溝北端付近から出土した非常に滑らかとなる安山岩の断片。9は姫島産黒曜石の剥片であるが、先端が欠けている。細部調整は見られない。

第149・150図は10mメッシュで分割して取り上げた石製品等である。1は楕円形を呈する扁平な安山岩の川石の両端を打ち欠いた石錘で、図上辺も両側から加工するようである。重量は117g。2は立岩製の石庖丁片で、刃部は鋭利、背は平坦に研いでいる。3は石英斑製砥石で、使用された部位は非常に滑らかとなる。4は粘板岩製の磨製石剣あるいは石戈である。左に示した面は錆がしっかりしているが、右側のそれは甘くなる。刃部をすべて失うが、厚みから見てそれほど広がらないようである。わずかに本来の側面が残存する下端付近では研いで面を作っていることから柄が作り出されていたことがわかり、左右ともに関で欠損している場合は石戈であろう。なお、図下端、茎の基部は研いだようには見えないが、平坦な面となる。5は粘板岩を用いた権と思われる残片で、図背面が剥離、下端が折損するが、残存する面はいずれもよく磨かれている。頂部近くに穿孔があ



第148図 I-1区包含層出土石製品等実測図1 (1/1、1/2)

る。6も粘板岩を用いた権と思われるもので、これも頂部を除く全面が磨かれている。頂部は折損したままの状態であり、破損した砥石の再利用であるかも知れない。20.3gを測る。7は石英斑岩製砥石で、図示した三角形に近い面のみがよく使用されている。8は緻密な粘板岩を用いた砥石の小片。9は穿孔が直になされる頁岩製石庖丁片で、刃部は甘い。また、図右下の折損部は砥石のように磨れている。10・11はいわゆる立岩産の石庖丁片。11では図左側の孔の右下に途中で穿孔を止めた痕がある。刃部付近は表面が丁寧に磨られているが、孔の辺りには研磨が及ばない部分がある。12は粘板岩製の砥石で、使用された3面がいずれも非常に滑らかになっている。

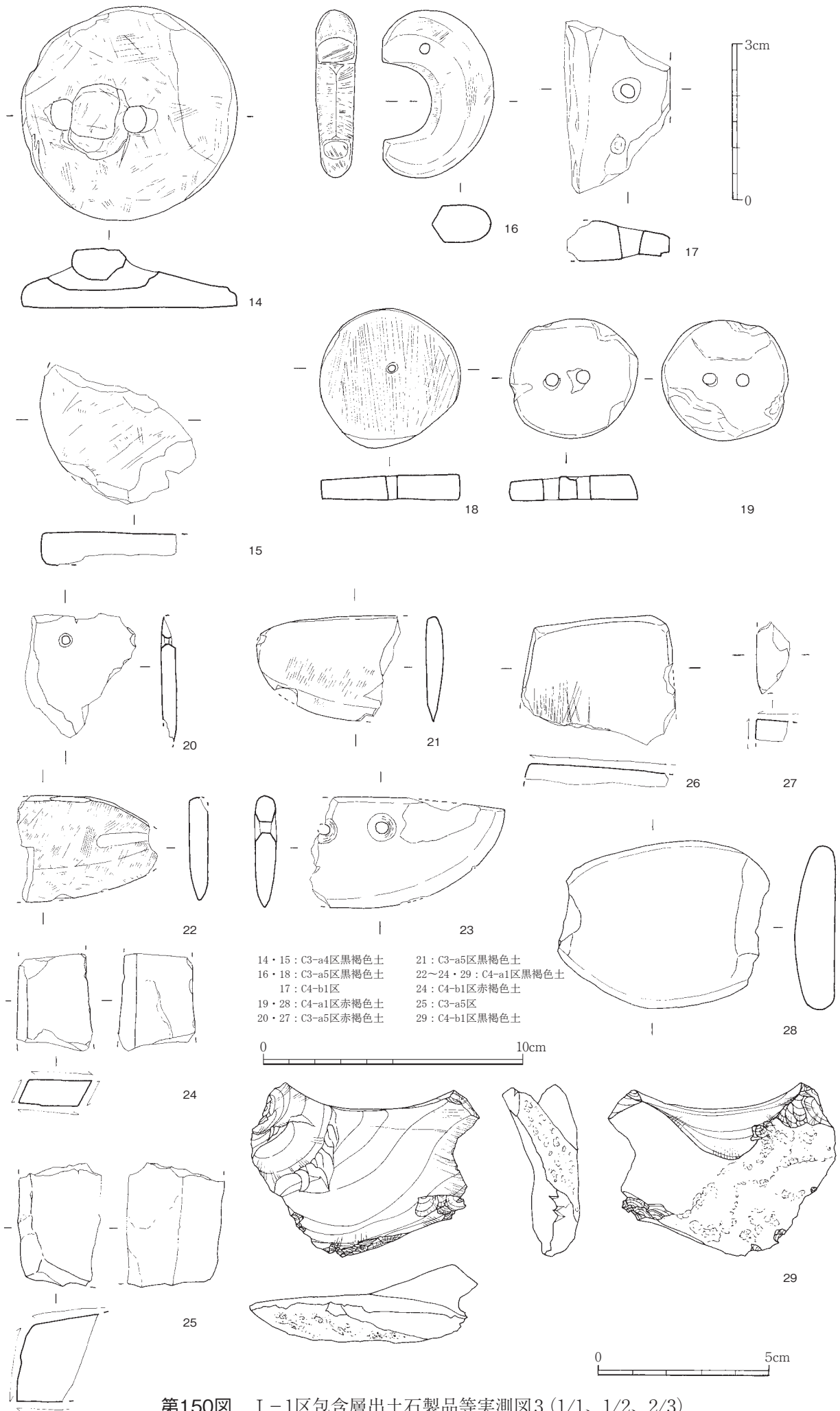
13は姫島産黒曜石を使用した石鏃で、丁寧に調整されている。

14～18は滑石製品。14は模造鏡で、直径4.1cm、厚さは一様でなく最大で0.7cmとなる。鈕は大振



1・2 : B3-e5区黒褐色土 13 : C3-e1区赤褐色土
 3 : " 赤褐色土 7・8 : B4-a1区赤褐色土
 4～6 : B4-e1区黒褐色土 9～12 : C3-a1区黒褐色土

第149図 I-1区包含層出土石製品等実測図2 (1/2、2/3)



14·15 : C3-a4区黑褐色土
 16·18 : C3-a5区黑褐色土
 17 : C4-b1区
 19·28 : C4-a1区赤褐色土
 20·27 : C3-a5区赤褐色土
 21 : C3-a5区黑褐色土
 22-24·29 : C4-a1区黑褐色土
 24 : C4-b1区赤褐色土
 25 : C3-a5区
 29 : C4-b1区黑褐色土

第150图 I-1区包含層出土石製品等実測図3 (1/1、1/2、2/3)

りだが扁平で、孔を穿つ。15は折損・剥離した残片で、一部残存する側縁から推測して円盤のようである。16は完存する勾玉。背は丸みをもち、腹側は中央にしっかりした稜が入る。頭部・尾部の両先端部が同一線上にあって、同時に研磨されたようである。なお、表面に縞模様が浮いている。17は図右辺が直線的に研磨され、左片が剥離する。板状となるが厚みが異なっていて、孔は不整。18は1孔をもつ有孔円盤で、褐色を帯びる石材を選別したようである。正円とはならない。19は2孔をもつ緑色片岩製円盤で、平面形状・厚さとも不整となるが全体が滑らかとなっている。

20は片岩製、21は頁岩製石庖丁片で、21は背が丸くなる。22は小豆色となる立岩産石庖丁で、身が厚い。背はしっかりと研磨され、刃部は使用のためか甘くなっている。23は粘板岩製のようだが、これは表面の風化が進む。

24～27は砥石。24は砂岩製、4面がよく使用される。25も砂岩製で、通常のいわゆる砥石とは趣が異なるが、破面を除いて滑らかとなっている。26は緑色片岩製の砥石で、鋭い細線が多く残る。上端及び右面もよく使用されるが、左側面は未使用である。27は粘板岩製の小片。28は安山岩の自然礫の両端を打ち欠いた石錘。重量は146 g。29は姫島産黒曜石。

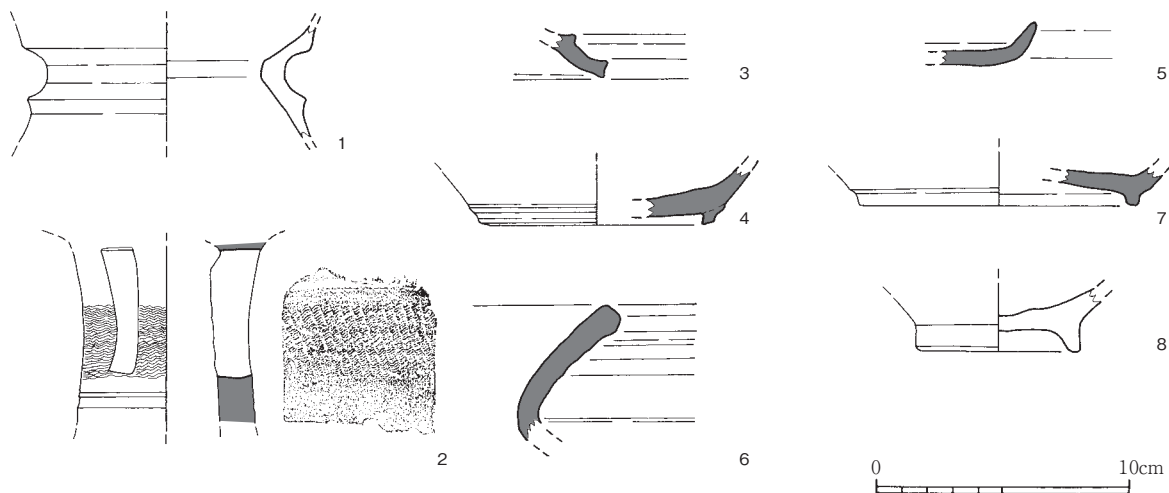
I - 2区包含層の出土遺物

202号建物跡の南西、段落ちとの間にあるシミ状の落ち込みを調査時はSX2と称したが、報告に当たって改める。幅2m、長さ6mほどで、深さは最大で0.4mを測る。

出土遺物

土器等（第151図） 1は山陰系鼓形器台の1/4の残片で、上方の突帯は甘く、下位の突帯がシャープとなる。胎土に特異な点はない。

2～7は須恵器。2は器台脚部上端付近の小片で、両側面に長方形透孔が穿たれ、その配置は三方のようである。細かな櫛描波状文を三段ほど連続して刻むが、整美といったものではない。残存する文様帯の上方は丁寧な横撫で、下位にはごく甘い凹線が1条残る。胎土・作りは良好である。3は脚部小片で、脚端面及び断面三角突帯の側面が焼成時に黒色化、そのほかの外面は一旦被った灰が飛んで、部分的に灰黄褐色の自然釉が付着する。これも胎土・作りともに良好である。4は小振りの高台が底部外縁に付く杯で、焼成が甘く灰白色となって器表が荒れる。5は浅い皿の小片。6は胎土・作りともに良好な甕の小片。7は焼成不良で灰白色となる杯身小片。8は貼付高台をもつ土師器碗底部で、図示部は完周。



第151図 I - 2区包含層出土土器等実測図 (1/3)

I-3区包含層の出土遺物

I-3区も本来低位となる南西部は厚く包含層が覆っていて、重機を使用して再掘削したことは以前記した。それでもなお、遺構の検出は困難で、さらに人力で掘り下げる際に出土した遺物である。

出土遺物

土器等 (第152図) ここで紹介する土器は、1~4が「312号土坑北側」、5~7が「I-3区南西部」の包含層から出土したものである。

1は灰黄褐色となる二重口縁壺の小片。2は大きくC字形に外反する甕の口縁部小片で、外面に煤が付着する。3は砲弾形となる鉢で、外面は叩き、内面は細かい刷毛目で仕上げる。胎土・作りは良好である。4は細部がシャープに作られた須恵器杯蓋で、これも胎土・作りは良好。

5は小型器台の脚部で、胎土・作りともに良好である。脚内面は灰黄褐色であるが、外面は灰黒色となる部分が多く、受け部内面も含めて黒色化されていたものと思われる。6は器表・器肉が灰黄色となる摺鉢口縁部片で、胎土は精良。陶器質に焼き上がる。7は土師質の土玉で、重量は10.1g。一部欠損し、表面が荒れている。

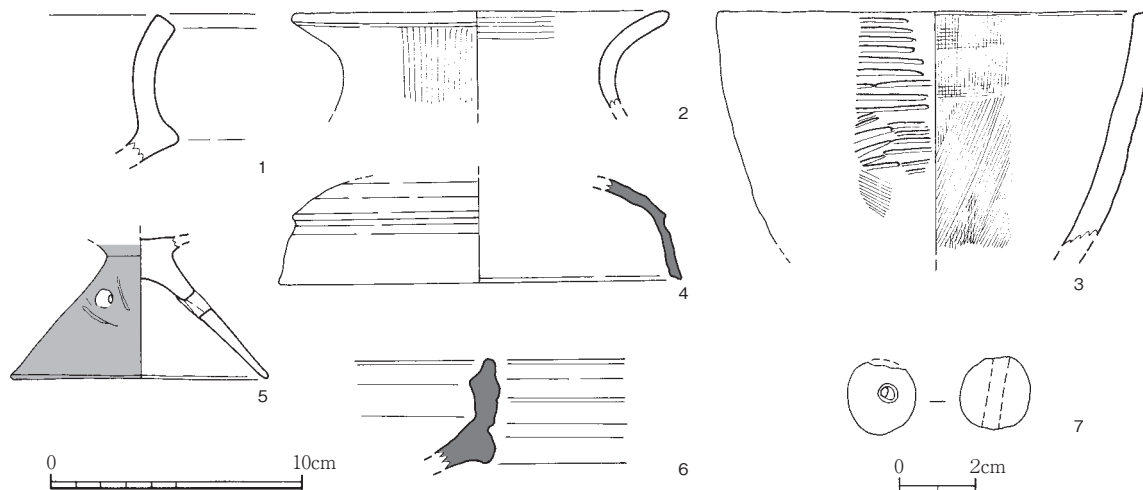
石製品 (図版64、第155図1~7) 1はサヌカイト製の打製石鏃。剥離は浅く、幅広い。全長3.4cm、重量は2.9g。2は緑色片岩製磨製石斧の頭部である。部分的に研磨するが、成形時の剥離痕が残る。3は粘板岩製の石庖丁で、背面はすべて剥離する。4は緑色片岩の破片で、打製石斧であろうか。5は灰緑色となる滑石製模造鏡で、正円となり鈕が突出、孔の形状も整う。ごく丁寧に作られている。直径3.0cm、高さ1.3cmである。6は砂岩製の紡錘車で、一部を欠く。直径4.7cm、高さ1.3cm、重量は35.2gである。7は片岩を用いた砥石で、図右側面が非常に滑らかとなり、表面も凸部が滑らかとなっている。表面左下に連続する擦痕が見える。

I-4区包含層の出土遺物

I-4区では大まかに401号溝を境にその西側及び調査区南端付近で山崎川に至る間に遺物包含層が形成されていた。調査区南端では集積した土器群が検出されて祭祀行為が行われたことを窺わせたことから別途記述する。

出土遺物

土器等 (図版65、第153・154図) 第153図の土器群は「410号土坑西包含層」、第154図の土器群は401号土坑付近から北、3区南西部で一部発掘した付近までの遺構に伴わない土器群である。



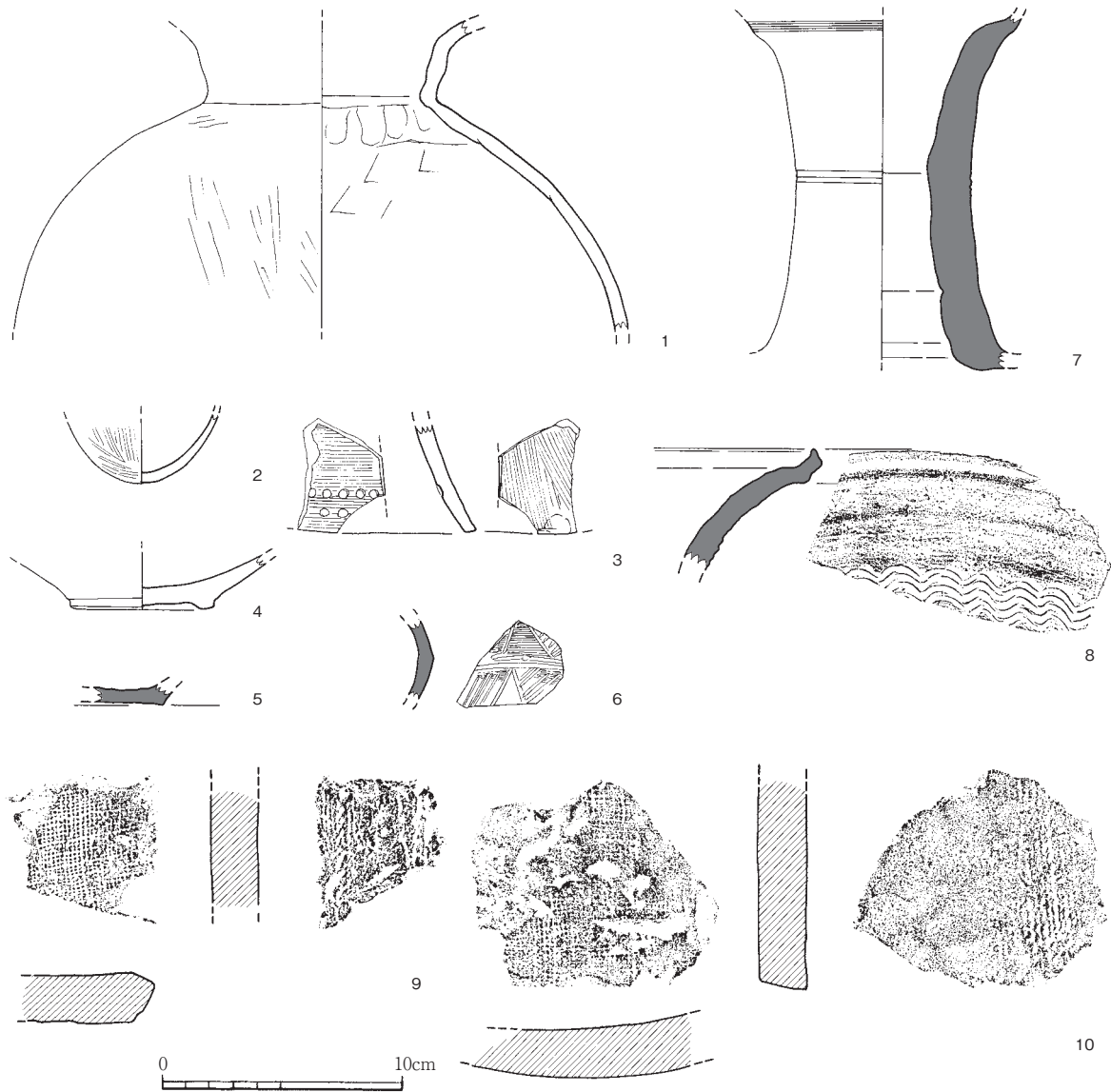
第152図 I-3区包含層出土土器等実測図 (1/3)

第153図1は二重口縁壺の体部片で、頸部は完周。体部外面は刷毛目の後に篋磨きを施し、内面は弱い刷毛目のようである。黄白色～灰白色に焼き上がる。2は小型土器の底部片。胎土・作りとも良好。3は異形の土器である。高杯脚部のような形状であるが、残存部片側に透孔が穿たれ、図で内面とした面に円形のスタンプが二段に押されている。胎土は精良、刷毛目で丁寧に調整される。赤味帯びる灰白色に焼かれている。

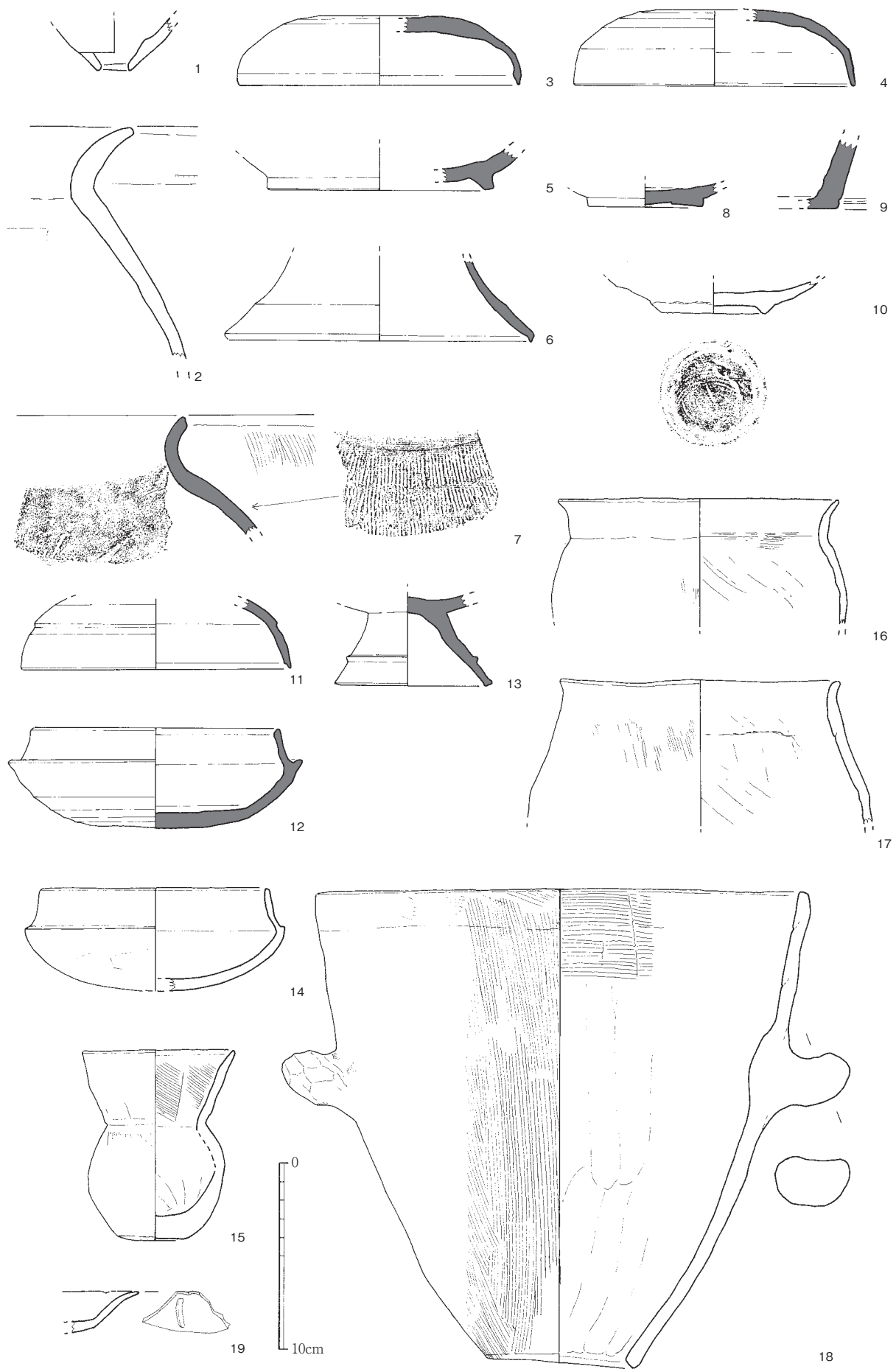
4は土師器高台付碗で、形状がしっかりした低い高台がつく。胎土・作りともに良好で、灰白色～黄白色に焼き上がる。なお、外底面には回転糸切り痕が見える。

5は緑釉陶器で、内底面に釉が垂れていることから瓶子形となろうか。底部外周をわずかに突出させる。胎土は灰白色陶器質で、精良なものである。釉は光沢を失った灰緑色というような発色である。6は現物を確認できない。屈曲部の上下に複線鋸歯文を刻む陶器片である。7は灰釉陶器であろう。大型肉厚の長頸瓶で、口縁部は受け口となるようである。残存部上端の外面にカキ目が残りに、中位やや上方に1条の沈線を刻む。内面上半及び外面の大部分が光沢をもって、釉が厚くなる部分は灰緑色となる。胎土は精良といってよく、焼成時の火膨れが処々に見える。図示部はほぼ完周。8は須恵器甕で、細部はシャープに整形、文様もしっかり刻まれている。

9・10は縄目叩き・布目痕の平瓦片。

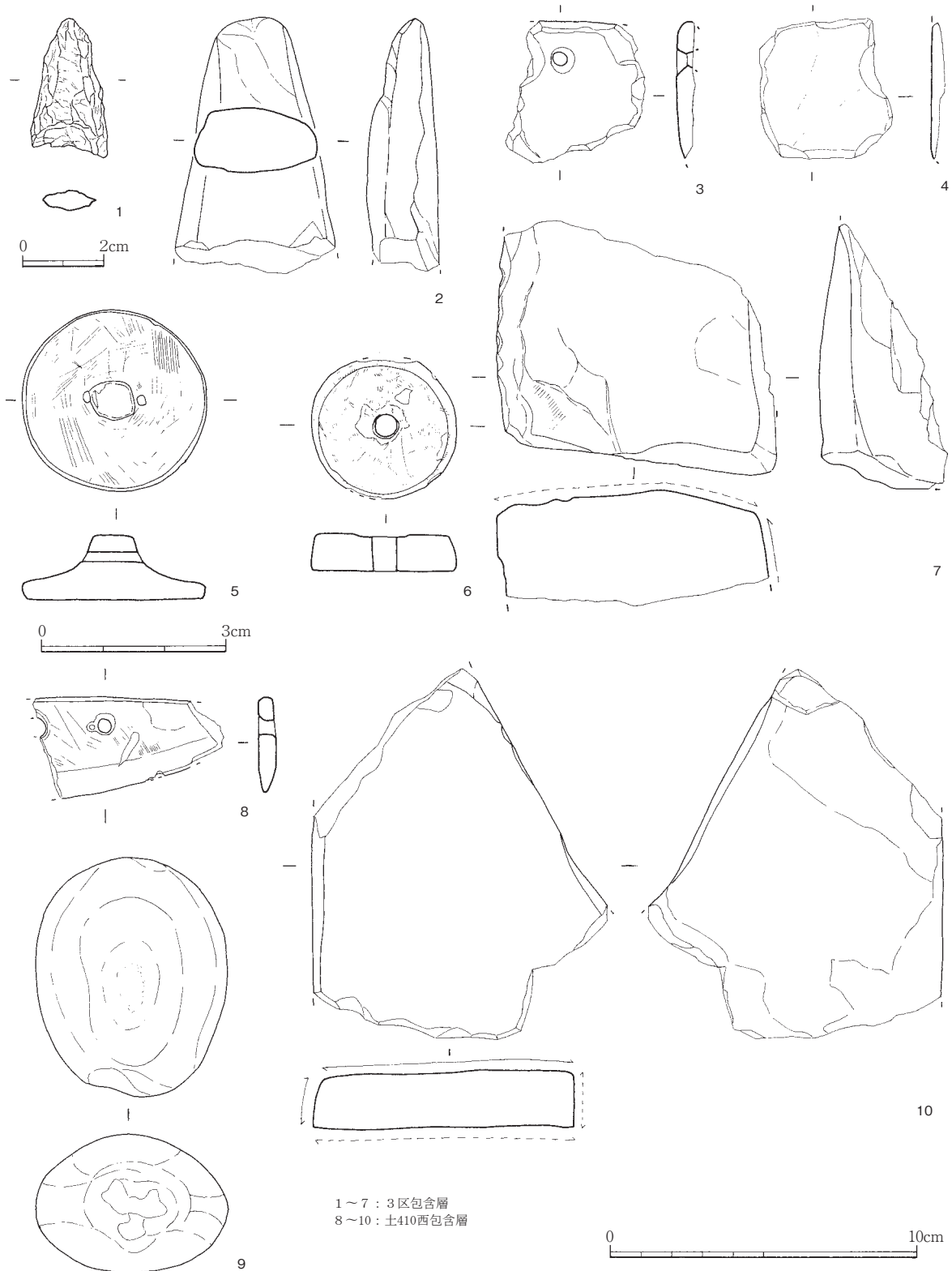


第153図 I-4区410号土坑西包含層出土土器等実測図(1/3)



第154图 I-4区北端出土土器等实测图 (1/3)

第154図1・2・10は土師器、3～6は須恵器、7は陶質土器、8・9は緑釉陶器である。1は底部に焼成前穿孔をもつ小型土器で、飯蛸壺であろう。胎土は精良とってよく、作りもこの種の土器としては丁寧である。2は器表が荒れる甕片。3は焼け歪む1/3の杯蓋片。胎土精良で調整は丁寧。天井部内面に同心円文当て具痕が微かに残る。4も焼け歪む杯蓋の1/4ほどの残片で、外面に灰を被る。5はしっかりした貼付高台をもつ杯身小片で、内面・高台内外面に灰を被る。畳付は薄く剥離するようである。6は内外全面が横撫でで仕上げられた土器。端部を小さくつまむことや、内面の調整がやや雑なことから脚部としたが、胎土精良で器壁が薄い。7は陶質土器甕片で、器肉中心付近は



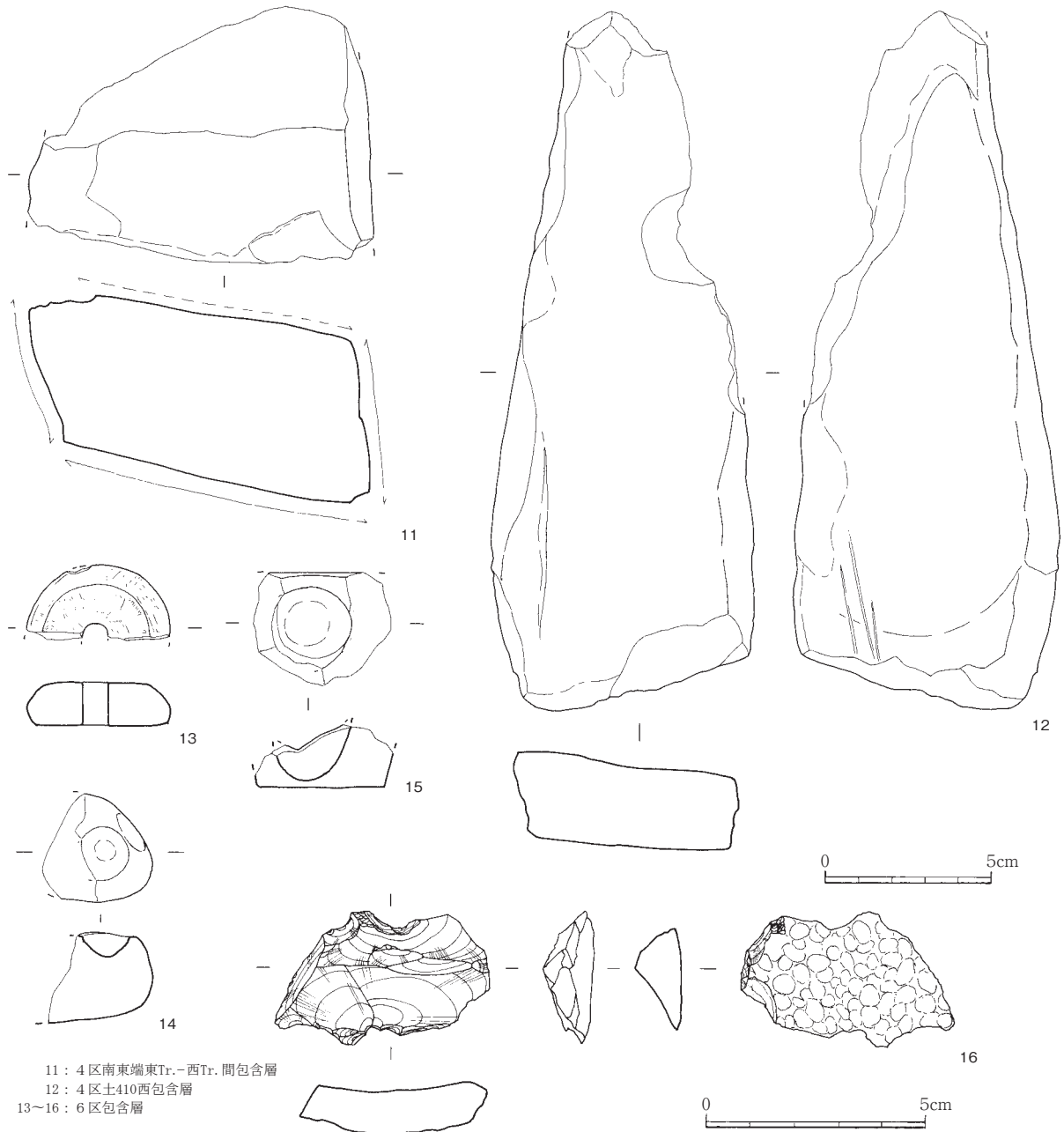
第155図 I-3・4区包含層出土石製品等実測図1 (1/1、2/3、1/2)

灰赤色、器表に近い部分から器表にかけては暗灰色となる。胎土はごく精良で生焼けに近い。頸部外面には横撫での下に斜位の刷毛目が薄く残り、横撫での下位は縦方向の細かい縄蓆文叩きを行った後に幅狭い横位の撫で痕が1.5cmの間隔を置いて2条残る。内面は丁寧に撫でるようである。

8は須恵質の椀で、胎土はごく精良。蛇目高台をもち、全面に施釉して光沢は残るが釉はほとんどが落色する。1/4弱の小片。9は器肉が灰白色となるが、土師質というよりは陶器質とするほうが妥当であろう。胎土は精良、「べったりと塗られた」釉は外面では灰味帯びる黄緑色、内面では緑味が減じている。総釉である。

10は高台付椀の底部で、貼付高台は完周する。高台は断面三角形であるが、細部が甘く、シャープさを欠く。体部は浅く開くようである。器表は灰白色で、内面が部分的に黒色化する。見込付近が非常に滑らかとなっているのであるいは硯として使用しているかも知れない。胎土精良。

11~13は須恵器。11は1/3が残存する杯蓋で、天井・口縁部界にしっかりした凹みを付け、口縁部内面にも段を付す。作りは雑とってよく、焼成は甘い。12は1/3が残存する杯身。口端部に内傾する面をもち、そこに不連続な細い沈線が刻まれていて、段を意識したものであろう。これは丁寧に



11：4区南東端東Tr.-西Tr. 間包含層
 12：4区土410西包含層
 13~16：6区包含層

第156図 I-4・6区包含層出土石製品等実測図1 (1/2、2/3)



第157図 I-4区南東端付近遺物出土状態・土層実測図 (1/100、1/60、1/30)

作られている。13は短脚の高杯で、突帯以上はほぼ完周する。直線的に短く開く脚部の下位に小さくシャープな突帯を巡らせ、突帯以上はカキ目のように見える粗い横撫で、以下は丁寧に横撫でしている。胎土は良好といってよい。

14は須恵器杯身を模倣したもので、1/3が残存、赤く焼き上がる。器表が荒れて細部は不明であるが、外底面に篋削り痕が見える。15は口縁部の一部を欠くほかは完存する小型壺。体部外面上半と口縁部内面に刷毛目が、口端部付近の内外面及び頸部外面に横撫でが使用される他はほぼ手捏ねといってよい。平底、肉厚となる。16は内外全面が灰黒色となる甕小片、17は口縁部の外反が弱い雑な作りの土器である。18は体部下端付近の一部を欠くが大部分が残存する甌で、内外の器表も遺存度がよい。

19は越州窯系青磁の小椀あるいは皿片。灰緑色の光沢の弱い釉が掛かり、口縁部下に幅4mmの広く浅い縦位の線刻がある。線刻に合わせて口縁部に刻みを入れて輪花とする。

石製品 (図版64、第155図8~10・156図11・12) 8は粘板岩を使用した石庖丁。右側の孔の脇に中止した穿孔の痕がある。丁寧に作られた感がある。9は全体が比較的滑らかとなっている花崗岩で、図下端に敲打痕と思われる痕がある。

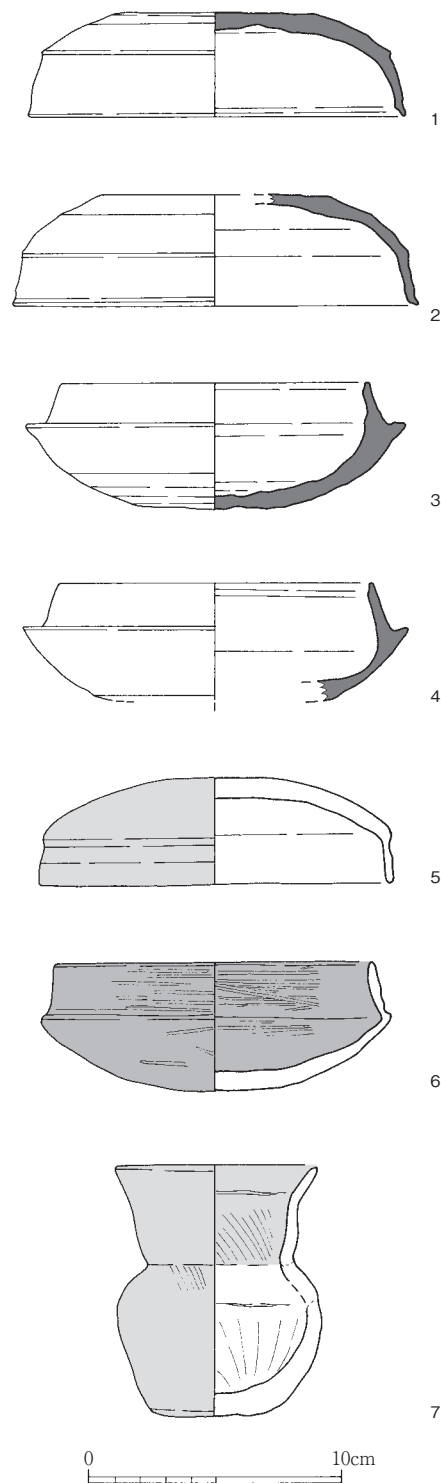
10は砂岩を用いた砥石で、左に示した図の表面及び左側面が非常に滑らかになっていて、背面及び右上側面は部分的に使用されている。

第156図12は緑色片岩の砥石で、表裏両面が非常によく磨られている。左図の左側面も若干の使用が認められる。

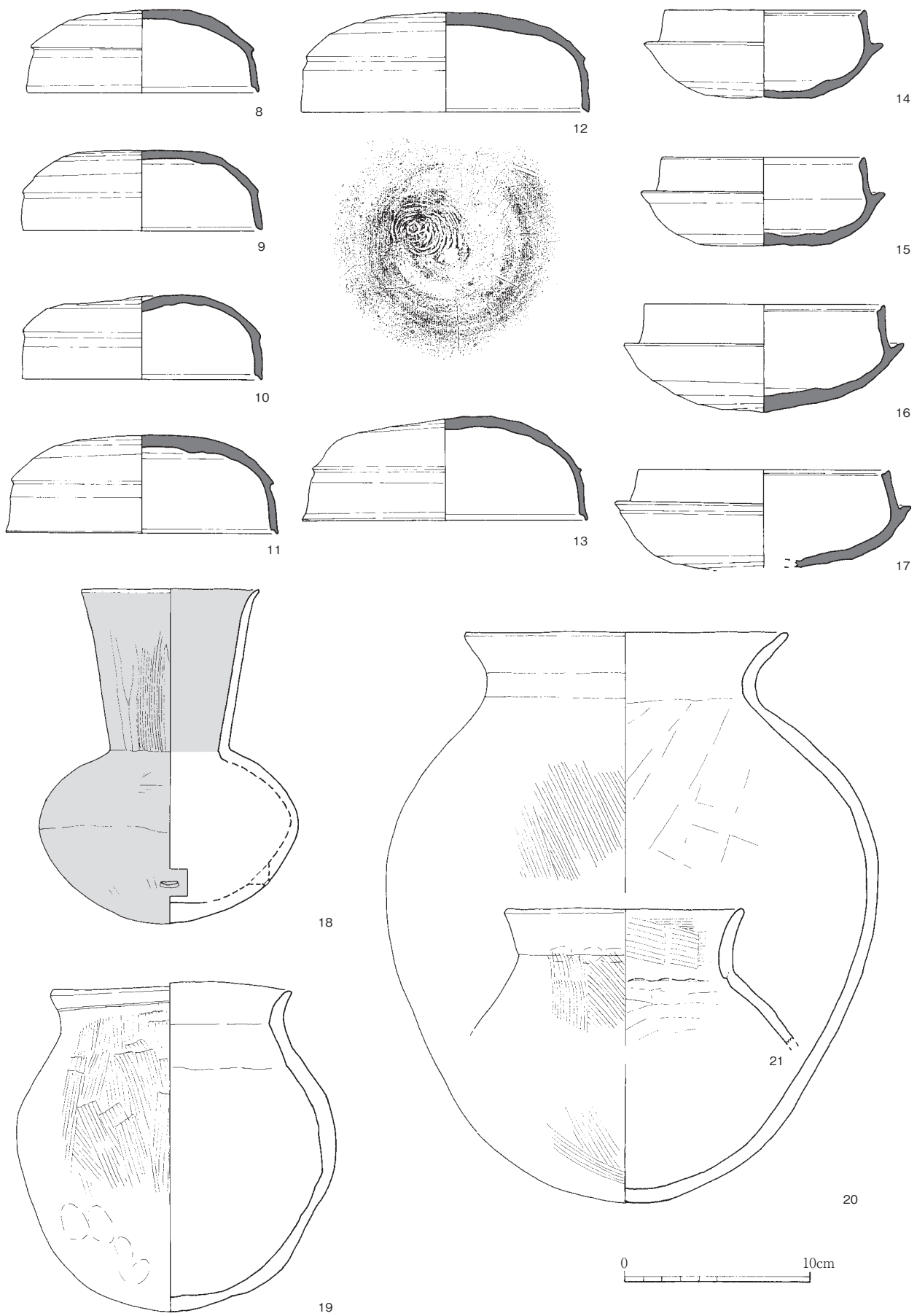
I - 4区南端包含層の出土遺物

調査区最南端、I - 4区南端では402号溝の南に包含層が形成されていて、当初南東端に3本のトレンチを設定したところ、東トレンチで予想外に多くの土器が一部は置かれたような状態で出土したために、東Tr.及び西Tr.間を面的に発掘してさらに多くの土器を得た。また、この時の調査ではさらに西側に西2Tr.も設定、東側ほど土器が出土しなかったことから、西Tr.以西の拡張は行っていない。南東端調査区では402号溝の検出面でほぼ水平に表土を掘削している。一部面的に発掘した箇所では、不整形の凹凸が無秩序に現れたが、その地山は還元されて青味を帯びた阿蘇4灰白色土である。この凹凸の顕著な地形の辺りでは土層も複雑となっているが、その南側はさらに落ちていき、そこで地山の確認を断念した。この辺りでは土層は単調となる。東Tr.東壁の土層図を示したが、鍵となるような層は見いだせなかった。

また、この調査区の西側は用地取得が遅れたことから、東半と別個に調査を行った。この部分を「南西端」調査区とした。



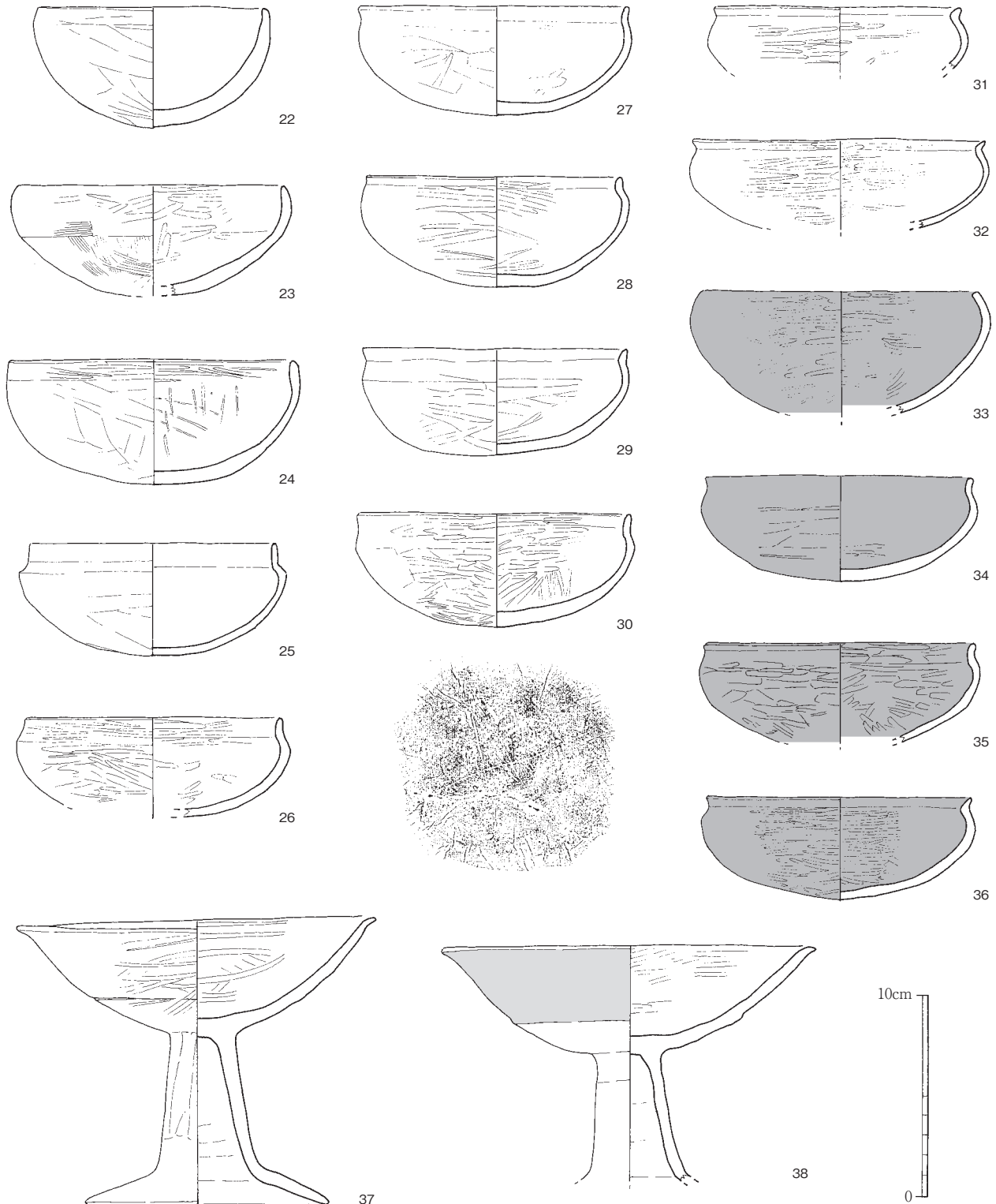
第158図 I - 4区南東端出土土器等実測図1: 東Tr.1 (上層番号付)
(1/3)



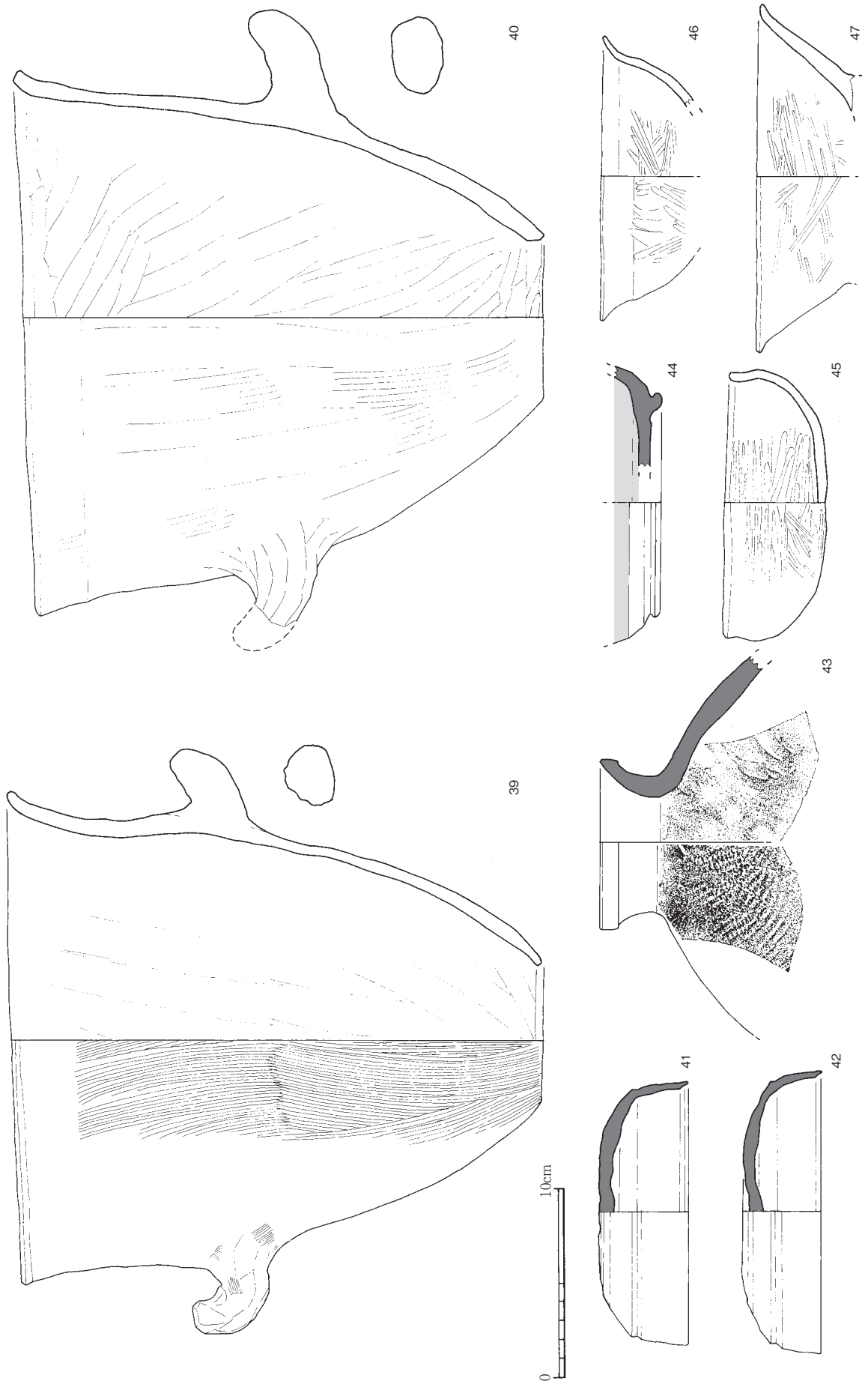
第159図 I-4区南東端出土土器等実測図2：東Tr.2（下層番号付）（1/3）

篋削りの後に篋磨きを施すが、外面の篋磨きは疎で、内面は密である。これもやや肉厚となる。25～32はいずれも赤味をもって焼き上がる非常に精製された土器である。34～36も含めて、口縁部を小さく外反させるものも多く、体部外面を篋削りの後に篋磨き、内面は密に篋磨きを行って仕上げるなど共通点が多い。25は口縁部がしっかりと作り出されるもので、完存。体部外面は篋削り痕が残るが、篋磨きは見えない。30は外底面に細線で篋記号が刻まれる。33～36は内外面を黒色化する椀で、それぞれ形態・調整技法は赤く焼き上がる椀と共通する。

37はほぼ完存する高杯で、杯部中位に甘い沈線を刻んで境とするが、完周しない。これも椀と同



第160図 I-4区南東端出土土器等実測図3：東Tr.3（下層番号付2）（1/3）

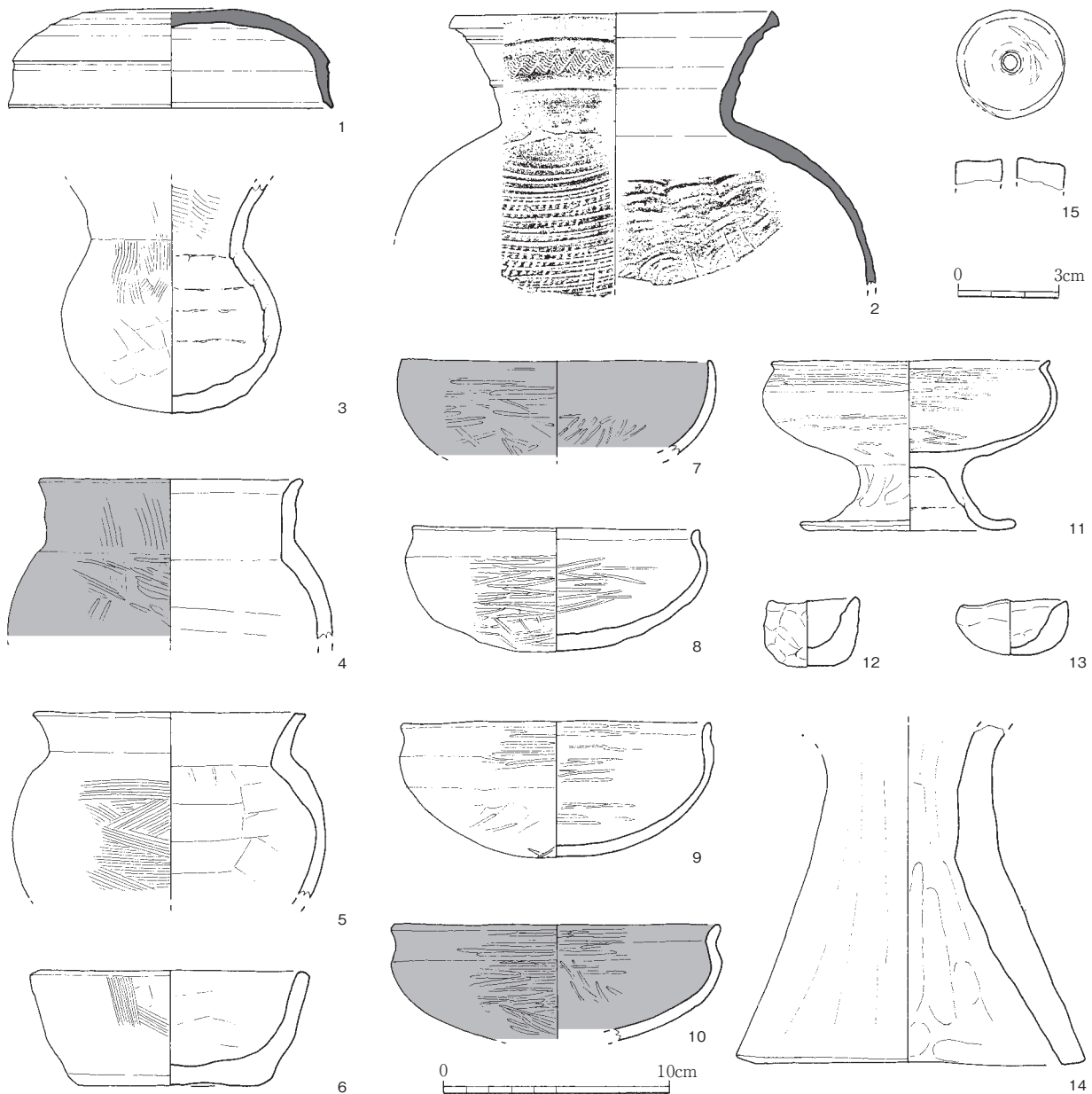


第161図 I-4区南東端出土土器等実測図4：東Tr.4（下層番号付3・土層注記なし）（1/3）

様、胎土・作りともに良好で赤味をもって焼き上がる。ただ、脚部の調整は雑となる。38も37に似た高杯であるが、杯部上半の外面にのみ赤色顔料が施されたようである。

39・40はほぼ完存する甑。39は体部が小さく膨らみ、口縁部がやはり小さく外反して丸く終わる。調整は丁寧。40は体部の膨らみがほとんどなく、口縁部のみを小さく外反させて、これは端部を断面方形とする。使用していないのではないかとさせるほど内面の遺存状態がよい。

土層注記のない土器（第161図） 41~44は須恵器。41・42はいずれも胎土精良、丁寧に作られた杯蓋でそれぞれ1/3・1/4が残存する。43は須恵器壺。外面の叩きの傾きに違和感を覚えるのだが、内面を見ると成形時の横撫での方向に対して口頸部が斜めに配置されているので、極論すれば横瓶が体部中央部に口頸部を取り付けるように、この壺は体部中位と成形時の底部あるいは口縁部の中間辺りに口頸部を付したものであると思われる。胎土は精良といってよく、また明るい灰色をしている。頸部外面の全面、その他の部位では部分的に灰を被って灰緑色となる。搬入土器であろう。44は1/4弱が残存する須恵器杯身である。胎土は良好で、焼成は甘い。これは内外面に赤色顔料が見られ、簡易な調査では鉄が検出されたことからベンガラが塗布されていたことは確実である。



第162図 I-4区南東端出土土器等実測図5：東Tr.-西Tr.間包含層（1/3、1/2）

45は浅い半球形の底部・体部をもち、口縁部が内傾しつつわずかに外彎する椀で、体部外面では底部付近で篋削りの痕跡が観察できる。仕上げは全面に篋磨きを施す。46は口縁部の外反が大きいので高杯であろう。47はやや肉厚の高杯片で、下端は擬口縁となる。この3点はいずれも胎土精良で篋磨きを多用するなど丁寧に作られていて、赤味強く焼き上がるなどよく似た土器である。

南東端東Tr.―西Tr.間（図版67、第162図） 1・2が須恵器、そのほかは土師器あるいは弥生土器である。

1は胎土・作りともに良好な杯蓋で、外面は全体に灰を被る。2は口縁部を小さく断面三角形に肥厚させ、頸部に2条の小振りの突帯を付して文様帯を画する壺。文様は整った櫛描波状文である。体部外面の叩きはシャープで、内面は同心円文当て具痕を撫で消す意識が窺える。胎土は決して精良なものではないが、器壁が薄く作りのよい土器である。

3は口縁部を欠く小型肉厚の壺で、頸部は高く伸びる。体部外面下位は篋削りで仕上げ、内面には粘土継ぎ目がよく残る。体部は完存し、一部が赤変する。4は頸部が直立し、口縁部を小さく外反させる壺で、これも肉厚となる。体部外面は篋磨きで仕上げ、全体に黒色顔料を施すようである。1/3が残存。5は小型甕で、口縁部は強く外反、端部に面を作る。肩部以下が煤ける。6は篋削りを行って平底とする皿状の土器で、1/3が残存する。内外面ともに細密な弱い刷毛目あるいは撫でで仕上げる。肉厚となるが、胎土は精良といってよい。

7～10は椀。7は体部が内彎し、口縁部に変化を加えないもので、胎土・作りともに良好である。器肉の芯が灰白色、器表近くが黒色となるが、内外面全体に黒色顔料を塗布して真っ黒とする。8～10は口縁部を小さく外反させる形の椀である。8は外面が部分的に黒くなるが、内面には見えないので黒色化したと断定はできない。9は外面が灰白色～黄白色、内面が灰赤褐色となる。これはやや深くなり、外底面に篋記号が刻まれる。10は内外面の大部分が灰黒色となっていて、黒色化したようである。器肉は灰赤褐色である。

11は高杯とするよりは脚付椀と呼ぶほうが相応しい。椀と同様に胎土・作りともに良好な土器であるが、椀の外面に篋削りは見えない。脚部は完存、口縁部の1/4が残存する。

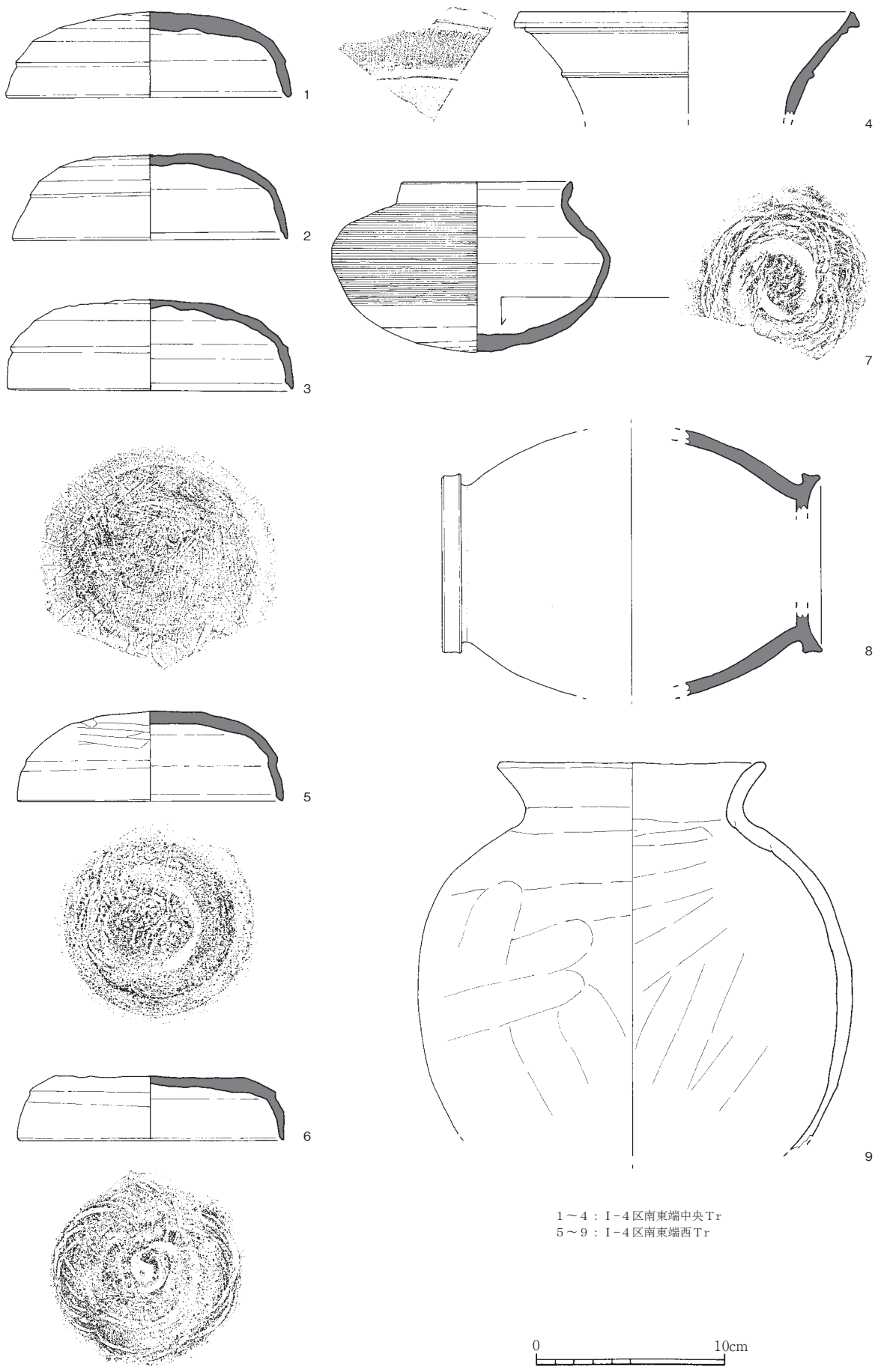
12・13はいずれも胎土良好な手捏ね土器で、12は外面にシワが多く残る。13は口縁部が楕円形に近い。

14は外面が煤け、内面に変色が見られない器台である。

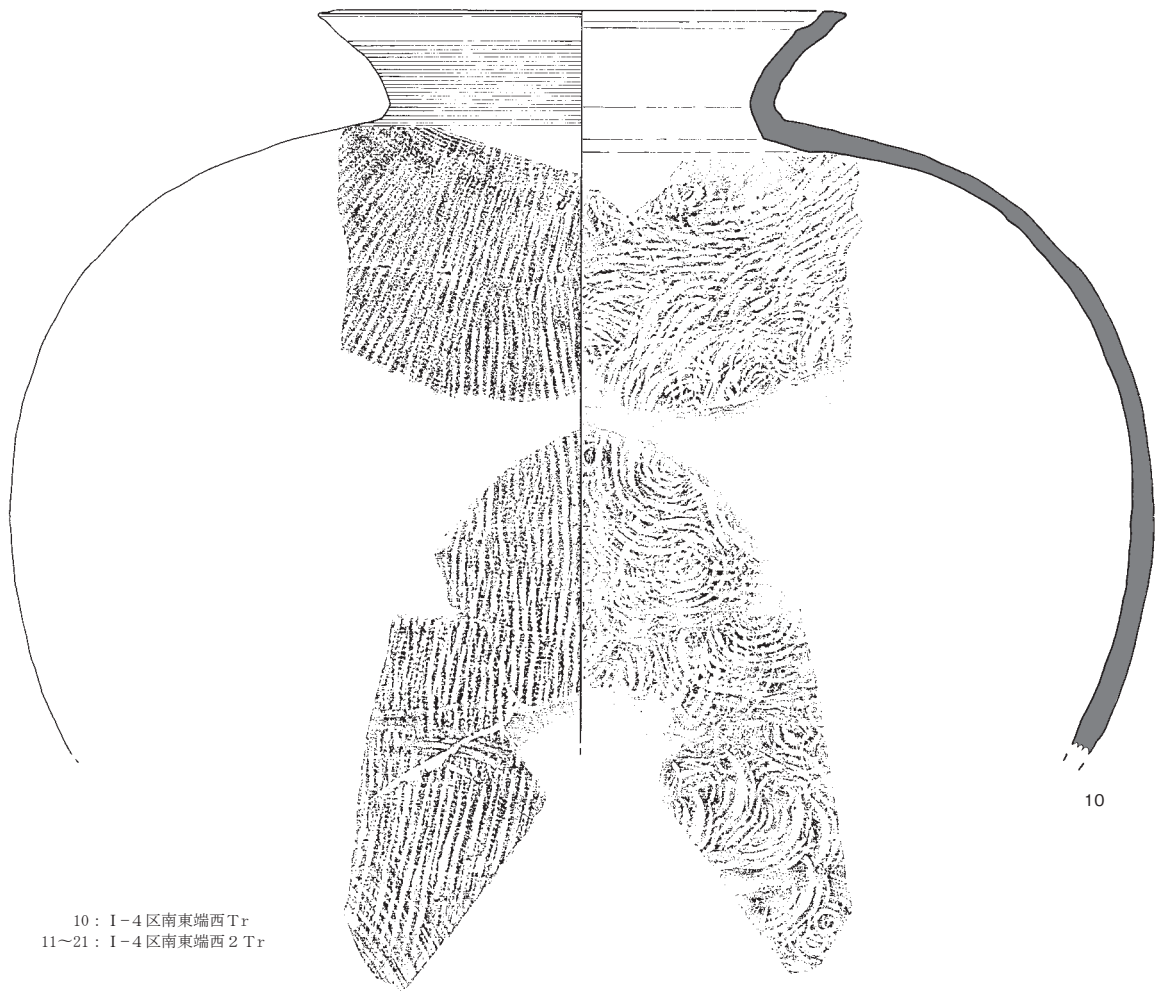
15は直径3.2cm、重量9.1gの円盤形の土製紡錘車。

南東端中央Tr.（図版68、第163図1～4） 「中央Tr.」は誤記のようで、存在しない。西Tr.のとか。図示した土器はいずれも須恵器。1～3はいずれも口径14～15cmの杯蓋で、1は雑な作りで、2とともに内面全体に灰を被る。3は丁寧に作られていて、これは天井部内面に同心円文当て具痕が残る。4は胎土が良好と言い難いが丁寧に作られた壺で、口縁部を断面三角形に肥厚、2条の繊細な突帯で文様帯を画すなど東Tr.―西Tr.間出土の壺に似る。文様も繊細である。

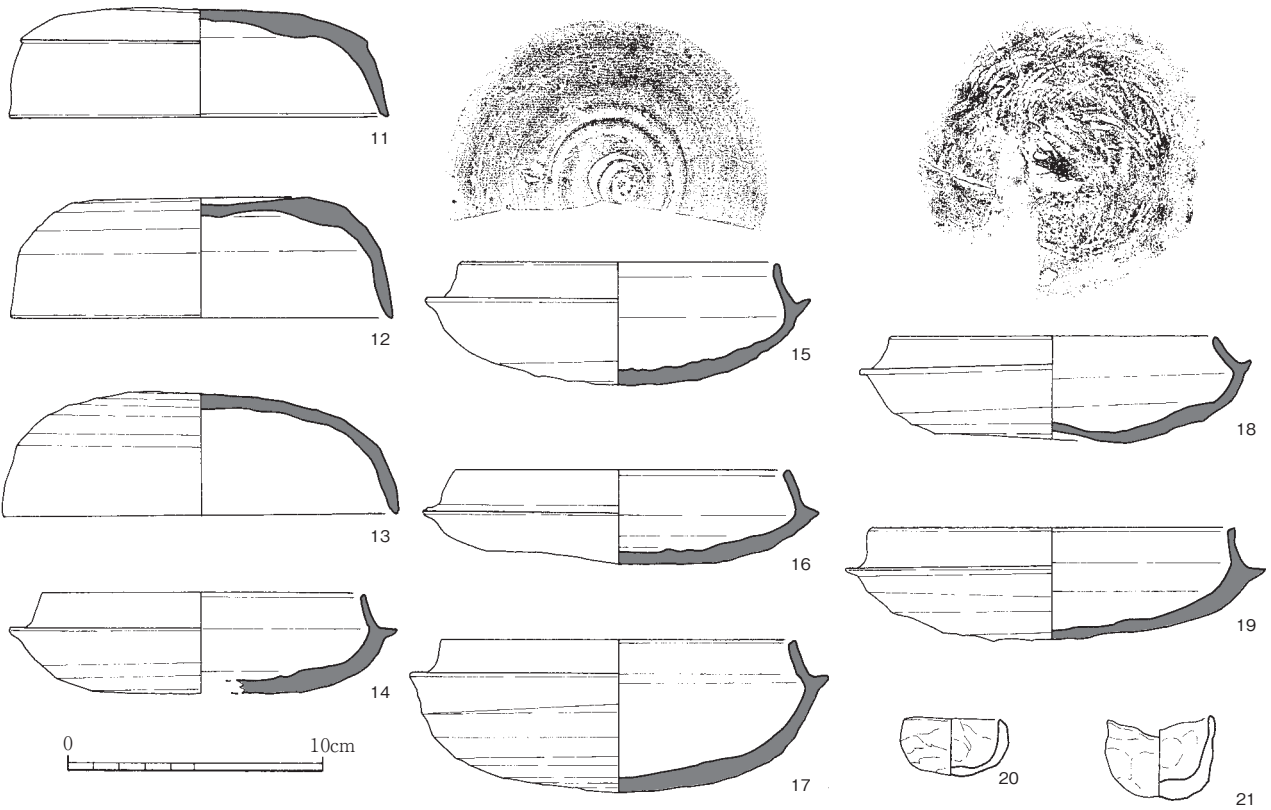
南東端西Tr.（図版68、第163図5～9・164図10） 第163図5～8・第164図10は須恵器。5は天井部が完周、口縁部の1/2を欠く杯蓋で、天井部・口縁部界は屈曲で表現するが不整である。天井部外面は丁寧に不定方向の篋削りで仕上げ、同内面には広く同心円文当て具痕が残る。6は1/2が残存。天井部が扁平となり、内面には全面に当て具痕が刻される。作りは雑である。7は焼歪む短頸壺で、胎土・作りは丁寧に作られている。体部外面は底部付近を丁寧に回転篋削りで、それ以上を細密なカキ目で覆う。また、内底面には同心円文当て具痕が残る。8は胎土精良、内外面ともにごく丁寧に横撫で調整された樽形臚片で、文様はない。



第163図 I-4区南東端出土土器等実測図6：中央Tr・西Tr. (1/3)



10 : I-4区南東端西Tr
11~21 : I-4区南東端西2Tr

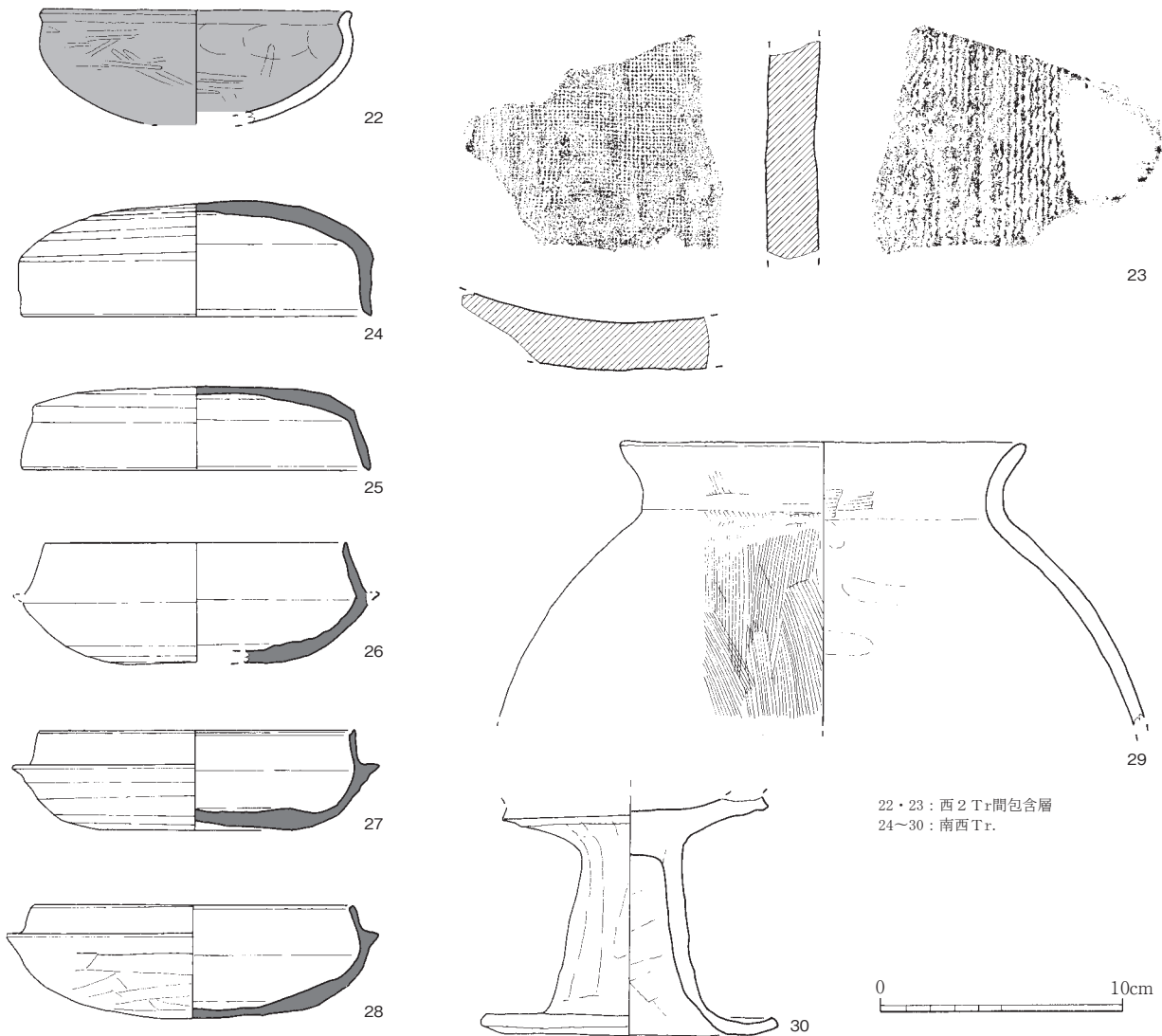


第164図 I-4区南東端出土土器等実測図7：西Tr.2・西2Tr. (1/3)

9は口縁部が完周する土師器甕で、器表が荒れる。体部外面は刷毛目も砂粒の移動も見えないが、原体の幅が確認できるので、ごく弱い、浅い刷毛目であったと思われる。外面に煤、内面に焦げが付着。

10は口縁部を小さな受け口とする甕で、胎土・調整ともに良好。

南東端西2Tr. (図版68、第164図11~21) 11~19は須恵器、20・21は手捏ねのミニチュアである。11は口端部の1/3を欠くほかは完存、器肉が厚い。天井部外面は回転篋削りの後に「草茎」様のもの不定方向に擦過するようである。12・13は天井部から口縁部にかけて丸く移行し、口端部も丸く終わる。12は天井部が完周、口縁部は1/2が残存し、肉厚で焼成が甘い。天井部外面は雑な篋削り、内面は丁寧に横撫でされる。13も焼成が甘く、器表が荒れている。これも天井部は完周、篋削りは雑である。14は受け部付近が1/2残存、底部の篋削りは雑である。内底面には当て具痕が残る。15は口縁部付近の2/3が残存、黒色粒が目立つ。これはとても丁寧に調整されていて、内面に当て具痕が残る。16はほぼ完存する底部の浅い杯身で、内面は丁寧に横撫でを施す。外面には回転篋削りが見えず、一部に篋削りあるいは篋磨きのような痕跡があるものの、不定方向の撫でを主体として仕上げる。17は16と口径がほとんど変わらないものの、深さが大いに異なっている。外面の篋削り範囲が広く、仕上げは丁寧である。これもほぼ完存するが、焼成不良である。18は口縁部



第165図 I-4区南東端出土土器等実測図8：西Tr.-西2Tr.間包含層・南西Tr. (1/3)

の一部を欠くほかは完存する。外底面は雑な削り、内面には全面に当て具痕が残る。19も完存に近いが、口縁部の3箇所を欠いていて、意図的になされた可能性がある。作りは雑とってよい。

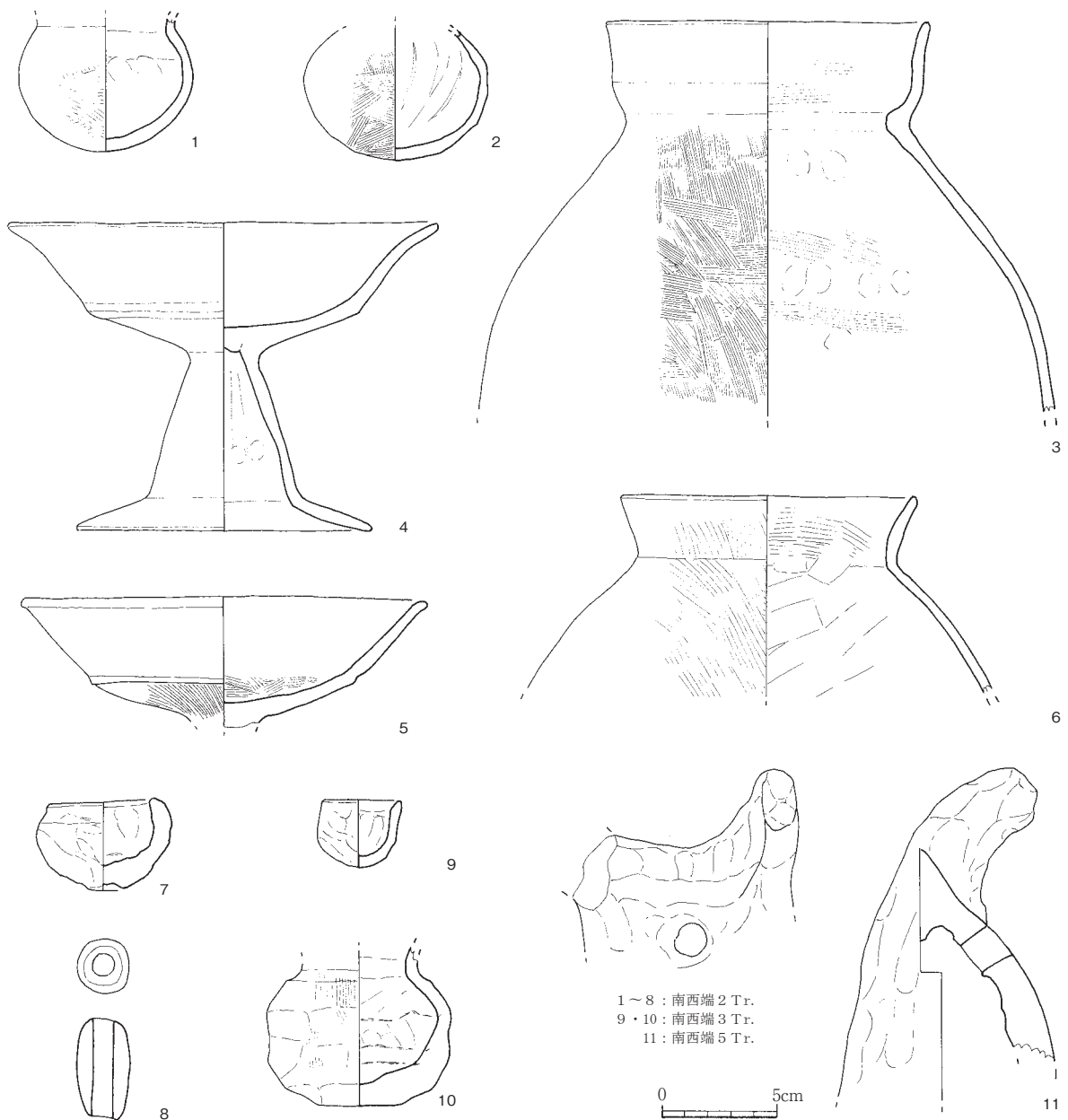
20・21は胎土良好な手捏ね土器で、20は整形も丁寧、21は歪んでいる。

南東端西Tr.-西2Tr.間（第165図22・23） 22は口縁部を小さく反転させる椀であるが、他例の多くと異なって胎土が粗い。器肉は灰赤褐色であるが内外面を黒化している。23は胎土良好な平瓦片で、他の多くと同様縄目叩きと布目痕の組み合わせである。凹面が煤ける。

南東端南西Tr.北（第165図24～30） 最終的に「南西Tr.」は存在せず、調査の過程で便宜的に西2Tr.をこのように仮称したのかも知れないが、今となつては如何ともしがたい。この注記の土器は、その北半から出土したものであろう。24～28は須恵器、29・30は土師器である。

24は口縁部の1/3を欠くのみである。天井部は回転篋削りを広い範囲に施して後、さらに一方方向に数度篋削りを行うが、仕上げは雑な感となる。内面には当て具痕が広範囲に、微かに見える。

25は24と口径が同じであるが、天井がかなり低く扁平となる完存の土器。これも天井部全体を篋



第166図 I-4区南西端出土土器等実測図1: 2Tr.・3Tr.・5Tr. (1/3)

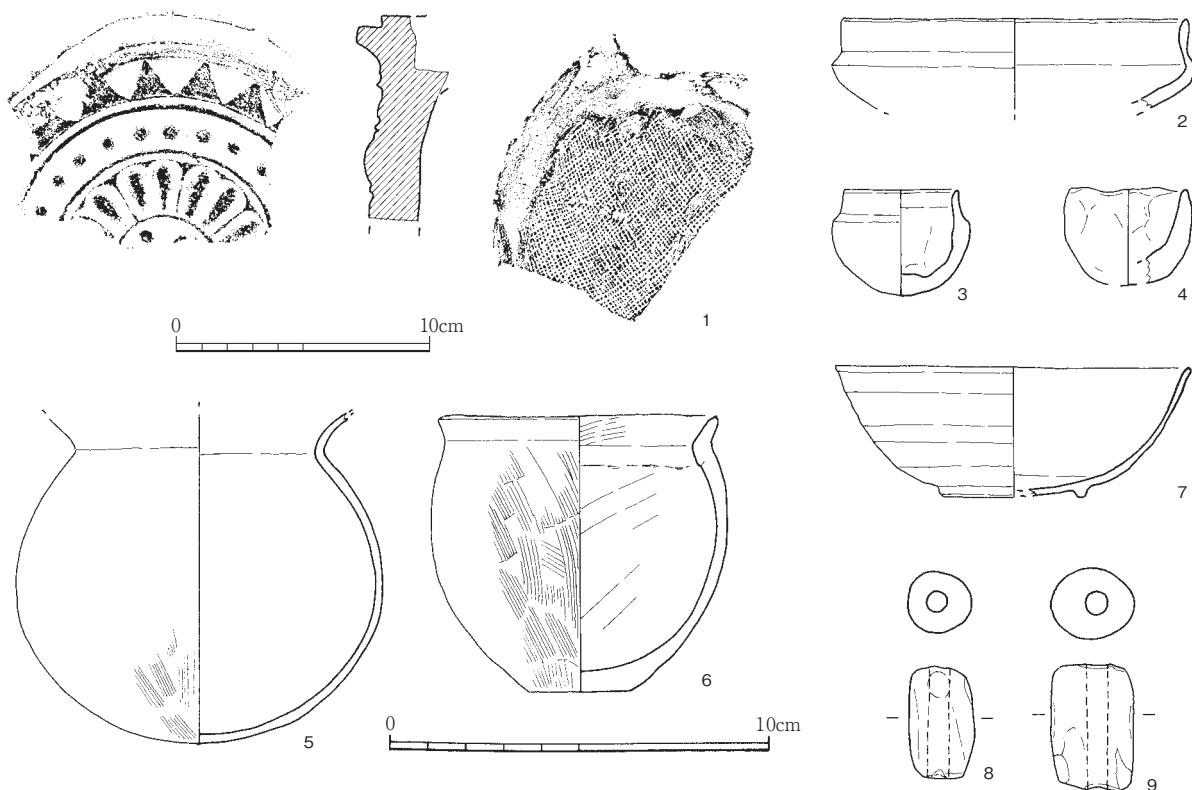
削りする点で24に似るが、丁寧になされる。胎土は粗いといってよく、焼け歪む。26は長く伸びた口縁部の1/3が残存するものの、意図的なものであろうか、受け部をすべて欠いている。外面の篋削りは丁寧に仕上がる。27は口縁部の1/4ほどを欠くほかは完存。肉厚で、雑な感の作りである。28も口縁部の一部を欠くほかは完存する。これは外底面に指頭痕が見え、不定方向の篋削りで終わる。26～28の3点の破損の状態は意図的なものを思わせる。

29は口縁部付近の1/3が残存。器表の残りがよく、体部内面は丁寧な篋削りで仕上げ、同外面には煤が付着。30は高杯片で杯屈曲部で剥離。柱状部は完周し、反り上がる脚端部は1/4が残存する。残存部は脚端部を除いて篋削りを行い、同内面は器表が弾けている。全体に雑な作りである。

南西端2Tr. (図版68、第166図1～8) 直径1m弱、深さ0.4mほどの小型土坑があり、土錘以外の遺物はすべてそこからの出土であるが、いずれも浮いた状態であった。1・2は球形の体部をもつ同様な小型壺。1は図示部が完存、体部内面に指撫で痕が見え、丁寧に作られている。2もほぼ完周する。体部内面では砂粒の移動は見えないが、工具痕が見える。これも丁寧に作られているといえよう。3は口縁部の3/4が残存。二重口縁壺といってよいが、シャープさを欠く。細かい刷毛目を多用する。4は口縁部と脚端部がそれぞれ1/4、1/3残存、杯部下半から脚裾屈曲部間は完周する。杯屈曲部から上方が焼けて真っ赤となっていて、支脚として使用されたものであるかも知れない。5は口縁部の1/3を欠き、下端は脚部から剥離している。全体に赤変するが、下半は刷毛目がよく残り、上半は横撫でで仕上げる。6は図示部がほぼ完存する甕で、口縁部は小さく外反直行する。7は手捏ね土器で完存、胎土は良好である。8は灰黒色となる管状土錘。

南西端3Tr. (第166図9・10) いずれも手捏ねミニチュア土器である。9は発掘時に破損する。10はやや大きな壺形で、肉厚となって外表のほとんどが剥離している。胎土は非常に精良で黒色となり、外表の剥離していない部分も黒色となる。部分的に刷毛目が見える。

南西端5Tr. (第166図11) 2本の角状突起をもち、突起の伸びる方向に円孔を穿つ支脚で、孔



第167図 I-4 区南西端出土土器等実測図2：包含層 (1/3、1/2)

の反対側につまみ状の突起はない。孔のある側の側面及び突起の先端付近がよく赤変する。

南西端包含層 (図版68、第167図) 1は椿市廃寺出土の軒丸瓦によく似る。外縁に陽起鋸歯文、内縁に珠文を配し、その中に8弁に復元できる複弁、そして中房に至る。胎土は良好で、灰白色～淡灰色となり、器表は燻されて灰黒色となる。瓦頭裏には布目痕がしっかり残っていて、剥離する丸瓦接合部にも布目痕が見える。

2は須恵器杯身を模倣した赤く焼き上がる土師器で、器表が荒れている。1/4の残片。3はミニチュア土器である。胎土良好で、体部・口縁部を区別して丁寧に作られている。3は通有の手捏ね土器で、これは残片のために復元図に不安がある。5は球形の体部に強く外反する口縁部をもつ土師器甕であるが、口端部はすべて欠けるようである。器表が荒れている。6は完周する平底と、1/3が残存する短い口縁部をもつ甕で、体部内面は篋削りで仕上げる。体部外面に大きな弾けがある。

7は黄白色となる土師器椀で、小振りの高台をもち、体部は内彎、口縁部が小さく外反する。体部外面下半には篋削りが、内面は全面に篋磨きが施されるようである。胎土精良、丁寧に作られている。8・9は大型の管状土錘で、それぞれ27.3・53.0gである。

石製品 (図版66、第156図11) 南東端東Tr.－西Tr.間から出土した砂岩製砥石。図示した面は中央付近がわずかに低くなっていて、その部分はあまり磨られていないが、両側面及び他の3面はよく磨られている。

1-6区包含層の出土遺物

1-6区の地形的に低い部分、南西部も包含層に覆われていた。その一部は重機で掘削したが、なお遺構の輪郭が見えずに人力で除去した包含層がある。その際の出土遺物である。

出土遺物

土器等 (第168図) 14・15が須恵器、他は土師器あるいは弥生土器である。また、1～4は「攪乱坑北東側包含層」の注記があり、37号住居跡に伴う可能性がある。そのほかは38号住居跡付近の出土である。

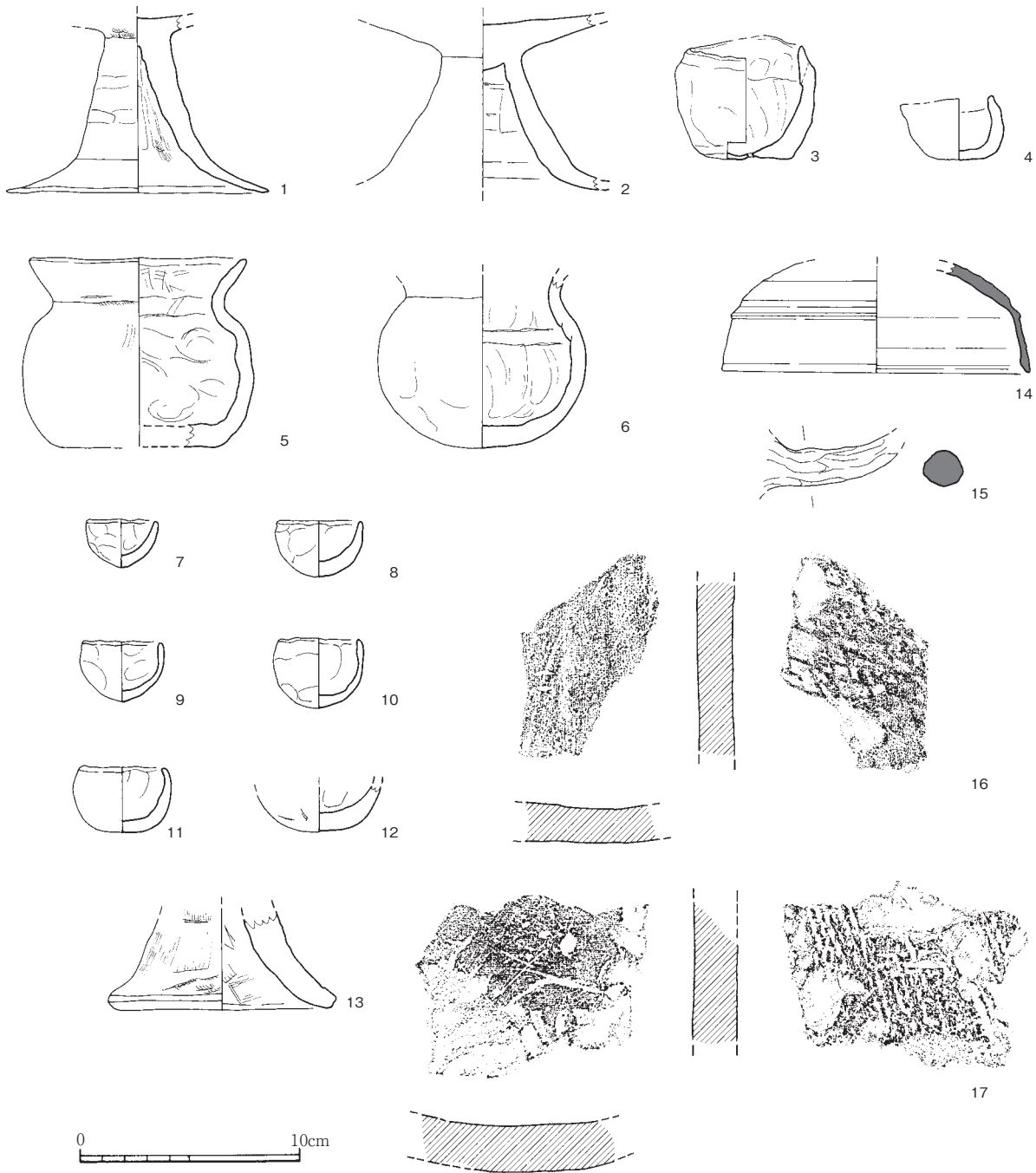
1・2は高杯。1は赤く焼き上がるもので、脚裾の3/4を欠くほかは図示部は完存。外面には手捏ね様の痕跡が残る。2は大きく開く脚部片で、これも図示部は完周。器表が荒れている。3はほぼ完存する手捏ね土器。外面は指撫でで上手く平滑化している。内面には粘土紐の継ぎ目が残り、やはり指撫でを主として用いるようである。底部に小孔が穿たれていて、内底に黒色の付着物がある。4も手捏ね土器で、胎土良好であるが大きく歪む。

5は口頸部は通有の形状であるが、底部が平底となる。器表が荒れて細部はよくわからないが、手捏ねに近い。6は図示部がほぼ完存する体部片で、これも体部外面には刷毛目など見えず、手捏ねに近いようである。7～12は手捏ねミニチュア土器、13は器台。

14は口縁部の1/4が残る杯蓋で、丁寧に作られている。15は断面円形の把手状の土器。胎土は精良といってよいが、直径5mmの石英粒が混入する。

16は斜格子叩き・布目痕の組合せの平瓦片で、胎土は良好。17は凸面に縄目叩きが見えるが、凹面に布目痕は見えない。撫で消すようである。

石製品 (図版64、第156図13～17) 13は52号竪穴住居跡の北支柱穴付近から出土したもので、住居跡に伴うものであるかも知れない。滑石製紡錘車片で、側縁が膨らみをもっている。ほぼ1/2の残片で21.5gを測る。14は砂岩の小礫に半球形の孔が見られるが、石製品と断定しかねるものがあるが、図左の破面付近が赤く焼けるようである。15も半球形に凹む鑄型状の石英斑岩。下面は研



第168図 I-6区南西包含層出土土器等実測図 (1/3)

いどのような痕跡は見えないが、ほぼ平坦な面となり、図上辺も原状を留めるようである。凹みの中は部分的に赤変あるいは煤けたようになっていて、熱を受けたものと思われる。

16は灰黒色となる針尾産黒曜石の剥片で、図上下両辺で細部加工が見られるが、背面は円形凹面が多く残る原石表面をほぼそのまま残して、石器を意図したものではないようである。

柱穴出土の主要遺物

金属製品等 (図版53・70、第56図・81図7~10) 第56図は篆書体の「元宝」部分が残るもので、字体から見て「至和元宝 (初鑄1054年)」あるいは「天聖元宝 (初鑄1023年)」と思われる。今回紹介した5点枚の中で最も銅質・鑄上がりがよい。

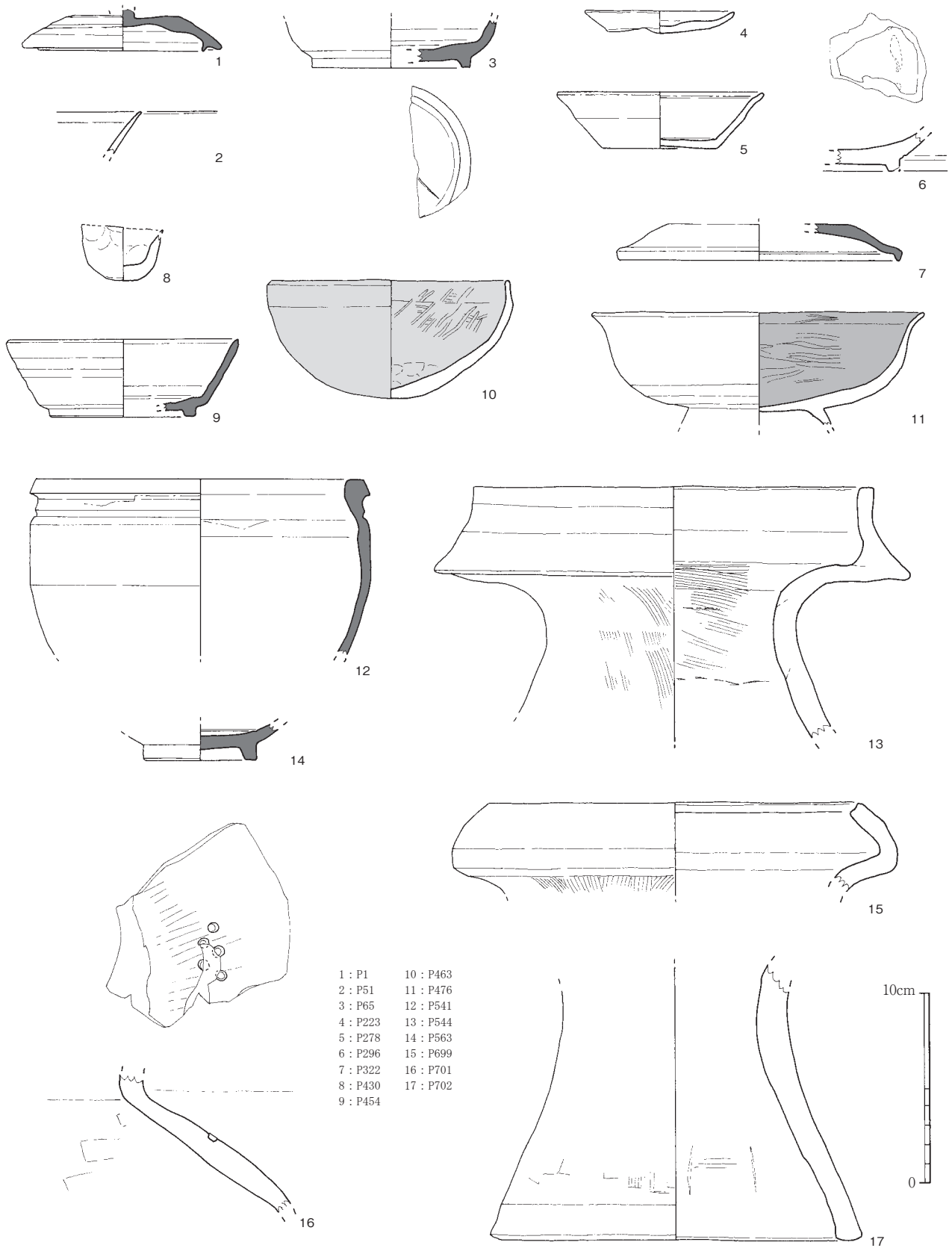
第81図7は全長3.1cmの銅製品であるが、処々に金が残っていて金銅であったようである。大きな孔が2箇所開けられる。8は1に似るがやや扁平となる。現代の金具でいえば楔のようである。9は刃部が見えることから小刀としてよい。10は一見小刀に見えるが、図左半分に刃はなく、鋒も尖らない。11は6区遺構検出時に出土した青銅製品である。図左に関状の屈曲があるが、表面のすべてが風化あるいは剥離して原状を留めていないため、断定はできない。評価できない状況であるが、特殊な遺物として紹介しておく。

土器等（図版68・69、第169～172図） 1は口縁部に小さな返りをもつ完存の須恵器杯蓋。天井部は平坦でつまみは一部欠損するようである。口径8.5cm、最大径10.6cmで外面に灰を被る。2は暗灰色不透明の釉が掛かる越州窯系青磁小片で、口縁部は小さく外反する。3は須恵器杯身底部片で1/3が残存、外底面に篋記号が残る。4は口縁部を一部欠くほかはほぼ完存する土師器小皿で、底部に大きな板状の圧痕があって、そのために大きく歪む。器表が荒れて糸切り痕は見えない。5は1/3ほどが残存する白磁口禿皿で、口縁部が小さく外反する。6は越州窯系青磁碗底部片。胎土は暗灰色の緻密なもので、畳付を除いて灰緑色の釉が掛かる。見込には長さ2cm、幅0.5cmの目痕が0.5cmの間隔を置いて並ぶ。7は須恵器杯蓋小片。8は手捏ねのミニチュア土器で、口縁部の一部を欠くほかはよく残る。手捏ねながら丁寧に作られる。9は須恵器杯身の1/4ほどの残片。体部が短い。10は鉢と呼ぶのが相応しいか。底部は小さいながら平底状となって、体部が内彎して高く立ち上がる。内面では篋削りの後に雑な篋磨きを施すが、下位には指頭痕も見える。外面の調整痕はよくわからない。最後に口縁部を強く横撫でして内側へ曲げる。内外全面を赤色塗彩するが、上面観は楕円形に近く、作りは粗雑である。胎土は良好といってよからう。11は黒色土器高台付碗で、口縁部の1/4が残存。口縁部は大きく外彎し、体部は強く内彎する。体部下半には篋削りが見えるが、全体に器表が荒れている。内面はよく黒色化し、一部口縁部外面まで黒化、その他の部位は灰黄褐色～淡灰赤褐色となる。胎土は良好といってよい。12は水指。頸部から下端のやや上位まで暗茶褐色に斑に発色する釉が掛かる。内面も頸部以下に灰緑色となる釉が掛かり、露胎部は茶褐色に発色する。とても丁寧に作られた陶器である。13は頸部が完周、口縁部も1/3ほどが残存するが器表は荒れている。14は陶器碗底部で、図示部は完周。整った高台をもち、見込に圈線を回す。胎土はとても緻密で混入はほとんどなく、灰色となる。釉は暗茶褐色の斑に発色、総釉の後に畳付のみ削り取るようである。15は弥生土器壺の袋状口縁部で、この遺跡では珍しい。16は壺の肩部片か。直径5mmほどの棒状の工具で5箇所、深く押圧する。赤味強く焼き上がり、ごく浅く疎な刷毛目を施すが、特段の違和感はない。17は器台片で、残存部の両側が赤変、黒色化する。

18は大きく開く口縁部の下端を垂下拡張して作りだした面を強く横撫でして中央に稜線を作り出し、そこに竹管文を押している。胎土などに違和感はないが、器形は外来系である。19は長胴となる甕で、器表の遺存度が非常によい。頸部の1/3が残存。20は外来の器台で、器表が非常に荒れている。図示部はほぼ完周。灰白色を呈し、3孔が配される。21は底部が完周する土師器皿あるいは杯。器表が摩滅して、調整痕はおろか口縁部の認定も困難である。胎土は非常に良好。22は肉厚の脚台で、1/2が残存するがやや歪んでいる。23は当地では異形の器台であるが、胎土等に特段の特徴は見られない。直径1～1.5cmの円孔が残存部で上下3段、1段に3箇所までが確認できる。上2段の孔間は5.5cm、下2段の孔間は7cmを測る。同一段の孔も水平に配置されず、若干の上下のずれがあるとはいえ、上段の間隔が狭くなっていることを思わせる。孔の形状は比較的整っていて、内面で孔の周囲に粘土の高まりが見られることから、成形時に外側から内側へ押し出して穿孔したようである。外面は全体に縦位の篋磨きで丁寧に調整される。24は口縁部が1/4ほど残存する壺

片。頸部下に断面三角突帯を巡らせる。25は口径39cmに復元できる壺片で、1/4ほどの残片。肩部に刻目突帯を巡らせる。

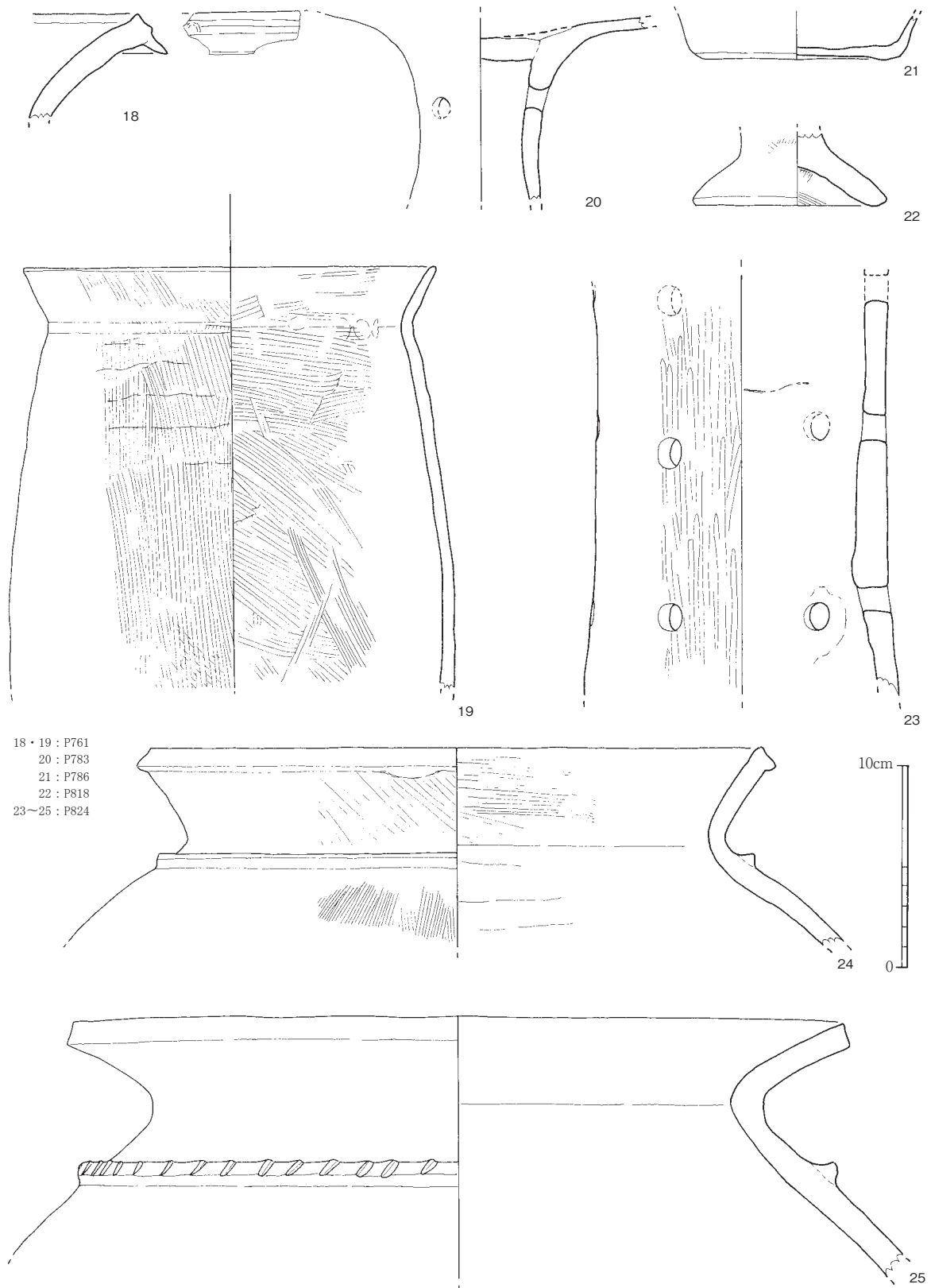
26は図示部が完周する二重口縁壺で、口縁部外面に櫛描波状文を、肩部に刷毛目原体を用いた



- | | |
|----------|-----------|
| 1 : P1 | 10 : P463 |
| 2 : P51 | 11 : P476 |
| 3 : P65 | 12 : P541 |
| 4 : P223 | 13 : P544 |
| 5 : P278 | 14 : P563 |
| 6 : P296 | 15 : P699 |
| 7 : P322 | 16 : P701 |
| 8 : P430 | 17 : P702 |
| 9 : P454 | |

第169図 柱穴出土土器実測図1 (1/3)

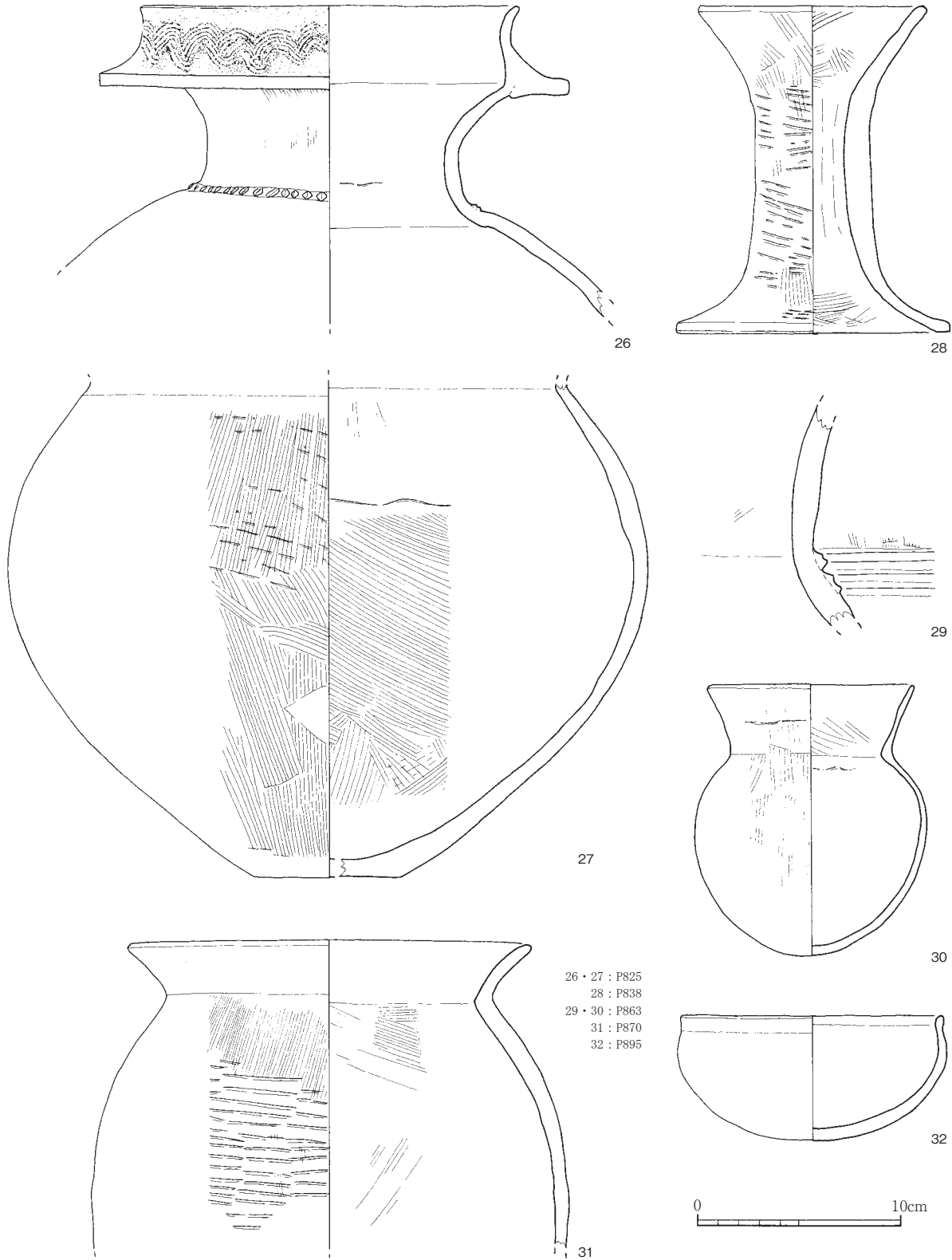
刻みを付す突帯を巡らせる。器表が非常に荒れていて、調整痕はあまり見えない。箍状突出部の貼り付けは粗雑で、半周ほどで下面に明瞭な段が残る。口縁部のごく一部が焼けて赤変する。27はしっかりした平底が1/4ほど残るが、復元径に不安がある。調整は全体に刷毛目を多用するが、外



18・19 : P761
 20 : P783
 21 : P786
 22 : P818
 23~25 : P824

第170図 柱穴出土土器実測図2 (1/3)

面では最大径部以上に叩き目が見える。28は細身の器台で縦方向に1/2ほどが残存する。器表が荒れるが、叩き痕が顕著である。29は肩部に断面M字状突帯を2条付す壺の小片で、胎土が粗い。弥生前期に遡るものであろう。30は口縁部が1/2ほど残存する小型壺で、丁寧に作られている。31は1/3が残存する甕で、体部外面は粗い平行叩きが顕著で、内面は細かい刷毛目で仕上げる。32は1/3ほどが残存する椀で、口縁部が小さく外反する。器表が荒れているが、外面では最大径部付近以下



26・27 : P825
 28 : P838
 29・30 : P863
 31 : P870
 32 : P895

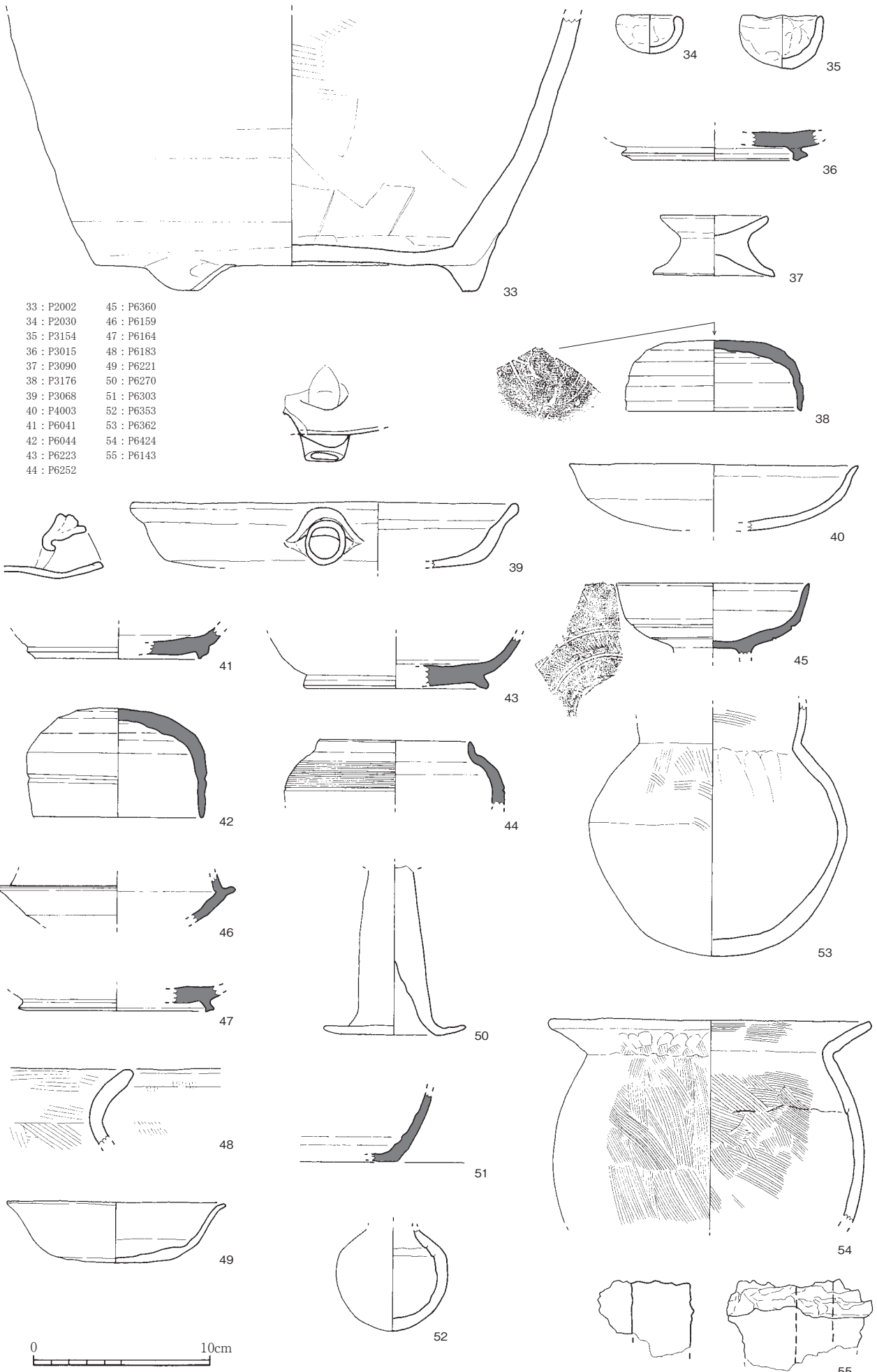
第171図 柱穴出土土器実測図3 (1/3)

で篋削りが見え、内面は全体に篋磨きで仕上げるようである。

33は瓦質の風炉で、底部は1足を除いてほぼ完存、体部も図示部の1/2強が残存する。器肉は灰黄褐色、内外の器表は暗灰色～淡灰色となる。外面は器表が荒れているが、内面は非常によく残る。内底面及び残存部上端付近は幅広く浅い刷毛目で、体部下端付近は幅4cmほどの原体で横方向に撫でているが、刷毛目はつかない。内面の状況を見ると未使用としてよいのであろう。34・35は手捏ねミニチュア土器でいずれも完存する。35は灰赤褐色に焼き上がる。36は須恵器杯身の残片。37は高杯状の土師器のミニチュアで、胎土は精良といってよい。胎土・焼き上がりなどは中世のそれに似る。38は須恵器で壺類の蓋であろう。1/4強の残片で、天井部の篋削りなどは雑である。天井部外面に篋記号が見える。39は注口を付す瓦質の浅い鍋。器肉は灰黄色～灰白色で、内外面がよく黒色化する。注口の上に装飾のためか粘土帯を置く。40は丸底の浅い底部から、体部が屈曲して立ち上がり、口縁部が小さく外反する土師器皿で、1/2ほどが残存。器表が荒れている。41は須恵器杯身の1/4の残片。42は須恵器の深くなる蓋で、天井部が完存、口縁部の1/3ほどが残存する。口縁部上方に甘い凹線を刻んで唯一の装飾とする。胎土精良で、篋削り等の調整もごく丁寧になされる。43は須恵器杯で、華奢な高台が外方へ踏ん張ってつく。焼成が甘く、瓦質に近い。外底面は篋切りの後に撫で消すようである。44は小型の須恵器無頸壺であろうか。口縁部が短く立ち上がり、最大径部付近に沈線を1条巡らせ、その上方にカキ目を施す。胎土は精良で灰白色に近く、調整も丁寧になされる。カキ目調整した部分から下位は厚く灰を被っていて、蓋とセットにして焼成されたようである。

45は杯部下半の1/2が残存する須恵器高杯片。屈曲部下に2条の沈線で画した文様帯を置き、櫛描刺突文を刻む。透孔は3方のようなようである。胎土は良好で、紫味をもって焼き上がる。46は胎土精良、丁寧に作られた杯身小片で、陶器質に焼き上がるが酸化炎焼成である。47は須恵器杯身で、断面方形に近いしっかりした高台が外方に踏ん張る。48は土師器甕小片。49は肉薄となる土師器皿で、底部付近は完周する。平底の底部から体部へかけては丸みをもって移行し、体部は外傾直行、口縁部は緩く小さく外反する。焼成良好でしっかりしているが、器表が荒れていて調整痕は見えない。外底面は篋切りのようである。50は脚裾の1/4を欠くほかは図示部が完存する土師器高杯片。脚部の開きが小さく、中実となる変わった器形であるが、胎土・赤味をもって焼き上がる色調など古墳後期の高杯に共通する。51は陶器壺類の底部片。胎土は暗灰色精良緻密で、体部外面に掛けられた釉は越州窯系青磁のような灰緑色に発色する。外底面は露胎で明灰色となる。体部外面下端付近は篋削りのようで、施釉は下端には及ばない。内面は水挽き痕が目立ち、薄く施釉されるようである。輸入陶磁器であろう。52は口縁部を欠くが、小型壺であろう。縦方向に1/2が残存。手捏ねではないが、調整痕は摩滅して見えない。53は頸部以下が完存する小型品。体部外面は刷毛目で調整するようだが、下半は荒れている。内面は上半に指撫で痕、下半では薄く刷毛目が見える。54は体部の1/2が残存する土師器甕。これは器表の遺存状態が良好。55は轆羽口で、洗端の2cmほどに鉄滓が付着、部分的にガラス化する。内径は直径2.1cmに復元できるが、羽口の厚さは3～4cmあって、外径8～10cmほどに復元できそうである。

石製品（図版69・70、第173図） 1は灰緑色を呈する滑石製勾玉で、孔がない。仕上げの研磨が必要な感じであるが、整形はほぼ終了して、横断面はほぼ円形となる。2は滑石製の垂飾品で、図下端を欠損する。表裏・各側縁ともに粗い条痕が無数に残る。3はサヌカイト製の石匙で、背面では処々に欠損がある。図示した面からの細部調整は深く、大きくなされ、背面では浅く小さい。

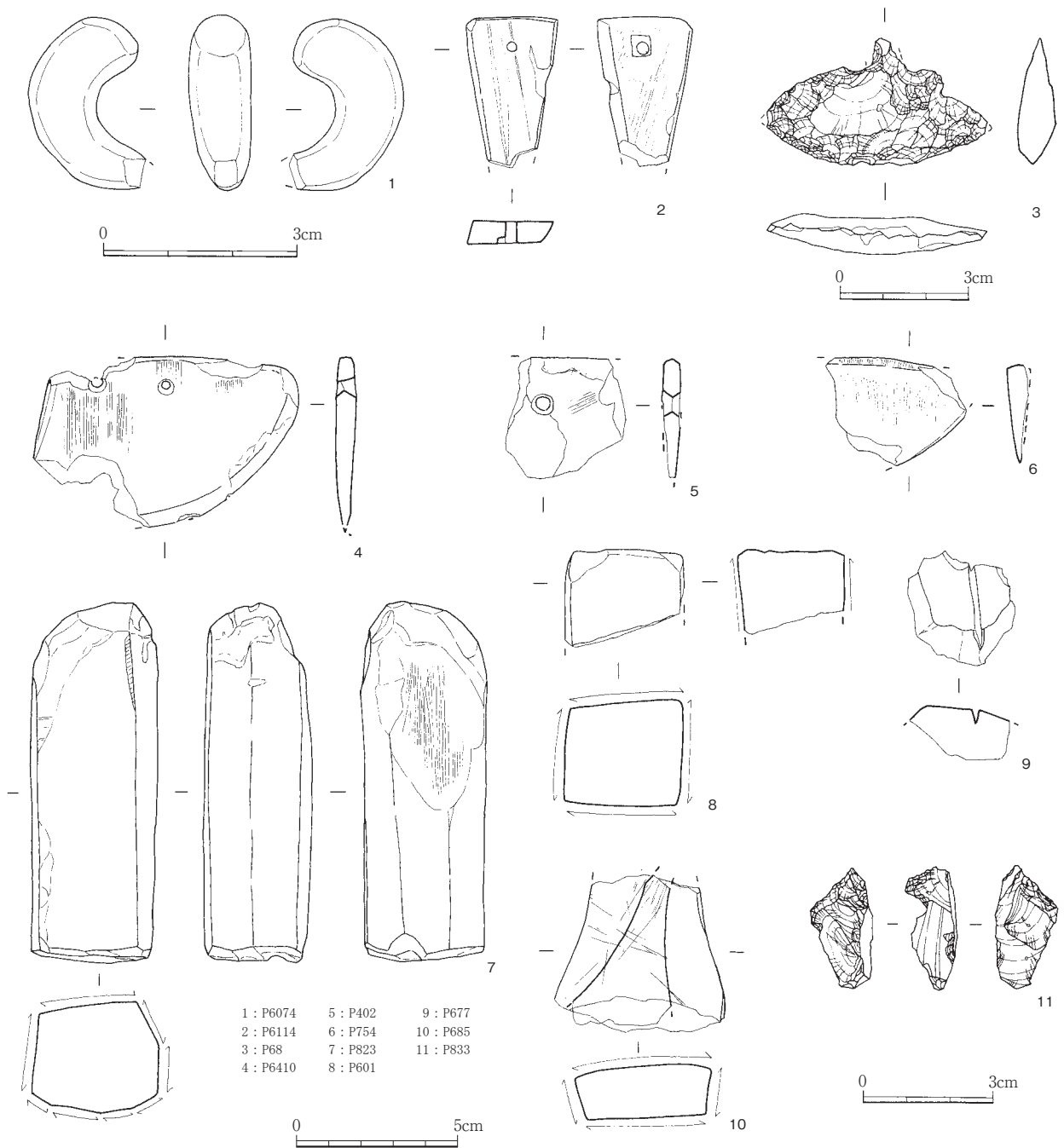


- 33 : P2002 45 : P6360
- 34 : P2030 46 : P6159
- 35 : P3154 47 : P6164
- 36 : P3015 48 : P6183
- 37 : P3090 49 : P6221
- 38 : P3176 50 : P6270
- 39 : P3068 51 : P6303
- 40 : P4003 52 : P6353
- 41 : P6041 53 : P6362
- 42 : P6044 54 : P6424
- 43 : P6223 55 : P6143
- 44 : P6252

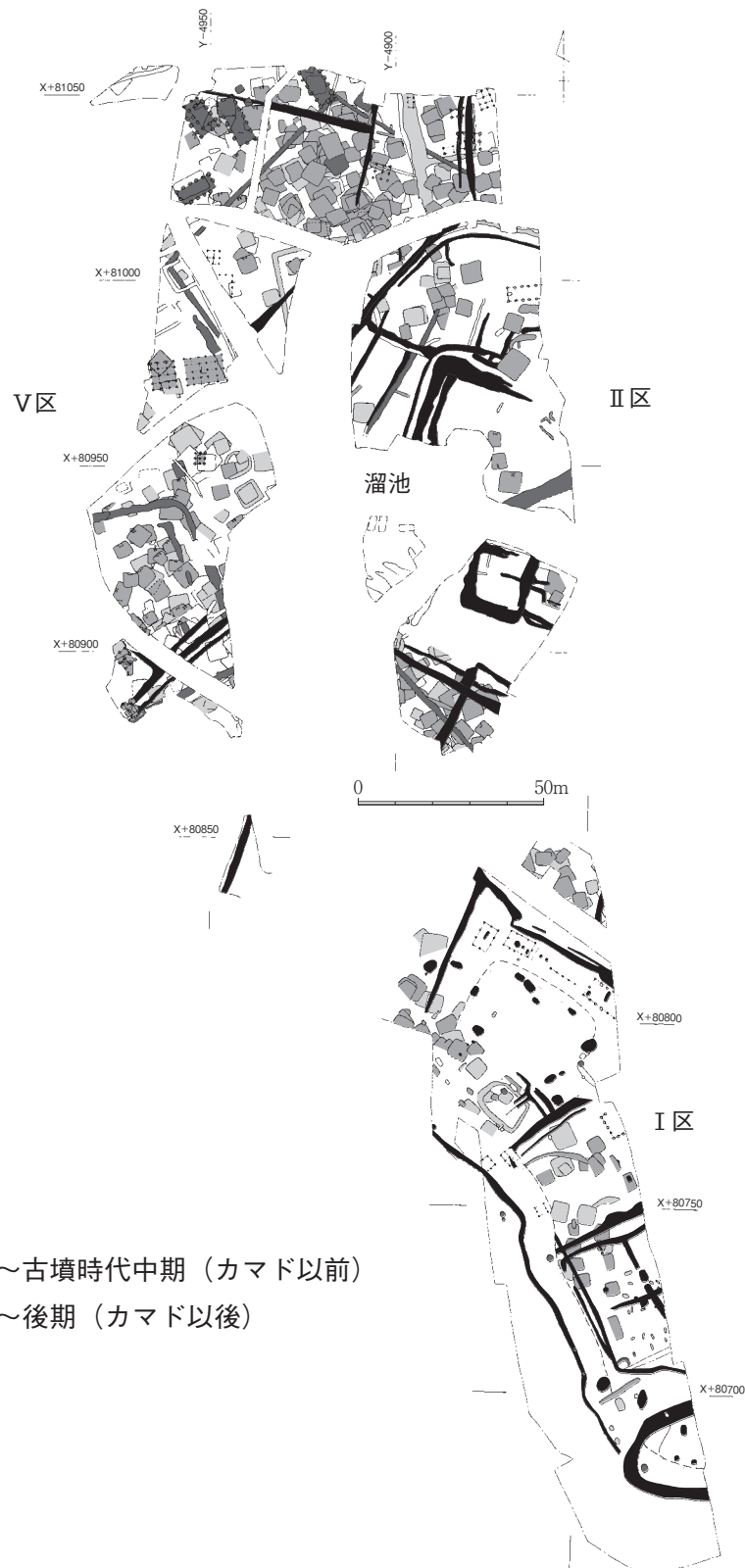
第172图 柱穴出土土器实测图4 (1/3)

4は粘板岩製の石庖丁で、図左端の折損部が研磨されている。背面では凹部に研磨が及ばないところがある。5・6も粘板岩製石庖丁片で、6は背面がほぼすべて剥離している。

7は灰黄色となる硬質砂岩製砥石で、長側辺が研ぎ減りして7面となっている。使用面は非常に滑らかで、条痕は少ないが、右に示した面の上半では研磨が及ばない凹部に細線が集中する。下端はほぼ水平に折損するが、破面の外周に研磨が及んでいることから、溝切りを行って意図的に折ったようである。8は砂岩製で、上面を除く4面を使用する。全体に黒ずみ、破面は赤味をもつことから被熱したものであろう。9は黄色の珪質岩を用いた砥石で、図表面が使用されている。10は灰白色の石英斑製砥石で、極度に研ぎ減りしている。11は深緑色のメノウの残片。



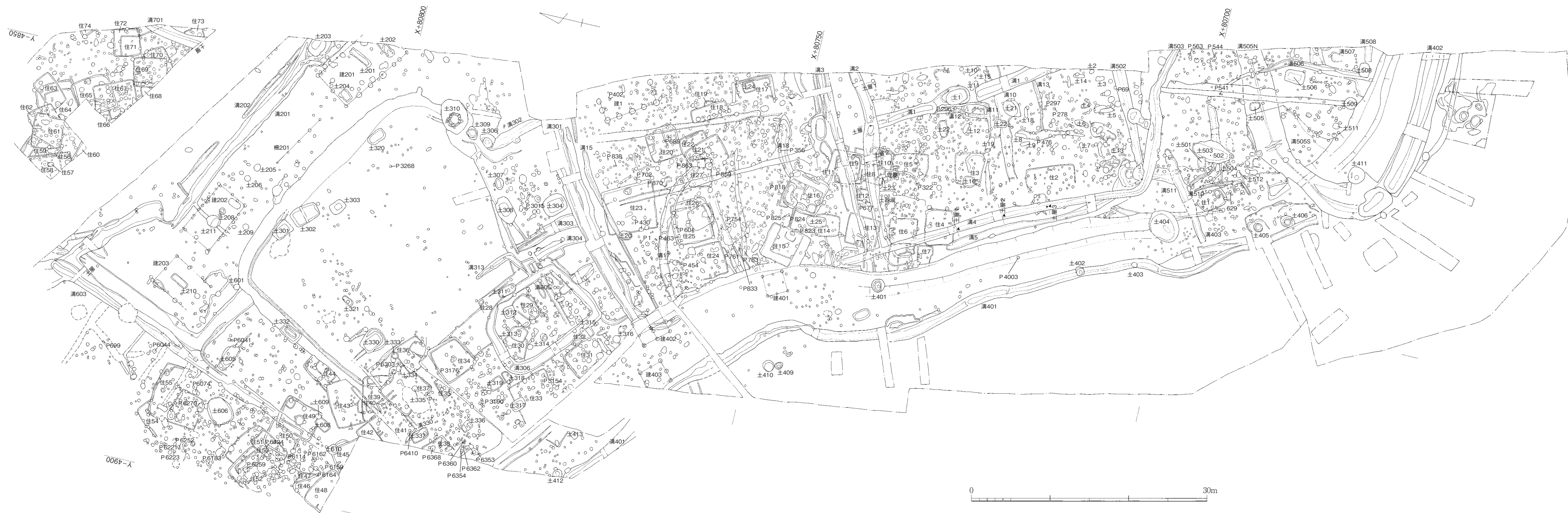
第173図 柱穴出土石製品等実測図 (1/1、2/3、1/2)



凡例

- 弥生時代末～古墳時代中期（カマド以前）
- 古墳時代中～後期（カマド以後）
- 古代
- 中近世

第175図 I・II・V区遺構変遷図 (1/2,000)



第174図 延永ヤヨミ園遺跡 I 区遺構配置図 (1/400)

IV おわりに

1 遺跡の消長

昨年度に報告を行った「延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査Ⅰ」は竪穴住居跡だけの報告であったため、混入した各時代の遺物のいくつかを紹介したとはいえ、ほぼ弥生時代末～古墳時代後期に至る竪穴住居跡の内容を主とする、遺跡の一部を切り取った報告であった。今回は、各種の遺構・遺物包含層からの出土品を網羅的に取り扱ったために、縄文・弥生時代から中近世に至る長い間に形成されたこの遺跡のもつ豊富な内容を紹介することができた。しかし、東九州自動車道建設に伴うⅡ区の調査、国道・県道バイパス建設に伴うⅢ～Ⅴ区の調査報告を見れば、この調査区の内容も遺跡全体からすればごく一部に過ぎないことは明瞭である。遺跡は低丘陵と狭い谷、湿地帯に望む丘陵裾などの地形に形成されていて、それぞれで特色ある内容を有していた。

古墳時代以前 縄文時代の確実な遺物としては石匙等の石製品などが挙げられる。また、弥生時代前期・中期の土器も散見されたが、住居跡や土坑といった主要な遺構の上限は弥生後期でも後半以降のものである。これは他の調査区でも同様で、この時期の集落からは畿内系・山陰系・瀬戸内系・豊後系といった各地との交流を示す土器が出土している。持ち込まれたと思われる土器も認められるが、多くは在地土器との間に顕著な差異は見えない。もっとも、これは肉眼観察の限界でもある。古墳出現前夜に活発となる広域間の交流が、入り海となる海浜に近く、かつ中規模の河川が貫流するこの地の重要性を高めたといつてよいであろう。当地で最も古い弥生土器は祓川河口に近い海岸砂丘に営まれた長井遺跡の墳墓群や祓川流域の遺跡で出土していて、弥生文化も主として海を經由して伝えられたと考えられるが、大陸や朝鮮半島から玄界灘沿岸を經由して流入してくる新しい文化がさらに東へ伝播して行く過程の中では、この地は単なる通過点であった。しかし、畿内・瀬戸内から流入してくる新しい波は、当地に弥生文化成立期における玄界灘沿岸と同じような役割を与えたようである。京都郡菟田町石塚山古墳が九州で最古最大の前方後円墳古墳の一つであり、かつ最も多量の三角縁神獣鏡を保有していたことや、時代が降って律令制下豊前国の「草野津」が置かれたことも同じ理由によるものであろう。

この延永ヤヨミ園遺跡に先行するあるいは母村的な集落遺跡として本遺跡の西2kmに所在する下崎ヒガンデ遺跡、南西3kmほどの下稗田遺跡などが挙げられる。下崎ヒガンデ遺跡では後期の方形竪穴住居跡80数軒、掘立柱建物跡30棟などが調査されている。下稗田遺跡は前期から後期に至る大遺跡であるが、後期に集落は一旦絶え、後期中頃から再興するというがかつての規模には遙かに及ばない。延永ヤヨミ園遺跡との関連性でいえば、眼下の長峽川は下稗田遺跡の立地する丘陵の南麓に流路をもっていることからより強い関係が想定できるであろう。また、両遺跡の間に位置する前田山遺跡では弥生前期末～中期初め及び後期の10軒に満たない住居跡からなる小規模な集落や弥生前期末～古墳前期の墓地在調査され、これも位置的に見て無関係であるとは思えない。いずれにしても、延永ヤヨミ園遺跡が栄える弥生時代末～古墳時代前期の頃、当遺跡に比肩しうる遺跡は「京都平野」には未見であり、この遺跡が中心的役割を果たしていたものと思われる。本遺跡の調査中に認識された遺跡東端の微高地に占地する木実堂古墳（未調査）は、頂部に平坦面をもつといった形状から推してこの集団が最初に造営した前期古墳であろう。前期後半の築造とされる県史

跡ビワノクマ古墳の被葬者もこの集落と無関係ではないであろう。

5世紀代は一旦集落が縮小するようである。陶邑Ⅰ期に相当する須恵器片が一定量出土するとはいえ住居跡から完形に近い形で出土した例は、筆者が調査を担当した150軒あまりの竪穴住居では皆無であった。こうした遺跡の衰退は、前方後円墳といった主要古墳の分布の在り方から説明できるかも知れない。5世紀代の主要な古墳は京都郡菟田町御所山古墳・行橋市石並古墳など海岸部に多く分布し、特に石並古墳を盟主とする稲童古墳群では甲冑などの武具の副葬が特徴的とされる。活発化する朝鮮半島での活動に参加したものと解されていて、みやこ町居屋敷窯跡とその工人の集落と目される京ヶ辻遺跡から出土した個性的な初期須恵器もその証左の一つであるといえる。6世紀初めに御所山古墳に卑近な位置に築造された番塚古墳を最後に、その後に築造された前方後円墳は内陸部に占地し、小型化、分散する傾向が窺える。

6世紀代に水系ごととってよいほどに分散した首長墳の中で、本遺跡の西に位置するみやこ町勝山地区の集団が最も大規模な前方後円墳を造営し続け、綾塚古墳（史跡、直径40mの円墳）・橋塚古墳（史跡、辺長40mの方墳）をもって首長墳の築造は停止する。この系譜が拠点とする範囲はまさに延永ヤヨミ園遺跡の後背地とってよく、古墳の在り方と6世紀代を中心に本遺跡が再び大規模化する現象は軌を一にするといえる。

古墳時代後期の住居跡以外の遺構として、集落内の道と思われる17・402号溝、井戸と思われる405・406号土坑などがあり、4区南東端で祭祀の痕跡と思われる遺物群の出土を見た。17・402号溝の性格については積極的に道とする根拠をもたないが、両溝ともに山崎川へ通ずる点で生活道路として使用された可能性が考えられる。405号土坑は須恵器が出現する時期の前後に、406号土坑はその一、二段階遡る時期に位置付けられよう。井戸へ土器を遺棄するという弥生時代以来の行為がここでも見られた。

4区南東端の土器が集中する地点では、土器を重ねて置いたり、ほぼ完形に復元できた甑を遺棄したりする状況から意図的な行為が読み取れる。「番号を付して取り上げた下層土器」群は陶邑Ⅰ期末～Ⅱ期初めに比定できる遺物群で、周辺ではそれを降る時期の蓋杯も出土している。ここは台地から山崎川へ落ちていく地形の北端付近にあり、土器を確認しただけであるが、かなりの期間にわたって水辺での祭祀が行われていたものと思われる。

なお、集落に関して付言すれば、この調査区は台地の南端を含んでいてそれは集落の南限をも意味する。遺構配置図を見れば明らかであるが、調査区北端付近を走る市道を境に、その南北では遺構の密度が明らかに異なっている。既述したように2・3区北東半では近世初期にやはり大規模な造成・掘削がなされている。6区でも住居跡を確認できたのは南西半であり、2区から連続する溝が北東端を走ることからここも近世初期に削平された可能性が考えられる。市道北側の7区とした調査区、あるいは7区の西に隣接する国道バイパス調査区（ⅣA区）や、さらに西側の県道バイパス調査区（Ⅴ区）での竪穴住居跡の密集が市道南にも及んでいたはずであるが、その場合にどれくらいの住居跡が存在していたものか、恐らく100軒は優に超えていたものと思われる。さらに未調査区をまだ多く残していることを考えれば、大きく二つの時期に分かれる集落遺跡であるが、いずれの時期においても県下屈指の規模であることは間違いない。

古代 Ⅴ-1区など遺跡が位置する丘陵の北端付近で検出した官衛的な掘立柱建物跡群の性格については、既に他の報告でも触れたように以下の文献が参考となる（『類聚三代格』延暦十五年十一月二十一日太政官符）。

太政官去天平十八年七月二十一日符稱、官人百姓商旅之徒、從豊前国草野津、
豊後国国崎・坂門等津、任意往還擅漕国物、自今以後嚴加禁断（後略）

ここにある「草野津」は延永ヤヨミ園遺跡の北東1.5kmの付近に「草野」の遺称を残す。しかし、現在の「草野」は湿地帯に位置することから、「草野津」の本体は最も近い苅田町片島あるいはこの延永ヤヨミ園遺跡が位置する丘陵であったはずである。片島は文字通り湿地帯に浮かぶ「島」であり、大宰府から豊前国府・豊後国府へと通じる古代官道が本遺跡の4.5km南を東西方向に走っていることや8世紀代の国府と推測される福原長者原遺跡がやはり4kmほど南東に位置することを考えれば上陸地点はこの延永がより相応しい。古代の運河と思われる延永水取遺跡が延永集落の丘陵北麓で発見・調査されたこともまた裏付けの一つとなろう。

そして、V区で検出された官衙的建物跡群は3面庇の建物跡が7世紀中葉から後葉、2×5間の側柱建物跡1棟、2×6間の側柱建物跡2棟がそれをやや下る時期とされているが、建物跡と密接に関連すると思われる上端の規模が2×2m、深さが2.2m・2.7mとなる2基の大型方形土坑を含めても出土する須恵器杯蓋はいずれも返りを有する形態で、これらは大宰府政庁から出土する初期の土器群に併行する。瀬戸内海交通の拠点の一つとしての「津」の成立あるいは整備が、大宰府の成立と同様に当時の国際的な緊張と密接に関係していたことが推測できる。とすれば、官道の設置も一連の政策であったとすることも可能であろう。なお、8世紀の「津」の官衙群は今回見つかっていないが、この台地上に存在するに違いない。

このI区では312号土坑とした方形掘形をもち板材を組んだ井戸、401号土坑とした井戸と思われる素掘りの円形土坑が8世紀後半～9世紀前半頃に埋没している。また、やはり井戸と思われる409号土坑は丸底の椀からみて10世紀、306号土坑は浅く丸い体部をもつことから10世紀後半～11世紀、410号土坑は小皿の法量からみて11世紀代に比定でき、411号土坑はそれにやや後出するようである。1号掘立柱建物跡も古代に属する遺構であろうと考えている。いずれにしても確認された遺構は井戸を主体として遺構数も多くはないが、調査区の随所から縄目叩きの瓦片が出土していて、西に隣接するIVB・C区でも板を組んだ方形井戸や「天平六年・・」と記された木簡が出土、あるいは大規模な道路状遺構が調査されていて古代の活動の痕跡は広く認められる。

中世 旧「豊前国」では北端の北九州市及び南端の宇佐市で中世土器の編年がなされているが、国府所在地の仲津・京都郡域では良好な資料に恵まれず、大宰府を含めた各地の資料を参考にして年代を推定しているのが実情である。その場合も、最も一般的に出土する土師器皿は変遷を追うのが困難なため、土師器椀・輸入陶磁器や瓦器椀などを指標として用いることが多い。今回の調査でも各時代の遺構が重複あるいは近接しているために混入した陶磁器の年代に引きずられているかも知れない。土坑の場合でも少量の土師器皿は時期比定が困難である。

中世の遺構としては22号土坑とした土壙墓が12世紀に、それに近い位置にある21号土坑が13世紀の後半代に位置付けられようか。井戸のうち、402号土坑が12世紀、403・404号土坑が14世紀頃に位置付けられようか。この時期の建物跡や一定程度の規模をもつ溝は確認していない。ただ、401号溝は13世紀頃に使用された可能性があるが、これは生活領域の外縁に掘削されたもので、平面的には蛇行していてその性格は不明である。

この時期の遺構はⅢ区とした北側の丘陵で顕著である。詳細は今年度の報告となるが、直線的な区画溝や土坑が多く検出されている。このI区はその周辺部にあたると考えてよからう。

2 中世後期・近世初期の遺構と遺物

豊前の近世初期 当遺跡では多くの溝及び3区の土坑群などから出土する近世初期の陶器が示す時期で主要な遺構が廃絶する。2区の掘立柱建物跡群は出土遺物が乏しいが、遺跡の在り方から見てやはりこの時期に属すると考えている。近世陶器は露胎部の器表がざらつき、胎土が粗い傾向をもつ初期の上野・高取系の製品と緻密な胎土で丁寧^{あがの}に造作された唐津焼が存在するようである。

さて、戦国時代末期から江戸時代初期の豊前の国主は三転している。天正15年（1587）、黒田孝高（如水）は本遺跡を含む豊前六郡を与えられ、中津城（大分県中津市）を主たる拠点とした。家督を嗣いだ黒田長政は慶長5年（1600）に関ヶ原の戦功で筑前に移封となり、替わって入国した細川忠興は豊前一国及び豊後の一部を知行、やがて拠点を小倉城（北九州市）に移した。そして寛永9年（1632）には小笠原氏が入国して幕末まで続く。

福岡県内では文禄・慶長の役の後に上野・高取焼が創始され、遠州七窯に数えられた名陶^{あがの}として現在まで伝わっている。上野焼は細川氏の時代、慶長7年（1602）に尊階を迎えて田川郡北部（現福智町）で開窯したとされる。その北西数百mに近接する鞍手郡（現直方市）では黒田氏の高取焼宅間窯が慶長11年頃に開窯したといわれる。ただ、高取焼の開祖八山は文禄の役に際して連れ帰ったとされていて、それは文禄元年（1592）のことという。高取焼開窯まで20年ほどの空白期があり、その間に黒田領内の豊前六郡内で陶器を焼造していたことは十分予想される。初期の両窯が卑近に位置していることもあり、豊前国内で初期の近世陶器が出土する場合は上野・高取系のいずれもがありうるし、初期において両者の厳密な弁別は困難といわれる。

溝 本遺跡では全域で大小無数の中近世の溝が検出されている。近世陶器が出土していない溝は古墳時代の遺構である17・403（511）号溝を除けば、1・401号溝のみである。505号溝は最上層に近世の土師器（第121図2）や陶器小片が数点入っているものの、505N号溝にはみられない。同一遺構の402号溝の白磁口禿皿や土師器皿からみて14～15世紀に埋没したものと思われる。1号溝は李朝陶器から見て15世紀以降、2号溝は1号溝を覆い、その重複部の上層から1600年前後に位置付けられる唐津焼が出土していてこれは2号溝に属するものと思われる（第84図5）。10号溝は雷文がスタンプされた青磁椀から15世紀頃の年代が考えられるが、1号溝に切られることから先行する。青磁椀は混入したものであるかも知れない。11・13号溝の遺物は少ないが近世陶器は含まれおらず、10号溝に並行する配置からそれに関連する遺構としておきたい。複数の溝が重複すると思われる301号溝は備前焼壺や他の陶器から15～17世紀に、それぞれ大まかに位置付けられるようである。

また、切り合い関係を確認できる溝があって、2号溝が1号溝を、4（301）号溝が2・3号溝を切る。2（5・502）号溝と4（301・503）号溝はそれぞれ矩形をなしていて、その内部で建物跡を確認できなかったものの、屋敷地を区画する溝と考えられる。301号溝は新古の複数の溝が重複しているものであろうと既述したが、301号溝と3号溝の間はおおよそ30m余であり、2・502号溝間の距離とほぼ同じである。そして301（4・503）号溝はその二つの区画を一つにまとめる形で掘削されていて、西辺長は64mほどとなる。屋敷地が再編されたようであるが、いずれも近世初期の陶器を出土していることから統合される以前の屋敷地が短命で終わったということであろう。

土坑 3区は幾度か記したように大きく掘削して平坦面を造成している。その最奥部に近世初期の陶器を伴う土坑が集中し、この大規模な掘削がなされた時期は土坑出土の上野・高取系の近世初期の陶器から推して17世紀前半頃と思われる。2区に関しては、3棟の掘立柱建物跡と201号溝の同時性を想定し、202号掘立柱建物跡が211号土坑の覆い屋である可能性を指摘した。出土状態が不明ながら211号土坑からも近世初期の陶器片・磁器（明染付）小片が出土していて、201号溝の年代と不都合はないようである。ただ、厳密に言えば地下式土坑という遺構の性格上、床面に密着した状態を確認できていなくては伴うものとはいえないし、出土土器が小片でもあり不安があるが、諸々の状況から判断して上記の想定が許されるであろう。とすれば、2・3区の造成は一連の、あるいはさほど時間をおかずになされた工事であったということとなる。今一つ、601号土坑とした小土坑が203号掘立柱建物跡の南4mに位置し、ここからほぼ正置された瓦質摺鉢が出土した。埋土等に特別な状況は看取していないが、あるいは建物跡に対する地鎮の意味があるのかも知れない。ただ、この摺鉢は単純な形態で、時期比定は困難である。

この造成によって15世紀頃の備前焼摺鉢片を出土した322号土坑は半ば壊されているが、310号土坑とした井戸について触れておく必要がある。この井戸は2・3区にまたがる掘形を有するが、石組上面を塞いだ巨石の頂部は3区遺構面にほぼ等しい。つまり、この井戸は2区のレベルではなく、初めから3区のレベルを念頭に造られたものと推測され、2・3区が有機的な関連性をもつことを証拠立てる遺構といえよう。この床面付近からも近世初期の陶器が出土していて、掘立柱建物跡群に伴うものと思われる。

地下式土坑 地下式土坑は211・503・605・606号土坑の4基を調査した。西に隣接するⅣ区にも数基の地下式土坑があり、さらに西側のⅤ-7区で1基を、さらに北側の丘陵（Ⅲ区）でも数基を確認している。211号土坑からは古唐津や明染付小片が、605号土坑では白磁端反碗小片とこれも古唐津と思われる陶器片が出土していて、1600年前後の遺物としてよいようである。この2基の土坑では606号土坑のように天井が崩落した地山土が床面に堆積しておらず、人為的に塞いだと想定しうる埋積の過程で混入した遺物であり、地下式土坑を廃棄してそれほどの時間差を考えなくてもよいものと思われる。その他の遺構では相応しい遺物がないが、この遺跡での地下式土坑の時期の一端を示していると思われる。

周辺での調査・報告例としてはみやこ町犀川末江寺山遺跡で類例がある。細長い谷の山麓斜面に位置し、3基が並んで、1基がそれらから10mほど離れて位置する。形状がはっきりとわかるものでは横穴部の床面規模が2.4×3.0mほどの略長方形プランとなり、直径1mほどの竪坑が付設するが、竪坑から横穴部へ至る長さ1m弱の幅狭い通路が付設されている。また、竪坑は横穴部と同じ深さまで掘削されていて、2.4～3mの深さをもつ。遺物は乏しいが、備前焼壺片、鉄釘1点が出土していて14世紀頃とされる。同じ谷のさらに奥に位置する末江園田屋敷遺跡でも2基の地下式土坑が並んで発見され、ここでも備前焼摺鉢の底部片と鉄滓が出土した。両遺跡とも性格を推し測れるような材料はない。ただ、数基が並んで位置するという共通点があり、この延永ヤヨミ園遺跡での在り方と異なっている。

一般にこの種の遺構の性格として穴蔵・墓地といった説があるが、今回の調査ではそのような説を裏付けるようなものはなかった。211号土坑では、一部完掘した床面で柱材の上に板材が置かれたような状態を認めることができた。この土坑は地下水が滞水して空洞となっていたために全掘を諦め、重機を用いて埋土を掘り上げたところ芦屋釜と思われる鉄製茶釜や念仏に使用する双盤、数

点の加工木材を採取できた。これらの柱材等は土坑壁体の補強、あるいは床貼りに使用されたもので、この床の上で茶を点て、あるいは念仏を唱していたものと思われる。なお、西側のIV区でも地下式土坑内で木柱を検出している。

江戸時代、薩摩藩では浄土真宗が禁止されていたために隠れて信仰を続けていたというが、豊前地域ではそのような弾圧が行われていたという記録はない。

鉄製茶釜 211号土坑出土の茶釜は芦屋釜である可能性が高いという。重文の茶釜9点のうち8点が芦屋釜であることからわかるように、現在でも非常に高く評価されている。記録でも筑前守護を兼ねた大内氏が足利將軍家やその周辺へ多く献納するほどの価値ある釜とされていた。近世初期の当地には有力な国人は知られておらず、どのような人物が名器芦屋釜を入手したのであろうか。一つ、参考となるのが「延永長者」の伝説である。『豊津町誌』には以下のように記される。

「京都郡池田村（現みやこ町勝山池田）には小松池という垂仁天皇の御代に築かれた溜池がある。今の小松池は小さいが、かつては満々と水をたたえ、どんな旱魃でも干上がることがない池で、しかも、この池には大蛇が住んでいた。昔、京都郡延永村（現行橋市）に延永長者と呼ばれる大金持ちがいた。延永長者は広大な耕地を所有していたが、ある年未曾有の旱魃にみまわれ、自ら所有する千町の田が旱損を受けそうになった。そこで長者は小松池へ赴き、大蛇に降雨を願い、もし願いが叶うなら三人いる自分の娘のうち一人を供することを申し出た。すると、すぐに大雨が降りだし、稲の全滅は免れ、若干の収穫をあげることが出来た。しかし、その代わりに娘一人を差し出さねばならず、長者が思い悩んでいたところ、事情を知った末娘が自ら小松池へ赴いた。末娘は池辺に組まれた櫓に上り、法華経を読経し、一卷読み終わるごとに、水中より首を出した大蛇の角に經典を掛けた。そして、八巻全てを角に掛け終わったところで、大蛇は大きく震えて消滅してしまったのである。それで、娘は延永村に帰ろうとした。ところが、途中、観音山の麓で胸痛に襲われ、娘はそのまま亡くなってしまった。そのため、娘の靈魂を観音山の岩窟中に祀り、胸の観音と称するようになったのである。後に、岩窟が山の峰にあるので、峰の観音と改称された」。

このような伝説のモデルになった人物が実在したとすれば、芦屋釜の所有者として相応しいといえる。土坑の廃棄された時期を17世紀初めであろうと推測したが、とすれば豊前では細川氏から小笠原氏への国主交替の時期に相当する。細川氏は領内の支配に当たって「手永」制度を採用した。15～20の村を「手永」にまとめ、従来からの在地有力者をその惣庄屋として手永に配置した。ちょうど古代律令制下の郡司の設置に似た政策を農村支配に採用し、小笠原氏もその制度を踏襲した。この延永ヤヨミ園遺跡は現在では大字吉国・延永に属するが、当時は「延永手永」に属し、その惣庄屋は代々「山本弥左衛門」を襲名したという。山本氏について史料が乏しいようであるが、『豊津町誌』では中世以来の土豪であろうという。しかし、なお双盤とともに地下式土坑に遺棄された理由には想像が及ばない。

末尾になりましたが、本報告に当たって下記の方々の御教示を得たことを記し、謝意を表します。十分に咀嚼したとはいえない拙い内容となり、内容に誤りがあるとすれば筆者の責であります。（敬称略）遠藤喜代志 亀田修一 新郷英弘 日高正幸

V 補遺 – 竪穴住居跡出土遺物の追加報告

昨年度、竪穴住居跡の報告を行ったが、その際に所在が確認できていなかった出土遺物を報告する。

土器（第176図）

8号竪穴住居跡（1～3）

1はカマド内に伏せ置かれていたものと思われ、細片化して接合できなかつたようである。口縁部が小さく外折する椀で、器壁が薄く荒れている。2は甕、3は高杯の小片である。

14号竪穴住居跡（4）

住居跡の南西隅付近で伏せ置かれたような状態で出土した完存する土師器椀である。浅く丸い底部・体部をもち、口縁部は小さく外折する。外面は口縁部付近が赤変し、以下は灰白色、内面は全体に灰黄褐色である。外面は篋削りを主体として仕上げるようである。

21号竪穴住居跡（5・6）

5は須恵器杯身小片で丁寧に作られている。6は土師器高杯でこれは肉厚となる。1/4の残片。

25号竪穴住居跡（7～10）

7は小型壺で図示部の1/2が残存する。底部は平底気味で、頸部の締まりが弱い。肉厚となり、体部内面中位には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。胎土には通有の砂粒は少ないが、茶褐色の砂が目立つ。8は小型の器台あるいは高杯の脚部で、円孔を4箇配する。胎土は粗い。9は平底の甕であろうか。図示部は完周する。外面ではシワが多く、ほとんど手捏ねで作られている。10は平底の鉢で完存する。

30号竪穴住居跡（11）

須恵器の器台であろうか。浅く開き、外面に篋描の直線文を描く。

32号竪穴住居跡（12～14）

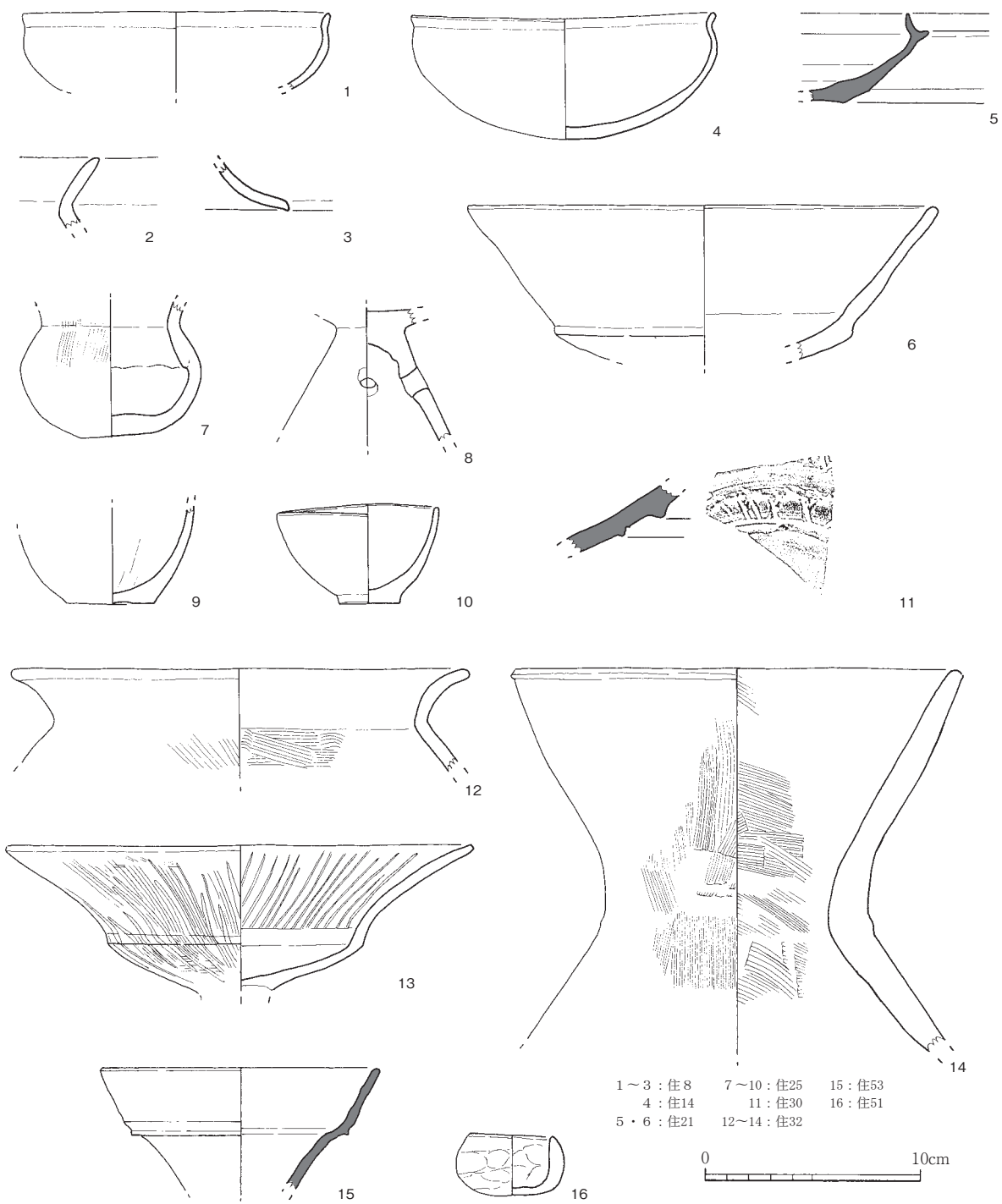
12は口縁部が強く外反する甕の小片。13は杯部がほぼ完存する高杯である。口縁部が長く浅く開くもので、内外面に縦位の暗文が刻まれる。図示した下半部の内面が煤けて、上半部の内面は赤変する。14は器台片。

51号竪穴住居跡（16）

手捏ねのミニチュア土器である。

53号竪穴住居跡（15）

須恵器甕の口縁部。



第176図 竪穴住居跡出土土器等実測図 (1/3)

石製品等（図版70、第177図）

15号竪穴住居跡（1）

遺構の北西隅付近の埋土上面（検出面）から出土した灰緑色を呈する滑石製勾玉で、全長1.9cmの小型品。形状は整っていて、丁寧に造作されている。孔の大きさは両面とも同じ大きさと、覗き込むと孔は直線的になっている。鋭利な錐で穿孔したようである。

24号竪穴住居跡（2）

カマドに向かって左袖の外側で、袖に接するように出土した頭部を欠失する勾玉片で。暗灰色の滑石を用い、尾部は直線的に磨られ、腹部の両側縁もしっかりした稜線となるなど硬直した感があるが背は丸い。左に示した面で、右側の孔は両面からなされるが中央付近でずれていて、貫通に失敗し、左側に新しく背面から再度穿孔を行ったようである。そのためにこの付近が弱くなって折れたのであろう。

34号竪穴住居跡（3）

住居跡の南隅付近の床面から出土した縦横25cmほどの川原石で、特段の使用痕を指摘できないが、全体が非常に滑らかとなっている。安山岩製。

21号竪穴住居跡（4）

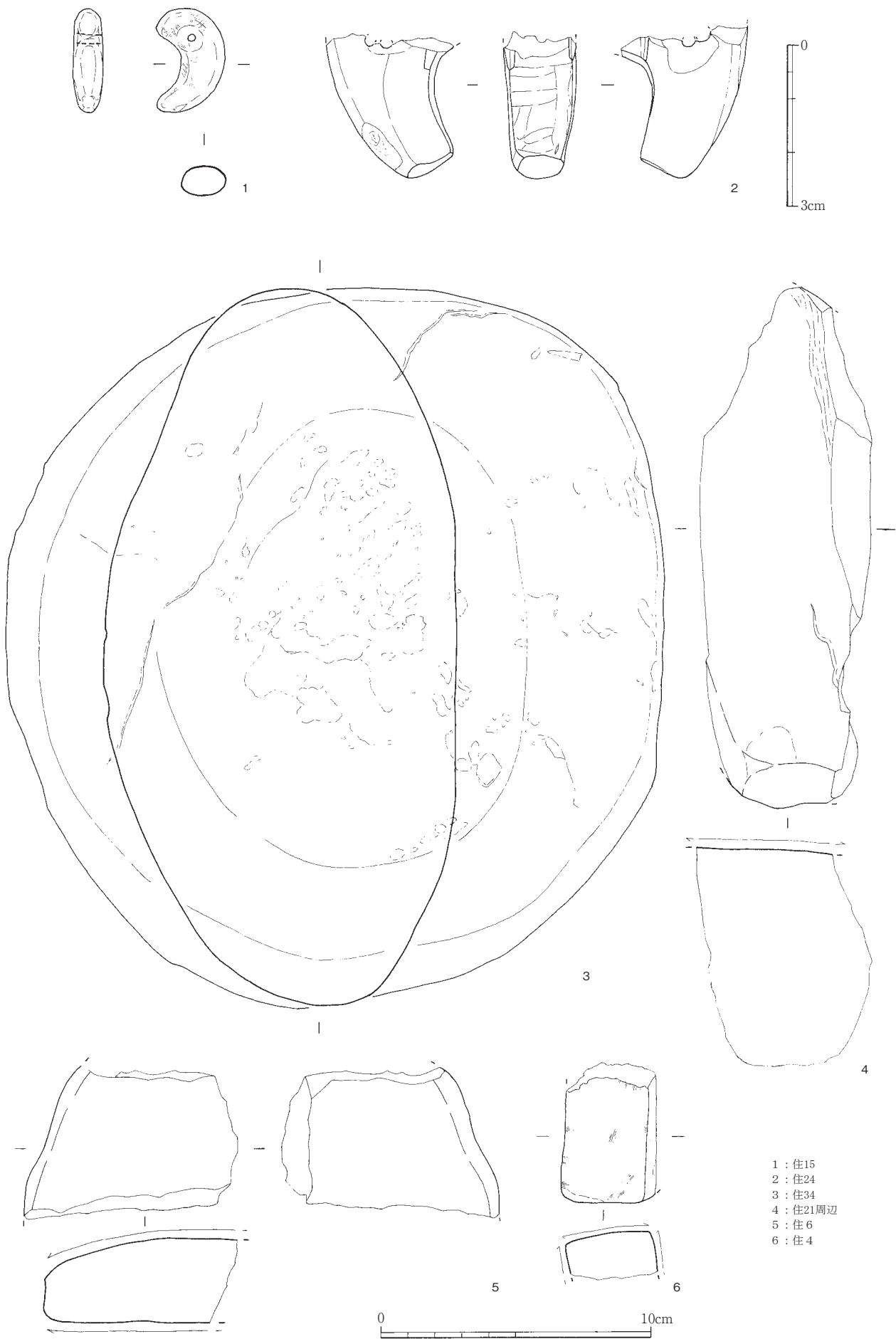
「21号住居跡周辺」との注記があって、厳密には住居跡に属するとは断定できないものである。安山岩を用いた砥石で、図上下両端及び使用面のみが原状の一部を留める。使用面は非常によく磨られているが、図右上に小さく波打つような本来の石材表面が残存する。

6号竪穴住居跡（5）

6号住居跡と4号溝の間に設定した畦から出土したもので、この住居跡に伴うと考えてよい。安山岩を用いていて、いわゆる砥石のようではないが上下両面が比較的滑らかな面となる。

4号竪穴住居跡（6）

4号住居跡と4号溝の間に設定した畦からの出土である。図上端が折損、背面が剥離するが、3面を使用する石英斑岩製の砥石である。



第177図 豎穴住居跡出土石製品等実測図 (1/1、1/2)

圖 版

図版 1

遺跡全景
(南上空から)



I-1・4・5区
(上空から)



図版 2



I-2区全景
(上空から)



I-3区全景
(上空から)



I-5区全景
(上空から)



I-6区全景
(上空から)



1号掘立柱建物跡
検出状況（北から）



1号掘立柱建物跡
発掘後（北から）



1号掘立柱建物跡
P629断割り状況
（南東から）



I-2区表土掘削後
(北西から)



I-2区全景
(北西から)



I-2区全景
(南東から)



201号掘立柱建物跡
(北西から)



202号掘立柱建物跡
(南東から)



203号掘立柱建物跡
(北から)



I-4区掘立柱建物跡
(上空から)



左 3号土坑 (北から)
右 4号土坑 (北西から)

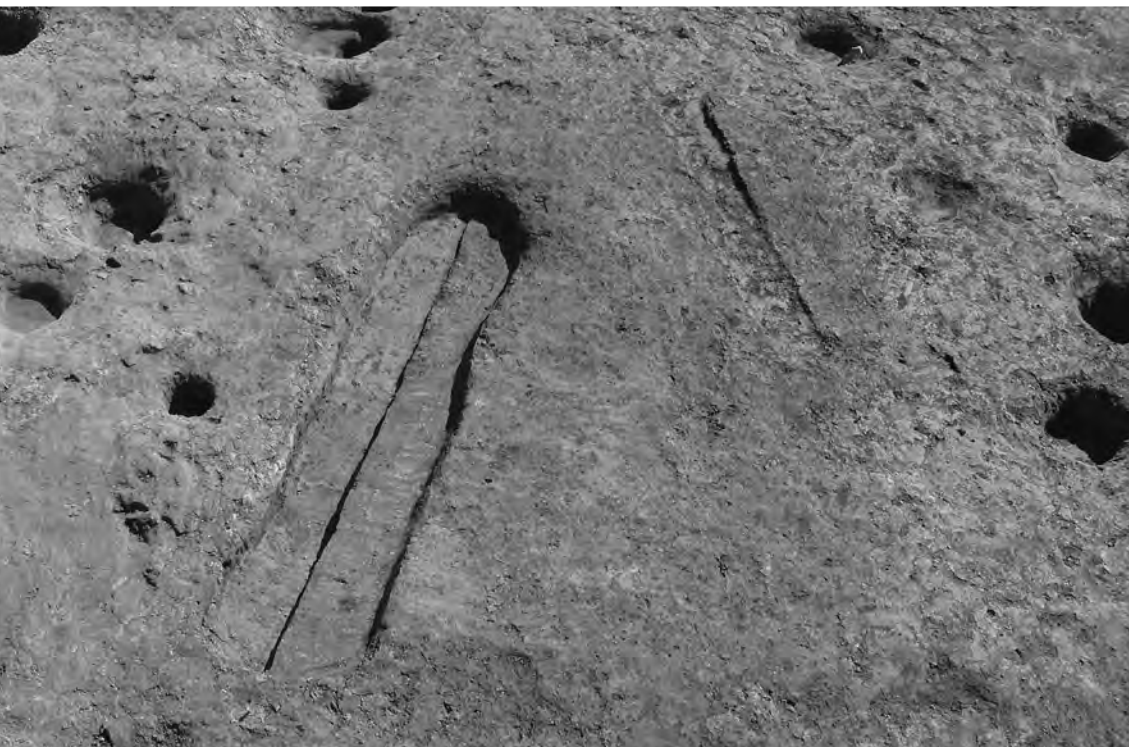


左 5号土坑 (北から)
右 6号土坑 (南から)



図版 8

左 7号土坑（東から）
右 10号土坑（北西から）



8（左）・9号土坑
（北から）



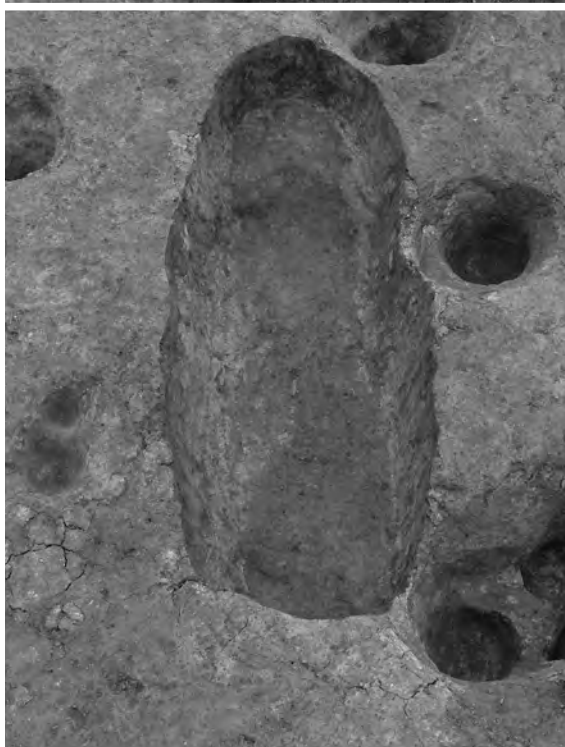
15・11・10号土坑
（北西から）

図版9

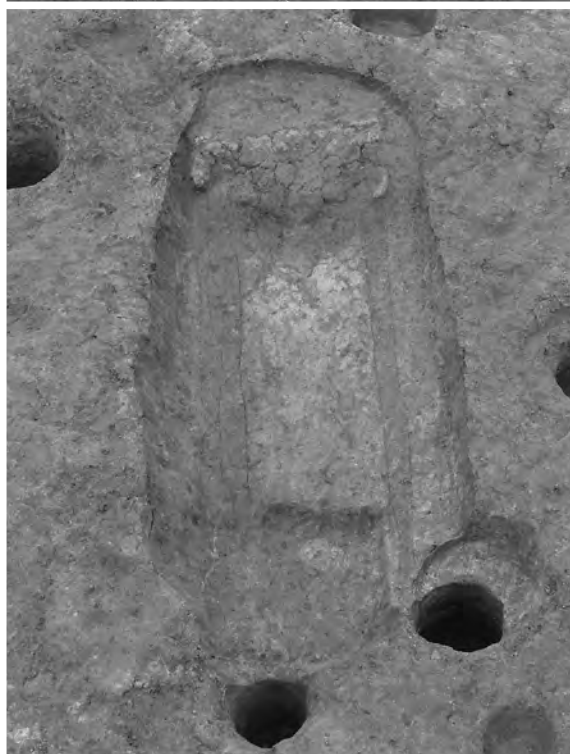
左 11号土坑（北西から）
右 12号土坑（北西から）



左 12号土坑（北西から）
右 14号土坑（南から）



左 18号土坑（西から）
右 19号土坑（北西から）

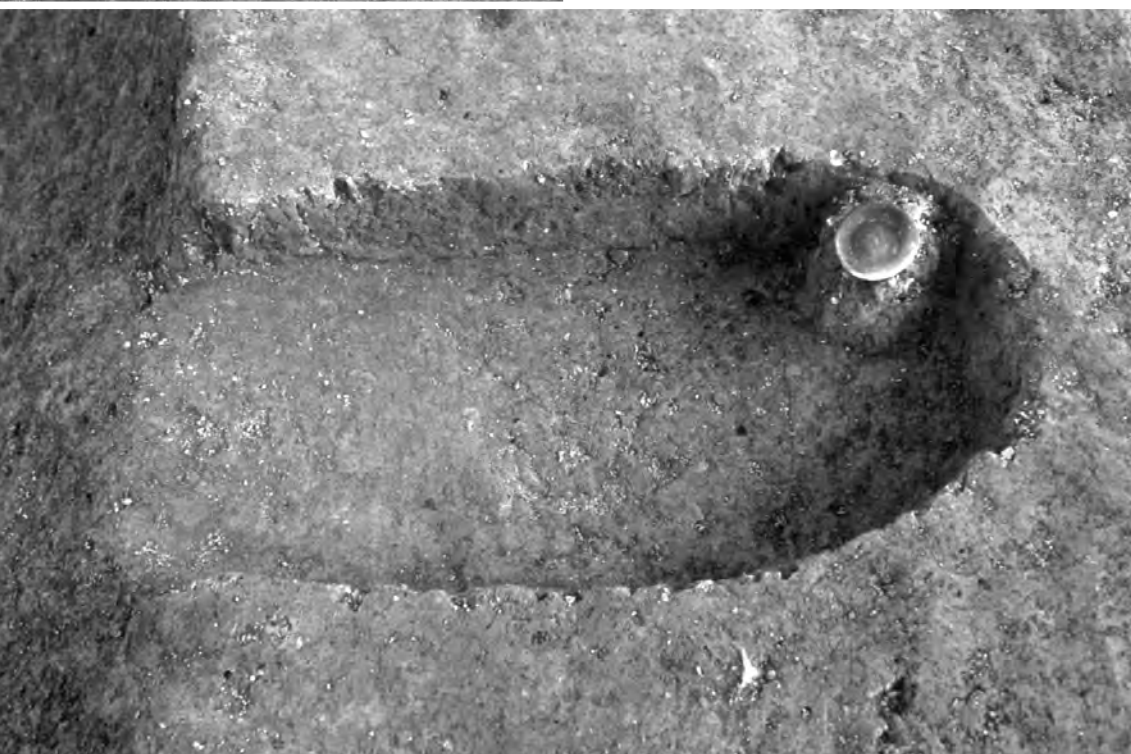




13号土坑
(南西から)



左 22号土坑 (南から)
右 505号土坑 (南東から)



23号土坑
(西から)

図版11



I-1区溝群
(上空から)



1号土坑
(北西から)



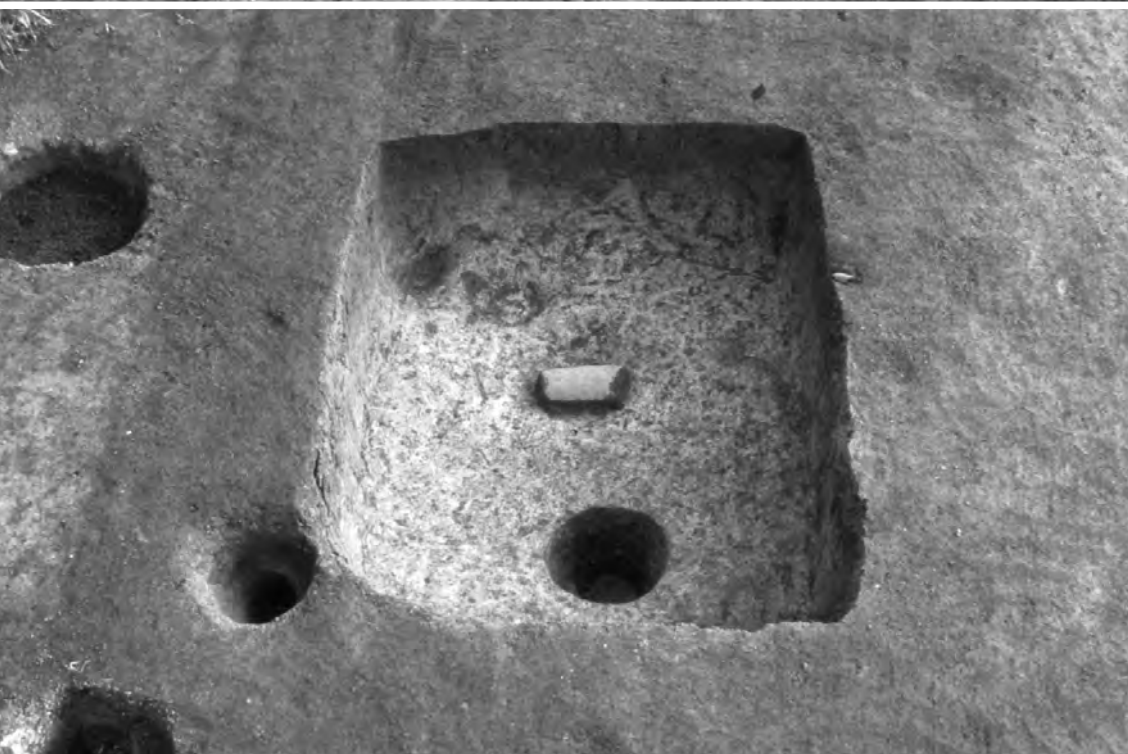
2号土坑
(北西から)



16号土坑と3号竪穴
住居跡（西から）



21号土坑
（東から）



24号土坑
（北から）

25号土坑と14号竪穴
住居跡（西から）



203号土坑
（北西から）



205（左）・206号
土坑（北東から）





205号土坑（北西から）



209号土坑（北西から）



210号土坑（北東から）

208 (手前)・211号
土坑 (南東から)



211号土坑床面
(西から)



211号土坑断割り
状況 (東から)





301～303号土坑
(北西から)



301号土坑土層
(南東から)



302号土坑
(南から)

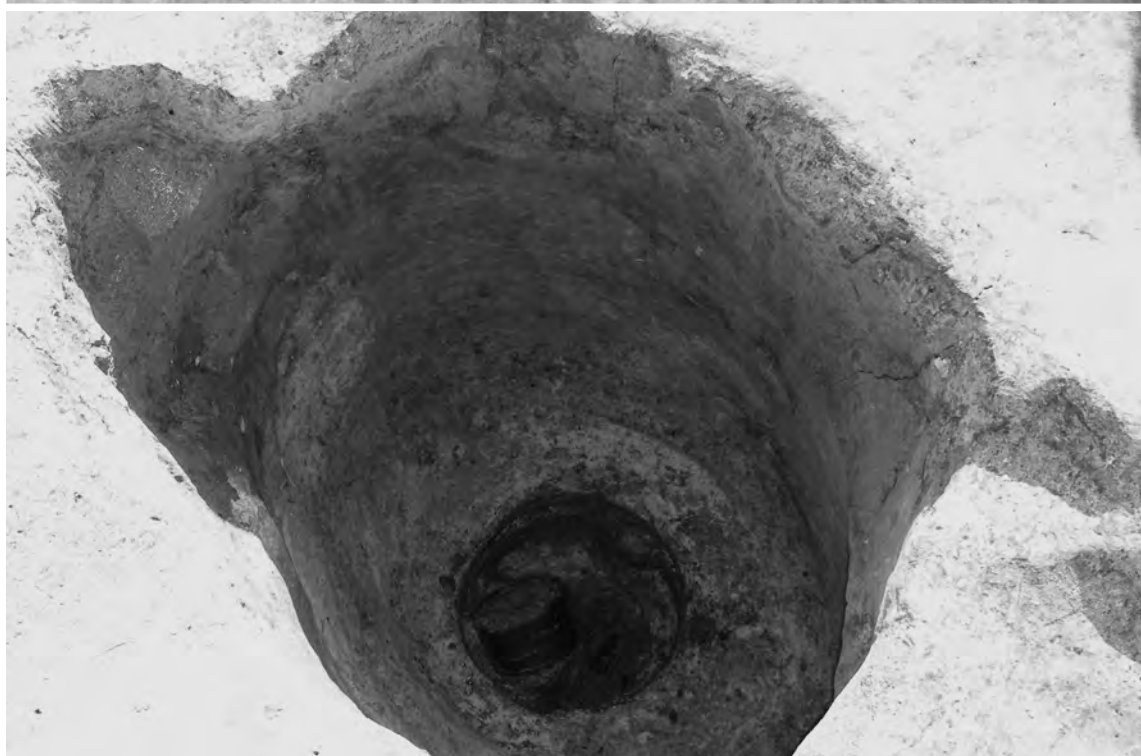
図版17



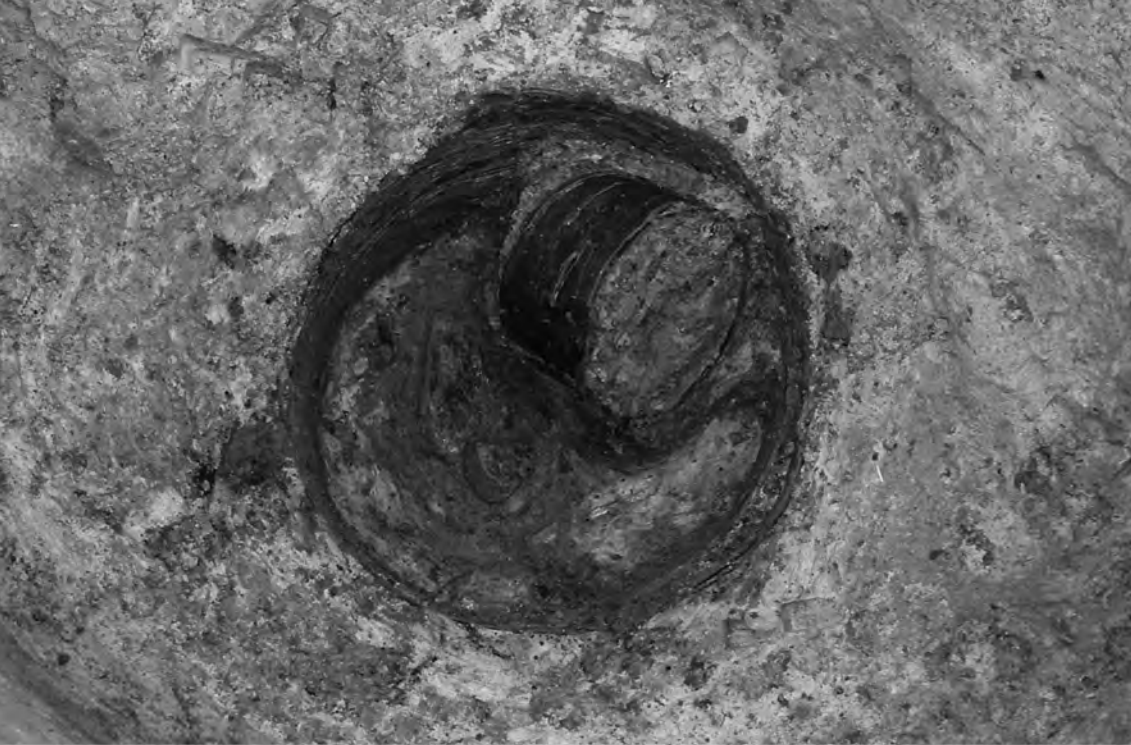
303号土坑
(南東から)



304号土坑
(南西から)



306号土坑
(北西から)



306号土坑床面1
(北西から)



306号土坑床面2
(北西から)



307号土坑
(北西から)



308号土坑
(北西から)



309号土坑
(北西から)



310号土坑上面1
(北西から)



310号土坑上面2
(北西から)



310号土坑下層1
(北西から)



310号土坑下層2
(北西から)

310号土坑井戸枠1
(北西から)



310号土坑井戸枠2
(北西から)



312号土坑土層
(北西から)

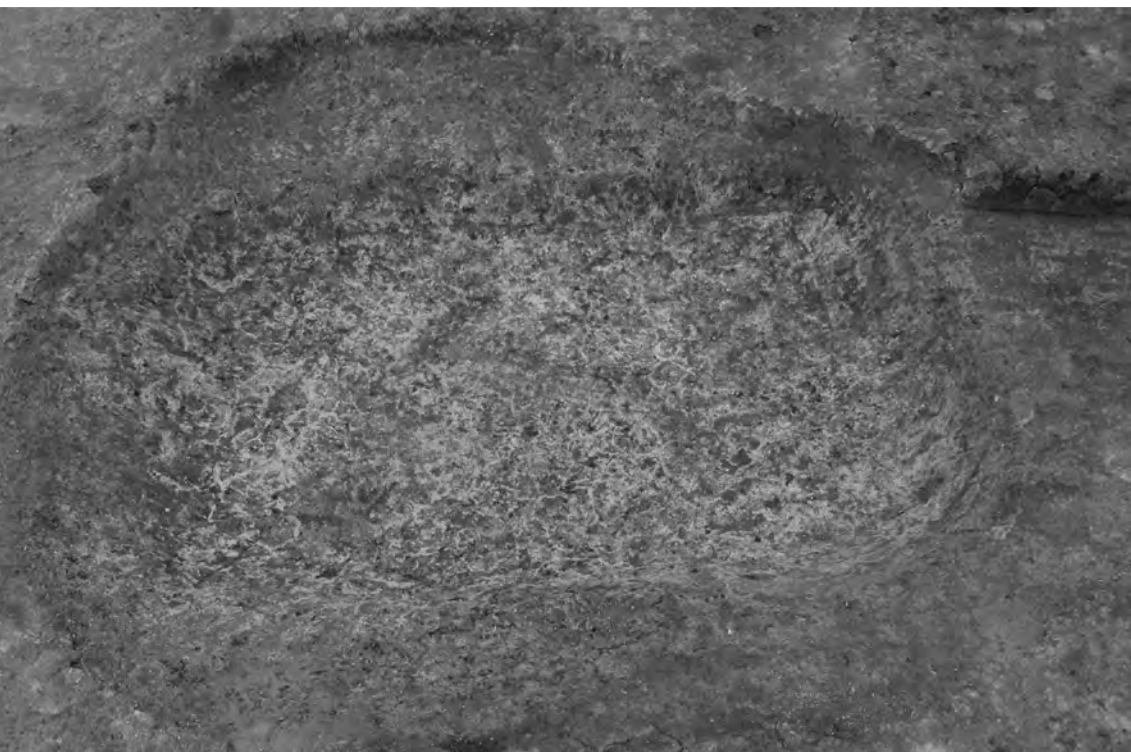




312号土坑井戸枠
(北西から)



312号土坑完掘後
(北西から)



330号土坑
(北東から)

332号土坑
(南東から)

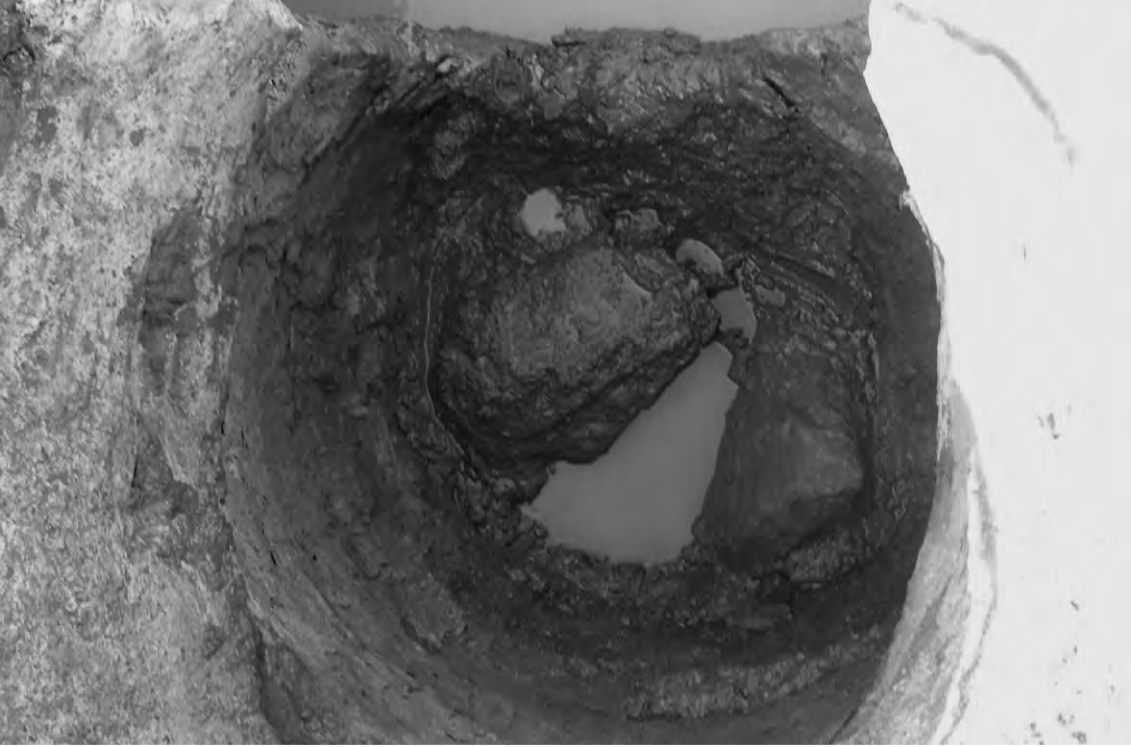


334号土坑
(南東から)



335号土坑
(東から)





401号土坑
(北東から)



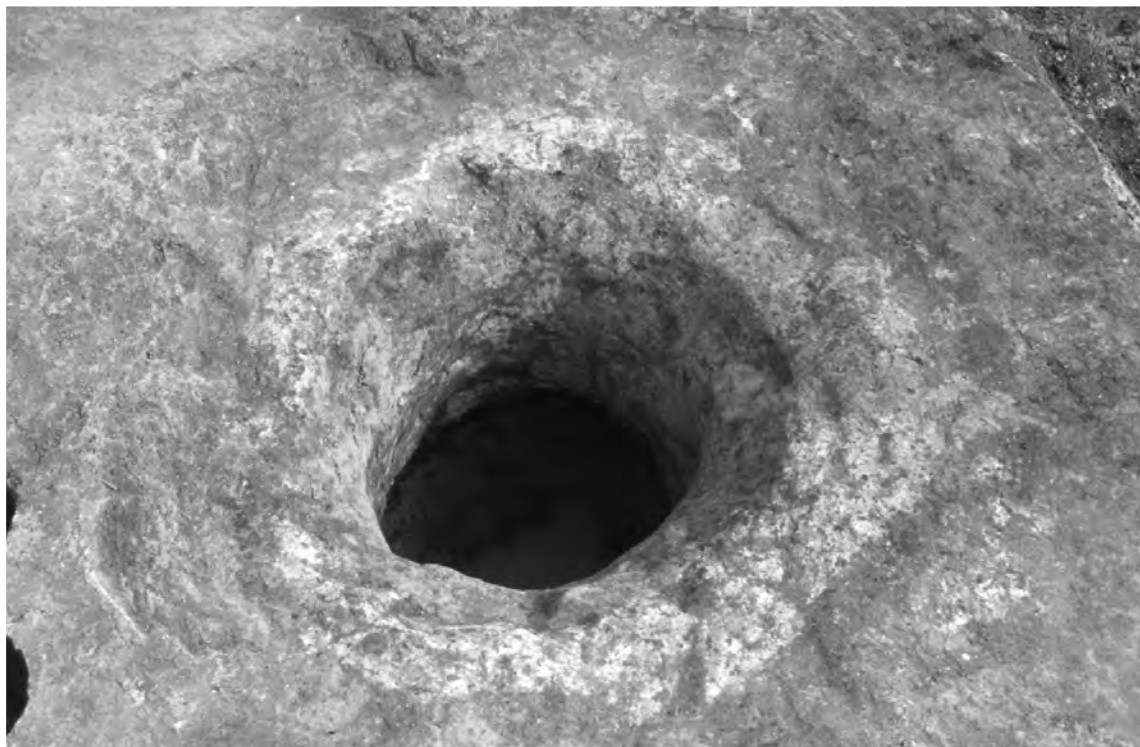
401号土坑
(南西から)



404号土坑土層
(北西から)



404号土坑
(北東から)



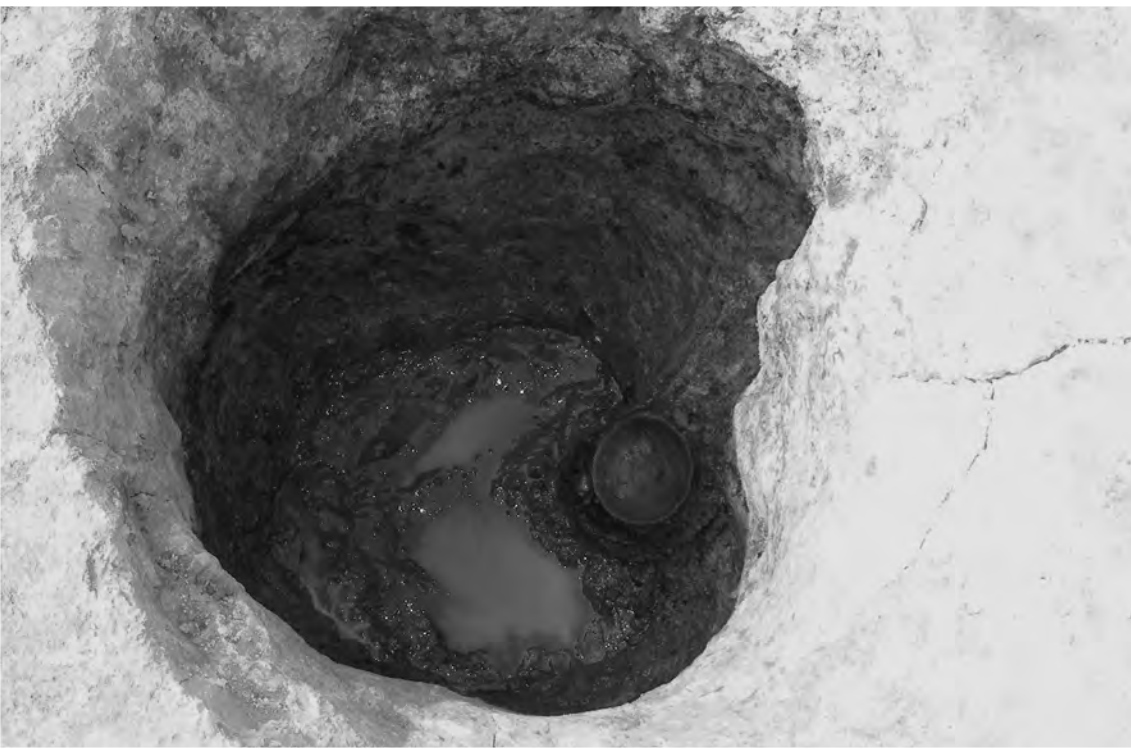
405号土坑
(北から)



406号土坑
(北西から)



406号土坑
(北西から)



409号土坑
(南東から)



410号土坑土層
(南東から)

409 (左)・
410号土坑
(東から)



411号土坑
(西から)

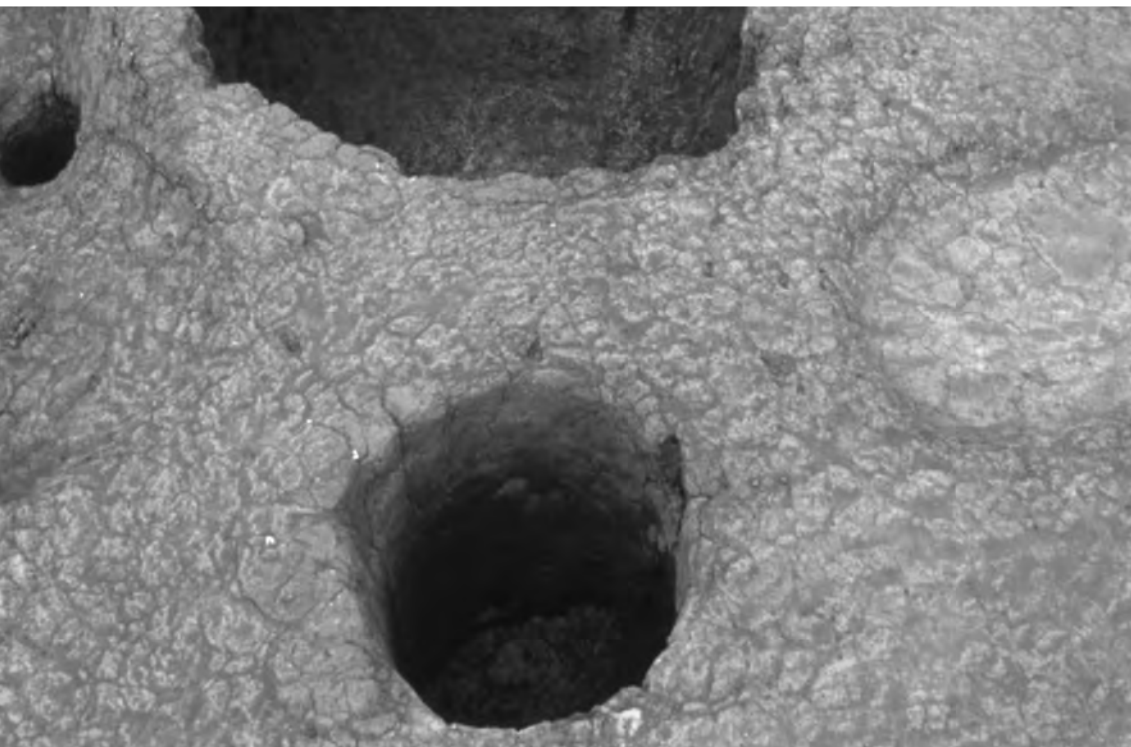


412号土坑
(東から)





502・503 (手前) 号
土坑 (北から)



502 (手前)・503号土坑
(南から)



銅椀

506号土坑
(南西から)

図版29



508号土坑
(東から)



509号土坑
(北から)



512号土坑
(西から)



601号土坑
(北東から)



605号土坑検出時
(北東から)

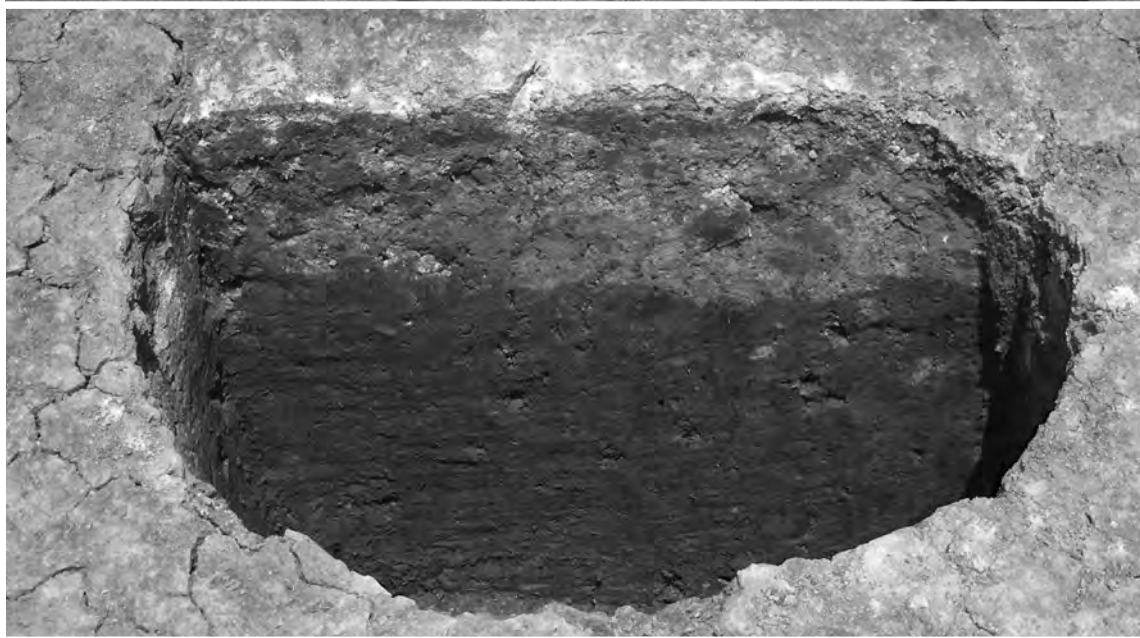


605号土坑縦断土層
(北東から)

605号土坑完掘後
(南東から)



606号土坑堅坑土層
(南西から)



606号土坑堅坑
(南西から)





606号土坑縦坑
(北東から)



606号土坑完掘後
(北東から)



608 (右)・609号土坑
(北西から)

2・3号溝
(北東から)



3号溝礫検出状況
(西から)



4号溝土器出土
状態1 (北西から)





4号溝土器出土状態2
(南西から)



501号溝土器出土状態
(東から)



17号溝土層 (北西から)

左 17号溝土器出土状態
(北から)
右 17号溝西端南
土器出土状態
(北東から)



301号溝 (北東から)



301号溝土層 (西から)





306号溝南東辺土層
(北西から)



306号溝南西隅土器
出土状態 (東から)



306号溝南西辺土器
出土状態 (南東から)

306号溝北東辺土器
出土状態（北西から）



306号溝北東辺土器
出土状態（東から）



306号溝北西辺土器
出土状態（北から）





402号土坑以北の401号溝
(南東から)



402号溝検出状態
(北西から)

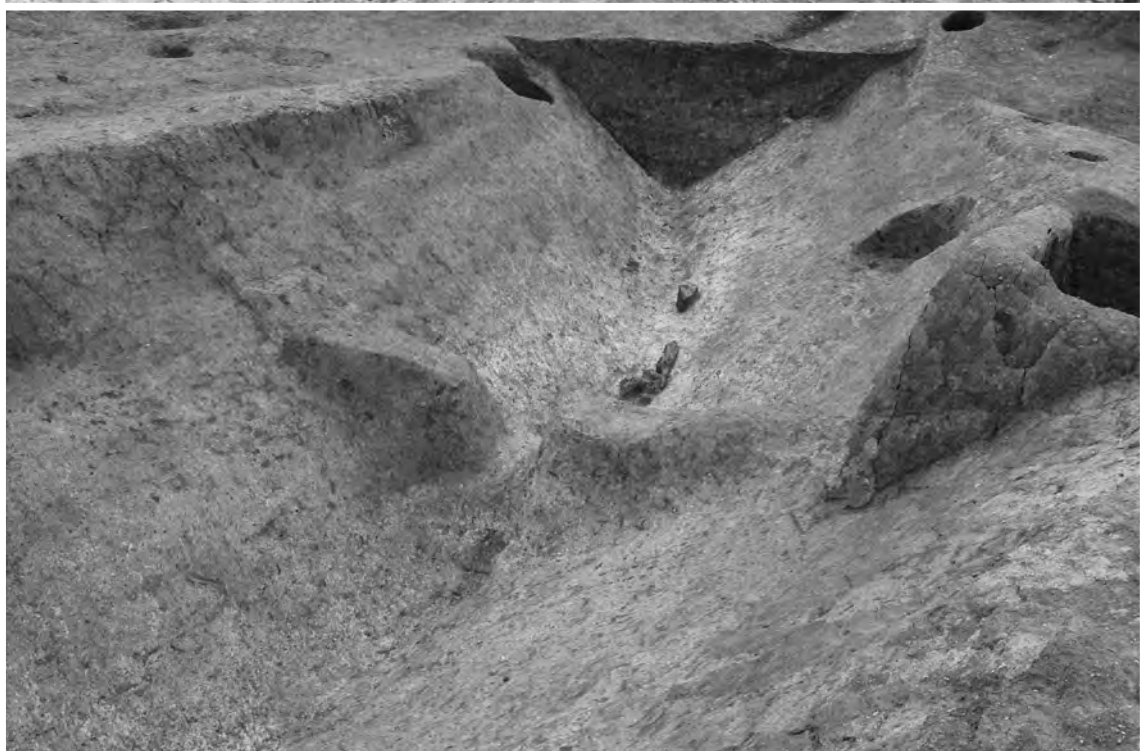


402号溝全景
(北西から)

402号溝土層
(南西から)



505N号溝
(北東から)



505N号溝堰状
遺構検出状態
(北西から)





505N号溝土層
(北東から)



505号溝北西肩土器
出土状態 (西から)



403号溝土器
出土状態 (南西から)

511号溝土器
出土状態（南西から）



603号溝土層
（南西から）



701号溝土層
（北から）





埋甕検出状態
(北から)



埋甕内部
(北から)



埋甕掘形中の土師器1
(北から)

埋葬掘形中の
土師器2 (西から)



土器溜の位置
(北から)



土器溜
(南東から)





I-1区包含層土器
出土状態1 (南から)



I-1区包含層土器
出土状態2 (東から)



I-1区包含層土器
出土状態3 (東から)

I-1区包含層土器
出土状態4（北東から）



I-4区401号土坑
西包含層（北から）



I-4区南東端東Tr.
（北西から）





I-4区南東端西Tr.
(北東から)



I-4区南東端土器
出土状態 (北東から)



I-4区南東端完掘後
(南西から)



I-4区南西端全景
(北西から)



I-4区南西端P1
(南西から)



I-4区南西端2Tr.
(北から)



粘土土坑



同左断割り状況



P1



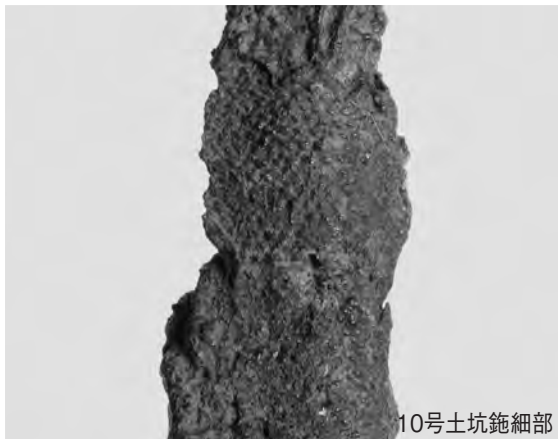
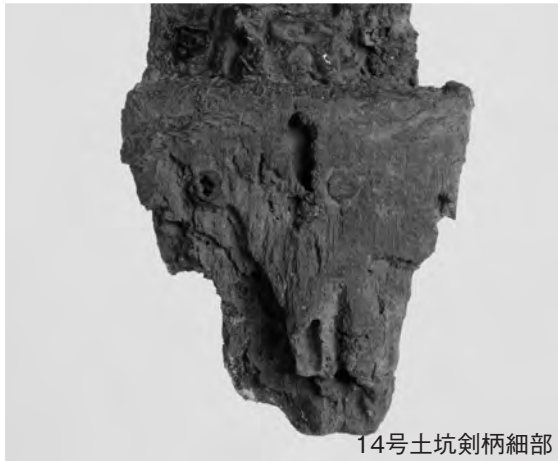
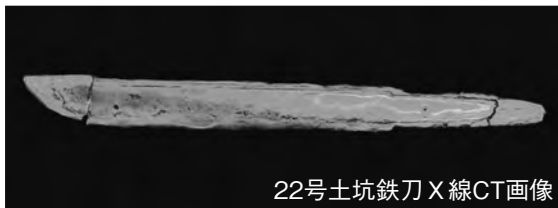
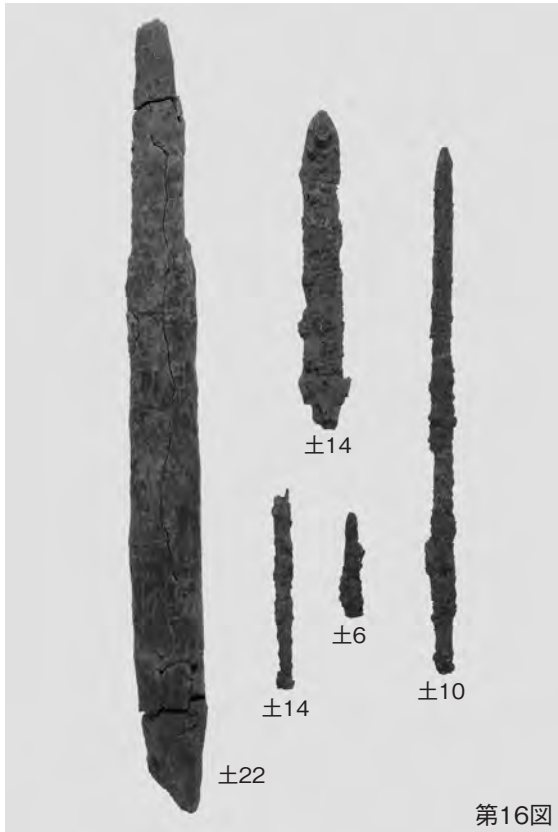
P6

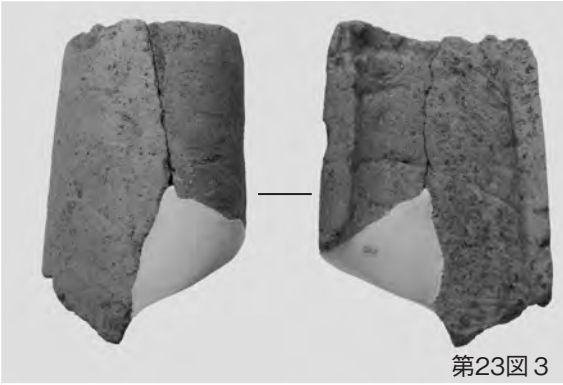


P824 (左) ・ P825



P863





第23図 3



第31図



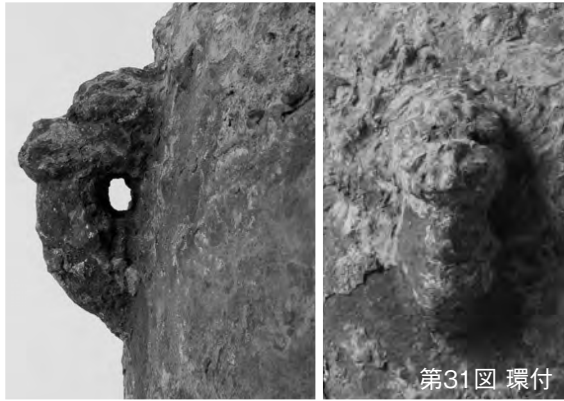
第23図 5



第31図 文様



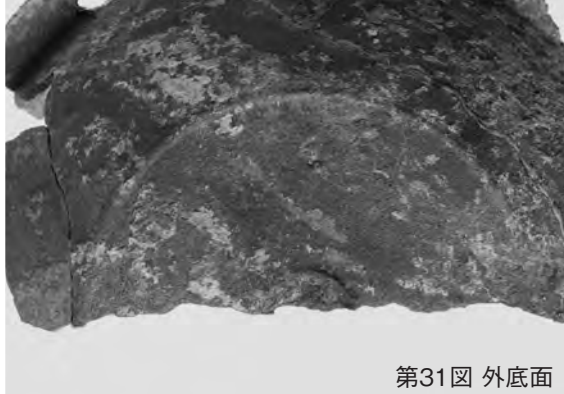
第28図



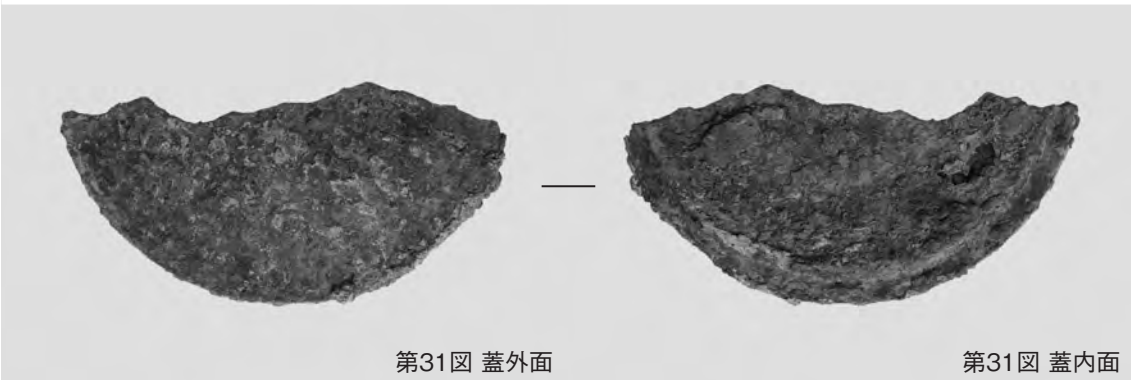
第31図 環付



第30図

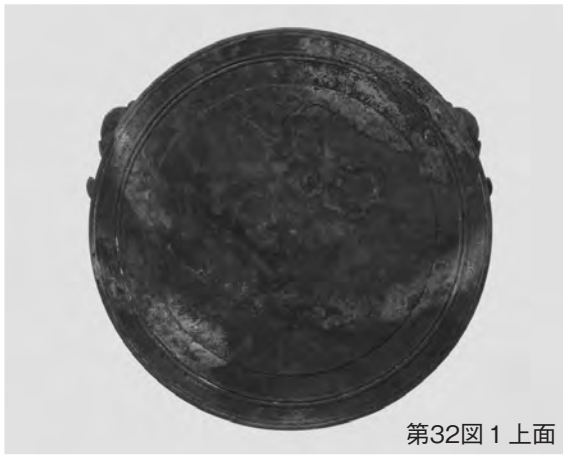


第31図 外底面



第31図 蓋外面

第31図 蓋内面



第32図1 上面



第32図2 上面



第32図1 上面



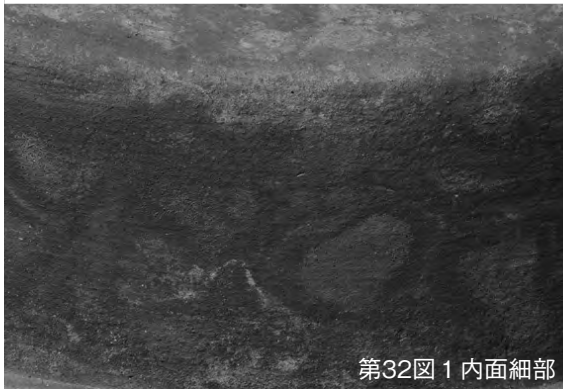
第32図2 上面



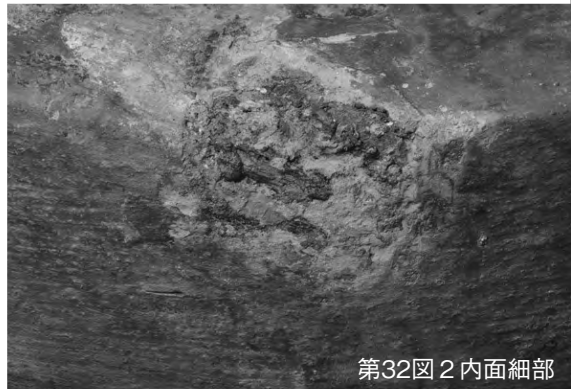
第32図1
上面細部



第32図2
上面細部



第32図1 内面細部



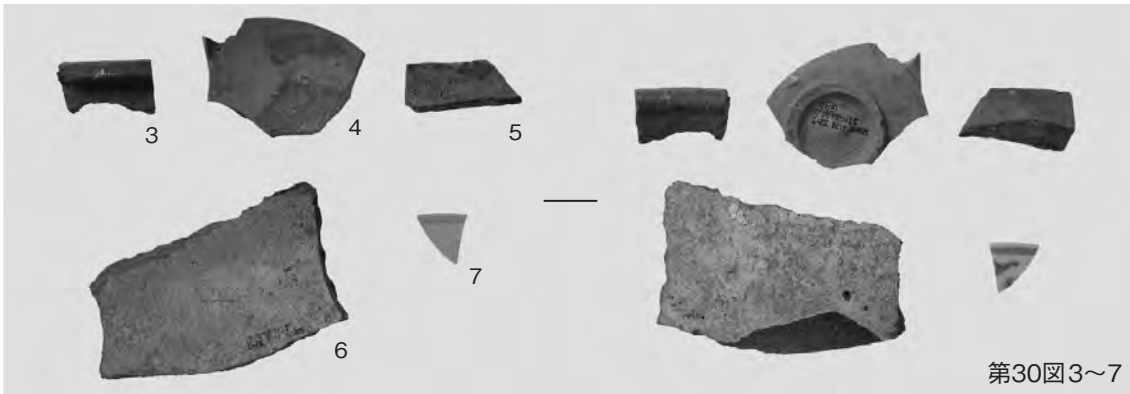
第32図2 内面細部



第32図1 湯口



第32図2 湯口



第30図3~7



第32図



第46図1



第33図1



第38図1



第37図10



第38図2



第37図13



第38図3



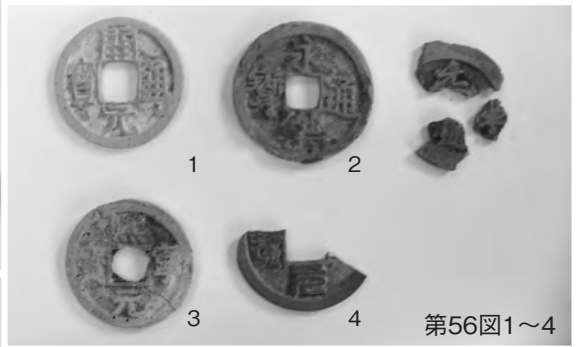
第49図7



第54図1



第49図9



第56図1~4



第49図11



第57図2



第49図18



第61図1~4



第62図5・6



第63图 2



第66图 3



第28图 7



第63图 9



第67图 1



第63图 10



第63图 15



第67图 2



第66图 1



第67图 3



第66图 2



第67图 4



第68图 4



第68图 7



第67图 5



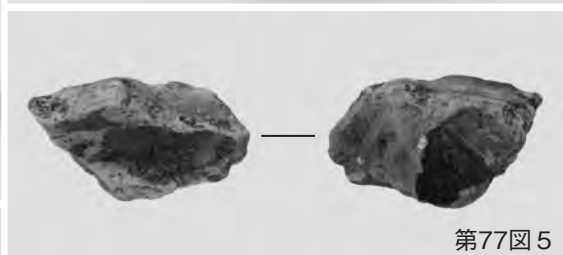
第28图 9



第77图 1



第67图 10



第77图 5



第68图 1



第77图 6



第68图 3



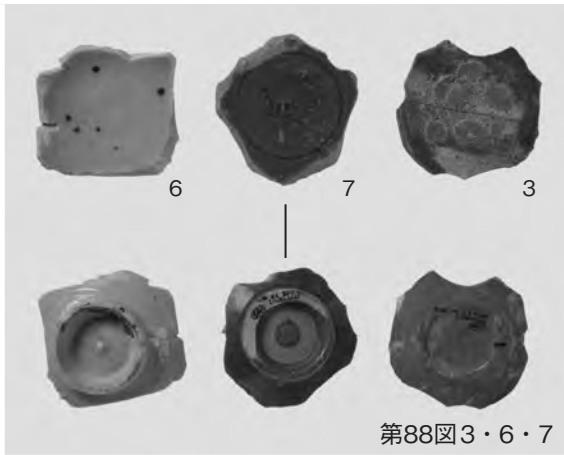
第77図7



第77図8



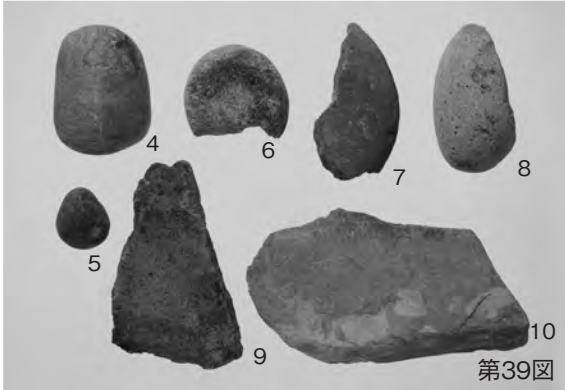
第47図11~23



第88図3・6・7



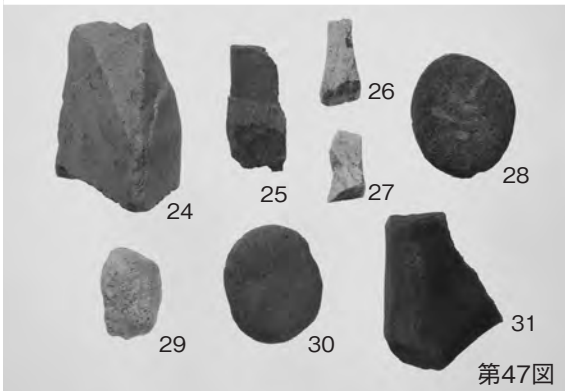
第90図1・2



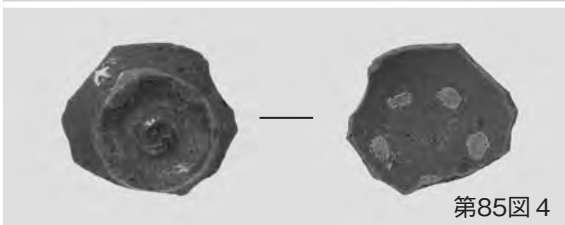
第39図



第89図1



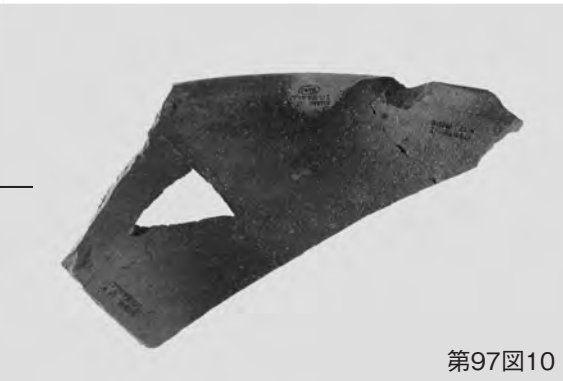
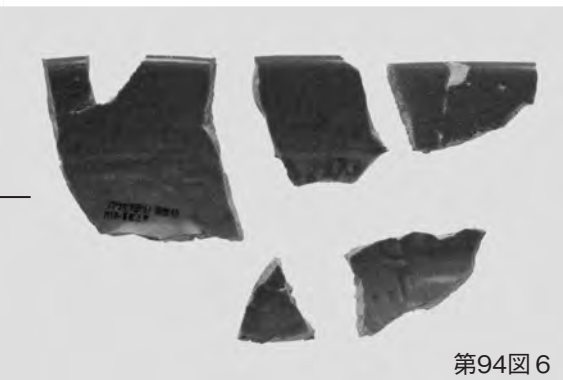
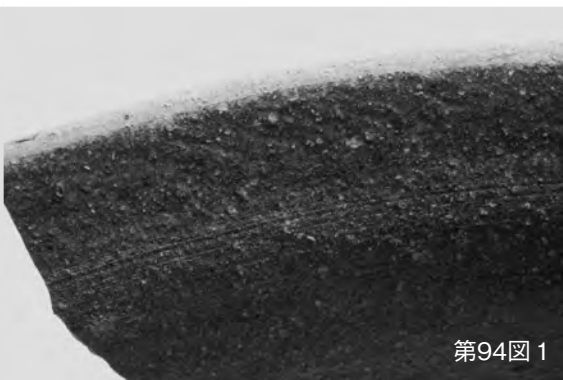
第47図



第85図4



第89図2

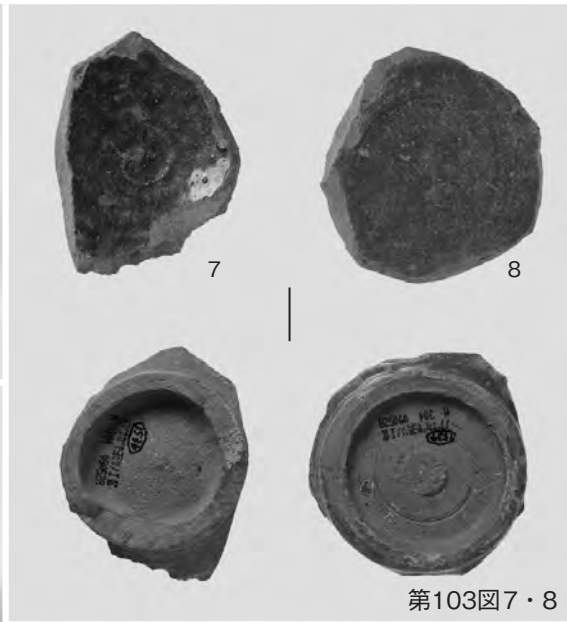




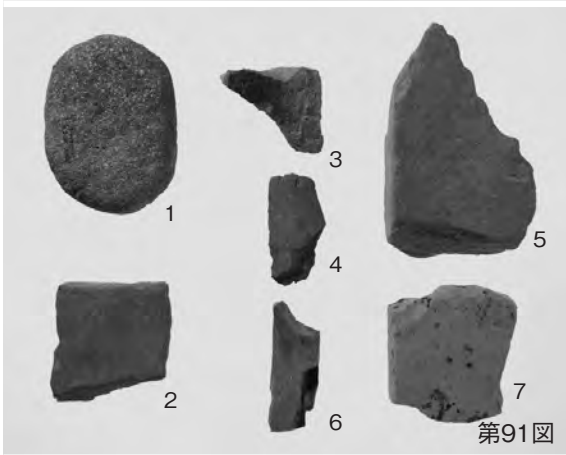
第97图13



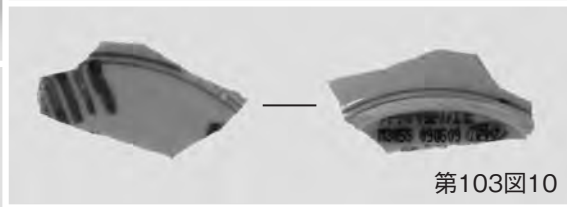
第97图15



第103图7·8



第91图



第103图10



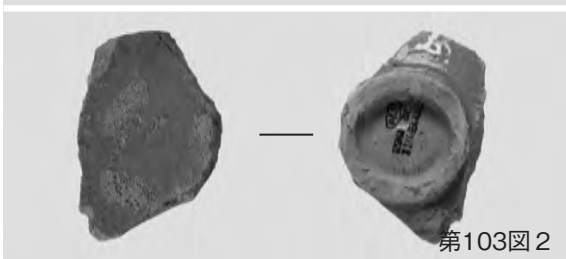
第108图4



第102图3·8



第109图9



第103图2

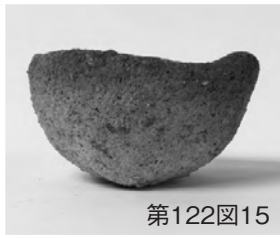


第109图11

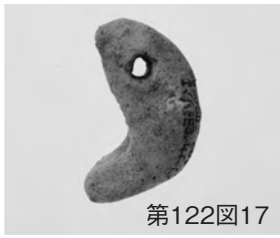




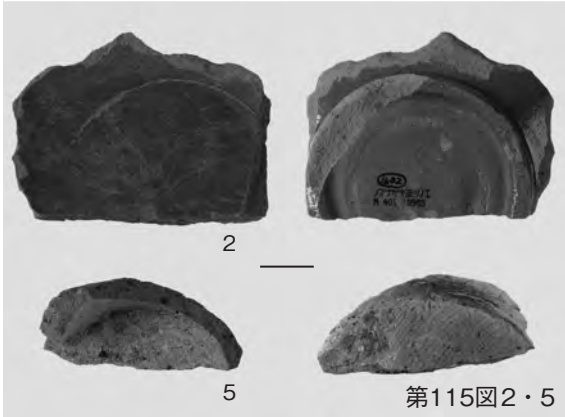
第115图 1



第122图 15



第122图 17



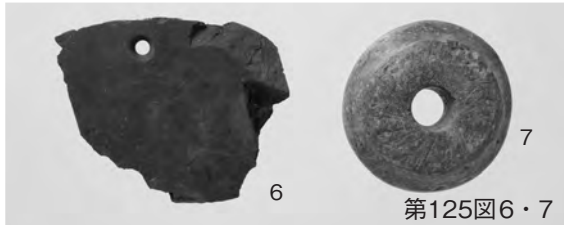
2

5

第115图 2·5



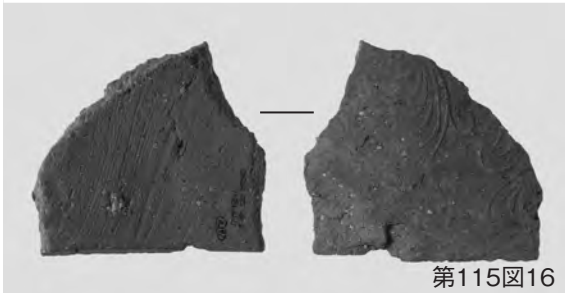
第125图 5



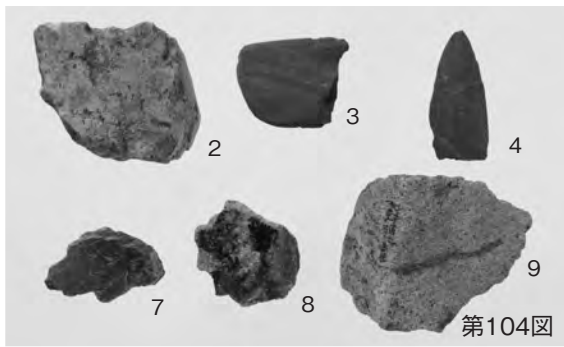
6

7

第125图 6·7



第115图 16



2

3

4

7

8

9

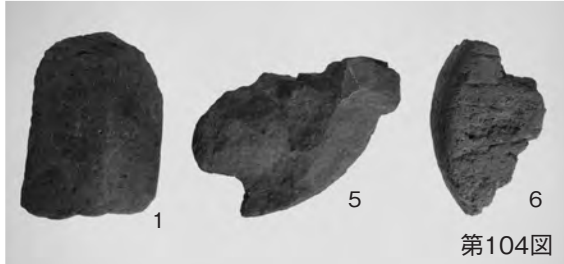
第104图



第122图 2



第122图 7

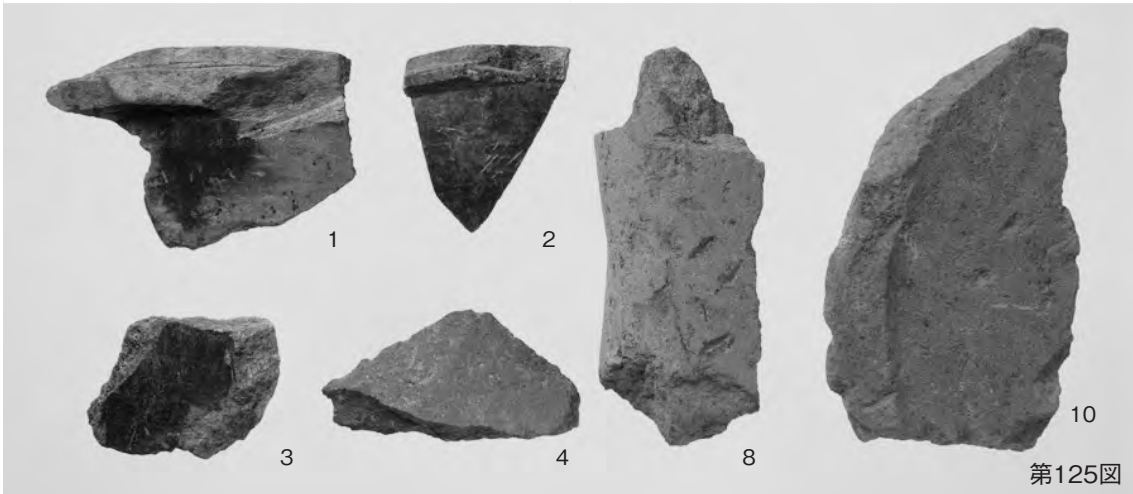


1

5

6

第104图



1

2

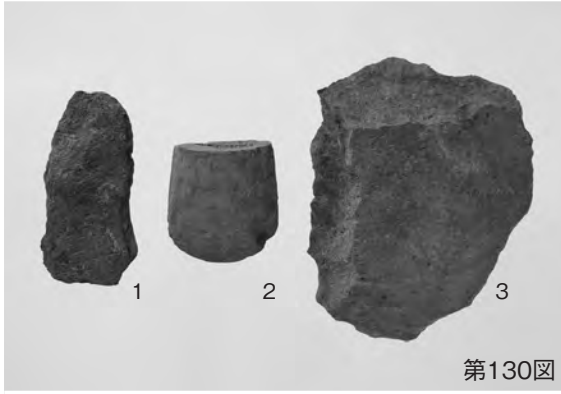
3

4

8

10

第125图



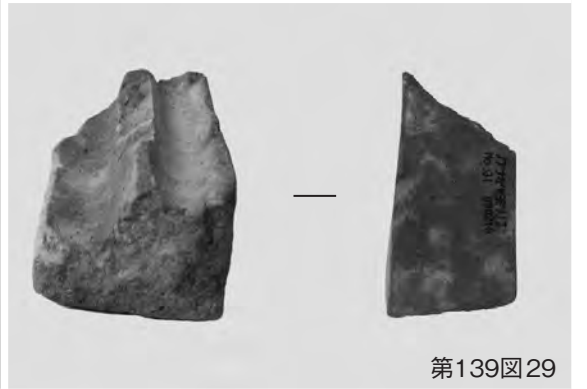
第130图



第138图18



第132图1



第139图29



第132图2



第140图20



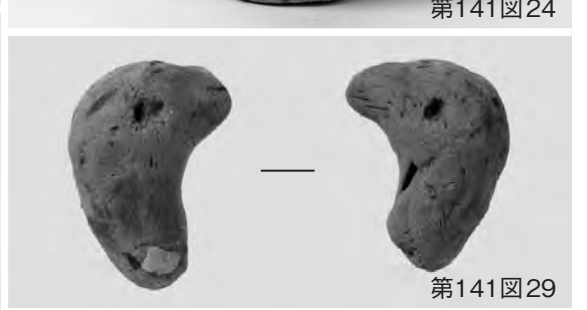
第132图3



第141图24



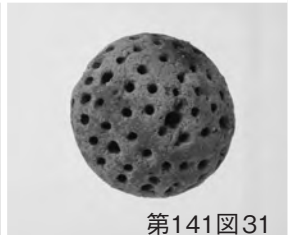
第137图11



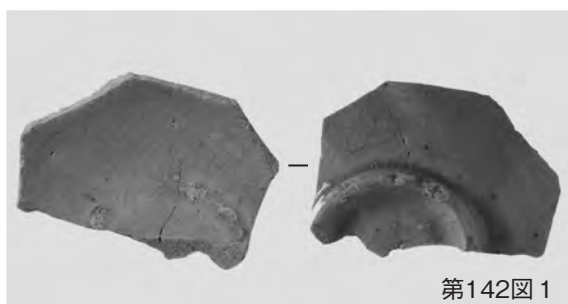
第141图29



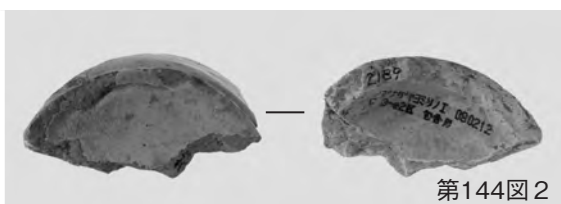
第141图30



第141图31



第142图 1



第144图 2



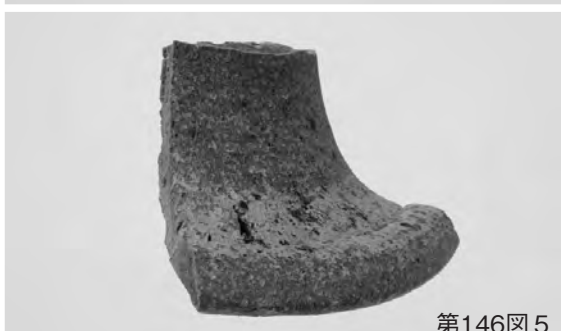
第142图 3



第145图 5·6



第143图 1



第146图 5



第143图 2



第147图 14



第143图 9



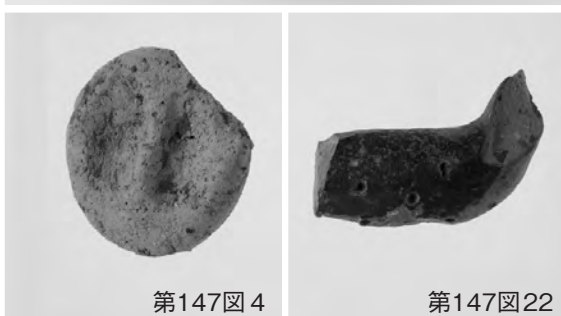
第143图 18



第147图 21

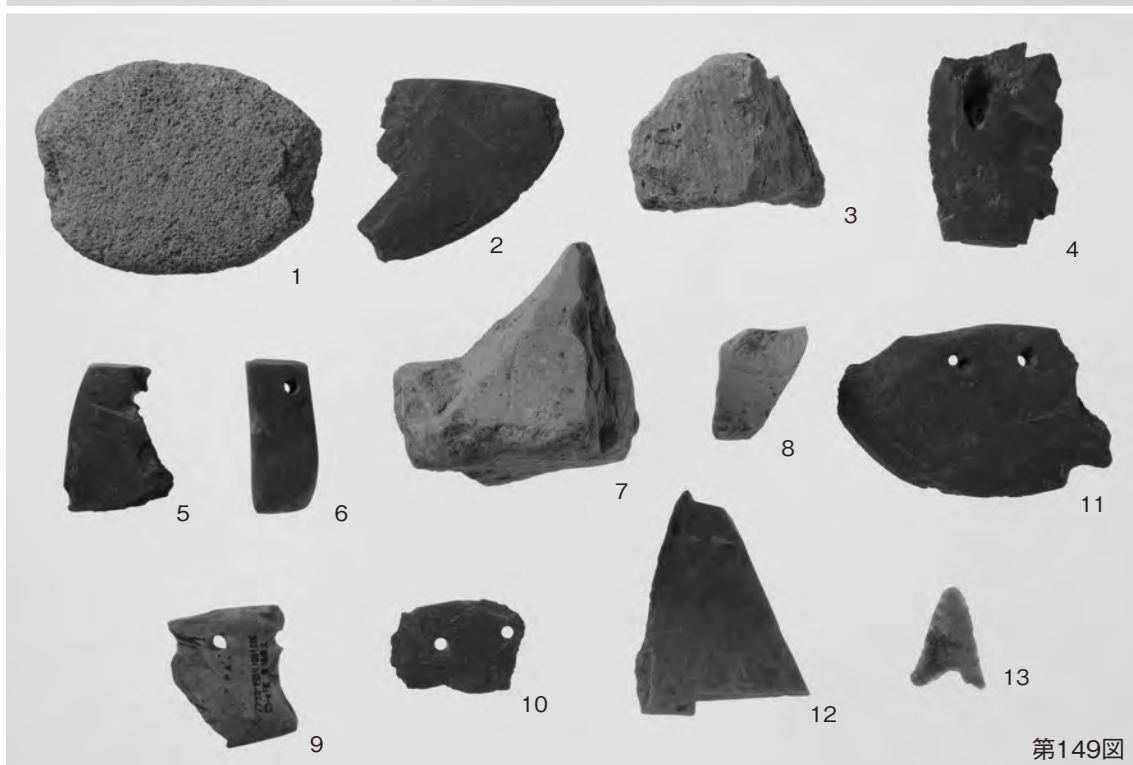
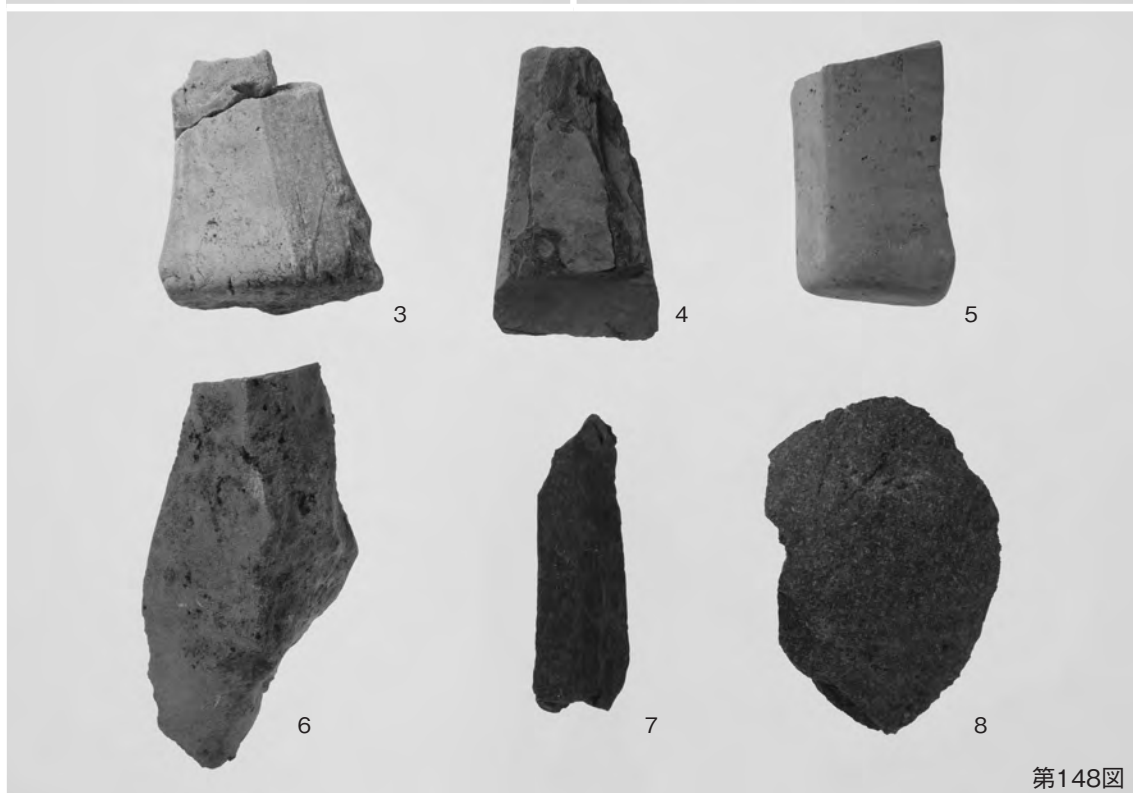
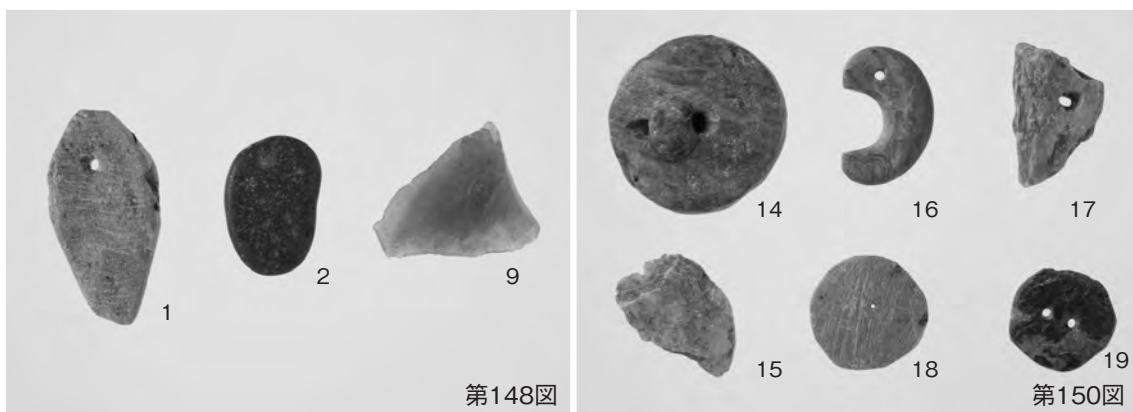


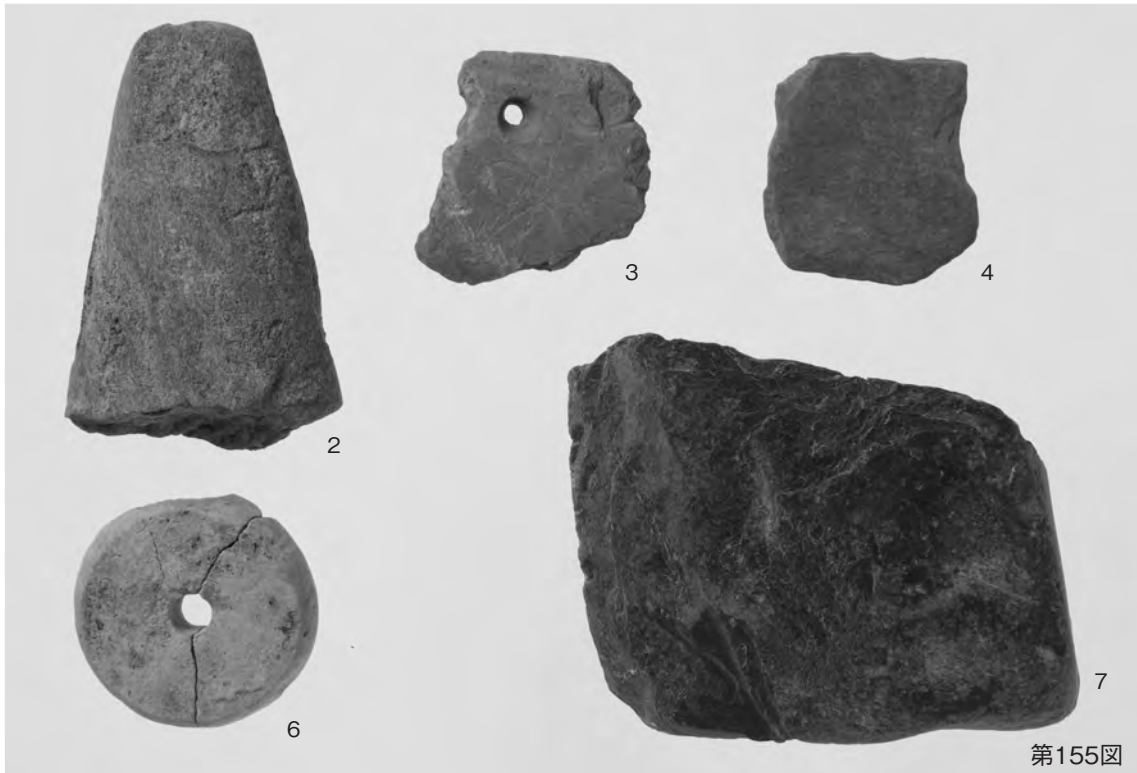
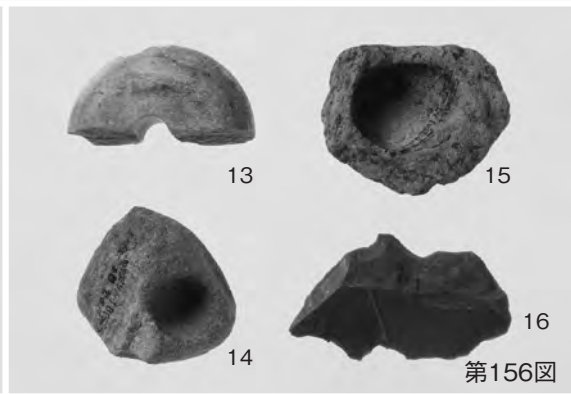
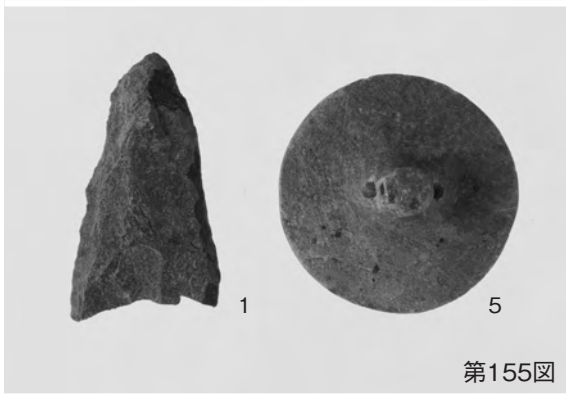
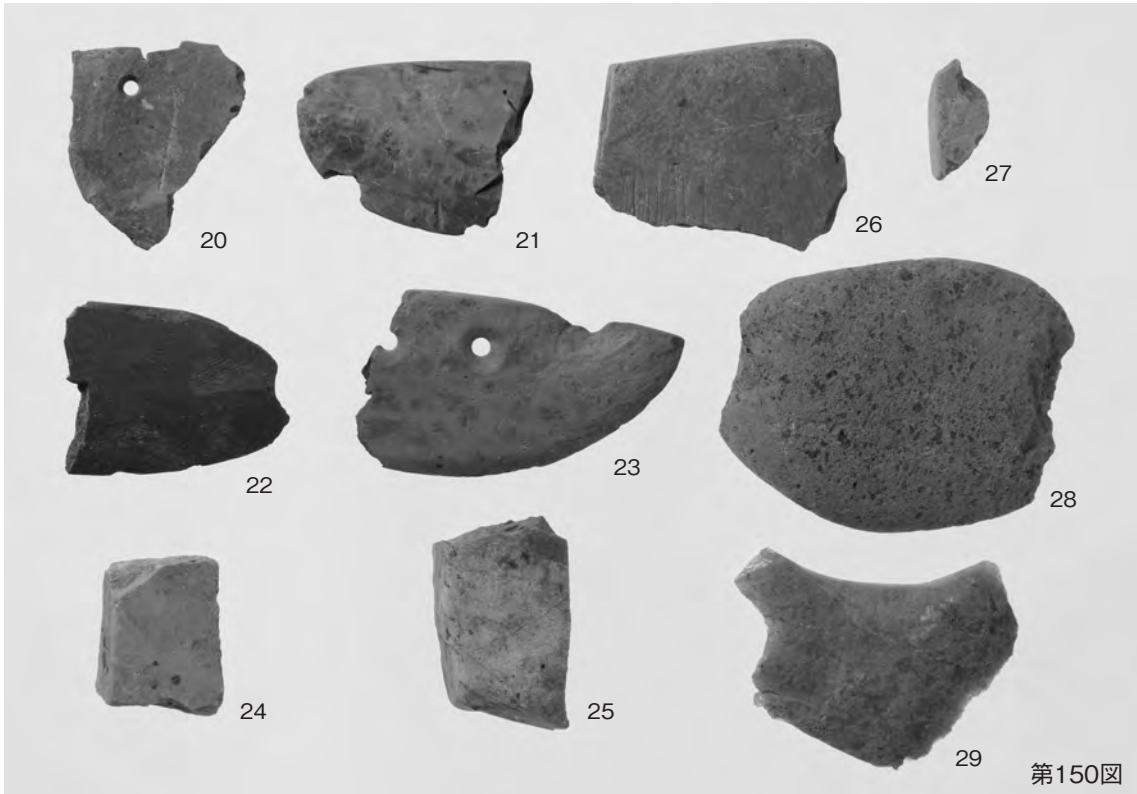
第143图 23



第147图 4

第147图 22



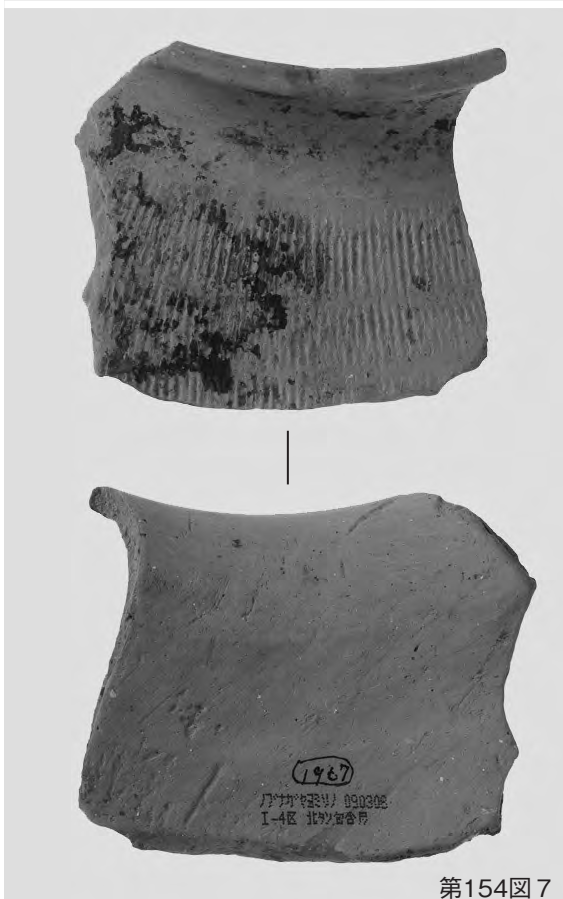




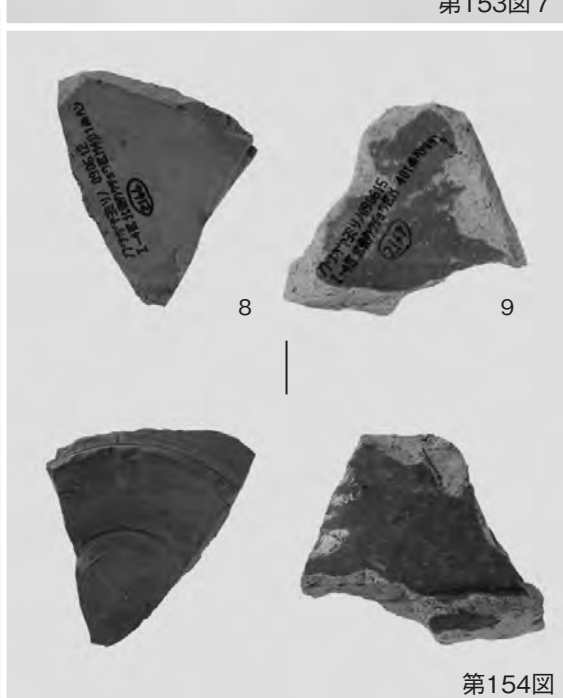
第153图3



第153图7



第154图7



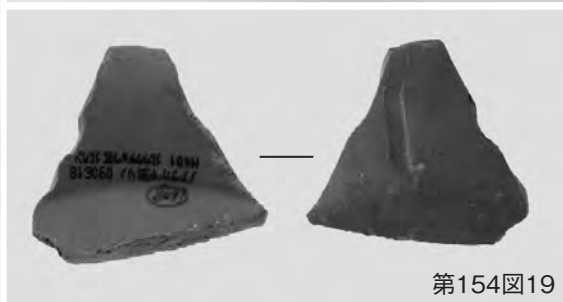
第154图



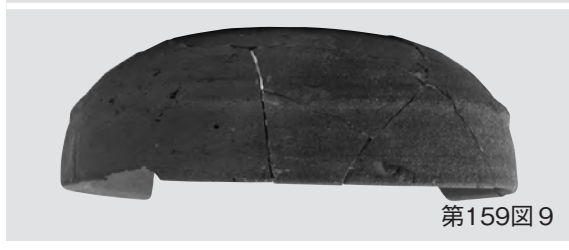
第154图15



第154图18



第154图19





第159図19



第159図20



第160図22



第160図25



第160図27



第160図28



第160図29



第160図34



第160図37



第161図39



第162図3



第162図8



第163图3



第166图5



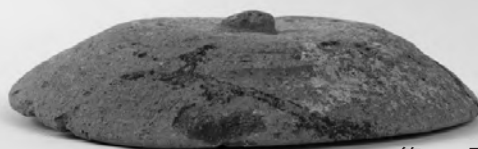
第163图6



第167图1



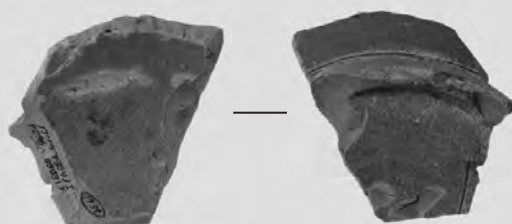
第164图11



第169图1



第164图15



第169图6



第164图16



第164图18



第169图10



第164图19



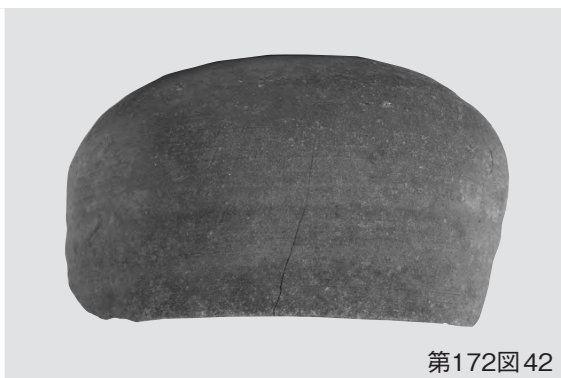
第166图2



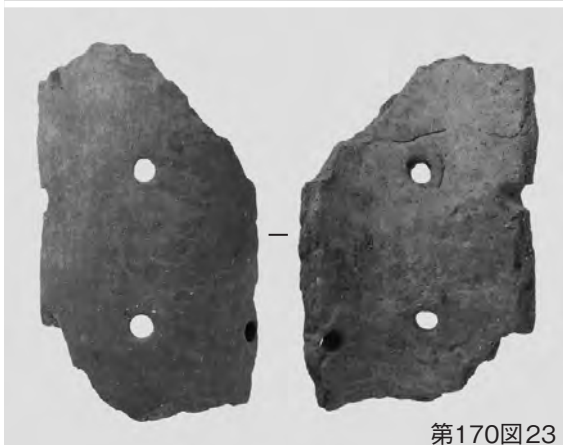
第169图13



第169图16



第172图42



第170图23



第172图50



第171图26



第172图53



第171图30



第172图34



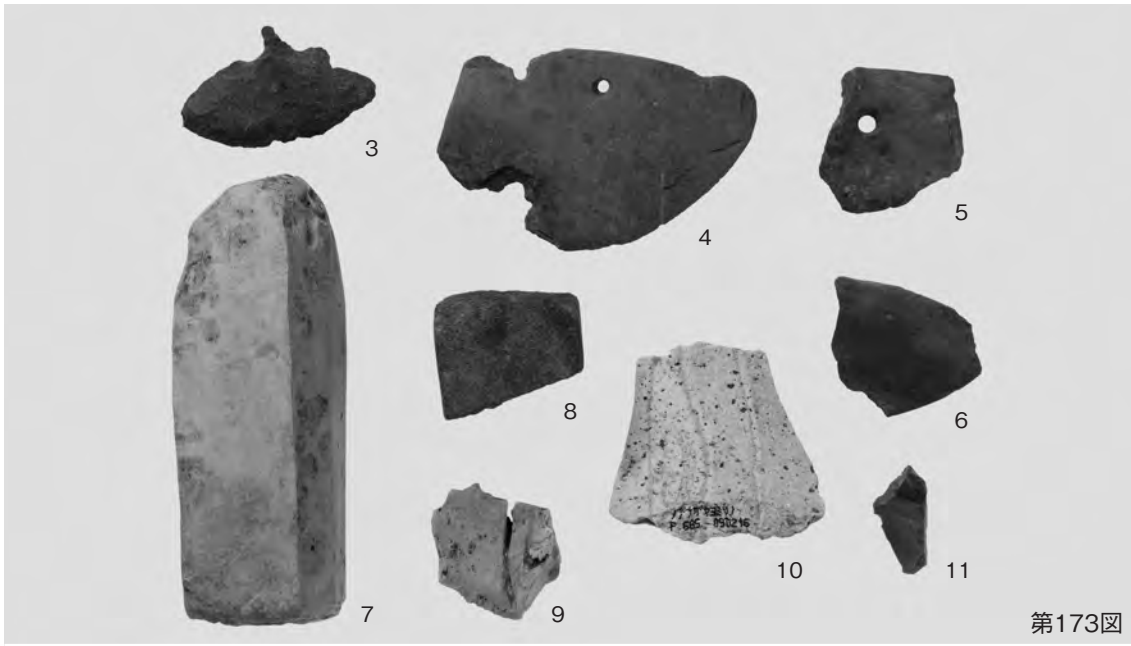
第172图35



第171图32



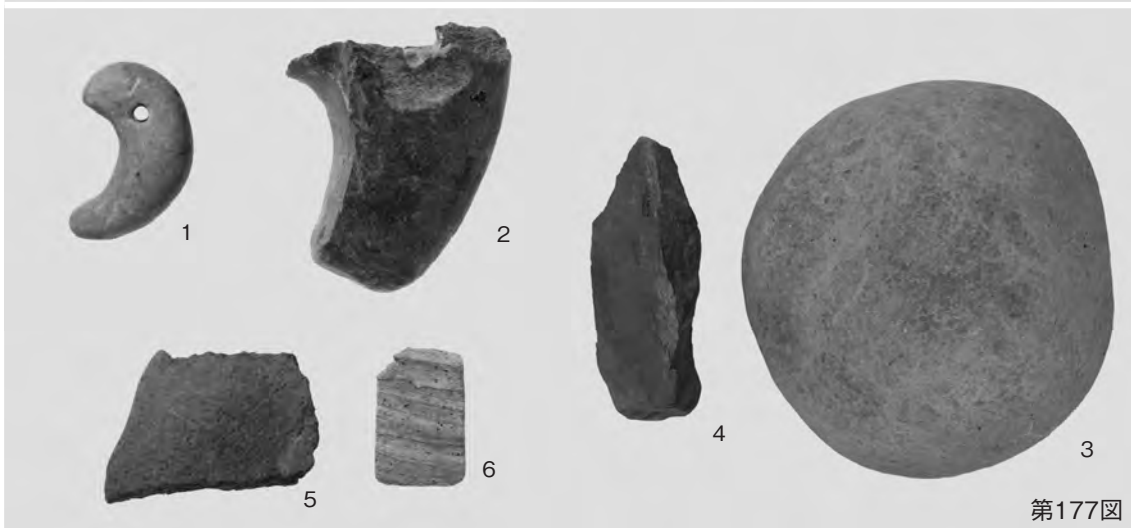
第173图



第173図



第81図



第177図

報告書抄録

ふりがな	のぶながやよみそのいせきⅠくのちょうさ2							
書名	延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査2							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	18							
編著者名	飛野博文							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒836-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	平成27年(2015)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぶながやよみその 延永ヤヨミ園 いせきいちく 遺跡Ⅰ区	ふくおかけんゆくほしし 福岡県行橋市 おおあざよしくに 大字吉国	402133	14115010	33度 43分 43秒	130度 56分 50秒	2007.12.12 ～ 2010.03.25 (Ⅰ区)	24,810㎡ (Ⅰ・Ⅱ区)	東九州 自動車 道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
延永ヤヨミ園 遺跡Ⅰ区	集落	弥生	竪穴住居跡		土器・鉄製品・石器等			
		古墳	竪穴住居跡・土坑・井戸・溝等		土器・鉄製品・石器等			
		古代	井戸・土坑等		土器・瓦等			
		中世	掘立柱建物跡・井戸・区画溝・運河状遺構・地下式土坑等		土器・鉄製品(茶釜他)・鉦・木製品等			
	墓地	弥生	土壙墓		鉄剣・鉈			
		中世	土壙墓		土器・小刀			
<p>延永ヤヨミ園遺跡は古くから知られた周知の遺跡であったが、東九州自動車道建設事業に伴って初めて発掘調査がなされた。その後、国道201号・県道バイパス建設事業などに伴う調査が継続され、遺跡の内容が随分と明らかとなった。上記「種別」・「主な時代」・「主な遺構」に記した内容がこの低丘陵上の全面に展開し、のみならず谷地区にまで関連遺構が営まれるなど、希に見る大規模かつ稠密な遺跡であることが判明した。多くの担当者が分担調査したために、内容の総括はすべての報告を待たねばならないが、弥生末～古墳時代初及び6世紀を中心とする集落としては県下でも有数の規模をもつ遺跡である。また、この調査区でも古代・中世の井戸や越州窯系青磁・緑釉陶器・瓦といった各種遺物を出土しているが、遺跡(丘陵)北端で7世紀後半の官衙的な建物跡群を検出していて、その後「京都(郡)大(領)」・「津」の墨書土器や「天平六年…」の木簡が出土したことなどから文献にみえる古代においては豊前国の「津」が置かれていたことが確実視されている。そうした性格は中世に至るまで継続していて、調査区南端部で大規模な運河状の遺構を検出した。また、地下式土坑からは希少な芦屋製と思われる鉄製茶釜や双盤などの特殊な遺物が出土し、一石を投じることとなった。</p>								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 12

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

-18-

福岡県行橋市
延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査 2

平成27年 3 月 31 日

発 行 九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印 刷 (株)プリンティング コガ
〒831-0034 大川市大字一木 736-5